

上滝榎町北遺跡・上滝II遺跡

主要地方道前橋長瀬線地方特定道路整備事業に
伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2002

群 馬 県
(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団

正誤表

	誤	正
15頁第16図	25cm	→ 12.5cm
24頁24行	下佐野遺跡や	→ 下佐野遺跡や（注1・注2）
24頁24行	舟橋遺跡からは	→ 舟橋遺跡からは（注3）
24頁25行	倉賀野万福寺遺跡など	→ 倉賀野万福寺遺跡など（注4）

上滝榎町北遺跡・上滝Ⅱ遺跡

2 0 0 2

群 馬 県
(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団



序

『上滝榎町北遺跡・上滝II遺跡』は、主要地方道前橋長瀬線地方特定道路整備事業に伴って発掘された高崎市上滝町に所在する遺跡の発掘調査報告書です。平成8年度から平成11年度にかけて発掘調査を、平成12・13年度に整理事業を群馬県から委託を受け、(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団が事業を進めて参りました。

発掘調査した二遺跡からは、前橋台地上の利根川右岸に位置し、古墳時代、奈良・平安時代、中世、近世の水田・畠や住居跡等が発見されました。特にこの地は、利根川の洪水や浅間山・榛名山の火山灰の降下による自然災害を頻繁に受けたところで、洪水層や火山灰に覆われた水田や畠等が多く発見されています。上滝榎町北遺跡からは8面もの水田・畠の跡が発見され、それぞれの時代の農業の様子が明らかにされるとともに、我々に災害から復旧にかけた当時の人々の努力を伝えてくれています。

また、6世紀の水田耕作に伴う大用水路の発見、古墳時代前期の農耕祭祀の発見、さらにはこの地域の水田開発の時期が知れるなど、多くの成果がありました。古墳時代前期の農耕祭祀については県内でも発見例は少なく、今後の注目を集める貴重な資料となっていきます。

これらを盛り込んだ本報告書は、考古学研究者はもちろん、郷土の歴史に関心をお持ちの県民の皆様の研究にも、大いに役立つものと確信しています。

最後になりますが、群馬県土木部、群馬県教育委員会文化財保護課、高崎市教育委員会、地元関係者の皆様には、発掘調査から本報告書刊行まで終始ご協力を賜り心から感謝の意を表すとともに、発掘調査に携わった作業員の方々の労をねぎらい序といたします。

平成14年3月

財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団
理事長 小野 宇三郎

例言

1. 本書は、主要地方道前橋長瀬線地方特定道路整備事業に伴い事前調査された、「上滝榎町北遺跡・上滝II遺跡」の発掘調査報告書である。遺跡名は当該地区の大字名（町名）と小字名を組ませた名称を基本に用いているが、上滝榎町北遺跡については、同遺跡を隣接して調査された北関東自動車道建設に伴う調査分と、本書調査分がある。また、上滝II遺跡については、先の関越自動車道建設に伴い調査された上滝遺跡に隣接しており、先の遺跡名を踏襲した。

2. 遺跡は、群馬県高崎市上滝町字に所在する。

3. 事業主体 群馬県土木部

4. 調査主体 (財) 群馬県埋蔵文化財調査事業団

5. 調査期間 <上滝榎町北遺跡>

平成8年度調査 平成8年7月1日～平成9年2月28日

平成9年度調査 平成9年7月1日～平成10年3月31日

平成10年度調査 平成10年4月1日～平成10年6月14日

平成11年度調査 平成11年4月1日～平成11年10月31日

<上滝II遺跡> 平成11年4月1日～平成11年6月30日

6. 調査組織 (財) 群馬県埋蔵文化財調査事業団

理事長 小寺弘之（平成8・9年度、平成10年6月22日迄）

菅野 清（平成10年6月23日から平成11年5月31日迄）

小野宇三郎（平成11年6月1日から）

常務理事 菅野 清（平成8・9年度、平成10年6月22日迄）

赤山容造（平成10年6月23日から）

事務局長 原田恒弘（平成8・9年度）、赤山容造（平成10年度から）

副事務局長 赤山容造（平成9年度）

管理部長 蜂巢 実（平成8年度）、渡辺 謙（平成9・10年度）、住谷 進（平成11年度）

調査研究第1部長 赤山容造（平成9年度）

調査研究第2部長 神保侑史（平成8・10年度）、水田 稔（平成11年度）

総務課長 小淵 淳（平成8年度）、坂本敏夫（平成9～11年度）

調査研究第1課長 平野進一（平成9年度）

調査研究第6課長 右島和夫（平成8年度）、佐藤明人（平成10・11年度）

調査担当職員 <上滝榎町北遺跡>

平成8年度 女屋和志雄、南雲芳昭、内田敬久

平成9年度 谷藤保彦、壁 申明 発掘嘱託員 勢藤 力

平成10年度 谷藤保彦、壁 申明 発掘嘱託員 村上義章

平成11年度 大江正行、大木紳一郎、今井和久、飯森康広、蜂須賀里佳、茂木 剛

<上滝II遺跡>

大江正行、茂木 剛

事務担当 笠原秀樹、国定 均、井上 剛、小山建夫、須田朋子、吉田有光、柳岡良宏、宮崎忠司、岡島伸昌

嘱託員 大澤友治

補助員 吉田恵子、並木綾子、今井もと子、内山佳子、佐藤美佐子、本間久美子、本地友美、北原かおり、狩野真子、羽鳥京子、星野美智子、松井美智代、菅原淑子、山口陽子、若田誠、松下次男、浅見宣記、山本正司、吉田茂

7. 整理主体 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団

8. 整理期間 平成12年4月1日～平成13年10月31日

9. 整理組織 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団

理事長 小野宇三郎

常務理事 赤山容造 吉田 豊(平成13年度)

事務局長 赤山容造

管理部長 住谷 進

調査研究第一部長 水田 稔(平成12年度) 能登 健

総務課長 坂本敏夫(平成12年度) 大島信夫(平成13年度)

資料整理課長 西田健彦

整理担当職員 谷藤保彦

補助員 増田政子、金子ミツ子、大嶋 緑、伊東悦子、湯浅美枝子、新井加寿恵

事務担当 笠原秀樹、小山建夫、須田朋子、吉田有光、柳岡良宏、片岡徳雄、森下弘美

嘱託員 大澤友治

補助員 吉田恵子、並木綾子、今井もと子、内山佳子、佐藤美佐子、本間久美子、北原かおり、狩野真子、若田誠、松下次男、浅見宣記、吉田茂

10. 写真撮影は、調査時の遺構写真は調査担当者が行い、整理時の遺物写真は佐藤元彦(技師)による。

11. 本書の執筆は、第1章1を佐藤明人が行い、それ以外の執筆および編集は、谷藤が行った。

12. 石材の鑑定は、飯島静男氏(群馬地質研究会)にお願いした。

13. 基準測量および遺構実測の一部を、技研測量設計株式会社、株式会社小出測量設計事務所に委託し、空中写真撮影は株式会社測研に、空中写真測量は技研測量設計株式会社に委託した。

また、遺構・遺物トレースの一部を、技研測量設計株式会社に委託した。

14. 自然化学分析については、株式会社古環境研究所に委託した。

15. 発掘調査から報告書作成に至るまで、次の諸機関及び諸氏のご指導・協力を頂いた。記して感謝したい。

高崎市教育委員会、高崎市史編纂室、伊藤淳史、大竹憲治、鹿沼栄輔、渋谷昌彦、鈴木徳雄、千家和比古、寺崎祐助、戸田哲也、賛田 明、宮崎重雄、山下歳信、綿田弘実

16. 本遺跡の出土遺物及び図面・写真等の資料は、一括して群馬県埋蔵文化財調査センターに保管してある。

凡例

本書は2遺跡の報告であるため、本文中の第3章に上滝榎町北遺跡の遺構・遺物、第4章に上滝II遺跡の遺構・遺物を掲載し、写真図版では前半に上滝榎町北遺跡、後半に上滝II遺跡を掲載している。

1. 遺構図の方位記号は、国家座標の北を表している。座標系は国家座標第IX系である。
2. 遺構図の位置を示すグリッド表記は、国家座標値（国家座標第IX系）(日本測地系を基とする)を記している。
3. 遺構の位置表記は、その遺構が掛かる国家座標値（国家座標第IX系）(日本測地系を基とする)で示した。
4. 遺構断面図、等高線に付した数字は標高を表す。
5. 遺構図の縮尺は、基本的に次の通りである。これら以外についても、図中に縮尺を記した。
 - 各調査区の遺構分布図 …… 1/400
 - 住居・掘立柱建物 …… 1/40、1/20
 - 土坑・井戸 …… 1/40
 - 水田跡平面図 …… 1/100
 - 水田跡断面図 …… 1/40
6. 遺物実測図の縮尺は、次の通りである。これら以外についても、図中に縮尺を記した。
 - 土器類 …… 1/3
 - 石器類 …… 4/5・1/3・1/4
 - 金属器 …… 4/5・1/2・1/3
 - 木器類 …… 1/3・1/4・1/6
7. 出土遺物については、図化した遺物を掲載した。また、本文中に掲載した遺物は、必ずしも写真図版に掲載されてはいない。
8. 遺物の観察については、基本的に文章による記述をおこなった。石器類については、計測表を用いて記した。
9. 水田面積の計測は、畦畔の下端で求め、プランメーターで3回計測し、その平均値を採用した。その面積値は、本文中に記してある。ただし、第3章第7節の極小区画水田については、各調査区の水田跡平面図（1/100）の中に記している。
10. 本書の挿図に使用したスクリーントーンは、図中にそのことを示した。
11. 本文中で降下火山灰について略称を用いたが、その略称は以下の通りである。

略 称	名 称	降 下 年 代
As-A	浅間一A軽石	天明3（1783）年
As-B	浅間一B軽石	天仁元（1108）年
Hr-FP	榛名一二ツ岳軽石	6世紀中葉
Hr-FA	榛名一二ツ岳火山灰	6世紀初頭
As-C	浅間一C軽石	4世紀初頭（3世紀後半説あり）

目次

序

例言

凡例

第1章 発掘調査の経過

第1節 発掘調査に至る経過

第2節 発掘調査の方法

1 上滝榎町北遺跡

2 上滝II遺跡

第3節 発掘調査の経過

1 上滝榎町北遺跡の調査経過

(1) 平成8年度 A・B区調査

(2) 平成9年度 C・D区、取り付け道C～F区調査

(3) 平成10年度 取り付け道C～F区調査

(4) 平成11年度 E・F区調査

2 上滝II遺跡の調査経過

第2章 遺跡の立地と環境

第1節 遺跡の位置と地形

第2節 周辺遺跡

第3節 基本土層

第3章 上滝榎町北遺跡

第1節 上滝榎町北遺跡の調査概要

第2節 第1面の遺構（近世面）

第3節 第2面の遺構（中世面）

第4節 第3面の遺構（平安時代後期面）

第5節 第4面の遺構（奈良・平安時代面）

第6節 第5面の遺構（古墳時代I、Hr-FP下面）

第7節 第6面の遺構（古墳時代II、Hr-FA下面）

第8節 第7面の遺構（古墳時代III、As-C混土層上面）

第9節 第8面の遺構（古墳時代IV、As-C混土層下面）

第10節 出土遺物

第4章 上滝II遺跡

第1節 上滝II遺跡の調査概要

第2節 第1面の遺構（中・近世面）

第3節 第2面の遺構（奈良・平安時代面）

第4節 第3面の遺構（古墳時代I、Hr-FP下面）

第5節 第4面の遺構（古墳時代II、Hr-FA下面）

第6節 第5面の遺構（最終面、シルト層上面）

第7節 出土遺物

第5章 自然科学分析

第6章 まとめ

発掘報告書抄録

挿図目次

- 第 7～231図 上滝榎町北遺跡
第232～251図 上滝II遺跡
- 第 1 図 遺跡位置
第 2 図 路線と遺跡位置
第 3 図 調査区の区割りと国家座標値
第 4 図 指標テフラの分布
第 5 図 周辺遺跡の分布
第 6 図 基本土層 (模式図)
第 7 図 第 1 面の全体図
第 8 図 A 区の遺構配置図 (本線)
第 9 図 A 区 1・2 区画の耕作痕
第 10 図 A 区 3・4 区画の耕作痕
第 11 図 A 区 1～4 区画の断面
第 12 図 B 区 土坑
第 13 図 B 区の遺構配置図 (本線)
第 14 図 B 区 1・4 号溝
第 15 図 B 区 1・4 号溝土層断面
第 16 図 B 区 4 区画の耕作痕
第 17 図 B 区 1～3 区画の耕作痕
第 18 図 B 区 1～4 区画の断面
第 19 図 C 区の遺構配置図 (本線)
第 20 図 C 区 1～3 区画の耕作痕と 1 号溝
第 21 図 C 区取り付け道 区画の耕作痕
第 22 図 D 区の遺構配置図 (本線・取り付け道)
第 23 図 D 区取り付け道 区画の耕作痕
第 24 図 E 区の遺構配置図 (本線)
第 25 図 F 区の遺構配置図 (本線・取り付け道)
第 26 図 F 区 7 区画の耕作痕
第 27 図 F 区 8 区画の耕作痕と土層断面
第 28 図 F 区 9 区画の耕作痕
第 29 図 F 区 9 区画の耕作痕拡大図と断面
第 30 図 F 区取り付け道 区画の耕作痕
第 31 図 第 2 面の全体図
第 32 図 A 区の遺構配置図 (本線)
第 33 図 A 区 1 号掘立柱建物
- 第 34 図 A 区 土坑 (1)
第 35 図 A 区 土坑 (2)
第 36 図 A 区 土坑 (3)
第 37 図 B 区の遺構配置図 (本線)
第 38 図 B 区 1 号掘立柱建物 (平面)
第 39 図 B 区 1 号掘立柱建物 (断面)
第 40 図 B 区 2 号掘立柱建物
第 41 図 B 区 土坑 (1)
第 42 図 B 区 土坑 (2)
第 43 図 B 区 館跡の堀 (4 号溝)
第 44 図 B 区 道路状遺構と溝群
第 45 図 B 区 道路状遺構と溝群の土層断面
第 46 図 C 区の遺構配置図 (本線)
第 47 図 D 区の遺構配置図 (本線)
第 48 図 E 区の遺構配置図 (本線)
第 49 図 E 区 1 号掘立柱建物
第 50 図 E 区 1 号井戸
第 51 図 F 区の遺構配置図 (本線)
第 52 図 F 区 1 号掘立柱建物
第 53 図 F 区 土坑 (1)
第 54 図 F 区 土坑 (2)
第 55 図 第 3 面の全体図
第 56 図 A 区の遺構配置図 (本線)
第 57 図 A 区 水田と水田面に残る馬蹄痕列
第 58 図 B 区の遺構配置図 (本線)
第 59 図 B 区 水田と水田面に残る馬蹄痕
第 60 図 C 区の遺構配置図 (本線・取り付け道)
第 61 図 C 区 土坑
第 62 図 C 区 畠状遺構
第 63 図 D 区の遺構配置図 (本線・取り付け道)
第 64 図 D 区 水田の区画と水田面
第 65 図 D 区 水田の断面と荒地土層断面
第 66 図 D 区 畠状遺構と荒地地状遺構
第 67 図 E 区の遺構配置図 (本線・取り付け道)
第 68 図 F 区の遺構配置図 (本線・取り付け道)
第 69 図 第 4 面の全体図
第 70 図 A 区の遺構配置図 (本線)
第 71 図 A 区 1 号住居跡

- 第72図 A区 土坑
- 第73図 A区 土層断面
- 第74図 A区 水田の区画と水田面
- 第75図 A区 水田の断面
- 第76図 A区 水田面に残る牛蹄痕(1)
- 第77図 A区 水田面に残る牛蹄痕(2)
- 第78図 A区 牛蹄痕の断面(1)
- 第79図 A区 牛蹄痕の断面(2)
- 第80図 C区の遺構配置図(本線)
- 第81図 C区 土坑
- 第82図 C区 溝と土層断面
- 第83図 C区 平行する溝状遺構
- 第84図 D区の遺構配置図(本線)
- 第85図 E区の遺構配置図(本線)
- 第86図 E区 1号住居跡
- 第87図 E区 土坑
- 第88図 F区の遺構配置図(本線)
- 第89図 E区 ピット列A~Cと断面
- 第90図 F区 道路状遺構(西側)と土層断面
- 第91図 F区 道路状遺構(東側)と土層断面
- 第92図 第5面の全体図
- 第93図 E区の遺構配置図(取り付け道)
- 第94図 E区取り付け道 土坑
- 第95図 E区取り付け道
検出された極小区画水田(南側)
- 第96図 E区取り付け道 東壁土層断面(南側)
- 第97図 E区取り付け道
検出された極小区画水田(北側)
- 第98図 E区取り付け道 東壁土層断面(北側)
- 第99図 第6面の全体図
- 第100図 A区の遺構配置図(本線)
- 第101図 A区 土坑
- 第102図 B区の遺構配置図(本線)
- 第103図 B区 土坑
- 第104図 B区 大畦と大畦の水口
- 第105図 B区 5大区画と極小区画水田
- 第106図 B区 水田の断面
- 第107図 B区 4・5大区画の水田面に残された足跡
- 第108図 C区の遺構配置図(本線)
- 第109図 C区 大溝と水田
- 第110図 C区 大溝の東壁土層断面と断面
- 第111図 C区 大溝の推定位置
- 第112図 C区 大区画と極小区画水田(大溝南側)
- 第113図 C区 水田の断面
- 第114図 C区 大区画と極小区画水田(大溝北側)
- 第115図 C区の遺構配置図(取り付け道)
- 第116図 C区取り付け道 大畦の交差部
- 第117図 C区取り付け道 東壁土層断面
- 第118図 D区の遺構配置図(本線)
- 第119図 D区 大区画と極小区画水田(南側)
- 第120図 D区 南壁土層断面と水田の断面
- 第121図 D区 水田の断面
- 第122図 D区 大区画と極小区画水田(北側)
- 第123図 D区 北壁土層断面と水田の断面
- 第124図 D区 大畦際の水田面に残る馬蹄痕列
- 第125図 D区の遺構配置図(取り付け道)
- 第126図 D区取り付け道 大溝と水田
- 第127図 D区取り付け道 東壁土層断面(北側)
- 第128図 E区の遺構配置図(本線)
- 第129図 E区 大区画と極小区画水田(南側)
- 第130図 E区 東壁土層断面と水田の断面
- 第131図 E区 大畦際の水田面に残る馬蹄痕
- 第132図 E区 微高地際の大区画と極小区画水田
- 第133図 E区の遺構配置図(取り付け道)
- 第134図 E区取り付け道
検出された極小区画水田(南側)
- 第135図 E区取り付け道 西壁土層断面(南側)
- 第136図 E区取り付け道 東壁土層断面(南側)
- 第137図 E区取り付け道
検出された極小区画水田(北側)
- 第138図 E区取り付け道 東壁土層断面(北側)
- 第139図 F区の遺構配置図(本線)
- 第140図 F区の遺構配置図(取り付け道)
- 第141図 F区取り付け道 微高地上
- 第142図 F区取り付け道 微高地際の水田
- 第143図 F区取り付け道 大区画と極小区画水田

- 第144図 F区取り付け道 東壁土層断面
 第145図 F区取り付け道 東壁土層断面
 第146図 第7面の全体図
 第147図 A区の遺構配置図(本線)
 第148図 A区 土坑
 第149図 B区の遺構配置図(本線)
 第150図 B区 1・2号窪地遺構と土層断面
 第151図 B区 52号溝と水田面
 第152図 B区 52号溝土層断面と水田断面
 第153図 C区の遺構配置図(本線)
 第154図 C区 検出された畦と水田面(北側)
 第155図 C区 土層断面と水田断面(北側)
 第156図 C区 検出された畦と水田面(南側)
 第157図 C区 土層断面と水田断面(南側)
 第158図 C区 土層断面と水田断面(南側)
 第159図 D区の遺構配置図(本線)
 第160図 D区 検出された畦と水田面・溝
 第161図 D区の遺構配置図(取り付け道)
 第162図 D区取り付け道
 検出された畦と水田面(南側)
 第163図 D区取り付け道 東壁土層断面(南側)
 第164図 D区取り付け道
 検出された畦と水田面(北側)
 第165図 D区取り付け道 東壁土層断面(北側)
 第166図 E区の遺構配置図(本線)
 第167図 E区の遺構配置図(取り付け道)
 第168図 E区取り付け道
 検出された畦と水田面
 第169図 E区取り付け道 東壁土層断面
 第170図 E区取り付け道 西壁土層断面
 第171図 F区の遺構配置図(本線)
 第172図 第8面の全体図
 第173図 A区の遺構配置図(本線)
 第174図 A区 土坑(1)
 第175図 A区 土坑(2)
 第176図 C区の遺構配置図(本線)
 第177図 C区 検出された畦と水田面(北側)
 第178図 C区 検出された畦と水田面(南側)
 第179図 C区 土層断面
 第180図 C区 水田断面
 第181図 C区の遺構配置図(取り付け道)
 第182図 C区取り付け道
 遺物出土分布(遺物集中箇所)
 第183図 C区取り付け道 土坑
 第184図 D区の遺構配置図(本線)
 第185図 D区 検出された溝
 第186図 D区 南・西壁土層断面
 第187図 D区の遺構配置図(取り付け道)
 第188図 D区取り付け道
 検出された畦と水田面
 第189図 D区取り付け道 東壁土層断面
 第190図 E区の遺構配置図(本線)
 第191図 E区 畦の断面
 第192図 E区 検出された畦(南側)
 第193図 E区の遺構配置図(取り付け道)
 第194図 E区取り付け道 土坑
 第195図 E区取り付け道
 遺物出土分布(遺物集中箇所)
 第196図 F区の遺構配置図(本線)
 第197図 F区 検出された畦
 第198図 F区の遺構配置図(取り付け道)
 第199図 F区取り付け道 1号掘立柱建物
 第200図 F区取り付け道 柱穴列
 第201図 F区取り付け道 硬化面と遺物出土分布
 第202図 F区取り付け道 遺物出土分布
 第203図 A区 出土土器(1)
 第204図 A区 出土土器(2)
 第205図 A区 出土土器(3)
 第206図 A区 出土土器(4)
 第207図 B区 出土土器(1)
 第208図 B区 出土土器(2)
 第209図 B区 出土土器(3)
 第210図 B区 出土土器(4)
 第211図 C区 出土土器(1)
 第212図 C区 出土土器(2)
 第213図 C区取り付け道 出土土器(1)

第214図 C区取り付け道 出土土器（2）
第215図 D区 出土土器
第216図 E区 出土土器（1）
第217図 E区 出土土器（2）
第218図 E区取り付け道 出土土器（1）
第219図 E区取り付け道 出土土器（2）
第220図 E区取り付け道 出土土器（3）
第221図 E区取り付け道 出土土器（4）
第222図 F区 出土土器
第223図 F区取り付け道 出土土器（1）
第224図 F区取り付け道 出土土器（2）
第225図 F区取り付け道 出土土器（3）
第226図 出土石器類（1）
第227図 出土石器類（2）
第228図 出土金属器
第229図 出土木製品類（1）
第230図 出土木製品類（2）
第231図 出土木製品類（3）
第232図 上滝遺跡と上滝II遺跡の位置
第233図 第1面の遺構配置図
第234図 第1面 全体図
第235図 1号竪穴
第236図 土坑
第237図 土坑・井戸
第238図 柵列
第239図 ピット

第240図 第2面の遺構配置図
第241図 第3面の遺構配置図
第242図 大畦と極小区画水田（西側）
第243図 大畦と極小区画水田（東側）
第244図 水田の断面
第245図 第4面の遺構配置図
第246図 検出された畦
第247図 25～28号溝
第248図 水田と溝の断面
第249図 第5面の遺構配置と土層断面
第250図 出土遺物（1）
第251図 出土遺物（2）
第252図 A区の土壌分析図
第253図 F区の土壌分析図

表目次

表1 周辺遺跡一覧
表2 石器計測表
表3 テフラ検出分析結果
表4 屈折率測定結果

写真図版目次

- PL 1～83 上滝榎町北遺跡
PL 84～90 上滝II遺跡
- PL 1 遺跡地垂直写真
- PL 2 A区 1号住居
A区 1号掘立柱建物
A区 ピット群
A区 1・2・5・7号土坑
- PL 3 A区 8～11・13・14・25・29号土坑
- PL 4 A区 30・31・34～36・40・41・43・48号土坑
- PL 5 A区 50～52・58～60・62号土坑
A区 微高地より検出された風倒木痕
- PL 6 A区 第1面 全景
A区 第1面 区画の状況
- PL 7 A区 第1面 区画の状況
A区 第1面 1～6区画
- PL 8 A区 第1面 7・8区画
A区 第1面 耕作痕土層断面
A区 第1面 1号溝
A区 第2・3面 全景
- PL 9 A区 第4面 遺構面の検出状況
A区 第4面 遺構面に残された動物足跡
A区 第4面 動物足跡と平行溝
A区 第4面 1区画の牛蹄痕
- PL 10 A区 第4面 牛蹄痕範囲全景
A区 第4面 遺構面下位での確認状況
A区 第4面 21号溝と1・2区画
A区 第4面 1・2区画下位の牛蹄痕
A区 第4面 2区画の平行溝
A区 第4面 7区画の平行溝と断面
- PL 11 A区 第4面 牛蹄痕
A区 第6面 全景
- PL 12 A区 第6面 北側での区画状況
A区 第6面 区画と微高地
A区 第6面 極小区画水田の検出状況
A区 第7面 全景
- PL 13 A区 第7面 検出状況
A区 第7面 北側での水田面の凹凸状況
A区 第7面 25～28号溝
A区 第8面 検出状況
- PL 14 B区 1・2号掘立柱建物
B区 1～3・5～9号土坑
- PL 15 B区 10・12～15・19・21・22号土坑
- PL 16 B区 第1面 全景
B区 第1面 検出状況
B区 第1面 1区画の耕作痕
- PL 17 B区 第1面 2～5・7～9区画
B区 第1面 1・3区画を画する畦
B区 第1面 2号溝を挟む区画畦
- PL 18 B区 第1面 1号溝杭の出土状況
B区 第1面 1号溝全景
B区 第2面 全景
B区 第2面 道路状遺構全景
- PL 19 B区 第2面 4号溝
B区 第2面 45号溝
B区 第2面 46号溝と土層断面
B区 第2面 20・30・31号溝
B区 第2面 36～41号溝
- PL 20 B区 第3面 全景
B区 第3面 区画畦と水田面の状況
B区 第3面 馬蹄痕
- PL 21 B区 第6面 全景
B区 第6面 検出状況
- PL 22 B区 第6面 全景
B区 第6面 2～5大区画の極小区画水田
B区 第6面 極小区画水田の状況
- PL 23 B区 第7面 全景
B区 第7面 検出状況
B区 第7面 52号溝と水田面の凹凸状況
- PL 24 B区 第7面 54～62号溝と1・2号窪地
B区 第7面 52号溝の土層断面
B区 第8面 全景
B区 第8面 検出状況
- PL 25 C区 1～4号土坑

	C区 第1面 全景		C区取り付道 東壁土層断面
P L 26	C区 第3面 全景	P L 37	D区 第1面 全景
	C区 第3面 21号溝と畠状遺構		D区 第2面 全景
	C区 第3面 畠状遺構の畝と畝間		D区 第2面 1・8～12号溝
	C区 第4面 全景		D区 第2面 1号溝と土層断面
P L 27	C区 第6面 全景		D区 第3面 耕作痕・荒地
	C区 第6面 1・2大区画の極小区画水田	P L 38	D区 第3面 全景
	C区 第6面 1・2大区画を画する大畦		D区 第3面 畦と水田面
P L 28	C区 第6面 3・4大区画を画する大畦		D区 第4面 全景
	C区 第6面 2・3大区画と大溝		D区 第4面 16号溝
	C区 第6面 大溝全景	P L 39	D区 第6面 全景
	C区 第6面 大溝内の土層断面		D区 第6面 南半の大区画
	C区 第6面 大溝の底面		D区 第6面 2・3大区画の大畦
	C区 第6面 大溝から出土した木製品類	P L 40	D区 第6面 4大区画の極小区画水田
P L 29	C区 第7面 全景		D区 第6面 大畦の水口
	C区 第7面 検出状況		D区 第6面 大区画の大畦
	C区 第7面 検出された小畦と水田面		D区 第6面 大区画と水路
	C区 第7面 検出された大畦と溝		D区 第6面 大畦際の馬足跡
	C区 第7面 大畦を覆う土層断面	P L 41	D区 第6面 新しい小畦と古い小畦
P L 30	C区 第7面 検出状況		D区 第7面 検出された溝
	C区 第7面 検出された小畦と水田面	P L 42	D区 第7面 全景
	C区 第8面 全景	P L 43	D区 第8面 全景
P L 31	C区 第8面 検出状況		D区 第8面 検出された溝
	C区 第8面 検出された畦の痕跡状況		D区 南壁土層断面
P L 32	C区 東壁土層断面	P L 44	D区取り付道 第1面 1～3区画の耕作痕
P L 33	C区取り付道 第1面 耕作痕		D区取り付道 第3面 全景
	C区取り付道 東壁土層断面		D区取り付道 第3面 北半の検出状況
	C区取り付道 第2・3面 全景	P L 45	D区取り付道 第6面 全景
	C区取り付道 第2面 1～4号溝		D区取り付道 第6面 極小区画水田の状況
	C区取り付道 第3面 水田全景		
	C区取り付道 第3面 畦と水田面	P L 46	D区取り付道 第7面 全景
P L 34	C・D区取り付道 第6面 全景		D区取り付道 第7面 大畦と水口
P L 35	C区取り付道 第6面 大畦と小畦		D区取り付道 第7面 畦と水路
	C区取り付道 第6面 大畦の交差部	P L 47	D区取り付道 第8面 全景
	C区取り付道 第8面 遺物集中箇所		D区取り付道 第8面 畦と水田面
	C区取り付道 第8面 遺物出土状態		D区取り付道 東壁土層断面
P L 36	C区取り付道 第8面 遺物出土状態	P L 48	E区 1号住居
	C区取り付道 第8面 4・5号土坑		E区 1号掘立柱建物

	E区 1・3・5・7号土坑	F区 第3面 水田区画
	E区 1号井戸	F区 第3面 畦の水口
P L 49	E区 第2面 全景	F区 第3面 畦と水田面
	E区 第2面 2～8号溝	F区 第4面 道路状遺構
	E区 第3面 全景	P L 64 F区 第6面 全景
P L 50	E区 第3面 全景	F区 第6面 検出された極小区画水田
	E区 第3面 水田面と人足跡	P L 65 F区 第7・8面 全景
P L 51	E区 第4面 ピット列A～C	F区 第8面 検出された畦の痕跡状況
	E区 第6面 全景	F区 シルト面 自然流路
P L 52	E区 第6面 全景	P L 66 F区取り付道 第1面 耕作痕
	E区 第6面 1～3大区画と大畦	F区取り付道 第2面 全景
	E区 第6面 微高地と3大区画	F区取り付道 第3面 全景
P L 53	E区 第7・8面 全景	P L 67 F区取り付道 第6面 全景
	E区 第8面 検出された畦の痕跡状況	F区取り付道 第6面 極小区画水田
	E区 土層断面	F区取り付道 東壁土層断面
P L 54	E区取り付道 1～3号土坑	P L 68 F区取り付道 微高地硬化面と掘立柱建物
	E区取り付道 第5面 全景	F区取り付道 微高地 全景
	E区取り付道 第5面 3・4号溝	F区取り付道 微高地 硬化面検出状況
P L 55	E区取り付道 第5面 全景	F区取り付道 微高地 5号溝
	E区取り付道 第5面 1・2号溝	F区取り付道 微高地部土層断面
	E区取り付道 第5面 検出された水田	P L 69～80 出土土器 (1～12)
P L 56	E区取り付道 第6面 全景	P L 81 出土石器・鉄器
	E区取り付道 第7面 全景	P L 82・83 出土木器 (1・2)
P L 57	E区取り付道 第7面 畦と水田面	P L 84 第1面 全景
	E区取り付道 第7面 9号溝	P L 85 第1面 1号竪穴
	E区取り付道 第8面 15号溝	第1面 1～8号土坑
P L 58	E区取り付道 微高地 遺物集中箇所	P L 86 第1面 1・2号井戸
	E区取り付道 微高地 遺物出土状態	第1面 1～3・17号溝
	E区取り付道 微高地 4・5号土坑	P L 87 第3面 全景
	E区取り付道 微高地 1・2号溝	P L 88 第3面 1・2大区画の極小区画水田
P L 59	E区取り付道 東・西壁土層断面	第3面 1・2大区画境の大畦と水路
P L 60	F区 1号掘立柱建物	第3面 2大区画内の水路
	F区 1～4・6・12～14号土坑	P L 89 第4面 全景
P L 61	F区 第1面 全景	第5面 全景
	F区 第1面 区画と耕作痕	第5面 31・32号溝
P L 62	F区 第2面 全景	第5面 南壁土層断面
	F区 第3面 全景	P L 90 出土土器・石器
P L 63	F区 第3面 全景	

第1章 発掘調査の経過

第1節 発掘調査に至る経過

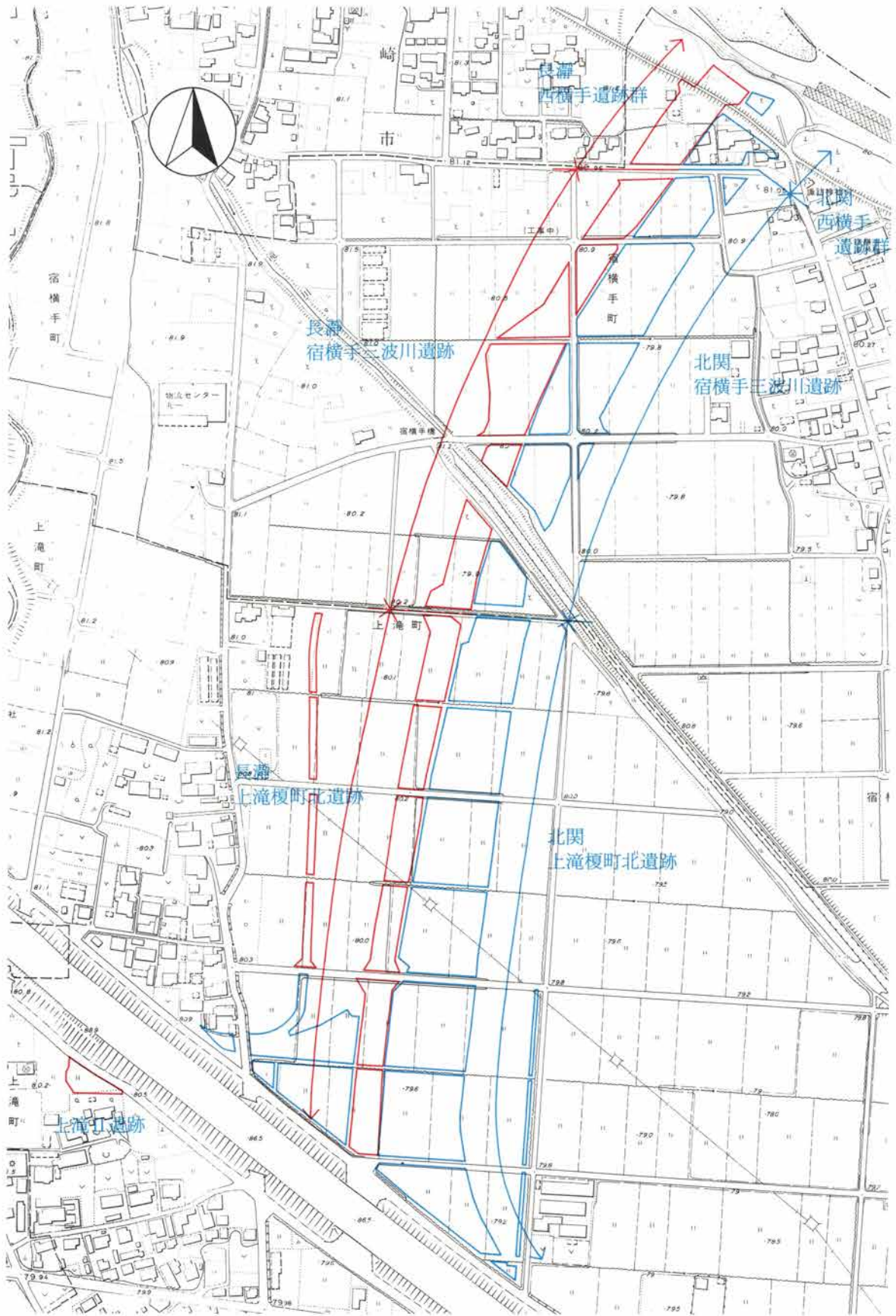
県道前橋長瀬線は、前橋市石倉町を起点とし埼玉県秩父郡長瀬町を終点とする延長42.5kmの幹線道路であり、県庁所在地となる前橋市街地と県下最大の商業都市である高崎市街地を結ぶ都市間連絡道路でもある。しかし、本線の現道は、朝夕時には慢性的な交通渋滞をきたし、その対策、加えて安全な交通環境の整備が強く望まれていた。このような状況下、前橋市櫛島町から高崎市綿貫町間のバイパス整備が県土木部により計画・実施されることとなった。路線内の埋蔵文化財については、前橋市櫛島町から公田町の間2.15kmを平成元年から平成7年度にかけて、以南の区間となる前橋市公田町から高崎市綿貫町の間3.9kmを平成8年度から(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団が年次的に発掘調査を実施することとなった。

本遺跡が所在する高崎市内地区の路線区間は、北は利根川南岸部から、南の関越自動車道と北関東自動車道が分岐するジャンクション部の高架を抜け、県道高崎伊勢崎線に交差するまでの1.1km区間である。この間の前橋長瀬線予定路線は、ジャンクションから伊勢崎方面に向かう北関東自動車道の西側に側道状に併走する。当地域への埋蔵文化財の対応は、路線区間全域が遺跡地であることから、全区間を記録保存の対象地とすることで関係機関との協議が進められた。平成7年度には北関東自動車道予定路線内において発掘調査が先行着手され、平成8年に前橋長瀬線の発掘調査が開始される時点では、複数面の水田跡の広域的な重層発掘調査が本格化していた。

本遺跡の発掘調査着手に先立つ平成8年5月27日に、県土木部、日本道路公団、県教育委員会、当事業団による合同の調整会議が持たれ、北関東自動車道建設工事および前橋長瀬線工事と埋蔵文化財発掘調査の間



第1図 遺跡位置



第2図 路線と遺跡位置

S = 1 / 5000

の工程に関する調整が行われた。この結果、上滝地区の当路線の文化財調査は北関東道の盛り土、高架工事に先行して終了させなければならない区間、及び工事時期が限定される河川橋台工事部等の工事優先区から順次発掘調査を実施するという基本方針が確認された。前橋長瀬線の発掘調査は、平成8年7月からジャンクション交差部（A・B区）において開始され、この区の調査は北関東道路線内の調査に両脇から挟まれながら進行し、11月には調査班を分割して滝川用水橋台部（宿横手三波川遺跡A・B区）の調査に併行着手し、翌平成9年1月には利根川橋台部（西横手遺跡群）へも着手しながら順次調査が進められていった。

第2節 発掘調査の方法

1 上滝榎町北遺跡

調査の対象地は、北関東自動車道の路線の西隣を併走する形にあり、関越自動車道新潟線を南限に、北方向へ幅24mで延び、滝川付近で宿横手三波川遺跡と接する間である。また、これとは別に、西側に100mほど離れた位置には、やはり南から北へと併走する幅6mほどの取り付け道が調査対象となった。

調査地内の区およびグリッドの設定については、本調査に先行して調査が進められていた北関東自動車道側の設定を、そのまま援用する形をとった。このことは、同一の遺跡を、事業の違いおよび調査年度の違いで、異なる設定・表記等による後日の混乱を避けることを意図とした。その結果、南側から北方向へ延びる路線に対し、東西方向の道路・水路によって区切られた便宜的な区を設定することとなり、南端をA区とし、順次北方向へB・C・D・E・F区が設定された。取り付け道についても同様であり、南端をC区とし、順次北方向へD・E・F区を設定した。グリッドについては、国家座標を基準に、5m×5mを1グリッドとして設定した。なお、グリッドおよび水準点の設定にあたっては、技研測量設計株式会社、株式会社小出測量設計事務所に委託して行った。

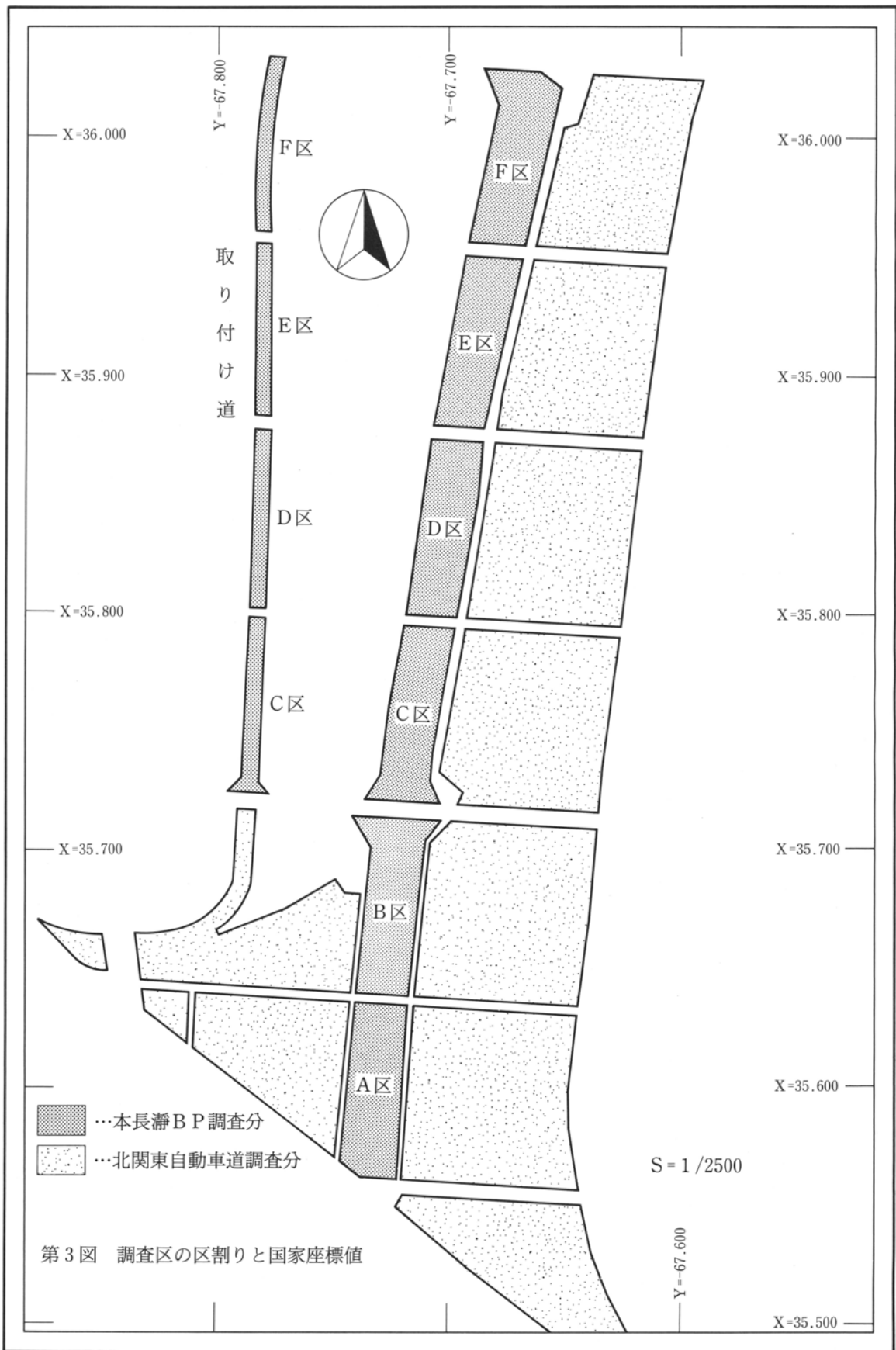
表土掘削には、調査の効率を図るため、掘削機械を利用した。また、各調査面の確認後、検出面までの厚さによって、掘削機械を利用した。遺構確認作業および遺構の覆土除去は、人力で行った。また、掘削深度が増すことによって生じる湧水には、その対策として、調査地内の周囲に溝を巡らせる等の対処を施すため、その工事を宮下工業に委託した。さらに、隣接地を借地することによって、止水および排土置き場として利用を図った。調査面が多面にわたるため、必要に応じて土層断面の観察を行うためのベルト、および試掘トレンチを設け、調査面の確認に努めた。

検出された個別の遺構名称については、各調査区ごとに、種別ごとに番号を付した。遺物の取り上げに際しては、遺構単位、グリッド単位を基本とした。

遺構等の測量図化にあたっては、空中写真測量と地上測量を併用し、1/20・1/40を基本とした縮尺で図を作成した。図面記録の作成は、調査担当者および発掘作業員が主に行ったが、空中写真測量は調査担当者の指示のもと技研測量設計株式会社、(株)測研に委託した。また、地上測量の一部は、(株)小出測量設計事務所に委託し、図化作業の円滑化を図った。

写真撮影にあたっては、中型カメラと小型カメラを使用し、モノクロとリバーサルフィルムを使用した。撮影対象に応じて、高所作業車を使用し、またラジコンヘリコプターや気球等による空中写真撮影も行った。

さらに、自然科学分析にいたっては、平成8年度、11年度調査時の2回行っており、いずれも(株)古環境研



究所に委託した。

2 上滝II遺跡

調査の対象地は、関越自動車道新潟線の西側側道に隣接し、上滝遺跡の西側に当たる。対象となった面積は少なく、三角形の対象地の西辺で30m、南辺で40mほどを測る。

調査地内のグリッドの設定については、国家座標を基準に5m×5mを1グリッドとして設定し、国家座標値とは別のグリッド名称を用いた。グリッドの名称は、国家座標の $X=36.000 \cdot Y=-67.950$ を起点に、北側へa・b・c……と順送りに、西側へ171・172・173……と順送りに呼称した。(本報告では、上滝榎町北遺跡と同様に国家座標値で表記した。)なお、グリッドおよび水準点の設定にあたっては、技研測量設計株式会社へ委託して行った。

現代の盛り土および表土掘削には、調査の効率を図るため、掘削機械を利用した。また、各調査面の確認後、検出面までの厚さによって、掘削機械を利用した。遺構確認作業および遺構の覆土除去は、人力で行った。また、掘削深度が増すことによって生じる湧水には、その対策として、調査地内の周囲に溝を巡らせる等の対処を施した。調査面が多面にわたるため、必要に応じて土層断面の観察を行うためのベルト、および試掘トレンチを設け、調査面の確認に努めた。

検出された個別の遺構名称については、種別ごとに通し番号を付した。遺物の取り上げに際しては、遺構単位、グリッド単位を基本とした。

遺構等の測量図化にあたっては、地上測量によるもので、1/20・1/40を基本とした縮尺で図を作成した。図面記録の作成は、調査担当者および発掘作業員が主に行った。

写真撮影にあたっては、中型カメラと小型カメラを使用し、モノクロとリバーサルフィルムを使用した。撮影対象に応じて、高所作業車を使用した写真撮影も行った。

第3節 発掘調査の経過

1 上滝榎町北遺跡の調査経過

(1) 平成8年度 A・B区調査

年度当初の予定通り、7月からの調査開始に向けて準備を進める中、5月下旬には先行して調査が進められていた上滝地区北関東自動車道調査との事前協議が、道路公団、道路建設課、前橋土木、高崎土木、文化財保護課、事業団との間でなされ、6月下旬に調査事務所の設置が行われた。発掘調査はA・B区の2カ所を対象とし、7月1日から開始された。隣接する北関東自動車道調査から、天明3年に浅間山を給源として噴出した浅間A軽石(As-A)下面での近世遺構の調査、同じく浅間山を給源とした浅間B軽石(As-B)下面での中世および奈良・平安時代の調査、さらに榛名山を給源とした榛名二ツ岳火山灰(Hr-FA)下面の古墳時代遺構の調査、ならびに浅間山を給源とした浅間C軽石混土層(As-C混)の上・下面の調査、そして最終確認面となるシルト面での調査といった、他面にわたる調査が要とされていた。調査は、A・B区の両区を各面ごとに、交互に進行させていった。調査途中において、Hr-FA下面から馬以外の動物の足跡(牛蹄痕)が発見されたことから、新聞報道に至った経緯もあった。平成9年3月上旬には、予定通りA・B区

の調査を終了した。

なお、工事工程の都合から、本遺跡の北側に位置する宿横手三波川遺跡の一部を、11月中旬以降より並行して調査を行った。

日誌抄

- 8.5.27 調査事前協議（上滝地区北関東自動車道調査・長滞BP調査）公団、道建課、前橋土木、高崎土木、保護課、事業団
- 6.24 現場事務所設置
- 7.1 発掘調査開始。B区より表土掘削を始める。
- 7.24 B区 As-A下面 空中写真・測量
- 8.1 A区 As-A下面 空中写真・測量
- 8.30 B区 As-B下面 空中写真・測量
- 9.19 B区 As-B下面・中世面 空中写真・測量
- 10.21 B区 Hr-FA下面 空中写真・測量
- 10.28 A区 Hr-FA下面遺構確認の際、馬とは異なる動物の足跡が検出される。
- 10.30 井上氏から動物の足跡に関する現地指導を受ける。
- 10.31 A区 Hr-FA下面 空中写真・測量
- 11.18 三波川地区の調査が開始される。宮崎氏から動物の足跡（牛蹄痕）についての現地指導を受ける。
- 11.21 B区 As-C混面 空中写真・測量
- 11.22 利根川新橋橋台箇所の調査について協議（保護課、前橋土木、事業団、工事業者）
- 12.3 西部教育事務所研修
- 12.4 宮崎氏から動物の足跡（牛蹄痕）についての現地指導を受ける。
- 12.7 B区 黒色粘質土面 空中写真・測量
- 12.9 宮崎氏から動物の足跡（牛蹄痕）についての指導・鑑定結果報告を受ける。
- 12.11 京大助手 伊藤淳史 来跡。
- 12.16 A区 As-C混面 空中写真・測量。高崎土木、公団との協議。
- 12.20 B区 調査終了。
- 12.24 A区 風倒木面 空中写真・測量
- 12.25 現地記者発表—牛蹄痕について—
- 9.1.24 A区 シルト面 空中写真・測量
- 1.31 A区 黒色粘質土面 空中写真・測量
- 2.5 A区 シルト面（南部）空中写真・測量
- 2.25 土壌分析委託
- 3.4 A区 調査終了

(2) 平成9年度 C・D区、取り付け道C・D・E・F区調査

年度当初の予定通り、6月下旬より調査を開始した。調査はC・D区の2カ所を対象としたが、C・D区

の調査終了後は、本線より西へ100mほど離れた取り付け道C・D・E・F区の調査へと進行していった。先行した平成8年度の調査および隣接する北関東自動車道調査から、他面にわたる各面の調査が要とされると共に、調査時期と掘削深度からの湧水への対策が不可欠なものとなっていた。調査の進行に併せて、C区への湧水対策工事は7月下旬に施工され、D区へは10月中旬に施工された。また、C区内には、古墳時代に構築されたと考えられる大溝が検出され、この大溝調査に絡み土止め工事も施工された。調査では、堆積土の良好なことに起因し、先年度調査で検出された各面よりも確認面が増加した。C・D区を交互に進行させながら、調査の終了を迎えたのは12月下旬であった。

年明けの平成10年1月からは、取り付け道C・D・E・F区の調査へと移ったが、2月上旬より宿横手三波川遺跡E区の先行調査を優先させながら同時進行していった。取り付け道の調査は、幅6m前後と狭いことから、C・D区を一連の調査とし、随時E区およびF区の調査へと進行していった。3月下旬には、C区ではHr-FA下面、D区ではAs-C混上面、E区ではHr-FP下面、F区ではHr-FA下面までの調査を終了させて、平成9年度の作業を終了した。

日誌抄

- 9.6.27 調査開始。C区より。
 - 7.11 C区水没
 - 7.14 調査事務所盗難事件
 - 7.24 調査事務所盗難事件
 - 7.28 C区 As-A下面調査終了
 - 7.30 C区 湧水対策工事
 - 8.21 C区 As-B下面 空中写真
 - 9.4 水没
 - 9.9 水没
 - 9.17 C区 Hr-FA下面調査の掘削開始
 - 10.3 D区 As-B上面 空中写真
 - 10.6 C区 Hr-FA下面大溝調査のための土止め工事
 - 10.13 D区 湧水対策工事
 - 10.15 D区 As-B下面調査開始
 - 10.16 調査工程会議（保護課、事業団）
 - 10.21 C区 Hr-FA下面・D区 As-B下面 空中写真
 - 11.6 D区 Hr-FP上面調査終了、Hr-FA下面調査の掘削開始
 - 11.13 C区 As-C混上面 空中写真
 - 11.27 D区 Hr-FA下面 空中写真、調査工程会議（北関との合同会議・東部幹線）
 - 12.5 C区 As-C混下面 空中写真、調査工程会議（高土木、保護課、事業団）
 - 12.7 D・E区間市道下の調査開始
 - 12.12 D区 As-C混上面 写真撮影
 - 12.26 C・D区 調査終了
- 10.1.6 取り付け道C・D区 調査開始

- 1.26 取り付け道E・F区 調査開始
- 1.29 取り付け道C・D区 As-B下面 空中写真
- 1.30 D・E区間市道下の調査終了
- 2.2 宿横手三波川遺跡E区の先行調査開始
- 3.2 水没
- 3.4 取り付け道C・D区 Hr-FA下面 空中写真
- 3.20 取り付け道D区 As-C混上面、E区 Hr-FP下面、F区 Hr-FA下面 空中写真
- 3.25 平成9年度作業終了

(3) 平成10年度 取り付け道C・D・E・F区調査

昨年度(平成9年度)の継続調査として、本線より西へ100mほど離れた取り付け道C・D・E・F区の調査を行った。また、昨年度末と同様に、宿横手三波川遺跡E区の先行調査を優先させながら、4月末まで同時進行していった。5月以降は、取り付け道の調査に集中し、6月中旬に調査を終了させている。取り付け道の調査は、幅6m前後と狭いことから、C・D区とE・F区に分けて調査を進行していった。C区でのHr-FA下面水田の下位から検出された遺物集中部、E・F区に跨る微高台地、微高台地斜面の遺物集中部等の調査を経て、調査を終了した。

日誌抄

- 10.4.9 作業開始
- 4.14 調査工程会議
- 5.20 取り付け道C・D区調査終了
- 6.12 取り付け道E・F区調査終了

(4) 平成11年度 E・F区調査

年度当初の予定通り、4月上旬より調査を開始した。調査は、本線E・F区の2カ所を対象とした。当初、1班で調査が進められていたが、5月上旬よりもう1班加えた2班体制で調査にあたった。調査途中で、排土置き場の変更を余儀なくされたものの、予定通り調査が進行していった。浅間A軽石(As-A)下面での調査は、E区には検出されず、F区のみ調査となった。同じく浅間山を給源とした浅間B軽石(As-B)上・下面での中世および平安時代の調査、およびAs-B下面水田耕土下より奈良時代の住居跡が検出されている。さらに榛名山を給源とした榛名二ツ岳火山灰(Hr-FA)下面の古墳時代遺構の調査、ならびに浅間山を給源とした浅間C軽石混土層(As-C混)の上面の調査、そして最終確認面となるシルト面での調査を経て、10月末をもってすべての調査を終了した。

日誌抄

- 11.4.5 調査開始
- 4.16 調査工程会議(高土木、業者井上工業・高長組、事業団)

- 4.30 F区 As-A下面 空中写真・測量 (E区はAs-A下面なく、As-B上面調査中)
- 5.10 2班体制となる(徳丸班合流)
- 5.14 E・F区 As-B上面 空中写真
- 5.31 E・F区 As-B下面 空中写真・測量
- 6.2 湧水対策工事
- 6.8 調査工程会議(高土木、保護課、事業団)
- 7.1 E・F区 Hr-FA下面 空中写真・測量
- 8.11 E・F区 As-C混面 空中写真・測量
- 8.16 水没
- 8.25 水没
- 9.3 調査工程会議(高土木、保護課、事業団)
- 9.9 土壌分析委託
- 9.14 作業終了
- 10.31 調査終了

2 上滝II遺跡の調査経過

年度当初の予定通り、本上滝II遺跡と併行して県道前橋長瀬線バイパスの一部(事業名 長瀬上滝榎町北III)を同時に調査対象とし、4月上旬より調査事務所の設置準備に取りかかった。本遺跡の表土掘削が開始されたのは、4月26日からである。本調査範囲は、以前の関越自動車道に伴う上滝遺跡の調査範囲の西隣に当たり、遺構の存在が予測されていた。また、県教育委員会による試掘調査の結果からも、遺構の存在が確認されていた。重機による表土(盛土)除去の後、歴史時代の遺構確認をHr-FP上面で行ない、全面に点在する溝、土坑、井戸等の遺構が確認され、調査が進められた。その後、古墳時代の水田調査として、Hr-FP下面およびHr-FA下面への調査へと随時進行させていった。さらに、調査の最終面として、シルト面の調査を6月下旬に行い、6月末日をもって調査を終了した。

日誌抄

- 11.4.5 作業開始(調査準備)
 - 4.26 表土掘削開始
 - 5.14 Hr-FP上面 写真撮影
 - 5.24 Hr-FP下面の調査開始
 - 5.31 Hr-FP下面 写真撮影
 - 6.9 Hr-FA下面の調査開始
 - 6.14 Hr-FA下面 写真撮影
 - 6.22 シルト面の調査開始
 - 6.30 調査終了

倉賀野台地、東の前橋玉村台地とに二分している。上滝榎町北遺跡および上滝II遺跡は、この前橋玉村台地上に立地する。

両遺跡周辺の現在の地形は、榛名山麓から続く平坦地形であるが、南側への微傾斜をもち、井野川へ注ぐ小河川によってさらなる微地形が形成されている。しかし、今回の調査および周辺での発掘調査からは、現在の地形が榛名山起源の2次堆積物によって形成されたものであることが知ることができる。また、浅間山起源の成層テフラの影響をもうけている。

第4図に示したが、この地域は多くの指標テフラが降下している。浅間山の噴出物については、天明三(1783)年のAs-A軽石の堆積およびその噴火に伴う泥流層があり、天仁元(1108)年の成層テフラであるAs-B軽石が10cm前後の厚さで堆積し、4世紀初頭(3世紀後半という説もある)とされるAs-C軽石が認められている。榛名山起源のものについては、6世紀中葉とされているHr-FPを含む泥流(洪水)層が北側の現利根川寄りほど厚く堆積している。この泥流(洪水)層は、その層相から一時期に形成されたとは考え難い面も呈しており、8世紀代の遺構がその上で検出されている点では、Hr-FP降下以降から8世紀以前までに形成された層であると考えられる。特に、この堆積層が遺跡地の地形を大きく変化させている。6世紀初頭とされるHr-FAの堆積もあり、遺跡地全体を覆っている。

一方、遺跡地の北側を南流する滝川であるが、江戸時代初期に開削された用水路であることは周知のごとくで、それ以前には河川の存在はなかった。また、現利根川についても同様であり、旧来の利根川は前橋市田口町付近から東へ折れた広瀬川低地帯を流路としていたものが、15~16世紀(変流時期については諸説ある)の頃に現利根川へと流路を変化させたことも知られている。

第2節 周辺遺跡

本遺跡の周辺には、数多くの遺跡が点在している。大規模開発によるところの関越自動車道建設や先頃開通した北関東自動車道建設、区画整備事業や圃場整備事業、さらには中小規模開発が進み、これに伴う発掘調査が行われてきた。そうした周辺遺跡の概要を、各時代毎にまとめてみる。

縄文時代

縄文時代の遺跡は少ないが、井野川流域の段丘上で確認されている。宿大類天神遺跡では前期の集落が、八幡原A遺跡でも前期の住居跡が1軒確認されている。高崎情報団地遺跡では、中期以降の遺構・遺物が確認されている。元島名遺跡(24)では後期の土坑、万相寺遺跡でも3軒の住居跡が検出されている。こうした沖積地の低台地上に位置するこれらの遺跡の存在は、今後の低台地を調査する上で、貴重な情報を有している。

弥生時代

弥生時代の集落が数多く検出されている高崎市にあって、井野川の左岸に位置する鈴ノ宮遺跡・元島名遺跡(24)、右岸の高崎情報団地遺跡・万相寺遺跡からは、中期~後期の遺構・遺物が確認されている。鈴ノ宮遺跡では後期の住居跡26軒、方形周溝墓7基、甕棺墓1基が検出されている。また、鈴ノ宮遺跡の南東に位置する元島名遺跡では住居跡を検出している。右岸の万相寺遺跡では後期の住居跡12軒が検出され、高崎情報団地遺跡では方形周溝墓や住居跡が調査されている。この他にも、本遺跡の北西となる関越自動車道沿線には新保遺跡や日高遺跡が、さらには新保田中村前遺跡等が存在している。

古墳時代

古墳時代の遺跡は、縄文時代・弥生時代の遺跡の数に比べ、飛躍的に増大する。特に、井野川下流域に分布する古墳は、『上毛古墳総覧』によれば、左岸周縁の旧京ヶ島村7基、旧滝川村8基、玉村町下郷地区1基が、右岸周縁には旧大類村柴崎地区6基、旧岩鼻村栗崎から岩鼻台新田にかけて2基が、旧岩鼻村綿貫から岩鼻にかけて22基が知られている。これらの古墳の主要なものに、本遺跡の西側で井野川の左岸に位置する元島名將軍塚古墳(26)があり、4世紀初頭とされる全長91~96mの前方後方墳である。また、本遺跡の南側で井野川の左岸に位置する慈眼寺境内一帯には、12基の現存が確認できる。その内には、古い様相を呈する慈眼寺1号墳(円墳、竪穴式系)や、滝川村2号墳・伊勢山南古墳の50~60mクラスの後期前方後円墳が2基存在する。井野川右岸に位置する柴崎町蟹沢古墳(37)からは、正始元年銘三角縁神獸鏡を含む鏡4面が出土している。また、綿貫町に所在する史跡綿貫観音山古墳(33)の一帯も古墳群として著名である。

一方、本遺跡の周辺で調査された遺跡をみると、本遺跡の西側で、元島名將軍塚古墳との間に上滝遺跡(25)があり、古墳時代初頭の集落が確認されている。元島名將軍塚古墳の北西(井野川左岸)に鈴ノ宮遺跡があり、古墳時代初頭の住居跡や前方後方型周溝墓が確認されている。さらに、下斉田滝川A遺跡(19)では方形周溝墓と集落が、滝川C遺跡(13)、上滝社宮司東遺跡(14)、下滝高井前遺跡(17)では土坑等の遺構と共に土器が出土している。井野川の右岸に位置する高崎情報団地遺跡でも、古墳時代初頭の住居跡や前方後方型周溝墓が確認され調査が成されている。蟹沢古墳の南に位置する矢中村東遺跡(41)では方形周溝墓2基、矢中村東B遺跡(42)では前方後方型の周溝墓1基と方形周溝墓2基、村東C遺跡(43)では方形周溝墓10基と円形周溝墓1基が検出されている。本遺跡の北側に位置する西横手遺跡群I・II(21・22)でも方形周溝墓が調査されている。さらに利根川の対岸となる前橋市横手町の横手早稲田遺跡(7)で住居跡が、横手湯田遺跡(12)では方形周溝墓が検出されている。このように、古墳時代前期の遺跡は、本遺跡地を含めた井野川の河岸段丘上の低台地に広がっている様子が窺い知れよう。古墳時代後期の遺跡としては、井野川右岸の高崎情報団地遺跡、中大類金井遺跡(27)、中大類金井分遺跡(28)、殿谷戸、旭、富士塚C、隼人、吹手、峰岸遺跡、下大類遺跡(36)、綿貫遺跡(32)で集落の調査が行われている。井野川左岸でも上滝遺跡(25)や上滝榎町北遺跡(北関東自動車道用地内)で住居跡が調査されており、下滝天水遺跡(29)では集落の調査が行われている。

表1 周辺遺跡一覧表

遺跡No.	遺跡名	遺跡No.	遺跡名	遺跡No.	遺跡名	遺跡No.	遺跡名
1	上滝榎町北遺跡	13	滝川C遺跡	25	上滝遺跡	37	蟹沢古墳
2	上滝II遺跡	14	上滝社宮司東遺跡	26	元島名將軍塚古墳	38	浅間山古墳
3	上滝五反畑遺跡	15	滝川B遺跡	27	中大類金井遺跡	39	柴崎熊野前遺跡
4	宿横手三波川遺跡	16	上滝斉田北遺跡	28	中大類金井分遺跡	40	砂内遺跡
5	西横手遺跡群	17	下滝高井前遺跡	29	下滝天水遺跡	41	矢中村東遺跡
6	横手南川端遺跡	18	下滝赤城遺跡	30	御伊勢山古墳	42	矢中村東B遺跡
7	横手早稲田遺跡	19	下斉田滝川A遺跡	31	綿貫小林前遺跡	43	村東C遺跡
8	村中遺跡	20	八幡原B遺跡	32	綿貫遺跡	44	飯玉山古墳
9	公田池尻遺跡	21	西横手遺跡群I	33	綿貫観音山古墳	45	中里前遺跡
10	亀里平塚遺跡	22	西横手遺跡群II	34	普賢寺裏古墳		
11	横手宮田遺跡	23	元島名B遺跡	35	不動山古墳		
12	横手湯田遺跡	24	元島名遺跡	36	下大類遺跡		

古墳時代における水田や畠等の生産遺跡の発掘調査例が、近年急激に増加している。前期にあたる水田の調査例は少ないが、本遺跡の第8面の例が充当するものと考えられる。6世紀初めと考えられるHr-FA水田は、多くの遺跡で確認されている。本遺跡を含め、本遺跡の北側に隣接する宿横手三波川遺跡(4)、西横手遺跡群(5)、西横手遺跡群I・II(21・22)、利根川の対岸となる前橋市横手早稲田遺跡(7)、横手湯田遺跡(12)、横手宮田遺跡(11)、亀里平塚遺跡(10)、南側に隣接する上滝五反畑遺跡(3)、下滝天水遺跡(29)で検出されている。6世紀中葉のHr-FP起因の泥流下での水田は、本遺跡を含め、宿横手三波川遺跡(4)、西横手遺跡群(5)、横手早稲田遺跡(7)、横手湯田遺跡(12)で検出されており、その範囲は現利根川流域に分布域を占めている。この状況から、現利根川以前にも、同様な流路をとる川の存在が考えられる。

奈良・平安時代

奈良・平安時代の遺跡は、本遺跡の調査(北関東自動車道用地内)を含め、上滝遺跡(25)でも住居跡が調査されている。本遺跡の南側に位置する下滝天水遺跡(29)、下滝天水遺跡の南側で井野川の右岸に位置する綿貫小林前遺跡(31)、綿貫遺跡(32)、下大類遺跡(36)、中大類金井遺跡(27)、柴崎熊野前遺跡(39)からは、集落の調査が行われている。さらに、天仁元(1108)年とされる浅間山を給源とする成層テフラであるAs-B軽石が覆っていることから、当地一帯でのAs-B軽石下の平安時代後期水田が、実に多くの遺跡で検出されている。また、こうしたAs-B軽石下の水田に対して、条里制についての研究も盛んに進められている。

中世

中世の遺跡には、大小の城館跡や環濠屋敷跡がある。代表的な城館としては、本遺跡の北西に位置する井野川左岸の元島名城や元島名内出がある。元島名城は元島名遺跡(24)の発掘調査で堀等が一部調査されている。上滝中屋敷では、環濠屋敷跡の一部が調査されている。また、本遺跡や下滝天水遺跡(29)でも、中世館跡の一部が検出されている。

近世

この地域の近世遺構・遺跡として最も著名なものに、本遺跡の北側を流れる滝川がある。滝川はもともと天狗岩用水といわれ、吉岡町付近の利根川から取水し、前橋市西部から高崎市東部を経て玉村町に至る広範囲な地域を灌漑する用水である。この天狗岩用水は、総社城主秋元長朝によって慶長七(1602)年から同九年に掘削・完成された用水であり、さらに慶長15(1610)年に幕府代官伊奈備前守忠次が滝村の江原源左衛門重久の協力を得て、植野堰用水大友堰から福島村(玉村町)までの延長工事を行なった用水で、水下村63カ村に及ぶ大用水路である。村の支配は幕府領一三か村、旗本領一一か村、前橋藩領二三か村、高崎藩領二八か村となる。また、この用水からの分水堰は、一番五千石堰から二八番上之手堰まであり、滝村に二カ所の分水堰があったことが文書から知ることができる(『新編 高崎市史 資料編7』)。

一方、近年の発掘調査では、天明三(1783)年七月に大噴火した浅間山を給源とするAs-A軽石に覆われた遺構、およびその噴火に伴って発生した泥流により埋没した遺構・遺跡の調査例が急増している。本遺跡はもとより、宿横手三波川遺跡(4)等からは、白色のAs-A軽石が純層に近い状態で薄く覆われた下面より水田耕作に伴うであろう水路、畦、さらに田面への耕作痕の跡が顕著に検出されている。この状況は、本遺跡より西側の高崎市街地一帯でも同様に検出されている。また、泥流に埋没した遺構・遺跡には、西横手遺跡群I(21)や横手湯田遺跡(12)、玉村町に所在する福島飯塚遺跡、さらには現在調査が進められ屋敷跡が検出された上福島中町遺跡等、多くの遺跡が確認されている。

第3節 基本土層

本項で扱う基本土層については、上滝榎町北遺跡での土層堆積を主に説明する。基本的には、同地域に位置する上滝II遺跡、隣接して調査された北関東自動車道用地内の土層堆積は、同様な堆積状況にあるが、地点によっては若干異なる堆積層が存在する。第6図に示した土層模式図は、C・D区（本線）の土層堆積を模式化した図で、一部にE区取り付け道の堆積状況を合成したものである。なお、各基本土層の土色については、地点により差異が見られる状況から基本土層では明記しなかったが、後述する各遺構説明の中で説明している。また、各遺構説明中での土層番号と基本土層番号とは、一致していない。むしろ、各遺構説明で、土層堆積の詳細な説明を行っており、基本土層をさらに分層した図も掲載している。

以下、基本土層について説明する。

- I層 表土であり、現代の水田耕作土でもある。
- II層 As-A軽石の混土層である。地点によっては、後世の削平（土地改良等）によりII・III層が確認されていない。逆に、土層断面での確認だけであるが、II～IV層までの間に数時期の水田が存在したことを示す箇所もある。
- III層 As-A軽石の純層に近い軽石層が薄く堆積し、下面より第1面となる区画畦や耕作痕等を検出している。
- IV層 As-B軽石の混土層であり、層中で第2面となる中世遺構が検出されている。層の下位ほど軽石の含む量が多く、分層できる調査区もある。逆に、調査区によっては、第2面の中世遺構をV層下面の第3面と同時に調査した経緯もある。
- V層 As-B軽石層であり、遺跡のほぼ全体に堆積している。天仁元（1108）年の降下とされ、第3面となる水田面（平安時代後半）を直接に覆っている。この軽石は県内全域に降下が認められ、本遺跡地周辺でも多くの遺跡から成層テフラが確認されている。
- VI層 第3面の水田に伴う耕作土で、粘質である。
- VII層 Hr-FP起因の泥流（洪水）層と考えられ、Hr-FPの軽石を含んでおり、遺跡全体を厚く覆っている。層は全体に黄色系の土で、Hr-FPのみで構成されているわけではなく、各調査区においてはその層相から数層に分層されている。また、層の上面からは、第4面とした奈良・平安時代の住居跡等の遺構（8・9世紀）が検出されていることから、Hr-FP降下以降から8世紀までの間に形成（堆積）されたことが考えられる。なお、層全体が一時期の堆積によるとも考え難い点もある。
- VIII層 第5面の水田に伴う耕作土である。この堆積層が確認されたのはF区取り付け道だけであり、上面に第5面の水田面が検出されている。第6面の水田面との間に、間層（IX層）をもつ。
- IX層 Hr-FA層あるいはHr-FA起因の泥流（洪水）層と考えられ、遺跡全体を覆っている。もちろん、Hr-FPの軽石は含まれていない。層相から、分層される状況もある。また、層の下面からは、第6面となる水田面が検出されている。なお、第6面水田の畦の微細観察からは、極小区画水田の小畦中に薄くIX層が挟まれる様に確認されていることから、第6面水田を廃絶する直前段階の降灰と、廃絶の要因となった泥流（洪水）層とが考えられる。因みに、この第6面水田面からは、廃絶期以前の古い小畦も検出されている。
- X層 第6面の水田に伴う耕作土である。なお、下層にXI層を堆積しない場所では、層中にAs-C軽石

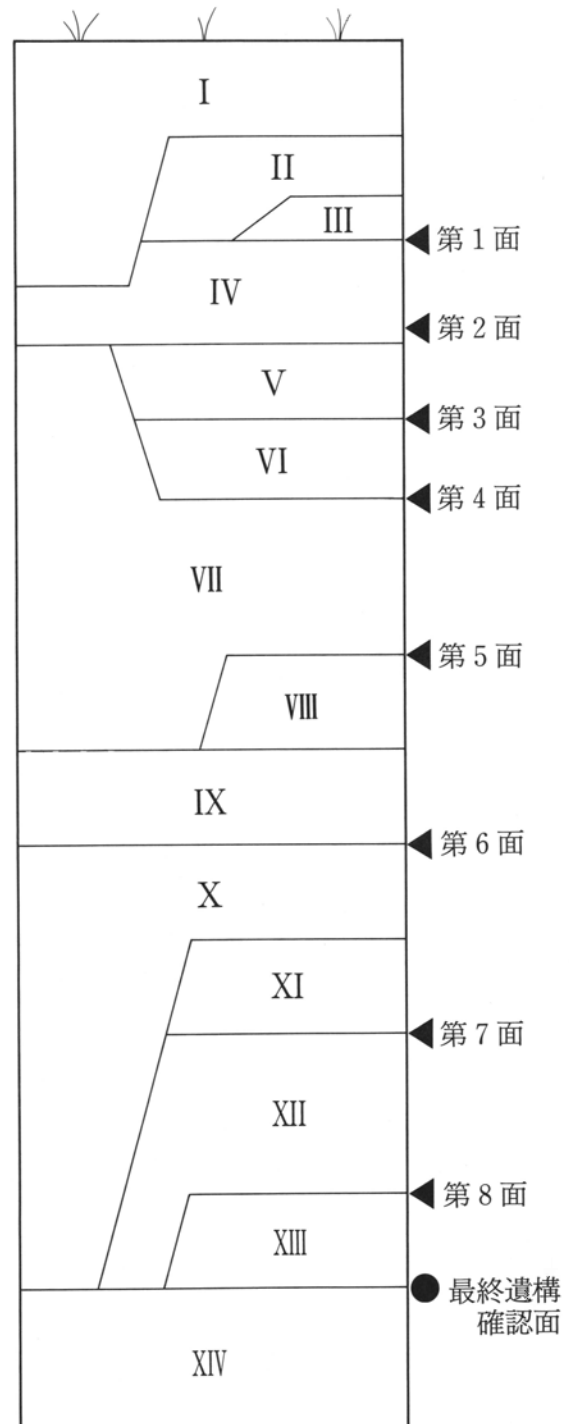
を含むことが多く、XII層の確認もできない。
 おそらく、第6面の水田耕作土として、X層
 中にXII層が混在した結果によるものと考え
 られる。

X I層 軽石に近い砂状の堆積層であり、地形的に
 低い部分に堆積している。層相から、分層さ
 れる状況もある。おそらく、洪水等による堆
 積と考えられる。もちろん、第6面水田以前
 で、第7・8面水田以降の形成（堆積）であ
 る。

X II層 As-C軽石を混在させた、所謂As-C混
 土層である。層の上面からは第7面の水田面
 が検出され、下面からは第8面としたAs-C
 混土を耕作土とする水田の痕跡が検出されて
 いる。言い換えれば、この第8面の水田痕跡
 は、下層のXIII・XIV層上面で検出されたと
 いうことでもある。

X III層 粘質黒色土で、第8面の水田痕跡が検出さ
 れた辺りに堆積する。

X IV層 遺跡地の基盤となるシルト層であり、上面
 を調査の最終遺構確認面とした。多くの風倒
 木痕や、自然流路等を確認している。



第6図 基本土層(模式図)

第3章 上滝榎町北遺跡

第1節 上滝榎町北遺跡の調査概要

本調査の対象となる前橋長瀬線バイパスの路線は、上滝榎町北遺跡内において北関東自動車道建設予定地内と隣接し併走するようである。先行して調査が進められていた北関東自動車道の調査に連動し、南側から北に向かってA～F区が設定され、1996年度にA・B区、1997年度にC・D区、1999年度にE・F区を調査した。併せて、1997年度から1998年度にかけて、前橋長瀬線バイパス本線の西側に併走する取り付け道の調査が行われた。

先行して進められていた北関東自動車道の調査データから、複数の火山灰軽石層や洪水層の堆積が確認されていると共に、各面での遺構の状態が明らかとされていた。こうしたことから、本調査においても、複数面の遺構確認面の存在と、水田を主体とした遺構がほぼ全面に展開するであろうことが予測されていた状況がある。

調査は上位面から順に、江戸時代の天明三（1783）年七月に大噴火した浅間山を給源とするAs-A（浅間-A）軽石下の近世面、As-B（浅間-B）軽石混土層中での中世面、天仁元（1108）年の噴火とされるAs-B（浅間-B）軽石下での平安面、榛名山の噴火に伴う噴出物に起因する泥流層上面での奈良・平安面、古墳時代における6世紀中葉の榛名山を給源とするHr-FP（榛名-二ツ岳軽石）に伴う降灰層下でのHr-FP下面、6世紀初頭とされるHr-FA（榛名-二ツ岳火山灰）に伴う降灰層下でのHr-FA下面、さらにHr-FA下面より下層での粒の粗い砂層に覆われたAs-C（浅間-C）軽石混土層上面、4世紀初頭とされるAs-C（浅間-C）軽石を混在させるAs-C軽石混土層下面の各面を遺構確認面とし、各時期の遺構が検出された。但し、堆積土の状況によって必ずしも面ごとに調査できた訳ではなく、調査区によってはAs-B軽石層下となる平安面で、上位の確認面である中世遺構を併せて調査した状況もある。

以下に、各面の概要を述べる。

第1面となる近世面では、水田耕作に伴うであろう水路、畦、さらに田面への耕作痕の跡が顕著に検出された。隣接する北関東自動車道の調査、本遺跡の北側に位置する宿横手三波川遺跡、南側に位置する上滝五反畑遺跡での調査から、本遺跡地を含めた上滝地域一帯に同様の耕作痕が広がっていることが明らかとなってきた。ただし、C区の一部を除くD・E区では近年の土地改良整備により削平され検出できていない。取り付け道側でも、点在的に一部が検出されている。

第2面となる中世面では、B区において館跡の堀が検出され、各区からは掘立柱建物、土坑、井戸、溝等の遺構が検出されたほか、F区からは耕作痕と思われる痕跡が検出されている。なお、B区の館跡については、北関東自動車道調査で検出された館跡と一体をなす遺構である。取り付け道の調査では、溝のみが検出されている。

第3面となる平安面では、軽石下より水田跡がほぼ全面に検出された。しかし、C区からD区にかかる一

部では水田ではなく、畠跡が検出されている。また、取り付け道側でもほぼ全面から水田跡が検出されている。この面での水田跡は、隣接の北関東自動車道の調査および周辺の遺跡でも同一軽石層下から検出されており、平安時代末には当地域一帯に水田が広がっていたことを物語っている。

第4面となる奈良・平安面は、A区の南端に認められた微高地上に竪穴住居跡や土坑等が検出され、微高地の北側の低地部では水田およびその耕作に関わる耕作痕や牛蹄跡が検出されている。C区では土坑・溝の他に耕作痕が検出され、E区でも微高地上に竪穴住居跡およびピット列や溝が検出されている。なお、C区で検出された耕作痕と同様な痕跡は、隣接する北関東自動車道側の調査でも検出されている。

第5面となる古墳時代のHr-FP下面について、明確に検出できたのは取り付け道F区のみで、水田跡が検出されている。

第6面となる古墳時代のHr-FA下面は、取り付け道も含めたほぼ全面から水田跡が検出されており、隣接する北関東自動車道の調査でも同じ状況がみられる。また、水田域の中に島状に微高地の存在がA・B・E・F区および取り付け道E・F区で確認でき、さらには用水路と考えられる大溝がC区および取り付け道D・E区から検出されている。なお、この大溝の続きは、北関東自動車道の調査でも検出されており、当時の水田耕作に関わる土地改良の様子を窺い知ることができる。

第7面となる古墳時代のAs-C軽石混土層上面については、A区の一部からB区にかけて、C区からD区の一部、取り付け道D・E区で水田跡が検出されている。同様の状況は、北関東自動車道の調査でも検出されている。

第8面となる古墳時代のAs-C軽石混土層下面は、C区で水田の痕跡が明瞭に検出できたほか、E・F区および取り付け道C・D・E区の一部でも検出されている。また、取り付け道F区での微高地上からは掘立柱建物や住居跡とも考えられる痕跡が検出され、さらには取り付け道C・E区の一部に遺物が集中して出土する場所が検出されている。北関東自動車道の調査でも同面は確認されており、微高地上からは住居跡等の遺構が検出されている。

以上、第1面から第8面までの調査を終了させた後、最終面として基盤となるシルト面までの調査を行い、遺構の存在が無いことを確認して調査を終了させている。なお、この最終面では、風倒木痕や自然流路等の検出はあったが、人為的な遺構ではないため、本報告では扱わなかった。

第2節 第1面の遺構（近世面）

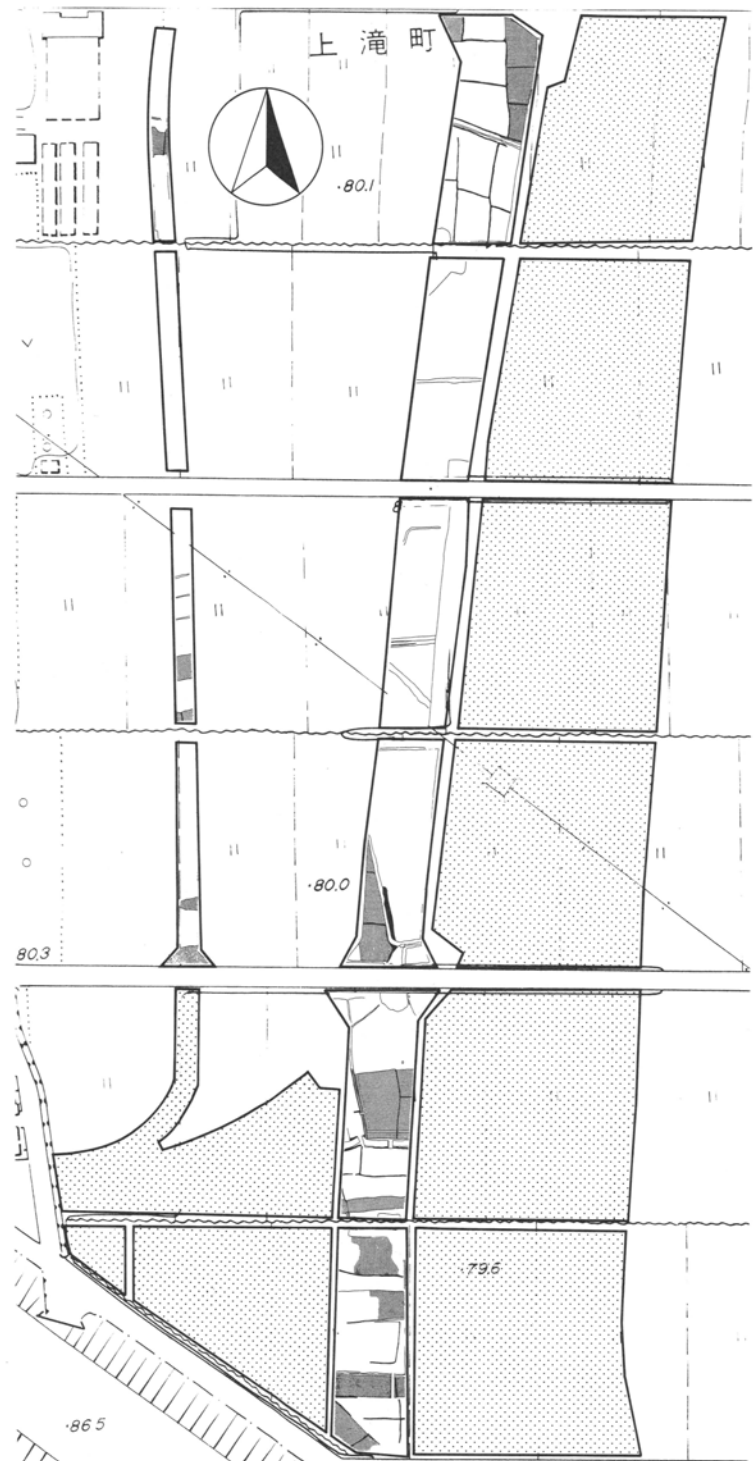
本項で扱う近世面とは、天明三（1783）年七月に大噴火した浅間山を給源とするAs-A（浅間-A）軽石に覆われた遺構、およびそれ以降の遺構を対象とした調査である。白色のAs-A軽石が純層に近い状態で薄く覆われた下面からは、水田耕作に伴うであろう水路、畦、さらに田面への耕作痕の跡が顕著に検出されたが、C区の一部を除くD・E区では昭和40年代頃の土地改良整備により検出できなかった場所もある。また、取り付け道側でも、同面での遺構が点在的に検出されている。

本遺跡が所在する高崎市上滝町（旧上滝村）は、滝川と井野川に挟まれた地域に当たる。井野川は榛名山麓に源を発する古くからの河川であるのに対し、滝川は江戸時代初期に造られた天狗岩用水から当地を経た鳥川までの間を結ぶ用水路として掘削され現在に至っている川であることが知られている。

本調査で検出された近世水田等の遺構は、こうした滝川の用水によって耕作された遺構であることは言うまでもないことである。

検出された各遺構には、土坑、溝、耕作に伴うと考えられる区画がある。

以下、各区ごとに説明するとおりである。



第7図 第1面の全体図 S=1/2500

A区

A区で検出された遺構には、溝、畑ないし水田と考えられる区画および耕作痕を持つ区画がある。土坑等の他の遺構は、検出されていない。また、これらの各区画は、溝および畦状の低い高まりによって区画されている状況がみられる。区画数は、13区画を数える。(第8図)

溝

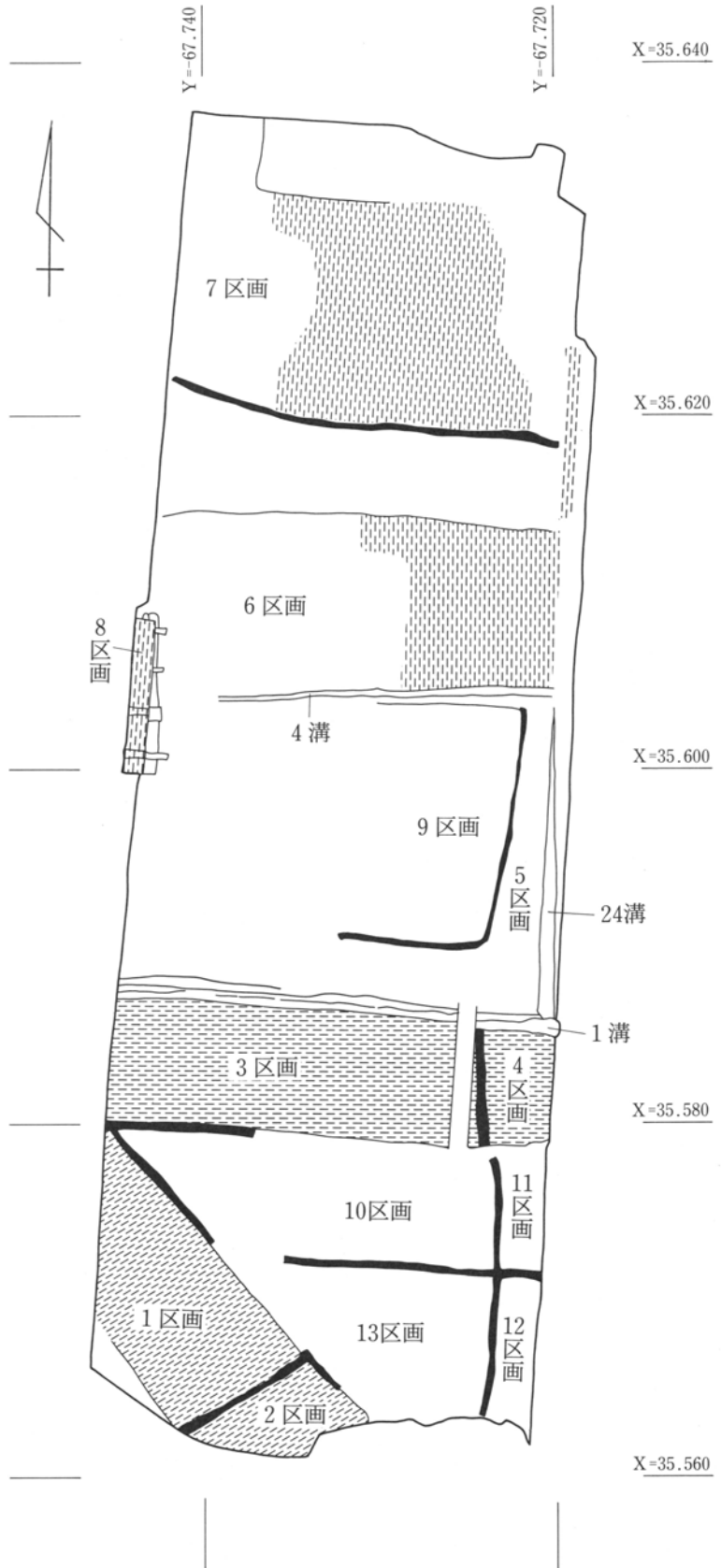
1号溝

調査区の南側で、東西方向に延びる溝である。東端での溝幅は1.0mを測り、深さは約30cmを測る。この1号溝の延長部は、本調査区の東隣である北関東調査分で検出されているが、西隣の北関東調査分では明瞭な溝の検出はみられない。耕作痕を有する4区画の北側を画する溝であり、続く西側の3区画での北側でも明確ではないが浅い溝として検出されている。なお、土層断面の観察からは、3区画内での耕作痕よりも新しいことが確認されていることから、耕作痕後の溝であると考えられる。

4号溝

調査区のほぼ中央に位置し、東西方向に延びる溝が途中から検出されている。溝は比較的浅く、9区画の北側にあり、6区画との区画を画する位置にある。

上記した以外に、中央の東壁付近となる5区画の東側に、1号溝



第8図 A区の遺構配置図(本線)

S = 1 / 400

に直交して北側に延びる浅い溝が検出されている。明瞭な溝ではなかったため、図示することができなかった。

耕作に伴う区画（第9～11図）

検出された区画は、13区画がある。この内、明瞭な耕作痕を伴う区画には1～4・8区画があり、耕作痕の痕跡を残すものに6・7区画がある。その他の区画では、耕作痕は検出されなかった。なお、区画の呼称については調査時の番号を優先し、その後の整理段階で無呼称区画に追加呼称した。

1区画

調査区の南側で、西寄りに位置する。区画の形状は長方形を呈するようであり、東南方向に長軸を持つ。短軸は8m程を測る。区画の面積は、調査範囲内で97.83m²を計測することができる。区画の西側の延長部分は、北関東調査分で検出されている。区画の東側は畦状の低い高まりによって区画され、10区画と13区画と境を画する。対する西側では、畦等は検出されていない。南側は2区画と接するが、2区画との境は畦状の高まりによって区画されている。区画内には、白色のAs-A軽石が純層に近い状態で2～3cmと薄く覆われた下面から、鋤ないしエンガ等によると考えられる耕作痕が検出されている。耕作痕は、長いもので60cm前後、幅30cmほどの痕跡であり、その刃先はやや丸味を持つ。この耕作痕の列は、区画の短軸方向にあり、連続する隣の列との間には隙間がほとんど無い。

2区画

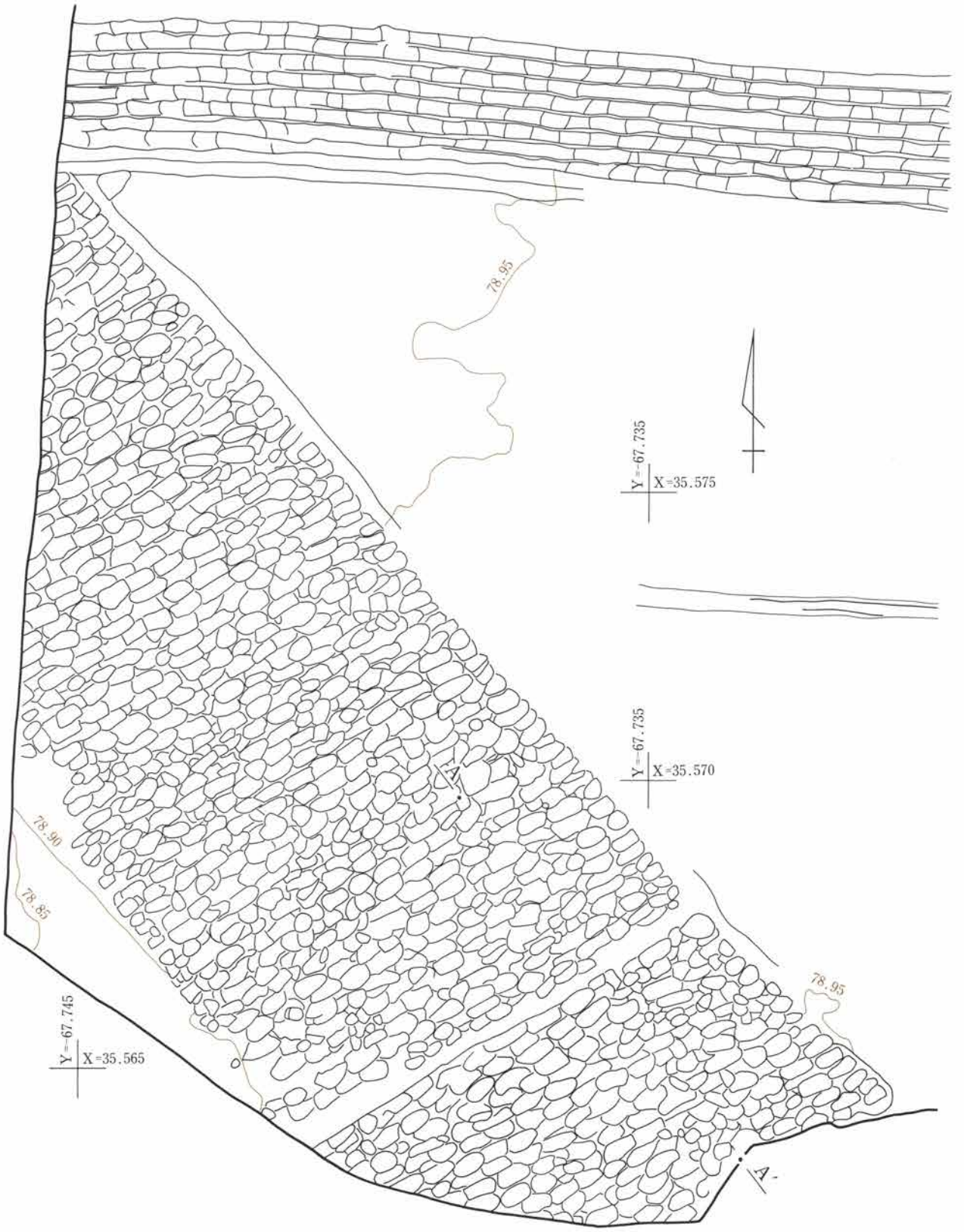
調査区の南側で、ほぼ中央に位置する。1区画の南側に隣接する区画である。区画の形状は1区画と同様に長方形を呈すると思われるが、調査できたのは一部であり、全体は不明。調査範囲内では、長軸方向4.5m、短軸8mを測り、区画の面積は29.06m²を計測することができる。区画の北側は畦状の高まりによって1区画との境を画し、東側も同じ畦状の高まりによって13区画と境にしている。やはり1区画と同様にAs-A軽石に薄く覆われており、軽石下面には耕作痕が検出されている。耕作痕のあり方も1区画と同様で、耕作痕列も区画の短軸方向にある等、耕作痕の状態は極めて1区画に近い。

3区画

調査区の南側で、中央から西端にかけて位置する。区画の形状は長方形を呈するようであり、東西方向に長軸を持つ。短軸は7m程を測る。区画の面積は、調査範囲内で149.46m²を計測することができる。西隣の北関東調査分でも耕作痕を有する区画が検出されているが、耕作痕のあり方が異なる状況であることから同一の区画とは考え難い。区画の北側は、先の1号溝と考えられる浅い溝によって区画されている。対する南側では、10区画と境を画する畦状の高まりがみられ、この西端では1区画の東側を区画する畦状の高まりと斜めに交差する。東側では4区画と接するが、4区画との境は畦状の高まりによって区画されている。区画内には、白色のAs-A軽石が純層に近い状態で数cmほど覆われた下面から、鋤ないしエンガ等によると考えられる耕作痕が検出されている。この耕作痕の列は、区画の長軸方向にあり、連続する隣の列との間には隙間が2～3cmほど空き、断面が箱状を呈する形状で、先の1・2区画のものとは大きく異なっている。また、耕作痕の底面を微細に観察すると、耕作方向の底面は平坦ではなく、耕作単位ごとに緩やかな傾斜が認められる。耕作痕の幅は25cm前後を測り、1・2区画の幅よりもやや狭い。

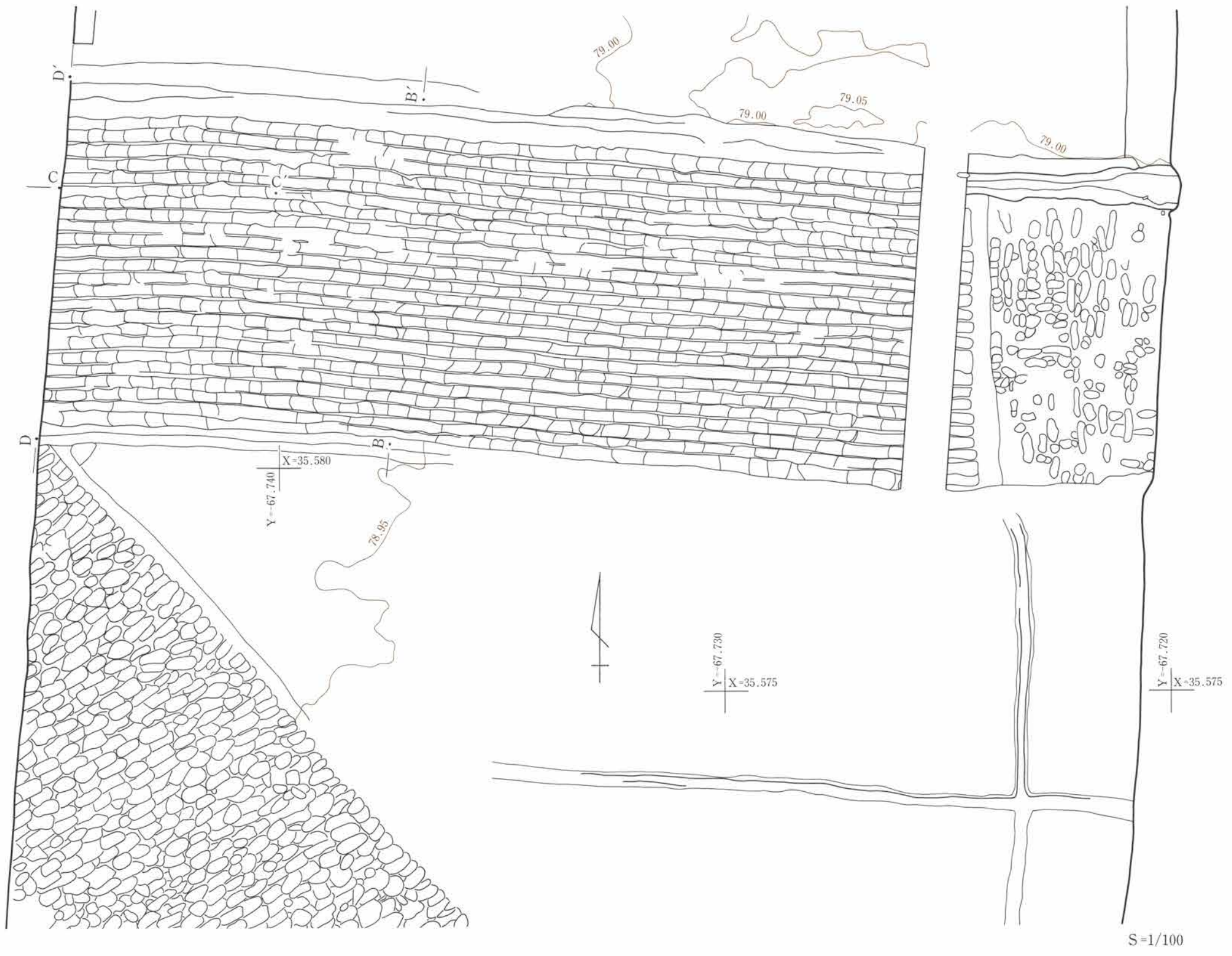
4区画

調査区の南側で、東端に位置する。3区画の東側に隣接する区画である。区画の形状は3区画と同様に東西方向に長軸を持つ長方形を呈し、区画の東側延長部分は北関東調査分で検出されている。調査範囲内では、

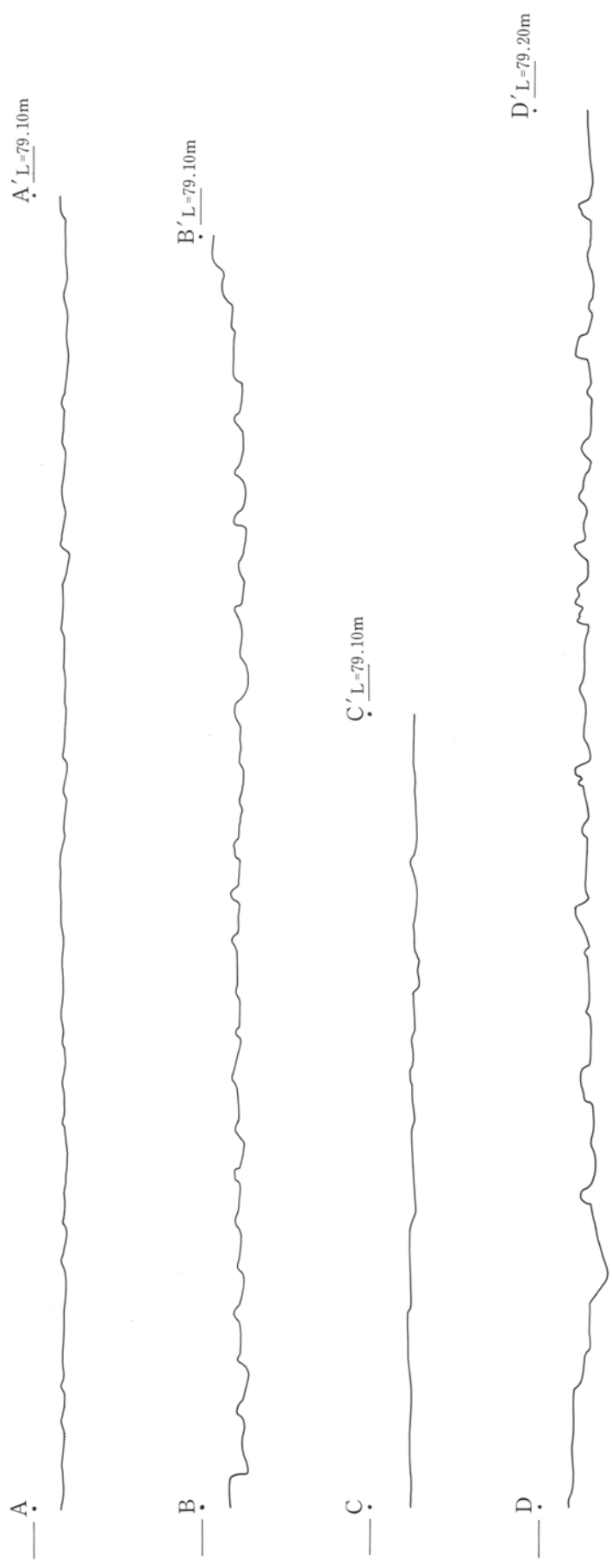


S=1/100

第9図 A区 1・2区画の耕作痕



第10図 A区 3・4区画の耕作痕



第11図 A区 1~4区画の断面

長軸方向4m、短軸6.5mを測り、区画の面積は29.4㎡を計測することができる。区画の北側は1号溝によって区画され、南側では畦等の区画は検出されていない。西側は3区画と接するが、3区画との境は畦状の高まりによって区画されている。区画内には、白色のAs-A軽石で薄く覆われた下面から、鋤ないしエンガ等によると考えられる耕作痕が検出されている。耕作痕の残存状態は良好とはいえず、疎らである。耕作方向は、短軸方向の耕作列と、長軸方向の耕作列との2方向があり、両方向の耕作列が区画全体に交錯している。この状況は、北関東調査分でも同様である。また、同方向の耕作列の間が空いている点でも、先の1・3区画の耕作痕の状況とやや異なる。

5区画

調査区の中央で、東側から西側へ逆L字状の形で位置する。区画の南側は1号溝によって3・4区画と画し、逆L字側には畦状の高まりによって9区画と画する。また、区画の東側には、1号溝に直交して北に延びる浅い溝によって区画されていると考えられる。区画内のうち、東側での南北方向部分ではAs-A軽石を覆土とする耕作痕が疎らに検出されているが、南側の東西方向部分では何も検出されていない。

6区画

調査区の中央に位置する。区画の形状は長方形を呈するようであり、東西方向に長軸を持つと考えられる。短軸は9m程を測る。区画の南側は、先の4号溝とした浅い溝によって9区画との境を画す。北側については明瞭な境を検出できなかったが、耕作痕の及ぶ範囲が北側で揃うライン、ないし若干の高低差により区画の範囲と考えた。東側と西側の区画については不明。区画内の東側には、As-A軽石を薄く覆土とする耕作痕が疎らに検出されている。耕作痕の耕作列は、区画の短軸方向に向き、疎らではあるが区画全体に及んでいたものと考えられる。

7区画

調査区の北側に位置する。先の6区画の北側に当たるが、6区画との間には4.5m程の隔たりを持つ。この間での耕作痕等の検出はない。区画の形状は長方形を呈するようであり、6区画と同様に東西方向に長軸を持つと考えられる。短軸は11.5m程を測る。区画の南側は、畦状の高まりによって区画される。北側については明瞭な境を検出できなかったが、耕作痕の及ぶ範囲が北側で揃うラインを区画の境と考えた。東側と西側の区画の境については不明。区画内の中央部を中心に、As-A軽石を薄く覆土とする耕作痕が検出されている。先の1・3区画ほど明瞭ではないが、ほぼ全面に耕作痕が及んでいたものと考えられる。耕作痕の耕作列は、6区画と同様に区画の短軸方向に向き、列と列の間にはやや隙間がみられる。

8区画

調査区の中央で、西端に位置する。調査できた範囲は僅かである。区画の東に接する6・9区画との境は不明であるが、区画内に検出された耕作痕の範囲が本区画の範囲と考えた。検出された耕作痕列は南北方向を向き、3区画と同様な耕作痕で、横断面が箱状を呈する。範囲が狭いため、詳細については不明である。

9区画

調査区の中央に位置する。区画の形状は長方形を呈するようであり、東西方向に長軸を持つと考えられる。区画の東側と南側は5区画と接するが、畦状の高まりによって区画される。北側は6区画と接するが、4号溝によって境を画する。西側については不明。区画内には耕作痕等の検出はない。

10区画～13区画

調査区の南側で、中央から東側にかけて位置する。この10～13区画までの4ヶ区画内には耕作痕は検出されていないが、区画を画する畦状の高まりが十字に検出されている。その畦状の高まりの一つは、東側にみ

られる南北方向の畦で、3区画と4区画を画する畦の延長上に当たる。もう一つは、南北方向の畦の中央で交差する東西方向の畦である。この両方向の畦によって、4つの区画が画されていたものと考えられる。

さらに、調査区の北側の東壁際に、南北方向の長い耕作列が数列検出されている。この耕作列は、東隣の北関東調査分で検出されている耕作痕の続きと考えられる。

B区

B区で検出された遺構には、土坑3基、溝、畑ないし水田と考えられる区画および耕作痕を持つ区画がある。また、これらの各区画は、溝および畦状の低い高まりによって区画されている状況がみられる。区画数は、13区画である。(第13図)

土坑 (第12図)

1号土坑

位置 B区の中央で東寄りにあり、 $X=35.689$ 、 $Y=-67.716$ に位置する。

規模 正方形を呈し、一辺が60cm、深さ80cmを測る。

概要 2号土坑と重複するが、土層断面および覆土から本土坑が古い。As-A軽石とHr-FA泥流ブロックを多量に混在する暗褐色土を覆土とする。遺物には、陶磁器片と播鉢片が出土している。

2号土坑

位置 B区の中央で東寄りにあり、 $X=35.689$ 、 $Y=-67.716$ に位置する。

規模 長方形を呈し、長軸方向を南北にもち、長軸90cm、短軸50cm、深さ30cmほどを測る。

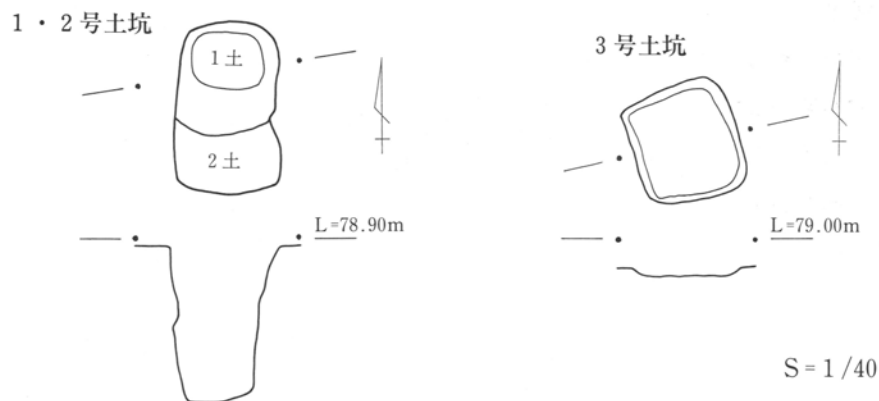
概要 1土坑と重複するが、土層断面および覆土から本土坑が新しい。As-A軽石を多量に、Hr-FA泥流ブロックを少量混在する褐灰色土を覆土とする。遺物の出土はない。

3号土坑

位置 B区の北端にあり、 $X=35.710$ 、 $Y=-67.713$ に位置する。

規模 正方形を呈し、一辺が60cm、深さ5cmほどを測る。

概要 As-A軽石を含む暗褐色土を覆土とし、遺物の出土はない。

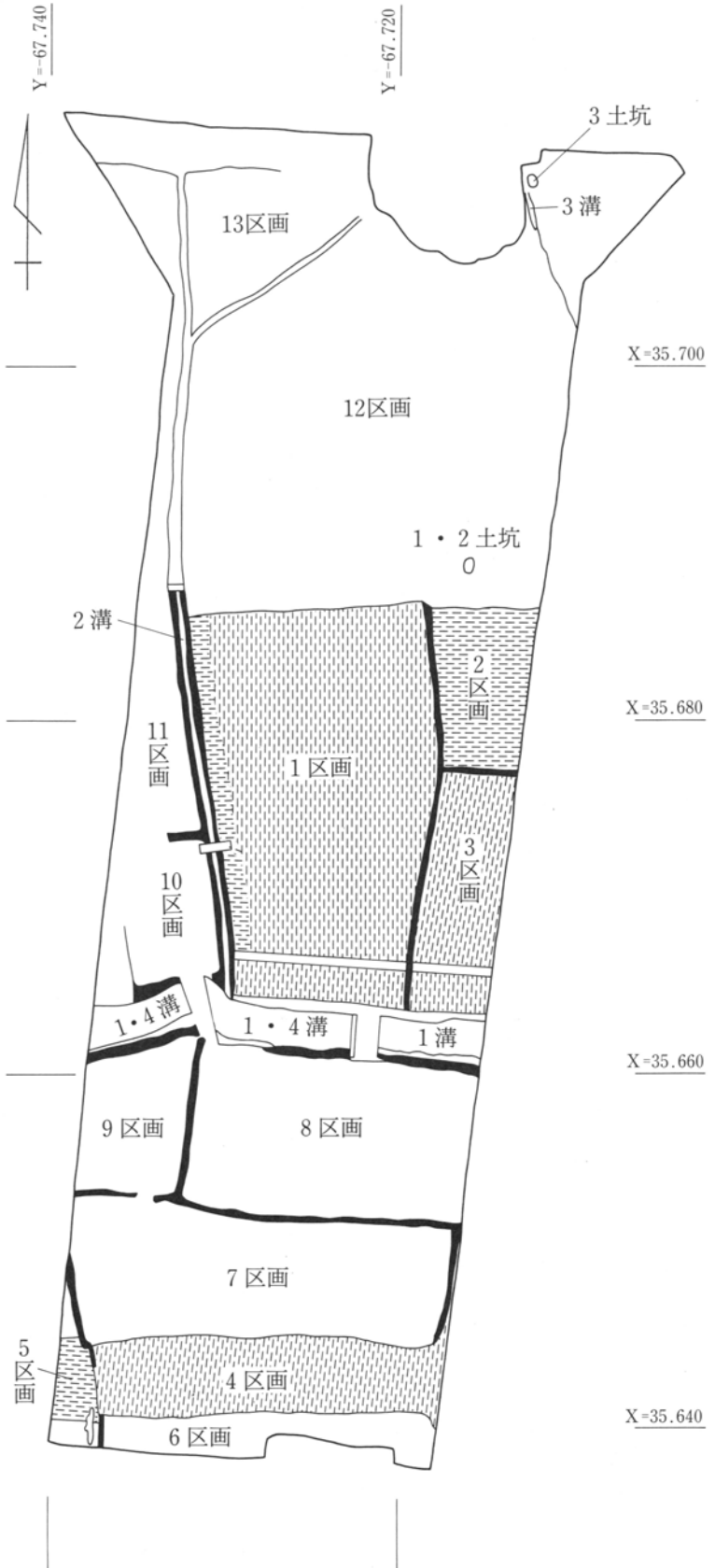


第12図 B区 土坑

溝

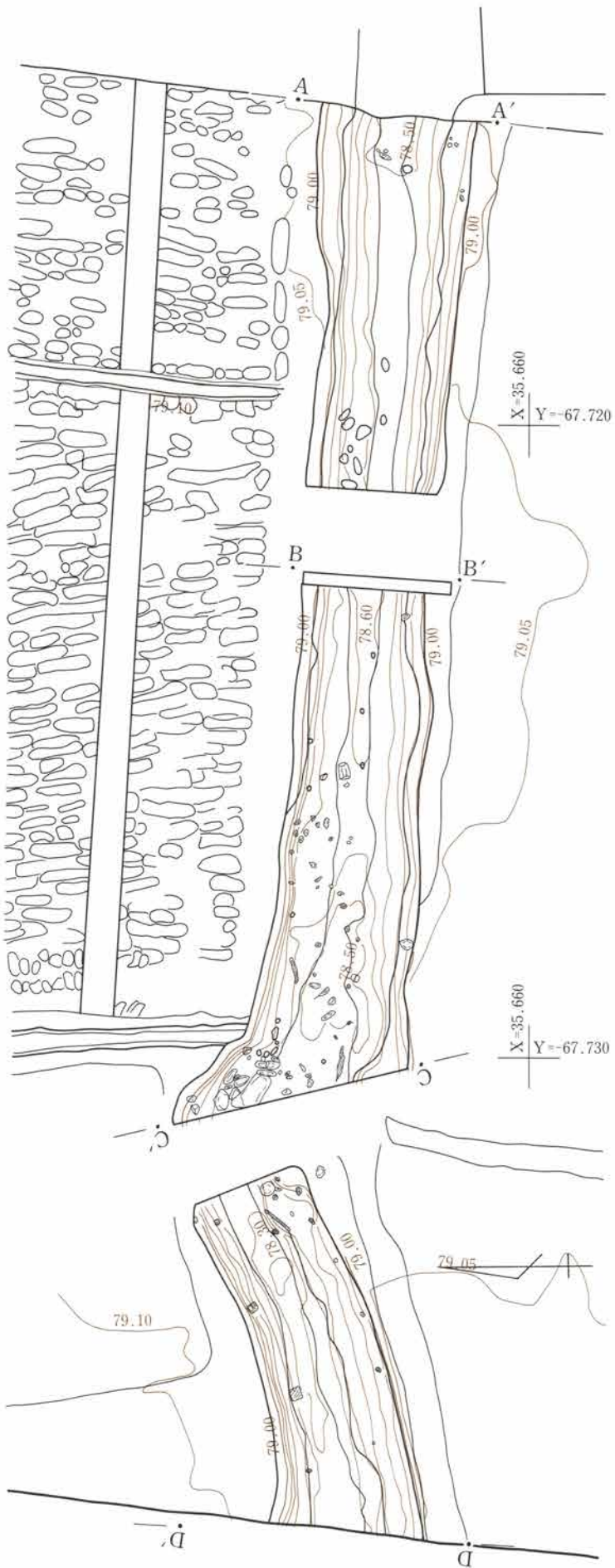
1号溝 (第14・15図)

調査区の南側で、東西方向に延びる溝である。中央より西側で、北側にやや「く」の字に屈曲する。西端から屈曲部までの間は、下位の中世面で検出された館跡の溝と概ね重複している。この1号溝の延長は、東西両側の北関東調査分でも検出されており、ほぼ直線的に東西方向に延びている。溝の規模は、西端で幅2.5m、東端で幅1.7m、中間で幅2mを測る。深さは約60~70cmほどを測る。堆積する土層断面の観察からは、改修(掘り直し)された状況がわかる。覆土中の2層から6層までは近現代の堆積土であり、土中からはビニール等の出土が見られた。また、7層から11層については、土中にAs-A軽石を含んでいることから、天明三年以降の堆積であることがわかる。さらに、溝の幅では、古い段階の幅が広く、新しい段階ではやや狭くなっている状況がある。溝の底面も同様に、古い段階の底面よりも新しい段階の方がやや浅くなっている。溝の開削時期を特定するには至らないが、溝の南北両側に畦状の高まりないし耕作痕との空間が空く状況からすれば、天明三年の頃には存在していたと考えることができる。なお、溝内には、杭状の木材が検出されている。また、古い段階の1号溝と交差する2号溝については、両溝ともに畦状の高まりを両側に持つことから同時期に存在した溝で

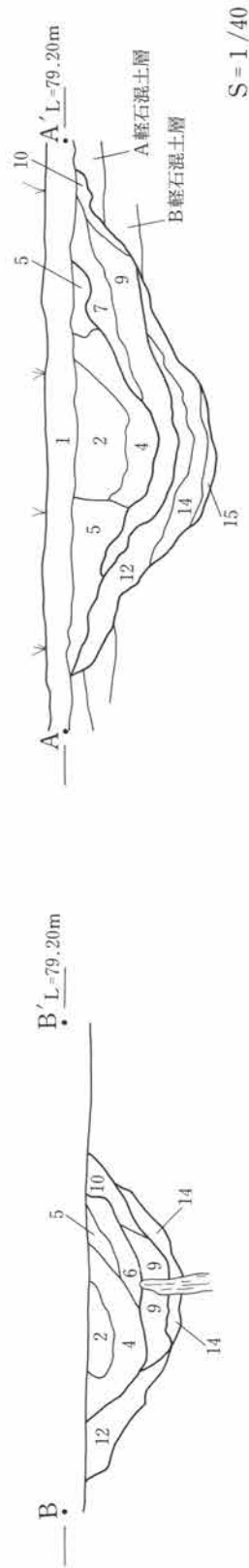


S = 1 / 400

第13図 B区の遺構配置図(本線)

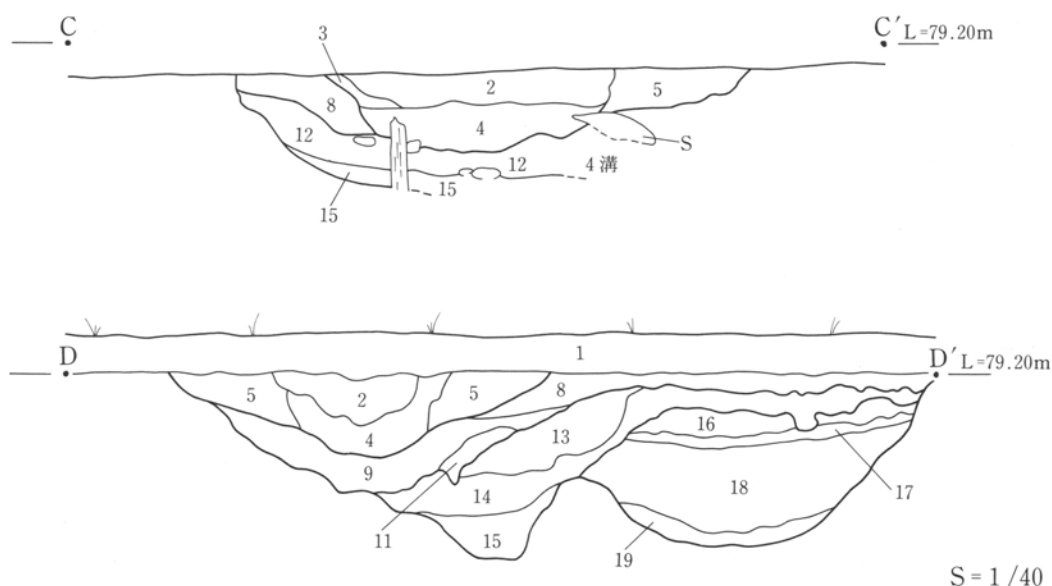


S = 1/100



S = 1/40

第14图 B区 1·4号溝



- 1層 表土（現耕作土）
- 2層 褐灰色土 As-A軽石を少量含み、土質が細かい。部分的に鉄分凝固がみられる。
- 3層 褐灰色土 2層に類似するが、やや明るい。
- 4層 褐灰色土 2層に類似するが、混入物が少ない。2層との間にビニールを挟む。
- 5層 褐灰色土 2層に類似するが、As-A軽石を多く含む。
- 6層 灰黄色土 浅黄色砂質土を多く含み、土質が細かい。
- 7層 黄灰色土 As-A軽石を含み、黄色砂質土を主体とする。
- 8層 黒褐色土 As-A軽石を多量に含む。やや粘質で締まりがよい。
- 9層 黄灰色土 7層に類似するが、暗く粘質。As-A軽石を少量含む。
- 10層 褐灰色土 As-A軽石を微量含み、黄色砂質土を混在する。
- 11層 黄灰色土 7層に類似するが、As-A軽石を少量含み、明るい。
- 12層 黒褐色土 As-B軽石を多量に含み、堅く締まっている。
- 13層 褐灰色土 As-B軽石を含み、やや粘質で土質が細かい。
- 14層 黄灰色土 As-B軽石を含み、黄色砂質土を多く含む。
- 15層 灰色土 全体にAs-B軽石を多く含む。黒色土粒を含むが、粘質な灰色土を主体とする。
- 16層 黒褐色土 As-B軽石を少量含み、黄桃色のHr-FAブロックを多量に含む。
- 17層 灰褐色土 16層よりHr-FAブロックを多く含み、As-B軽石下の水田耕作土ブロックを混在させる。粘質が強い。
- 18層 黒褐色土 16層に類似するが、Hr-FAブロックの混入が少ない。粘性が弱く、砂質気味。
- 19層 黒褐色土 砂質層であり、鉄分・マンガンを多く含む。

第15図 B区 1・4号溝土層断面

あり、その規模等から、本1号溝は水田耕作に関わる主要な用水路であったことが窺える。

2号溝

調査区の西側で、先の1号溝の屈曲部から北方向に延びる溝である。溝の両側には、畦状の高まりが検出されている。1区画の北側に当たる12区画部分では、溝と畦の状態が明確ではないが、12区画の途中で三つ又に分岐し、一方は東北方向へ屈曲する。溝幅は30～40cmを測り、水田耕作に関わる水路と考えられよう。さらに、1号水路との関係は、同時期に存在した水路であると考えられる。

耕作に伴う区画（第16～18図）

検出された区画は、13区画がある。この内、明瞭な耕作痕を伴う区画には1～5区画があり、その他の区

画では、耕作痕は検出されなかった。なお、区画の呼称については調査時の番号を優先し、その後の整理段階で追加呼称した。

1 区画

調査区のほぼ中央に位置する。区画の形状は概ね長方形を呈するようであるが、東側と西側の両辺が僅かに歪む。南北方向に長軸を持ち、その長さは22mを測る。短軸となる南辺は9.8mを測り、北辺で13.5mを測る。区画の面積は265.07㎡を計測することができる。区画の西側は畦状の高まりと2号溝によって画され、東側は畦状の高まりによって2区画と3区画との境を画する。北側では、畦等は検出されていないが12区画よりやや低く、耕作痕も一線状に止まる。南側は、畦状の低い高まりと1号溝によって画されている。区画内には、白色のAs-A軽石が純層に近い状態で2～3cmと薄く覆われた下面から、鋤ないしエンガ等によると思われる耕作痕が検出されている。耕作痕は、長いもので80cm前後、幅20cmほどの痕跡であり、その刃先はやや丸味を持つ。この耕作痕の列は、区画の長軸方向にあり、連続する隣の列との間には隙間がほとんど無い。また、西辺際では、辺に直行する様に耕作痕が施されているのが特徴的である。

2 区画

調査区の中央で、東寄りに位置する。区画の東側の延長部分は北関東調査分で検出されており、その形状は長方形を呈するようで、東西方向に長軸を持つ。短軸は9m程を測る。区画の面積は、調査範囲内で46.73㎡を計測することができる。区画の西側は畦状の高まりによって区画され、1区画と境を画する。北側は先の西隣の1区画と同様で、畦等は検出されていないが12区画よりやや低く、耕作痕も一線状に止まる。南側は3区画と接するが、3区画との境は畦状の高まりによって区画されている。区画内には、白色のAs-A軽石が純層に近い状態で2～3cm覆われた下面から、鋤ないしエンガ等によると思われる耕作痕が検出されている。耕作痕は、やや疎ら気味であるが、その刃先はやや丸味を持つ。この耕作痕の列は、区画の長軸方向となる。

3 区画

調査区の中央で、東寄りに位置する。区画の東側の延長部分は北関東調査分で検出されており、その形状は概ね正方形を呈するようで、一辺が13.5m程を測る。区画の面積は、調査範囲内で59.3㎡を計測することができる。区画の西側は畦状の高まりによって区画され、1区画と境を画する。北側は2区画と接するが、2区画との境は畦状の高まりによって区画されている。南側は、畦状の低い高まりと1号溝によって画されている。区画内には、白色のAs-A軽石が純層に近い状態で2～3cm覆われた下面から、鋤ないしエンガ等によると思われる耕作痕が検出されている。耕作痕は、1区画よりもやや疎ら気味であるが、その刃先はやや丸味を持つ。この耕作痕の列は、1区画の耕作痕方向と同じで、南北方向となる。

4 区画

調査区の南側で、中央から東側にかけて位置する。区画の形状は概ね長方形を呈するようであるが、東側の境は不明である。東西方向に長軸を持つ。短軸は4.2m程を測る。区画の面積は、調査範囲内で83.4㎡を計測することができる。区画の西側は畦状の高まりによって僅かに区画され、5区画と境を画する。東側は、7区画の東側へL字状に回り込むようであるが、東端境は不明。北側は7区画と接するが、段差による高低が明瞭で、耕作痕も一線状に止まる。南側は6区画と接するが、区画境は明瞭ではなく、耕作痕が一線状に止まる。区画内には、白色のAs-A軽石が純層に近い状態で2～3cm覆われた下面から、鋤ないしエンガ等によると思われる耕作痕が検出されている。耕作痕は、西側で疎らであるが、それ以外は明瞭で、連続する隣の列との間には隙間がほとんど無い。その刃先はやや丸味を持つ。この耕作痕の列は、区画の短軸方向と



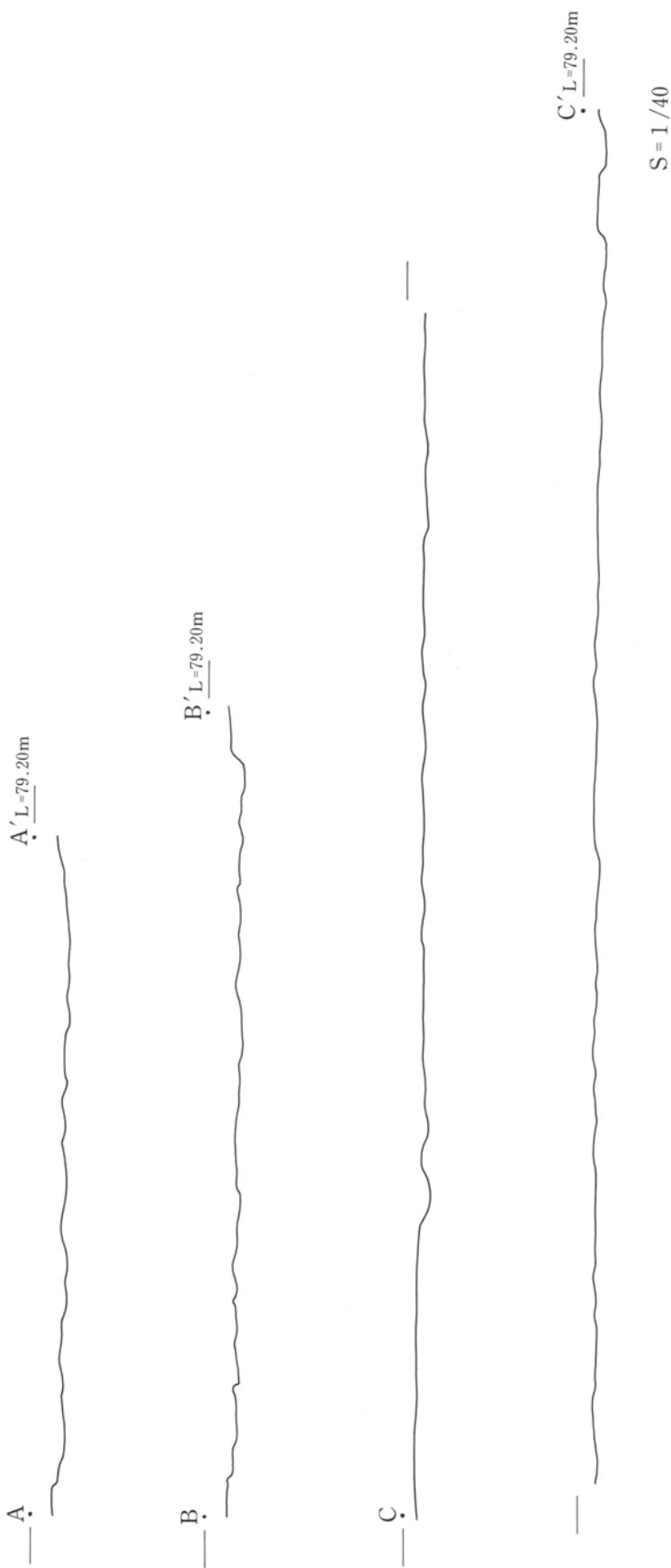
第16図 B区 4区画の耕作痕

S=1/100



第17図 B区 1~3区画の耕作痕

S=1/100



第18図 B区 1~4区画の断面

なる。

5 区画

調査区の南側で、西端に位置する。延長部分は北関東調査分で検出されているが、不明瞭である。4 区画の西側に当たり、4 区画とは僅かに畦状の高まりによって区画されている。区画内には、白色のAs-A軽石が純層に近い状態で2～3cm覆われた下面から、溝状の耕作痕が検出されている。溝状の耕作痕の列は、東西方向に耕作され、連続する隣の列との間には隙間が空く。

6 区画

調査区の南端に位置する。先の4 区画の南側に当たり、4 区画との北境には畦状の明瞭な境は検出されていない。区画の東側は、畦状の高まりによって境を画する。区画内での耕作痕等の検出はない。

7 区画

調査区の南側で、ほぼ中央に位置する。区画の形状は、東西方向に長軸を持つ概ね長方形を呈し、調査範囲内で150.05m²を計測することができる。区画の北側は8・9 区画と接し、畦状の高まりによって区画を画している。9 区画と接する畦の一部がきれている部分があり、水田に特有な水口であるかは不明であるが、その可能性は否定できない。東側と西側の両境には、やはり畦状の高まりによって画されている。南側は4 区画と接するが、先の4 区画で述べたように段差によって区画が明瞭である。ちなみに、7 区画の方が高い。区画内での耕作痕等の検出はない。

8 区画

調査区の南側で、中央から東にかけて位置する。区画の形状は、東西方向に長軸を持つ長方形を呈し、調査範囲内で142.66m²を計測することができる。区画の北側は畦状の高まりと1号溝によって区画され、南側は7 区画と接するが畦によって画される。西側は9 区画と接するが、1号溝の屈曲部に交わる南北畦によって区画が画されている。区画内での耕作痕等の検出はない。

9 区画

調査区の南側で、西側に位置する。西側の延長部分は北関東調査分で検出されており、その形状は概ね長方形を呈するようである。東西方向に長軸を持ち、調査範囲内で48.23m²を計測することができる。区画の北側は畦状の高まりと1号溝によって区画され、このために北辺がやや歪む。南側は7 区画と接するが畦によって画される。西側は8 区画と接するが、1号溝の屈曲部に交わる南北畦によって区画が画される。区画内での耕作痕等の検出はない。

10・11区画

調査区の中央で、西側に位置する。西側の延長部分は北関東調査分で検出されており、その状況から10・11区画とする二区画とし難い点があるが、僅かに検出された東西方向の畦状の高まりをもって区分した。南側は畦状の高まりと1号溝によって区画され、東側は畦状の高まりと2号溝によって1区画と境を画する。区画内での耕作痕等の検出はないが、西側の延長部分となる北関東調査分では耕作痕が検出されている。

12区画

調査区の北側に位置する。区画の西側は2号溝によって区画され、南側は1・2 区画と接するが区画境を有する。かなり広い面積であるが、東側の北関東調査分の状況でも分割できるかは不明。また、北関東調査分では「灰掻き穴」と称されるAs-A軽石の処理坑が検出されているが、本12区画内では耕作痕も含め検出されていない。

13区画

調査区の北側に位置する。2号溝がY字状に分岐した部分に当たり、区画の西側と東側は2号溝によって区画される。形状等は不明で、区画内での耕作痕等の検出はない。

C区

C区で検出された遺構には、溝、畑ないし水田と考えられる区画および耕作痕を持つ区画がある。土坑等の他の遺構は、検出されていない。また、これらの各区画は、溝および畦状の低い高まりによって区画されている状況がみられる。区画数は、5区画である。なお、区画が検出された以外の大部分が、昭和40年代頃の土地改良整備により区画等の検出はできなかった。(第19図)

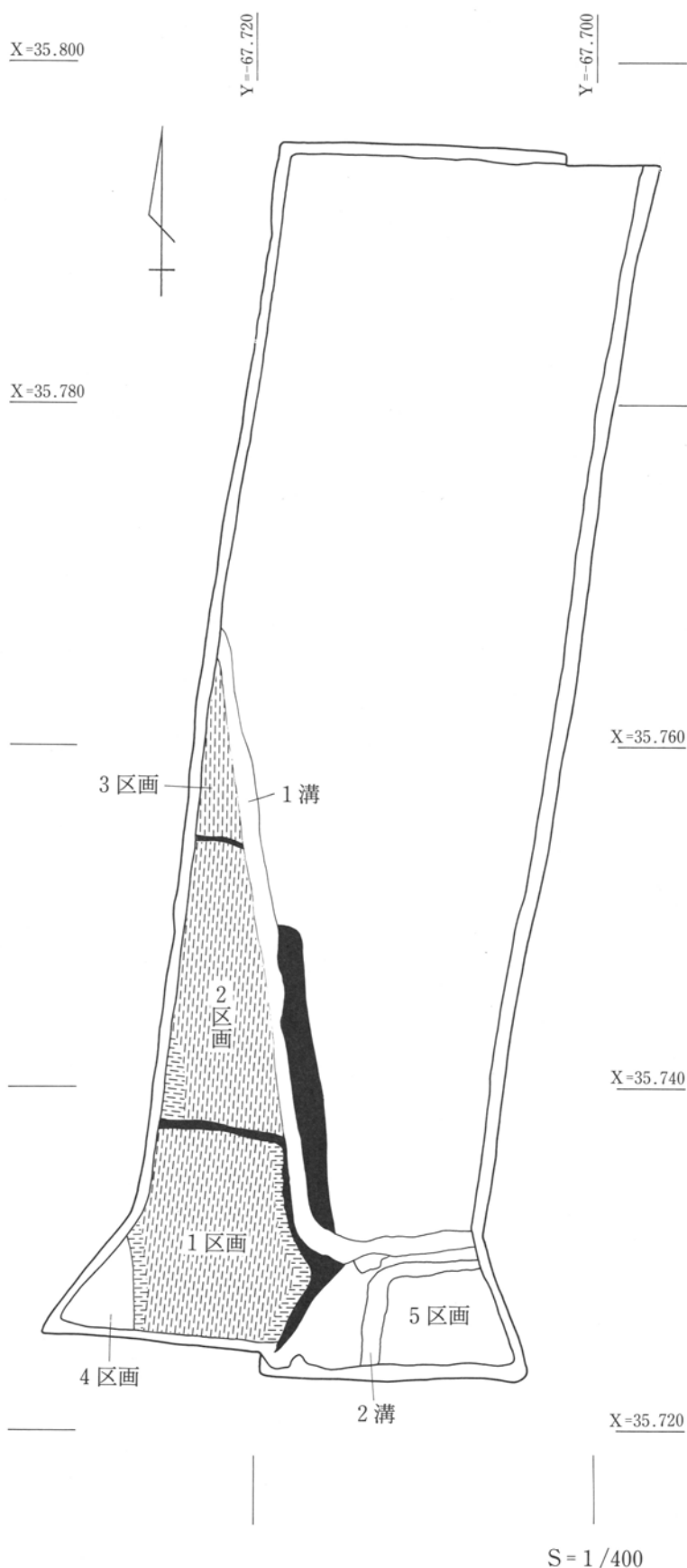
溝

1号溝

調査区の中央西端から南側に延び、南端手前で大きく東へ屈曲する。溝の西側では耕作痕を伴う区画が展開するが、東側はやや高位置となり、区画等の検出はなかった。溝幅は1m、深さ20cm程を測る。水田耕作に関わる水路と考えられよう。遺物等の出土はない。

2号溝

調査区の南端から北へ僅かに延び、1号溝の手前で大きく東へ屈曲する。本調査区内での2号溝は、5区画を画するようにあるが、B



第19図 C区遺構配置図(本線)

区2号溝が途中でY字状に分岐した東側溝の延長上にある溝と考えられる。溝幅は1m、深さ30cm程を測る。水田耕作に関わる水路とも考えられよう。遺物等の出土はない。

耕作に伴う区画 (第20図)

検出された区画は、5区画がある。この内、明瞭な耕作痕を伴う区画には1～3区画があり、その他の区画では、耕作痕は検出されなかった。なお、区画の呼称については調査時の番号を優先し、その後の整理段階で追加呼称した。

1区画

調査区の南端で、中央から西寄りに位置する。区画の形状は、長軸を南北方向に持つ歪んだ長方形を呈し、特に東辺が大きく「く」字状に歪む。区画の面積は、調査範囲内で109.93m²を計測することができる。区画の東側は畦状の低い高まりと1号溝によって区画される。北側は2区画と接するが、2区画との境は畦状の低い高まりによって区画されている。西側は明瞭な畦は検出できなかったが、耕作痕の状態から区画境が認識できる。区画内には、白色のAs-A軽石が純層に近い状態で1～2cmと薄く覆われた下面から、鋤ないしエンガ等によると考えられる耕作痕が検出されている。耕作痕はやや疎ら気味であるが、その耕作痕の列は区画の長軸方向と同じ南北方向となる。また、西側と東側の両辺際については、辺に直行するような形で耕作痕が施されている。

2区画

調査区の南端で、西寄りに位置する。区画の形状は、長軸を南北方向に持つ歪んだ長方形を呈すると考えられる。区画の面積は、調査範囲内で86.5m²を計測することができる。区画の東側は畦状の低い高まりと1号溝によって区画される。北側は3区画と接し、南側は1区画と接するが、両区画との境は畦状の低い高まりによって区画されている。区画内には、白色のAs-A軽石が純層に近い状態で1～2cmと薄く覆われた下面から、鋤ないしエンガ等によると考えられる耕作痕が検出されている。耕作痕は1区画よりも疎らであるが、その耕作痕の列は区画の長軸方向と同じ南北方向となる。また、西際で東西方向の耕作痕が施されており、区画の境が存在する可能性もある。

3区画

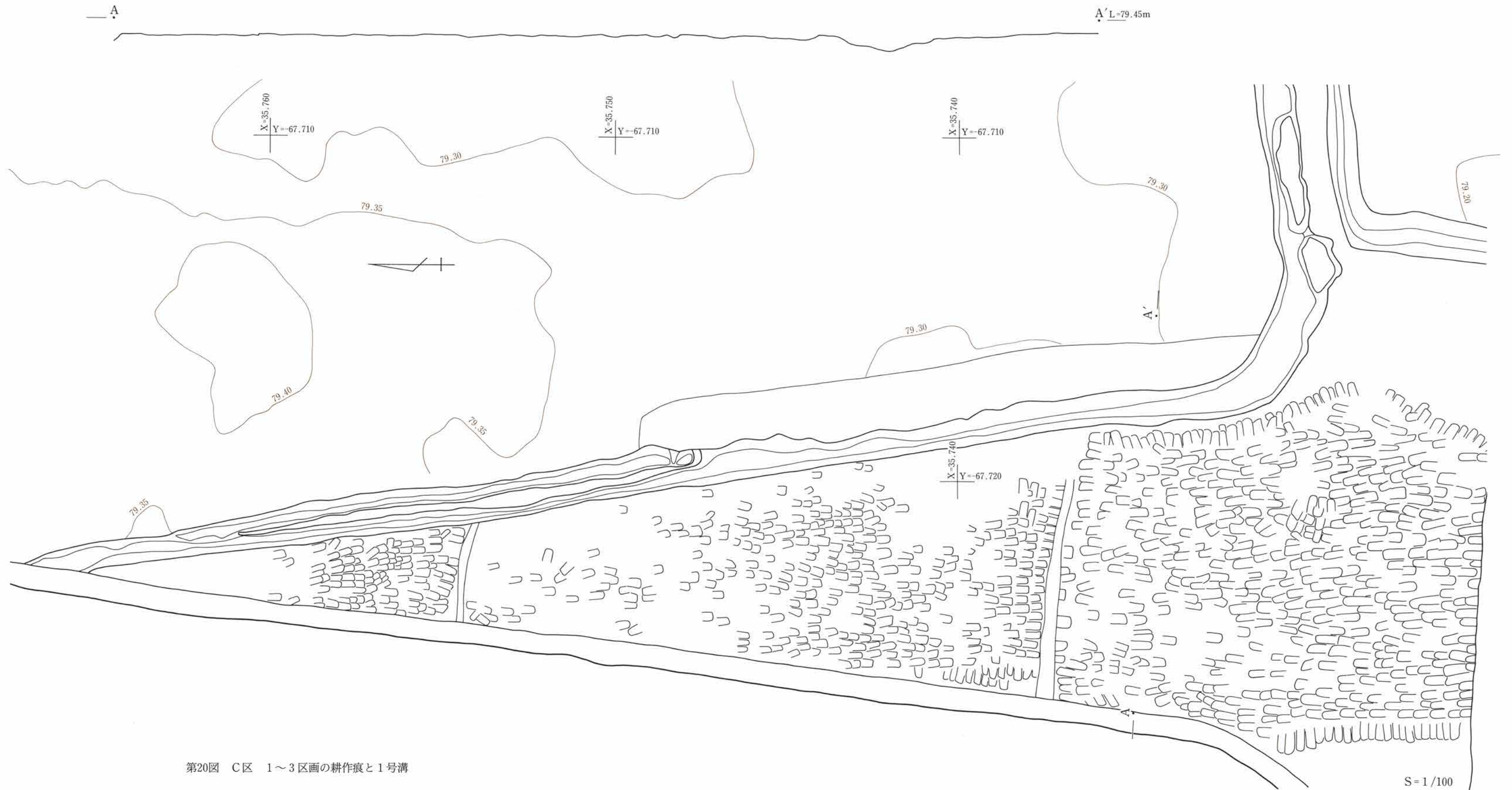
調査区の中央で、西端に位置する。区画の形状は、長軸を南北方向とした長方形を呈すると考えられるが、検出できたのは僅かな部分である。区画の東側は畦状の低い高まりと1号溝によって区画される。南側は2区画と接するが、畦状の低い高まりによって境を画する。区画内には、白色のAs-A軽石が純層に近い状態で1～2cmと薄く覆われた下面から、耕作痕が検出されている。先の1・2区画と同様で、その耕作痕の列は区画の長軸方向と同じ南北方向となる。

4区画

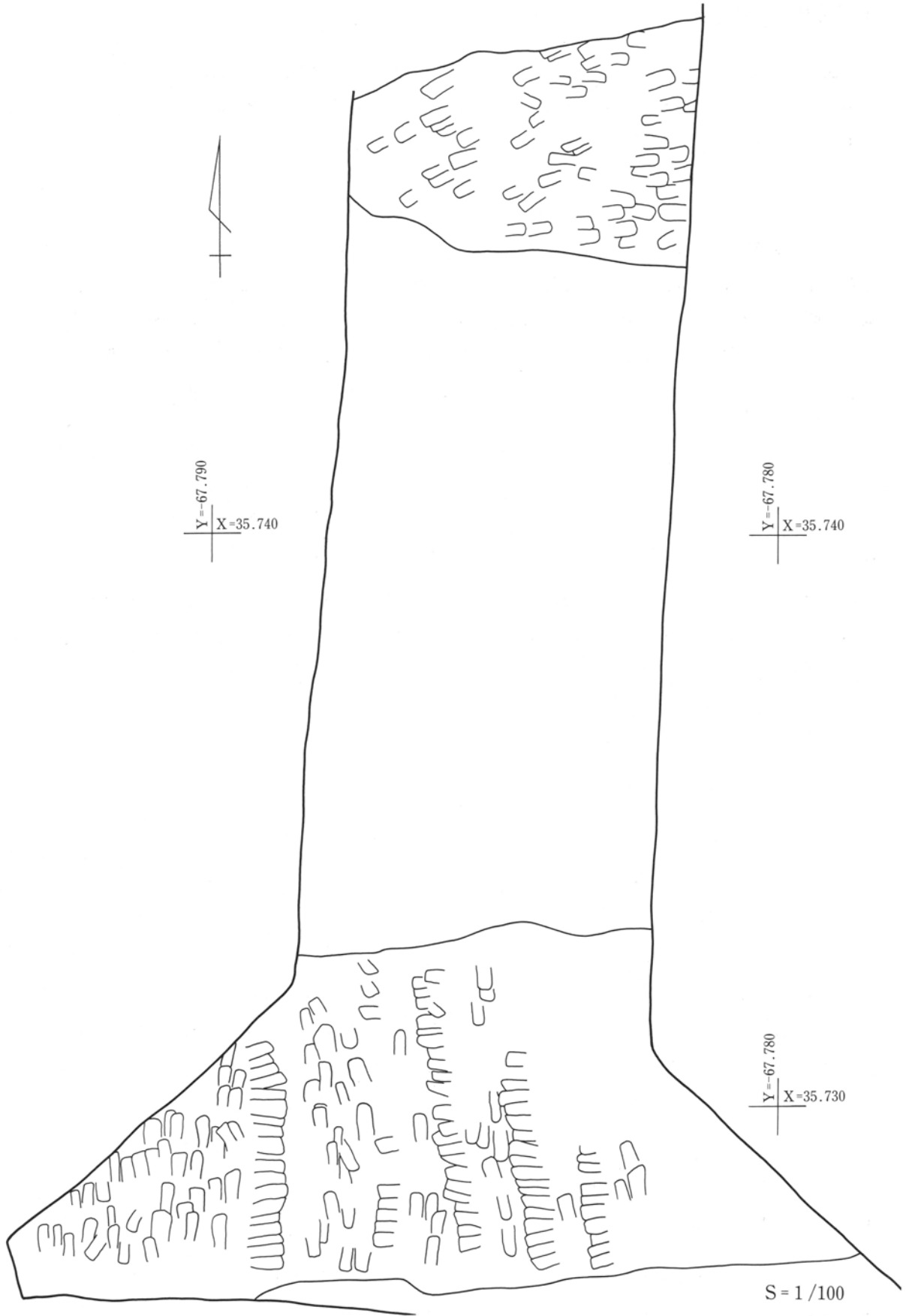
調査区の南端で、西際に位置する。検出できたのは僅かな部分であり、形状等は不明。東側で1区画と接する。耕作痕等は検出されていない。

5区画

調査区の南端で、東際に位置する。検出できたのは僅かな部分であり、形状等は不明。先の2号溝に囲まれるように、北側と西側が区画されている。耕作痕等は検出されていない。



第20図 C区 1～3区画の耕作痕と1号溝



第21図 C区取り付け道 区画の耕作痕

C区取り付け道

検出された遺構には、畑ないし水田と考えられる耕作痕を持つ区画がある。便宜上、1・2区画としたが、部分的なものであって、本来の耕地区画とは考え難い。また、検出された耕作痕部分以外は、その後の耕作深度が深くにまで及んでいるため、検出不可能であった。

耕作に伴う区画 (第21図)

1区画 調査区の南端に位置する。区画の形状等は不明。白色のAs-A軽石が純層に近い状態で1～2cmと薄く覆われた下面から、耕作痕が検出されている。耕作痕のあり方は、南北方向に2～3列ないし数列連続する間に、東西方向の耕作痕を1列ほど南北に施すといった、方向の異なる耕作痕が交互に現れている。

2区画 調査区の南側に位置する。区画の形状等は不明。白色のAs-A軽石が純層に近い状態で1～2cmと薄く覆われた下面から、疎らに耕作痕が検出されている。耕作痕のあり方は、その列が東西方向にあるようである。

D区

D区で検出された遺構は、溝のみである。畑ないし水田と考えられる区画や、土坑等の遺構は検出されていない。先のC区でもそうであったように、昭和40年代頃の土地改良整備により区画等の検出はできなかった。しかし、As-A軽石に埋もれた溝が検出されていることを考えれば、畑ないし水田と考えられる区画が存在していたと考えられる。(第22図)

溝

2号溝

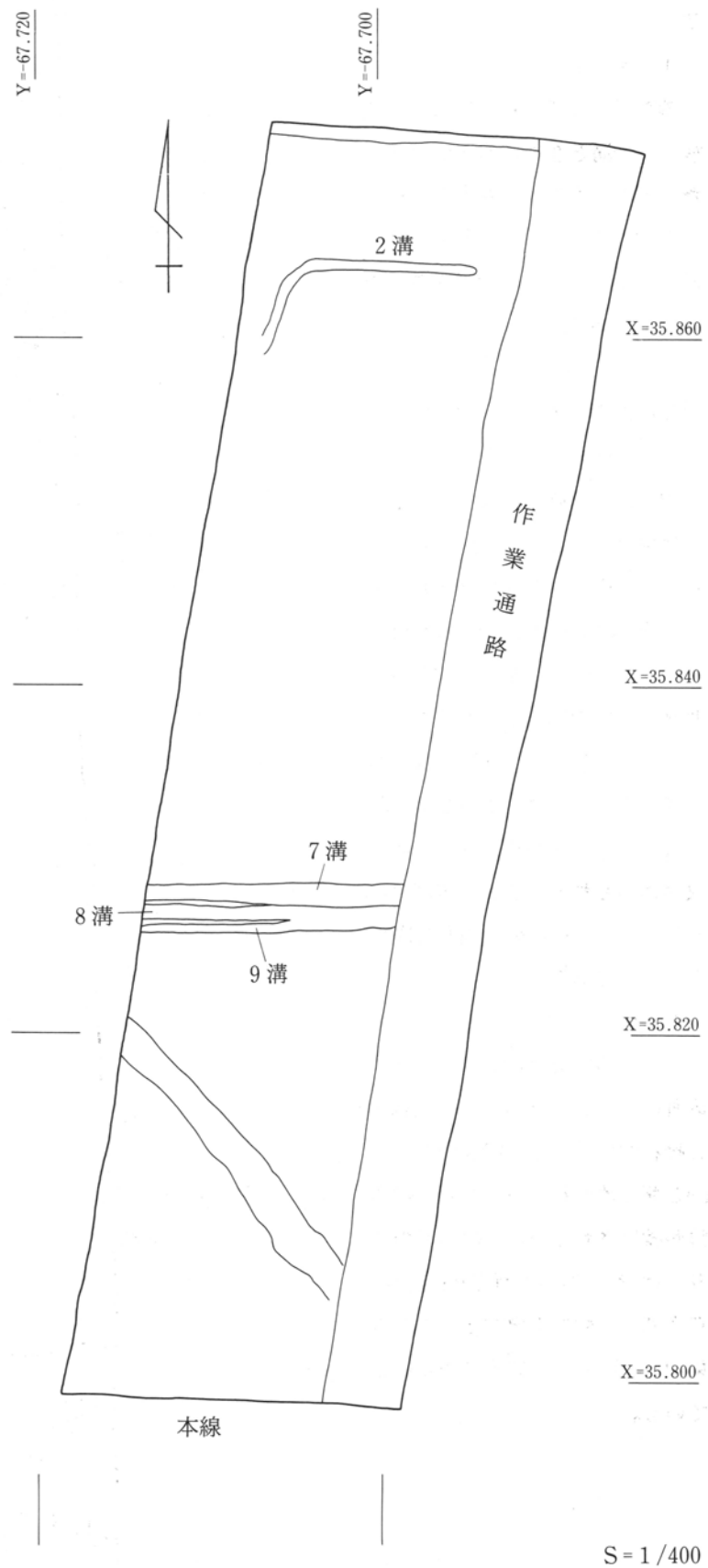
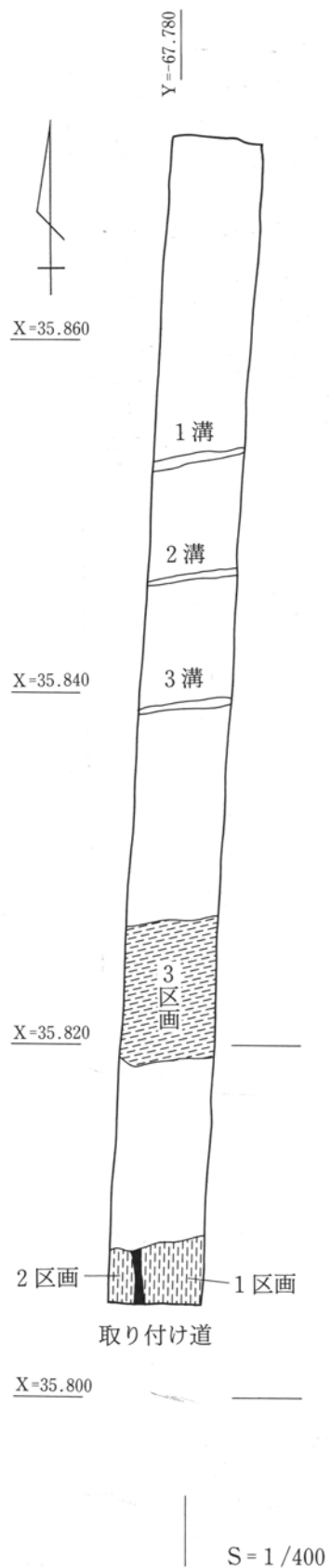
調査区の北側で、西際より北北東へ延びたのち、大きく東方向へ屈曲するように延びる。As-A軽石の純層とも考えられる軽石を覆土とし、他の混在土は含まない。溝の底面には、灰が薄く堆積していた。降下軽石により、埋没した溝の可能性が高い。

7～9号溝

調査区の中央付近で、東西方向に延びる溝である。この溝の延長は、東側の北関東調査分でも検出されている。溝の底面近くではAs-B軽石を含む暗灰色土を覆土とするが、溝の上位ではAs-A軽石を含む明灰色粘質土を覆土とし、土中にビニール等を混入させている。このことより、As-A軽石降下以前よりの溝であるとともに、As-A軽石降下後から近・現代に至る溝であることが理解できる。

D区取り付け道

検出された遺構には、溝、畑ないし水田と考えられる区画および耕作痕を持つ区画がある。検出された耕作痕部分以外は、その後の耕作深度が深くにまで及んでいるため、検出不可能であった。(第22図)



第22図 D区の遺構配置図(本線・取り付け道)

溝

1～3号溝

調査区の北側から1号溝、2号溝、3号溝と3本の溝が検出された。各溝ともに、東西方向に延びる溝である。堆積する覆土もほぼ同一な土で、As-A軽石を含む明灰色土である。

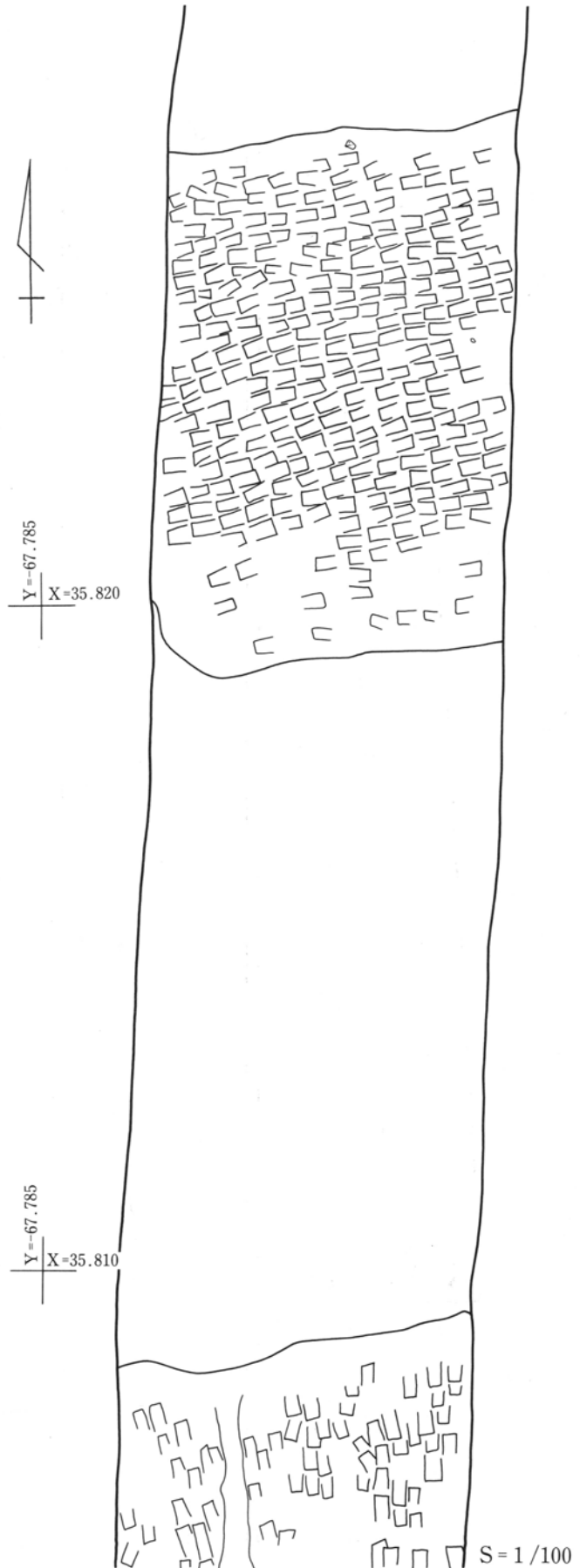
耕作に伴う区画 (第23図)

1・2区画

調査区の南側に位置する。1区画は東側で、2区画は西側としたが、この両区画の間には南北に延びる畦状の低い高まりが認められ、この畦によって区画境としている。北側および南側の区画境は不明。両区画内には、白色のAs-A軽石が純層に近い状態で1～2cmと薄く覆われた下面から、疎らに耕作痕が検出されている。耕作痕のあり方は、共にその列が南北方向にあるようである。

3区画

調査区の中央付近に位置する。区画の形状等は不明。白色のAs-A軽石が純層に近い状態で1～2cmと薄く覆われた下面から、耕作痕が検出されている。耕作痕のあり方は、その列が東西方向にあり、耕作列は2列を1単位としながら東向き・西向きの方向を繰り返している。



第23図 D区取り付け道 区画の耕作痕

E区

本調査区では、明確な遺構の検出は出来なかった。溝1条のみである。先のC・D区でもそうであったように、昭和40年代頃の土地改良整備によるためと思われる。しかし、周辺の調査区の状況からすれば、畑ないし水田と考えられる区画が存在していたと考えられる。(第24図)

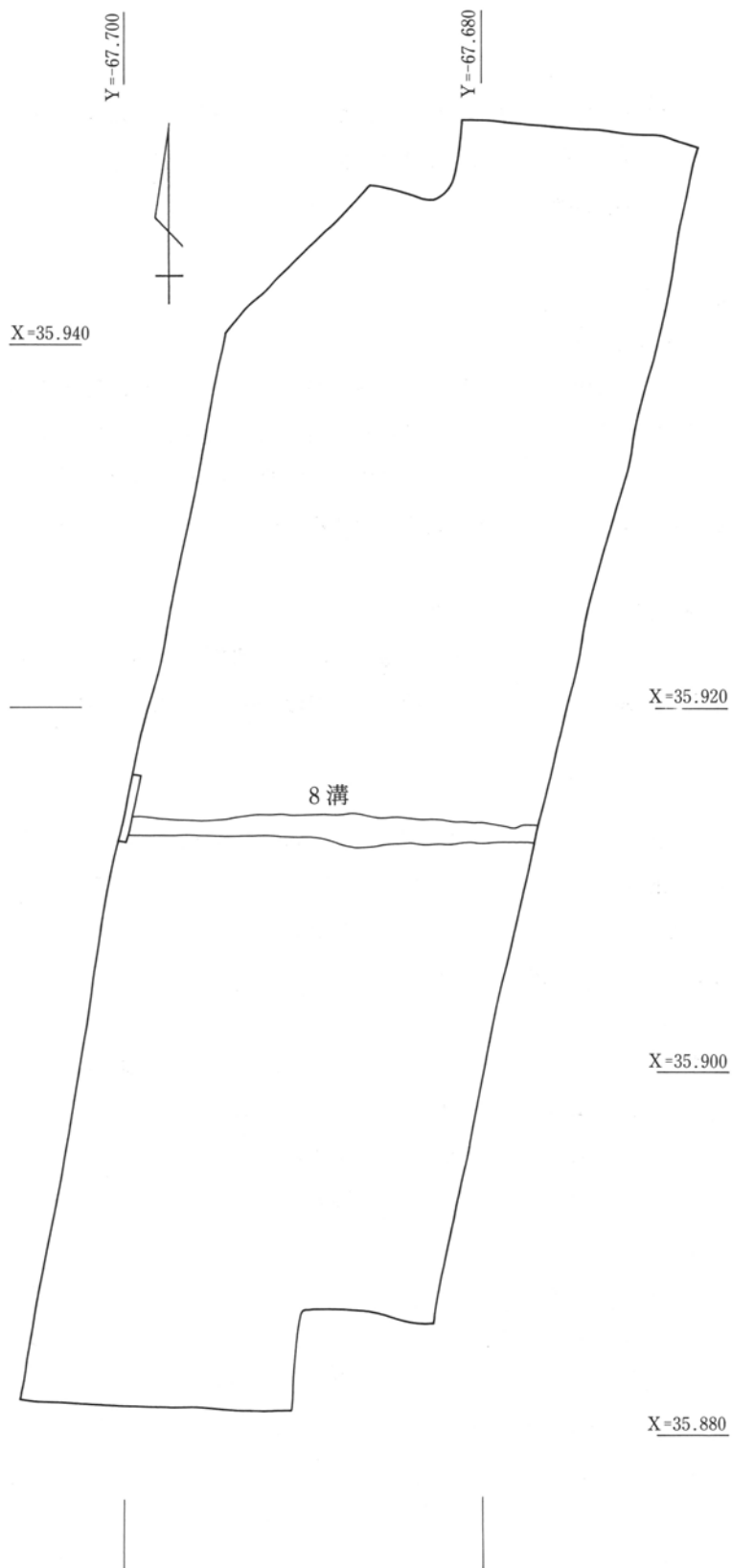
溝

8号溝

調査区の中央付近に位置し、東西方向に延びる溝である。この溝の延長は、東側の北関東調査分でも検出されている。

E区取り付け道

本調査区では、明確な遺構の検出は出来なかった。



第24図 E区の遺構配置図(本線)

F区

F区で検出された遺構には、溝、畑ないし水田と考えられる区画および耕作痕を持つ区画がある。また、これらの各区画は、溝および畦状の低い高まりによって区画されている状況がみられる。区画数は、13区画である。(第25図)

溝

1・3号溝

調査区の中央付近に位置し、東西方向に伸びる溝であるが、やや南東方向に傾く。この溝の延長は、東側の北関東調査分でも検出されている。溝の北・南の両側には、溝に沿う畦状の高まりが検出されている。こうした状況から、周囲に広がる区画と同時期に存在していたと考えられ、堆積土からは近・現代まで続いた溝であることが解る。当然、水田耕作に関わる水路と考えられよう。遺物等の出土はない。

耕作に伴う区画 (第26～29図)

検出された区画は、13区画ある。この内、明瞭な耕作痕を伴う区画には7～9区画があり、疎らな耕作痕を残す区画に13区画がある。他の区画では、耕作痕は検出されなかった。なお、区画の呼称については調査時の番号を優先している。

1区画

調査区の南端で、西端に位置する。区画の形状は、長軸を南北方向に持つ長方形を呈するものと考えられる。区画の面積は、調査範囲内で84.46㎡を計測することができる。区画の北側は2区画と接するが、畦状の高まりによって区画が画される。東側は3・4区画と接するが、両区画との境は畦状の高まりによって区画されている。区画内からは、耕作痕等は検出されていない。

2区画

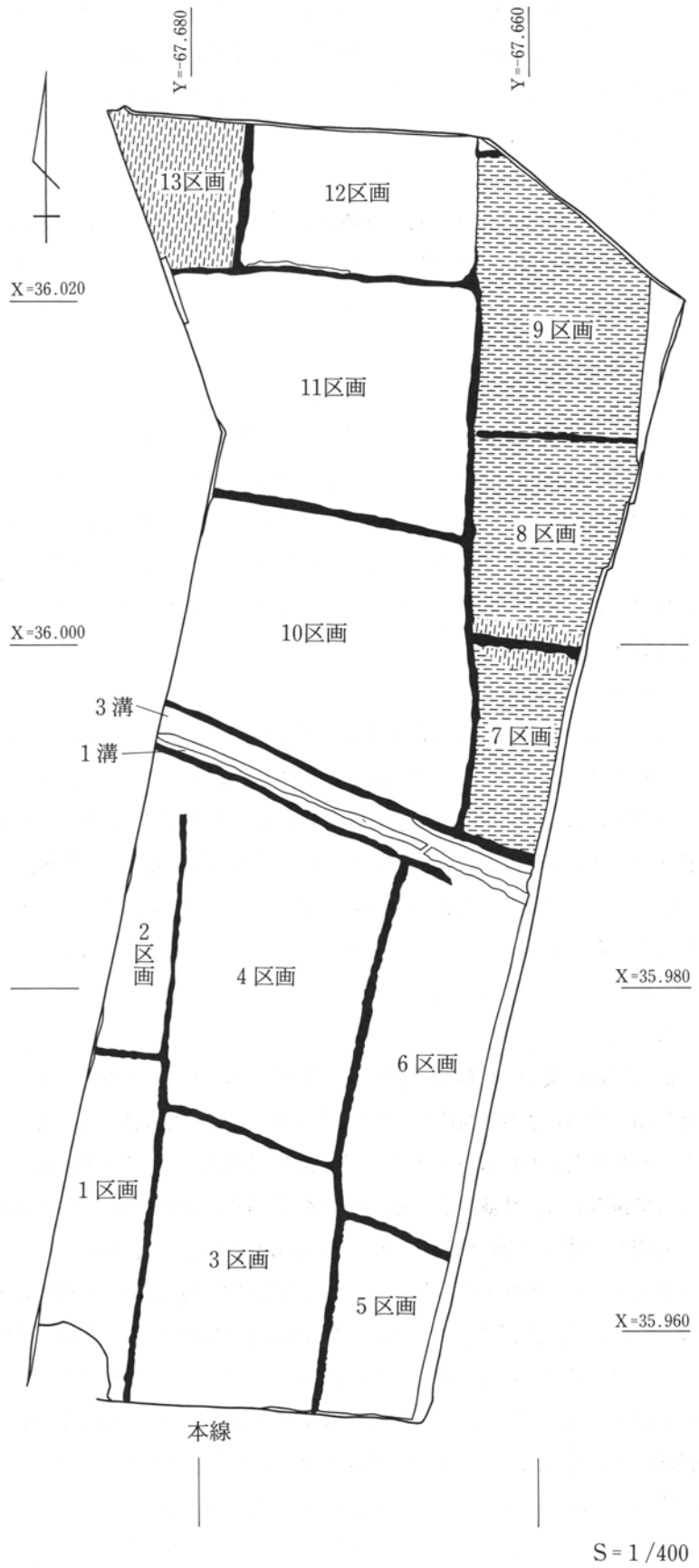
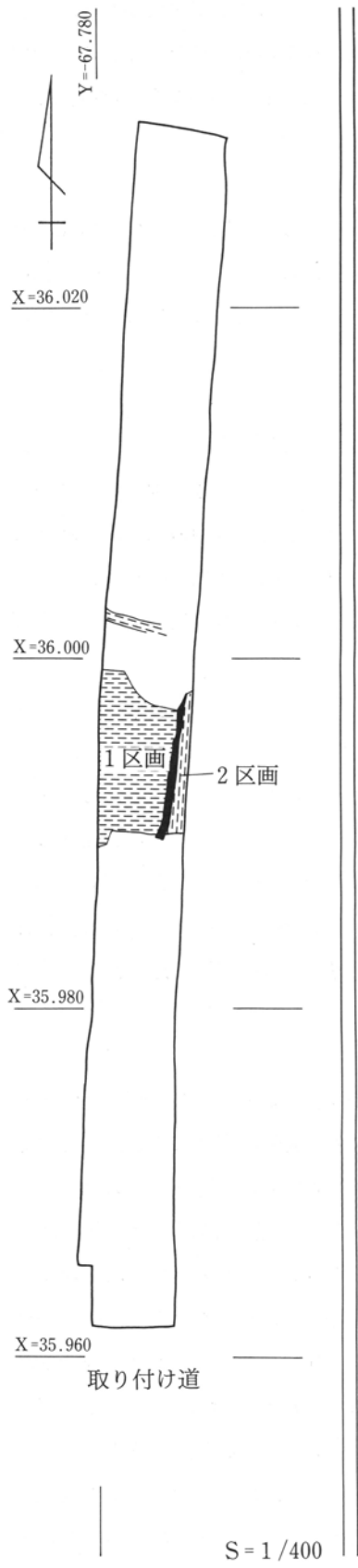
調査区の南側で、西端に位置する。区画の形状は、長軸を南北方向に持つ長方形を呈するものと考えられる。区画の面積は、調査範囲内で50.53㎡を計測することができる。区画の北側は、畦状の高まりと1号溝によって区画される。東側は4区画と接するが、畦状の高まりによって区画が画される。南側は1区画と接するが、畦状の高まりによって区画が画されている。区画内からは、耕作痕等は検出されていない。

3区画

調査区の南端で、中央に位置する。区画の形状は、長軸を南北方向に持つ長方形を呈するものと考えられる。区画の面積は、調査範囲内で169.46㎡を計測することができる。区画の北側は4区画と接するが、畦状の高まりによって区画が画される。東側は5・6区画と接するが、両区画との境は畦状の高まりによって区画される。西側は1区画と接するが、畦状の高まりによって区画が画されている。区画内からは、耕作痕等は検出されていない。

4区画

調査区の南側で、中央に位置する。本調査区内で、区画の全体が明確となった唯一の区画である。区画の形状は、長軸を南北方向に持ち、概ね長方形を呈している。区画の北にある1号溝の走向に規制されてか、北辺と南辺がやや南東方向に傾いている。長軸18.5m、短軸11.5mを測る。区画の面積は、217.76㎡を計測することができる。区画の北側は、畦状の高まりと1号溝によって区画される。東側は6区画と接するが、



第25図 F区の遺構配置図(本線・取り付け道)

畦状の高まりによって区画が画される。南側は3区画と接するが、畦状の高まりによって区画が画される。東側は1・2区画と接するが、両区画との境は畦状の高まりによって区画されている。また、2区画との境となる畦の一部が空く部分があるが、水口と考えるかは判然としない。区画内からは、耕作痕等は検出されていない。

5 区画

調査区の南端で、東端に位置する。区画の形状は、長軸を南北方向に持つ長方形を呈するものと考えられる。区画の面積は、調査範囲内で62.06m²を計測することができる。区画の北側は6区画と接するが、畦状の高まりによって区画が画される。西側は3区画と接するが、畦状の高まりによって画されている。区画内からは、耕作痕等は検出されていない。

6 区画

調査区の南側で、東端に位置する。区画の形状は、長軸を南北方向に持ち、概ね長方形を呈しているものと考えられる。先の4区画と同様に、区画の北にある1号溝の走向に規制されてか、北辺と南辺がやや南東方向に傾いている。区画の面積は、調査範囲内で146.16m²を計測することができる。区画の北側は、畦状の高まりと1号溝によって区画される。西側は3・4区画と接するが、両区画との境は畦状の高まりによって区画される。南側は5区画と接するが、畦状の高まりによって区画が画されている。区画内からは、耕作痕等は検出されていない。

7 区画

調査区の中央で、東端に位置する。区画の形状は、方形を呈しているものと考えられるが不明。南北方向は12mを測る。区画の面積は、調査範囲内で57.36m²を計測することができる。区画の南側は、畦状の高まりと3号溝によって区画される。西側は10区画と接するが、畦状の高まりによって区画が画される。北側は8区画と接するが、畦状の高まりによって区画が画されている。区画内からは、白色のAs-A軽石が純層に近い状態で4~5cm覆われた下面から、鋤ないしエンガ等によると考えられる耕作痕が検出されている。耕作痕はやや疎ら気味であるが、その耕作痕の列は東西方向となる。また、北辺際については、辺に直行するような形で耕作痕が施されている。

8 区画

調査区の中央で、東端に位置する。区画の形状は、方形を呈しているものと考えられるが不明。南北方向は12mを測る。区画の面積は、調査範囲内で98.73m²を計測することができる。区画の南側は7区画と接するが、畦状の高まりによって区画が画される。西側は10・11区画と接するが、両区画との境は畦状の高まりによって画される。北側は9区画と接するが、畦状の高まりによって画されている。区画内からは、白色のAs-A軽石が純層に近い状態で4~5cm覆われた下面から、鋤ないしエンガ等によると考えられる耕作痕が検出されている。耕作痕は北側でやや疎ら気味であるが、その耕作痕の列は東西方向となる。また、南辺際については、辺に直行するような形で耕作痕が施されている。なお、区画内の南東隅における土層の堆積状況を示した第27図からは、耕具が左右斜めにあったことが明瞭であり、これにより起こされた土(As-A軽石降下以前の水田耕作土)が純層に近いAs-A軽石を挟んで耕作痕面の上位にあることが明白である。つまり、耕作痕面を覆うAs-A軽石は、降下による純堆積層ではなく、降下後の耕作(復旧作業)の結果であり、耕作痕の存在は耕作土の「起返し」(耕地の復旧作業の方法の一つで、「天地返し」あるいは「鋤込み」といった作業と同じ)を行った痕跡である。

9 区画

調査区の北側で、東端に位置する。区画の形状は、長軸を南北方向に持ち、概ね長方形を呈しているものと考えられる。南北方向は16mを測る。区画の面積は、調査範囲内で132.83㎡を計測することができる。区画の南側は8区画と接するが、畦状の高まりによって区画が画される。西側は11・12区画と接するが、両区画との境は畦状の高まりによって画される。僅かであるが、北側も畦状の高まりによって画されている。区画内からは、白色のAs-A軽石が純層に近い状態で4～5cm覆われた下面から、鋤ないしエンガ等によると考えられる耕作痕が検出されている。区画の中央部が、やや疎らである。耕作痕の列は東西方向となる。耕作痕を微細に観察すると、耕作痕の刃先の状態から、水平に近いやや斜めの角度で耕具が使用されたようであり、耕具にはエンガが使用された可能性が極めて高い。また、耕作方向には、1列ないし2列を単位として、逆方向に起返しを繰り返している状況が解る。

10区画

調査区の中央で、中央から西端へかけて位置する。区画の形状は、長軸を東西方向に持ち、概ね長方形を呈している。区画の南にある3号溝の走向に規制されてか、北辺と南辺がやや南東方向に傾いている。短軸方向の最長となる東辺で16mを測る。区画の面積は、調査範囲内で244.62㎡を計測することができる。区画の南側は、畦状の高まりと3号溝によって区画される。東側は7・8区画と接するが、両区画との境は畦状の高まりによって画される。北側は11区画と接するが、畦状の高まりによって区画が画されている。区画内からは、耕作痕等は検出されていない。

11区画

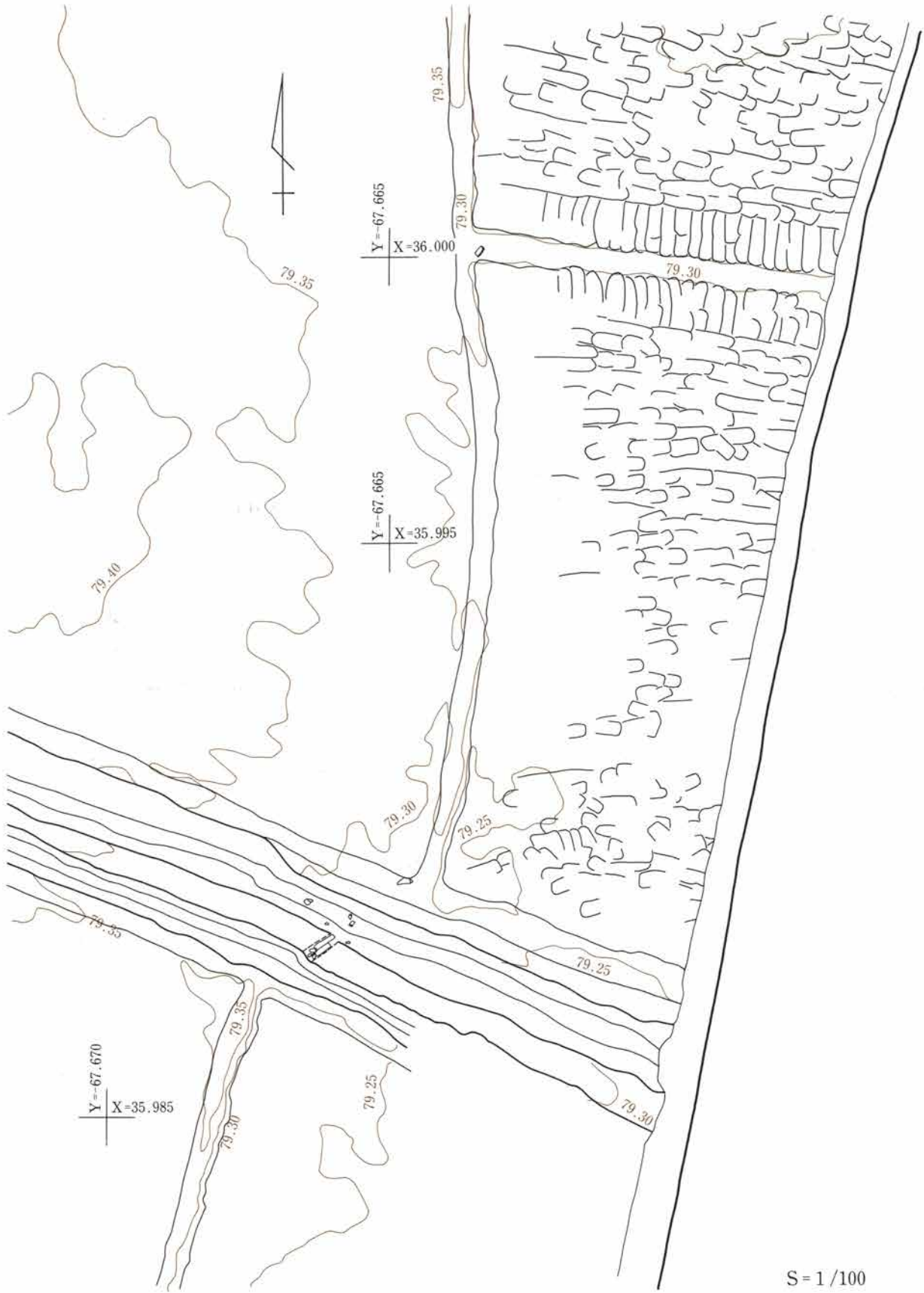
調査区の北側で、中央から西端へかけて位置する。区画の形状は、長軸を東西方向に持ち、概ね長方形を呈しているものと考えられる。南辺がやや南東方向に傾いており、このため短軸方向の最長となる東辺で14mを測る。区画の面積は、調査範囲内で213.23㎡を計測することができる。区画の南側は10区画と接するが、畦状の高まりによって区画が画される。東側は8・9区画と接するが、両区画との境は畦状の高まりによって画される。北側も12・13区画と接するが、両区画との境は畦状の高まりによって画されている。区画内からは、耕作痕等は検出されていない。

12区画

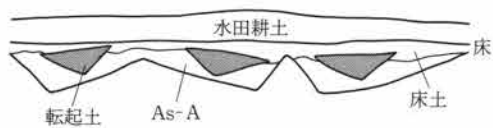
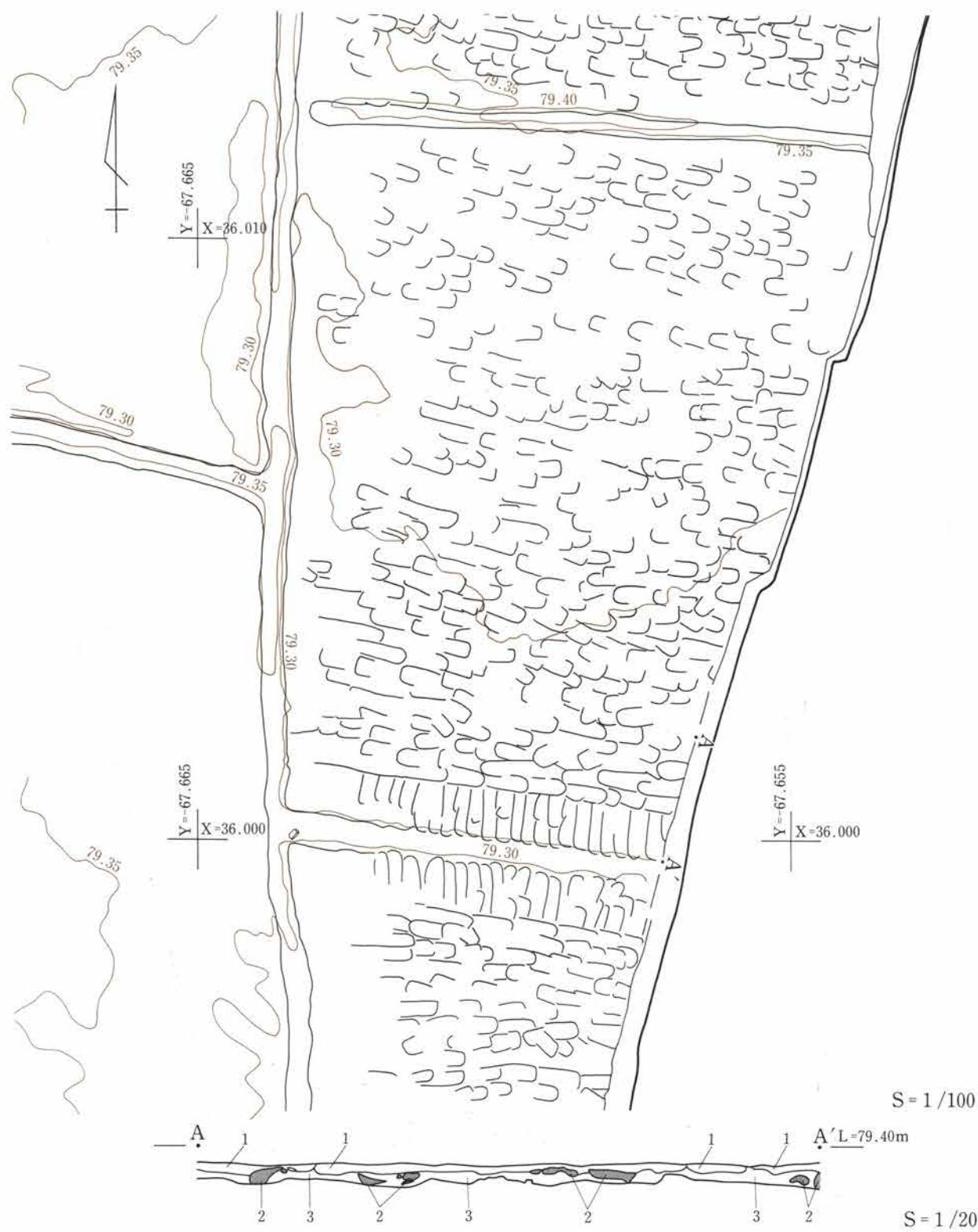
調査区の北端で、中央から西側へかけて位置する。区画の形状は、方形を呈すると思われるが、詳細は不明。区画の面積は、調査範囲内で110.93㎡を計測することができる。区画の南側は11区画と接するが、畦状の高まりによって区画が画される。東側は9区画と接するが、畦状の高まりによって区画が画される。西側は13区画と接するが、畦状の高まりによって区画が画されている。区画内からは、耕作痕等は検出されていない。

13区画

調査区の北端で、西端隅に位置する。区画の形状は、方形を呈すると思われるが、詳細は不明。区画の面積は、調査範囲内で53.83㎡を計測することができる。区画の南側は11区画と接するが、畦状の高まりによって区画が画される。東側は12区画と接するが、畦状の高まりによって区画が画されている。区画内には、疎らではあるが耕作痕が僅かに検出されている。僅かに残存する刃先の方向から、耕作痕の列は南北方向となるようである。

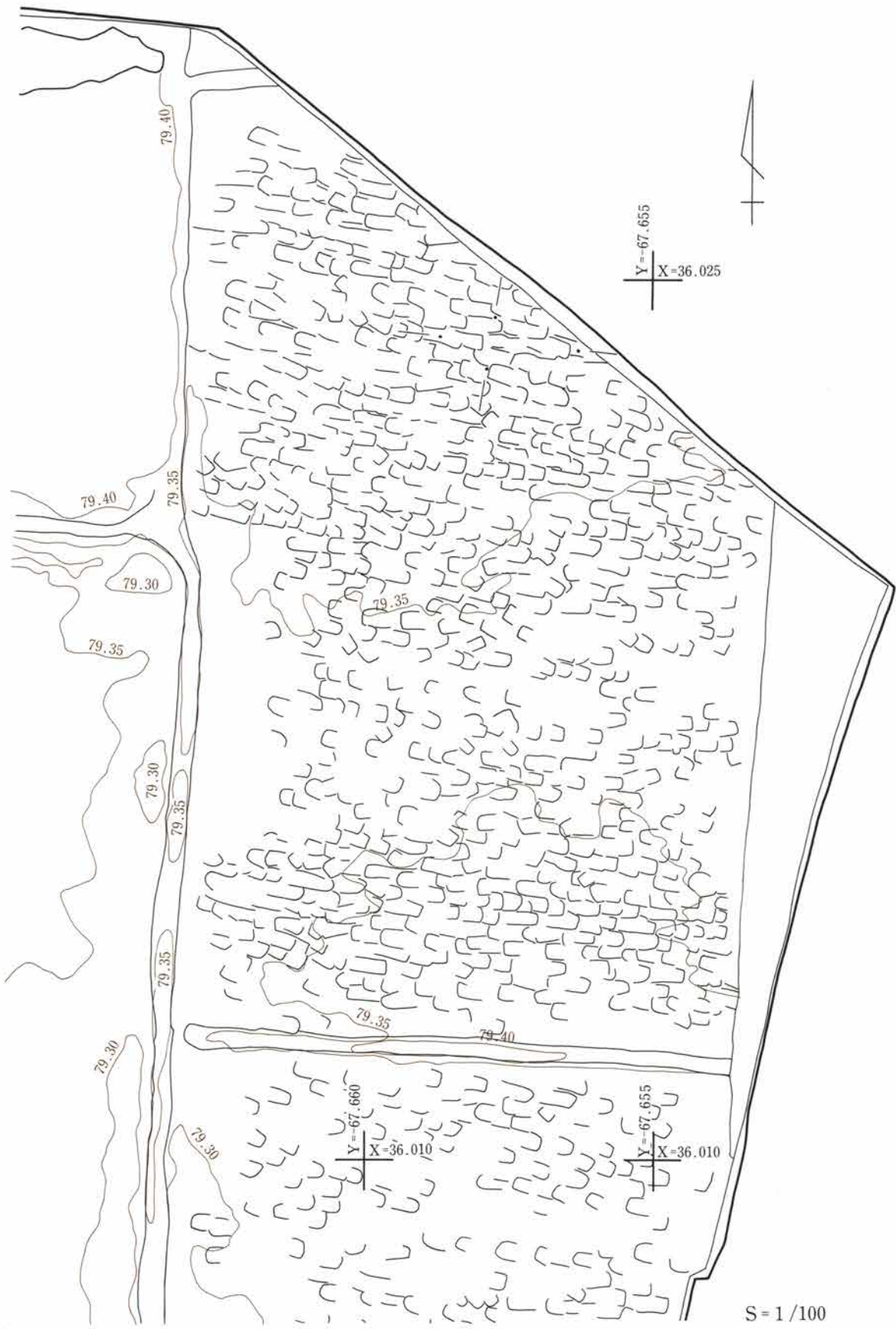


第26図 F区 7区画の耕作痕

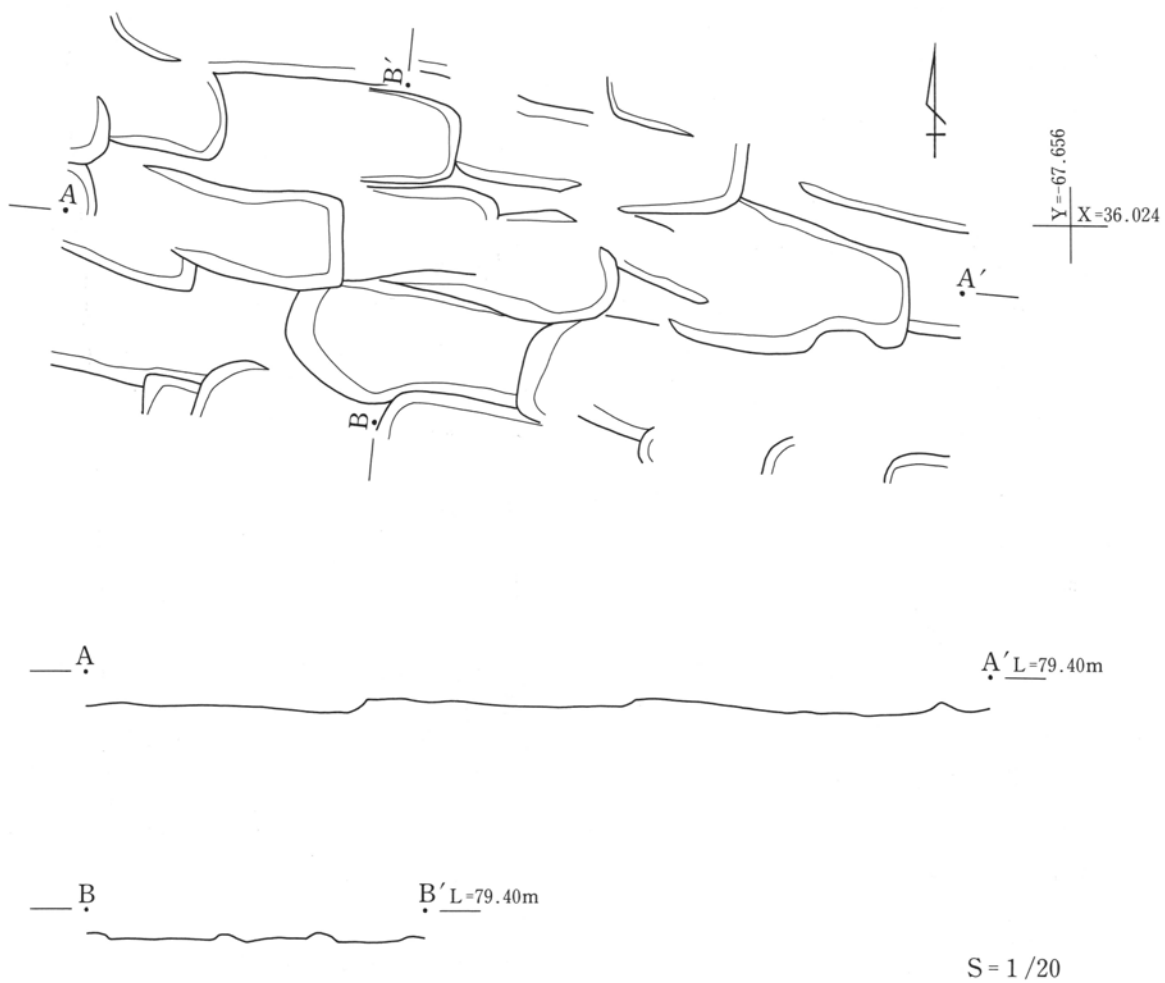


- 1層 ぶい黄褐色粘質土 As-A軽石を僅かに含む。
- 2層 ぶい黄褐色粘質土 As-A軽石を含まない。
- 3層 As-A軽石 純層に近い軽石である。

第27図 F区 8区画の耕作痕と土層断面



第28図 F区 9区画の耕作痕



第29図 F区 9区画の耕作痕拡大図と断面

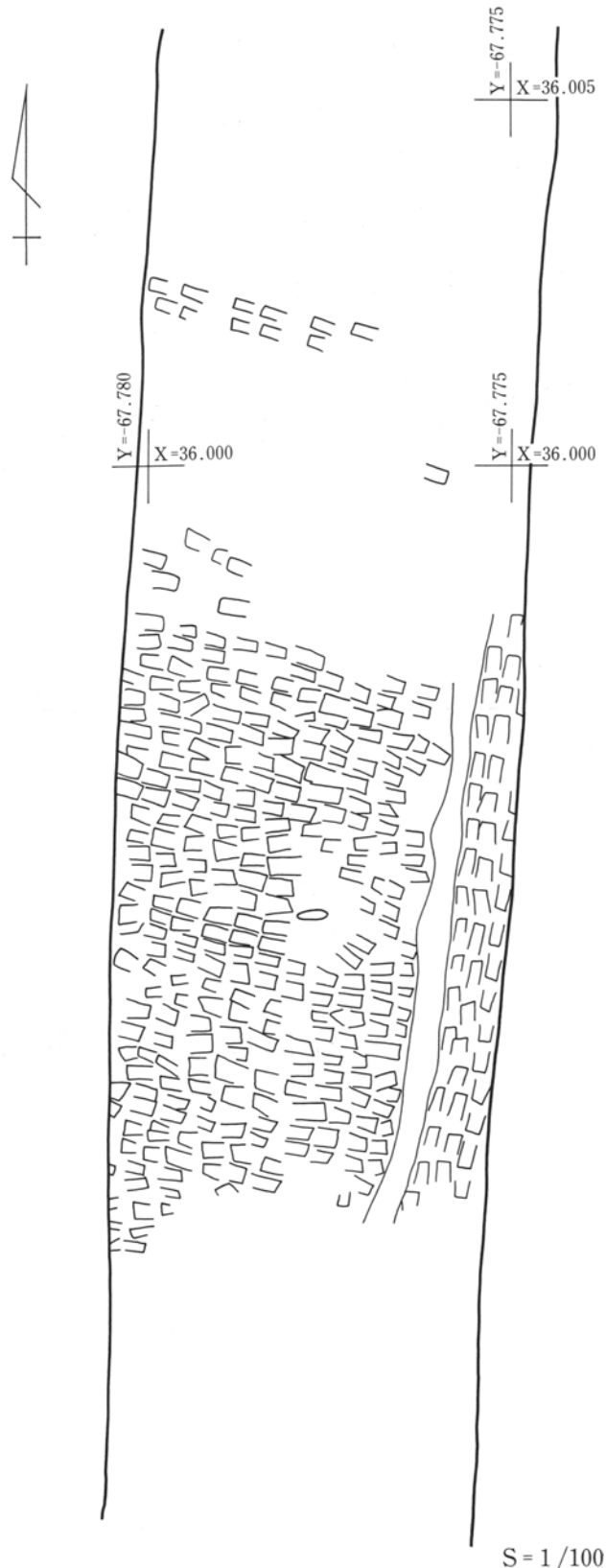
F区取り付け道

検出された遺構には、溝、畑ないし水田と考えられる区画および耕作痕を持つ区画がある。検出された耕作痕部分以外は、その後の耕作深度が深くにまで及んでいるため、検出不可能であった。(第25図)

耕作に伴う区画 (第30図)

1・2区画

調査区のほぼ中央に位置する。1区画は西側で、2区画は東側としたが、この両区画の間には南北に延びる畦状の低い高まりが認められ、この畦によって区画境としている。北側および南側の区画境は不明。両区画内には、白色のAs-A軽石が純層に近い状態で1~2cmと薄く覆われた下面から、疎らに耕作痕が検出されている。西側の1区画では耕作痕の列が東西方向を向いているのに対し、東側の2区画では南北方向にある。また、両区画の耕作痕列は、共に2列を1単位として耕作方向を逆にしていることが観察できる。



第30図 F区取り付け道 区画の耕作痕

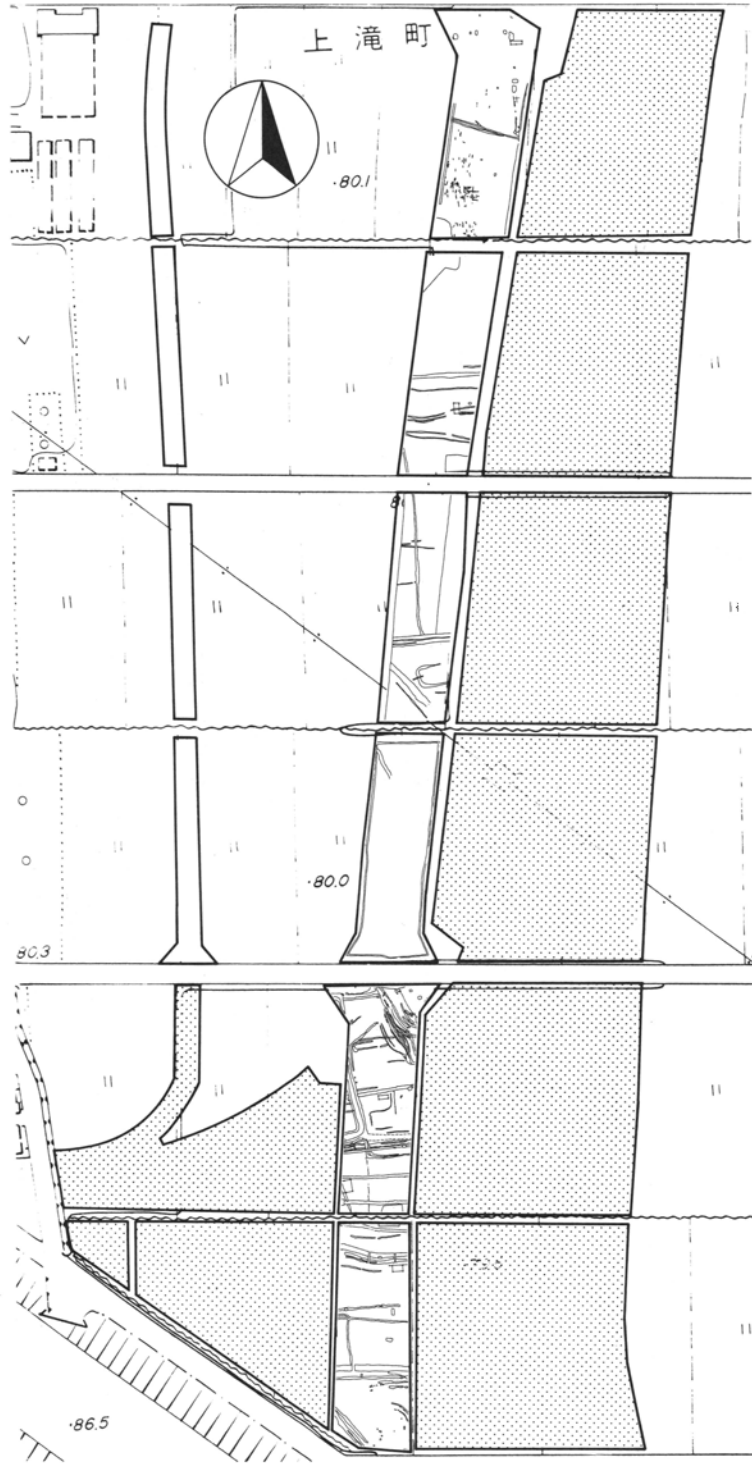
第3節 第2面の遺構（中世面）

先の近世面に続き、第2面は中世面となる。本項で言う中世面とは、天仁元（1108）年の噴火とされる浅間山を給源としたAs-B軽石降下以降で、天明三（1783）年の浅間山噴火に伴うAs-A軽石降下以前までを扱うこととした。つまり、As-B軽石混土を覆土とした遺構を対象とした調査である。

調査の際には、As-B軽石層の上位層の下面を確認面としたが、調査区の堆積状況によってはAs-B軽石層下面となる第3面の平安面の調査と併せて検出した状況がある。特に、C区においてはAs-B軽石層の堆積もなかったことから、本節で扱うべき遺構が後述する第4面の項で扱うといった齟齬をきたしている点も生じている。

検出された各遺構には、B区において館跡の堀が検出され、各区からは掘立柱建物、土坑、井戸、溝等の遺構が検出されたほか、F区からは耕作痕と思われる痕跡が検出されている。

以下、各区ごとに説明するとおりである。



第31図 第2面の全体図

S = 1 / 2500

A区

A区で検出された遺構には、掘立柱建物1棟、土坑33基、溝等がある。各遺構の説明は、以下の通りである。(第32図)

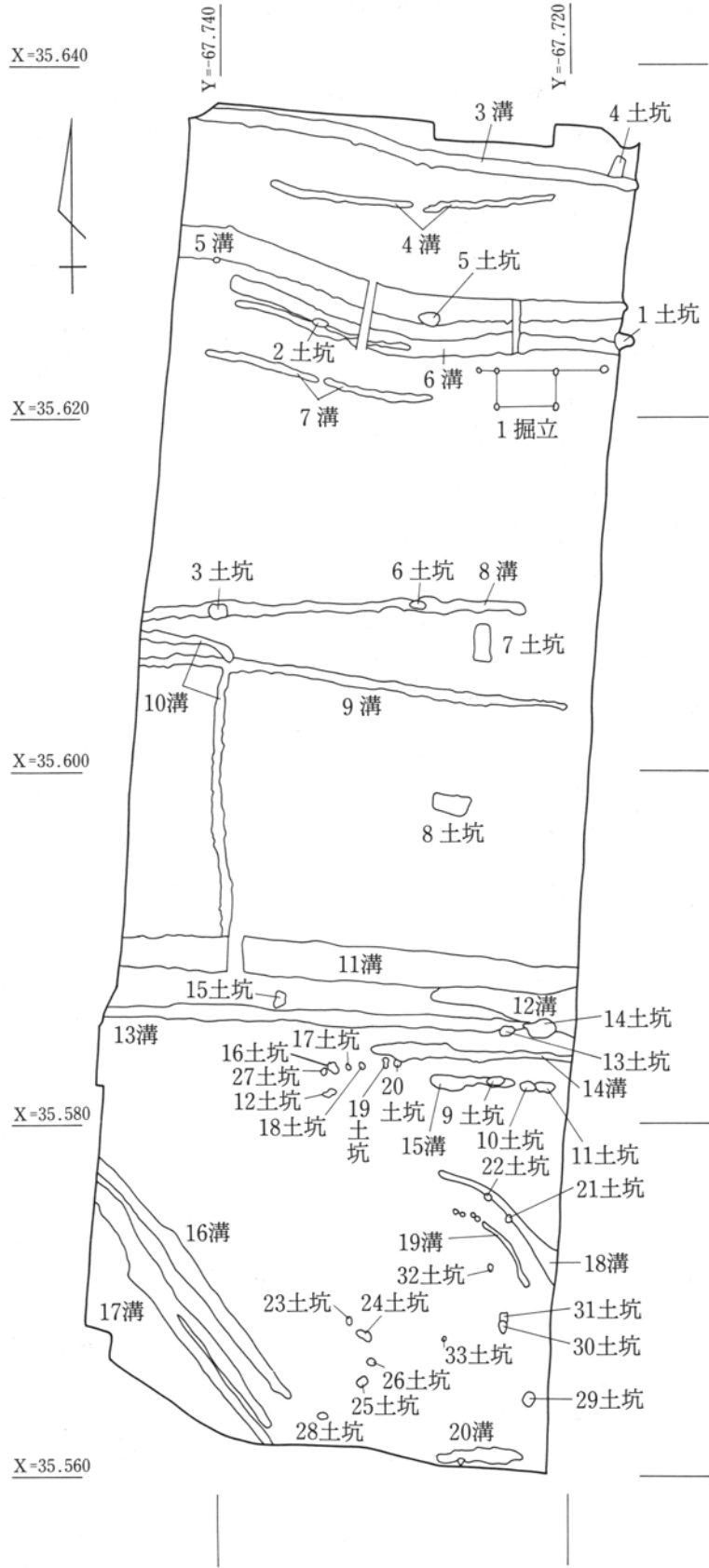
掘立柱建物 (第33図)

1号掘立柱建物

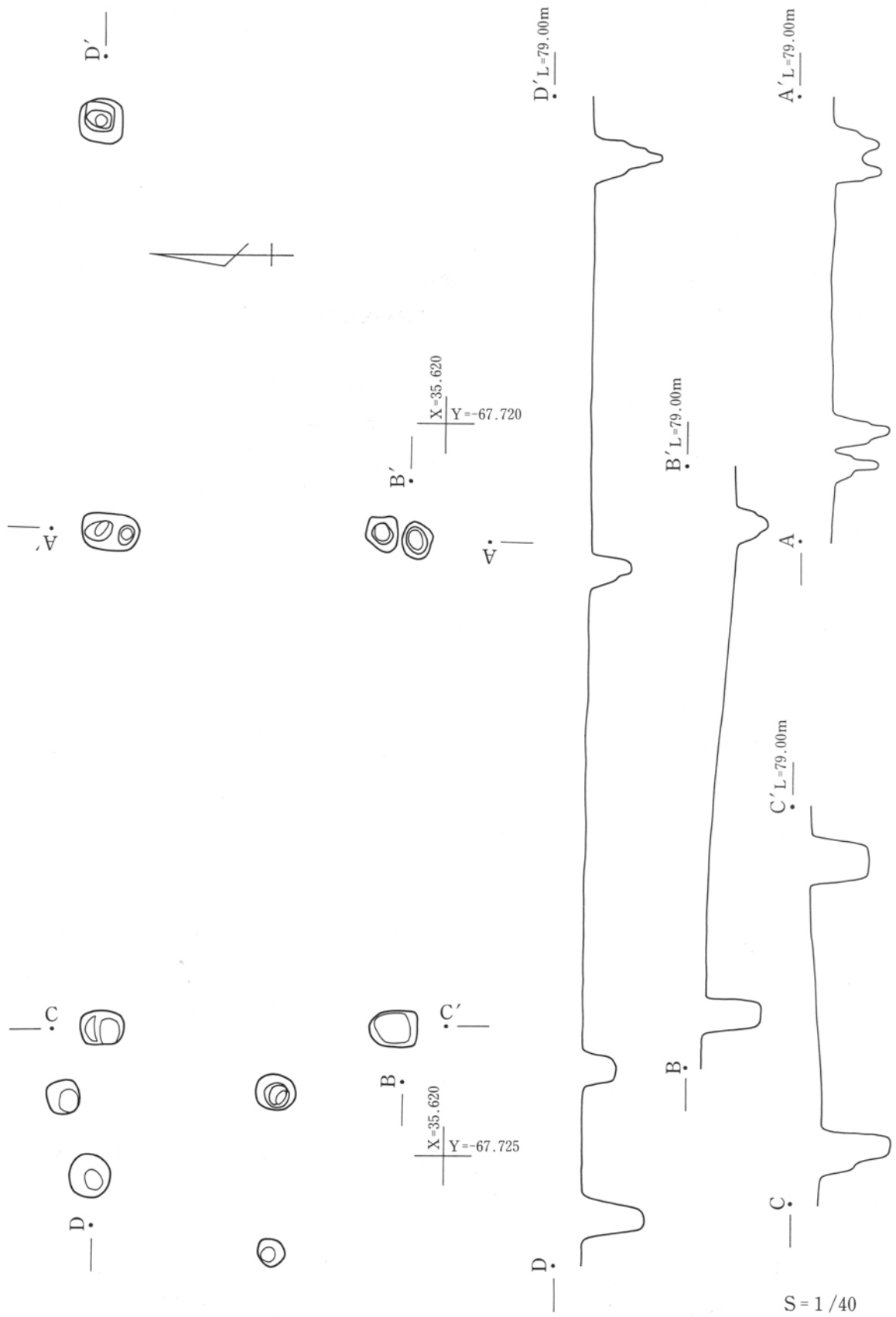
位置 A区の北側で東寄りであり、X=35.621、Y=-67.722に位置する。

規模 2間(6.1m)×1間(2.1m)の長方形となる建物であり、桁行方向をほぼ東西にとる。

概要 併走する5・6号溝の南側で、建物の方向が溝方向とほぼ一致するように所在する。調査の結果、東南角の柱穴は検出されていない。また、西側には1.0mほどの短い間の柱穴が検出されており、本建物に付随するものと考えられる。桁行方向の西側の間と東側の間とでは、西側が3.35mの間であるのに対し、東側では1.75mとやや短い。さらに、西側の柱穴は、四隅が2穴で対をなしている。各柱穴内には、As-B軽石を含む褐色土を覆土としている。



第32図 A区の遺構配置図(本線)



第33图 A区 1号掘立柱建物

土坑 (第34～36図)

1号土坑

位置 A区の北側で東壁際にあり、 $X=35.624$ 、 $Y=-67.717$ に位置する。

規模 長方形を呈し、長軸方向を東西にもち、長軸1.0m、短軸60cm、深さ1.25mを測る。

概要 6号溝と重複すると思われるが、その新旧関係については不明。底面は平坦で、長方形を呈する。遺物の出土はない。

2号土坑

位置 A区の北側でやや西寄りにあり、 $X=35.625$ 、 $Y=-67.734$ に位置する。

規模 楕円形を呈し、長軸方向を東南東にもち、長軸85cm、短軸50cm、深さ30cmを測る。

概要 東西方向に延びる6号溝と重複するが、その新旧関係については不明。遺物の出土はない。

3号土坑

位置 A区の中央で西寄りにあり、 $X=35.609$ 、 $Y=-67.740$ に位置する。

規模 楕円形を呈し、長軸方向を東南にもち、長軸1.1m、短軸80cm、深さ30cmを測る。

概要 東西方向に延びる8号溝と重複するが、その新旧関係については不明。出土遺物には、須恵器片がある。

4号土坑

位置 A区の北端で東壁寄りにあり、 $X=35.634$ 、 $Y=-67.717$ に位置する。

規模 長方形を呈し、長軸方向を北北東にもち、長軸(1.1m)、短軸75cm、深さ10cmを測る。

概要 東西方向に延びる3号溝と重複するが、その新旧関係については不明。出土遺物には、須恵器・土師器の細片がある。

5号土坑

位置 A区の北側で中央にあり、 $X=35.625$ 、 $Y=-67.728$ に位置する。

規模 楕円形を呈し、長軸方向を東西にもち、長軸1.2m、短軸75cm、深さ50cmを測る。

概要 東西方向に延びる5号溝と6号溝の間にあり、As-B軽石を含む褐色土を覆土とする。遺物の出土はない。

6号土坑

位置 A区のほぼ中央にあり、 $X=35.609$ 、 $Y=-67.729$ に位置する。

規模 楕円形を呈し、長軸方向を東西にもち、長軸1.05m、短軸55cm、深さ15cmを測る。

概要 東西方向に延びる8号溝と重複するが、その新旧関係については不明。遺物の出土はない。

7号土坑

位置 A区の中央でやや東寄りにあり、 $X=35.607$ 、 $Y=-67.725$ に位置する。

規模 長方形を呈し、長軸方向を南北にもち、長軸2.0m、短軸1.0m、深さ70cmを測る。

概要 東西方向に延びる8号溝と9号溝の間にあり、As-B軽石を含む黒褐色土を覆土の主体とする。遺物の出土はない。

8号土坑

位置 A区の中央でやや東寄りにあり、 $X=35.598$ 、 $Y=-67.727$ に位置する。

規模 長方形を呈し、長軸方向を東南東にもち、長軸2.0m、短軸1.0m、深さ50cmを測る。

概要 As-B軽石を含む黒褐色土を覆土の主体とし、覆土・規模ともに7号土坑に類似するが、底面規模

が小さい点で異なる。壁も、底面から直立気味であったのが、途中から大きく広がる。出土遺物には、土師器の細片がある。

9号土坑

位置 A区の南側でやや東寄りにあり、X=35.583、Y=-67.724に位置する。

規模 楕円形を呈し、長軸方向を東西にもち、長軸85cm、短軸45cm、深さ45cmを測る。

概要 東西方向に延びる3号溝と重複するが、その新旧関係については不明。As-B軽石を含む覆土である。遺物の出土はない。

10号土坑

位置 A区の南側でやや東寄りにあり、X=35.583、Y=-67.723付近に位置する。

規模 楕円形を呈し、長軸方向を東西にもち、長軸75cm、短軸60cm、深さ20cmを測る。

概要 11号土坑の西側に隣接し、As-B軽石を含む褐色土を覆土とする。遺物の出土はない。

11号土坑

位置 A区の南側でやや東寄りにあり、X=35.582、Y=-67.721付近に位置する。

規模 楕円形を呈し、長軸方向を東西にもち、長軸1.1m、短軸50cm、深さ13cmを測る。

概要 10号土坑の東側に隣接し、As-B軽石を含む褐色土を覆土とする。遺物の出土はない。

12号土坑

位置 A区の南側中央のやや北寄りにあり、X=35.582、Y=-67.734付近に位置する。

規模 楕円形を呈し、長軸方向を東北東にもち、長軸65cm、短軸40cm、深さ18cmを測る。

概要 やや小さめで、底面に段差をもつ。粘性の強い黒褐色土を主体に覆土とする。出土遺物には、土師器の坏の細片がある。

13号土坑

位置 A区の南側で東寄りにあり、X=35.585、Y=-67.724付近に位置する。

規模 不整な円形を呈し、径75cm、深さ10cmほどを測る。

概要 東西方向に延びる13号溝と重複するが、その新旧関係については堆積土から本土坑の方が新しく、13号溝が古い。本土坑の覆土は、As-B軽石を含む褐色土を主体とする。遺物の出土はない。

14号土坑

位置 A区の南側で東寄りにあり、X=35.585、Y=-67.722付近に位置する。

規模 長方形を呈し、長軸方向を東西にもち、長軸1.2m、短軸80cm、深さ7~15cmを測る。

概要 東西方向に延びる13号溝と重複するが、その新旧関係については堆積土から本土坑の方が新しく、13号溝が古い。本土坑の覆土は黒褐色土を主体とし、底面に凹凸を持つ。遺物の出土はない。

15号土坑

位置 A区の南側中央のやや北寄りにあり、X=35.587、Y=-67.736付近に位置する。

規模 不整な方形を呈し、長軸方向を南北にもち、長軸85cm、短軸65cm、深さ10cmほどを測る。

概要 東西方向に延びる11号溝と13号溝の間にあり、褐灰色土を覆土とする。遺物の出土はない。

16号土坑

位置 A区の南側で中央にあり、X=35.584、Y=-67.734付近に位置する。

規模 円形ないし楕円形を呈し、径40cm、深さ10cmほどを測る。

概要 2個のピットからなるものとも考えられ、褐灰色土を覆土とする。遺物の出土はない。

17号土坑

位置 A区の南側で中央にあり、 $X=35.584$ 、 $Y=-67.733$ 付近に位置する。

規模 円形を呈し、径35cm、深さ5cmほどを測る。

概要 土坑というよりはピット状のもので、16号土坑と同様な褐灰色土を覆土とする。遺物の出土はない。

18号土坑

位置 A区の南側で中央にあり、 $X=35.584$ 、 $Y=-67.732$ 付近に位置する。

規模 円形を呈し、径45cm、深さ5cmほどを測る。

概要 土坑というよりはピット状で、16・17号土坑と同様な褐灰色土を覆土とする。遺物の出土はない。

19号土坑

位置 A区の南側で中央にあり、 $X=35.584$ 、 $Y=-67.730$ 付近に位置する。

規模 楕円形を呈し、長軸65cm、短軸45cm、深さ10cmを測る。

概要 16～18号土坑よりやや大きめであるが、同様な褐灰色土を覆土とする。遺物の出土はない。

20号土坑

位置 A区の南側で中央にあり、 $X=35.584$ 、 $Y=-67.730$ に位置する。

規模 円形を呈し、径30cm、深さ5cmほどを測る。

概要 14号溝と重複するが、新旧は不明。16～19号土坑と同様な褐灰色土を覆土とし、土師器の細片を出土させている。

21号土坑

位置 A区の南側で東寄りにあり、 $X=35.575$ 、 $Y=-67.724$ 付近に位置する。

規模 円形を呈し、径40cm、深さ25cmを測る。

概要 土坑というよりはピットである。18号溝と重複するが、新旧は不明。As-B軽石を含む黒褐色土を覆土とする。遺物の出土はない。

22号土坑

位置 A区の南側で東寄りにあり、 $X=35.576$ 、 $Y=-67.725$ 付近に位置する。

規模 円形を呈し、径40cm、深さ20cmを測る。

概要 土坑というよりはピットである。18号溝と重複するが、新旧は不明。21号土坑と同様な褐色土を覆土とする。遺物の出土はない。

23号土坑

位置 A区の南側で中央にあり、 $X=35.570$ 、 $Y=-67.732$ 付近に位置する。

規模 楕円形を呈し、長軸60cm、短軸40cm、深さ10cmほどを測る。

概要 土坑というよりはピット状で、黒褐色土を覆土とする。遺物の出土はない。

24号土坑

位置 A区の南側で中央にあり、 $X=35.569$ 、 $Y=-67.732$ 付近に位置する。

規模 不整な楕円形を呈し、長軸75cm、短軸55cm、深さ8～15cmほどを測る。

概要 底面には凹凸があり、黒褐色土を主体に覆土とする。遺物の出土はない。

25号土坑

位置 A区の南側で中央にあり、 $X=35.566$ 、 $Y=-67.732$ に位置する。

規模 円形を呈し、径60cm、深さ23cmを測る。

概要 粘性の強い黒褐色土・褐灰色土を覆土とし、北側の底面から土師器の底部と手捏ね土器が出土している。

26号土坑

位置 A区の南側で中央にあり、X=35.567、Y=-67.731付近に位置する。

規模 円形を呈し、径40cm、深さ15cmを測る。

概要 土坑というよりはピット状で、黒褐色土を覆土とする。遺物の出土はない。

27号土坑

位置 A区の南側で中央にあり、X=35.583、Y=-67.734付近に位置する。

規模 円形を呈し、径35cm、深さ5cmほどを測る。

概要 土坑というよりはピット状で、褐灰色土を覆土とする。遺物の出土はない。

28号土坑

位置 A区の南端にあり、X=35.564、Y=-67.734に位置する。

規模 楕円形を呈し、長軸65cm、短軸40cm、深さ20cmほどを測る。

概要 土坑というよりはピット状で、黒褐色土を覆土とする。遺物の出土はない。

29号土坑

位置 A区の南端で東寄りにあり、X=35.565、Y=-67.722に位置する。

規模 不整な円形を呈し、径75cm、深さ20cmを測る。

概要 混入物の多い褐色土を主体に覆土とする。底面には小さな穴が1カ所ある。遺物の出土はない。

30号土坑

位置 A区の南側で東寄りにあり、X=35.569、Y=-67.724に位置する。

規模 楕円形を呈し、長軸方向を南北にもち、長軸80cm、短軸60cm、深さ35cmを測る。

概要 1号住居跡の東側に隣接し、31号土坑と重複する。覆土の堆積状況から本土坑の方が新しく、31号土坑が古い。覆土は混入物の多い黒褐色土を主体とする。遺物の出土はない。

31号土坑

位置 A区の南側で東寄りにあり、X=35.569、Y=-67.724付近に位置する。

規模 円形を呈し、径60cm、深さ20cmを測る。

概要 1号住居跡の東側に隣接し、30号土坑と重複する。覆土の堆積状況から本土坑の方が古く、30号土坑が新しい。覆土は黒褐色土を主体とするが、上位に焼土粒を混入する。遺物の出土はない。

32号土坑

位置 A区の南側で東寄りにあり、X=35.572、Y=-67.725付近に位置する。

規模 円形を呈し、径35cm、深さ25cmを測る。

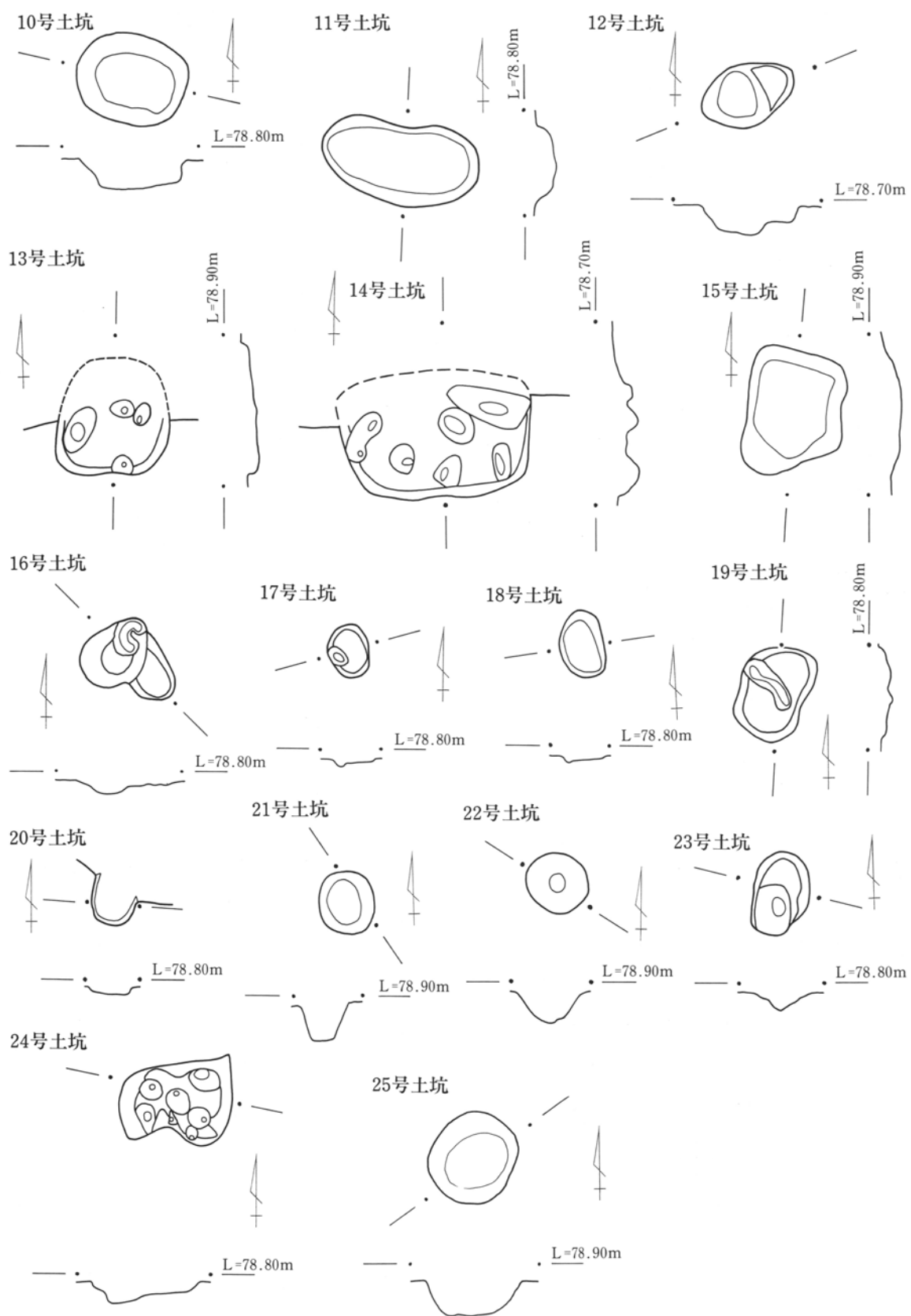
概要 土坑というよりはピットで、黒褐色土を覆土とする。遺物の出土はない。

33号土坑

位置 A区の南側でやや東寄りにあり、X=35.568、Y=-67.727付近に位置する。

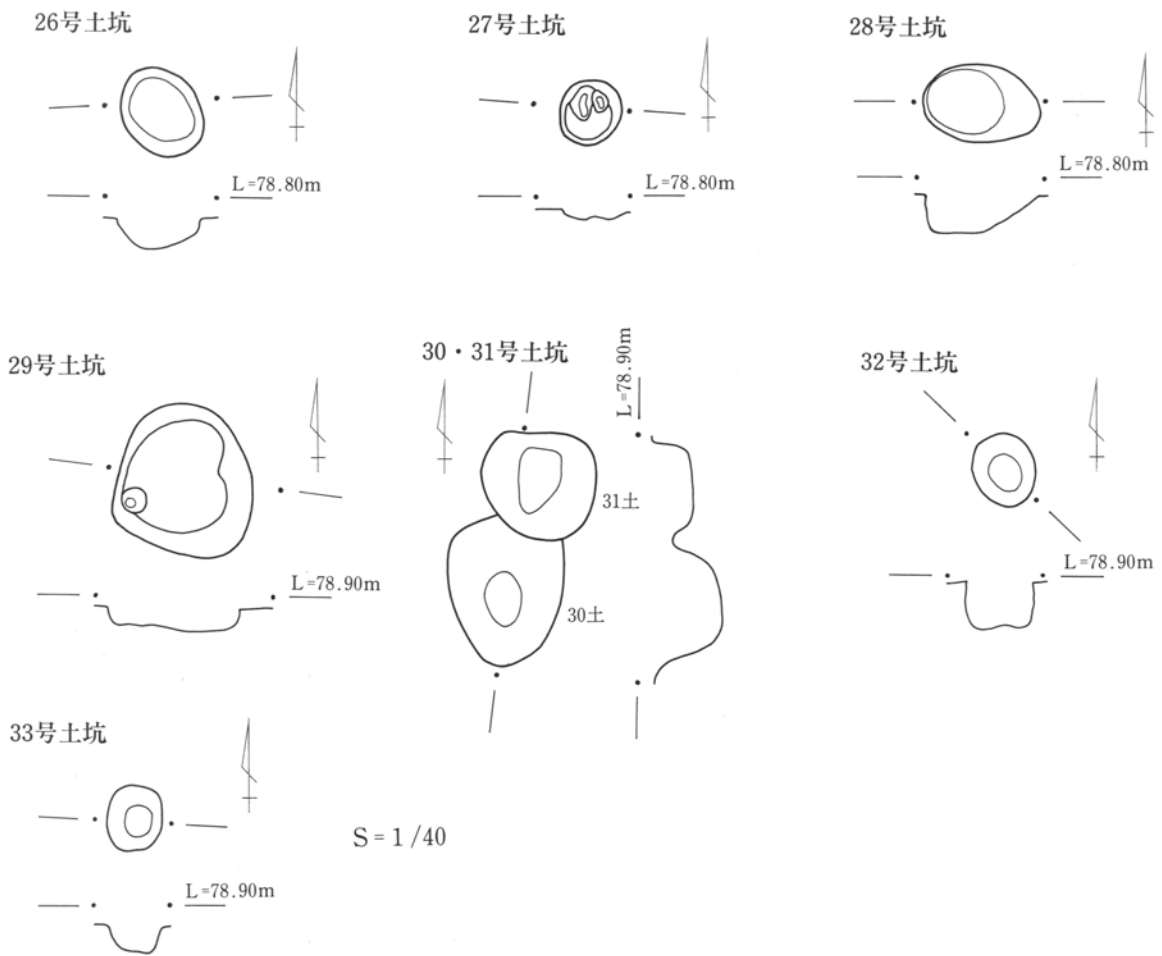
規模 円形を呈し、径35cm、深さ13cmほどを測る。

概要 土坑というよりはピットで、褐色土を覆土とする。遺物の出土はない。



S = 1 / 40

第35图 A区 土坑(2)



第36図 A区 土坑(3)

溝

検出された溝は、調査区の北側で3～7号溝とした5条、中央部で8～11号溝とした4条、南側で12～19号溝とした8条の計17条である。これらの溝の多くは、僅かに蛇行するものも含めて東西方向に走向する。中には10号溝のように、東西方向から南方向へ直角に走向を変える溝もある。16～19号溝では、南東方向へ走向を向ける溝もある。これらの溝の堆積土は、As-B軽石を含む土を覆土としている。また、5・9・13・14・17号溝については、本調査区に隣接する北関東調査分において、その延長となる溝が検出されている。

B区

B区で検出された遺構には、館跡の一部が検出された他、掘立柱建物2棟、土坑17基、溝等がある。館跡については、西側での北関東調査分で検出された館跡と一体をなす遺構である。(第37図)

各遺構の説明は、以下の通りである。

掘立柱建物 (第38~40図)

1号掘立柱建物

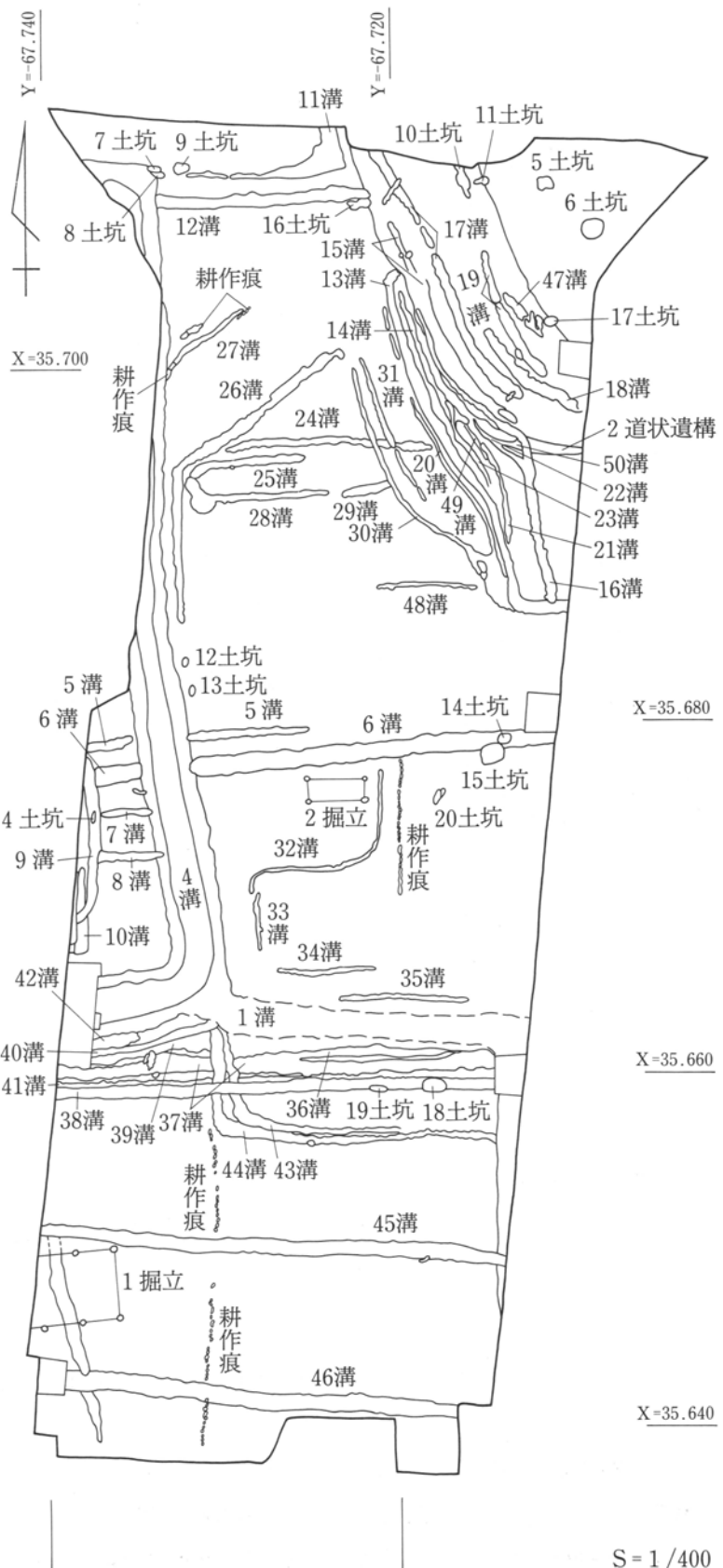
位置 B区の南側の西端にあり、 $X=35.648$ 、 $Y=-67.739$ に位置する。

規模 3間×1間(3.8m)となる長方形の建物で、桁行方向を東北東にとる。

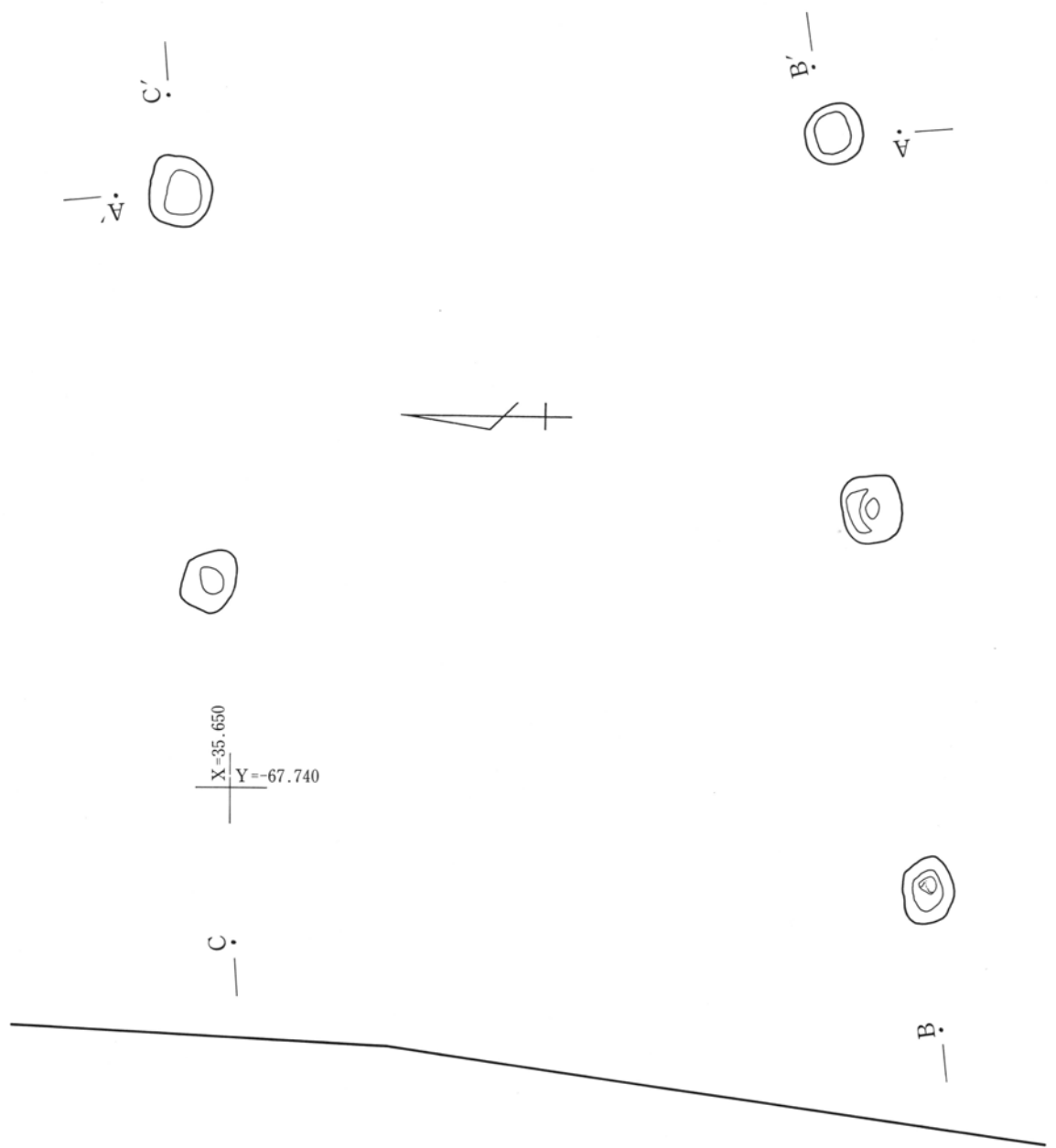
概要 検出された建物の柱穴は、北側の列で2穴、南側の列で3穴である。それぞれの列の柱間は、2.1m前後を測り規則的である。調査区の西隣となる北関東自動車道の調査では、本建物遺構の続きと考えられる柱穴が検出されていることから、3間(6.4m)×1間(3.8m)の遺構であることが確認されている。各柱穴内には、As-B軽石を僅かに含む暗褐色土を覆土としている。遺物の出土はない。

2号掘立柱建物

位置 B区のほぼ中央にあり、 $X=35.675$ 、 $Y=-67.7$



第37図 B区の遺構配置図(本線)

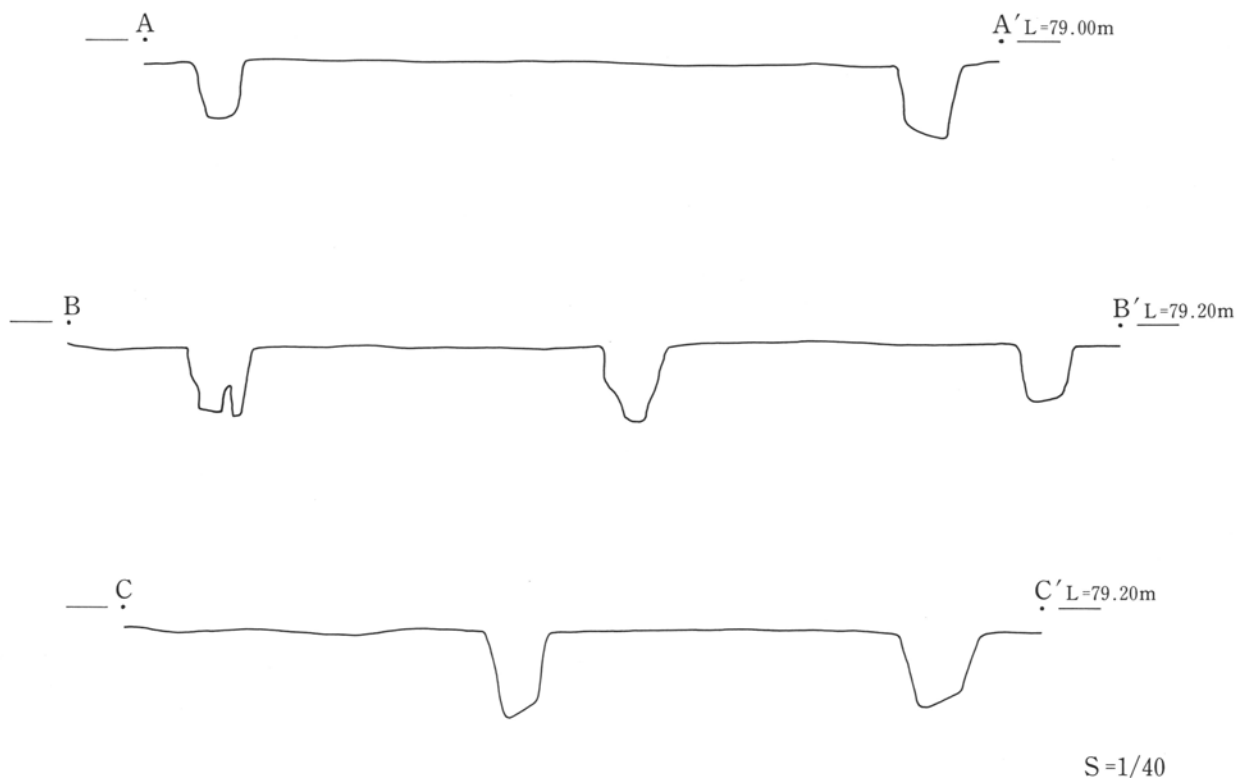


第38図 B区 1号掘立柱建物(平面)

23に位置する。

規模 2間(2.5m)×1間(3.2m)となる方形の建物で、桁行方向を南北にとる。

概要 建物の梁行方向となる北辺の2柱穴が、東西に走向する6号溝と重複するが、新旧は不明である。桁行方向となる西辺では中間に柱穴を1穴有して2間であるのに対し、東辺では中間に2穴を有している。各柱穴内には、As-B軽石を含む暗褐色土を覆土としている。遺物の出土はない。



第39図 B区 1号掘立柱建物(断面)

土坑 (第41・42図)

4号土坑

位置 B区の中央で西端にあり、 $X=35.674$ 、 $Y=-67.737$ に位置する。

規模 円形ないし楕円形を呈すると考えられ、径50cm前後、深さ5cmを測る。

概要 土坑の西半のみの調査である。9号溝と重複するが、堆積した覆土から本土坑が新しい。黄褐色土を覆土とし、遺物の出土はない。

5号土坑

位置 B区の北端で東寄りにあり、 $X=35.710$ 、 $Y=-67.711$ に位置する。

規模 楕円形を呈し、長軸方向を東北東にもち、長軸90cm、短軸70cm、深さ40cmを測る。

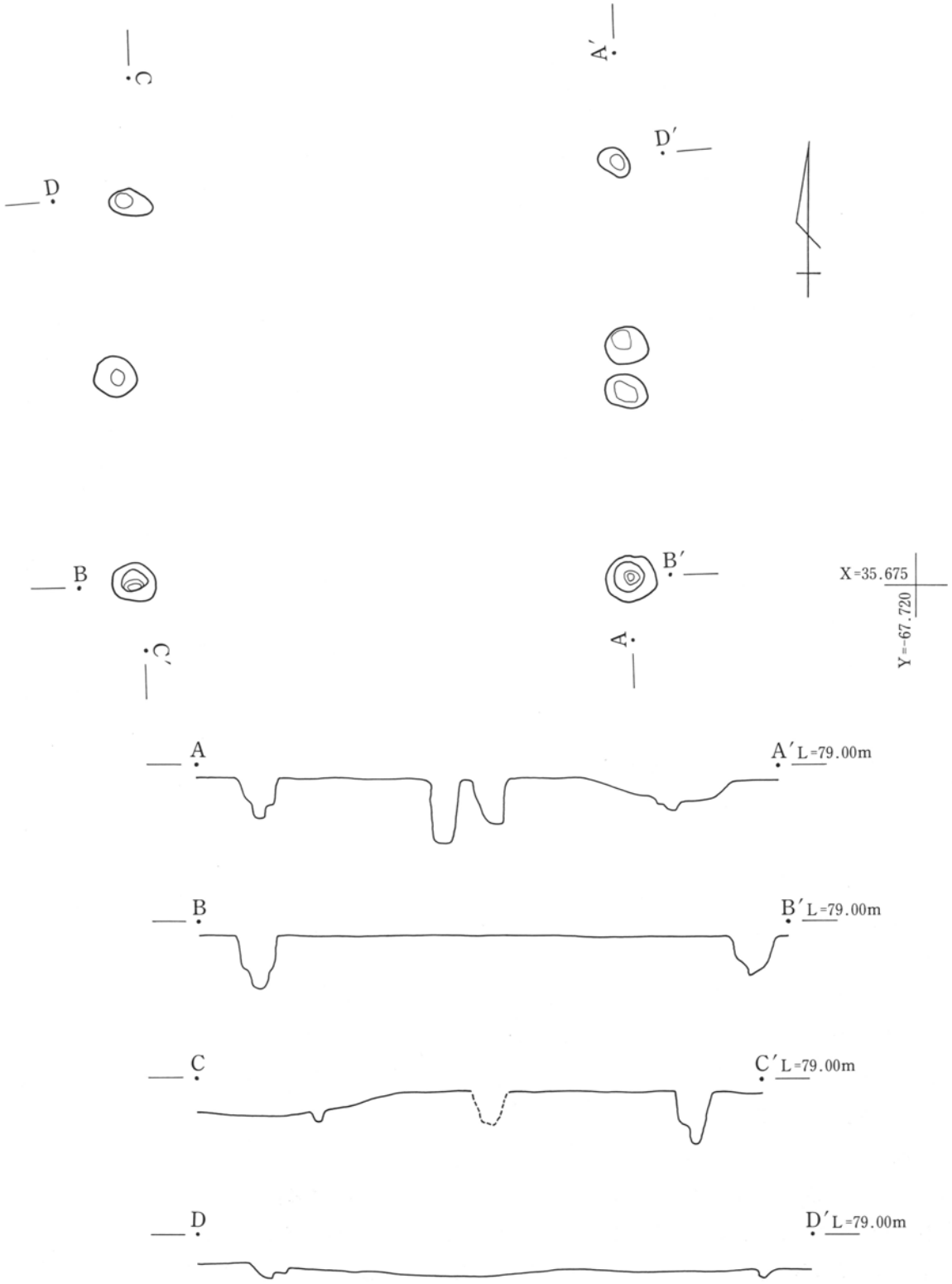
概要 底面形は長方形を呈する。As-B軽石を含む暗褐色土を覆土とし、遺物の出土はない。

6号土坑

位置 B区の北側で東寄りにあり、 $X=35.707$ 、 $Y=-67.708$ に位置する。

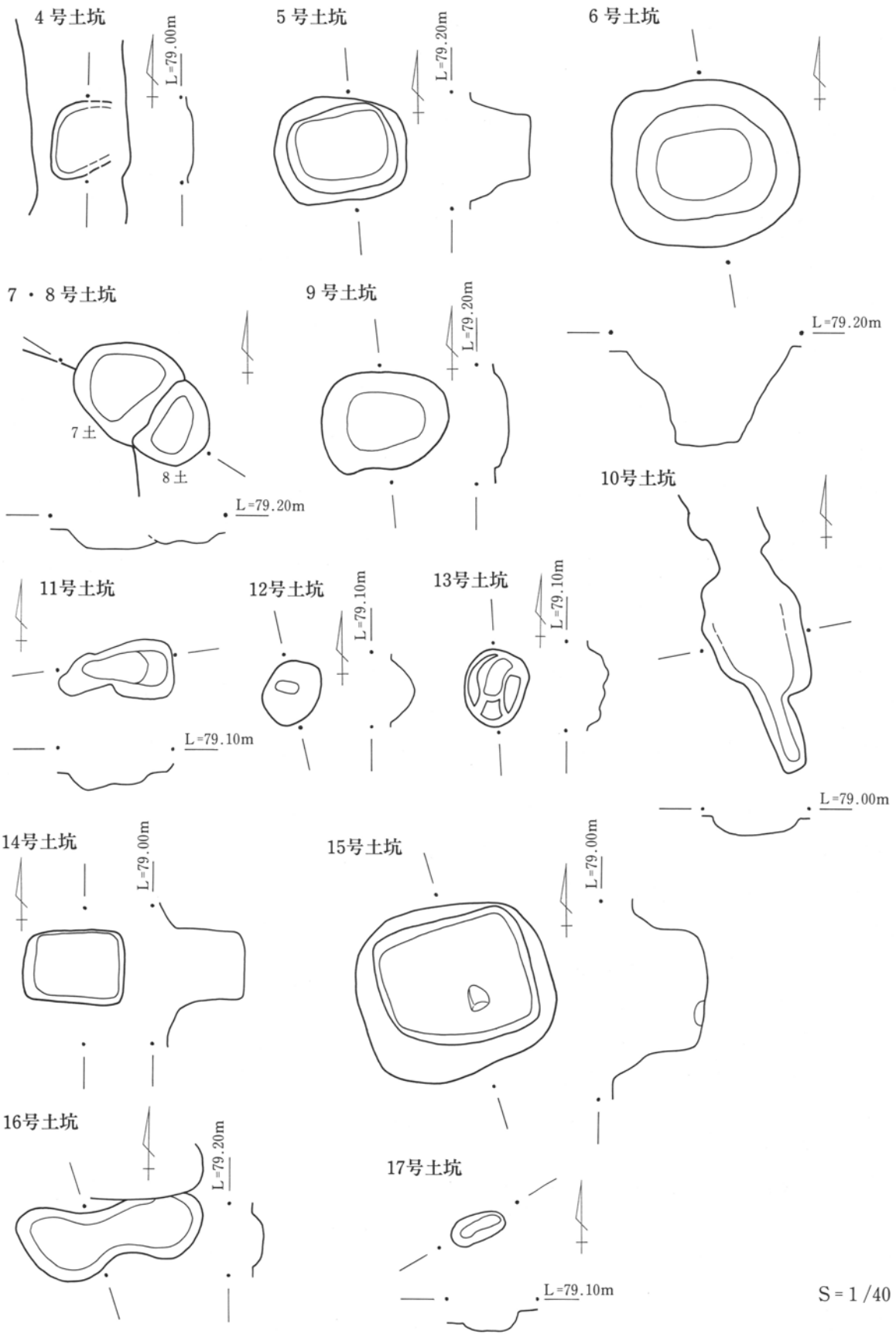
規模 楕円形を呈し、長軸方向を東北東にもち、長軸1.3m、短軸1.1m、深さ65cmを測る。

概要 As-B軽石を含む暗褐色土を覆土とし、遺物の出土はない。



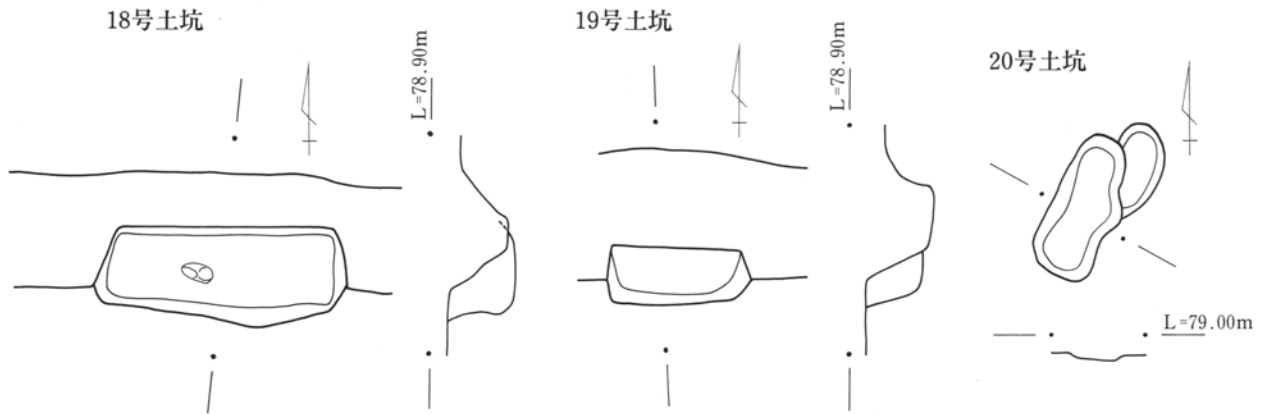
S = 1 / 40

第40图 B区 2号掘立柱建物



S = 1 / 40

第41图 B区 土坑(1)



第42図 B区 土坑(2)

S=1/40

7号土坑

位置 B区の北端で西寄りにあり、X=35.710、Y=-67.733付近に位置する。

規模 不整な円形を呈し、径65cm前後、深さ10cmほどを測る。

概要 4号溝および8号土坑と重複するが、いずれの遺構とも新旧は不明。As-B軽石を多く含む褐灰色土を覆土とし、遺物の出土はない。

8号土坑

位置 B区の北端で西寄りにあり、X=35.710、Y=-67.733付近に位置する。

規模 不整な円形を呈し、径50cm前後、深さ6cmほどを測る。

概要 7号土坑と重複するが、新旧は不明。As-B軽石を含む褐灰色土を覆土とし、遺物の出土はない。

9号土坑

位置 B区の北端で西寄りにあり、X=35.711、Y=-67.731付近に位置する。

規模 楕円形を呈し、長軸方向を東西にもち、長軸85cm、短軸65cm、深さ20cmを測る。

概要 As-B軽石を含む暗褐色土を覆土とし、遺物の出土はない。

10号土坑

位置 B区の北端にあり、X=35.710、Y=-67.716に位置する。

規模 不整な楕円形を呈し、長軸方向を北北西にもち、長軸90cm前後、短軸60cm、深さ20cmを測る。

概要 19号溝の延長とも考えられる細い溝と重複するが、土層断面から本土坑が新しい。As-B軽石を含む暗褐色土を覆土とし、遺物の出土はない。

11号土坑

位置 B区の北端にあり、X=35.710、Y=-67.715付近に位置する。

規模 不整な楕円形を呈し、長軸方向を東北東にもち、長軸80cm前後、短軸40cm、深さ20cmを測る。

概要 底面は平坦ではなく、土坑としがたい点もある。Hr-FA泥流ブロックを少量混在する暗褐色土を覆土とし、遺物の出土はない。

12号土坑

位置 B区の中央で西寄りにあり、X=35.683、Y=-67.732付近に位置する。

規模 円形を呈し、径40cm前後、深さ15cmほどを測る。

概要 赤褐色土ブロックを混在する暗褐色土を覆土とし、遺物の出土はない。

13号土坑

位置 B区の中央で西寄りにあり、 $X=35.681$ 、 $Y=-67.731$ 付近に位置する。

規模 円形を呈し、径50cm前後、深さ10cmほどを測る。

概要 As-B軽石と赤褐色土ブロックを混在する暗褐色土を覆土とし、遺物の出土はない。

14号土坑

位置 B区の中央で東寄りにあり、 $X=35.678$ 、 $Y=-67.714$ 付近に位置する。

規模 長方形を呈し、長軸方向を東西にもち、長軸70cm、短軸50cm、深さ55cmを測る。

概要 6号溝と重複するが、新旧は不明。Hr-FA泥流と黒色土をブロックに混在する。遺物の出土はない。

15号土坑

位置 B区の中央で東寄りにあり、 $X=35.677$ 、 $Y=-67.715$ に位置する。

規模 長方形を呈し、長軸方向を東北東にもち、長軸1.35m、短軸1.2m、深さ60cmを測る。

概要 6号溝と重複するが、新旧は不明。As-B軽石を含み、Hr-FA泥流と黒色土ブロックを混在する暗褐色土を覆土としている。遺物の出土はないが、底面には礫が検出されている。

16号土坑

位置 B区の北側にあり、 $X=35.709$ 、 $Y=-67.721$ 付近に位置する。

規模 不整な楕円形を呈し、長軸方向を東北東にもち、長軸1.25m、短軸40cm、深さ10cmを測る。

概要 12号溝と重複するが、新旧は不明。As-B軽石を含む黒褐色土を覆土とし、遺物の出土はない。

17号土坑

位置 B区の北側で東寄りにあり、 $X=35.702$ 、 $Y=-67.711$ 付近に位置する。

規模 楕円形を呈し、長軸方向を北東にもち、長軸40cm、短軸20cm、深さ10cmを測る。

概要 As-B軽石を含む黒褐色土を覆土とし、遺物の出土はない。

18号土坑

位置 B区の南側で東寄りにあり、 $X=35.659$ 、 $Y=-67.718$ に位置する。

規模 長方形を呈し、長軸方向を東西にもち、長軸1.3m、短軸60cm、深さ35cmを測る。

概要 38号溝と重複するが、土層断面から本土坑が古い。黒褐色土を覆土とし、遺物の出土はない。

19号土坑

位置 B区の南側で東寄りにあり、 $X=35.659$ 、 $Y=-67.721$ に位置する。

規模 長方形を呈すると考えられ、長軸方向を東西にもち、長軸80cm、深さ30cmを測る。

概要 38号溝と重複するが、土層断面から本土坑が古い。As-B軽石を少量含む暗褐色土を覆土とし、遺物の出土はない。

20号土坑

位置 B区の中央で東寄りにあり、 $X=35.675$ 、 $Y=-67.718$ に位置する。

規模 楕円形を呈し、長軸方向を北北東にもち、長軸80cm、短軸35cm、深さ6cmほどを測る。

概要 土坑の北側はピットと重複するが、新旧は不明。As-B軽石を含む黒褐色土を覆土とし、遺物の出土はない。

館跡 (第43図)

調査区の中央から北側の西端で、館跡を区画する溝が検出された。4号溝である。この4号溝は、館の東辺を区画するもので、検出された北端は北東隅に位置し、南端は南東隅に位置している。溝幅は約3m、深さ70cm前後を測る。南辺となる部分では、先項の近世面での1号溝と重複していることは先述のごとくであり、堆積土層の断面からもその新旧は明らかとなっている。因みに、第43図Bラインの土層では、2～7層までが1号溝の覆土であり、13～19層までが本4号溝の覆土である。この土層観察から、4号溝自体が2時期の溝であることが理解でき、13～15層を覆土とする方が時期的に新しい。このことは、北東隅でのAラインの土層においても、4・5層を覆土とする時期と、6～10層を覆土とする2時期が確認でき、同様なことが言える。古い時期の溝の方が、やや内側を巡っていたことが理解できる。

館の規模は、検出された東辺はほぼ南北方向にあり、溝を含めた南北方向の長さは48mを測ることができ、館の本体部となる西側については北関東調査分で検出されており、その結果からすると、東西方向に長軸を持つ長方形を呈する館跡で、中間で東西に区画を分割する溝を有し、西側の区画内に建物遺構が存在したようである。詳細については、北関東調査分の報告に委ねたい。

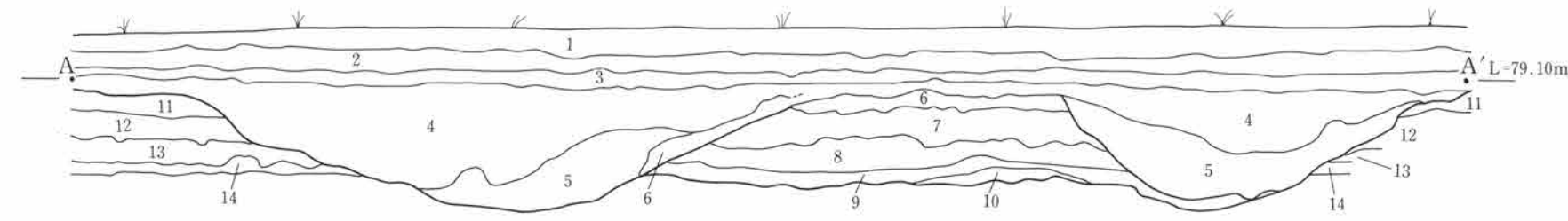
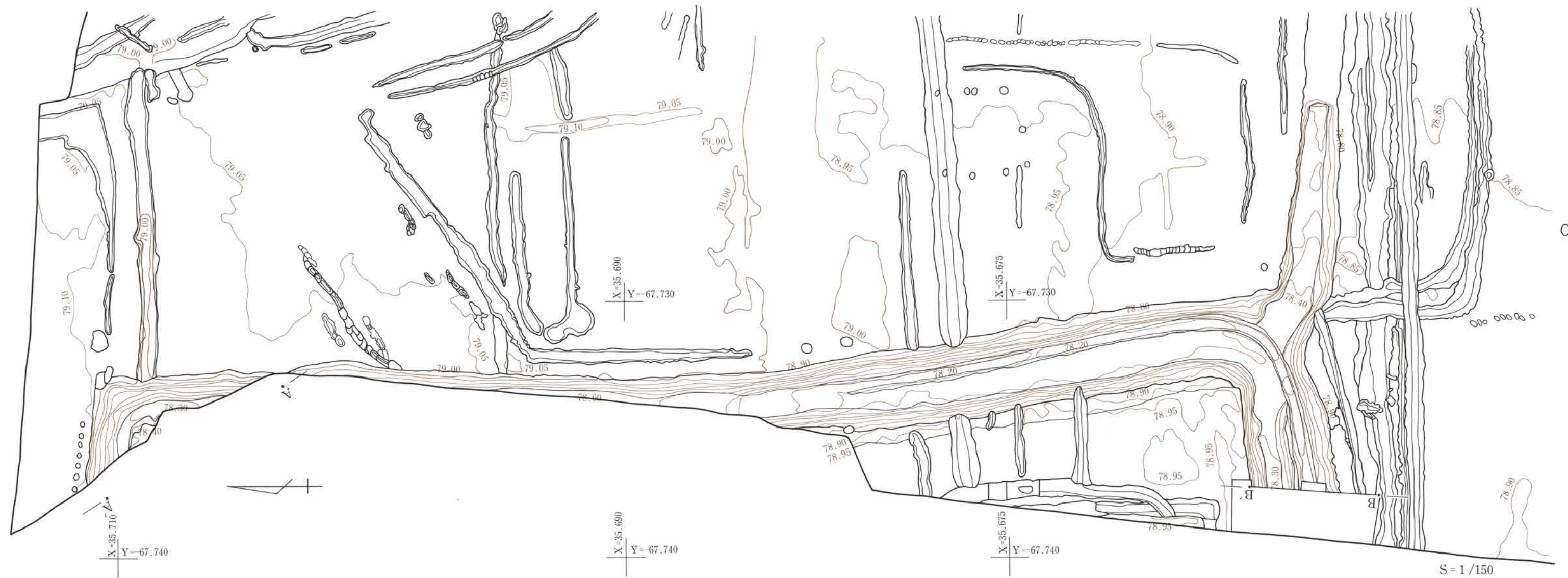
溝

調査区内には、実に多くの溝が検出されている。北側の東寄りに集中する溝については、調査時の際に道路状遺構として扱った箇所であり、溝集中箇所として別記する。それ以外の溝については、東西方向に延びる溝が目につき、さらには途中で屈曲するように走向を変える溝が存在する。また、館跡内部の溝については、館に伴う溝とは考え難い。

まず、東西方向に延びる溝であるが、5・6・12・24・37・38・41・45・46号溝に代表され、その延長部は東西両側の北関東調査分でも検出されている。一方、走向を変える溝については、9・26・32・43・44号溝があり、その性格等に不明な点が多い。また、溝とは異なり、点列状の荒れた痕跡が溝状につながるものも存在する。調査時点では耕作痕とも考えたが、定かではない。

溝集中箇所(道路状遺構) (第44・45図)

B区の北側で東寄りに位置する一角に、多くの細い溝が集中する。13～23・30・31・47・49・50号溝である。これらの溝は、北から南東方向へやや弧を描くように走向するものがほとんどであるが、その走向方向等から大きく2グループに分けることができる。一つは15・17～19・47号溝であり、もう一つはそれ以外の溝で構成される。前者のグループの溝走向に対し、後者のグループの溝では途中から南下するように走向方向が変化し異なっている。また、前者のグループの走向範囲は、周囲よりも全体に窪んでいる点でも特徴がある。こうした点から、発掘調査時にはこの部分を道路状遺構として調査された経緯があるが、道路状遺構としての硬化面の検出がみられなかったこと、道路状遺構に伴う溝の特定ができないこと、走向が続くと想定される隣接の北関東自動車道調査側での検出がみられなかったこと等を考えると、道路状遺構とは考え難い。



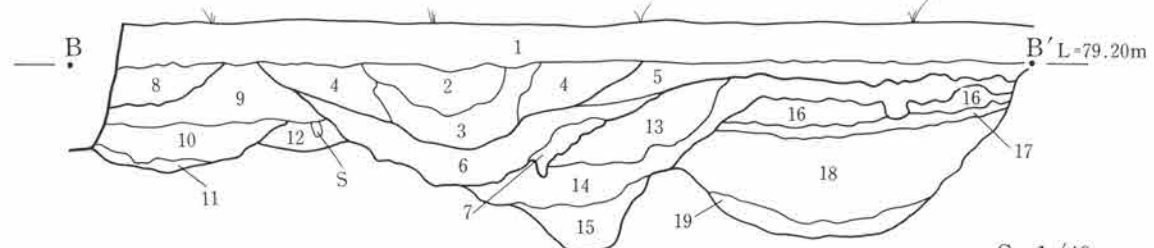
A—A'ライン

- 1層 表土（現耕作土）
- 2層 暗褐色土 As-A軽石を含み、1層境に鉄分沈着層がみられる。
- 3層 暗褐色土 As-B軽石を含む。
- 4層 褐灰色砂質土 As-B軽石を多く含み、灰色のシルト質土ブロックを斑状に混在。
- 5層 褐灰色砂質土 4層に類似するが、多々暗い。
- 6層 褐灰色砂質土 4層に類似するが、混入物少なく、暗い。
- 7層 褐灰色砂質土 4層に類似するが、Hr-FA・As-C混土ブロック等を斑状に混在。

- 8層 褐灰色砂質土 4層に類似するが、黄褐色砂質土の大ブロックを混在。
- 9層 褐灰色粘質土 上位が暗く、下位が明るい。中間に灰白色粘質土がみられる。
- 10層 黄褐色砂質土 厚さ1cmほどで、縞状に堆積する。
- 11層 黒褐色粘質土 As-B軽石下水田の耕作土。
- 12層 黄褐色砂質土 13層の上位に堆積する水性堆積土。
- 13層 黄褐色砂質土 Hr-FPを含む。
- 14層 褐灰色粘質土 第6面の水田耕作土。

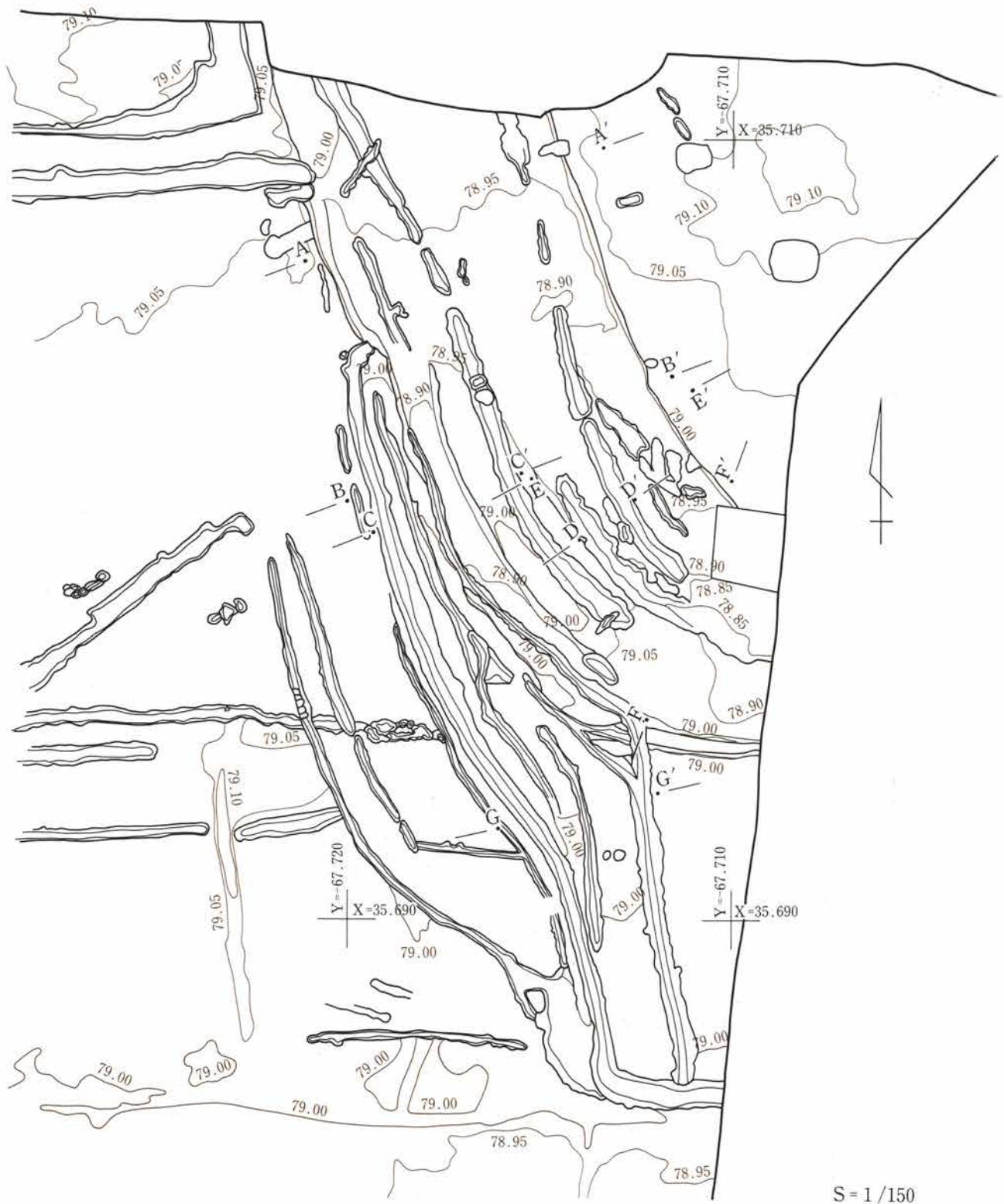
B—B'ライン

- 1層 表土（現耕作土）
- 2層 褐灰色土 As-A軽石を少量含み、土質が細かい。部分的に鉄分凝固がみられる。
- 3層 褐灰色土 2層に類似するが、混入物が少ない。2層との間にビニールを挟む。
- 4層 褐灰色土 2層に類似するが、As-A軽石を多く含む。
- 5層 黒褐色土 As-A軽石を多量に含む。やや粘質で締まりがよい。
- 6層 黄灰色土 As-A軽石を少量含み、暗く粘質。
- 7層 黄灰色土 As-A軽石を少量含み、明るい。
- 8層 黒褐色土 As-A軽石を含み、斑状の凝固鉄分を多く含む。
- 9層 暗褐色土 混入物は少ないが、凝固鉄分を多く含む。
- 10層 黒褐色土 As-B軽石を多く含むが、他の混入物は少ない。



- 11層 黒褐色土 10層に類似するが、Hr-FAブロックを多く含む。
- 12層 黒褐色土 As-B軽石を含み、Hr-FAブロックを混在させる。
- 13層 褐灰色土 As-B軽石を含み、やや粘質で土質が細かい。
- 14層 黄灰色土 As-B軽石を含み、黄色砂質土を多く含む。
- 15層 灰色土 全体にAs-B軽石を多く含む。黒色土粒を含むが、粘質な灰色土を主体とする。
- 16層 黒褐色土 As-B軽石を少量含み、黄褐色のHr-FAブロックを多量に含む。
- 17層 灰褐色土 16層よりHr-FAブロックを多く含む、As-B軽石下の水田耕作土ブロックを混在させる。粘質が強い。
- 18層 黒褐色土 16層に類似するが、Hr-FAブロックの混入が少ない。粘性が弱く、砂質気味。
- 19層 黒褐色土 砂質層であり、鉄分・マンガンを多く含む。

第43図 B区 館跡の堀(4号溝)



第44図 B区 道路状遺構と溝群

A' L=79.20m

76

B' L=79.10m

D' L=79.00m

C' L=79.10m

E' L=79.10m

F' L=79.10m

G' L=79.10m

S = 1 / 40

D-D'ライン

- 1層 黒褐色土 As-B軽石を少量含み、黄褐色粘質土・明褐色土を少量含む。
- 2層 褐灰色土 As-B軽石を微量含み、黄褐色粘質土・明褐色土を少量含む。
- 3層 黄褐色粘質土 As-B軽石を少し含む。
- 4層 黒褐色土 As-B軽石を含む。
- 5層 黒褐色土 As-B軽石を多く含み、黄褐色粘質土を多く混在する。
- 6層 黒褐色土 5層に近いが、多量の黄褐色粘質土を含む。若干の鉄分を含む。

C-C'ライン

- 1層 黒褐色土 As-B軽石を多く含み、明赤褐色土ブロックを多く含む。
- 2層 灰褐色土 粘性強くAs-B軽石を含み、明赤褐色土ブロックを少量含む。
- 3層 黒褐色土 1層より黒く、粘性強い。明黄褐色粘質土を多く含む。
- 4層 黒褐色土 As-B軽石を多く含み、明褐色土を点状に多く含む。
- 5層 黒褐色土 4層に近いが、As-B軽石が4層より少ない。
- 6層 黒褐色土 As-B軽石を多量に含み、赤褐色土ブロックを主体とする。
- 7層 黒褐色土 As-B軽石を少し含み、褐色土を点状に多く含む。
- 8層 黄褐色粘質土 7層に近い、黒褐色土を含み、締まる。
- 9層 赤褐色土 As-B軽石を多く含むが、6層より少ない。
- 10層 褐灰色土 粘性強く、As-B軽石が少量混じる。橙色土を点状に多く含む。
- 11層 黒褐色土 As-B軽石を含み、赤褐色土を含み、粘性有り。
- 12層 褐灰色土 少量のAs-B軽石及び赤褐色土を含み、粘性有り。

第45図 B区 道路状遺構と溝群の土層断面

C区

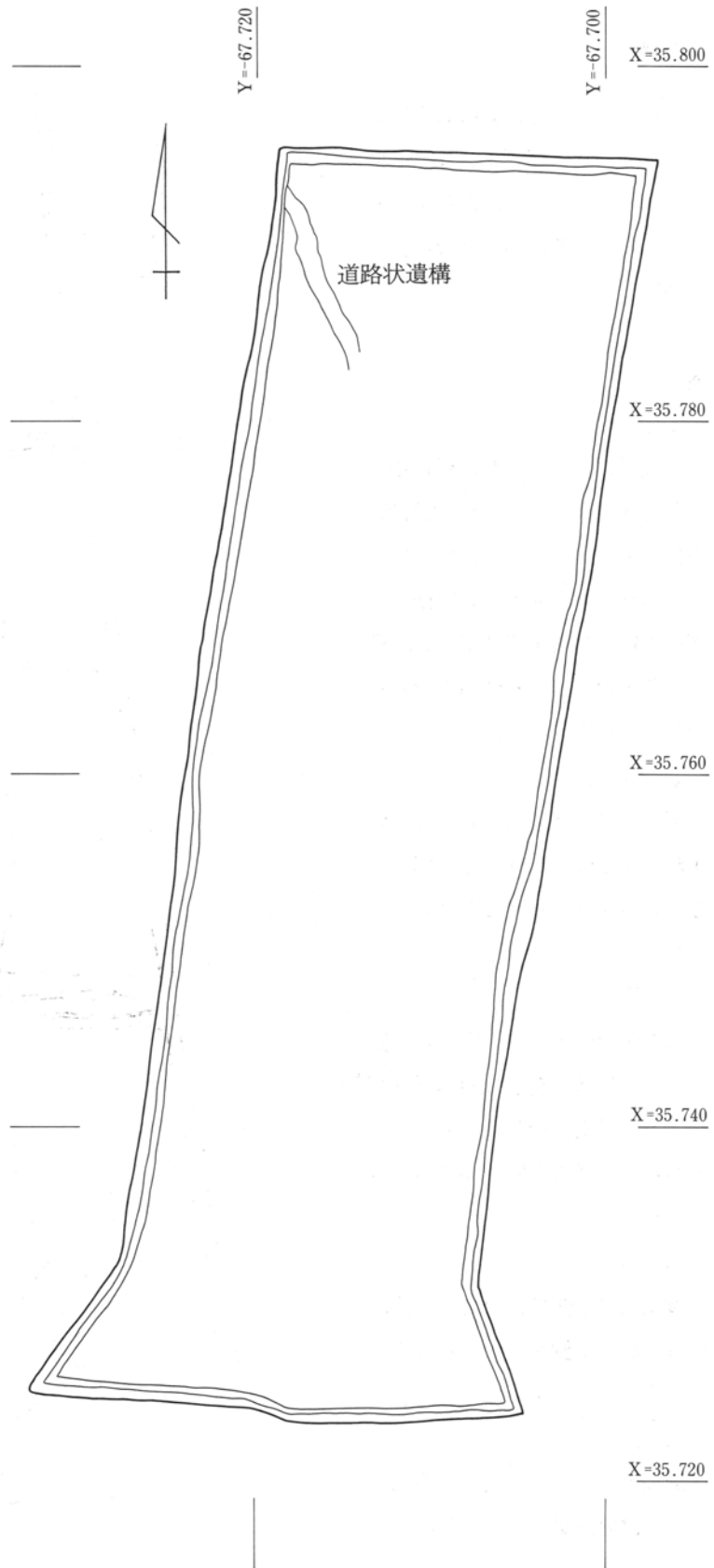
C区では、中世の遺構は極めて少ない。検出された遺構には、道路状遺構とした帯状の硬化面のみである。土坑等の検出もない。(第46図)

以下に、道路状遺構の説明を記す。

道路状遺構

C区の北側の西寄り、帯状の硬化面が検出されている。調査区の北西角の西壁から南東方向へ、幅1m、長さ10mほどであるが、その先にまで延長していたことが予測される。状況から道路状遺構の可能性も高いが、伴う溝等は検出されていない。

また、この硬化面はAs-B軽石混土層中から検出された面であることから、その形成時期は中世の頃と考えられる。



S = 1/400

第46図 C区の遺構配置図(本線)

D区

D区においても、先のC区同様に中世の遺構は極めて少ない。検出された遺構には、溝が数条のみである。土坑等の検出はない。(第47図)

溝

1号溝

調査区の中央から北に延びる、南北方向の溝である。溝の南端は、先項で説明した7号溝に取り付く形であり、7号溝がこの時期まで遡って存在した可能性が高い。溝の堆積土は、As-B軽石を含む暗褐色土を覆土とする。

3～5号溝

調査区の北寄りに位置する。いずれの溝も東西方向に延びる溝で、3・5号溝は1号溝と交差して延びる。

6号溝

調査区の中央で、西寄りに位置する。1号溝を起点に西へ延びる溝で、1号溝と同じ覆土であることから、1号溝と同時期の溝と考えられる。

10号溝

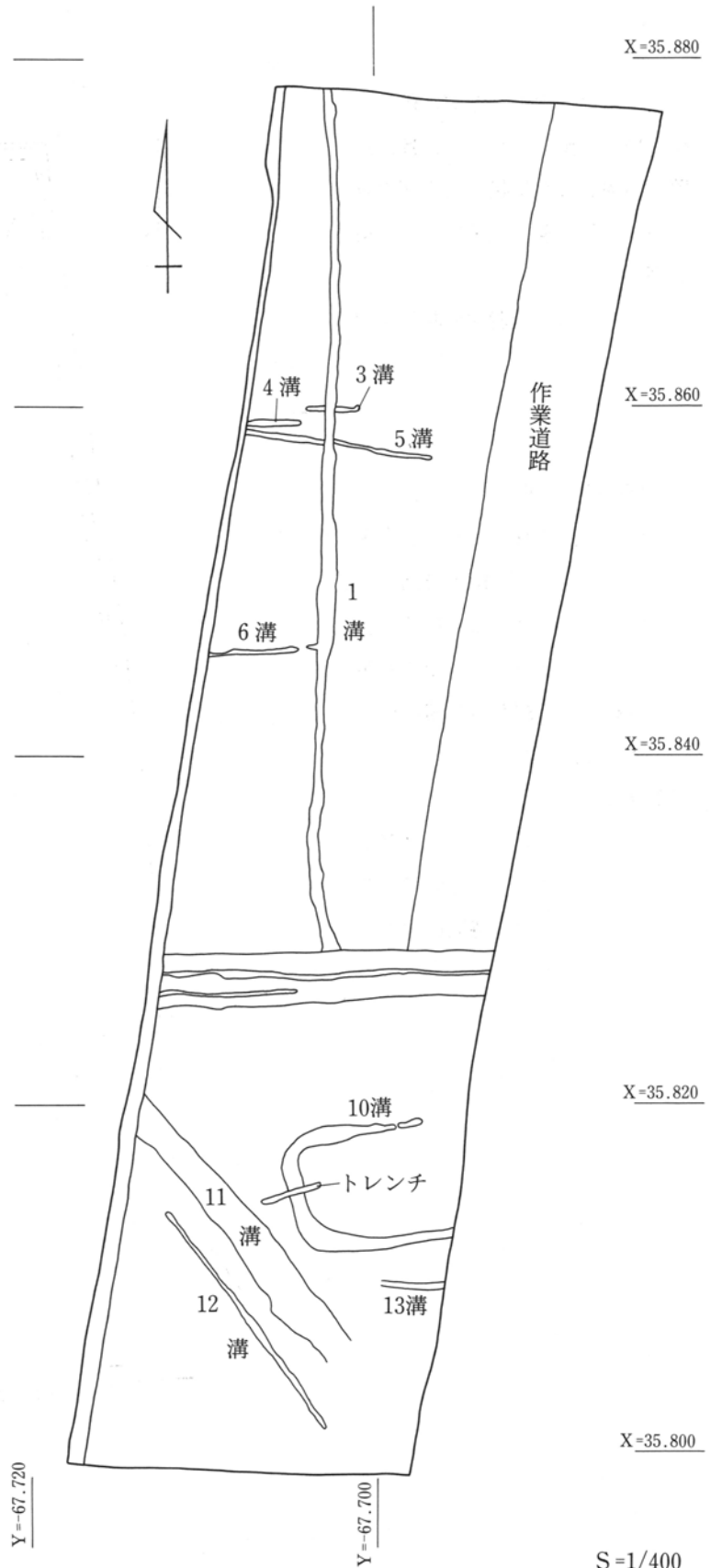
調査区の南側で、東寄りに位置する。溝は東側を開口するコ字状を呈するようにある。

12号溝

調査区の南側で、先項で説明した11号溝の南側に沿うようにある。

13号溝

調査区の南側で、10号溝の南に位置する。東西方向の短い溝である。



第47図 D区の遺構配置図(本線)

E区

E区で検出された遺構には、掘立柱建物1棟、井戸1基、溝数条がある。やはり、遺構数は少ない状況である。各遺構は、調査区の南側で検出された遺構であり、北側で検出されていない。(第48図)

各遺構の説明は、以下の通りである。

掘立柱建物 (第49図)

1号掘立柱建物

位置 E区の南側でやや東寄りであり、 $X=35.902$ 、 $Y=-67.686$ に位置する。

規模 1間(3.4m)×1間(1.75m)の長方形となる建物であり、桁行方向をほぼ南北にとる。

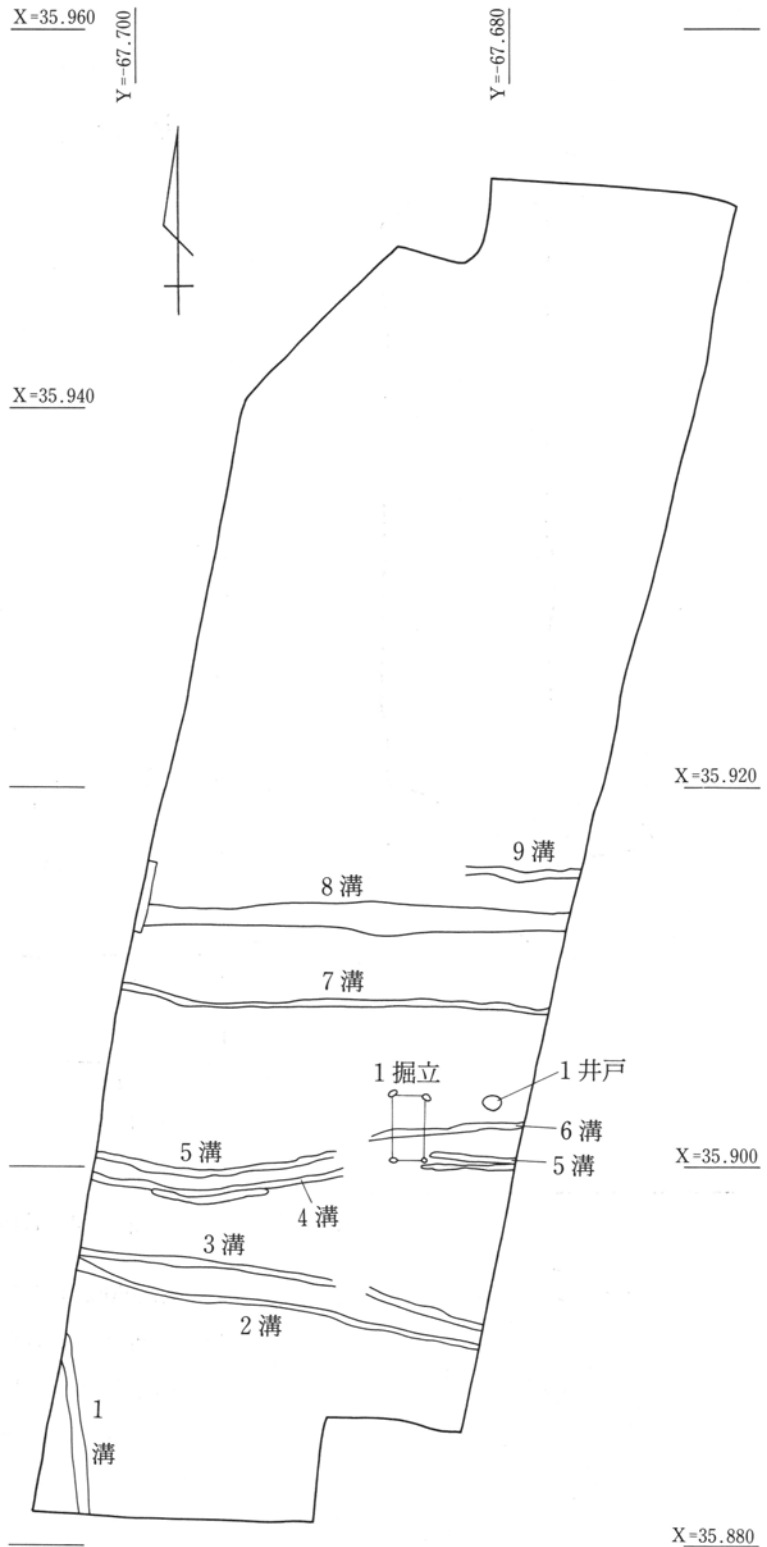
概要 建物の梁行方向となる南辺の2柱穴が、東西に走向する5号溝と重複するが、新旧は不明である。梁行方向の北辺と南辺では、その柱間に間尺の差があり、北辺の方がやや広い。各柱穴内は、As-B軽石を含む土を覆土としている。遺物の出土はない。

井戸 (第50図)

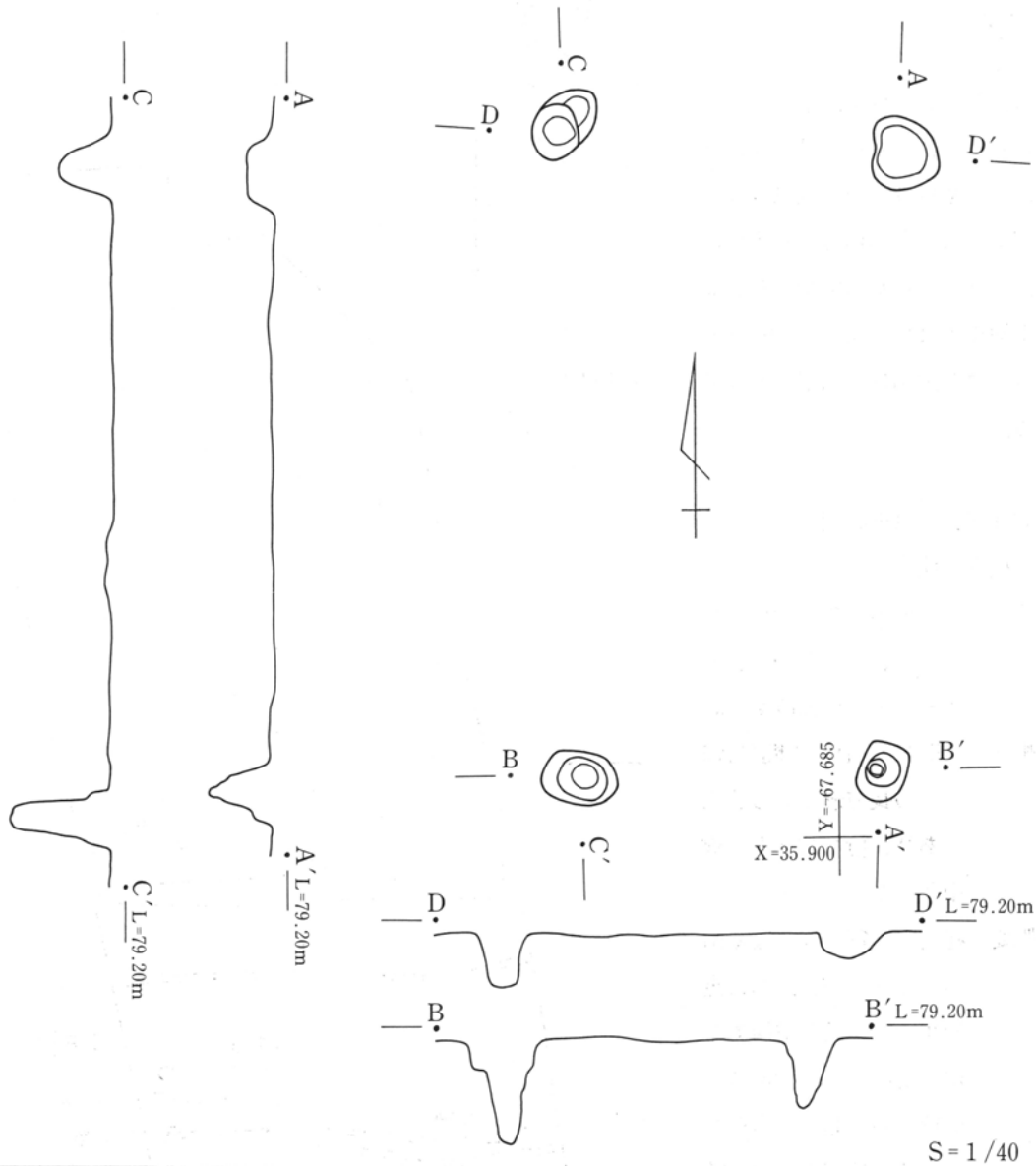
1号井戸

位置 E区の南側で東寄りであり、 $X=35.903$ 、 $Y=-67.681$ に位置する。

規模 円形を呈し、径1.05m、



第48図 E区の遺構配置図(本線)



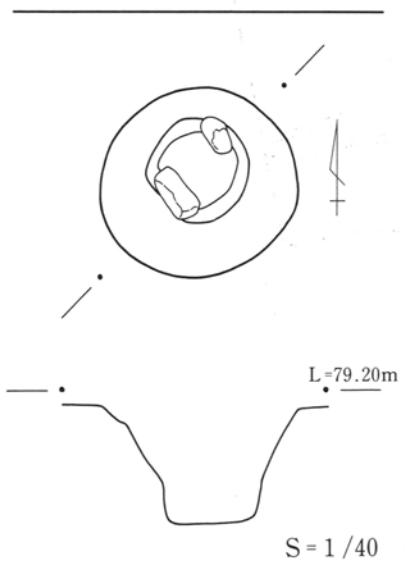
第49図 E区 1号掘立柱建物

深さ60cmほどを測る。

概要 断面形は漏斗状を呈し、底面は平坦で、径50cmほどの円形となる。また、底面には2個の大型の石が出土しているが、他の遺物は出土していない。

溝

調査区内からは、1～9号溝までの9条の溝が検出された。この内、8号溝は先項で説明した近世溝である。これらの溝は、調査区の中央から南寄りにあり、南北方向に近い走向となる1号溝、ほぼ直線的に東西方向に延びる2・3・7・9号溝、やや蛇行しながら東西方向に延びる4～6号溝の3種がある。



第50図 E区 1号井戸

F区

F区で検出された遺構には、掘立柱建物1棟、土坑17基、溝、さらには耕作痕とも考えられる短い溝状の遺構等がある。耕作痕と考えられる遺構以外は、調査区の北側に比較的多く検出されている。(第51図)

各遺構の説明は、以下の通りである。

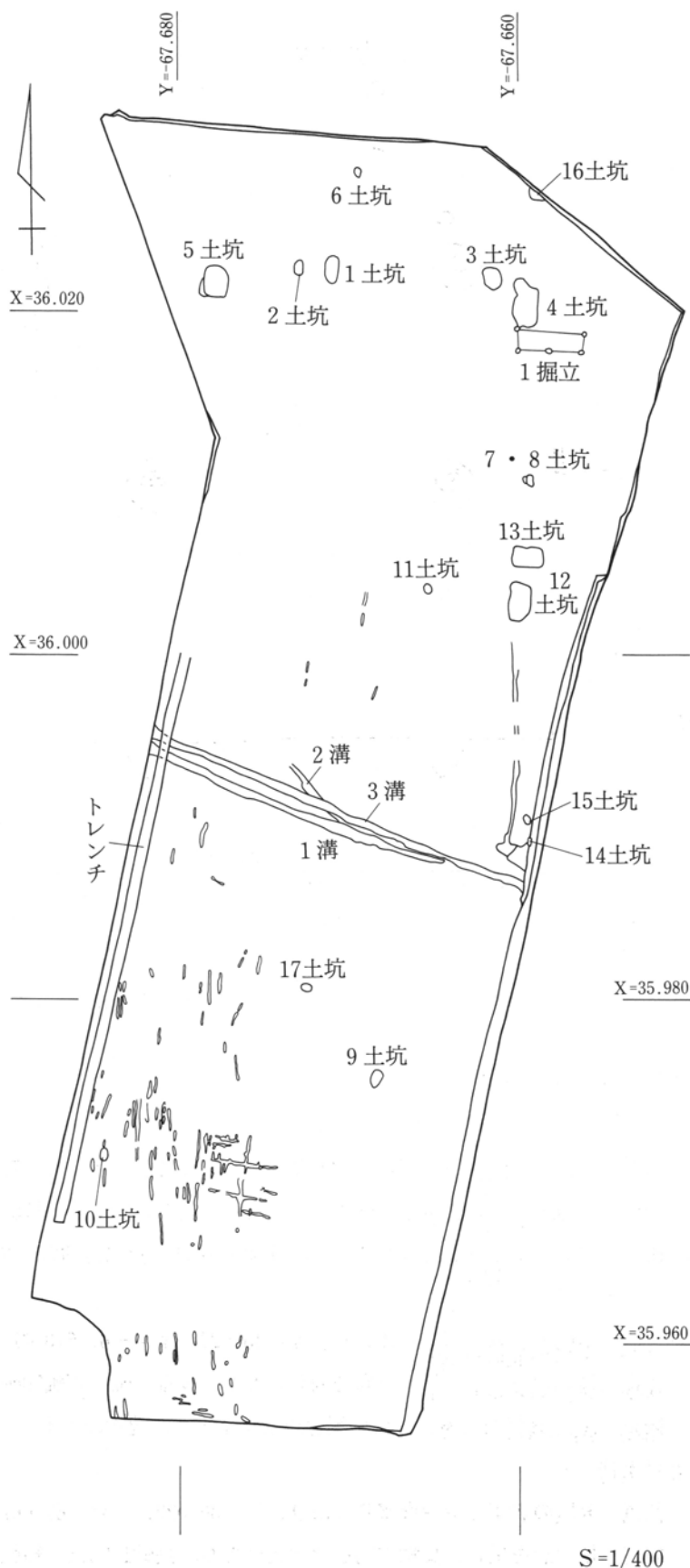
掘立柱建物 (第52図)

1号掘立柱建物

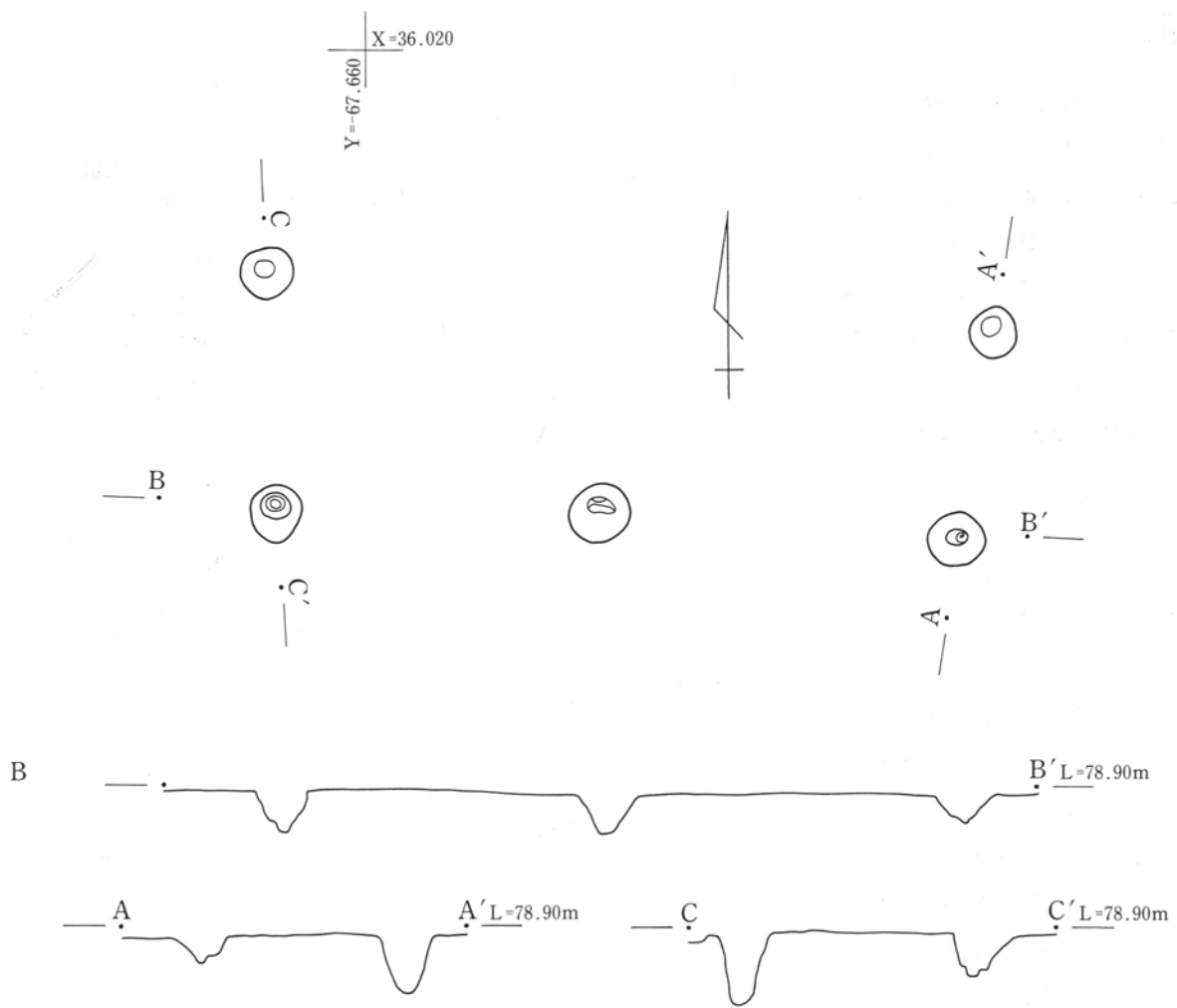
位置 F区の北側でやや東寄りにあり、 $X=36.018$ 、 $Y=-67.659$ に位置する。

規模 2間(3.8m)×1間(1.15m)の長方形となる建物であり、桁行方向をほぼ東西にとる。柱穴の深さは20~30cm前後を測る。

概要 4号土坑の南側に接するように位置する。桁行方向の北辺と南辺では、その柱間に間尺の差があり、北辺の方がやや広い。また、北辺の中間に位置する柱穴は検出されていない。各柱穴内は、As-B軽石を含む土を覆土としている。遺物の出土はない。



第51図 F区の遺構配置図(本線)



第52図 F区 1号掘立柱建物

土坑 (第53・54図)

1号土坑

位置 F区の北側でやや西寄りにあり、 $X=36.022$ 、 $Y=-67.671$ 付近に位置する。

規模 長方形を呈し、長軸方向を南北に持ち、長軸1.4m、短軸75cm、深さ25cmほどを測る。

概要 底面に小ピットを有する。As-B軽石を含む灰褐色粘質土を覆土とし、遺物の出土はない。

2号土坑

位置 F区の北側で西寄りにあり、 $X=36.022$ 、 $Y=-67.673$ 付近に位置する。

規模 楕円形を呈し、長軸方向を南北にもち、長軸80cm、短軸50cm、深さ10cmほどを測る。

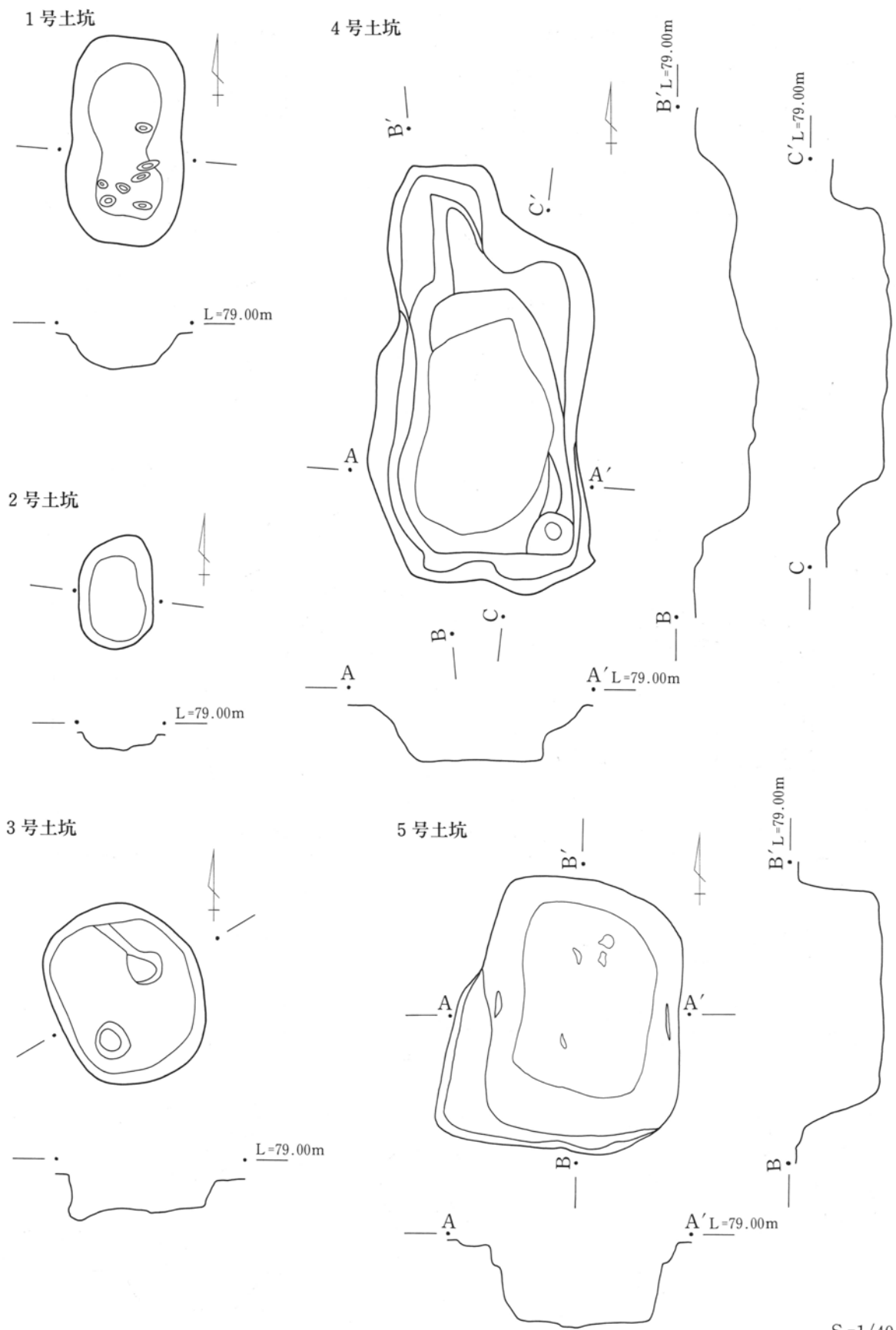
概要 As-B軽石を多量に含む褐色土を覆土とし、遺物の出土はない。

3号土坑

位置 F区の北側でやや東寄りにあり、 $X=36.022$ 、 $Y=-67.662$ に位置する。

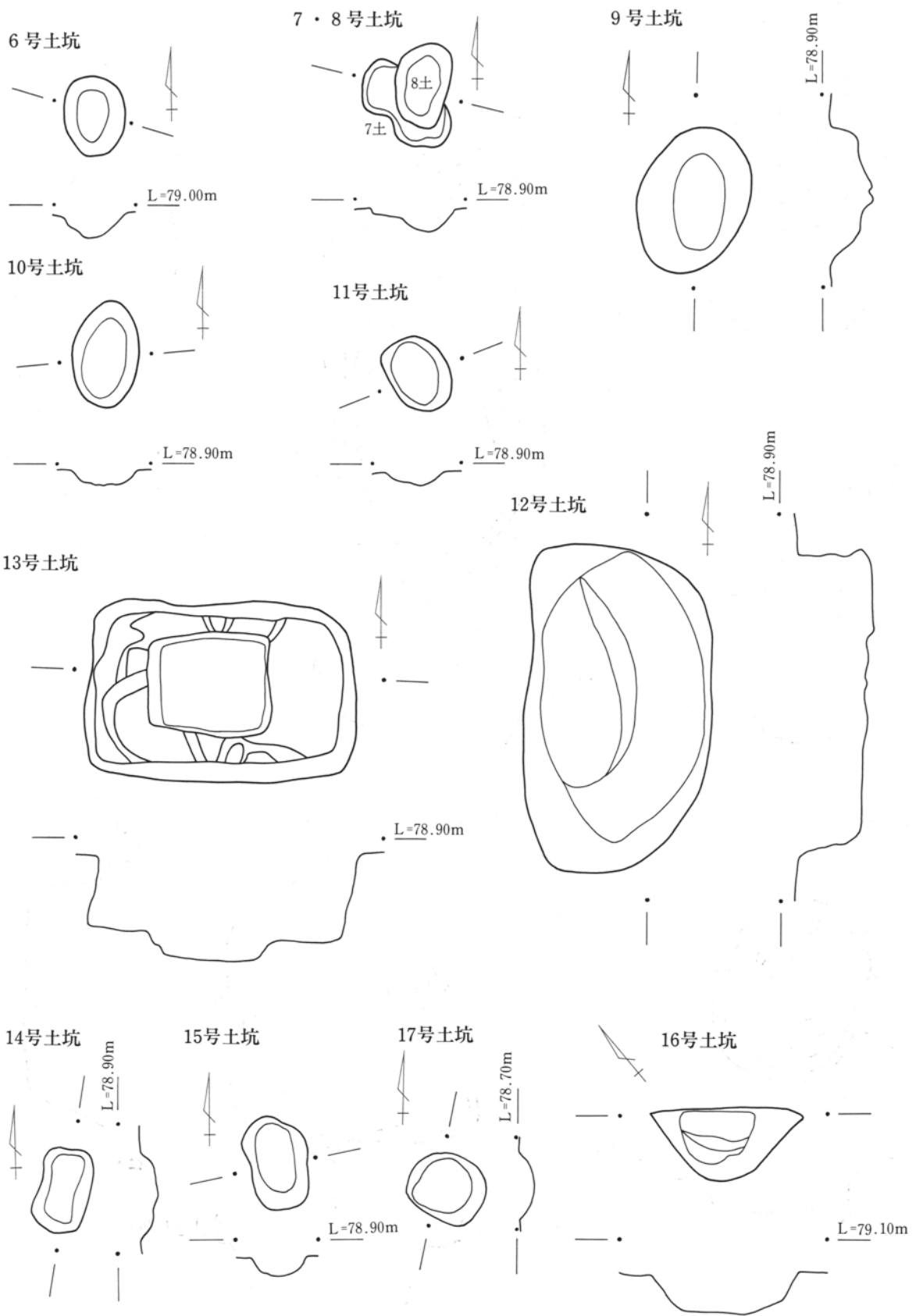
規模 楕円形を呈し、長軸方向を北北西にもち、長軸1.25m、短軸1.0m、深さ25cmほどを測る。

概要 As-B軽石を含む灰褐色土を覆土とし、遺物には土師器の細片が出土している。



第53图 F区 土坑(1)

S=1/40



S = 1/40

第54图 F区 土坑(2)

4号土坑

位置 F区の北側でやや東寄りにあり、X=36.020、Y=-67.660に位置する。

規模 不整な楕円形を呈し、長軸方向を南北にもち、長軸2.3m、短軸1.4m、深さは最深部で50cmほどを測る。

概要 土層断面では確認できなかったが、土坑の底面形状から2基の土坑が重複しているとも考えられる。中央から南側にかけての底面が最も深く、北側に張り出す部分では一段高い位置に底面がある。As-B軽石を多量に含む灰褐色土を覆土とし、遺物には土師器の細片が出土している。

5号土坑

位置 F区の北側で西寄りにあり、X=36.021、Y=-67.678に位置する。

規模 長方形を呈し、長軸方向を南北に持ち、長軸1.9m、短軸1.5m、深さ55cmを測る。

概要 底面は平坦となり、底面近くから小礫が検出されている。As-B軽石を含む灰褐色土を覆土とし、遺物には土師器の細片が出土している。

6号土坑

位置 F区の北側でやや西寄りにあり、X=36.028、Y=-67.670に位置する。

規模 楕円形を呈し、長軸方向を南北にもち、長軸55cm、短軸45cm、深さ15cmほどを測る。

概要 As-B軽石を多量に含む褐色土を覆土とし、遺物の出土はない。

7・8号土坑

位置 F区の北側で東寄りにあり、X=36.010、Y=-67.660に位置する。

規模 円形ないし楕円形を呈し、径40cm前後、深さ5～15cmを測る。

概要 7・8号土坑が重複しているが、新旧は不明。As-B軽石を多量に含む褐色土を覆土とし、遺物の出土はない。

9号土坑

位置 F区の南側で東寄りにあり、X=35.975、Y=-67.669付近に位置する。

規模 楕円形を呈し、長軸方向を北北東にもち、長軸1.0m、短軸70cm、深さ30cmほどを測る。

概要 As-B軽石を含む灰褐色粘質土を覆土とし、遺物の出土はない。

10号土坑

位置 F区の南側で西端にあり、X=35.971、Y=-67.684付近に位置する。

規模 楕円形を呈し、長軸方向を南北にもち、長軸70cm、短軸45cm、深さ10cmほどを測る。

概要 As-B軽石を含む褐色土を覆土とし、遺物の出土はない。

11号土坑

位置 F区の中央にあり、X=36.004、Y=-67.666付近に位置する。

規模 円形を呈し、径45cm前後、深さ10cmほどを測る。

概要 As-B軽石を多量に含む褐色土を覆土とし、遺物の出土はない。

12号土坑

位置 F区の中央で東寄りにあり、X=36.003、Y=-67.660に位置する。

規模 楕円形を呈し、長軸方向を南北にもち、長軸2.2m、短軸1.3m、深さは最深部で45cmほどを測る。

概要 底面は南側の半分が一段低くなり、平坦面をなす。As-B軽石を含む灰褐色土を覆土とし、遺物の出土はない。

13号土坑

位置 F区の中央で東寄りにあり、X=36.005、Y=-67.660に位置する。

規模 長方形を呈し、長軸方向を東西にもち、長軸1.8m、短軸1.2m、深さは最深部で70cmほどを測る。

概要 底面の中央部が、長軸80cm、短軸70cmの長方形状に一段低くなり、平坦面をなす。As-B軽石を含む灰褐色土を覆土とし、遺物の出土はない。

14号土坑

位置 F区の中央で東端にあり、X=35.989、Y=-67.660に位置する。

規模 長方形を呈し、長軸方向を北北東にもち、長軸55cm、短軸35cm、深さ10cmほどを測る。

概要 As-B軽石を多量に含む暗褐色土を覆土とし、遺物の出土はない。

15号土坑

位置 F区の中央で東端にあり、X=35.990、Y=-67.660に位置する。

規模 楕円形を呈し、長軸方向を南北にもち、長軸60cm、短軸40cm、深さ10cmほどを測る。

概要 As-B軽石を含む褐色土を覆土とし、遺物の出土はない。

16号土坑

位置 F区の北壁の東寄りにあり、X=36.027、Y=-67.660付近に位置する。

規模 形状は不明で、北壁での最長は1.0mを測り、深さ25cmを測る。

概要 調査区際であったため、全体を明らかにできなかった。As-B軽石を含む褐色土を覆土とし、遺物の出土はない。

17号土坑

位置 F区の南側中央にあり、X=35.981、Y=-67.678付近に位置する。

規模 円形を呈し、径50cm、深さ10cmほどを測る。

概要 As-B軽石を含む褐色土を覆土とし、遺物の出土はない。

溝

調査区のほぼ中央で、1～3号溝の3条の溝が検出されている。この内、東西方向に延びる1・3号溝は先項で説明した近世溝である。2号溝は南東方向に延びる短い溝であり、1・3号溝と交差するが古い溝である。

耕作痕と考えられる短い溝状の遺構

調査区の南側に集中して検出され、比較的短い溝が連続している。これらの短い溝は、概ね南北方向に延びるようにあり、一部に東西方向のものが混在する。通常の溝とは異なる様相を呈し、遺構の特定は判断し難いが、調査時点の所見として耕作痕の可能性を考えた。勿論、耕作物の特定もできる訳ではない。

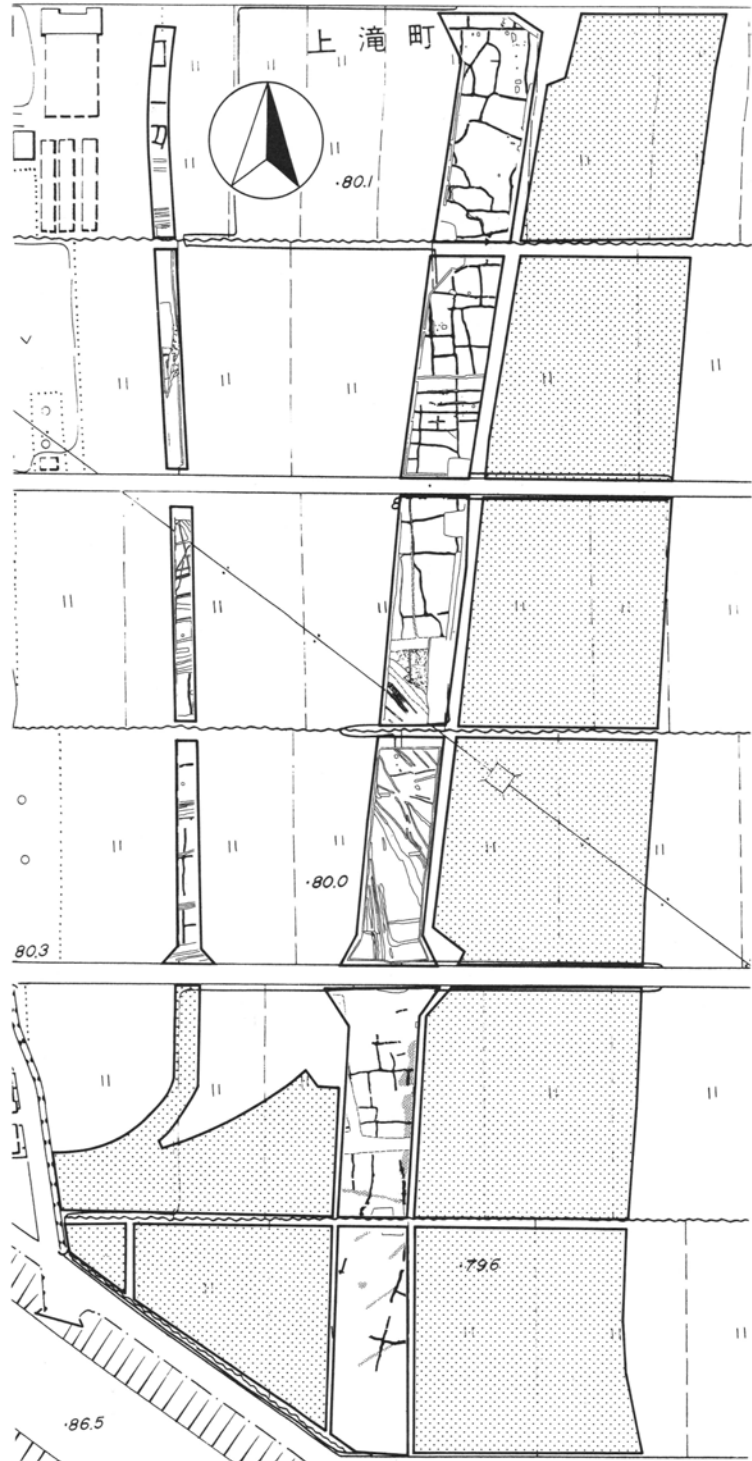
第4節 第3面の遺構（平安時代後期面）

第3面は、天仁元（1108）年の噴火とされる浅間山を給源としたAs-B（浅間-B）軽石降下による軽石層下面（軽石層で覆われた面）で検出された遺構を扱っている。軽石の降下年代から、平安時代後半の遺構として年代が特定できる遺構である。

このAs-B軽石は、群馬県内のほぼ全域に降下した軽石で、上野国内の田畑が壊滅状態にあったことを『中右記』に知るところである。これまでの発掘調査から、広域テフラとしてのAs-B軽石に覆われた遺跡が数多く調査され、水田の調査事例だけでも370余以上の調査例が上げられる。浅間山に近い富岡市や安中市、高崎市・藤岡市といった西毛地域はもとより、前橋市や伊勢崎市の周辺地域も含め、東毛地域では邑楽町藤川堰遺跡（1996）、さらに北毛地域での沼田市下川田下原遺跡・下川田平井遺跡（1993）からもAs-B軽石に覆われた水田が報じられている。

本遺跡の周辺でも、As-B軽石下の水田調査事例は多い。本調査区に隣接する北関東調査分でも同様であるが、北側の宿横手三波川遺跡をはじめとして西横手遺跡群・萩原団地遺跡、利根川の対岸には横手早稲田遺跡等、南側の上滝五反畑遺跡・下滝天水遺跡、西側で井野川の対岸（右岸）となる中大類金井遺跡・下大類遺跡・矢中村東遺跡等がある。

遺跡地の北側を流れる滝川は、江戸時代に開削された用水路であり、中世以前に存在した川ではな



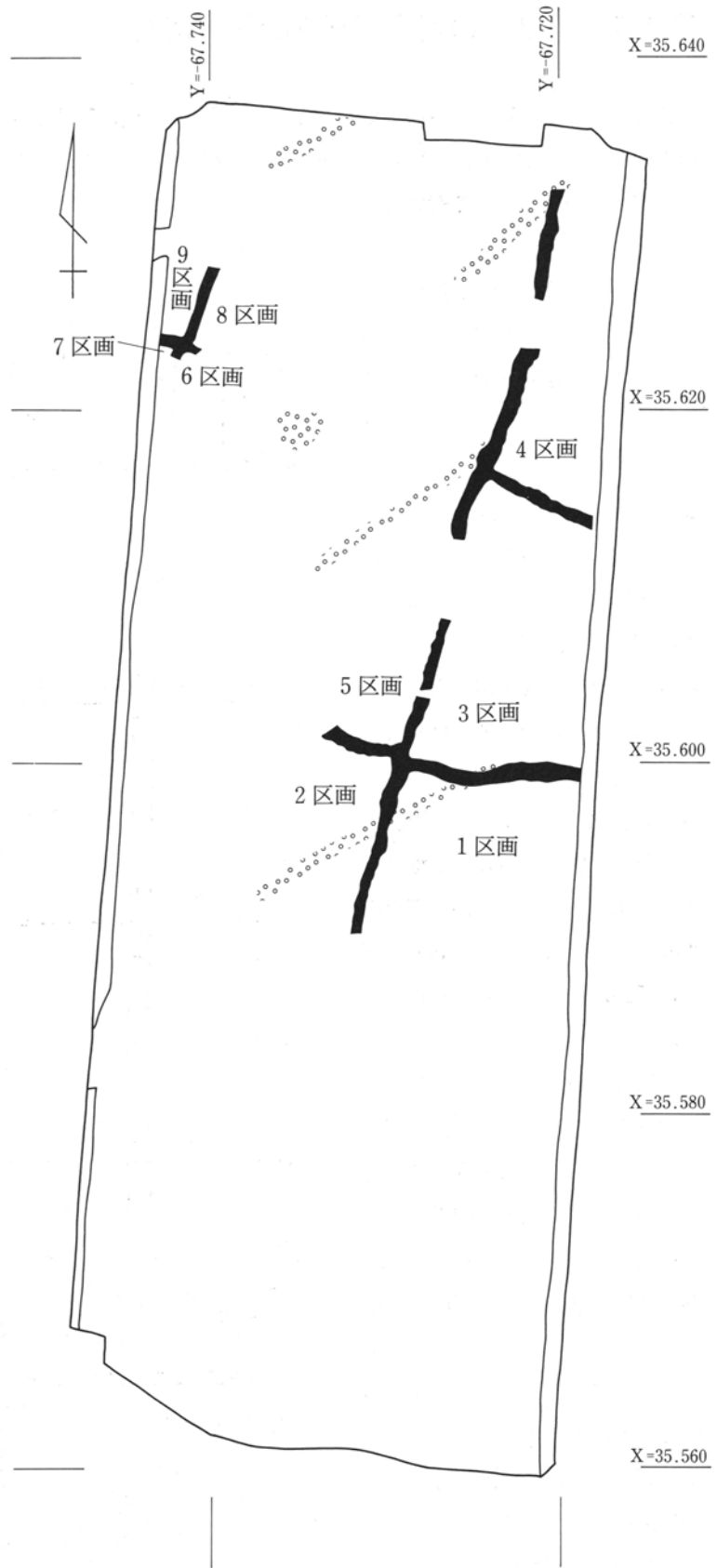
第55図 第3面の全体図

S = 1/2500

い。また、遺跡地の北を東流する現在の利根川は、戦国時代に現在の流路へ変流した姿であり、変流以前の利根川は前橋市の北側を流れる桃の木川の流路を流れていた。しかし、変流した現利根川以前にも、同様な川の流路が存在したものと考えられてもいる。とすれば、その現利根川以前に存在した川の流路から、遺跡地の西側で南流する井野川までの間は同一の低地帯であったことになる。このため、北隣の宿横手三波川遺跡で検出された遺構と別視することはできない。同様に、南側の上滝五反畑遺跡・下滝天水遺跡での遺構についても同じことである。言い換えれば、この両川の間広がる低地帯の軽石下水田が、どのような姿で営まれていたかを知ることができるからである。今一連の調査では、かなりの調査面積となっていることもあり、果たして条里制水田と言われる水田の耕地区画が存在するのか、或いはどこまで条里区画について迫ることができるのか、興味湧く視点である。

本調査で検出された遺構は、C区・D区の一部を除くほぼ全面で畦畔を伴う水田が確認されおり、C区では畠と溝が主に検出され、D区の一部に荒れた耕作地および畠とも考えられる耕作痕状の痕跡が検出された。また、部分的ではあるが、馬蹄の痕跡と考えられるものも数カ所で検出されている。

以下、各区ごとに検出された遺構について説明する。



S = 1 / 400

第56図 A区の遺構配置図(本線)



第57図 A区 水田と水田面に残る馬蹄痕列

A区

A区で検出された遺構には、畦畔を伴う水田が9区画以上、馬蹄痕および馬蹄痕列がある。これらの遺構は、調査区の中央から北側にかけて検出されており、全体に良好な依存状態にはない。(第56図)

各遺構の説明は、以下の通りである。

水田 (第57図)

1区画

調査区の中央で、東寄りに位置する。区画の西側は2区画および北側に3区画と接するが、両区画との境は比較的低い畦によって画されている。東・南側の区画畦は検出できなかった。このため、本区画の規模・形状は不明。

2区画

調査区のほぼ中央に位置する。区画の東側に1区画および北側に5区画と接するが、両区画との境は比較的低い畦によって画されている。西・南側の区画畦は検出できなかった。このため、本区画の規模・形状は不明。

3区画

調査区の中央で、東寄りに位置する。区画の南側に1区画および北側に4区画と接するが、相対する両区画との境は比較的低い畦によって画される。西側は5区画と接するが、区画境を低い畦によって画されるものの、途中の一部が不明である。この不明の間で、新たな区画境の畦が存在する可能性がないものと考えた。区画の形状は、方形とは異なる歪んだ形状とも考えられるが、その規模は不明。

4区画

調査区の北側で、東端に位置する。区画の南側は3区画と接し、区画境を低い畦によって画される。西側についても、区画境は低い畦によって画されるものの、途中の一部が不明である。区画の規模・形状は不明。

5区画

調査区のほぼ中央に位置する。区画の南側に2区画および東側に3区画と接するが、両区画との境は比較的低い畦によって画されている。北・西側の区画畦は検出できなかった。調査区の西端で6区画とした区画があるが、同一区画となる可能性もあるが、ここでは別な区画として扱った。区画の規模・形状は不明。

6～9区画

調査区の北側で、西端に位置する。低い畦が十字に交差することから、便宜的に6～9区画の四区画を設定した。6区画は、先の5区画と同一区画の可能性もあるが、別区画としている。同様に、8区画も東端の4区画に接する区画範囲の可能性はある。各区画の規模・形状は不明。

馬蹄痕および馬蹄痕列 (第57図)

検出された水田面からは、馬蹄痕および馬蹄痕列が検出されている。6区画のやや東側に、馬蹄痕がまとまる部分が1カ所存在する。

また、馬蹄痕が連続して連なる状況を呈する馬蹄痕列が、4条ほど検出されている。各列の方向は同じで、いずれも北東方向に延びている。南端の列は、2区画から1区画、3区画へと斜めに貫く様にあり、区画畦

上にも馬蹄痕が乗る。この南端の列から次の列までの間は、約14m程隔てている。次の列は、5区画のあたりから4区画へ斜めに延びる列で、やはり区画畦上にも馬蹄痕が乗る。次の列までの間は、約8m程隔てている。次も4区画へ斜めに延びる列で、やはり区画畦上にも馬蹄痕が乗る。北端の列も同様に斜めに延びる列である。こうした水田面に残された馬蹄痕列が、畦の上にまで乗る状況は、正に畦を踏み潰している状況であり、どのような作業の結果の痕跡なのか疑問を残す。畦を踏み潰すということは、少なくとも馬耕(馬を使って水田を耕す)による痕跡とは異なるものと考えられよう。

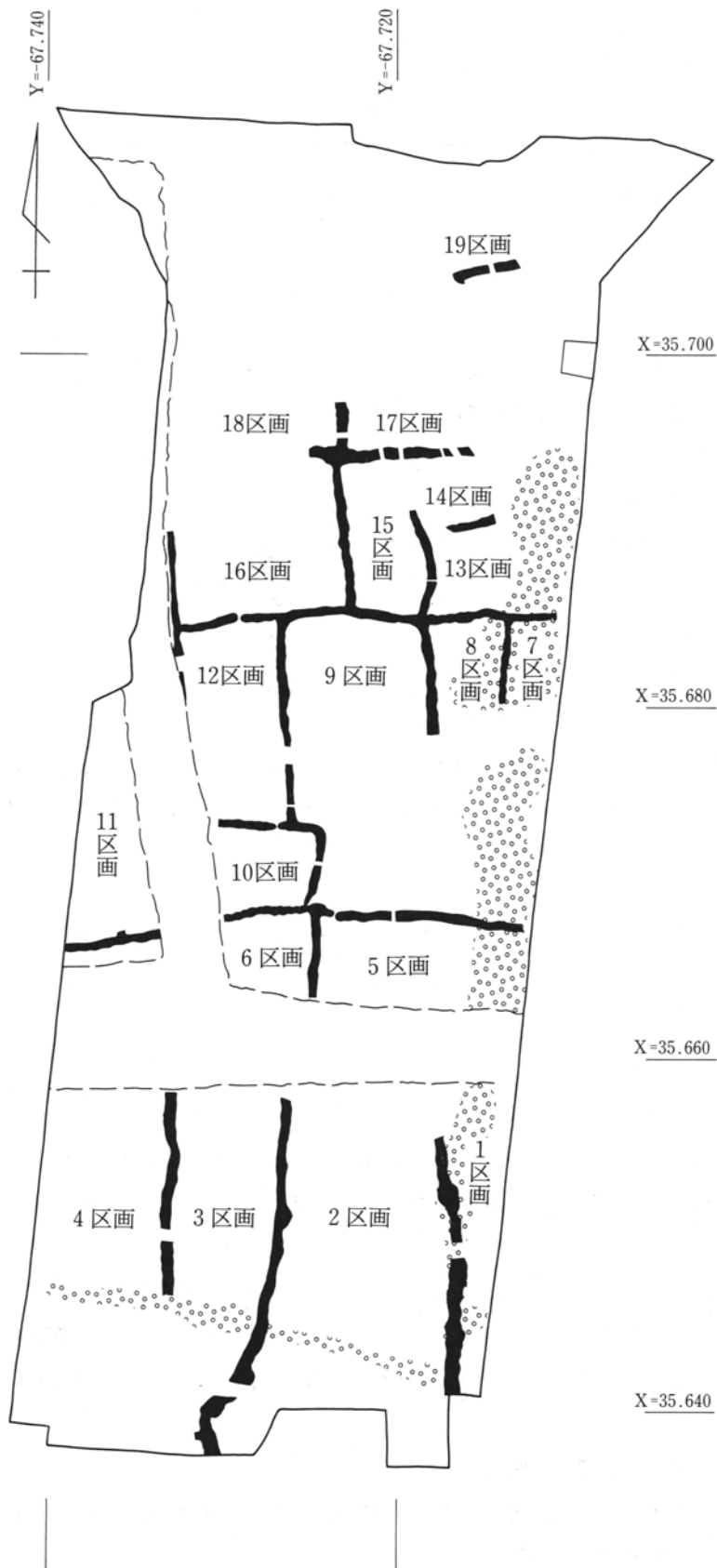
B区

B区で検出された遺構には、畦畔を伴う水田が18区画以上、馬蹄痕および馬蹄痕列がある。これらの遺構は、調査区全体にわたるが、あまり良好な依存状態にはない。(第58図)各遺構の説明は、以下の通りである。

水田 (第59図)

1区画

調査区の南側で、東端に位置する。区画の西側は2区画と接するが、区画との境は比較的低い畦によって画されている。この西側区画畦以外の畦は検出できなかった。このため、本区画の規模・形状は不明。



第58図 B区の遺構配置図(本線)

2 区画

調査区の南側で、東寄りに位置する。区画の東側は1区画および西側は3区画と接し、両区画との境は低い畦によって画されている。北・南側の区画畦は検出できなかった。西側の区画畦が、南端で大きく屈曲している点では、この辺りに南側の区画畦が存在する可能性もある。区画の規模・形状は不明であるが、歪んだ形状を呈するものと考えられる。

3 区画

調査区の南側で、西寄りに位置する。区画の東側は2区画および西側は4区画と接し、両区画との境は低い畦によって画されている。北側は6区画と接すると考えられるが、区画畦は検出できなかった。南側は、西側の畦を延長した場合に、東側の2区画との区画畦が屈曲した部分に取り付くと考えれば、南端が尖る形状となる。

4 区画

調査区の南側で、西端に位置する。区画の東側は3区画と接し、区画の境は低い畦によって画されている。北・南側の区画畦は検出できなかった。区画の規模・形状は不明であるが、東側の畦の状況から歪んだ形状を呈するものと考えられる。

5 区画

調査区の中央で、東寄りに位置する。区画の西側は6区画と接し、区画の境は低い畦によって画されている。北側も同様で、区画の境は低い畦によって画されている。南側は1・2区画と接する考えられるが、区画畦は検出できなかった。区画の規模・形状は不明。また、北辺となる畦の西端に、水口と考えられる切れ間が存在する。

6 区画

調査区の中央で、西寄りに位置する。区画の東側は5区画と接し、区画の境は低い畦によって画されている。北側は10区画および11区画と接するが、境は低い畦によって画されている。南側は3・4区画と接する考えられるが、区画畦は検出できなかった。区画の規模・形状は不明。

7 区画

調査区の中央で、東端に位置する。区画の西側は8区画および北側は13区画と接し、両区画との境は低い畦によって画されている。南側の区画畦は検出できなかった。他の区画より比較的小さい区画のようであるが、区画の規模・形状は不明。

8 区画

調査区の中央で、東寄りに位置する。区画の東側は7区画および西側は9区画と接し、両区画との境は低い畦によって画される。北側は13区画と接し境は低い畦によって画されている。南側の区画畦は検出できなかった。7区画と同様に、他の区画より比較的小さいないし細長い区画のようであるが、区画の規模・形状は不明。北辺で4.3mを測る。

9 区画

調査区のほぼ中央に位置する。区画の東側は8区画と接し、区画との境は低い畦によって画される。北側は15区画および16区画と接し、両区画との境は低い畦によって画される。西側も12区画および10区画と接し、両区画との境は低い畦によって画される。この西側での10区画との接し方は、10区画が本区画に飛び出るように接しており、10区画の北東隅辺りで南側の境がある可能性もある。しかし、南側での区画畦は検出できなかった。区画の規模・形状は不明。北辺で7.5mを測る。

10区画

調査区の中央で、西寄りに位置する。区画の東側は9区画と接すると思われ、区画との境は低い畦によって画される。北側は12区画と接し、境は低い畦によって画される。西側は11区画と接すると考えられるが、区画畦は不明。南側は6区画と接し、境は低い畦によって画されている。他の区画より比較的小さい区画と思われる。西辺で4.3mを測る。また、北辺となる畦の中央東寄りには、水口と考えられる切れ間が存在する。東辺の南端においても、水口と考えられる切れ間が存在している。

11区画

調査区の中央で、西端に位置する。区画の東側は10区画および12区画と接し、両区画との境は低い畦によって画されるようである。南側も低い畦によって画されている。区画の規模・形状は不明。

12区画

調査区の中央で、西寄りに位置する。区画の東側は9区画および南側は10区画、北側は16区画と接し、この三方の区画境は低い畦によって画される。西側も低い畦によって画されるようであり、11区画と接すると考えられる。区画の形状は、南北方向に長軸を持つ概ね長方形を呈すると考えられる。長軸方向となる東辺で11.3m、短軸方向となる北辺で5.5mを測ることができる。また、北辺となる畦の中央近くには、水口と考えられる切れ間が存在する。南辺の東端においても、水口と考えられる切れ間が存在している。土地の傾斜からして、北側の16区画から取水し、南側の10区画へ排水したことが窺える。

13・14区画

調査区の北側で、東寄りに位置する。15区画の東側にあり、13区画と14区画の間には不鮮明であるが低い畦によって画されることから分別した。結果、南側を13区画、北側を14区画とした。15区画との境は、低い畦によって画される。13区画の南側は7・8区画と接し、両区画との境は低い畦によって画される。14区画の北側は17区画と接し、境は低い畦によって画されている。両区画の規模・形状は不明。

15区画

調査区の北側で、ほぼ中央に位置する。区画の東側は13・14区画と接し、両区画との境は低い畦によって画される。南側は9区画および西側は16区画、北側は17区画と接し、この三方の区画境は低い畦によって画されている。区画の形状は、南北方向に長軸を持つ歪んだ長方形を呈する。長軸方向となる西辺で8m、短軸方向となる南辺で3.6mを測ることができる。

16区画

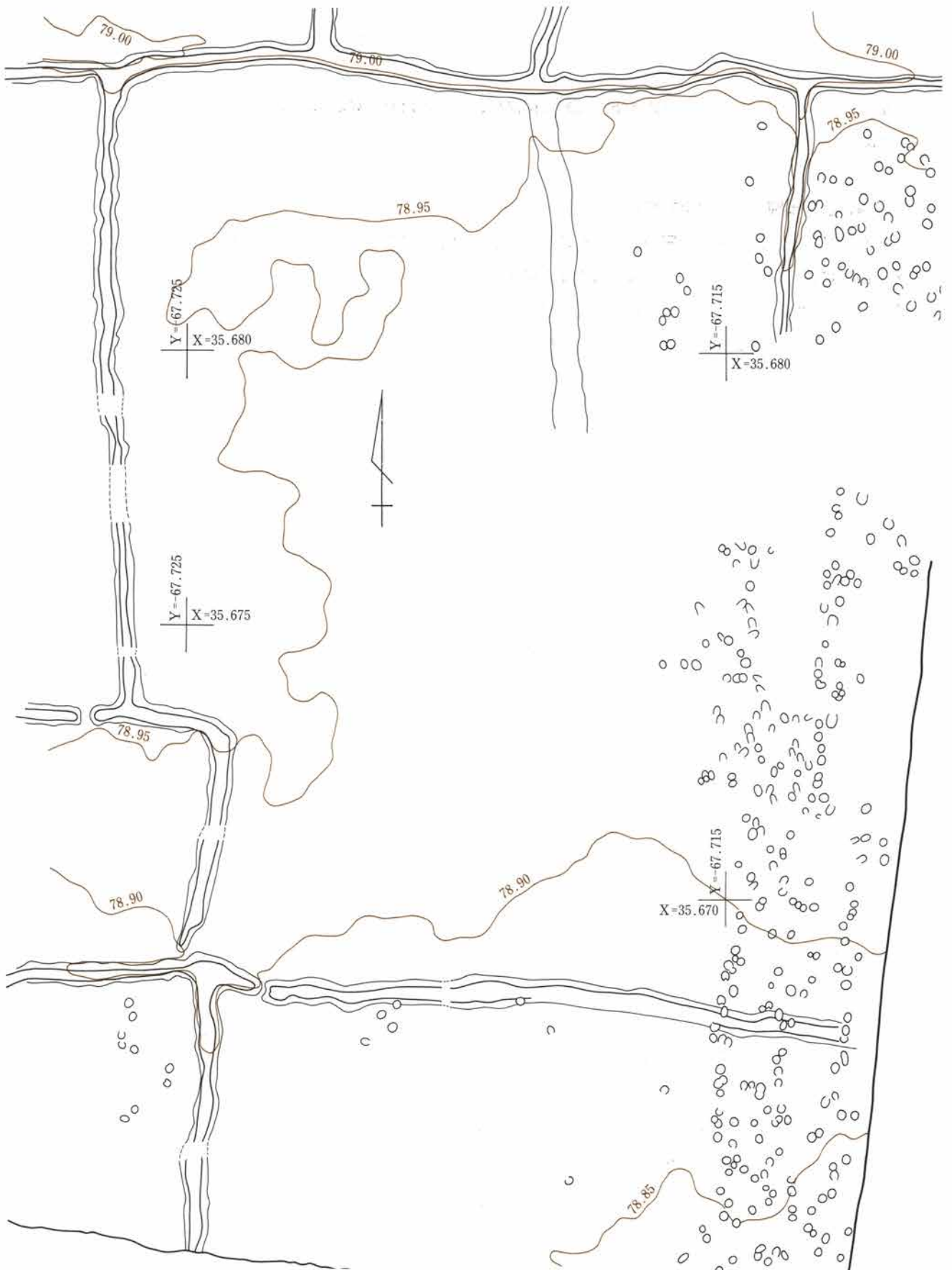
調査区の北側で、西寄りに位置する。区画の東側は15区画と接し、区画境は低い畦によって画される。南側は9・12区画と接し、両区画との境は低い畦によって画される。北側は18区画と接するが、区画境となる畦が東端に僅かに残る。西側も低い畦によって区画を画している。区画の形状は、東西方向が僅かに長い概ね正方形を呈する。東西方向となる南辺で9.5m、南北方向の東辺で8.5mを測ることができる。また、南辺の中央よりやや西寄りには、水口と考えられる切れ間が存在する。

17区画

調査区の北側で、東寄りに位置する。区画の西側は18区画と接し、区画境は低い畦によって画される。南側は14・15区画と接し、両区画との境は低い畦によって画される。北側は不明であるが、場合によっては19区画と接する可能性がある。区画の規模・形状は不明。

18区画

調査区の北側で、西寄りに位置する。区画の東側は17区画と接し、区画境は低い畦によって画される。南



第59図 B区 水田と水田面に残る馬蹄痕

S = 1 / 100

側は僅かに検出された畦から、16区画と接し区画境で画されたことが解る。区画の規模・形状は不明。

19区画

調査区の北側で、東寄りに位置する。区画の南側に、区画のための畦が僅かに残る。区画の規模・形状は不明。

馬蹄痕および馬蹄痕列 (第59図)

馬蹄痕は、13・14区画の東側から7区画および8区画の東側にかけて集中してみつかっている。さらに、その南側に続くように、5区画の東側および1区画にかけての範囲に顕著にみられる。この調査区の東際で見られる馬蹄痕は、先のA区で見られた馬蹄痕列とは全く異なるあり方で、ある範囲内だけに疎ら・集中といった状態である。しかも、畦の上にも馬蹄痕が存在し、区画を無視するかのように複数の区画に跨っている。

一方、馬蹄痕列も調査区の南側で検出されている。2～4区画に跨り、東西方向と言うよりは、やや南よりに向く。先のA区で見られた馬蹄痕列とは、全く異なる方向である。勿論、馬蹄痕は畦の上にも乗り、畦は潰れた状態にある。

C区

C区は、先述したB区より高位にあり、微高地上に当たる。この微高地は、後述するD区の南側まで続き、それよりも北側は水田地となる。そうした微高地上にあるためか、他の調査区とは異なり、As-B軽石層の堆積はみられなかった。その結果、検出された遺構には、畦畔を伴う水田区画はない。むしろ、土坑3基、溝が多数といった内容であり、他とは大きく異なる。さらに、畝状の畝・畝間が併走する部分(畝状遺構)や、畝に関わるとも考えられる耕作痕状の痕跡が検出されている。(第60図)

なお、検出された各遺構は、As-B軽石層に覆われたものではなく、その覆土に純層に近いAs-B軽石ないしAs-B軽石を多量に含む土であった。このことは、他の調査区での水田よりも新しい時期の遺構であることを示している。本来ならば、先項の第2面で扱うべき遺構であるが、調査時の手順上から本項で扱うこととした。

各遺構の説明は、以下の通りである。

土坑 (第61図)

調査区の北側で、3基検出されている。

1号土坑 As-B下

位置 C区の北側でやや西寄りにあり、X=35.792、Y=-67.712に位置する。

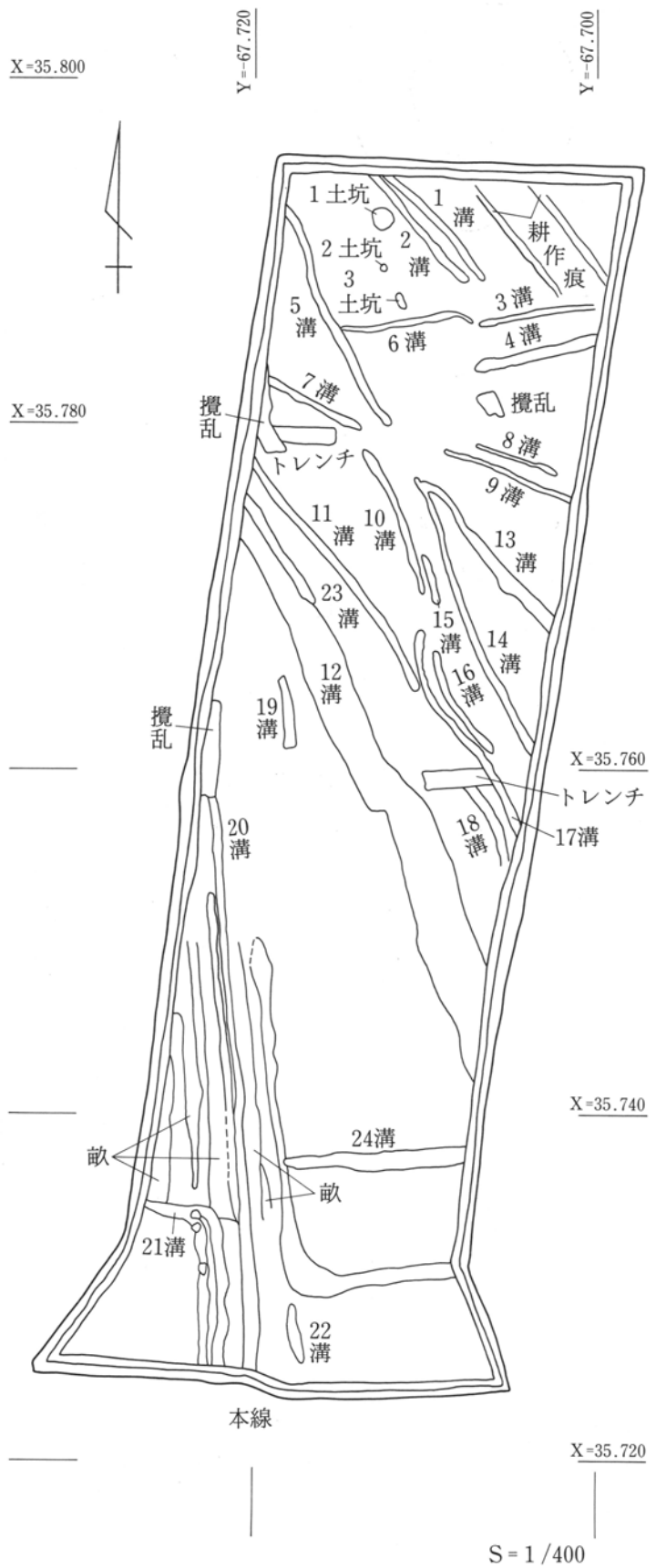
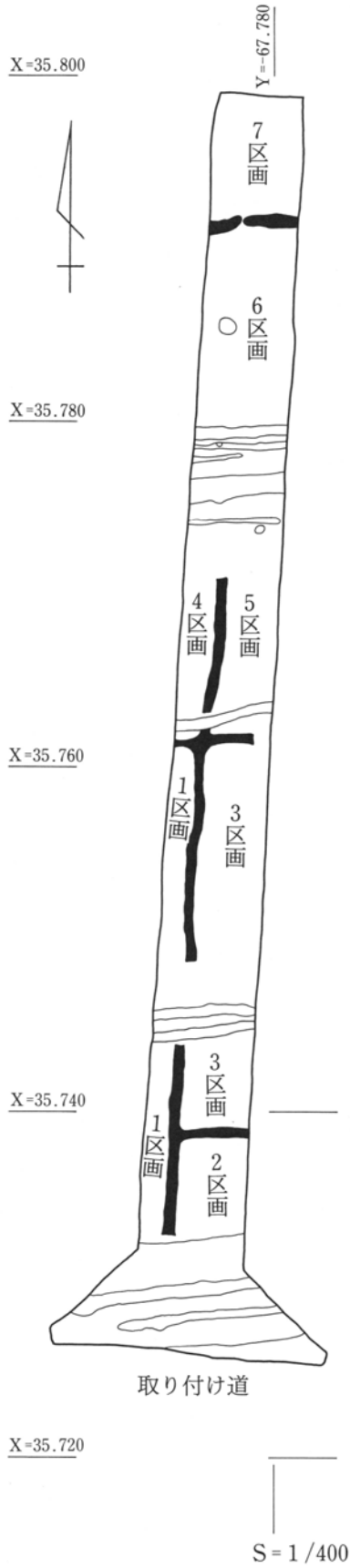
規模 円形を呈し、径1.25m、深さ40cmを測る。

概要 As-B軽石を含む明灰色土を覆土とし、遺物の出土はない。

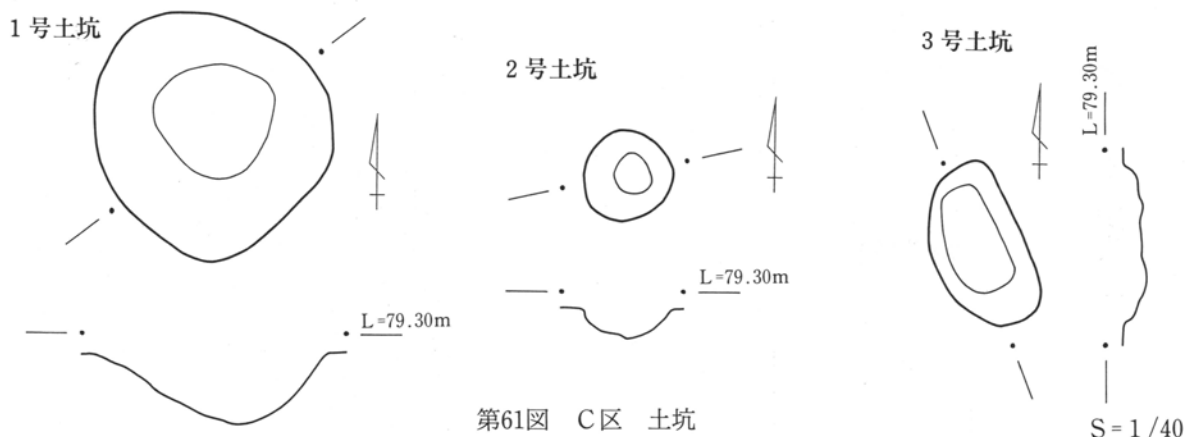
2号土坑 As-B下

位置 C区の北側でやや西寄りにあり、X=35.789、Y=-67.712付近に位置する。

規模 円形を呈し、径45cm、深さ15cmほどを測る。



第60図 C区の遺構配置図(本線・取り付け道)



第61図 C区 土坑

概要 As-B軽石を含む明灰色土を覆土とし、遺物の出土はない。

3号土坑 As-B下

位置 C区の北側にあり、X=35.787、Y=-67.711に位置する。

規模 楕円形を呈し、長軸方向を北北西にもち、長軸90cm、短軸50cm、深さ10cmほどを測る。

概要 As-B軽石を含む暗灰色土を覆土とし、遺物の出土はない。

溝

調査区の中央から北側にかけて、多くの溝が検出されている。その大半が南東方向に延びる溝であるが、3・4・6号溝のように東西方向に延びる溝も存在する。これらの溝幅は、40～50cm前後を測るものが大半である。中には、12号溝のように2.5mを測る幅の溝もある。

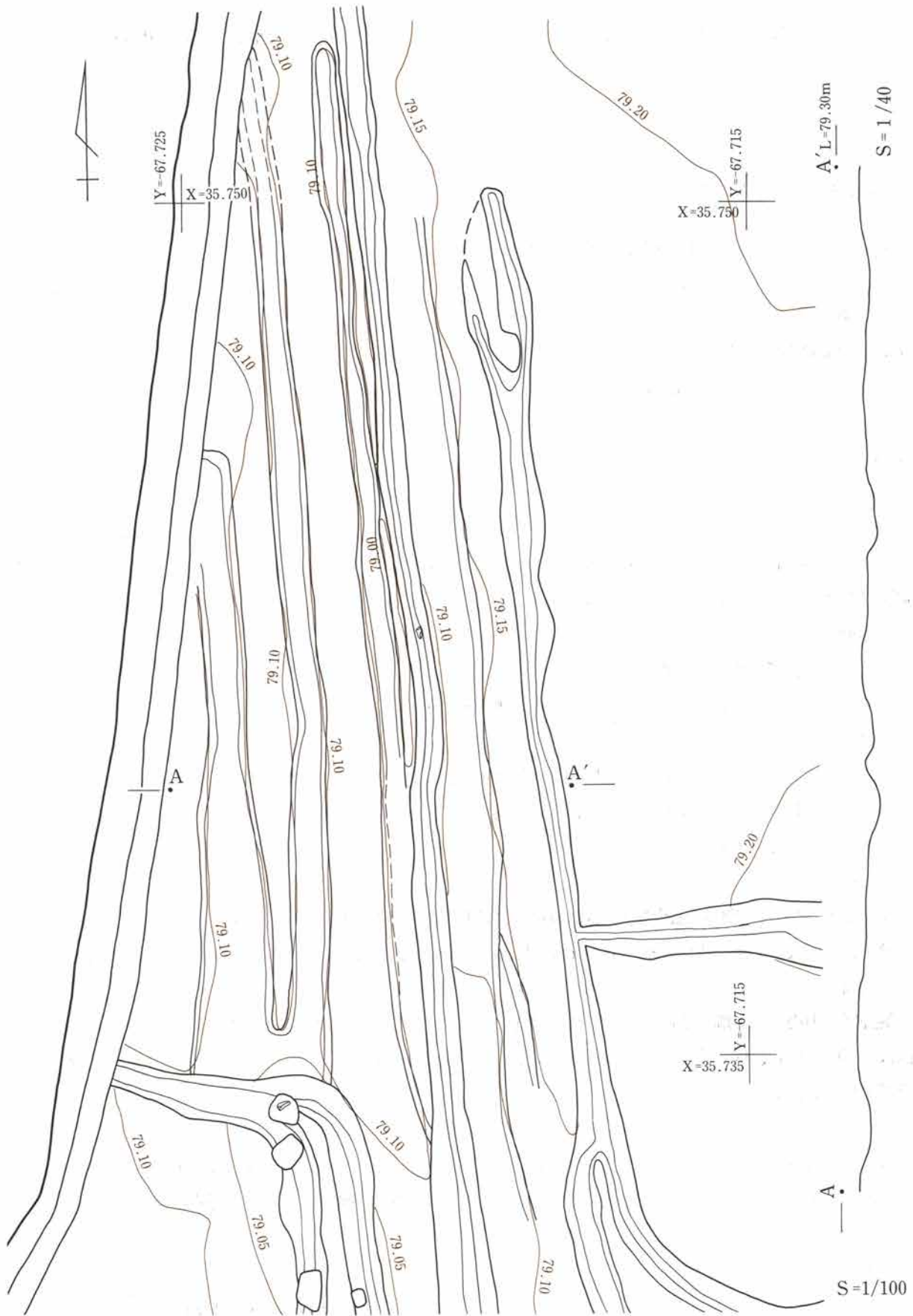
調査区の南側では、先述した第1面の近世以降の溝が残存しているが、本面での溝に20～22・24号溝が存在する。20号溝は畠状遺構の東側を南北方向に区画するかのよう延びる溝であり、畠状遺構の南側となる調査区の南端には21号溝がL字状にある。溝の覆土は、純層に近いAs-B軽石ないしAs-B軽石を多量に含む土である。

畠状遺構 (第62図)

調査区の南側の東端に位置する。畝となる帯状の高まりと、畝間となる溝状の部分が交互に併走する状態にある。畝・畝間の方向は南北方向にあり、畠状遺構の東側を20号溝、南側を21号溝によって区画されるようである。畝と畝間の比高差は5cmほどと、さほど高低差はない。また、畝間の幅よりも、畝の幅の方が広い。この畠状遺構を覆う堆積土は、As-B軽石を含む暗灰色土であり、As-B軽石の純層に覆われている訳ではない。このことから、本畠状遺構は、中世の遺構であると考えられる。

畠と考えられる耕作痕

調査区の北端の東側に検出された。純層に近いAs-B軽石を覆土とした溝状の遺構であり、同方向に2条検出された。溝内を細かく観察すると、浅い溝内の両側に小さな三角状の耕具痕のような跡が並列して存在する。しかし、耕具の特定はできていない。この耕作痕列の方向は、南東方向に延びるようであり、後述するD区の畠と考えられる耕作痕と一連の耕作痕と考えられる。この耕作痕の時期については、As-B軽石の純層で覆われている訳ではなく、決め難い点がある。As-B軽石降下以後の耕作痕の可能性もある。なお、



第62図 C区 畠状遺構

調査区の南側での畠状遺構とは、遺構を覆う堆積土から同時期と考え難く、純層に近いAs-B軽石という点で本耕作痕の方が古い遺構と考えたい。

C区取り付け道

検出された遺構には、溝が数条、畦畔を伴う水田が7区画以上である。調査は、As-B軽石層下面で中世遺構も含めて調査を行った。検出された溝は全て東西方向に延びるもので、その覆土にはAs-B軽石を含むものであった。つまり、水田とは異なる時期の遺構であり、本来、先項の第2面で扱うべき遺構である。一方、検出された水田は、あまり依存状況のよい状態ではなかった。(第60図)

ここでは、水田について以下に説明する。

水田

1区画

調査区の南側で、西端に位置する。区画の東側には2・3区画と接し、区画境は低い畦によって画される。北側は4区画と接し、低い畦によって画される。東辺となる畦は途中で不明瞭となるものの、中間に区画を画する畦が検出されていないため、一つの区画として扱った。区画の規模・形状等は不明。

2区画

調査区の南側で、東端に位置する。区画の西側には1区画と接し、区画境は低い畦によって画される。北側は3区画と接し、低い畦によって画される。区画の規模・形状等は不明。

3区画

調査区の南側で、東端に位置する。区画の西側は1区画と接し、区画境は低い畦によって画される。北側は5区画、南側は2区画と接し、低い畦によって画される。1区画と同様に、一つの区画として扱った。区画の規模・形状等は不明。

4区画

調査区の中央で、西端に位置する。区画の東側には5区画と接し、区画境は低い畦によって画される。南側は1区画と接し、低い畦によって画される。北側の区画畦は検出できなかった。区画の規模・形状は不明。

5区画

調査区の中央で、東端に位置する。区画の西側には4区画と接し、区画境は低い畦によって画される。南側は3区画と接し、低い畦によって画される。4区画と同様に、北側の区画畦は検出できなかった。区画の規模・形状等は不明。

6区画

調査区の北側に位置する。区画の北側には7区画と接し、区画境は低い畦によって画される。南側の区画畦は検出できなかったが、4・5区画と接する可能性が高い。区画の規模・形状等は不明。北辺の7区画と接する畦には、水口と考えられる畦の切れ間が存在し、7区画からの取水口であったことが窺える。

7区画

調査区の北端に位置する。区画の南側には6区画と接し、区画境は低い畦によって画される。区画の規模・形状等は不明。6区画と接する区画畦には水口があり、南側の6区画への取水口となる。

D区

D区で検出された遺構には、畦畔を伴う水田が10区画以上、耕作に伴うと考えられる荒地、畠とも考えられる耕作痕状の痕跡がある。これらの遺構は、調査区の中央から北側にかけて水田が検出されており、水田の南側にある東西方向の溝を挟んで荒地が、さらにその南側に畠の耕作痕が検出されている。この荒地や畠の耕作痕が検出された辺りは、水田地よりもやや高く、先のC区からの続きの微高地状となっている。また、水田地と微高地との境にある溝は、近世面で説明した7～9号溝であり、耕地の境として、この時期に存在していた可能性が極めて高い。図示した水田の平面図については、田面の凹凸の状態を極力表現したため、煩雑な図となっているが、敢えて凹凸状態を示した。なお、D・Eの中間とした現道路下の調査についても、本調査区に含めて説明する。(第63図)

各遺構の説明は、以下の通りである。

水田 (第64・65図)

1区画

調査区の中央から北側にかけての、西端に位置する。調査区内の水田の中で、最も高位にある。区画の東側は2・4区画と接するが、両区画との境は比較的低い畦によって画されているが不明瞭で、むしろ2・4区画の水田面が段差を有し低い。南側は先述した7～9号溝によって区画される。区画の規模・形状は不明。水田面には、凹凸の痕跡が残る。

2区画

調査区のほぼ中央に位置する。区画の東側は3区画と接し、区画境は低い畦によって画される。北側は4・5区画と接し、低い畦によって画される。西側は1区画と接するが、段差をもって本区画が低い。南側は先述した7～9号溝によって区画される。区画の形状は、やや歪むものの概ね長方形を呈し、東西方向に長軸をもつ。規模は、長軸方向で12.5m、短軸方向で7.5mを測り、面積は85.12m²を計測することができる。水田面は、無数の凹凸が残されている。人馬等の足跡の識別は不可能に近いが、区画の北東方向への対角線上に5区画へ連なる列状の痕跡が見られる。

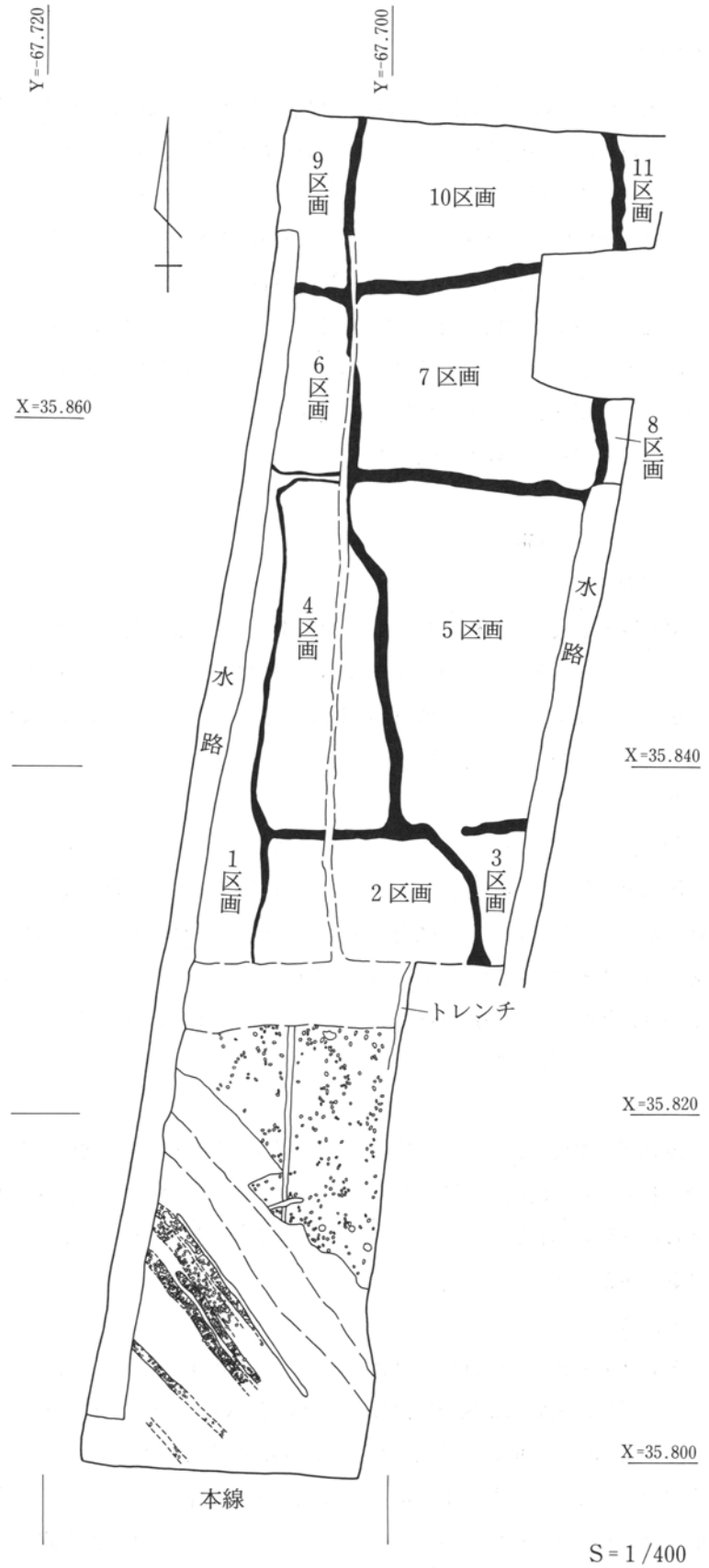
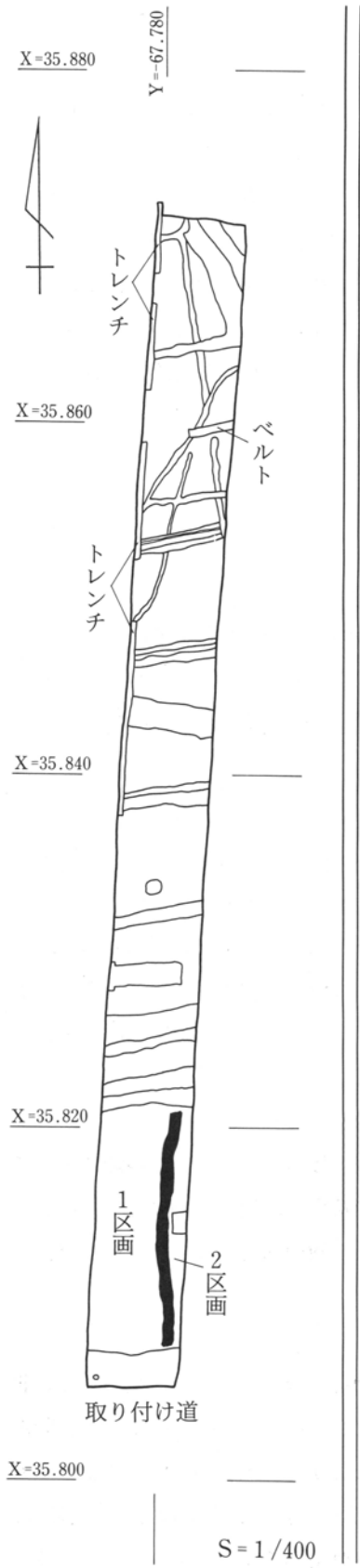
3区画

調査区の中央で、東端に位置する。区画の西側は2区画、北側は5区画と接し、区画境は低い畦によって画されている。南側は先述した7～9号溝によって区画される。5区画と接する北辺の西端には、水口と考えられる畦の切れ間が存在する。区画の規模・形状は不明。水田面には、無数の凹凸が残されているが、人馬等の足跡の識別は不可能。

4区画

調査区の中央で、西寄りに位置する。区画の東側は5区画と接し、区画境は低い畦によって画される。北側は6区画、南側は2区画と接し、区画境は低い畦によって画されている。西側は1区画と接するが、段差をもって本区画が低い。5区画との境となる東辺が蛇行するように歪むことから、区画の形状は不整な長方形を呈し、長軸方向を南北方向にもつ。規模は、長軸方向で20.3m、短軸方向の最も長い南辺で7mを測り、面積は121.16m²を計測することができる。水田面には、無数の凹凸が残されているが、人馬等の足跡の識別は不可能。

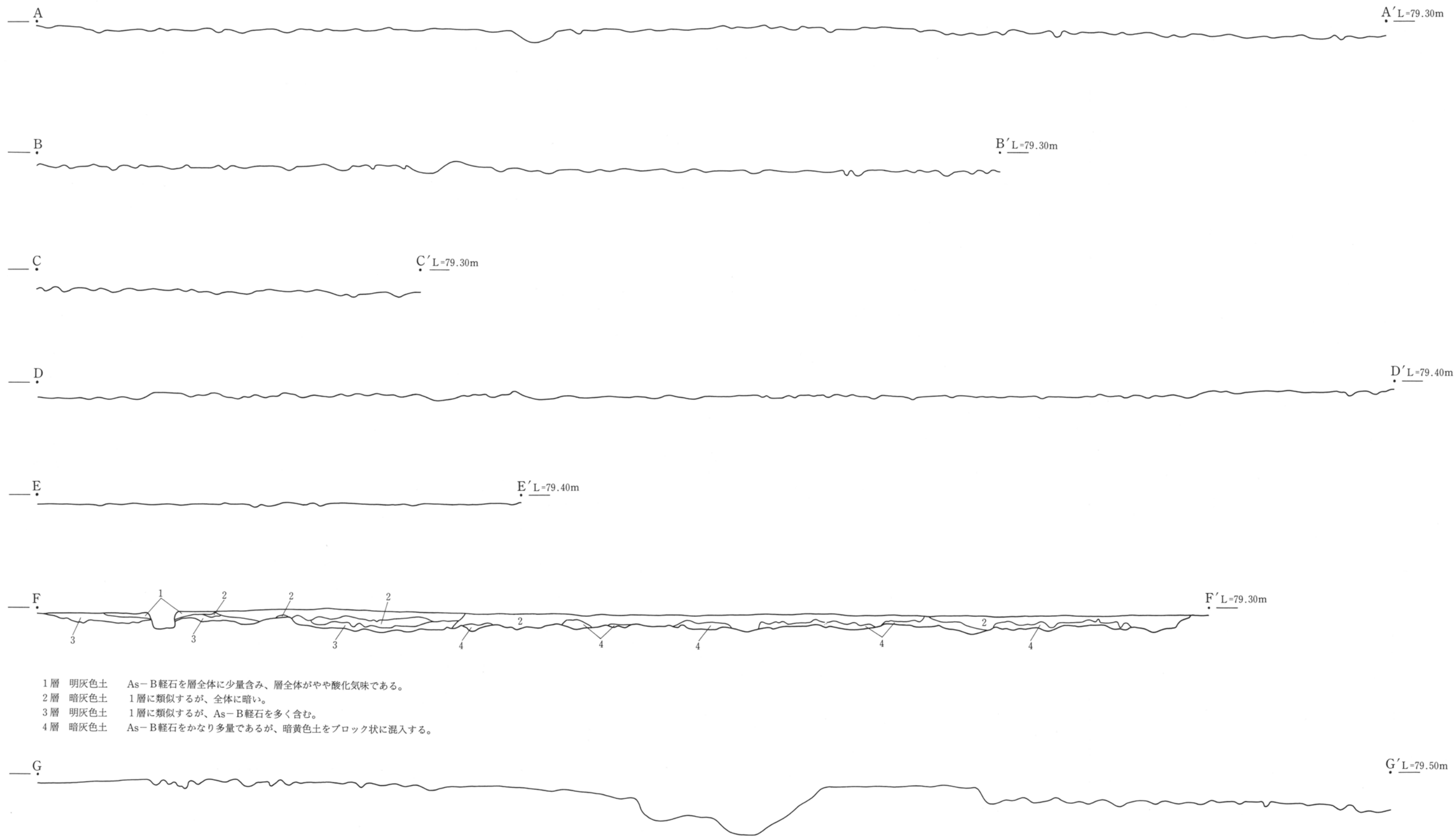
5区画



第63図 D区の遺構配置図(本線・取り付け道)



第64図 D区 水田の区画と水田面



- 1層 明灰色土 As-B軽石を層全体に少量含み、層全体がやや酸化気味である。
- 2層 暗灰色土 1層に類似するが、全体に暗い。
- 3層 明灰色土 1層に類似するが、As-B軽石を多く含む。
- 4層 暗灰色土 As-B軽石をかなり多量であるが、暗黄色土をブロック状に混入する。

S = 1/40

第65図 D区 水田の断面と荒地土層断面



第66図 D区 畠状遺構と荒地地状遺構

S=1/100

調査区の中央で、東寄りに位置する。区画の西側は4区画と接し、区画境は蛇行する低い畦によって画される。北側は7区画、南側は2・3区画と接し、区画境は低い畦によって画されている。南辺の3区画と接する部分には、水口と考えられる畦の切れ間が存在する。区画の形状は不明であるが、長軸方向を南北方向にもつ不整な長方形を呈すると考えられる。長軸となる南北方向で20mを測り、調査区内での面積は201.82㎡を計測することができる。水田面は、無数の凹凸が残されている。人馬等の足跡の識別は不可能に近いが、2区画から延びる列状の凹凸が北東方向へ連なる。先のA区の状況からすれば、この列状の凹凸が馬蹄痕列の可能性が強いが、馬とは断定し難い。

6区画

調査区の北側で、西端に位置する。区画の東側は7区画と接し、区画境は低い畦によって画される。北側は9区画、南側は4区画と接し、区画境は低い畦によって画されている。区画の規模・形状は不明であるが、南北方向の東辺で約10mを測る。水田面には、無数の凹凸が残されているが、足跡の識別は不可能。

7区画

調査区の北側で、ほぼ中央に位置する。区画の東側は8区画と接し、区画境は低い畦によって画される。西側は6区画と接し、境は低い畦によって画される。北側は10区画、南側は5区画と接し、区画境は低い畦によって画されている。8区画との境となる畦の北側は不明であるが、区画の形状は概ね方形を呈すると考えられる。東西方向の南辺では14m、南北方向の西辺では10mを測り、面積は134.16㎡を計測することができる。水田面には、無数の凹凸が残されているが、人馬等の足跡の識別は不可能。

8区画

調査区の北側で、東端に位置する。区画の西側は7区画と接し、区画境は低い畦によって画される。僅かに検出された区画であり、他は不明。

9区画

調査区の北端で、西端に位置する。区画の東側は10区画と接し、区画境は低い畦によって画される。南側は6区画と接し、境は低い畦によって画される。北側については、次のE区3区画と接するというよりは、本9区画とE区1区画が同一の区画である可能性が高い。調査区内の水田面には、無数の凹凸が残されているが、人馬等の足跡の識別は不可能。

10区画

調査区の北端で、ほぼ中央に位置する。区画の西側は9区画と接し、区画境は低い畦によって画される。南側は7区画と接し、区画境は低い畦によって画される。東側は低い畦によって区画境が画されている。北側については、9区画と同様に次のE区3区画と同一区画である可能性もあるが、かなり広い区画すぎるため疑問もある。調査区内の水田面には、無数の凹凸が残されているが、人馬等の足跡の識別は不可能。

耕作に伴うと考えられる荒地 (第65・66図)

調査区の南側で、近世面で説明した7～9号溝と11号溝の間に挟まれた三角地に位置する。水田地の南限を画するのが、東西方向に延びる7～9号溝であり、その初源はこの時期まで遡ると考えられる。その南側で11号溝との間は、C区へ続く微高地への変換部となる。この部分は、As-B軽石を含み、暗黄色土ブロックを多量に混在させる土を覆土とし、底面が凹凸の状態に荒れた状況を呈している。断面観察によると、底面近くの覆土ほどAs-B軽石量が多く、暗黄色土ブロックがはっきりしている。底面は暗黄色土であり、覆土中の暗黄色土ブロックと同じ土である。つまり、荒起状の耕作の結果、底面が凹凸した状態になったと考

えられ、部分的には畝状を呈するようにもみえる。また、底面は、水田面のような粘質をおびた状態ではなく、むしろ粘質のないパサパサした状態にある。

なお、この耕作地の時期としては、水田面を覆うAs-B軽石層がみられなかったことや、覆土中にAs-B軽石を含むこと等から、As-B軽石降下以後の遺構と考えられる。よって、As-B軽石下水田より新しい耕作地であり、本来ならば第2面の中世遺構として扱うべきものである。

畝と考えられる耕作痕 (第65・66図)

先の耕作に伴うと考えられる荒地地の南側で、11号溝を隔てた微高地上に位置する。純層に近いAs-B軽石を覆土とした溝状の遺構であり、同方向に数条検出された。溝内を細かく観察すると、浅い溝内の両側に小さな三角状の耕具痕のような跡が並列して存在する。しかし、耕具の特定はできていない。この耕作痕列の方向は、南東方向に延びるようになり、11号溝と同一方向ともいえる。また、この状況は、先のC区北側で検出されている耕作痕列と、一体をなすものと考えられる。

なお、この耕作痕の時期としては、純層に近いAs-B軽石を覆土としている点で、純層であればAs-B軽石下水田と同じ時期とすることができるが、純層でない場合にはAs-B軽石降下以後の耕作痕(畝)ということになる。軽石の帰属が時期決定を左右することとなるが、微高地上であるが故に帰属の明言はできない。微高地上全体に、As-B軽石層が確認されていないからである。

D区取り付け道

検出された遺構には、溝が他数と畦畔を伴う水田が2区画ある。調査は、As-B軽石層下面で中世遺構も含めて調査を行った。検出された溝は、その覆土にAs-B軽石を含むものであった。つまり、水田とは異なる時期の遺構であり、本来、先項の第2面で扱うべき遺構である。これらの溝の走向は、大半が東西方向に延びるものであるが、調査区の北端で南東方向に延びる溝がある。一方、検出された水田は、あまり依存状況のよい状態ではなく、調査区の南側で検出されただけである。調査区の中央から北側にかけてはAs-B軽石層はみられず、微高地上であった可能性がある。(第63図)

以下に、水田について説明する。

水田

1区画

調査区の南側で、西端に位置する。区画の東側に2区画と接し、区画境は低い畦によって画される。南・北側の区画畦については検出できていない。区画の規模・形状等は不明。

2区画

調査区の南側で、東端に位置する。区画の西側には1区画と接し、区画境は低い畦によって画される。1区画と同様に、南・北側の区画畦については検出できていない。区画の規模・形状等は不明。

E区

E区で検出された遺構には、畦畔を伴う水田が36区画がある。これらの水田は調査区全体にわたるが、畦

が低くあまり良好な依存状態とは言い難い。水口と考えられる畦の切れ間も、数カ所で検出されている。また、水田面には全体的に凹凸が認められるものの、足跡の特定は難しい。馬蹄痕も存在すると思われるが、一部特定できたのは人の足跡である。(第67図)

各遺構の説明は、以下の通りである。

水田

1 区画

調査区の南端で、西端に位置する。区画の東側は3区画と接し、区画境は低い畦によって画される。北側は2区画と接し、境は低い畦によって画される。南側については、先のD区9区画と同一の区画である可能性が高い。

2 区画

調査区の南側で、西端に位置する。区画の東側は3区画と接し、区画境は低い畦によって画される。北側は4区画、南側は1区画と接し、境は低い畦によって画されている。1・3区画に比べ、やや小さい区画のようである。南北方向の東辺で4.5mを測る。

3 区画

調査区の南端で、ほぼ中央に位置する。区画の東側は6区画と接し、区画境は低い畦によって画される。北側は5区画と接し、境は低い畦によって画される。西側は1・2区画と接し、両区画との境は低い畦によって画されている。北辺と東辺は直線的ではなく、緩やかに湾曲する。南側については、先のD区10区画と同一区画の可能性もある。調査区内での面積は91.7m²を計測することができる。

4 区画

調査区の南側で、西端に位置する。区画の東側は5区画と接し、区画境は低い畦によって画される。北側は7区画、南側は2区画と接し、境は低い畦によって画される。2区画と同様に、やや小さい区画のようである。南北方向の東辺で4mを測る。

5 区画

調査区の南側で、ほぼ中央に位置する。区画の東側は6区画と接し、区画境は低い畦によって画される。北側は8・9区画と接し、境は低い畦によって画される。西側は4区画、南側は3区画と接し、区画境は低い畦によって画されている。3区画との境となる南辺の畦が湾曲していることから、区画の形状は南側が歪んだ長方形と呈し、長軸を東西方向にもつ。長軸方向は11.5m、短軸方向の西辺で4.2m、同東辺で6.7mを測る。面積は56.57m²を計測することができる。

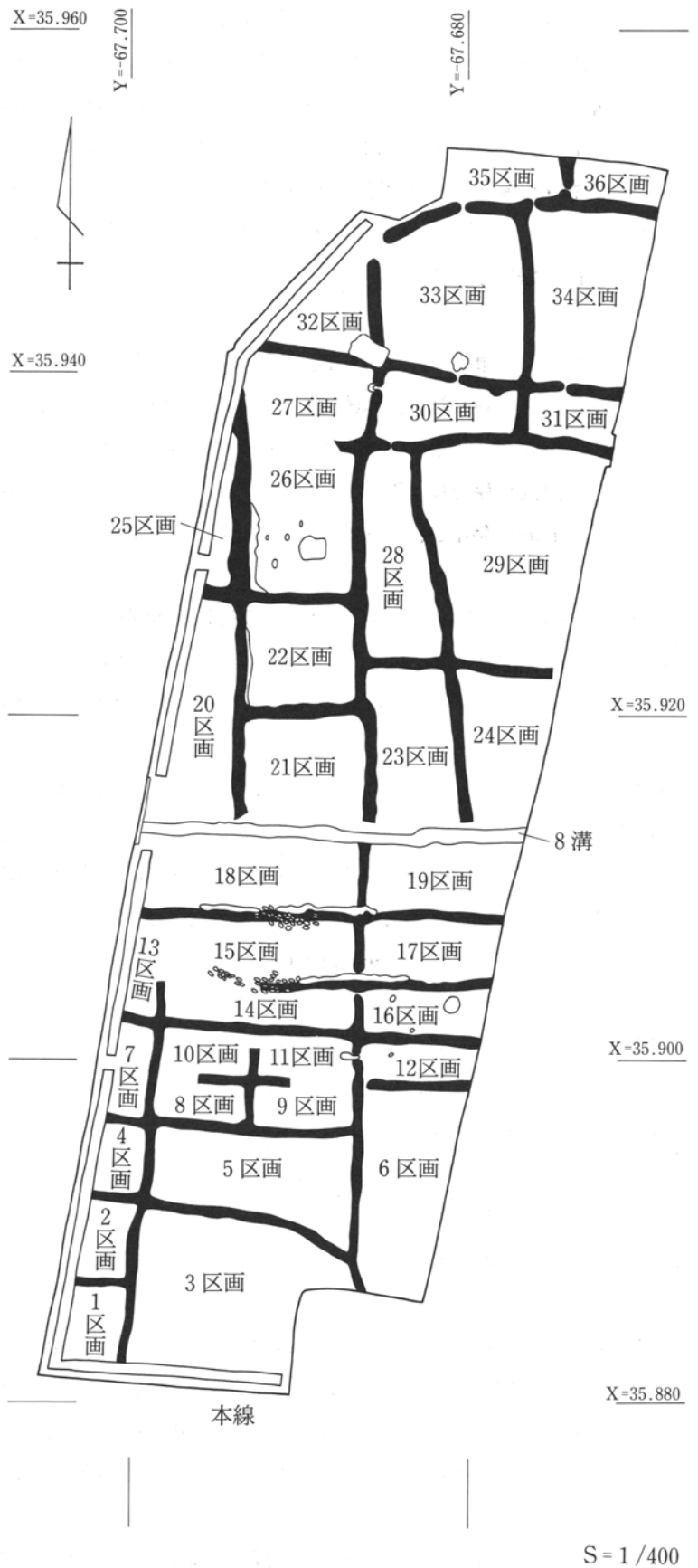
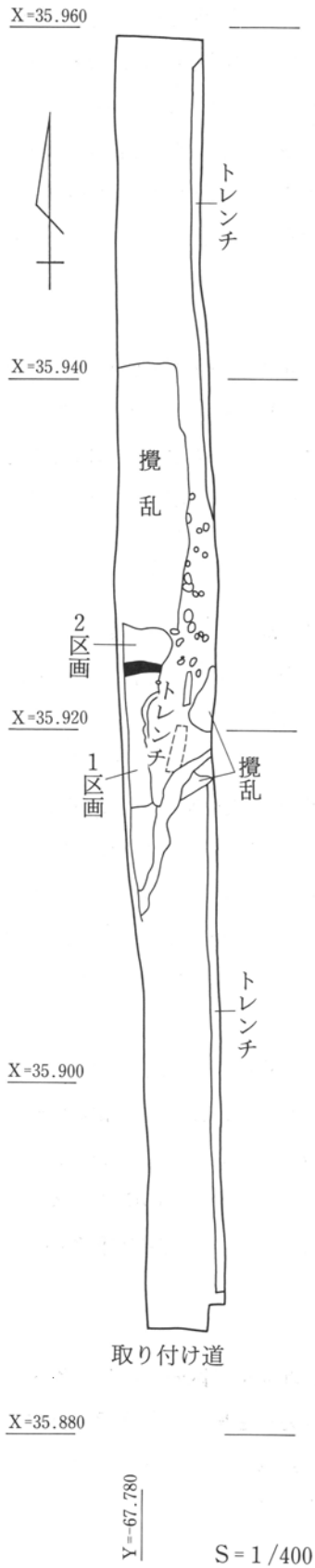
6 区画

調査区の南側で、東端に位置する。区画の北側は12区画と接し、区画境は低い畦によって画される。西側は3・5・9区画と接し、境は低い畦によって画されている。北辺となる畦の西端は、水口と考えられる畦の切れ間が存在し、北側の12区画から取水していたことが窺える。区画の形状は不明であるが、調査区内の面積は59.4m²を計測することができる。

7 区画

調査区の南側で、西端に位置する。区画の東側は8・10区画と接し、区画境は低い畦によって画される。南側は4区画、北側は13区画と接し、境は低い畦によって画される。南北方向の東辺で5.3mを測る。

8～11区画



第67図 E区の遺構配置図(本線・取り付け道)

調査区の南側で、中央から西寄りに位置する。区画の南側に5区画、西側に7区画、北側に14区画、東側に6・12区画と接し、各区画境は低い畦によって画される。区画の形状は、長軸を東西方向にもつ長方形を呈し、長軸方向で11.5m、短軸方向で5.5mを測る。面積は62.43㎡を計測することができる。東辺となる畦の北側で、12区画と接する部分に、水口と考えられる畦の切れ間が存在し、やや窪む。この区画のほぼ中央に、区画内を4分割するような畦状の低い高まりが十字状に認められたことから、便宜的に8～11区画とした。他の区画に比べ、かなり小さい区画となる。しかし、分割する東西方向の畦は、東側の12区画とした南境の畦と、続く様にもある。

12区画

調査区の南側で、東寄りに位置する。区画の南側に6区画、西側に11区画、北側に16区画と接し、各区画境は低い畦によって画される。区画の形状は、長軸を東西方向にもつ細長い長方形を呈するようで、短軸方向で2.2mを測る。調査区内の面積は13.9㎡を計測することができる。南辺となる畦の西端には、水口と考えられる畦の切れ間が存在し、南側の6区画への取水口であったことが窺える。東辺の中央部にも水口と考えられる畦の切れ間が存在し、11区画から取水したようである。

13区画

調査区の南側で、西端に位置する。区画の南側に7区画と接し、区画境は低い畦によって画される。東側は14区画と接し、境は低い畦によって画されている。北側は不明である。18区画と接する可能性もあるが、14・15区画および16・17区画を画する東西畦の存在から、別の区画が存在する可能性もある。

14区画

調査区の南側で、中央から西寄りに位置する。区画の南側に10・11区画、西側に13区画、北側に15区画、東側に16区画と接し、各区画境は低い畦によって画される。区画の形状は、長軸を東西方向にもつ細長い長方形を呈し、長軸方向で11.3m、短軸方向で2.2mを測る。東辺となる畦の北端には、水口と考えられる畦の切れ間が存在し、東側の16区画への取水口であったことが窺える。また、北辺となる畦上には人の足跡が検出されており、足跡によって畦が潰れている。

15区画

調査区の南側で、中央から西寄りに位置する。区画の南側に14区画、北側に18区画、東側に17区画と接し、各区画境は低い畦によって画される。西側については明瞭な畦の検出はない。しかし、13区画の東畦が延長するものと考えられ、14区画と同様に長軸を東西方向にもつ細長い長方形を呈すると思われる。短軸となる東辺で3.3mを測る。区画内の南畦際には、東側の17区画へ続く細い溝状の窪みを有し、東畦の南端が水口となる。また、南畦付近には人の足跡が検出されており、足跡によって畦が潰れている。北畦中央部でも同様に人の足跡が検出され、やはり足跡によって畦が潰れている。

16区画

調査区の南側で、東寄りに位置する。区画の南側に12区画、西側に14区画、北側に17区画と接し、各区画境は低い畦によって画される。区画の形状は、長軸を東西方向にもつ細長い長方形を呈するようで、短軸方向となる西辺で2.5mを測る。調査区内の面積は18.6㎡を計測することができる。東辺となる畦の北端には、水口と考えられる畦の切れ間が存在し、西側の14区画からの取水口であったようである。

17区画

調査区の南側で、東寄りに位置する。区画の南側に16区画、西側に15区画、北側に19区画と接し、各区画境は低い畦によって画される。区画の形状は、長軸を東西方向にもつ細長い長方形を呈するようで、短軸方

向となる西辺で3.3mを測る。調査区内の面積は26.56㎡を計測することができる。東辺となる畦の南端には、水口と考えられる畦の切れ間が存在し、西側の15区画からの取水口であったようである。また、南畦際には、15区画から続く溝状の窪みを有する。

18区画

調査区の中央で、西寄りに位置する。区画の南側に15区画、東側に19区画と接し、両区画境は低い畦によって画される。北側は20・21区画と接すると思われるが、先の近世面で扱った8号溝辺りに境となる東西畦が存在したものと考えられる。区画の形状には、長軸を東西方向にもつ長方形を呈すると思われる。南畦の中央部付近には人の足跡が検出され、足跡によって畦が潰れている。また、南畦際には溝状の窪みを有し、東畦の南端が水口となる。

19区画

調査区の中央で、東寄りに位置する。区画の南側に17区画、西側に18区画と接し、両区画境は低い畦によって画される。北側は23・24区画と接すると思われるが、先の近世面で扱った8号溝辺りに境となる東西畦が存在したものと考えられる。区画の形状には、長軸を東西方向にもつ長方形を呈すると思われる。東畦の南端には、水口と考えられる畦の切れ間が存在し、西側の18区画からの取水口であったようである。

20区画

調査区の中央で、西端に位置する。区画の東側に21・22区画、北側に25区画と接し、各区画境は低い畦によって画される。南側は18区画と接すると思われるが、8号溝によって不明。区画の形状は、長軸を南北方向にもつ長方形とも考えられる。調査区内の面積は44.7㎡を計測することができる。

21区画

調査区の中央で、西寄りに位置する。区画の西側に20区画、北側に22区画、東側に23区画と接し、各区画境は低い畦によって画される。南側は18区画と接すると思われるが、8号溝によって不明。区画の形状は、概ね正方形を呈するものと考えられる。東西方向は7mを測り、調査区内の面積は44.48㎡を計測することができる。

22区画

調査区の中央で、西寄りに位置する。区画の西側に20区画、北側に26区画、東側に23・28区画、南側に21区画と接し、各区画境は低い畦によって画される。区画の形状は概ね正方形を呈し、21区画より僅かに小さい。東西方向は6m、南北方向も6mを測り、調査区内の面積は36.8㎡を計測することができる。

23区画

調査区の中央で、東寄りに位置する。区画の西側に21・22区画、北側に28区画、東側に24区画と接し、各区画境は低い畦によって画される。南側は19区画と接すると思われるが、8号溝によって不明。西辺の畦は、21区画と接するが食い込むように歪む。区画の形状は、長軸を南北方向にもつ不整な長方形を呈すると思われる。短軸方向となる北辺で4.7mを測り、調査区内の面積は44.93㎡を計測することができる。

24区画

調査区の中央で、東端に位置する。区画の西側に23区画、北側に29区画と接し、両区画境は低い畦によって画される。南側は19区画と接すると思われるが、8号溝によって不明。規模・形状は不明であるが、調査区内の面積は41.83㎡を計測することができる。

25区画

調査区の北側で、西端に位置する。区画の東側に26・27区画、南側に20区画と接し、各区画境は低い畦に

よって画される。規模・形状等は不明。

26区画

調査区の北側で、西寄りに位置する。区画の西側に25区画、南側に22区画、東側に28区画と接し、各区画境は低い畦によって画される。北側は27区画と接するが、東側の一部に境を画する畦を検出した。区画の形状は、長軸を南北方向にもつ長方形を呈し、長軸となる東辺で8.2m、短軸の南辺で6.1mを測る。西畦際には、溝状の窪みを有する。

27区画

調査区の北側で、西寄りに位置する。区画の北側に32区画、東側に30区画と接し、両区画境は低い畦によって画される。南側は26区画と接するが、東側の一部に境を画する畦を検出している。区画の形状は、長軸を東西方向にもつ歪んだ長方形を呈するようで、短軸の東辺で4.4mを測る。東畦の北寄りには、水口と考えられる畦の切れ間が存在し、東側の30区画への取水口であったことが窺える。

28区画

調査区の北側で、ほぼ中央に位置する。区画の西側に22・26区画、南側に23区画、東側に29区画、北側に30区画と接し、各区画境は低い畦によって画される。東辺となる畦は、西畦に比べてやや斜めに歪む。区画の形状は、長軸を南北方向にもつ不整な長方形を呈し、長軸方向は21m、短軸となる北辺で2.5m、同南辺で4.5mを測る。面積は43.6㎡を計測することができる。北畦の中央には、水口と考えられる畦の切れ間が存在し、北側の30区画からの取水口であったことが窺える。

29区画

調査区の北側で、東寄りに位置する。区画の西側に28区画、南側に24区画、北側に30・31区画と接し、各区画境は低い畦によって画される。西辺となる畦はやや斜めに歪み、北辺となる畦は弧状に湾曲する。他の区画に比べ比較的大きい区画であり、調査区内の面積は110.13㎡を計測することができる。

30区画

調査区の北側で、ほぼ中央に位置する。区画の西側に27区画、南側に28・29区画、東側に31区画、北側に33区画と接し、各区画境は低い畦によって画される。南辺および北辺となる畦は、やや弧状に湾曲する。このため区画の形状は、長軸を東西方向にもつ不整な長方形を呈している。長軸方向は8m、短軸となる西辺で4m、同東辺で2.5mを測る。面積は25.23㎡を計測することができ、比較的小さい区画と言える。北辺の畦の中央には、水口と考えられる畦の切れ間が存在し、北側の33区画からの取水口であったことが窺える。西辺の畦にも水口が存在し、同様の取水口と考えられる。さらに、南辺となる畦の西端付近にも、水口と考えられる畦の切れ間が存在し、南側の28区画への取水口と考えられる。

31区画

調査区の北側で、東端に位置する。区画の西側に30区画、南側に29区画、北側に34区画と接し、各区画境は低い畦によって画される。南辺となる畦は、やや弧状に湾曲する。区画の形状は、長軸を東西方向にもつ不整な長方形を呈するようで、短軸となる西辺で2.3mを測る。調査区内の面積は13.5㎡を計測することができる。北辺の畦の西寄りには、水口と考えられる畦の切れ間が存在し、北側の34区画からの取水口であったことが窺える。

32区画

調査区の中央で、東端に位置する。区画の南側に27区画、東側に33区画と接し、両区画境は低い畦によって画される。区画の規模・形状は不明。東辺となる畦の北側に、やや広目の畦の切れ間が存在し、東側の33

区画への取水口となる水口であろうと考えられる。

33区画

調査区の北側で、ほぼ中央に位置する。区画の西側に32区画、南側に30区画、東側に34区画、北側に35区画と接し、各区画境は低い畦によって画される。西辺となる畦は東辺に比べてかなり短く、北辺となる畦は弧状に湾曲する。このため区画の形状は、やや南北方向に長い不整な方形を呈している。南北方向となる東辺で9.5m、東西方向で8.3mを測る。面積は72.4㎡を計測することができる。北辺の畦の中央付近には、水口と考えられる畦の切れ間が存在し、北側の33区画からの取水口であったことが窺える。西辺の北端にも、取水口と考えられる広目の水口が存在する。また、南辺の畦の中央には、水口と考えられる畦の切れ間が存在し、南側の30区画への取水口となる。

34区画

調査区の北側で、東寄りに位置する。区画の西側に33区画、南側に31区画、北側に35・36区画と接し、各区画境は低い畦によって画される。区画の形状は方形を呈するようであり、西辺で11mを測る。調査区内の面積は64.2㎡を計測することができる。北辺の畦の西端には、水口と考えられる畦の切れ間が存在し、北側の35区画からの取水口であったことが窺える。また、南辺の畦の西寄りには、水口と考えられる畦の切れ間が存在し、南側の31区画への取水口となる。

35区画

調査区の北端で、ほぼ中央に位置する。区画の南側に33・34区画、東側に36区画と接し、各区画境は低い畦によって画される。調査区内の面積は20.2㎡を計測することができる。南辺の畦の中央付近には、水口と考えられる畦の切れ間が存在し、南側の33区画への取水口となる。さらに、同畦の東寄りにも水口と考えられる畦の切れ間が存在し、南側の34区画への取水口となる。また、東辺となる畦の南端にも水口と考えられる畦の切れ間が存在し、東側の36区画への取水口であったことが窺える。なお、本区画は、次のF区2区画と同一の区画となる可能性が高い。

36区画

調査区の北端で、東端に位置する。区画の西側に35区画、南側に34区画と接し、両区画境は低い畦によって画される。調査区内の面積は12.5㎡を計測することができる。西辺となる畦の南端には、水口と考えられる畦の切れ間が存在し、西側の35区画からの取水口となっている。なお、本区画は、次のF区1区画と同一の区画となる可能性が高い。

E区取り付け道

検出された遺構は、畦畔を伴う水田が2区画のみである。調査区の大半が後世の攪乱を受けており、このために極めて遺構の残存状態が悪い。検出できた二区画の水田も、調査区の中央で僅かであり、南側の1区画と北側の2区画を画する畦の一部のみである。両区画の規模・形状等については不明。(第67図)

F区

F区で検出された遺構には、畦畔を伴う水田が25区画がある。これらの水田は調査区全体にわたるが、畦が低くあまり良好な依存状態とは言いがたい。区画の形状が全体に不整形であり、特に調査区の南側では区画

の広さにも差がある。4・5・9～11区画は鱗状に区画され、同様に東側の北関調査分でも他とは区画形状が大きく異なっている。この異なる区画形状のあり方は、他区画とは別な要因による結果と考えられる。一方、水口と考えられる畦の切れ間も、数カ所で検出されている。また、水田面には全体的に凹凸が認められるものの、足跡の特定は難しい。馬蹄痕も存在するとは思われるが、一部特定できたのは人の足跡である。(第68図) 各遺構の説明は、以下の通りである。

水田

1 区画

調査区の南端で、東端に位置する。区画の西側に2区画、北側に4区画と接し、両区画境は低い畦によって画される。調査区内の面積は9.6㎡を計測することができる。なお、本区画は、先のE区36区画と同一の区画となる可能性が高く、その面積は22.1㎡以上の広さをもつと考えられる。

2 区画

調査区の南端で、中央に位置する。区画の東側に1区画、北側に4・5区画、西側に3区画と接し、各区画境は低い畦によって画される。調査区内の面積は9.6㎡を計測することができる。西辺となる畦の北端部分には、水口と考えられる畦の切れ間が存在し、西側の3区画からの取水口であったことが窺える。なお、本区画は、先のE区35区画と同一の区画となる可能性がある。

3 区画

調査区の南端で、西端に位置する。区画の東側に2区画、北側に5区画と接し、両区画境は低い畦によって画される。区画の規模・形状は不明。

4 区画

調査区の南側で、中央から東寄りに位置する。区画の南側に1・2区画、西側に5区画、北側に8・9区画と接し、各区画境は低い畦によって画される。西辺となる畦は、途中で大きくクランク状に折れ曲がる。このため区画の形状は不整形となるが、東西方向に長軸をもつ。東西方向の最も長い北辺で13m、同南辺で7.7m、南北方向の東辺で5.5mを測る。面積は63.46㎡を計測することができる。西辺のクランク状となる畦際および南辺の畦際の一部に、溝状の窪みを有する。また、西辺の中央に当たるクランクの角には、水口と考えられる畦の切れ間が存在し、西側の5区画からの取水口であったことが窺える。

5 区画

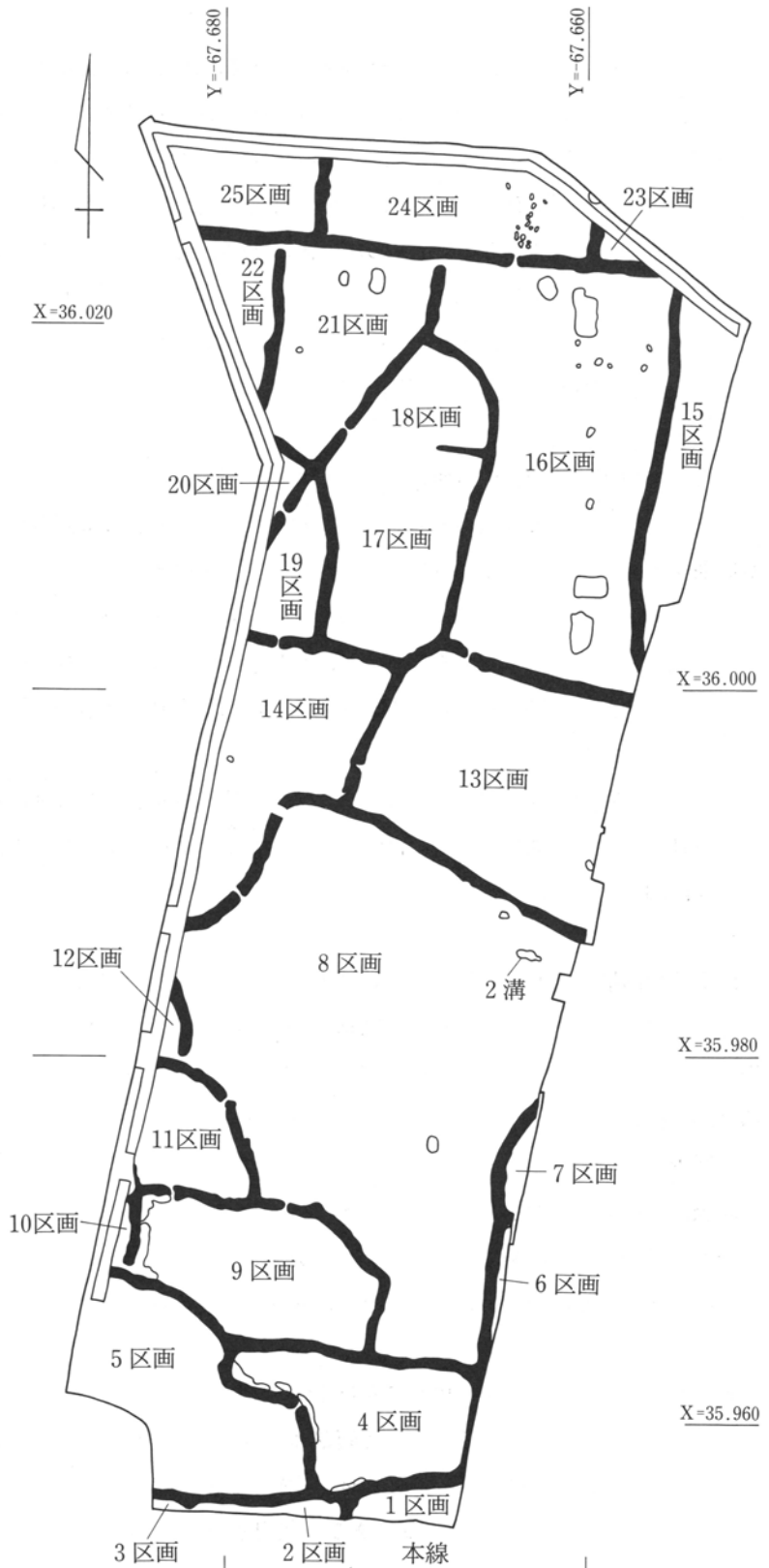
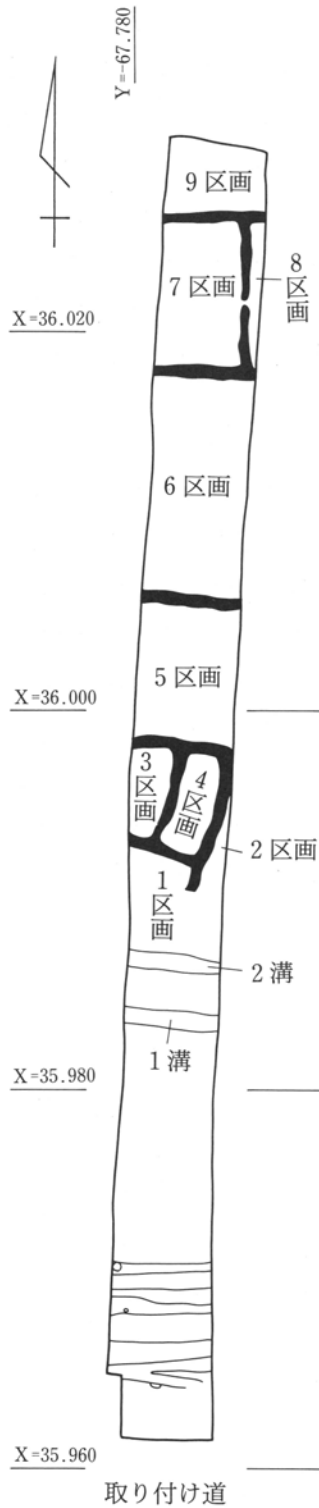
調査区の南側で、中央から西寄りに位置する。区画の南側に2・3区画、西側に4区画、北側に9・10区画と接し、各区画境は低い畦によって画される。東辺となる畦は途中で大きくクランク状に折れ曲がり、北辺の畦は緩やかに湾曲している。このため区画の形状は不整形を呈すると思われるが、規模・形状等は不明。調査区内の面積は87.4㎡を計測することができる。東辺の中央に当たるクランク部の角には、水口と考えられる畦の切れ間が存在し、東側の4区画への取水口となる。

6 区画

調査区の南端で、東端に位置する。区画の西側に8区画、北側に7区画と接し、両区画境は低い畦によって画される。調査できたのは僅かであり、規模・形状等は不明。

7 区画

調査区の南端で、東端に位置する。区画の西側に8区画、南側に6区画と接し、両区画境は低い畦によって画される。調査できたのは僅かであり、規模・形状等は不明。



S = 1/400

S = 1/400

第68図 F区の遺構配置図(本線・取り付け道)

8区画

調査区の中央から南側にかけて位置する。区画の南側から西側にかけて4・9・11・12区画が階段状に接し、東側に6・7区画、北側に13区画、北側から西側にかけて14区画と接し、各区画境は低い畦によって画されている。北側の13区画と接する区画境の畦は直線的であるものの、それ以外の畦はそれぞれが曲線的となる。このため区画の形状は、かなり歪んだ不整形を呈する。しかし、その広さは調査区内で最も広く、面積は389.4㎡を計測することができる。区画の西側となる14区画との区画境には、水口となる畦の切れ間が存在し、14区画からの取水口となる。12区画の東南隅にも水口となる畦の切れ間が存在し、12区画からの取水口となる。また、11区画との区画畦にも同様の水口が存在する。さらに、9区画との区画畦にも同様の水口が存在し、9区画への取水口が窺える。

9区画

調査区の南側で、中央から西寄りに位置する。区画の南側に4・5区画、西側に10区画、北側に11区画、北側から東側にかけて8区画と接し、各区画境は低い畦によって画されている。各区画境となる畦は、緩やかな曲線あるいは屈曲するようであり、このため区画の形状は不整形となる。但し、東西方向に長い形である。面積は76.02㎡を計測することができる。区画の北側となる8区画との区画境には、水口となる畦の切れ間が存在し、8区画からの取水口となる。同じく北側となる11区画との区画畦にも水口があり、11区画からの取水口となる。西側の10区画との区画畦にも水口があり、10区画からの取水口として考えられる。

10区画

調査区の南端で、西端に位置する。区画の南側に5区画、東側に9区画と接し、両区画境は低い畦によって画されている。調査できたのは僅かであり、規模・形状等は不明。東側の9区画との区画畦にも水口があり、9区画への取水口と考えられる。

11区画

調査区の南端で、西端に位置する。区画の南側に9区画、東側に8区画、北側に12区画と接し、各区画境は低い畦によって画されている。8区画と接する畦は緩やかな曲線となり、区画の形状は不整形となる。調査区内の面積は29.96㎡を計測することができる。区画の北側となる8区画との区画境には、水口となる畦の切れ間が存在する。9区画と接する南畦の西寄りにも水口があり、9区画への取水口と考えられる。

12区画

調査区の中央で、西端に位置する。区画の南側に11区画、東側に8区画と接し、両区画境は低い畦によって画されている。8区画と接する畦は緩やかな曲線となり、不整形な形状を呈するものと思われる。東側の8区画と接する畦の南端には水口があり、8区画への取水口と考えられる。

13区画

調査区の中央で、中央から東側にかけて位置する。区画の南側に8区画、西側に14・17区画、北側に16区画と接し、各区画境は低い畦によって画されている。各区画境となる畦は、比較的に直線的となる。区画の形状は、東南東方向に長軸をもつ長方形を呈すると思われる。短軸方向となる西辺で9.5mを測り、調査区内の面積は142.4㎡を計測することができる。北辺となる畦の西端付近には、水口となる畦の切れ間が存在し、北側の16区画からの取水口であったことが窺える。

14区画

調査区の中央で、西寄りに位置する。区画の南側から東側にかけて8区画が接し、東側に13区画、北側に17・19区画と接し、各区画境は低い畦によって画されている。この8区画と接する区画畦は、大きく蛇行す

るように曲線的である。このため、区画の形状は不整形となる。調査区内の面積は77.7m²を計測することができる。北辺となる19区画との区画畦には、水口となる畦の切れ間が存在し、19区画からの取水口であったことが窺える。また、蛇行する8区画との区画畦にも水口があり、8区画への取水口と考えられる。

15区画

調査区の北側で、東端に位置する。区画の西側に16区画と接し、区画境は僅かに蛇行する低い畦によって画されている。区画の規模・形状等については不明であるが、比較的大きい区画になるとも考えられる。

16区画

調査区の北側で、中央から東側にかけて位置する。区画の南側に13区画、東側に15区画、北側に23・24区画と接し、西側では17・18・21区画と接する。各区画境は低い畦によって画されている。東辺となる15区画との区画畦は緩やかに蛇行し、西辺となる畦は接する区画毎に大きく屈曲・湾曲する。このため、区画の形状は南北方向に長軸をもつ不整形となる。南北方向では22m、東西方向となる北辺付近で12.5m、同南辺付近で10.5mを測る。面積は218.4m²を計測することができ、8区画に次いで大きな区画である。北辺となる24区画との区画畦には、水口となる畦の切れ間が存在し、24区画からの取水口であったことが窺える。同様に、西辺となる畦の北端にも水口があり、西側の21区画からの取水口と考えられる。また、南辺となる畦の西端付近にも水口があり、南側の13区画への取水口となる。

17区画

調査区の北側で、中央から西寄りに位置する。区画の南側に13・14区画、東側に16区画、西側に19～21区画と接し、各区画境は低い畦によって画される。北側は18区画と接するが、検出された区画畦は東側部分だけである。接する区画畦は全体的に歪み、区画の形状は南北方向に長軸をもつ不整形となる。面積は78.02m²を計測することができる。21区画との区画畦には、水口となる畦の切れ間が存在し、21区画からの取水口であったことが窺える。

18区画

調査区の北側で、ほぼ中央に位置する。区画の南側に17区画、東側に16区画、西側に21区画と接し、各区画境は低い畦によって画されている。南辺を画する畦は、東側のみの検出である。16区画と接する区画畦は弧状の曲線となり、区画の形状は三角形状を呈している。面積は26.9m²を計測することができる。

19区画

調査区の北側で、西端に位置する。区画の南側に14区画、東側に17区画、西側に20区画、北側に21区画と接し、各区画境は低い畦によって画されている。17区画と接する区画畦は緩やかに湾曲するものの、区画の形状は南北方向にやや長い三角形状を呈している。調査区内の面積は23.36m²を計測することができる。西辺となる20区画との区画畦には、水口となる畦の切れ間が存在し、20区画からの取水口であったことが窺える。また、南辺となる14区画との区画畦にも水口があり、14区画への取水口と考えられる。

20区画

調査区の北側で、西端に位置する。区画の東側に19区画、北側に21区画と接し、両区画境は低い畦によって画されている。調査できたのは僅かであり、区画の規模・形状等は不明。西辺となる19区画との区画畦には、水口となる畦の切れ間が存在し、19区画への取水口と考えられる。

21区画

調査区の北側で、西寄りに位置する。区画の南側に20区画、南側から東側に向け16～18区画と接し、西側に22区画、北側に24・25区画と接する。各区画境は低い畦によって画されている。各区画畦は比較的に直線

的ではあるものの、東辺から南辺にかけては屈曲し、南北方向に長い不整な五角形を呈している。東西方向となる北辺付近では8mを測り、面積は69.2m²を計測することができる。西辺となる22区画との区画畦の北端には、水口となる畦の切れ間が存在し、20区画からの取水口であったことが窺える。また、東辺の畦の北端にも水口があり、東側の16区画への取水口と考えられる。17区画との区画畦にも水口があり、東南の17区画への取水口と考えられる。この水口に続くように、区画内を東西方向の溝状の窪みがある。

22区画

調査区の北側で、西端に位置する。区画の東側に21区画、北側に25区画と接し、両区画境は低い畦によって画されている。区画の規模・形状等は不明。東辺の畦の北端には水口があり、東側の21区画への取水口と考えられる。

23区画

調査区の北端で、東端に位置する。区画の南側に16区画、西側に24区画と接し、両区画境は低い畦によって画されている。調査できたのは僅かであり、区画の規模・形状等は不明。

24区画

調査区の北端で、ほぼ中央に位置する。区画の南側に16・21区画、東側に23区画、西側に25区画と接し、各区画境は低い畦によって画されている。区画の形状は不明であるが、直線的な畦となる南辺では14.3mを測る。調査区内の面積は61.14m²を計測することができる。南辺の畦の東寄りには水口があり、南側の16区画への取水口と考えられる。なお、この水口付近には、人の足跡が検出されている。

25区画

調査区の北端で、西端に位置する。区画の南側に21・22区画、東側に24区画と接し、各区画境は低い畦によって画されている。区画の規模・形状等は不明。調査区内の面積は31.03m²を計測することができる。

F区取り付け道

検出された遺構には、溝が数条と畦畔を伴う水田が9区画ある。調査は、As-B軽石層下面で中世遺構も含めて調査を行った。検出された溝は全て東西方向に延びるもので、その覆土にはAs-B軽石を含むものであった。つまり、水田とは異なる時期の遺構であり、本来、先項の第2面で扱うべき遺構である。一方、検出された水田は、調査区の中央から北側であり、区画の大きさはまちまちである。また、水田面には無数の凹凸が検出されているが、足跡としての特定はできなかった。なお、調査区の中央から北側にかけてはAs-B軽石層が良好に堆積していたものの、南側では層の堆積はなかった。微高地上であった可能性もあるが、E・F区の状況からすれば全面に水田が存在した可能性もある。(第68図)

以下に、水田について説明する。

水田

1区画

調査区の中央で、西側に位置する。区画の東側に2区画と接し、北側には3・4区画と接する。区画境は低い畦によって画される。南側の区画畦については検出できていない。区画の規模・形状等は不明。

2区画

調査区の中央で、東端に位置する。区画の西側には1・4区画と接し、区画境は低い畦によって画される。1区画と同様に、南側の区画畦については検出できていない。区画の規模・形状等は不明。

3区画

調査区の中央で、西端に位置する。区画の南側に1区画、東側に4区画と接し、北側には5区画と接する。各区画境は低い畦によって画される。比較的にかさい区画のようて、東辺で4.7mを測る。区画の規模・形状等は不明。

4区画

調査区の中央に位置する。区画の南側に1区画、東側に2区画と接し、北側には5区画、西側に3区画と接する。各区画境は低い畦によって画される。区画の形状は、南北方向に長軸をもつやや歪んだ長方形を呈している。長軸方向となる東辺で5.3m、短軸方向となる南辺で2.2mを測る。面積は10.7㎡を計測することができ、小さい区画であることが解る。

5区画

調査区の中央に位置する。区画の南側に3・4区画、北側に6区画と接し、各区画境は低い畦によって画されている。区画の規模・形状等は不明であるが、南北方向で6.8mを測ることができる。

6区画

調査区の北側で、中央に位置する。区画の南側に5区画、北側に7・8区画と接し、各区画境は低い畦によって画されている。区画の規模・形状等は不明であるが、南北方向で11.2mを測ることができる。

7区画

調査区の北側で、西寄りに位置する。区画の南側に6区画、東側に8区画、北側に9区画と接し、各区画境は低い畦によって画されている。区画の規模・形状等は不明であるが、南北方向となる東辺は7.5mを測ることができる。この東辺となる区画畦の中央には、水口となる畦の切れ間が存在し、東側の8区画への取水口と考えられる。

8区画

調査区の北側で、東端に位置する。区画の南側に6区画、西側に7区画、北側に9区画と接し、各区画境は低い畦によって画されている。区画の規模・形状等は不明であるが、南北方向となる西辺は7.5mを測ることができる。この西辺となる区画畦の中央には水口があり、西側の7区画からの取水口と考えられる。

9区画

調査区の北端に位置する。区画の南側に7・8区画と接し、両区画境は低い畦によって画されている。区画の規模・形状等は不明。なお、南辺の区画境の畦は直線的であり、この延長上は先のF区23～25区画の南辺となる畦に続く可能性がある。

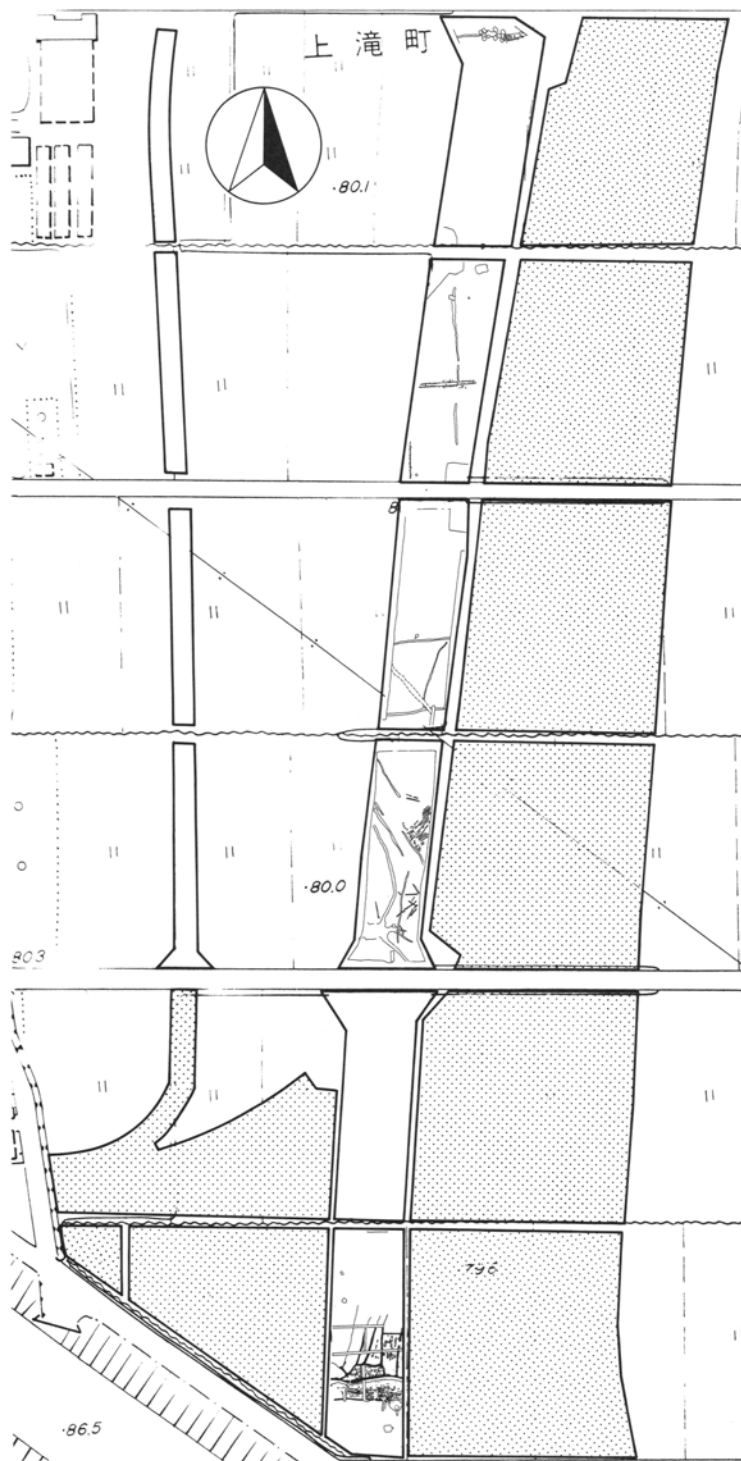
第5節 第4面の遺構（奈良・平安時代面）

第4面は、基本土層のⅦ層となる暗黄色土の上面ないし先項のAs-B軽石下水田耕土下面を確認面とし、検出された遺構を扱った。この基本土層Ⅶ層となる暗黄色土は、Hr-FP泥流層の上位に堆積する洪水層であり、その形成時期は不明である。

しかし、天仁元（1108）年のAs-B軽石降下以前であることは明確であり、本面で検出された遺構および遺物から、奈良ないし平安時代前半期以前に形成されていたものと考えられる。隣接する北関東調査分からも、8～9世紀代にかけての住居跡等の遺構が検出されている。

本第4面から検出された遺構には、住居跡、土坑、ピット列、道路状遺構、溝、水田等がある。この中でも住居跡・土坑については、後述する微高地上に当たる場所からの検出であり、A区の南端ないしE区の北端からである。この状況は、隣接する北関東調査分でも同様である。一方、水田等の遺構については、住居跡よりも低い場所からで、検出できたのはA区の中央から南側にかけてである。なお、この水田面には、牛蹄痕が数多く残されていたことが特筆できる。

以下、各区ごとに検出された遺構について説明する。



第69図 第4面の全体図

S = 1 / 2500

A区

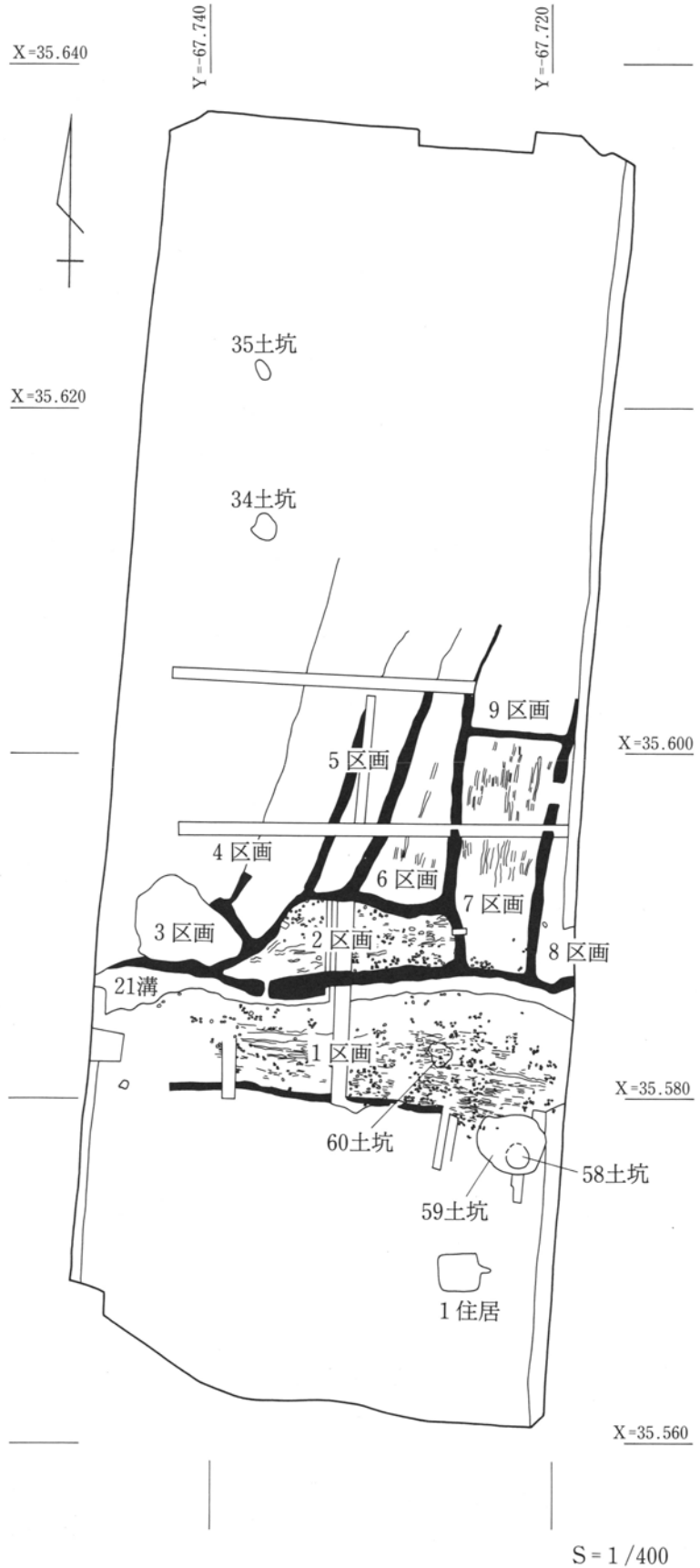
A区で検出された遺構には、住居跡が1軒、土坑3基、溝、畦畔を伴う水田が9区画以上ある。

調査は、後述する第6面の古墳時代面と共に検出した経緯がある。

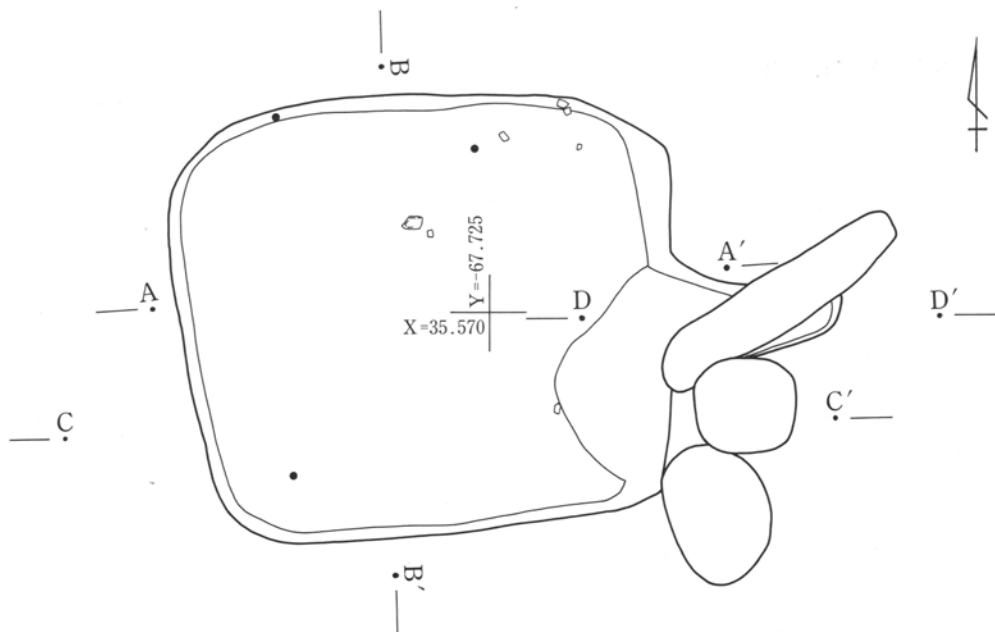
調査区内の地形の状況は、南端が僅かに高い微高地となり、中央部西側でも周辺よりもやや高い微高地状となる。この微高地上に住居跡が存在する。土坑は微高地から低地部への変換部に点在する。水田は微高地を避けた低地部に検出されている。但し、検出できたのは中央から南側にかけての一部であり、依存状況は良好とは言えない。水田の区画は、古墳時代の極小区画水田（ミニ水田）よりは拡大傾向にあると思われるが、先述したAs-B軽石層下の平安時代後半の水田区画とは異なる様相であり、その全貌は不明である。

また、水田面には、平行する細い溝状のものが幾条も検出され、その延びる方向が区画の長軸方向にある。さらに、牛蹄痕とした、偶蹄類の足跡が無数に検出されている。これらの平行する溝や牛蹄痕は、土坑との重複状況から、本面の水田に伴う痕跡として考えることができる。（第70図）

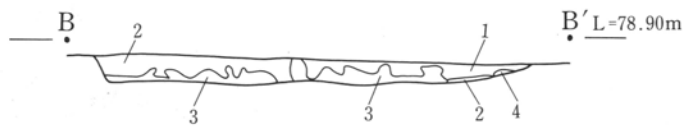
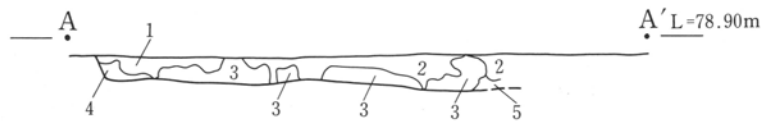
なお、土坑については、最終調査面で検出した経緯があるが、出土した遺物から、本面の遺構として扱った。



第70図 A区の遺構配置図(本線)



S = 1/40

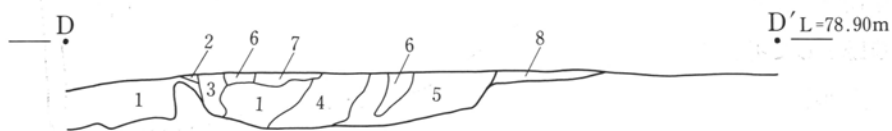


1号住居土層

- 1層 黒褐色土 白色細粒を含む黒褐色土。
- 2層 黒色土 1層に似るが黒く、混入物が少ない。
- 3層 鈍い黄褐色土 1・2層と粗粒ロームブロックの混合層。
- 4層 褐色土 ローム主体で1・2層を含む。
- 5層 淡黄色土 ローム主体で1・2層を僅かに含む。



S = 1/40



S = 1/20

カマド土層

- 1層 黒褐色土 白色粒を含む黒色土を主にロームを含む。
- 2層 灰色土 粘性を帯び、白色細粒を少量含む。
- 3層 黒褐色土 1層に2層を含む。攪乱か。
- 4層 黒褐色土 1層に粗粒ロームを粒状に多量に含む。
- 5層 黒褐色土 白色粒を含む黒色土。粘性なし。
- 6層 黒褐色土 1層にロームを多量に含む。攪乱か。
- 7層 黒褐色土 1層にローム粒を多量に含み、炭化物微量含む。
- 8層 黒褐色土 褐色味帯び、ロームを少量と焼土を含む。

第71図 A区 1号住居跡

住居跡 (第71図)

1号住居跡

位置 A区の南側で東寄りにあり、X=35.570、Y=-67.725に位置する。

規模 方形を呈し、東壁側に竈をもつ。主軸方向は東西にあり、東西方向で2.65m、南北方向で2.35m、確認面から掘り方面までが10cmほどを測る。

概要 本住居跡は、先述の調査面であるAs-B軽石下の調査時に検出され、調査された遺構である。調査時点で、As-B軽石下水田との関係を明確に捉えることができなかったが、隣接する北関東自動車道関連での調査データおよびE区での住居跡のあり方等から、本面の遺構として扱った。全体に残りが悪く、確認面から床面までの差は数cmほどの状況であった。床面上からは、僅かであるが土師器の甕・坏等の破片が出土している。竈は東壁の中央より南側に位置し、煙道部が東へ延びる状況であるが、やはり残りは悪く、さらに溝状の攪乱によって大きく壊されている。掘り方面は床面下5~10cmほどにあるが、全体に凹凸がみられる。掘り方覆土には黒褐色土が主体となり、覆土内から古墳時代初頭期の土器の細片が若干出土している。

床面上から出土した土器から、9世紀代頃の住居跡と考えられる。

土坑 (第72図)

58号土坑

位置 A区の南側で東寄りにあり、X=35.577、Y=-67.722に位置する。

規模 円形を呈するものと考えられ、径1.3m前後、深さ50cmほどを測る。

概要 59号土坑と重複するが、新旧関係は堆積土の状況から本土坑が新しい。Hr-FAブロックを混在する黒褐色土ないし褐灰色土を覆土としている。遺物には、土師器の坏、細片が出土している。

59号土坑

位置 A区の南側で東寄りにあり、X=35.578、Y=-67.723に位置する。

規模 不整な楕円形を呈し、長軸方向を東西にもち、長軸4.1m、短軸3.0m、深さ60cmほどを測る。

概要 58号土坑と重複するが、新旧関係は堆積土の状況から本土坑が古い。As-C軽石を僅かに含む黒色土、黒色土および暗褐色砂 (As-C軽石ではない) を覆土としている。遺物には、大量の土師器の坏および細片が出土しており、中には墨書土器も含まれている。

60号土坑

位置 A区の南側でやや東寄りにあり、X=35.583、Y=-67.727に位置する。

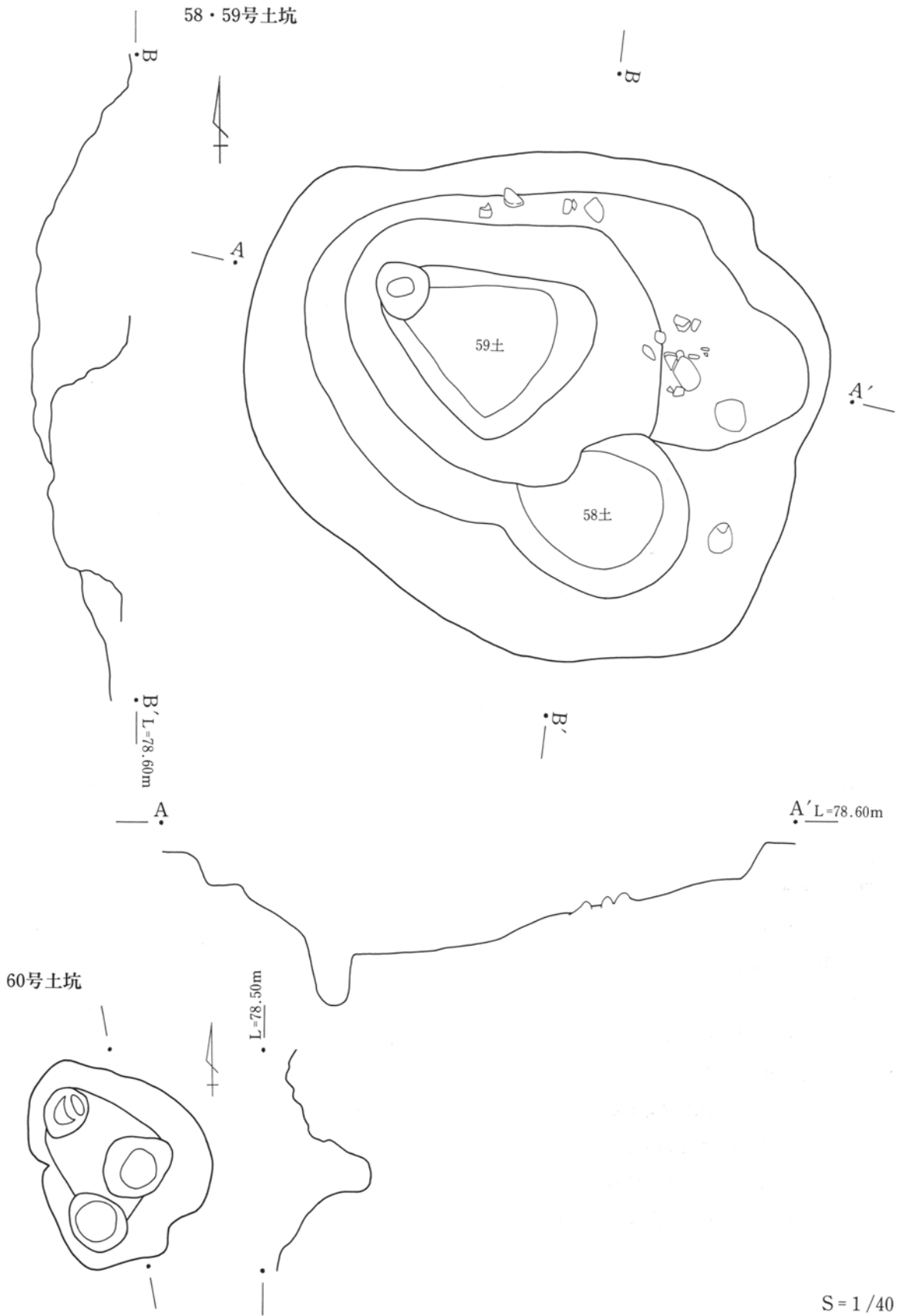
規模 不整な楕円形を呈し、長軸方向を北西にもち、長軸1.4m、短軸1.2m、深さ20cmほどを測る。

概要 61号土坑と僅かに重複するが、新旧は不明。底面にはピットを有し、最深部で60cmを測る。As-C軽石を含む黒色土を覆土とし、遺物には土師器の坏・甕片が出土している。

なお、59・60号土坑は、後述の水田と重複している。その新旧関係は、水田面に伴うと考えられる平行する溝や牛蹄痕が、土坑の覆土上面から検出されていることから、水田の方が新しく、59・60号土坑が古い遺構であると言える。

溝

調査区の南側で、東西方向にやや蛇行しながら延びる21号溝がある。溝の延長は、東西両側の北関調査分



S=1/40

第72图 A区 土坑

でも検出されている。水田区画の1区画と2・3・7・8区画の間を通じる溝で、あまり深くはない。黒褐色土ないし暗橙色土を覆土とし、Hr-FA火山灰の二次堆積土をブロックとして含んでいる。このことから、後述のHr-FA下水田に伴う溝ではないことが理解できる。溝の北側の縁には、帯状の高まりが連なり、各水田区画の畦をなす。2区画と接する畦には、水口が検出されている。

なお、21号溝のすぐ南側に、併走するように東西方向に延びる22号溝があるが、22号溝の覆土上面からは後述する牛蹄痕が検出されており、水田よりも古い時期の溝であると考えられる。

水田 (第73～75図)

1区画

調査区の南側で、1号住居跡がある微高地の北側に位置する。区画の北側を、21号溝が東西方向に延びる。区画は微高地と21号溝の間にあり、東西方向に長い区画となる。区画の北側の21号溝との境には、畦となる高まりは検出できなかった。また、東西方向に長い区画の間にも、畦らしき高まりが検出されていないことから、広くはなるが一つの区画として考えられる。面積は100㎡前後となるようである。この水田面からは、平行する細い溝状のものが幾条も検出され、その延びる方向が区画の長軸方向にある。平行する溝は、幅10cm前後、深さ数cmと浅く、溝間は20～30cmとばらつきがある。さらに、水田面からは多くの足跡が検出されている。足跡は偶蹄類の動物であり、その大きさから牛蹄の痕跡であると考えられる。牛蹄痕のあり方は、ランダムな状態ではなく、東西の方向性がみられるようである。なお、本区画の東側に60号土坑、東南側に59号土坑が重複する。両土坑は共に水田検出の際には検出できなかった遺構で、その後の最終調査面で検出された経緯があるものの、多量に出土した墨書土器や坏からは9世紀代の遺構と考えられる。この両土坑の覆土上面からは牛蹄痕が検出されており、水田よりも古い時期の溝であると考えられる。22号溝も、同様である。

2区画

調査区の中央付近で、21号溝の北側に位置する。区画の西側は3・4区画、北側は5・6区画、東側は7区画と接し、南側を21号溝が東西方向に延びる。接する各区画との境は、やや広目な畦によって画される。21号溝に接する部分も同様で、他の区画畦よりも広い。区画の形状は、東西方向に長い不整形を呈し、長軸方向の北辺で8.5m、南辺で12.5m、短軸方向の東辺で3mを測る。面積は、40.4㎡を計測することができる。21号溝と接する畦の西側には、水口となる畦の切れ間をもつ。同様の水口は、3・6・7区画との区画畦にも検出されている。さらに、1区画と同様に、平行する溝、牛蹄痕および馬蹄痕が水田面から検出されており、そのあり方はほぼ1区画と同じ状況を呈している。

3区画

調査区の中央付近で、西側に位置する。21号溝の北側で、区画の東側には2区画、北東側には4区画と接し、各区画との境はやや広目な畦によって画される。21号溝に接する部分も同様で、他の区画畦よりも広い。北側および西側については、区画が存在すると思われるが不明。このため区画の形状は不明であるが、不整形であると思われる。東側の2区画との区画畦には、水口となる畦の切れ間をもつ。水田面には、平行する溝や牛蹄痕等は検出されていない。

4区画

調査区の中央付近で、西側に位置する。区画の南側に3区画、東側に2・5区画と接し、各区画との境はやや広目な畦によって画される。西側は本区画よりもやや高位となるため、区画の境は不明瞭であるが、僅

かな段差を確認することができる。しかし、北側は不明。区画の形状は、東北東方向に長軸を持つ長方形を呈する。比較的細長い区画となるが、その間を仕切る畦は検出されていない。南辺の3区画と接する畦では2.7mを測る。東辺の畦の明瞭な部分で15m程を測り、それ以上長い可能性もある。面積は51.7m²（畦の明瞭な部分）以上を有するものと思われる。水田面には、平行する溝や牛蹄痕等は検出されていない。

5 区画

調査区のほぼ中央に位置する。区画の南側に2区画、東側に6区画、西側に4区画と接し、各区画との境はやや広目な畦によって画される。北側を区画する畦は検出できなかったが、東・西辺の畦の北部分は不明瞭ながらも段差状にあることが確認されている。区画の形状は、東北東方向に長軸を持つ長方形を呈する。細長い区画となるが、その間を仕切る畦は検出されていない。南辺の2区画と接する畦では2.8mを測る。東辺の畦の明瞭な部分で12m程を測り、その先は段差状に4m程続く。面積は26.7m²（畦の明瞭な部分）以上を有するものと思われる。水田面には、平行する溝や牛蹄痕等は検出されていない。

6 区画

調査区の中央で、やや東寄りに位置する。区画の南側に2区画、東側に7・9区画、西側に5区画と接し、各区画との境はやや広目な畦によって画される。北側を区画する畦は検出できなかったが、東・西辺の畦の北部分は不明瞭ながらも段差状にあることが確認されている。区画の形状は、南北方向に長軸を持つ長方形を呈するが、南辺より北辺が狭くなる。やはり、細長い区画となるが、その間を仕切る畦は検出されていない。南辺の2区画と接する畦では4.9mを測る。東辺の畦の明瞭な部分で12m程を測り、その先は段差状に4m程続く。面積は39.4m²（畦の明瞭な部分）以上を有するものと思われる。南側の2区画との区画畦には、水口となる畦の切れ間をもつ。水田面には、平行する溝が僅かに検出されている。この平行溝は、区画の長軸となる南北方向に併走するようにある。明瞭な牛蹄痕は検出できなかった。

7 区画

調査区の中央で、東側に位置する。21号溝の北側で、区画の西側に2・6区画、北側に9区画、東側に8区画と接し、各区画との境はやや広目な畦によって画される。21号溝に接する部分も同様で、他の区画畦よりも広い。区画の形状は、南北方向に長軸を持つ長方形を呈するが、西辺が歪む。21号溝と接する南辺の畦で3.6m、北辺で5.5m、長軸方向の東辺で13.7mを測る。面積は63.4m²を計測することができる。西側の2区画との区画畦には、水口となる畦の切れ間をもつ。水田面には、平行する溝と牛蹄痕が検出されている。平行溝は、区画の長軸となる南北方向に併走するよう、区画の中央から北側にかけて顕著に検出されている。また、牛蹄痕は、区画の南側に僅かに検出されている。

8 区画

調査区の中央で、東端に位置する。21号溝の北側で、区画の西側に7区画と接し、区画の境はやや広目な畦によって画される。21号溝に接する部分も同様である。区画の形状は、南北方向に長軸を持つ長方形を呈すると思われるが不明。調査区内の面積は、16.56m²を計測することができる。水田面には、平行する溝や牛蹄痕等は検出されていない。

9 区画

調査区の中央で、東側に位置する。区画の南側に7区画、西側に6区画と接し、区画の境はやや広目な畦によって画される。北側については不明。区画の形状は、南北方向に長軸を持つ長方形を呈すると思われる。短軸方向となる南辺で5.7mを測る。水田面には、平行する溝や牛蹄痕等は検出されていない。

以上、水田について説明してきたが、水田の時期について少し触れておきたい。

本面で扱った水田は、先述したAs-B軽石層下の平安時代後半の水田区画とは、畦の位置、区画、区画の大きさ等、異なる様相である。一方、後述する古墳時代の極小区画水田（ミニ水田）と比較すれば、区画の大きさが拡大傾向にあり、畦の状況が異なる。特に、4～6区画を区画する畦の延長上には、古墳時代の極小区画水田の畦が位置することは事実であるが、4～6区画の細長い区画内に極小区画水田の様な細かく仕切る畦がない。このことは、水田の区画の大きさが異なるという点で、極小区画水田とは時期差を生じているものと考えられる。確かに、調査時においては、古墳時代の極小区画水田と共に検出されたという経緯をもつ。しかし一方では、1区画の中で重複した59・60号土坑が、本水田より古い遺構であるという調査結果がある。

よって、水田と土坑の重複状況から、本面で扱った一連の水田は、9世紀代以降からAs-B軽石が降下する天仁元（1108）年以前の時間幅の中で営まれた遺構と考えられよう。

水田面に残された平行溝（第73・74図）

平行する溝が水田面に残された区画は、1・2・6・7区画である。これらの区画内での平行溝の走向方向は、区画の長軸方向に延びるといふ共通点がある。また、溝幅が10cm前後であることも、ほぼ共通している。一方、平行する溝の間隔は、一部で重なる部分もみられるが、広いところでは30cm前後と、その幅はまちまちである。さらに、これらの平行溝は、区画を画する畦には重複せず、全て区画内に収まる状況がある。断面観察からは、溝が比較的浅いことが知れ、その覆土は黄橙色味を帯びた色調の淡い褐灰色土であり、水田耕土の褐灰色土に近い土である。

こうした状況から、この平行溝の性格を推測すれば、水田耕作に関わる耕作痕として考えることができよう。その耕作痕の耕具とすれば、馬鍬ないし犁による可能性が考えられる。但し、溝幅や溝間隔からすれば、馬鍬の可能性は少なく、犁による各一筋ごとの耕作の可能性が高いものと考えられる。

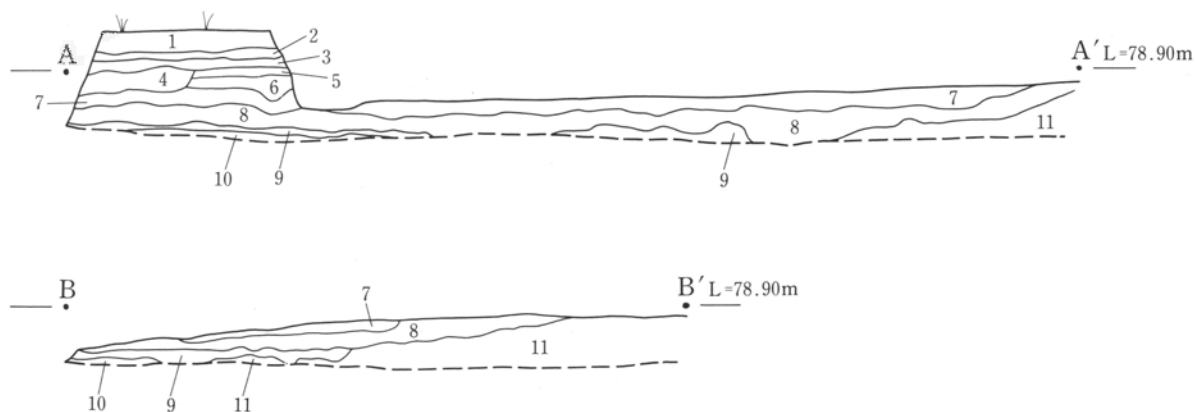
水田面に残された牛蹄痕（第76～79図）

牛蹄痕が水田面に残された区画は、1・2・7区画であり、区画内全体に顕著に検出されたのは1・2区画である。先述したように、足跡は偶蹄類の動物であり、その大きさから牛蹄の痕跡であると考えられる。本来、牛は群居性であることからすれば、その足跡はランダムに残るはずであるが、検出された牛蹄痕のあり方はランダムな状態ではなく、一定の方向性がみられるようである。その方向性は、東西方向にある。つまり、何らかの意図の基に方向付けられた足跡とみることができる。

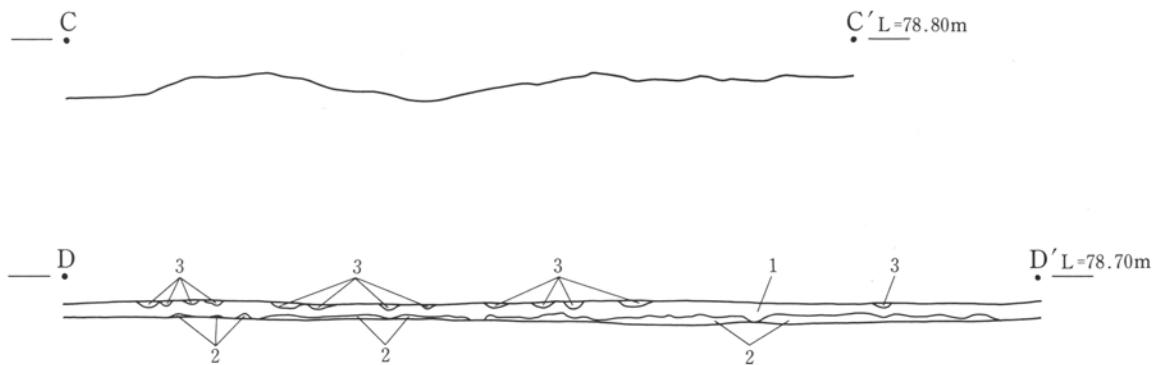
この1・2区画内での足跡の方向は、区画の長軸方向でもある。さらに、先述の平行溝（犁による耕作痕の可能性）の延びる方向とも合致する。以上の点から、水田耕作に関わる牛耕が行われた結果と推測できないだろうか。さらに推考するならば、平行溝と牛蹄痕とのセットという点で、牛と犁による牛耕の姿が思い浮かべることができないであろうか。

B区

B区では、本第4面に相当できる遺構は検出できなかった。



- 1層 黒褐色土 現在の水田耕作土。
- 2層 黒褐色土 現在の水田耕作土で、少量のAs-A軽石を含む。
- 3層 暗褐色土 全体に多く凝固鉄分を多く含み、As-A軽石を多く含む。
- 4層 黒褐色土 粘質土で、As-B軽石を極少量含む。斑状の凝固鉄分を少量含む。
- 5層 黒褐色土 As-A・As-B軽石を多く含む。粘質土で、鉄分が多い。
- 6層 黒褐色軽石層 As-B軽石の純層である。
- 7層 黒褐色土 第4面の水田耕作土で、鉄分が多く粘性が強い。
- 8層 黒褐色土 7層の水田耕作土のユニット。粘性が強く、斑状の凝固鉄分を含む。
- 9層 暗褐色土 Hr-FP泥流のブロックを多く含み、斑状の凝固鉄分も多い。
- 10層 暗褐色土 第6面の水田耕作土で、鉄分が多く粘性が強い。
- 11層 黒褐色土 ローム粒子を多く含み、白色軽石 (As-C?) をも含む。粘質。



S = 1/40

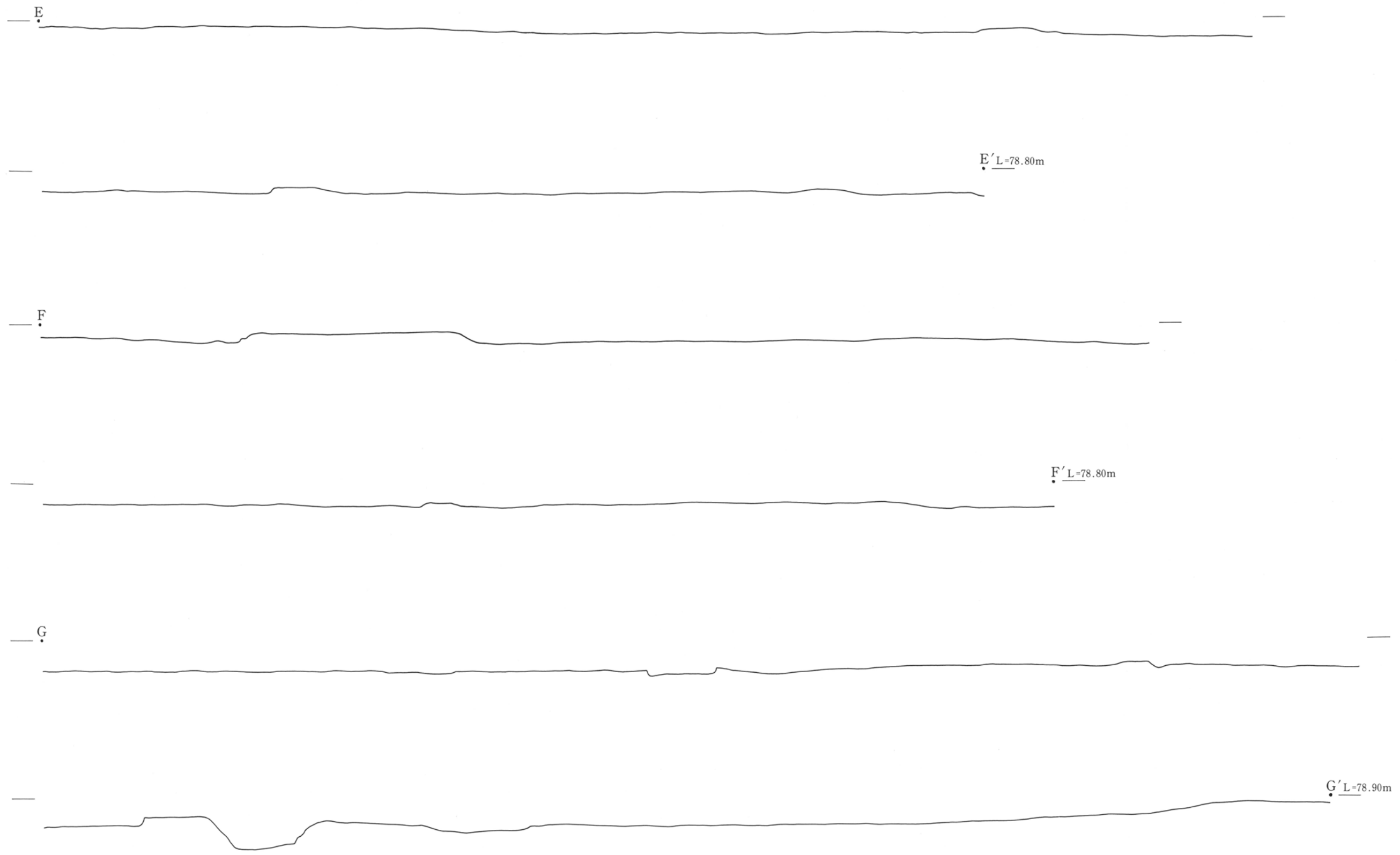
- 1層 褐灰色土 灰色味が強く、上方ほど色調が明るい。粘性強く、白色軽石 (As-C?) を含む。
- 2層 黒色土 上位に白色軽石 (As-C?) を含み、粘性がかなり強い。
- 3層 褐灰色土 鈍い黄橙色味を帯びた、基盤のシルト層である。

第73図 A区 土層断面



S=1/100

第74図 A区 水田の区画と水田面



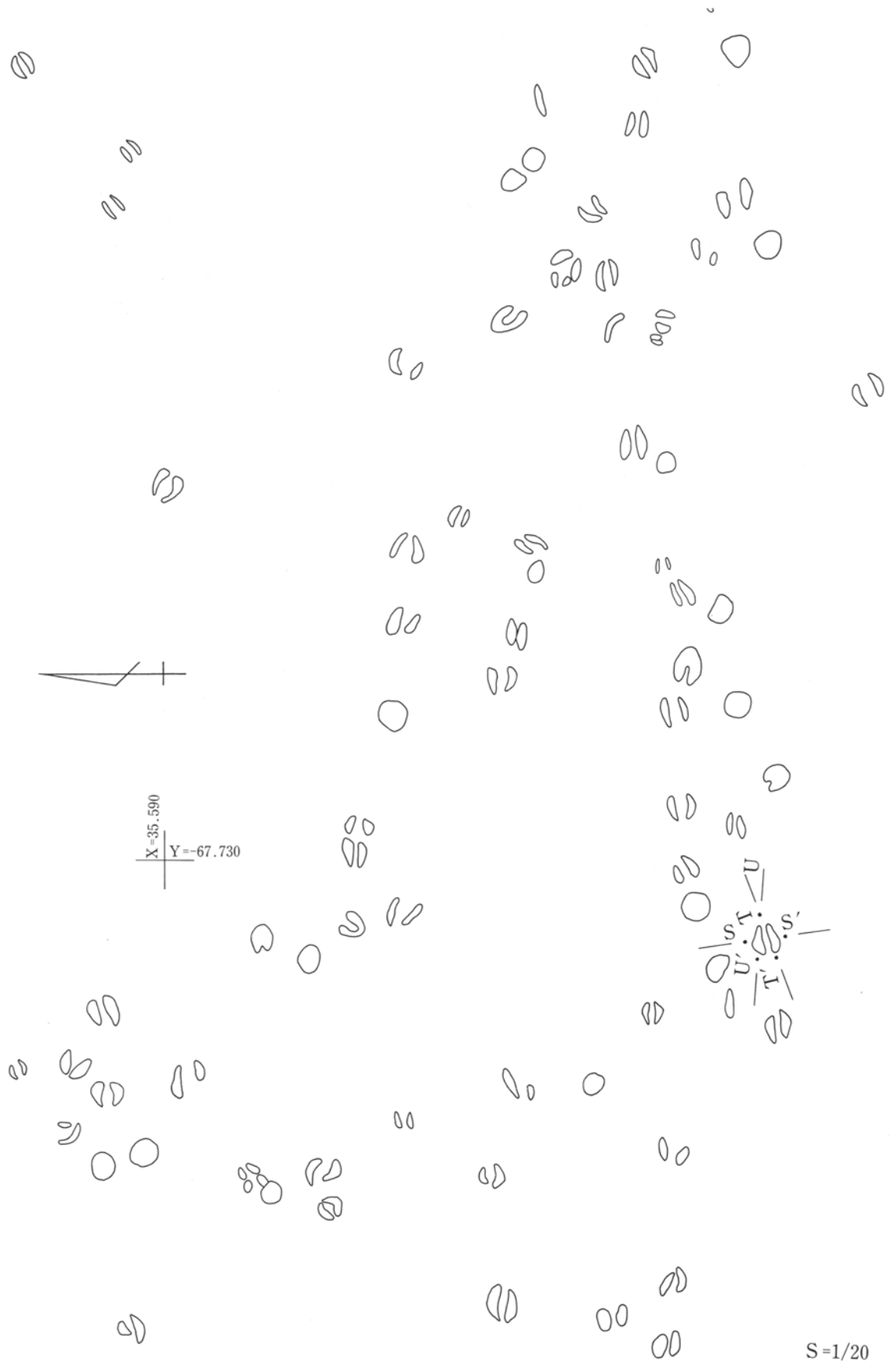
S = 1/40

第75図 A区 水田の断面



第76図 A区 水田面に残る牛蹄痕(1)

S=1/20



第77図 A区 水田面に残る牛蹄痕(2)

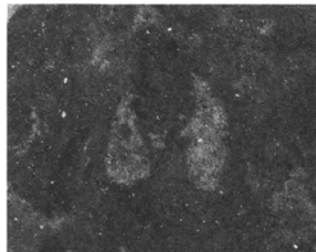
— A A' L=78.65m



— B B' L=78.65m



— C C' L=78.65m



掘削前



掘削後

— D D' L=78.65m



— E E' L=78.65m



— F F' L=78.65m



検出された牛蹄痕

— G G' L=78.65m



— H H' L=78.65m



— I I' L=78.65m



— J J' L=78.65m



— K K' L=78.65m

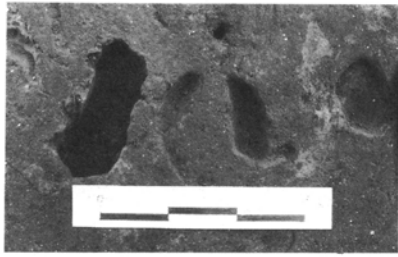


— L L' L=78.65m

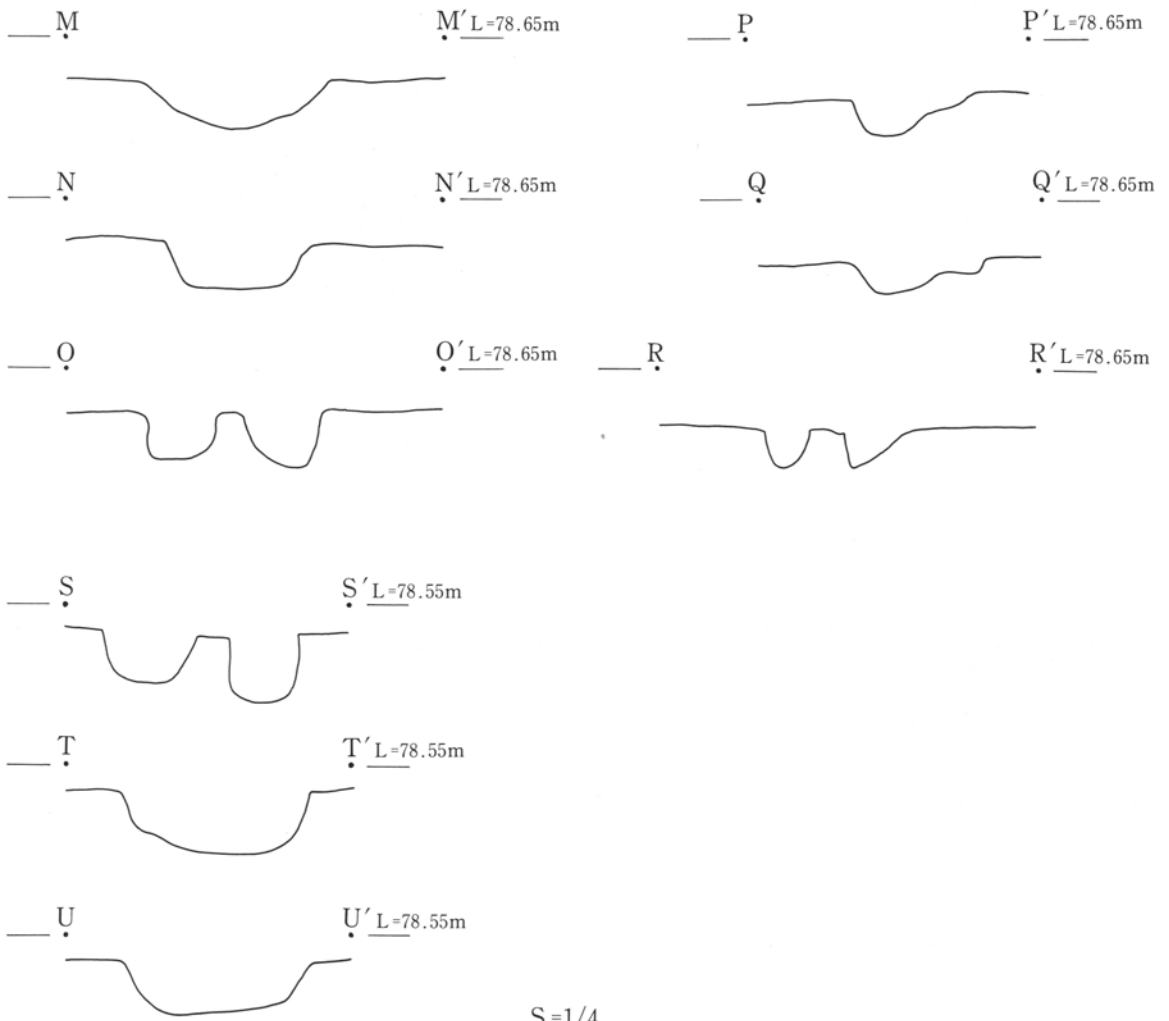
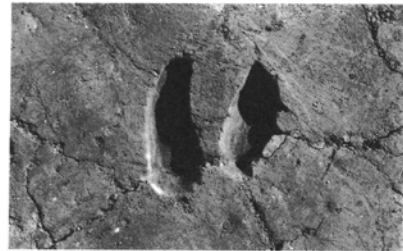


S=1/4

第78図 A区 牛蹄痕の断面(1)



検出された牛蹄痕



第79図 A区 牛蹄痕の断面(2)

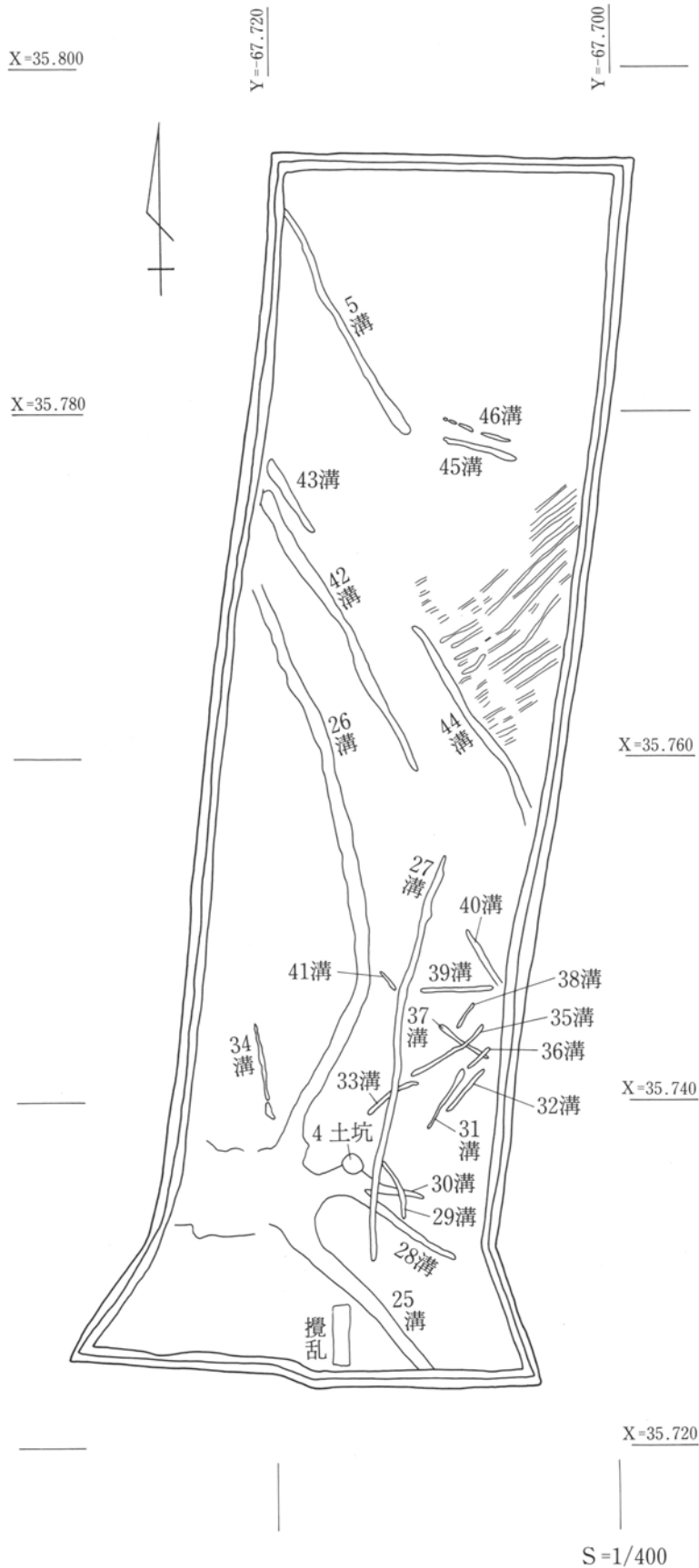
C区

C区で検出された遺構には、土坑1基と多くの溝、さらに耕作痕と考えられる平行する溝群がある。

調査は、基本土層のVII層となる暗黄色土の上面を遺構確認面とした。

調査区内の地形の状況は、南側のA・B区よりもやや高位置となり、北側のD区へ向かって緩やかに高さを増す。また、この状況は、基本土層VII層としたHr-FP泥流層を含めた洪水層が、数度にわたる堆積の厚さによるものと思われる。

こうした微高地となる調査区には、全体に多くの溝が検出されている。また、調査区の南側には、溝が集約した広い溝状の箇所も検出されている。さらに、耕作痕と考えられる平行する溝群は、調査区の中央北側にある。先述した第4面A区1・2区画でみられた平行溝と同様な状況を呈しており、幾条もの細い溝が同方向に併走している。これと同じ平行溝群は、東隣の北関調査分からも検出されており、その走向方向等からも一連の痕跡と考えられる。(第80図)



第80図 C区の遺構配置図(本線)

土坑 (第81図)

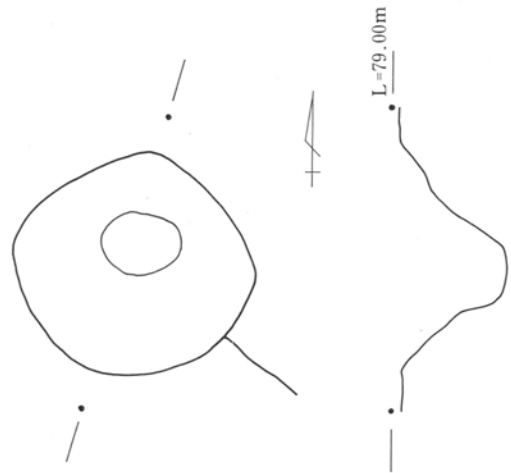
4号土坑

位置 C区の南側にあり、X=35.737、Y=-67.715付近に位置する。

規模 円形を呈し、径1.30m、深さ55cmを測る。

概要 30号溝ないし28号溝と重複するが、その新旧関係は土層断面から本土坑が新しい。暗灰色土と明灰色粘質土を覆土とし、遺物の出土はない。

4号土坑



第81図 C区 土坑

S=1/40

溝 (第82図)

調査区の中央付近で、東南方向に延びる40・42・43号溝がある。これらの溝の南側に26号溝が同方向に延びるものの、途中から南方向へ弧状に方向を変え、南側の溝集中部へ合流していく。この調査区南側に位置する溝の集中部は、25・26・28・30号溝といった複数の溝が合流するようであり、その底面は複数の溝の痕跡が認められている。しかし、土層の断面観察からは、各溝の新旧関係を導き出すことはできなかった。堆積する覆土は明灰色土が主体となり、上層が粘質であるのに対し、下層では砂礫を多く含む赤色気味の酸化土となり堅く締まった状態にあった。この溝の集中部から、25・28号溝が南東方向へ延びて行き、30号溝が東へ僅かに延びて行く。30号溝は4号土坑と重複するが、その新旧関係は土坑の方が新しく、溝が古い。また、調査区の南側で溝集中部の東側には、南北方向に延びる27号溝がある。調査区内で南北方向の溝は、27号溝のみである。27号溝の東側には細く短い溝が多く検出されているが、後述する平行溝とは覆土が全く異なる溝であり、同一視することはできない。

平行する溝状遺構 (第83図)

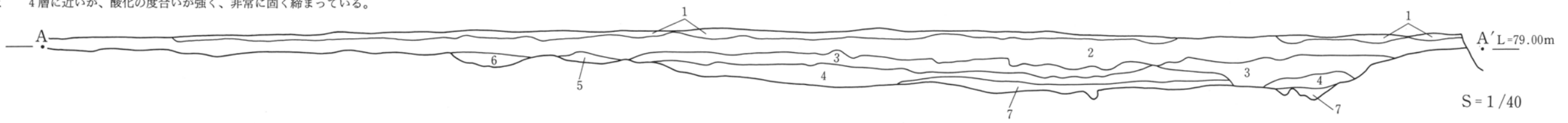
平行する溝群は、調査区の中央付近の東側にある。16条ほどの溝状のものが、44号溝を境とするかのように、北東方向へ併走する形で検出された。各溝の幅は15cm前後と細く、覆土は遺構確認面とした暗黄色土より暗く汚れた土であった。溝状に延びる様は、一見直線的にも見えるが、中間のものは緩やかに蛇行している状態で併走する部分が見られる。また、溝の間隔は、40cm前後を測る。これと同じ平行溝群は、東隣の北関調査分からも検出されており、本調査区での平行溝群の延長上に同方向に併走する一群と、方向を違えて併走する一群とがある。これらの溝群は、その有り様から同一時期の一連の痕跡と考えることができる。

類似する遺構には、先述した第4面A区1・2区画でみられた平行溝がある。比較すると、A区の場合は畦による区画という水田面に残されていたが、本区の場合では区画する畦のような高まりは検出されていない。この点が大きく異なるものの、それ以外はほぼ同じであると言える（溝の間隔が本区画の方がやや広い）。従って、A区のものと同様に、犁による耕作の痕跡である可能性が高いものと考えられるが、水田の耕作に伴うかどうかは不明である。微高地上にあることを考えれば、畑作に伴う耕作痕とも考えることができよう。



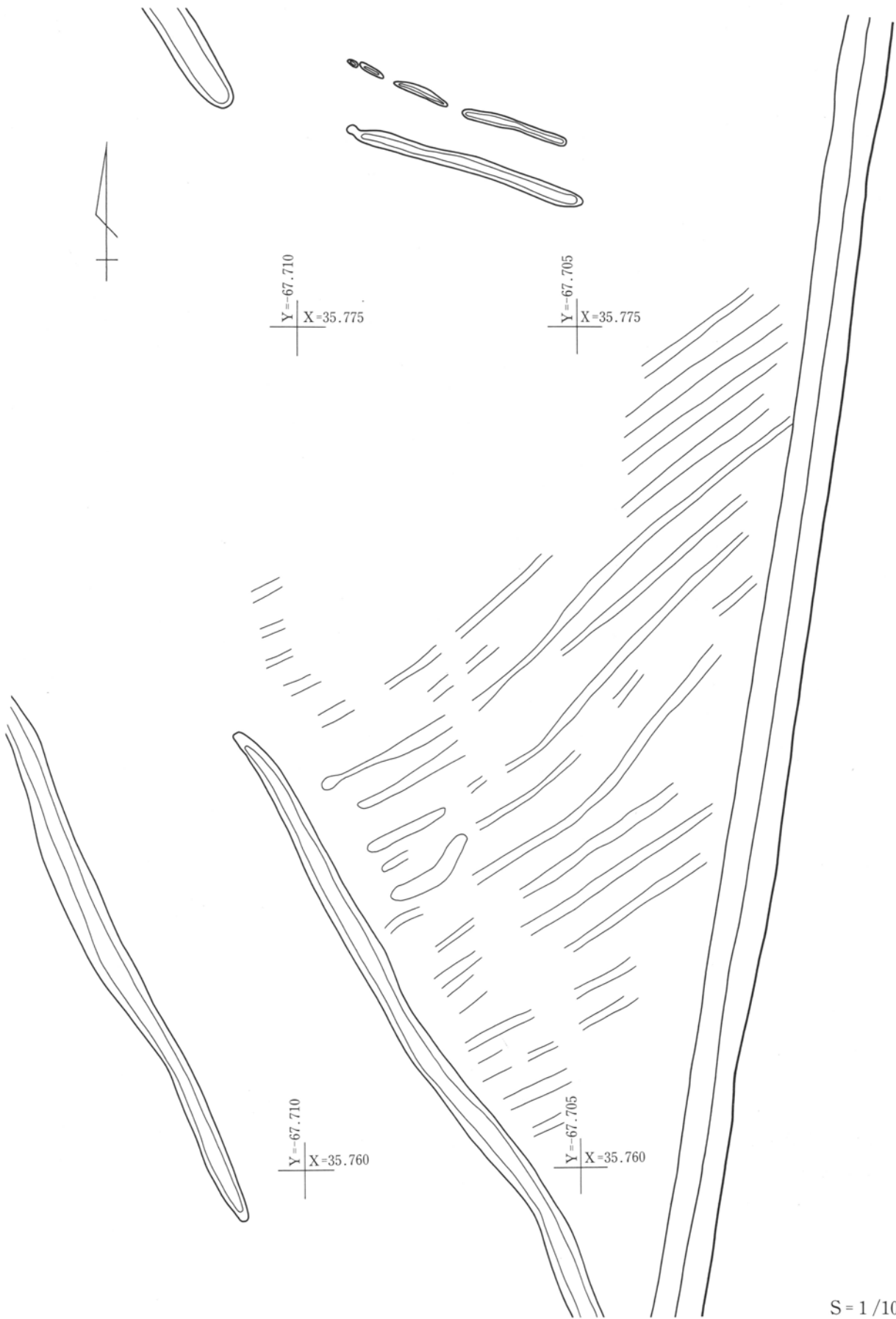
- 1層 黒灰色土 Hr-FP泥流の小ブロックを多量に含む。
- 2層 明灰色粘質土 Hr-FP泥流ブロックを含み、全体が酸化気味となっている。
- 3層 明灰色粘質土 2層に類似するが、Hr-FP泥流ブロック等をほとんど含まない。
- 4層 明灰色土 2・3層と同じ土と考えられるが、粘質でなくさらさらしている。下にHr-FP泥流ブロックを含み、層下部は酸化により硬く締まっている。
- 5層 明灰色土 4層に類似するが、酸化は弱く、Hr-FP泥流ブロックの混入はない。
- 6層 灰色土 暗黄色土や明灰色粘質土がブロック状に混入する。Hr-FP泥流ブロックも含む。
- 7層 赤灰色土 4層に近いが、酸化の度合いが強く、非常に固く締まっている。

S = 1 / 100



S = 1 / 40

第82図 C区 溝と土層断面



第83図 C区 平行する溝状遺構

S = 1/100

D区

D区で検出された遺構は、溝が3条のみである。

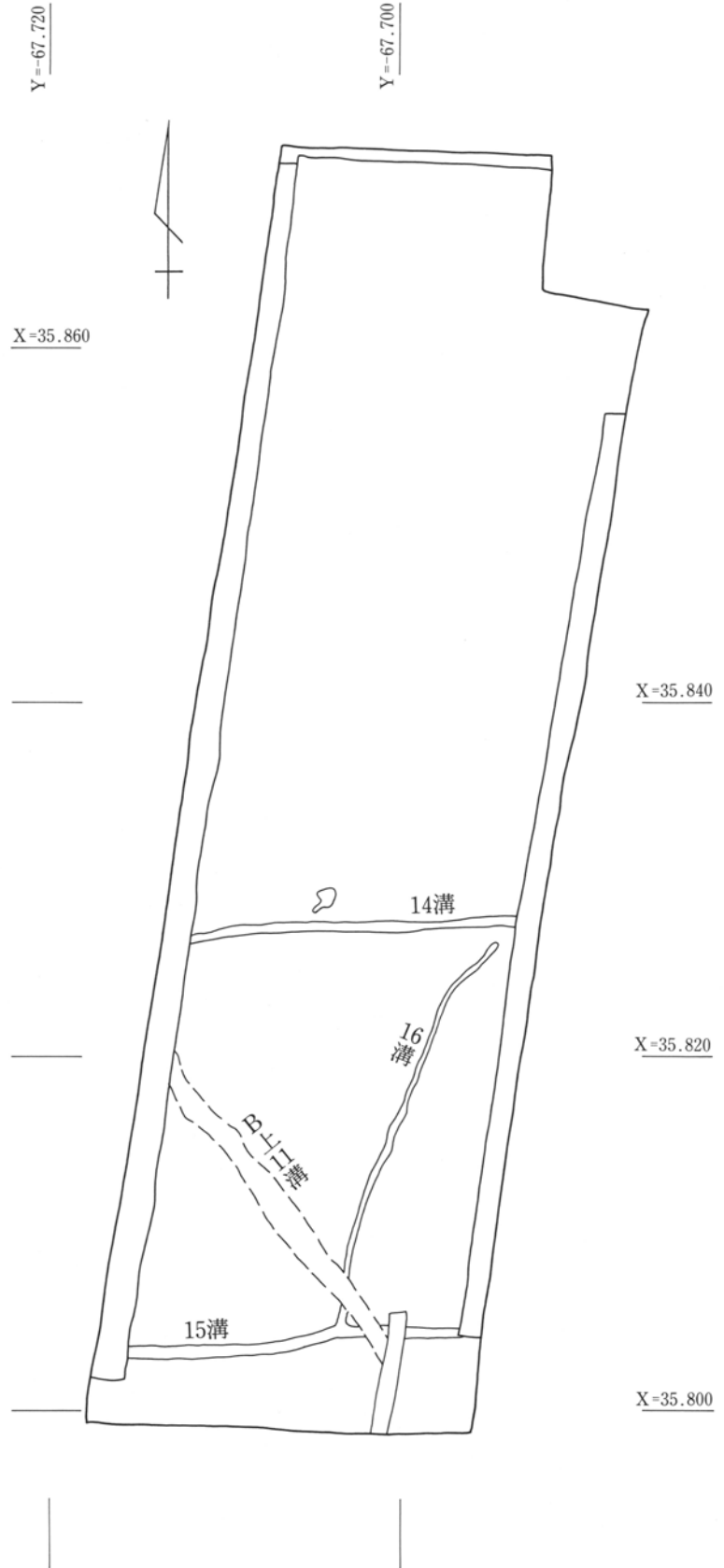
調査は、先のC区と同様に基本土層のVII層となる暗黄色土の上面を遺構確認面として行われた。

調査区内の地形の状況は、南側のC区から続くように、調査区の中央に向かって緩やかに高さを増し、中央から北側にかけては僅かに低くなる状況がある。この状況は、基本土層VII層としたHr-FP泥流層を含めた洪水層の堆積の厚さによると思われるが、全体的には北側へ向かって洪水層は徐々に薄い堆積となっている。

こうした微高地となる調査区の中で、溝が検出されたのは調査区の南側である。調査区の中央から北側にかけては、染み状の土色の変化を認めることはできたが、人為的な遺構と認定するには至らなかった。(第84図)

溝

検出された3条の溝は、調査区の南側に位置する。溝の走向方向は、東西方向に延びるものが14・15号溝であり、16号溝はおよそ南北方向に延びる。この16号溝の南端は、15号溝に取り付く形となる。これらの溝の堆積土は、総じて同様な覆土であり、粘質な明灰色土を主体とした土である。



第84図 D区の遺構配置図(本線)

E区

E区で検出された遺構には、住居跡が1軒、土坑3基、ピット列が3列、溝1条がある。

調査は、第3面で検出したAs-B軽石下水田の耕土下面を確認面として行われた。

調査区内の地形の状況は、ほぼ平坦であると言えるが、北側のF区寄りには後述する古墳時代では微高地に当たる場所である。

この古墳時代の微高地に当たる位置に、住居跡が存在する。土坑は、調査区の北側・中央・南側に点在する。また、溝は調査区のほぼ中央を南北に、ピット列は中央部と南側で検出されている。

水田等の耕作に関わる遺構は、検出されていない。(第85図)

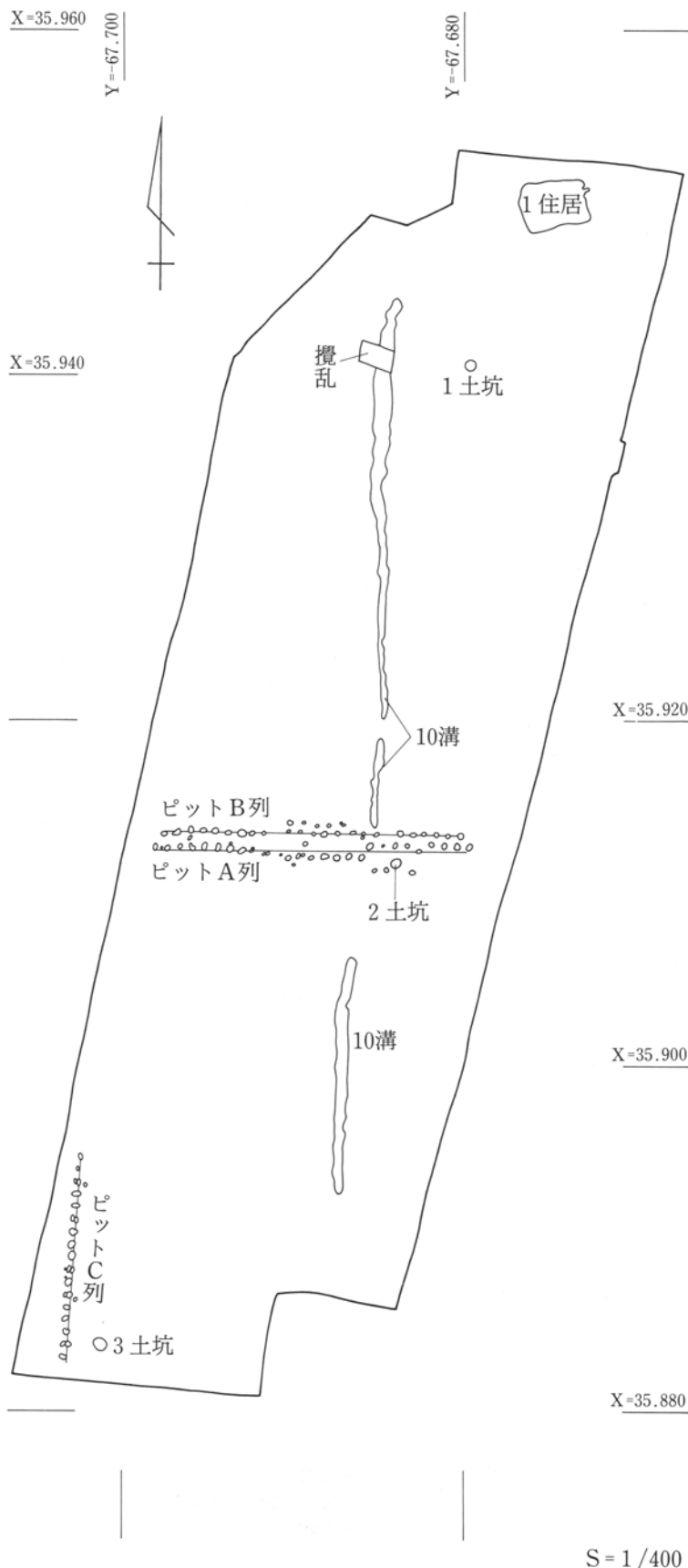
住居跡 (第86図)

1号住居跡

位置 E区の北側でやや東寄りにあり、X=35.950、Y=-67.675に位置する。

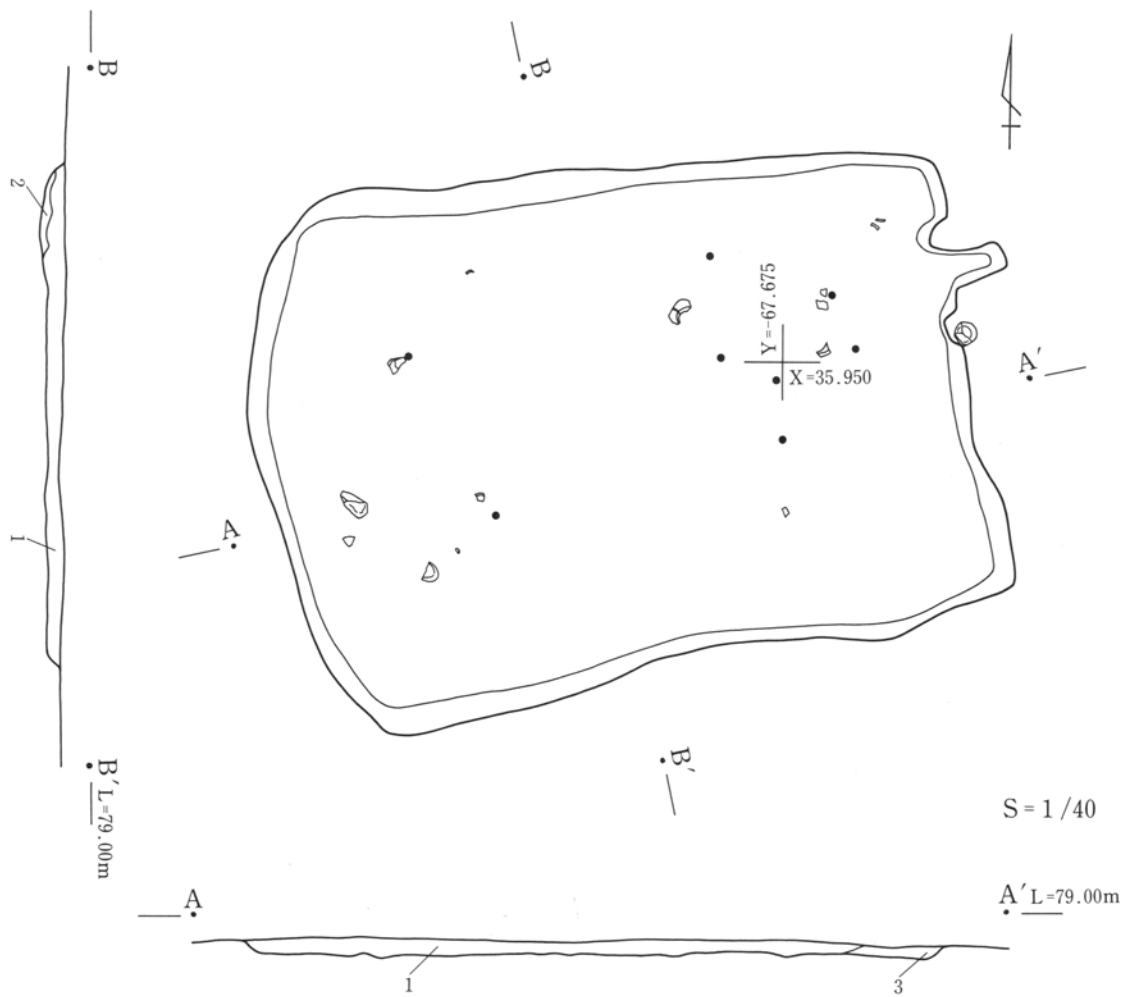
規模 長方形を呈し、東壁側に竈をもつ。主軸方向は東北東にあり、東西方向で3.8m、南北方向で2.7mを測る長方形で、確認面から床面までが8cmほどを測る。また、竈の煙道部は、東壁の外側に大きく突出する。

概要 本住居跡は、E・F区に跨る微高地上に所在し、As-B軽石下水田の耕



第85図 E区の遺構配置図(本線)

S = 1/400



S = 1 / 40

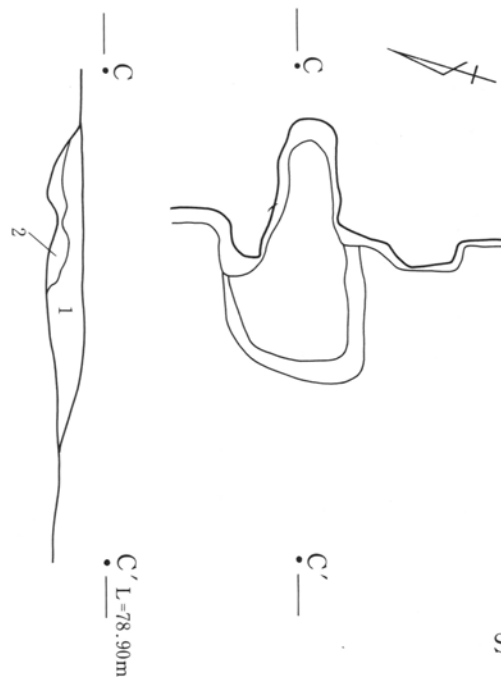
A' L = 79.00m

1号住居土層

- 1層 黒褐色粘質土 As-C軽石や褐色土粒を少量含む。
- 2層 黒褐色粘質土 褐色土の大粒ブロックを含む。
- 3層 黒褐色粘質土 均質で混入物が少ない。

1号住居カマド土層

- 1層 黒褐色粘質土 As-C軽石や褐色土粒を少量含み、焼土・炭化粒を僅かに含む。
- 2層 黒褐色粘質土 均質で混入物が少ない。



S = 1 / 20

第86図 E区 1号住居跡

土層下面で検出された遺構である。このため、本報告では、As-B軽石下水田以前でHr-FP泥流層形成以後という意味合いから、Hr-FP上面の遺構として扱った。隣接する北関東自動車道関連での調査でも、本調査で検出された微高地の続きが確認されており、その微高地上に古墳時代前期から奈良・平安時代にかけての住居跡や掘立柱建物等の遺構が検出されている。

主軸方向に長い長方形を呈し、確認面から床面までは8cmほどと、住居跡全体の依存状況は悪い。床面は平坦であり、竈前および住居の南側に5基のピットが検出されている。住居内は、As-C軽石を少量含む黒褐色粘質土を覆土とし、覆土中から土師器・須恵器の坏・碗・鉢等の遺物が出土している。竈は、東壁の中央より北側に位置する。袖と燃烧部は床面上に位置し、両袖の一部が検出できたが、大半は残っていない。また、焚き口から燃烧部にかけては、床面を僅かに窪ませる構造となり、底面に浅いピットを有する。煙道部は、燃烧部奥の底面から東へ60cmほど延びる。住居の掘り方面は、検出されていない。

出土した土器から、9世紀代頃の住居跡と考えられる。

土坑 (第87図)

1号土坑

位置 E区の北側中央にあり、X=35.940、Y=-67.680付近に位置する。

規模 楕円形を呈し、長軸方向を西北西にもち、長軸1.0m、短軸80cm、深さ30cmほどを測る。

概要 As-B下水田の耕土層下面で検出された土坑である。灰褐色砂質土を覆土とし、遺物の出土はない。

2号土坑

位置 E区の中央でやや東寄りにあり、X=35.912、Y=-67.684に位置する。

規模 円形を呈し、径50cm、深さ20cmほどを測る。

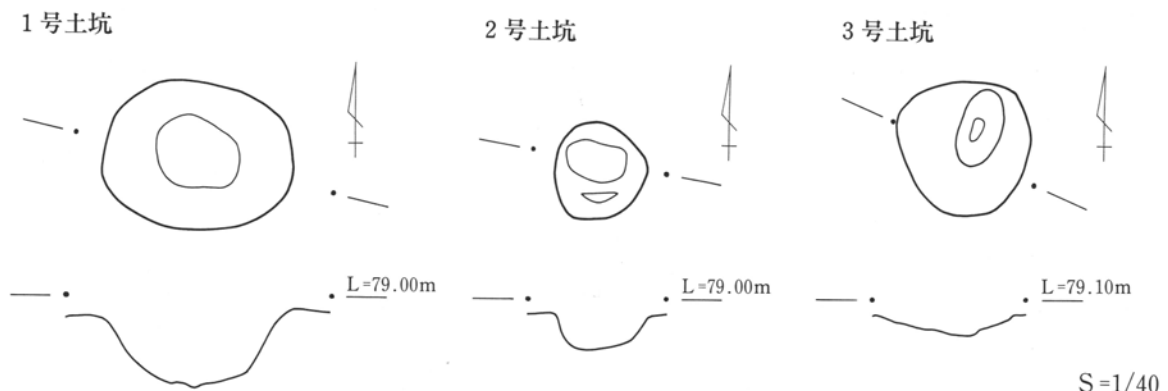
概要 A・Bピット列に所在するが、その関係は不明。灰褐色砂質土を覆土とし、遺物の出土はない。

3号土坑

位置 E区の南側で西寄りにあり、X=35.884、Y=-67.700付近に位置する。

規模 円形を呈し、径70cm、深さ10cmほどを測る。

概要 Cピット列の東側に所在するが、その関係は不明。黄灰褐色土を覆土とし、遺物には土師器の細片が出土している。



第87図 E区 土坑

ピット列 (第89図)

検出されたピット列は、E区のほぼ中央に位置するA・Bの2列のピット列と、E区南側の西寄りに位置するCピット列の計3列がある。これらのピット列は、1号住居跡・1～3号土坑と共に、As-B軽石下水田の耕作土下面で検出された遺構である。

A・Bのピット列は、一定の間隔を保ち2列が併走する。Aピット列が南側で、Bピット列が北側となり、走向方向は東西である。Cピット列は単独列で、ほぼ南北方向に延びる。そして、このA・BとCのピット列は、調査区内で鍵の手状に配置されているようにある。また、A・Bピット列を微細にみると、その併走のあり方がいくつかのブロックに分かれるかのように、微妙に方向や間隔が異なっていることがわかる。これに対しCピット列では、ほぼ一直線上に並んでいる様子が見てとれる。各ピットは、径が30～40cm前後のものが多く、その深さは10cm前後と比較的に浅い。

ピット内の覆土がほぼ同様な土であることから、その存在が同時期であつともものと考えられる。さらには、その配置から、何らかの区画を示すための遺構とも考えられる。ただし、ピットの形状からすれば、杭列のような遺構を想定することはできない。

溝

検出された溝は、調査区のほぼ中央を南北方向に延びる10号溝である。この溝は、先の東西方向に延びるA・Bピット列の辺りで不明確になるが、北側と南側の溝は覆土(暗褐色土)や方向等から同一の溝と考えられる。

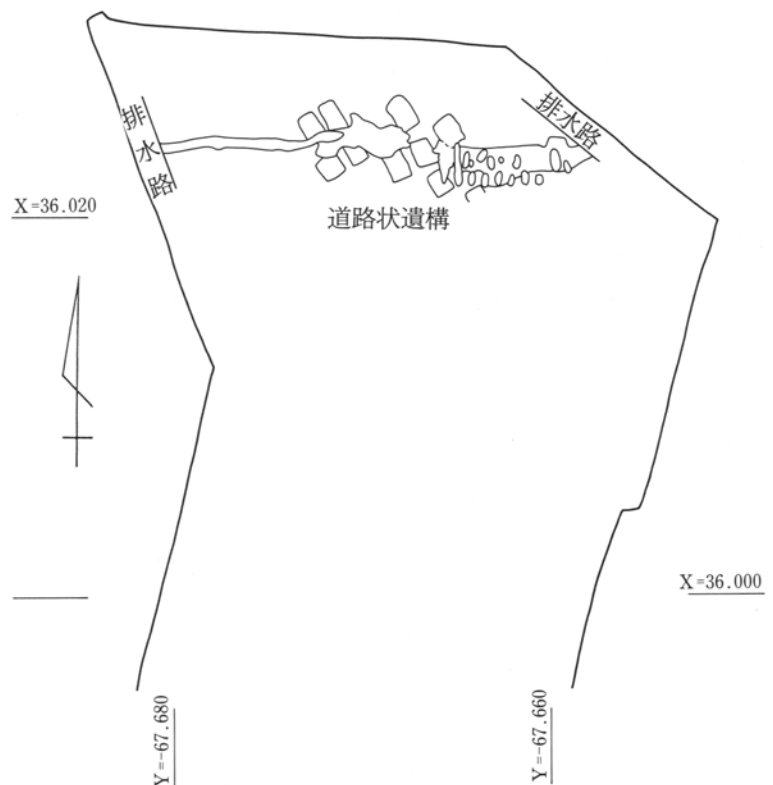
F区

F区で検出された遺構は、道路状遺構とした遺構のみである。

調査は、先のE区と同様に第3面で検出したAs-B軽石下水田の耕土下面を確認面として行われた。

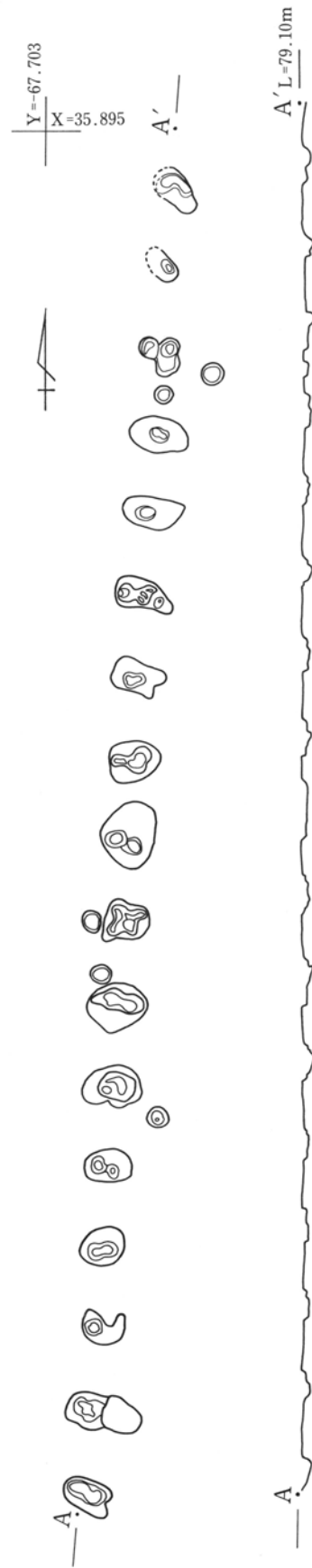
調査区内の地形の状況は、ほぼ平坦であるが、南側のE区寄りには後述する古墳時代では微高地に当たる場所である。E区では、この古墳時代の微高地に当たる位置から住居跡を検出しているが、本調査区では遺構の存在はない。

道路状遺構とした遺構は、調査区の北側で検出されている。(第88図)

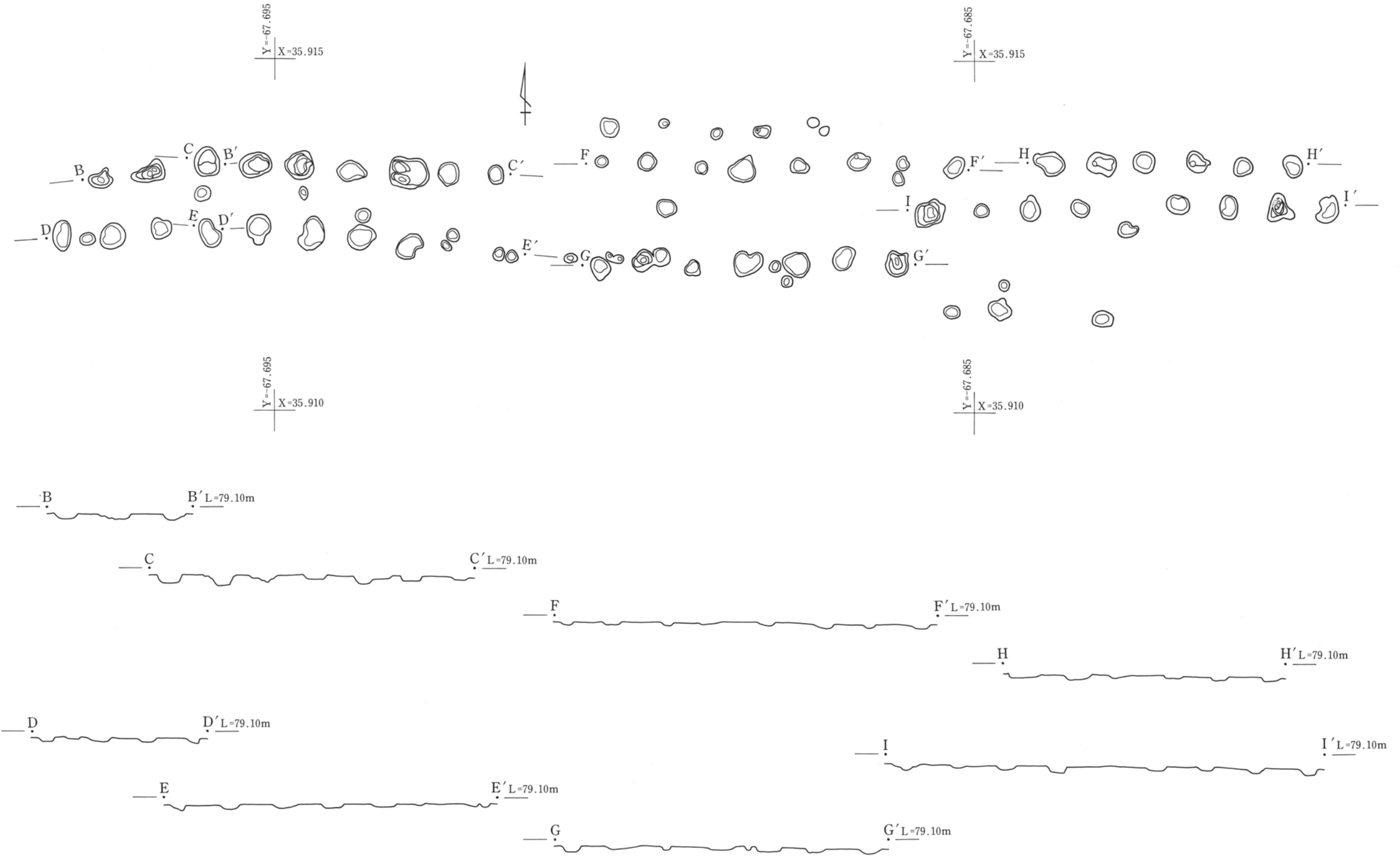


S=1/400

第88図 F区の遺構配置図(本線)



S=1/60



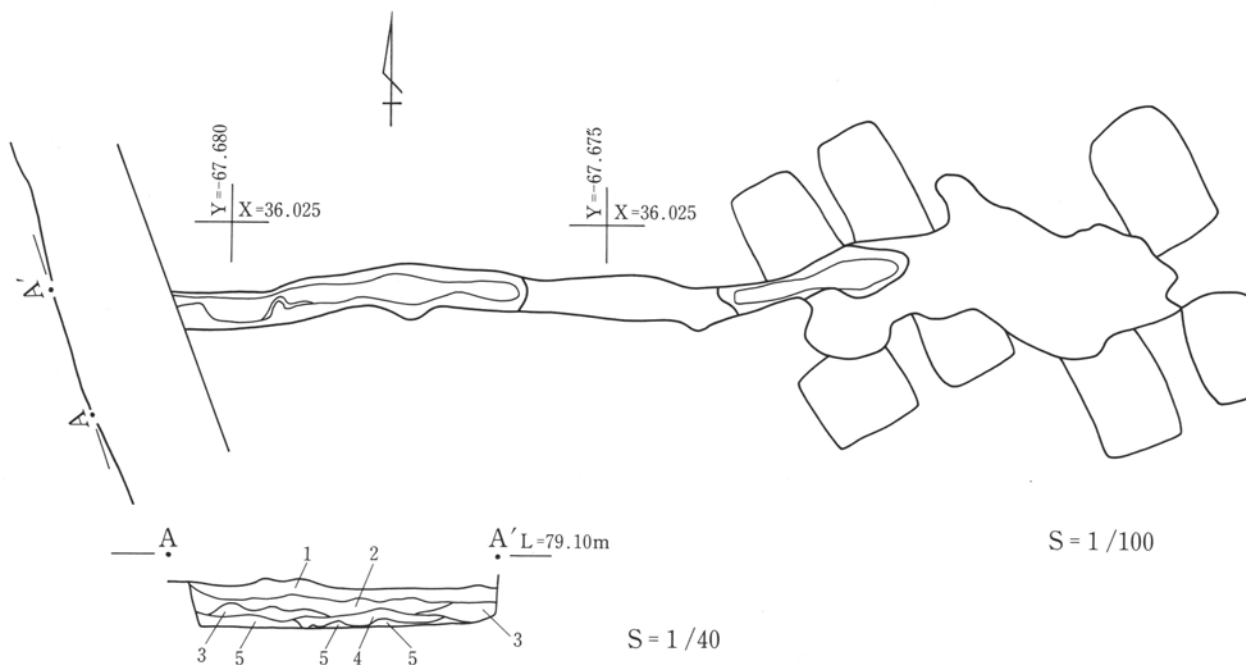
S=1/60

第89図 E区 ピット列A~Cと断面

道路状遺構？ (第90・91図)

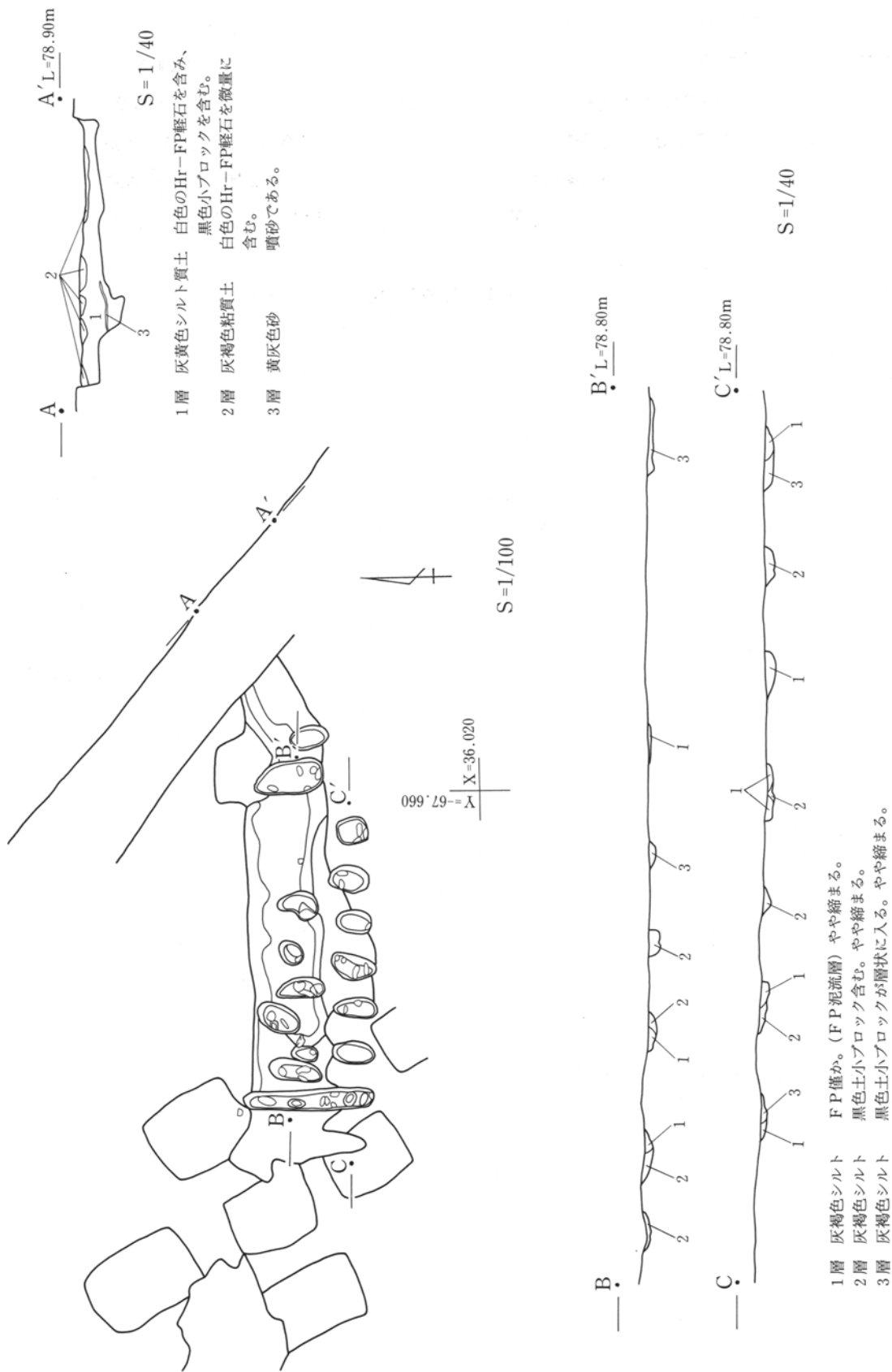
調査区の北側で、東西方向にある遺構である。遺構は2種類からなり、西側が溝状で、東側には楕円状の落ち込みが2列並ぶ。調査時において、堅く締まった東西方向に延びる灰黄色砂質土(4層)を路面と考え、道路状遺構としてその範囲を調査した遺構である。溝および楕円状の落ち込みは、後述する第6面のHr-FA下水田面を切り込んでいることから、時期としてはHr-FA下水田期以降の所産である。また、遺構の形状および底面にまんべんなく半月状の凹凸を有する点では、道路状遺構とは考え難く、むしろ底面の凹凸は耕作等に関わる耕具痕の可能性も高い。よって、現時点では、道路状遺構とするよりも、耕作に伴う痕跡として考えておきたい。

なお、第91図に示した東壁の土層断面では、As-B軽石降下以前に生じたとみられる噴砂の痕跡が確認されている。



- 1層 黒灰色粘土 第3面の水田耕作土。
- 2層 灰褐色粘質土 白色のHr-FP軽石を微量に含む。
- 3層 灰黄色シルト質土 白色のHr-FP軽石を含み、黒色小ブロックを含む。
- 4層 灰黄色砂質土 白色のHr-FP軽石を含み、黒色小ブロックを含み、砂質である。
- 5層 黒色粘質土 第6面の水田耕作土。

第90図 F区 道路状遺構(西側)と土層断面



第91図 F区 道路状遺構(東側)と土層断面

第6節 第5面の遺構（古墳時代Ⅰ、Hr-FP下面）

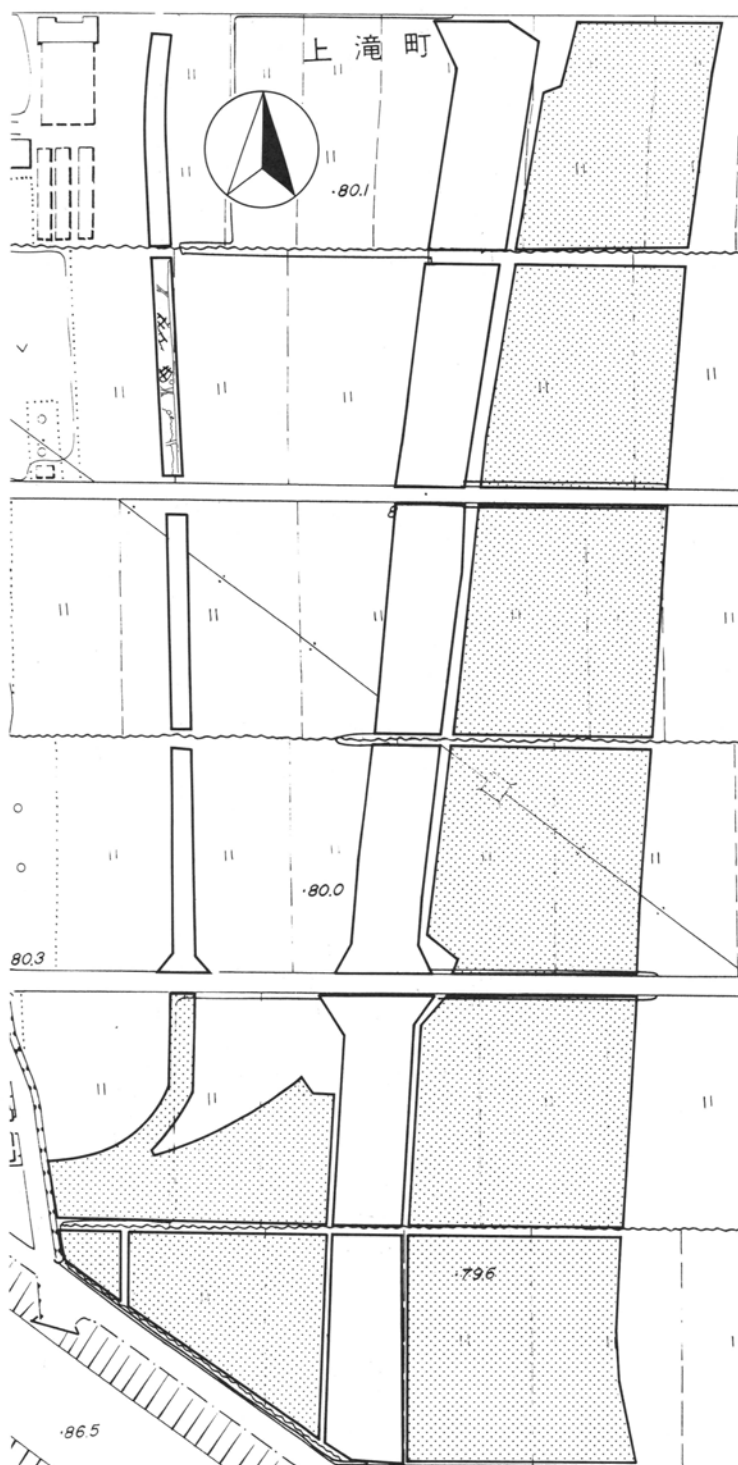
第5面は、基本土層のⅦ層となるHr-FP泥流層下面を確認面とし、検出された遺構を扱った。この基本土層Ⅶ層は、榛名山を給源としたHr-FP火山灰を主とする泥流層であり、降下による火山灰とは異なる。また、その形成時期も不明である。

この第5面の遺構が明瞭に検出されたのは、E区取り付け道からであり、水田跡と溝が調査されている。他の調査区では、検出されていない。隣接の北関調査でも同様である。むしろ、後述する第6面の遺構であるHr-FA下水田が、本遺跡全体に広がる状況となっている。

本面で検出された水田跡は、下位で検出されたHr-FA下水田面との間に、本水田耕土層およびHr-FA火山灰層を挟んでいる。また、本水田とHr-FA下水田では、水田区画のあり方が異なっている。以上の点から、Hr-FA下水田とは異なる時期の水田遺構として本面を認定した。

Hr-FP泥流層下面での水田遺構を検出した周辺の遺跡には、本遺跡の北側で滝川を挟んだ宿横手三波川遺跡、それに続く西横手遺跡群がある。南側では、本報告書に収録した上滝Ⅱ遺跡の調査で検出されている。

ここで大きく問題となるのは、本遺跡でのHr-FP泥流層下水田の存在が、余りにも貧弱なことである。後述するHr-FA下水田を含めて、考える必要がある。



第92図 第5面の全体図

S = 1 / 2500

E区取り付け道

検出された遺構には、土坑が3基と大溝および溝が数条、畦畔を伴う極小区画水田がある。

調査は、調査区の東壁際に設けた排水用の溝の土層断面を確認しながら行われた。この土層断面(第96・98図)では、上層のAs-B軽石混土層の下位に10層としたHr-FP粒を含む黄褐色土(粘質土・砂質土)が堆積し、その下位に11層とした黄褐色土(砂質土・粘質土)および11層最下位に部分的に堆積する乳白色粘質土が堆積する。その下位の12層が暗灰色粘質土となり、さらに明灰色土の13層が堆積し、14層の暗灰色粘質土となる。10層・11層はHr-FPに由来する泥流層と思われる、13層はHr-FA火山灰とみられる。12層および14層は水田耕作土であり、12層上面が第5面とした本面の遺構面に当たり、14層上面が後述の第6面の遺構面となる。このことから、本面の遺構と第6面の遺構とは、明らかに異なる時期の遺構であることが理解できる。

検出された遺構は、調査区の南側で大溝の一部が、大溝の東際に土坑が点在し、調査区の中央に水田跡、さらに北側で交差する2条の溝があり、その北側はF区にかけて微高地となる。微高地部では、本面に帰属する遺構は検出されていない。土坑や溝・水田遺構は、11層を覆土とし、あるいは覆われる状態で検出された。また、大溝については、後述の第6面で扱うC区およびD区取り付け道で検出された大溝の続きである。(第93図)

以下、各遺構について説明する。

土坑 (第94図)

1号土坑 Hr-FP下

位置 調査区の南側にあり、X=35.908、Y=-67.779に位置する。

規模 楕円形を呈し、長軸方向を東南東にもつ。長軸1.35m、短軸1m、深さ8cmほどを測る。

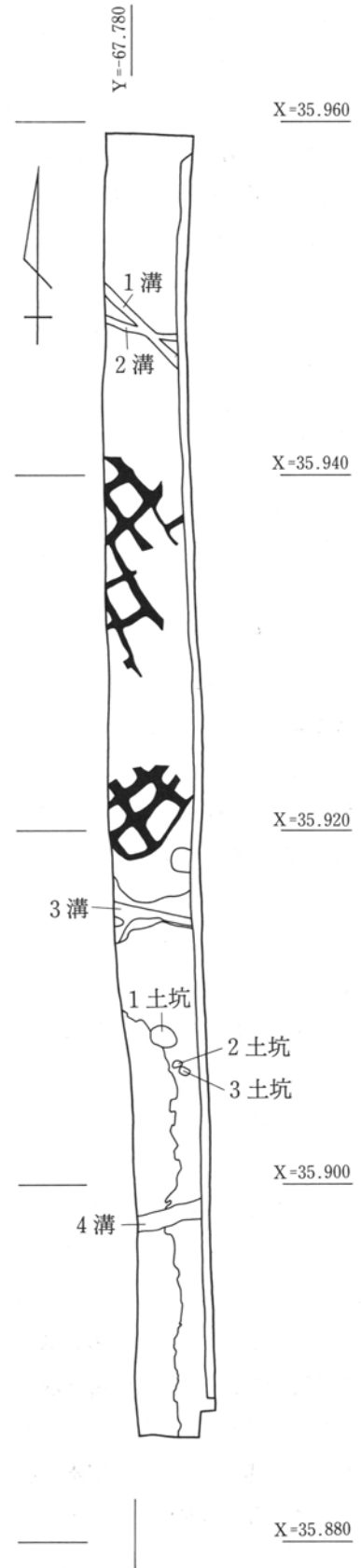
概要 大溝が西側へ屈曲する東際に、2・3号土坑の北側にある。明灰色粘質土を覆土とし、底面にやや凹凸をもつ。遺物の出土はない。

2号土坑 Hr-FP下

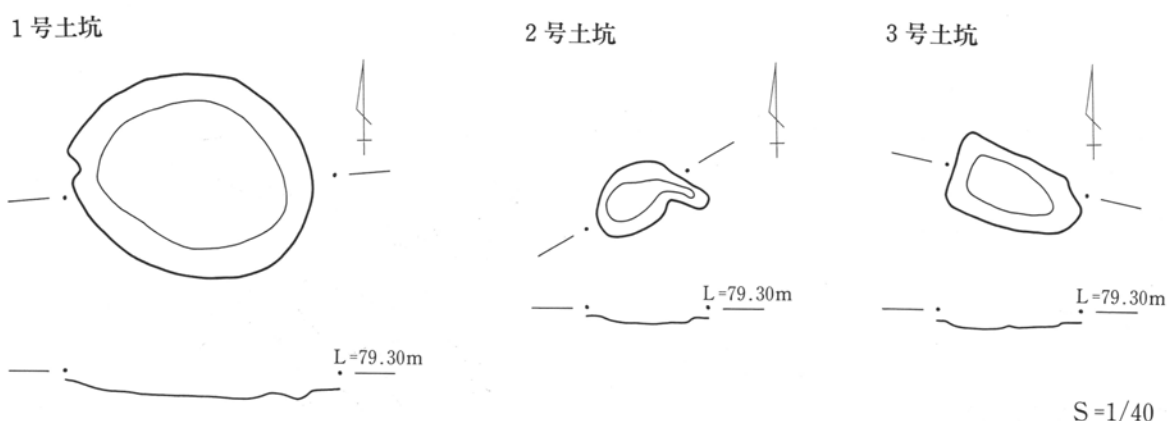
位置 調査区の南側にあり、X=35.907、Y=-67.778に位置する。

規模 不整な楕円形を呈し、長軸方向を北東にもつ。長軸50cm、

154



第93図 E区の遺構配置図(取り付け道)



第94図 E区取り付け道 土坑

短軸35cm、深さ5cmほどを測る。

概要 大溝の東際で、3号土坑の北に隣接する。明灰色土を覆土とし、遺物の出土はない。

3号土坑 Hr-FP下

位置 調査区の南側にあり、X=35.907、Y=-67.778付近に位置する。

規模 不整な楕円形を呈し、長軸方向を東南東にもつ。長軸70cm、短軸40cm、深さ5cmほどを測る。

概要 大溝の東際で、2号土坑の南に隣接する。2号土坑と同様の明灰色土を覆土とし、遺物の出土はない。

大溝

調査区の南側で検出された大溝は、覆土にHr-FP粒を大量に有しており、Hr-FP降下以降の埋没と考えられる。この大溝は、後述の第6面で扱うC区およびD区取り付け道で検出された大溝の続きと考えられ、東南方向から延びてきた大溝が、本調査区南側で大きく西へ屈曲するようである。第6面C区での調査からその規模等が知れていたため、安全面より幅狭い本調査区内での掘削は行わなかった。土層断面の状況は、第135図に示した一部のみである。

一方、第6面C区およびD区取り付け道の調査では、この大溝の両側に土手状の高まりが確認されている。本調査区検出の大溝の東側にも、同様の高まりが存在するようである。第96図に示した調査区の東壁土層断面図からは、本面の水田が検出された部分よりも、大溝側が高位になっていることが読みとれる。また、水田耕土とした12層の堆積をみても、水田部分での厚さに比べ、大溝側の高位部分ではかなり薄く散在する様子がわかる。これらの状況から、大溝が水田と共に本面の時期に存在し、用水路として機能していたものと考えられる。

なお、大溝についての詳細は、後述の第6面C区を参照して頂きたい。

溝

調査区の北側に、1・2号溝が交差する形で検出されている。1号溝は東南方向に延び、2号溝は東西方向に延びるように存在し、共に黄褐色土の11層を覆土としている。遺物の出土はない。これらの溝の北側は、後述の第8面で扱う微高地となる。また、第98図に示した調査区の東壁土層断面図からは、2号溝の南側1

mほどの位置で、水田耕土となる12層が下位の土層と同様に上方に傾きながら無くなる状況がある。

こうした状況は、1号溝ないし2号溝が水田域と微高地部の境を画する溝とも考えることができよう。

水田 (第95～98図)

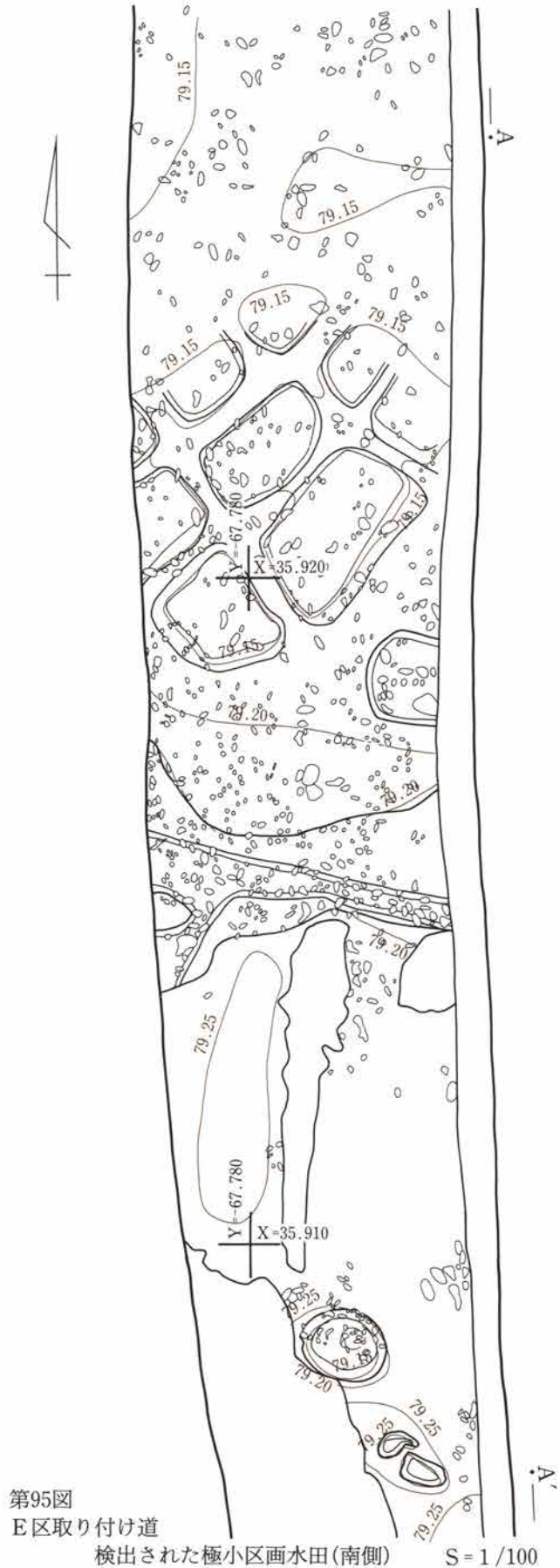
調査区の中央部から、水田が検出されている。全体に良好な状態とは言い難いが、明瞭な畦もあり、畦のあり方から極小区画水田であることが判断できる。その範囲は、畦の確認できる部分で95.84㎡を計測することができる。しかし、先述した大溝に付随する土手状の高まりの北側から、1・2号溝の南側までの範囲が水田域と考えられる。

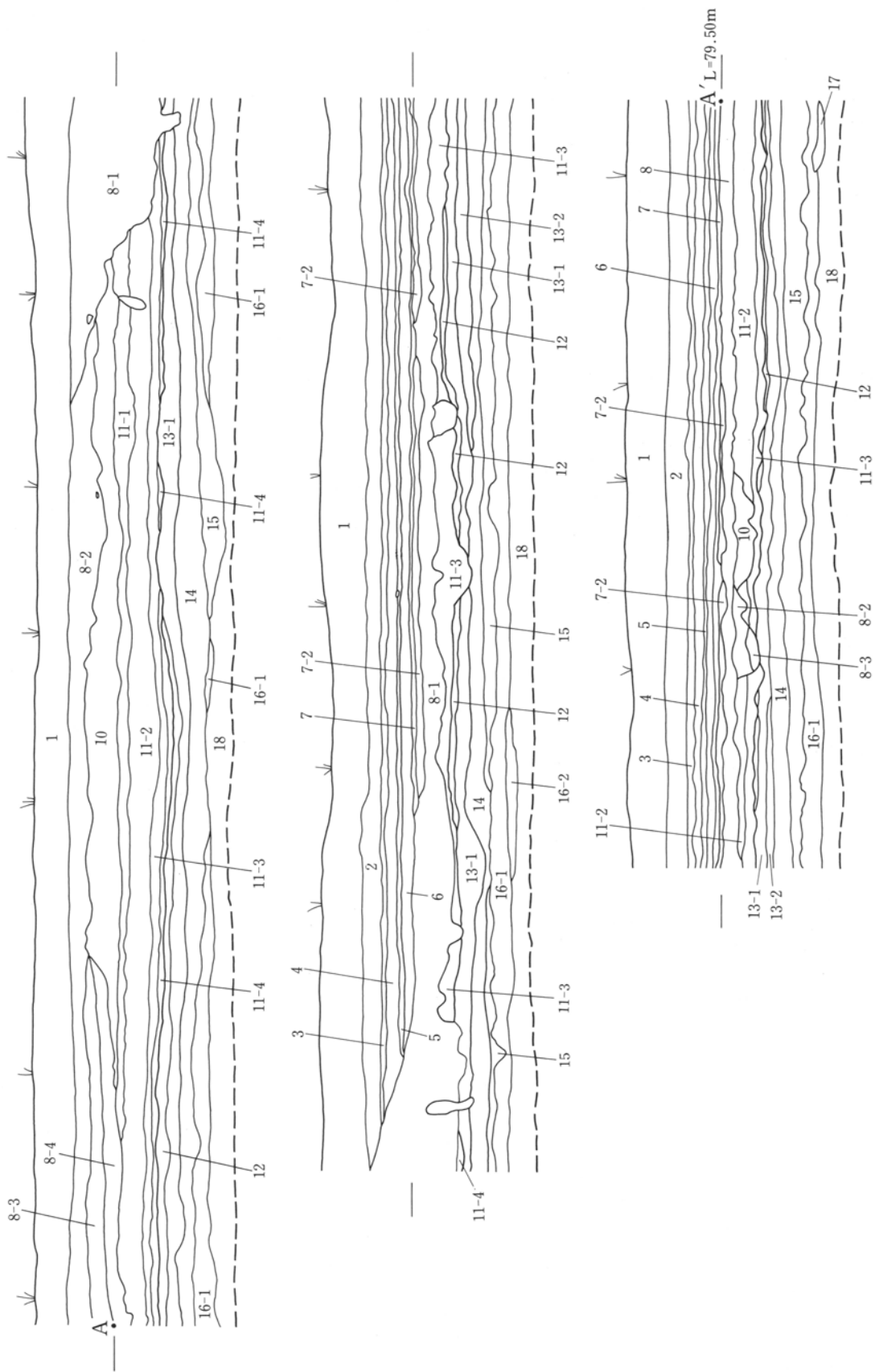
この水田域内では、水田を大きく区画する大畦は検出されていない。但し、第135図に示した西壁土層断面からは、大溝の北側の土手状の高まり部で11層が堆積する窪地が認められ、その窪地に続くように東西方向の溝状の箇所がある。この溝状の部分の東壁では窪地は認められていない。この窪地に区切られるように、大畦が延びていく可能性はある。

小さく区画された水田は、24枚以上の水田が存在したものと思われ、1枚当たり3㎡前後の面積を測る。所謂、極小区画水田(ミニ水田)である。

水田面は、第96・98図に示した東壁での12層上面であり、11層によって覆われている。西壁の土層断面では、11層最下位層の乳白色粘質土が1cmほどの厚さで、12層上面を覆っているのが明瞭であった。

水田の耕土となるのは12層であり、後述する第6面の水田面とは下位の13層を





第96図 E区取り付け道 東壁土層断面(南側)

S=1/40

第96図 土層注記

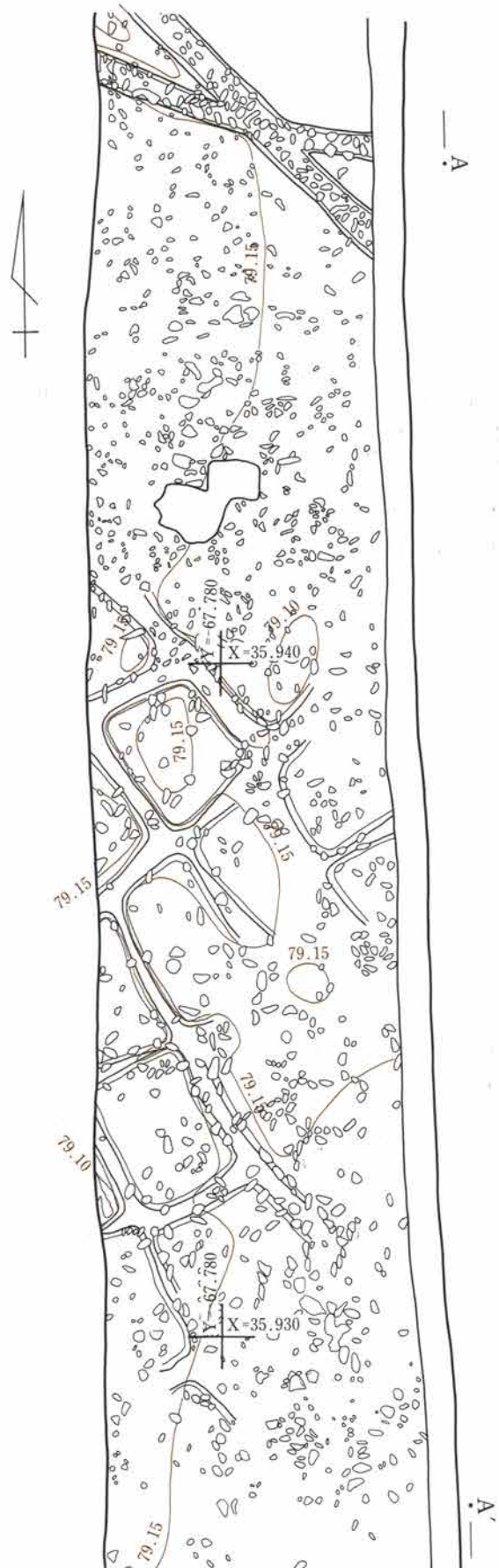
- 1層 黒褐色粘質土 現代の水田耕作土。
- 2層 黒褐色土 As-B軽石を全体に含む水田耕作土（天明三年以降）。
- 3層 赤褐色土 2層の水田耕作土に伴う酸化層と考えられる。
- 4層 暗褐色粘質土 As-B軽石を少量含む水田耕作土（天明三年以前）。
- 5層 黄褐色土 4層の水田耕作土に伴う酸化層と考えられる。As-B軽石を少量含む。
- 6層 暗褐色粘質土 As-B軽石を少量含む水田耕作土（中世から近世初頭頃か）。
- 7層 黄褐色土 6層の水田耕作土に伴う酸化層と考えられる。As-B軽石を少量含む。
- 8-1層 暗褐色土 As-B軽石を全体に含む。
- 8-2層 黒褐色土 As-B軽石を全体にやや多く含む。
- 8-3層 明褐色土 As-B軽石を全体に含む。
- 8-4層 暗褐色砂質土 As-B軽石を多量に含む。
- 10層 黄褐色粘質土 Hr-FP起因と考えられる泥流層で、白色のHr-FP粒を全体に含む。部分的に鉄分が沈着し、粘性が高い。
- 11-1層 黄褐色砂質土 Hr-FP起因と考えられる砂質土の泥流層で、粘性なくさらさらしている。
- 11-2層 黄褐色土 Hr-FP起因と考えられる泥流層で、11-1層を主に11-3層がブロック状に混入する。
- 11-3層 黄褐色粘質土 Hr-FP起因と考えられる泥流層で、下位に乳白色の11-4層が薄く入る場合あり。粘性が高い。
- 11-4層 乳白色粘質土 Hr-FP起因と考えられる泥流層で、粒子が非常に細かく粘性有り。
- 12層 暗灰色粘質土 第5面の水田耕作土で、粘性強い。
- 13-1層 明灰色土 Hr-FAで、黄褐色砂質土を全体に含む。
- 13-2層 明灰色土 Hr-FAで、黄褐色砂質土を少量含む。粘性もやや高い。
- 14層 暗灰色粘質土 第6面の水田耕作土で、粘性強い。
- 15層 明褐色砂質土 軽石状の砂を多量に含み、下位ほど多量。洪水による堆積層と考えられる。
- 16-1層 黒色粘質土 層の上面が第7面の遺構確認面となる。白色のAs-C軽石を多量に混在させ、粘性が高い。
- 16-2層 黒色粘質土 16層と同じAs-C混土層であるが、As-C軽石を極少量含む。
- 17層 明褐色砂質土 15層よりやや粒子の粗い砂質の洪水層。
- 18層 灰色粘質土 基盤のシルト層であり、部分的に鉄分の沈着が見られる。

第98図 土層注記

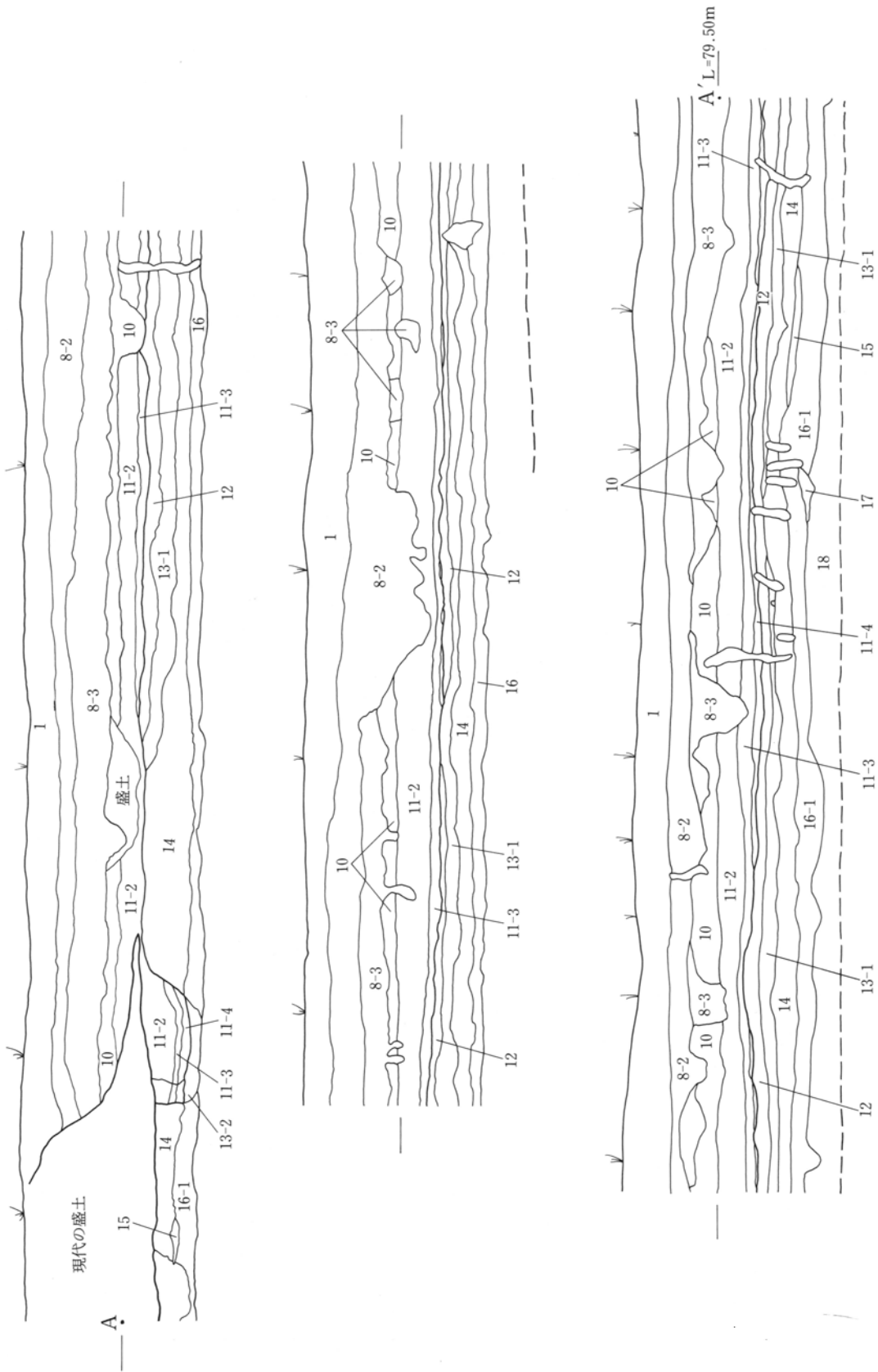
- 1層 黒褐色粘質土 現代の水田耕作土。
- 8-2層 黒褐色土 As-B軽石を全体にやや多く含む。
- 8-3層 明褐色土 As-B軽石を全体に含む。
- 10層 黄褐色粘質土 Hr-FP起因と考えられる泥流層で、白色のHr-FP粒を全体に含む。部分的に鉄分が沈着し、粘性が高い。
- 11-2層 黄褐色土 Hr-FP起因と考えられる泥流層で、11-1層を主に11-3層がブロック状に混入する。
- 11-3層 黄褐色粘質土 Hr-FP起因と考えられる泥流層で、下位に乳白色の11-4層が薄く入る場合あり。粘性が高い。
- 11-4層 乳白色粘質土 Hr-FP起因と考えられる泥流層で、粒子が非常に細かく粘性有り。
- 12層 暗灰色粘質土 第5面の水田耕作土で、粘性強い。
- 13-1層 明灰色土 Hr-FAで、黄褐色砂質土を全体に含む。
- 13-2層 明灰色土 Hr-FAで、黄褐色砂質土を少量含む。粘性もやや高い。
- 14層 暗灰色粘質土 第6面の水田耕作土で、粘性強い。
- 15層 明褐色砂質土 軽石状の砂を多量に含み、下位ほど多量。洪水による堆積層と考えられる。
- 16-1層 黒色粘質土 層の上面が第7面の遺構確認面となる。白色のAs-C軽石を多量に混在させ、粘性が高い。
- 16-2層 黒色粘質土 16層と同じAs-C混土層であるが、As-C軽石を極少量含む。
- 17層 明褐色砂質土 15層よりやや粒子の粗い砂質の洪水層。
- 18層 灰色粘質土 基盤のシルト層であり、部分的に鉄分の沈着が見られる。

挟むことで、本水田面と第6面水田面とは時期的に異なる水田である。また、東壁土層断面でも、本水田の畦と第6面水田の畦の位置が異なることを示している。

なお、11層は堆積する土質から分層することができ、11層全体が同一時期の形成とは考えがたい要素をもつ。



第97図 E区取り付け道 検出された極小区画水田(北側) S=1/100



第98図 E区取り付け道 東壁土層断面(北側)

第7節 第6面の遺構（古墳時代II、Hr-FA下面）

第6面は、基本土層のIX層となるHr-FA層下面を確認面とし、検出された遺構を扱った。この基本土層IX層は、土壌分析の結果からも榛名山を給源としたHr-FAであるとの結果がでており、その形成時期は6世紀初頭と考えられる。

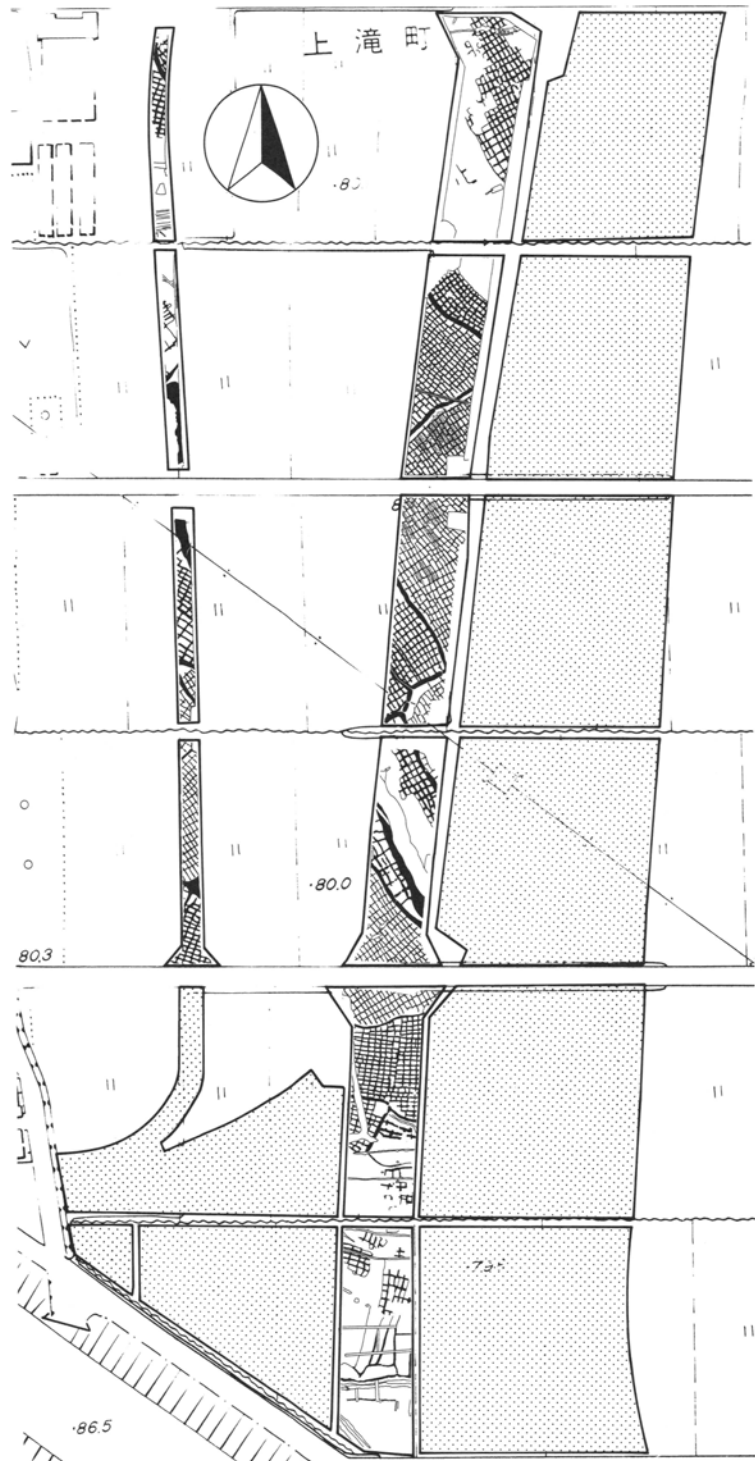
基本土層IX層のHr-FA層は、A～F区・取り付け道および北関調査分をも含めた、本遺跡全体を覆う土層である。

本第6面から検出された遺構には、土坑、大溝、溝、水田がある。また、遺構とは異なるが、A区およびE区からF区にかけては微高地が存在する。この微高地上に、土坑が散在するように検出されている。北関調査分では、微高地上より6世紀代の住居跡も検出されている。大溝・溝および水田は、低地部の全面に広がっており、隣接の北関調査分でも同様である。

水田は、大畦で大きく区画した中を、小畦で細かく区画する形で、所謂極小区画水田（ミニ水田）と称される水田である。また、水田面には、人の足跡や馬の足跡が明瞭に残されている部分や、新しい小畦と古い小畦が顕著に認められる部分等がある。また、水田の小畦の状態が大区画単位で異なることや、水口を含めた水の掛け方等、当時の水田耕作のあり方を考える上で良好な資料と言えよう。

なお、大溝については、先述の第5面でも触れたが、本面で詳細な説明をする。

以下、各区ごとに検出された遺構について説明する。



第99図 第6面の全体図

S=1/2500

A区

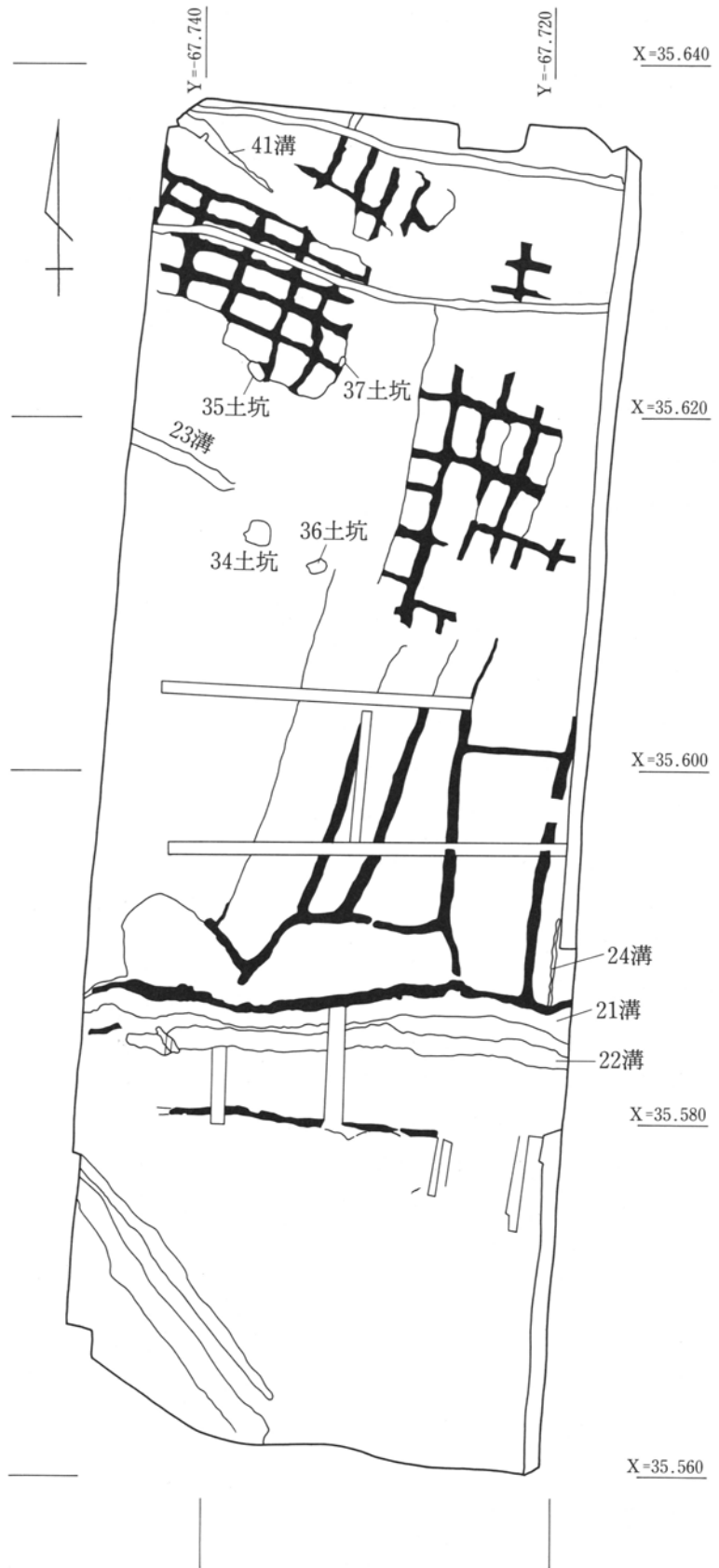
A区で検出された遺構には、土坑4基、溝、畦畔を伴う水田がある。

調査は、先述した第4面の水田遺構と共に検出した経緯がある。

調査区内の地形の状況は、南端が僅かに高い微高地となり、中央部西側でも周辺よりもやや高い微高地状となる。この微高地縁辺に34号土坑が存在し、微高地から下がった低地部付近に35～37号土坑が点在する。

水田は、微高地を避けた低地部に検出されている。但し、本面の水田遺構として明確なのは、中央から北側に検出された水田であり、中央から南側微高地までの間の水田は先述の第4面水田となっている。この両者の水田を、敢えて第100図に示してみた。調査区の北側に広がる本第6面のHr-FA下水田では、小畦により細かく区画された極小区画水田であるのに対し、中央部の第4面水田では区画のあり方が拡大化している様子が一目瞭然である。確かに、畦の方向性からすれば同様な傾向にあるが、地形に大きく規制されているものと考えられる。

検出された水田の依存状況は、良好とは言えない。極小区画水田の長軸方向からすれば、大畦による大区画があった可能性がある。(第100図)



第100図 A区の遺構配置図(本線)

土坑 (第101図)

34号土坑

位置 A区の中央よりやや北西寄りにあり、X=35.613、Y=-67.732に位置する。

規模 円形を呈し、径1.65m、深さ40cmを測る。

概要 中央西側の微高地上にあたり、同微高地縁辺には35・36号土坑が点在する。断面形状はやや搦鉢状を呈し、褐灰色粘質土を覆土とする。なお、上部層には灰白色の微砂粒を含む。底面付近からは、土師器の坏や須恵器の坏・碗が数多く出土している。

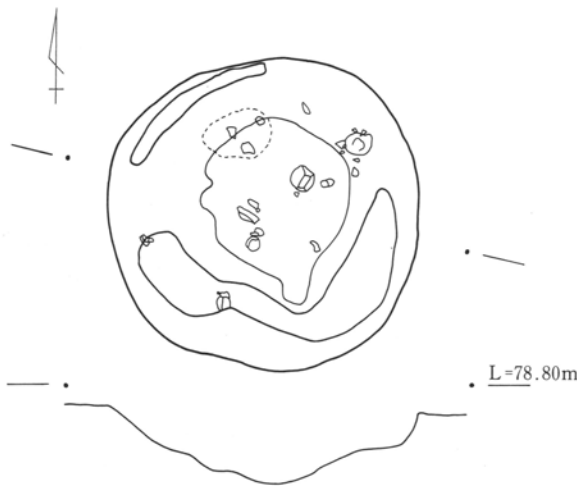
35号土坑

位置 A区の北側でやや西寄りにあり、X=35.622、Y=-67.732に位置する。

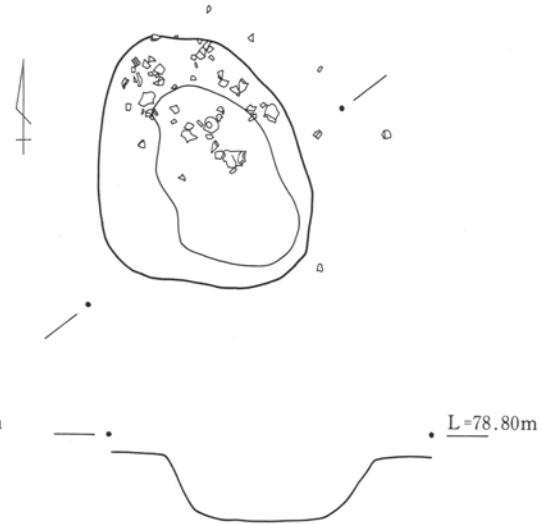
規模 不整な楕円形を呈し、長軸方向を北北西にもち、長軸1.4m、短軸1.1m、深さ32cmを測る。

概要 34号土坑と同じ微高地の縁辺にあたり、暗灰褐色粘質土と黒褐色粘質土を覆土とする。遺物には、古墳時代初頭の台付甕や壺の破片を多く出土させているが、土師器の坏も出土している。

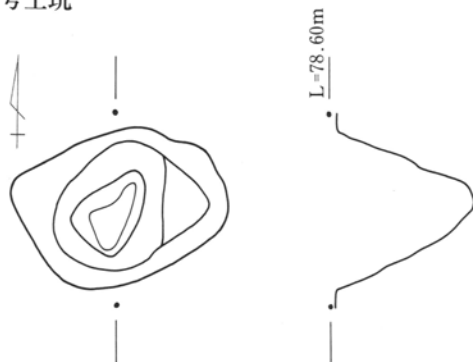
34号土坑



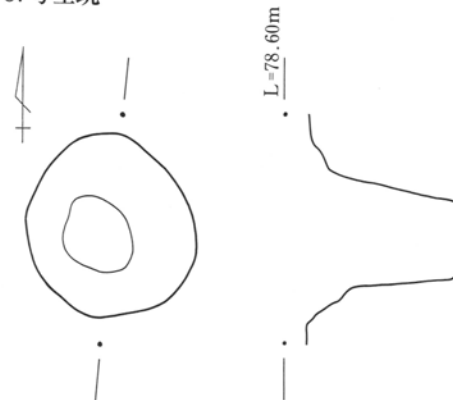
35号土坑



36号土坑



37号土坑



S=1/40

36号土坑

位置 A区の中央にあり、X=35.611、Y=-67.729付近に位置する。

規模 不整な円形を呈し、径1.0m前後、深さ70cmを測る。

概要 34号土坑と同じ微高地の縁辺にあたり、34号土坑の東側にある。灰褐色土ブロックを含む黒色土を覆土とする。遺物の出土はない。

37号土坑

位置 A区の北側のほぼ中央にあり、X=35.622、Y=-67.727に位置する。

規模 円形を呈し、径1.0m、深さ80cmを測る。

概要 断面形は漏斗状となり、底面は平坦な円形。黒褐色土を覆土とし、全体にAs-C軽石を含む。遺物の出土はない。

溝

調査区の北側の西端に41号溝、中央西端の微高地上に23号溝がある。共に南東方向に延びる溝であるが、その性格は不明。41号溝の場合、水田の大区画を画する溝とも考えられるが、判然としない。また、先の第4面で扱った21号溝は、22号溝と共に本時期まで遡る可能性もあろう。

水田

検出された水田は、調査区の北側で依存状態の余り良くない状態で広がりをもつ。全体に小畦の状態も悪く、水田面との高低差は余りない。北側の西半では、2.5m×1.3m前後に小さく区画された極小区画水田が、長軸方向を南東方向に持つように連続し、31枚以上の広がりをもつものと考えられる。また、東半では、同様に小さく区画された極小区画水田が、長軸方向を南北方向に持つように連続し、26枚以上の広がりをもつようである。この両者の長軸方向の違いが、大区画に区画された際の違いと思われるが、その間には大畦は検出されていない。但し、区画するような、僅かな高まりがあるようにも思われる。一方、この状況は、続くB区の南端に位置する1大区画と同様であり、本区水田と同じ一つの大区画としての可能性もある。

水田面には、全体的に凹凸の状況が認められるものの、明確な足跡としての認定はできなかった。

B区

B区で検出された遺構には、土坑2基、溝、畦畔を伴う水田がある。

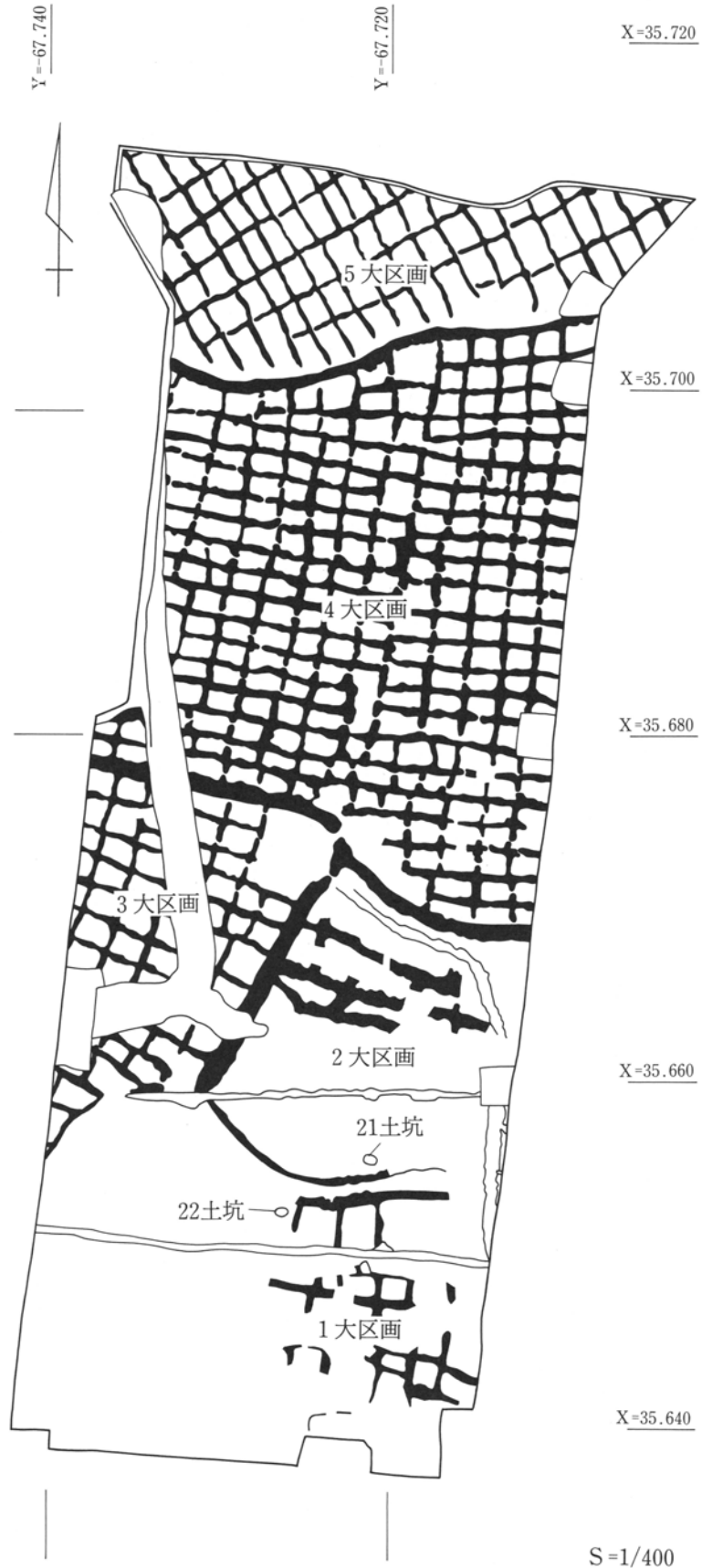
調査区内の地形の状況は、先のA区でみられたような微高地はなく、全体が低地帯となる。全体的には、西側から東側への微傾斜となっている。

検出された土坑は、調査区の南側にあり、水田の1・2大区画の大畦際に位置する。土坑付近の水田畦畔は明瞭ではなく、土坑と水田の関係は不明である。

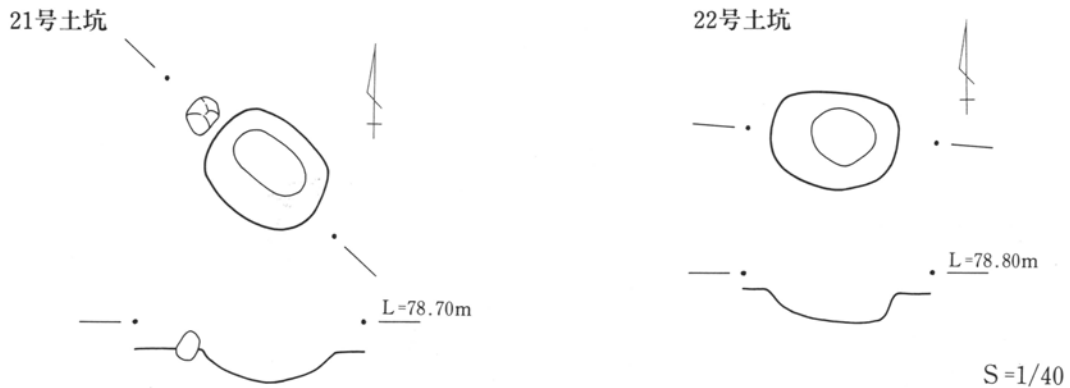
水田は、調査区全体に広がる。総じて極小区画水田であるが、大畦によって大区画が区画され、大区画単位の極小区画水田が形成されている。便宜上、この大区画を1～5の区画として説明を加える。また、調査区南側の1大区画では、水田畦畔の依存状態が悪かったものの、北側の5大区画では明瞭な畦畔である。但し、2大区画では、押し潰れたような小畦が僅かに残るのみで、大区画内には水の流れた溝状の痕跡が認められている。この2大区画と3～5大区画とを比較すると、その有り様は余りにも異なる状況となっており、水田としての機能を果たしていなかった可能性も考えられる。

さらに、水田面には多くの凹凸がみられ、人・馬の足跡として認定できる痕跡も検出されている。

(第102図)



第102図 B区遺構配置図(本線)



第103図 B区 土坑

土坑 (第103図)

21号土坑

位置 B区の南側でやや東寄りにあり、 $X=35.656$ 、 $Y=-67.721$ 付近に位置する。

規模 楕円形を呈し、長軸方向を北西にもち、長軸70cm、短軸55cm、深さ15cmを測る。

概要 褐灰色粘質土を覆土とし、遺物の出土はない。

22号土坑

位置 B区の南側にあり、 $X=35.653$ 、 $Y=-67.726$ 付近に位置する。

規模 楕円形を呈し、長軸方向を東西にもち、長軸65cm、短軸50cm、深さ15cmを測る。

概要 褐灰色粘質土を覆土とし、遺物の出土はない。

溝

調査区の南側で、水田の1大区画と2・3大区画の境を画するように、大きく蛇行しながら東西方向に延びる51号溝が検出されている。溝幅は80cm前後で、深さ10cmほどと比較的に浅い。溝の南際には、1大区画水田の北辺を画する畦がある。溝の北際も同様で、2・3大区画水田の南辺を画する畦となっている。この状況は、北関調査分の東西両調査区でも検出され、確認されている。

一方、この東西方向に蛇行しながら延びる51号溝の下には、後述する第7面で扱う52号溝が存在する。52号溝は、51号溝と同じように東西方向に蛇行しながら延びる溝であり、溝幅もかなり広く深く、第7面水田に関わる用水路の機能をもつ溝と考えられている。本51号溝と52号溝は、全く同じ位置にあることから、51号溝とした部分が土圧等による陥没化した姿とも考えることもできる。しかし、52号溝の溝幅からすれば、両際の畦の存在、或いは51号溝の溝幅分だけが陥没化したとは考え難い。

本稿では、第7面の52号溝の位置を踏襲した、第6面のHr-FA下水田に伴う溝として、51号溝を考えたい。また、それは、主幹となる用水路としての機能から、別な意味での機能（土地区画の踏襲等）に変化した溝の変遷であるとも言えよう。

水田 (第104～107図)

検出された水田は、調査区全体に広がっている。所謂極小区画水田であるが、大畦によって大区画が区画され、大区画単位に極小区画水田が形成されている。便宜上、この大区画を、調査区の南側から1～5の5つの区画とした。以下、各大区画ごとに説明を加える。

1 大区画

調査区の南端に位置する。水田の区画をなす畦畔の残存状況は、3～5大区画に比べて悪い。その中でも、東側では辛うじて畦畔を検出できたものの、西側に至っては検出できなかった。畦畔を検出できた東側で見ると、大区画となる北辺を画する大畦が、東西方向に蛇行して延びる51号溝の南際に続く。この51号溝が、1大区画と2・3大区画との境を画する溝であることは先述したとおりであり、畦畔が検出できなかった西側でも51号溝の南側に大畦が存在していたことが窺い知れる。調査区内での大区画の面積は450.7m²を計測でき、確認できた極小区画水田は22枚を数える。なお、先述したA区北側のHr-FA下水田と、同じ大区画となる要素を持つが、不明な点もある。

2 大区画

調査区の南側で、東寄りに位置する。大区画の南辺を区画する大畦は、東西方向に蛇行して延びる51号溝の北際に続き、溝を挟んだ南側の1大区画と接する。西辺は3大区画と接するが、直線的な太い大畦によって区画が画される。北辺では4大区画と接するが、曲線的（弧状）の大畦によって区画が画されている。大区画内を細かく区画する小畦の状況は極めて状態が悪く、僅かに残る小畦も、その高低差が無く潰れたような状態にある。こうした小畦の状況は、後述の3～5大区画での小畦の状況とを比較すれば、そのあり方が全く異なる状態にある。また、西辺を画する大畦の北端には、3大区画からの取水口（3大区画からすれば排水口）となる水口が検出されている。この水口を起点とするような溝状の窪みが、大区画内を東方向へと帯状に続き、さらに方向を変えて南側へと延びていく。この溝状の窪んだ帯は、3大区画から排水（取水）された水が、本大区画内を流れた痕跡と考えられる。然るに、本大区画内での小畦の状況と、他大区画からの水が一定箇所を流水状態にあったことを加味すれば、3～5大区画とは異なる休耕地的な存在であったことが予測できる。3～5大区画での小畦の完成と、区画内への水が張られている状況の中、2大区画では耕作されずに小畦が放置状態で、区画内を用水が流れている状況にあったと想像できよう。

なお、調査区内での2大区画の面積は、227.5m²を計測する。

3 大区画

調査区の南側で、西寄りに位置する。大区画の南辺を区画する大畦は、先の2大区画と同様に東西方向に大きく蛇行して延びる51号溝の北際に続き、溝を挟んだ南側の1大区画と接する。東辺は2大区画と接するが、直線的な太い大畦によって区画が画される。北辺では4大区画と接し、直線的な大畦によって区画が画されている。大区画内を細かく区画する小畦の残存状況は比較的良く、東西方向に長軸をもつ極小区画水田が整然と連なる。調査区内では、54枚の極小区画水田を数える。極小区画水田の一枚当たりの規模は、2m×1.5m前後を測り、本大区画内の平均面積は2.3m²ほどとなっている。連続する小畦の状況は、極小区画の長軸方向となる東西方向の畦（縦畦）が直線的に延びているのに対し、短軸方向の畦（横畦）はやや食い違い気味となる。また、短軸方向の横畦には、水口となる畦の切れ間が確認されている。このことから、調査区が東側への微傾斜地であることをも含め考えると、大区画内の用水が小区画の長軸方向（縦畦方向）となる東方向へと導かれた様子が理解できる。また、大区画内の北東隅には、極小区画水田の小畦が作られずにやや広い区画となる部分がある。さらに、この部分での大畦には、2・4大区画への水口が存在する。北辺となる大畦の東端と、東辺となる大畦の北端である。用水を排水するための水口と考えられ、水口部の区画を広く作るという区画のあり方が良くわかる例である。

なお、調査区内での3大区画の面積は、216.5㎡を計測することができ、西隣の北関調査分でも本大区画の続きが検出されている。

4 大区画

調査区の中央から北側にかけて位置する。大区画の南辺を区画する大畦は2・3大区画と接し、3大区画と接する大畦は直線的に伸び、2大区画と接する部分では大きく弧状となる大畦で区画が画される。北辺は5大区画と接するが、大畦で区画が画される。この大畦は、調査区の西側で曲線的に方向を変え、東北東方向へ伸びていく。大区画内を細かく区画する小畦の残存状況は比較的良く、概ね東西方向に長軸をもつ極小区画水田が整然と連なる。調査区内では、232枚の極小区画水田を数える。極小区画水田の一枚当たりの規模は、1.7m×1.1m前後を測り、本大区画内の平均面積は1.76㎡ほどとなっている。連続する小畦の状況は、基本的に小区画の長軸方向となる東西方向の畦（縦畦）が直線的に伸びているのに対し、短軸方向の畦（横畦）はやや食い違い気味となる。詳細に観察すると、大畦が大きく歪む北・南側部分での縦畦方向と中央部の縦畦方向では、その方向に大きな変化がみられる。また、中央部にしても、横畦が直線的に並ぶ列や、その直線的な横畦を境に縦畦が微妙にずれている状況がみられる。こうした状況からすると、大区画の中にあっても、ある程度の区画を保つための小畦が存在し、その区画内を縦畦優先的な極小区画を作っているようである。決して、縦畦のみが優先される状況とは、異なる様子がみられる。さらに、3大区画と接する大畦には水口（取水）があり、この部分に関わる小区画は乱れ気味となっている。もう一点、大区画の東寄りからは、水田面に馬と考えられる足跡が検出されている。

なお、調査区内での4大区画の面積は、694.4㎡を計測することができ、東隣の北関調査分でも本大区画の続きが検出されている。北関調査分からは大区画の東辺が検出され、本調査分と合わせた面積は1192㎡となり、本大区画の面積はそれ以上の面積となる。

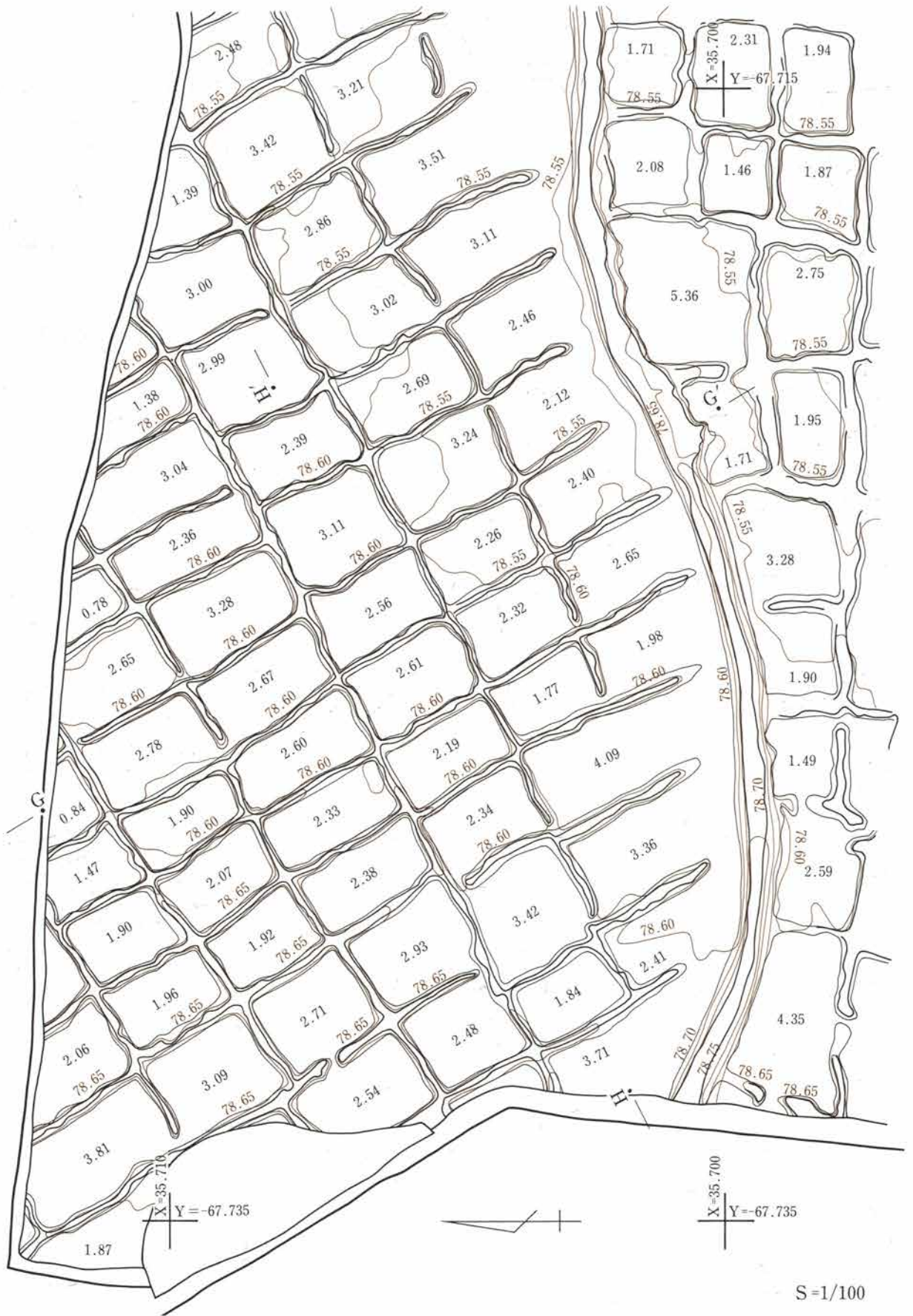
5 大区画

調査区の北端に位置する。大区画の南辺を区画する大畦は4大区画と接し、調査区の西側で曲線的に方向を変え、東北東方向へ伸びる大畦によって区画が画されている。大区画内を細かく区画する小畦の残存状況はかなり良好で、小畦高は水田面より5～8cmほどあり、東南方向に長軸をもつ極小区画水田が整然と連なる。調査区内では、82枚の極小区画水田を数える。極小区画水田の一枚当たりの規模は、2.1m×1.3m前後を測り、本大区画内の平均面積は2.7㎡ほどとなっている。連続する小畦の状況は、基本的に小区画の長軸方向となる東西方向の畦（縦畦）が直線的に伸びているのに対し、短軸方向の畦（横畦）はやや乱れ気味である。先の4大区画と同様に、横畦が直線的に並ぶ列や、その直線的な横畦を境に縦畦が微妙にずれている状況がみられる。ある程度の区画を保つための縦畦・横畦となる小畦が存在し、さらにその中を区画している状況と言えよう。一方、極小区画水田の区画畦の横畦（短軸方向）には、水口が多くみられる。長軸方向となる南東方向へ用水が導かれたことを示しており、南東方向末端となる南辺大畦際に水口が連なると共に、区画が乱れがちである。さらに、大区画の東寄りの水田面からは、人と認定できる足跡の痕跡が数多く検出されている。

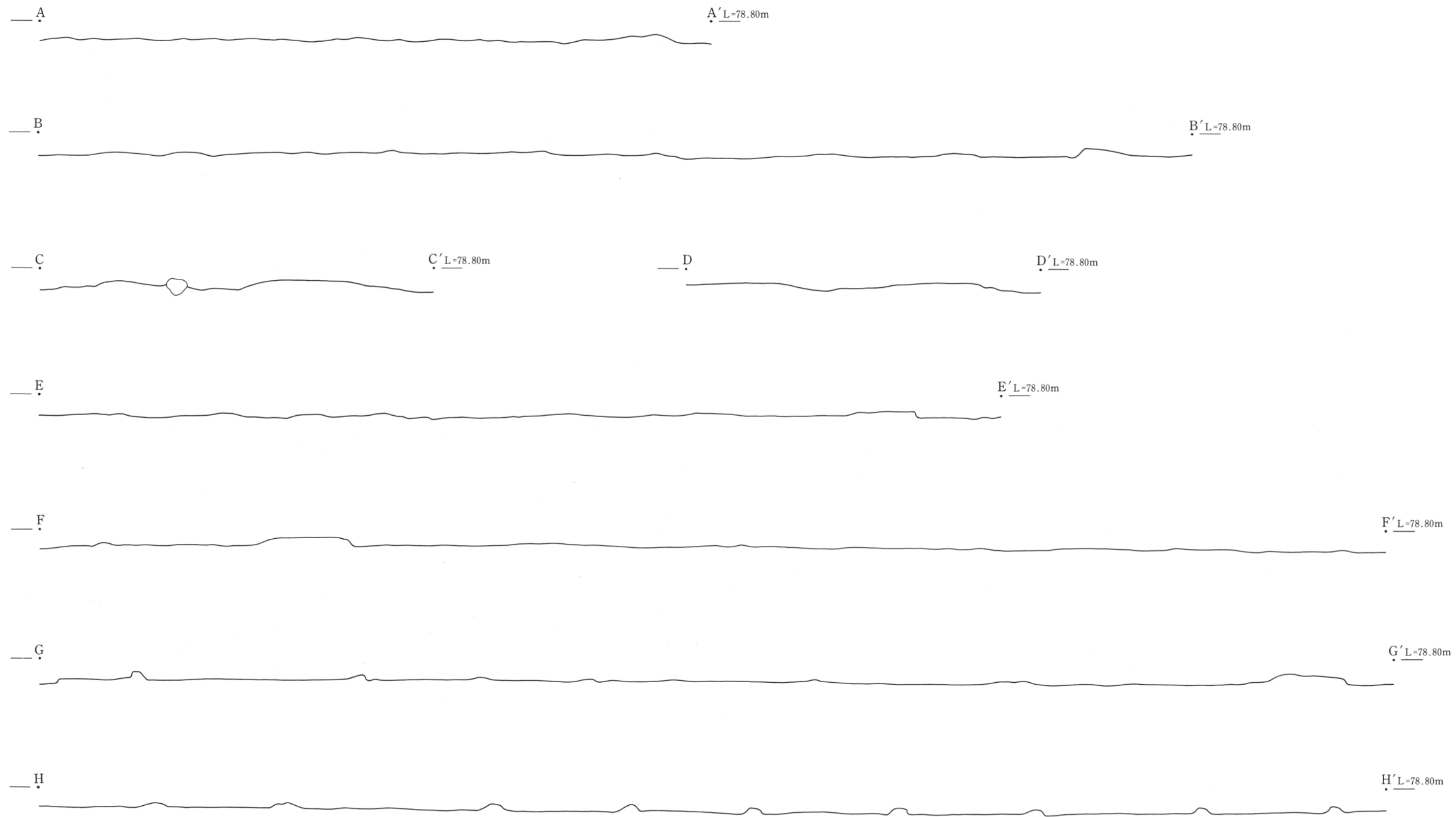
なお、本大区画は後述のC区1大区画と同じ大区画となる可能性が極めて高く、調査区内での4大区画の面積は280㎡を計測する。



第104図 B区 大畦と大畦の水口



第105図 B区 5大区画と極小区画水田



S = 1/40

第106図 B区 水田の断面

第107図 B区 4・5大区画の水田面に残された足跡



S = 1/100

—A

A' L=78.80m

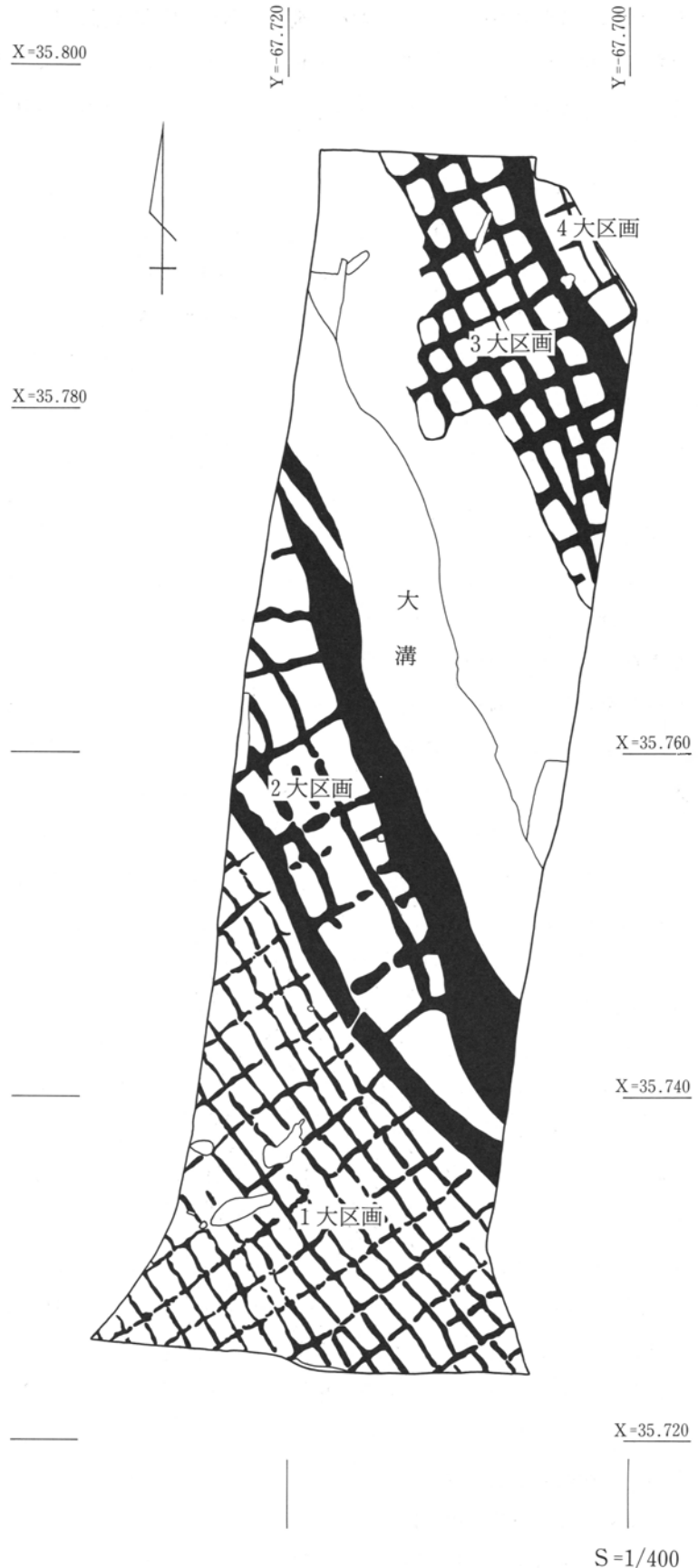
S = 1/40

C区

C区で検出された遺構は、大溝と畦畔を伴う水田である。調査区内の地形の状況は、明瞭な微高地はなく、全体が西側から南東方向への微傾斜する低地帯となっている。

検出された大溝は、調査区のほぼ中央を西側から南南東方向へ延びており、東隣の北関調査分ではこの続きが蛇行するように東側へと延びていく。西側では、後述するD区取り付け道、およびE区取り付け道でも、その一部が検出されている。この大溝の覆土には、Hr-FP粒を大量に有しており、Hr-FP降下以降の埋没と考えられる。また、大溝の両側には、土手状の高まりが確認されている。なお、Hr-FP降下以降の埋没遺構とすれば、本来ならば先項の第5面で扱うべき遺構であるが、大溝の開削時期等の問題があることから本項で扱うこととした。

水田は、調査区全体に広がる。総じて極小区画水田であるが、大畦によって大区画が区画され、大区画単位の極小区画水田が形成されている。便宜上、この大区画を1～4の区画として説明を加える。1・2大区画は大溝の南側に、3・4大区画は大溝の北側に位置することとなる。この内、1大区画は先述のB区5大区画と同じ大区画である可能性が極めて高く、4大区画は後述のD区2大区画と同じ大区画である可能性が高い。ま



第108図 C区の遺構配置図(本線)

た、大溝の両側に位置する2・3大区画は、小畦の残存状態が1・4大区画と比べて、かなり悪い。押し潰れたような小畦である。特に、3大区画の状況が著しい。さらに、水田面には多くの凹凸がみられ、1大区画では人の足跡として認定できる痕跡も検出されている。(第108図)

大溝 (第109～111図)

検出された大溝は、調査区のほぼ中央を、西側から南南東方向へ僅かに蛇行するように延びる。溝上幅5m、底幅2m、深さ1.7mを測る規模をもち、底面は平坦となっている。流路方向は、調査区の土地傾斜が西側から南東方向への微傾斜であることとほぼ一致する。また、大溝の両側には、土手状の高まりが確認されている。大溝の南西側では、2大区画との境を画する部分で、土手状の高まりが顕著に検出できた。対する北東側については、調査時に削平してしまったために平面的には不明確であるが、東壁および西壁の土層断面の観察では存在したことが確認できる。

この大溝の覆土には、Hr-FP粒を大量に有しており、Hr-FP降下以降の埋没と考えられる。しかし、その開削時期については不明である。

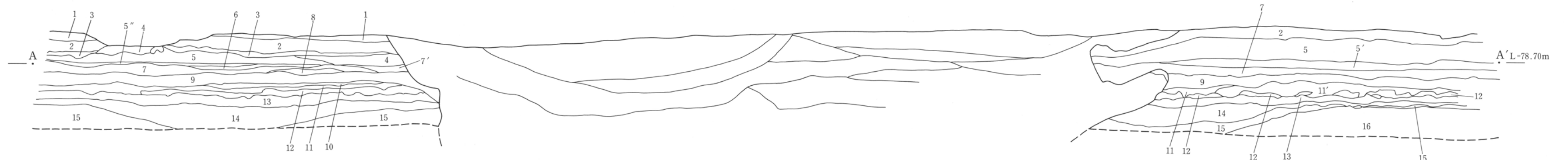
次に、東壁の土層断面を主に、大溝際での土層堆積について触れてみたい。

第110図に示した東壁の土層断面図は、大溝部分の基本土層Ⅶ層の途中から、以下の層序を図化している。つまり、1層は基本土層Ⅶ層の途中ということになる。この1～3層は、Hr-FPないしHr-FAを起因とした泥流層であり、調査区(遺跡)全体を覆っている。ここで注目しておきたいのは、大溝の掘り込みが1層にまで達しているということであり、大溝の埋没時期がHr-FP泥流の堆積以降であることが理解できる。大溝内の堆積土は、Hr-FP粒を主に堆積しているが、図示した大溝上部では堆積するHr-FP粒を分層することができ、上位ほど粒子が粗く、中には3～5cm大の丸い軽石を含む。溝の下位では粒子が細かく、砂状となったHr-FP粒が厚く堆積している。また、大溝の南側の立ち上がり(図の右側)が大きく食い込んでいく状況がみられるが、大溝の埋没時における流水等による結果と思われ、人為的な造作とは考え難い。東壁の4～6層であるが、この堆積土が大溝の両際に検出された土手状の高まりを構成している。灰色土系の粘質・砂質気味な土であり、層の上部にはHr-FAの橙黄色粘質土の小ブロックを混在させている。第110図に示した西壁では、2層に対応する。東壁の状況からは、大溝の南側土手部の方が、北側土手部よりも厚く造られている様子がわかる。因みに、最も厚く堆積する部分は、南側土手で35cm前後、北側土手で20cm前後を測る。また、土手部の土は、他の大区画を画する大畦の土と近似している。土手部の下位となる7・8層は、暗灰色粘質土となる。図示できなかったが、この層は本面の水田耕作土層に続く土層であり、Hr-FA水田の耕作土である。つまり、Hr-FA下水田面の上に、大溝際の土手が造作された状況を示している。このことから、Hr-FA下水田の耕作時期の途中の段階で土手が造作されたものと考えられ、大溝の開削時期もその頃ではないかと推測できる。勿論、土手を構成する層の上部にHr-FA小ブロックを混在する点では、水田と同様に埋没前の時期の改修的?な造作が行われたと思われる。さらには、このHr-FA下水田耕作土層の下位となる9～12層を間層とした13層上面は、後述の第7面の水田面となるが、図示した東壁土層断面でも、13層が両側から中央へ向かって徐々に下り込んでいる状況が窺える。この状況は、第7面の水田耕作時に、何らかの流路的な溝が存在していたものと考えられる。9～12層の間層にみられる洪水堆積と考えられる砂層が、低くなった部分だけに検出されていることも、流路的な溝の存在を裏付けていると思われる。そして、その後のHr-FA下水田の段階で、流路的な溝から大用水路としての大溝へ変遷した経緯を推測できる。

次に、大溝の流路について触れてみたい。(第111図参照)

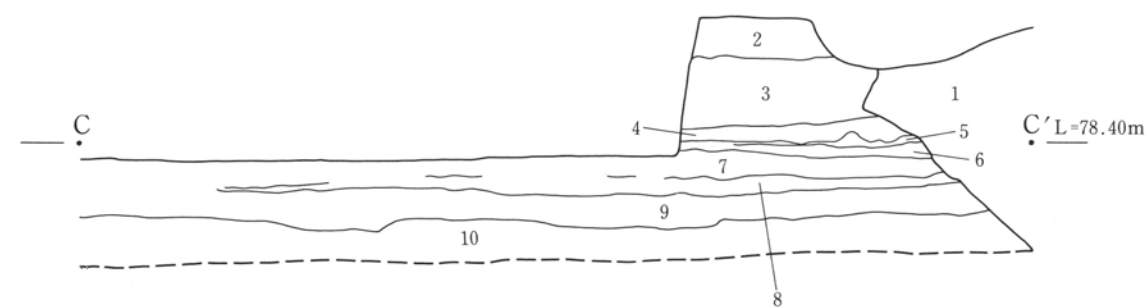


第109図 C区 大溝と水田



- 1層 明黄褐色砂質土 Hr-FP起因と考えられる砂質土の泥流層で、遺跡全体を20~30cm程度覆っている。
- 2層 灰黄色粘質土 Hr-FA起因と考えられる粘質土で、遺跡全体を20cm程度覆っている。
- 3層 桃黄色粘質土 Hr-FA起因と考えられる粘質土で、遺跡全体を5~8cm程度覆っている。
- 4層 暗灰色粘質土 白色の軽石を僅かに含み、7層と同質な土。大溝側の土手部に盛り土となる。
- 5層 灰色粘質土 灰色粘質土を主体とするが砂質土を含み、Hr-FAの小ブロックを僅かに混在させる。
- 5'層 灰色粘質土 5層よりもやや明るく砂質が強い。
- 5''層 灰黄色粘質土 5層よりもHr-FA粘質土(3層)をやや多く含む。
- 6層 灰黄色粘質土 5''層に近いが灰白色系で粘質が強い。
- 7層 暗灰色粘質土 第6面の水田耕土と考えられる。白色軽石を僅かに含み、かなり粘質。
- 7'層 暗灰色粘質土 7層と同様であるが砂質となる。

- 8層 暗灰色粘質土 7'層よりも砂質が強い。
- 9層 灰色粘質土 砂質土を多く含み、灰色系のかなり強い粘質土。
- 10層 灰色粘質土 9層よりも砂質土を多く含み、灰色系のかなり強い粘質土。
- 11層 灰色粘質土 水性堆積した砂質土と考えられ、中間に白色粘質土を薄く堆積させる。
- 11'層 灰色砂質土 11層に近いが、砂質が強い。
- 12層 暗灰色粘質土 11層と同様であるがやや暗く、砂質土を多量に含む。
- 13層 灰黒色粘質土 層の上面が第7面の遺構確認面となる。白色のAs-C軽石を多量に混在させる。
- 14層 黒色粘質土 層の上面が第8面の遺構確認面となる。混入物のないかなり粘性の強い粘質土。
- 15層 暗灰色粘質土 かなり暗い混入物のない粘質土。
- 16層 白色粘質土 基盤となる白色シルト質粘質土である。



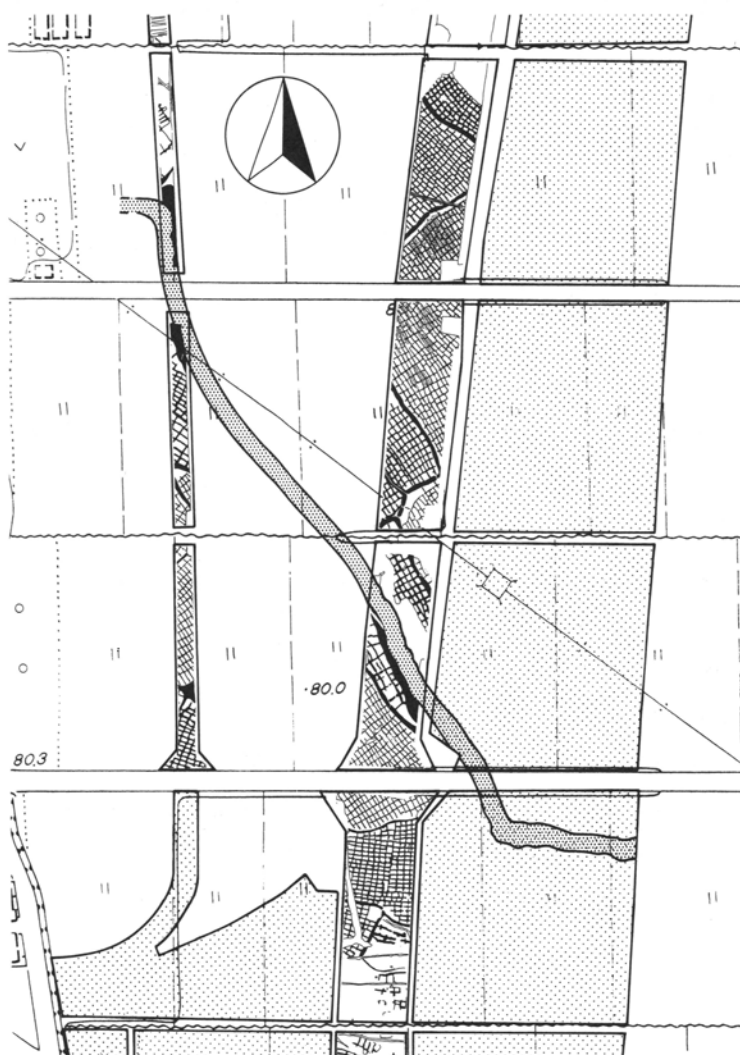
- 1層 大溝中砂礫層 Hr-FPの大型軽石や砕けた砂状の軽石による層が幾重にも堆積している。酸化の著しい層もあり、全体が一時期に埋没したとは考え難い状況がある。
- 2層 明灰色土 Hr-FP軽石やブロック状のHr-FA泥流土の混入が見られる。大溝際の土手状の盛り土と考えられる。層全体が斑状に酸化している。
- 3層 灰色粘質土 Hr-FA下耕作土と見られるがFA泥流などが縞状に混入しており、洪水による影響が見うけられる。大溝から離れた位置の水田耕作土と比べかなり土質は悪い。
- 4層 灰褐色砂質土 砂質土を多く含み、灰色系のかなり強い粘質土。洪水による堆積層と見られる。
- 5層 黒色粘質土 粘質な黒色土で、4層の砂質土を少量含み、やや酸化気味。
- 6層 黒褐色粘質土 層の上面が第7面の遺構確認面となる。粘質なAs-C混土層である。
- 7層 白灰色粘質土 層の上面が第8面の遺構確認面となる。白色軽石を含む粘質土で、基盤となる白色シルト質粘質土である。以下は基盤層を構成する。
- 8層 明灰色粘質土 白色軽石を7層より多く含み、黄色土の混入も粒状にみられる。
- 9層 灰色粘質土 白色軽石の大きさが7・8層より多少大きくなり、混入量は非常に多くなる。
- 10層 白色粘質土 粘性の強い黒褐色土が斑状に多く混入する。

第110図 C区 大溝の東壁土層断面と断面

本調査区内のほぼ中央を、西側から南南東方向へ僅かに蛇行するように延びる大溝は、東隣の北関調査分でも検出されている。北関調査では、南南東方向へ延びていた大溝が、北関B区に至って大きく屈曲し、東へと向きを変える。この北関B区での大溝の両際にも、土手状の高まりが検出され、土手状には水路と考えられる溝も確認されている。一方、西側は、後述するD区取り付け道、およびE区取り付け道でも、その一部が検出されている。D区取り付け道で検出された大溝は、北方向に向かって延びていく大溝の西側縁に当たり、溝の西際にはC区でも検出された土手状の高まりが確認されている。さらに北側のE区取り付け道では、D区取り付け道から続く大溝の東側縁が検出されている。北側のE区取り付け道の南端から北方向に延びていく大溝は、途中で大きく西側へ屈曲する。ここでも、大溝際には土手状の高まりが確認されており、大溝の屈曲に合わせて溝際を取り巻く。また、このE区取り付け道の大溝際側に位置する水田地では、第5面のHr-FP泥流下水田と、本第6面のHr-FA下水田が、間層を挟んだ上下層から検出されている。

このように、各調査区で検出されている大溝であるが、旧地表が全体的に南東方向への微傾斜という地形からすれば、その流路方向は概ね一致する。ここで問題となるのは、この大溝の取水先が何処であるかということである。遺跡地の南西側に井野川が所在するものの、地形的な面からすると、大溝の流路方向とは全く異なる。遺跡地のすぐ北側に所在する滝川は、江戸時代初期に開削された用水路である。となると、さらに北側を流れる現利根川ということになる。現利根川も中世以前には、別な流路であったとされているが、変流以前の古代にも、その基となるような河川の存在も指摘されている。むしろ、現利根川以前の古い河川の存在は、遺跡地に厚く堆積するHr-FP泥流層の流路方向を考える上でも合点が行く。大溝も同様に、現利根川以前の古い河川を利用した用水路であったものと考えられよう。

この大溝の底面からは、板状・杵・杭等の木製品および多くの雑木が出土し、併せて表面が摩滅した古墳時代の土器が多量に出土している。



S = 1 / 2500

第111図 C区 大溝の推定位置

水田 (第112～114図)

検出された水田は、調査区全体に広がっている。所謂極小区画水田であるが、大畦によって大区画が区画され、大区画単位に極小区画水田が形成されている。便宜上、この大区画を、調査区の南側から1～4大区画とした。以下、各大区画ごとに説明を加える。

1 大区画

調査区の南端に位置する。大区画の北側を区画する大畦は2大区画と接し、調査区の西側から緩やかに蛇行するように南東方向へ延びる大畦によって区画が画されている。大区画内を細かく区画する小畦の残存状況は、極めて良好である。小畦高は水田面より5～8cmほどあり、東南方向に長軸をもつ極小区画水田が整然と連なる。調査区内では、135枚の極小区画水田を数える。極小区画水田の一枚当たりの規模は、2～2.5m×0.8～1.3m前後を測り、本大区画内の平均面積は2.4m²ほどとなっている。連続する小畦の状況は、基本的に小区画の長軸方向となる南東方向の畦(縦畦)が直線的に延びているのに対し、短軸方向の畦(横畦)はやや乱れ気味である。しかし、横畦が直線的に並ぶ列や、その直線的な横畦を境に縦畦が微妙にずれている状況がみられる。ある程度の区画を保つための縦畦・横畦となる小畦が存在し、さらにその中を区画している状況と言えよう。極小区画水田の区画畦の横畦(短軸方向)には、水口が多くみられる。このことは、長軸方向となる南東方向へ用水が導かれたことを示している。また、大畦を横断する溝も検出されている。さらに、水田面のほぼ全面からは、人と認定できる足跡の痕跡が数多く検出され、水田内を南東方向に移動した様子も窺える。この足跡は、部分的に小畦を踏みつぶしている箇所も目に付く。

なお、本大区画は先述のB区5大区画と同じ大区画となる可能性が極めて高く、調査区内での1大区画の面積は390m²を計測する。

2 大区画

調査区の中央に位置する。東側の大溝と西側の1大区画とに挟まれる形にあり、全体に細長く、南東端が細く窄まる。大溝と本大区画とを画するのは、大溝の西際に取り付く土手であり、大畦と同じ意味合いをもつ。西側の1大区画とは、西側から緩やかに蛇行するように南東方向へ延びる大畦によって区画が画されている。この大溝際の土手と1・2大区画を画する大畦は、調査区の西端で合流するかのようになり、その間がかなり狭まる。本大区画の水田面は、1大区画の水田面に比べ、やや高位となる。大区画内を細かく区画する小畦は、1大区画とは大きく状態が異なり、残存状態の悪い潰れたような小畦となっている。小畦高は水田面より数cmほどで、東南方向に長軸をもつ小区画水田もみられるが、区画の大きさはばらばらである。調査区内では、24枚の小区画水田を数える。比較的、南東方向の畦(縦畦)が直線的に延びている状況からは、1大区画に準じた状況もある。さらに、水田面からは、人と認定できる足跡の痕跡も多くみられ、1大区画から続く部分もある。

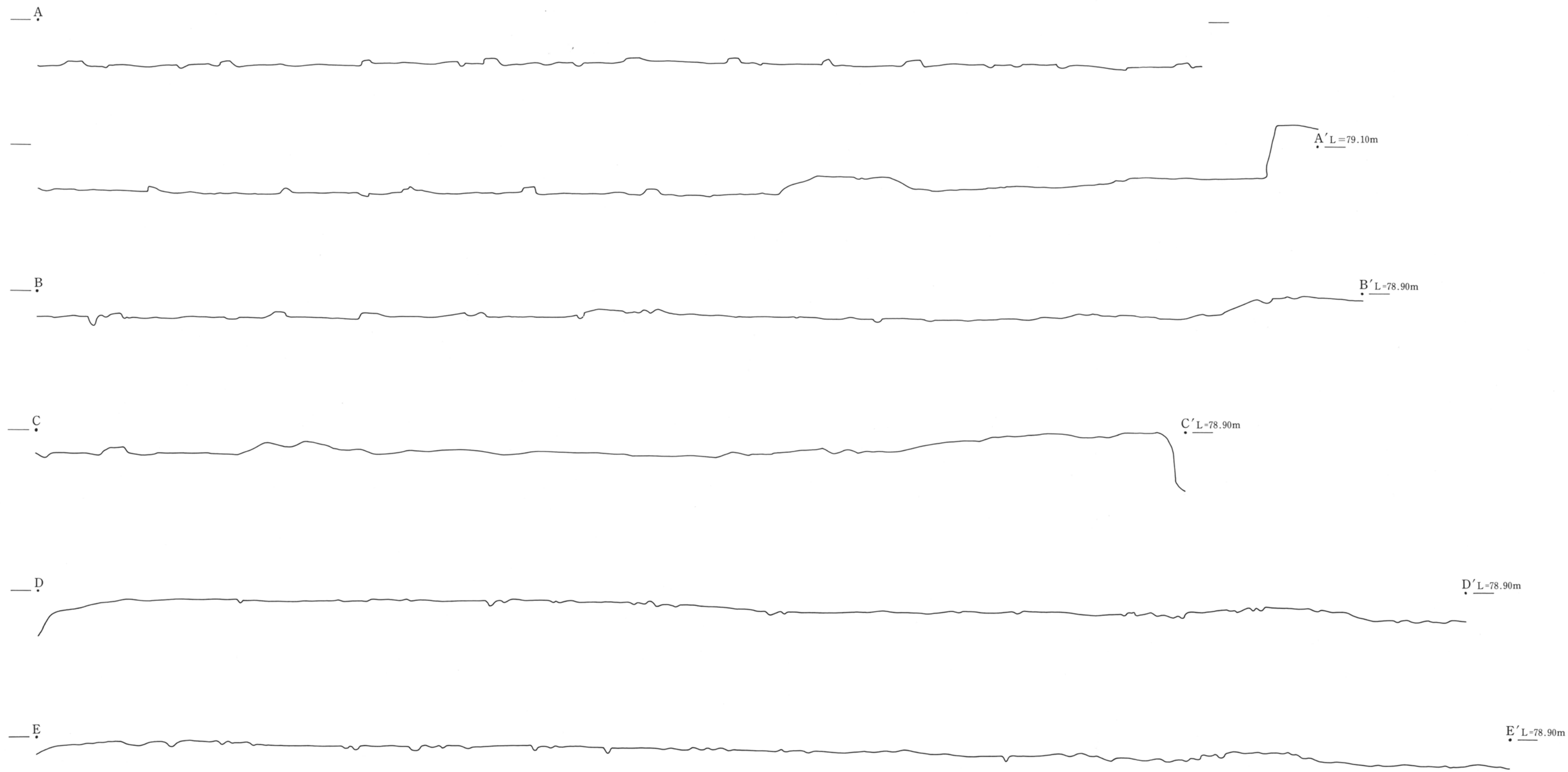
なお、調査区内での2大区画の面積は、173.3m²を計測する。

3 大区画

調査区の北側に位置する。西側の大溝と東側の4大区画とに挟まれる形にあり、大溝と本大区画とを画するのは、大溝の東際に取り付いたであろう土手と考えられ、大畦と同じ意味合いをもつ。残念ながら、調査時に大溝の東際土手を削平してしまったために、土手の詳細は不明。東側の4大区画とは、緩やかに蛇行するように南南東方向へ延びる大畦によって区画が画されている。本大区画の水田面が4大区画の水田面に比



第112図 C区 大区画と極小区画水田(大溝南側)



S = 1/40

第113図 C区 水田の断面

べ、やや高位となる状況は2大区画と同様である。大区画内を細かく区画する小畦は、2大区画ほどではないが、残存状態の悪い潰れたような小畦となっている。小畦高は水田面より数cmほどで、南南東方向に長軸をもつ極小区画水田が連なっている。調査区内では、45枚の小区画水田を数える。また、小区画の水口は、判然としない。本大区画に続く東側の北関調査分でも、大溝の東側水田は残存状態の悪い潰れたような小畦となっており、全く同じ状況と言えよう。さらに、本大区画の水田面からも、人と認定できる足跡の痕跡も多く検出されている。

なお、調査区内での3大区画の面積は、水田区画がわかる範囲内で168m²を計測する。

4 大区画

調査区の北東隅に位置し、僅かな範囲の調査となった。大区画の西側を区画する大畦は3大区画と接し、緩やかに蛇行するように南南東方向へ延びる大畦によって区画の境を画している。この大畦は比較的に広く、上面幅で1mを測る。また、本大区画の水田面は、3大区画よりも若干低い位置となる。大区画内を細かく区画する小畦の残存状況は、1大区画と同様に極めて良好である。小畦高は水田面より5～8cmほどあり、南南東方向に長軸をもつ極小区画水田が整然と連なるものと思われる。調査区内では僅かに10枚の小区画水田を数えるのみであるが、この大区画は後述のD区2大区画と同じ大区画となると共に、東隣の北関調査分でも続く大区画が検出されている。その合わせた面積は5576m²にも達し、大区画全体となると、それ以上の面積となる。さらに、本大区画の水田面からも、人と認定できる足跡の痕跡も多く検出されている。

C区取り付け道

C区取り付け道で検出された遺構は、畦畔を伴う水田だけである。調査区内の地形の状況は、明瞭な微高地はなく、全体が西側から南東方向への微傾斜する低地帯となっている。

検出された水田は、調査区全体に広がる。総じて極小区画水田であるが、大畦によって大区画が区画され、大区画単位に極小区画水田が形成されている。便宜上、この大区画を南側から1～4の区画として説明を加える。この内、4大区画は後述のD区取り付け道1大区画と、同じ大区画である可能性が極めて高い。小畦の残存状態は、比較的に良好であるといえる。また、1～3大区画を区画する大畦の交差部分が、他の大畦交差部よりも広がっている点に注目できよう。さらに、水田面には多くの凹凸がみられたが、人の足跡として認定できる痕跡は明瞭ではなかった。(第115図)

ここで、調査区東壁の土層堆積の状況を確認しておきたい(第117図参照)。

1層となる表土層下には、全体ではないが2層とした暗褐色土が堆積する。この層の下面には、純層に近いAs-A軽石が薄く堆積しており、その下面に耕作痕が検出されている。さらに、3層内にも酸化層が確認でき、中・近世にかけての水田耕作が営まれていたものと考えられる。この2・3層を堆積させない場所では、表土層下が4層となる。5層および6層のAs-B軽石層を経て、黒褐色粘質土の7層が堆積する。7層上面が第3面としたAs-B軽石下水田面であり、7層がその水田耕作土ということになる。8～10層は、Hr-FP起因の泥流層であり、その土色・土質から分層することができる。続く11～13層がHr-FA層となるが、複数層からなるユニット層であることが確認できる。この13層が、第6面とする本水田面を覆う層であり、このユニット層上部では水平堆積となっている。つまり、降下火山灰と言うよりは、洪水等による泥流層の

可能性をもっているものと考えられる。そして、14層上面が本面の水田面となり、14層が黒褐色粘質土の水田耕作土となる。この14層中には、白色のAs-C軽石が全体に含まれている。先述の本線C区で確認されたAs-C混土層や、その上部に堆積する洪水砂層等は堆積しておらず、14層下は15層の灰色粘質土となる基盤のシルト層となっている。このことは、本線C区よりも西側に位置するC区取り付け道調査区が、やや高位にあることと共に、基盤のシルト層自体が高位あり、その分の土層堆積が少なかった結果、14層の水田耕作土中にAs-C混土層等が混在してしまったものと考えられる。よって、14層以下での明瞭な水田跡は検出できていない。

水田 (第116・117図)

検出された水田は、調査区全体に広がっている。所謂極小区画水田であるが、大畦によって大区画が区画され、大区画単位に極小区画水田が形成されている。便宜上、この大区画を、調査区の南側から1～4大区画とした。以下、各大区画ごとに説明を加える。

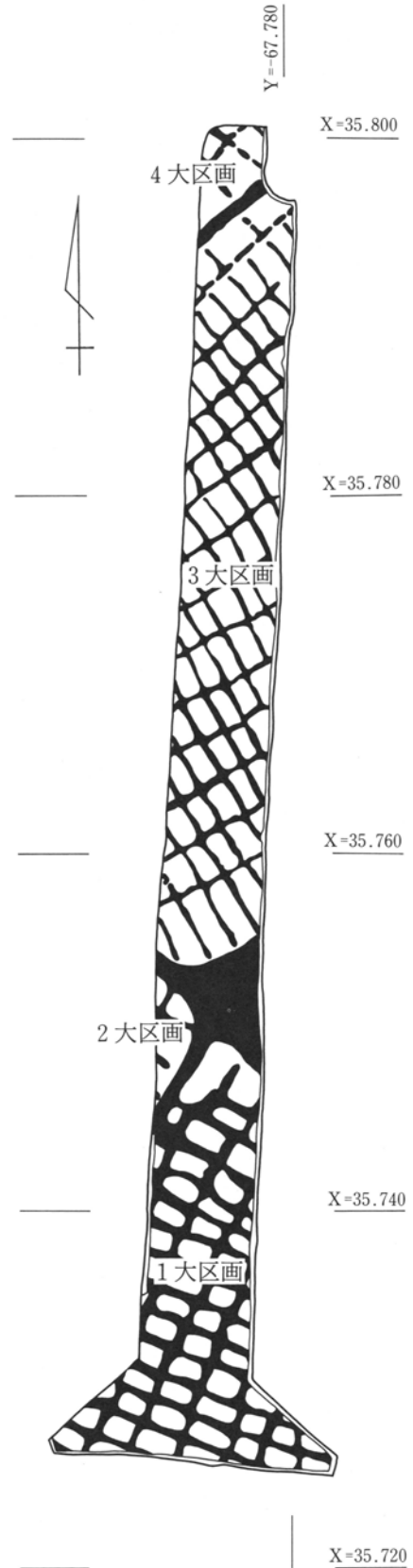
1 大区画

調査区の南端に位置する。本大区画の北側には、大畦が交差する広い交差部があり、その交差部から南西に延びる大畦によって2大区画との区画を画する。大区画内を細かく区画する小畦の残存状況は、比較的に良好である。東南東方向に長軸をもつ極小区画水田が連なり、調査区内では57枚の極小区画水田を数える。極小区画水田の一枚当たりの規模は、1.8m×1m前後を測り、平均面積は1.8㎡ほどとなっている。連続する小畦の状況は、基本的に小区画の長軸方向となる南東方向の畦(縦畦)が直線的に延びているのに対し、短軸方向の畦(横畦)はやや乱れ気味である。また、人の足跡と認定し難いが、水田面には凹凸がみられる。

なお、調査区内での本大区画の面積は155.6㎡を計測する。

2 大区画

調査区の南側の西端に位置する。本大区画の東側には、大畦が交差する広い交差部があり、その交差部から南西に延びる大畦によって1大区画との区画を画し、北西に延びる大畦によって3大区画との区画を画する。調査できたのは僅かな面積であるが、大区画内を細かく区画する小畦の残存状況は、比較的に良好である。



第115図

C区遺構配置図(取り付け道)

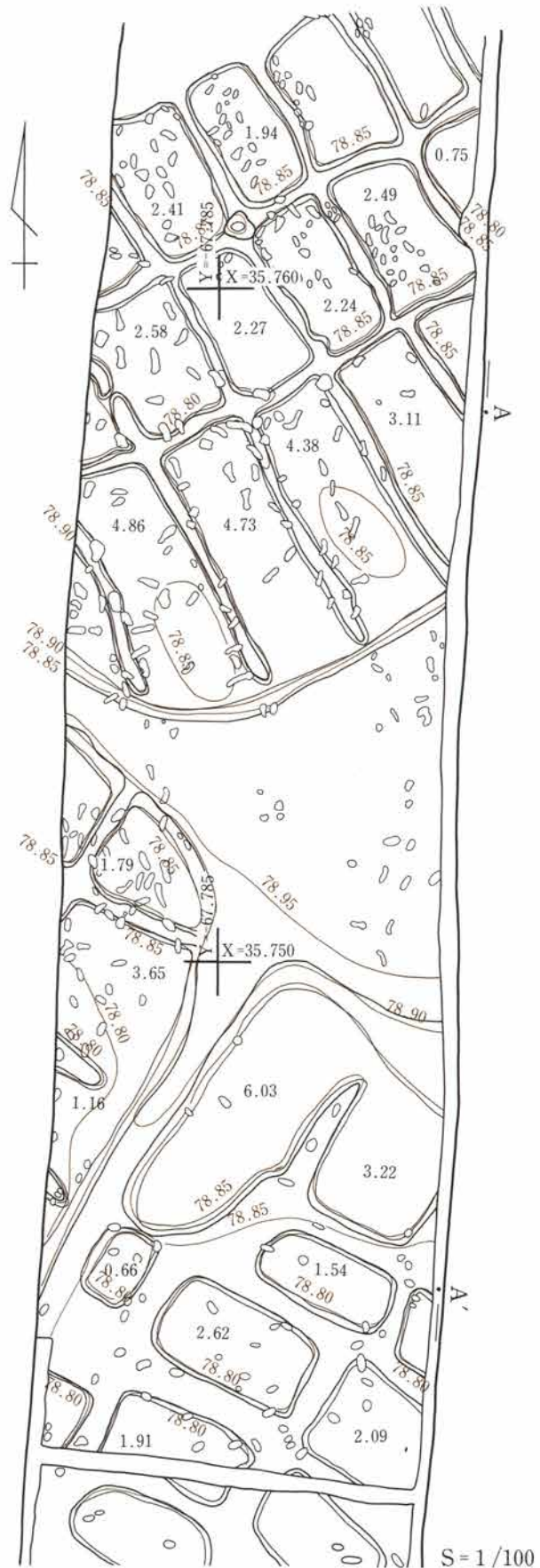
3 大区画

調査区の中央から北側にかけて位置する。本大区画の南側には、大畦が交差する広い交差部があり、その交差部から北西に延びる大畦によって2大区画との区画を画する。北側は4大区画と接し、北東に延びる大畦によって区画を画している。大区画内を細かく区画する小畦の残存状況は、極めて良好である。東南方向に長軸をもつ極小区画水田が連なり、調査区内では87枚の極小区画水田を数える。極小区画水田の一枚当たりの規模は、 $1.2\text{m} \times 1\text{m}$ 前後を測り、平均面積は 2.2m^2 ほどとなっている。連続する小畦の状況は、基本的に小区画の長軸方向となる南東方向の畦（縦畦）が直線的に延びているが、4大区画と接する大畦際には極小区画とはならずやや大きめの小区画となっている。また、人の足跡と認定し難いが、水田面には凹凸がみられる。

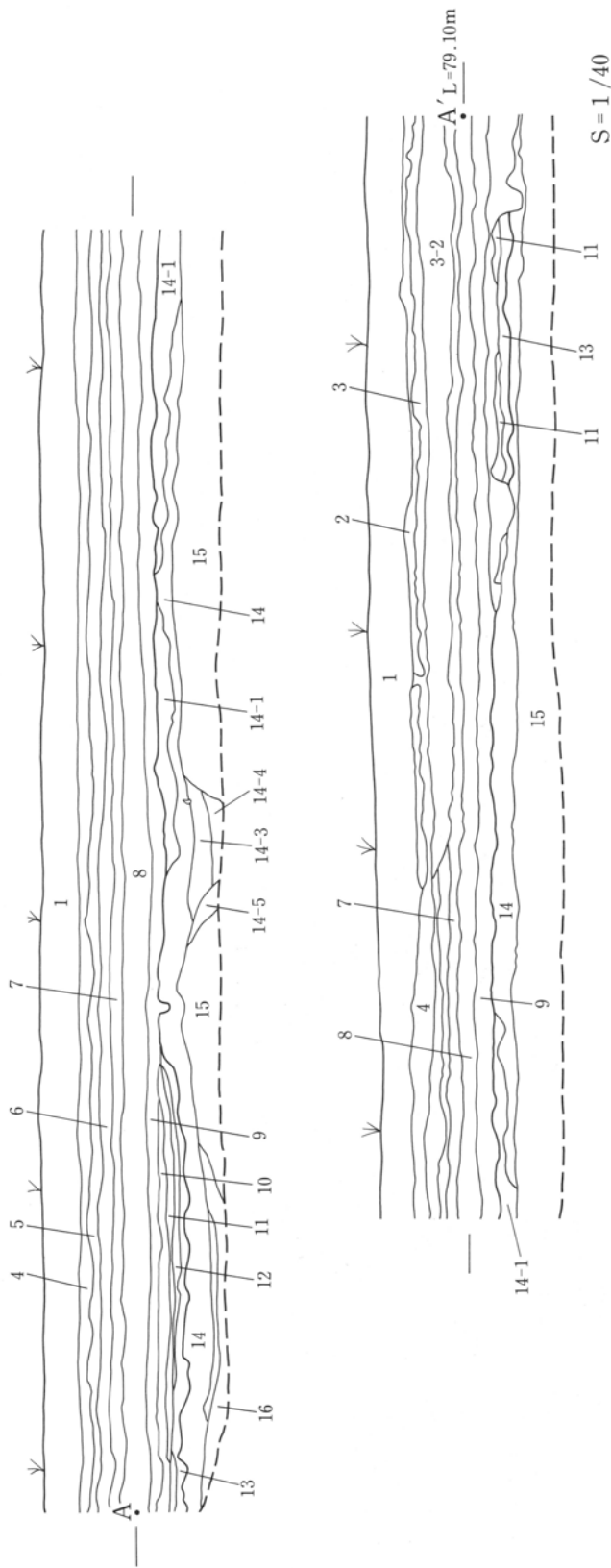
なお、調査区内での本大区画の面積は 224m^2 を計測する。

4 大区画

調査区の北端に位置する。本大区画の南東側は3大区画と接し、西側から北東に延びる大畦によって区画を画している。調査できたのは僅かな面積であるが、大区画内を細かく区画する小畦の残存状況は、極めて良好である。また、本大区画は、北隣となる後述のD区取り付け道1大区画と同じ大区画となる。



第116図 C区取り付け道 大畦の交差部



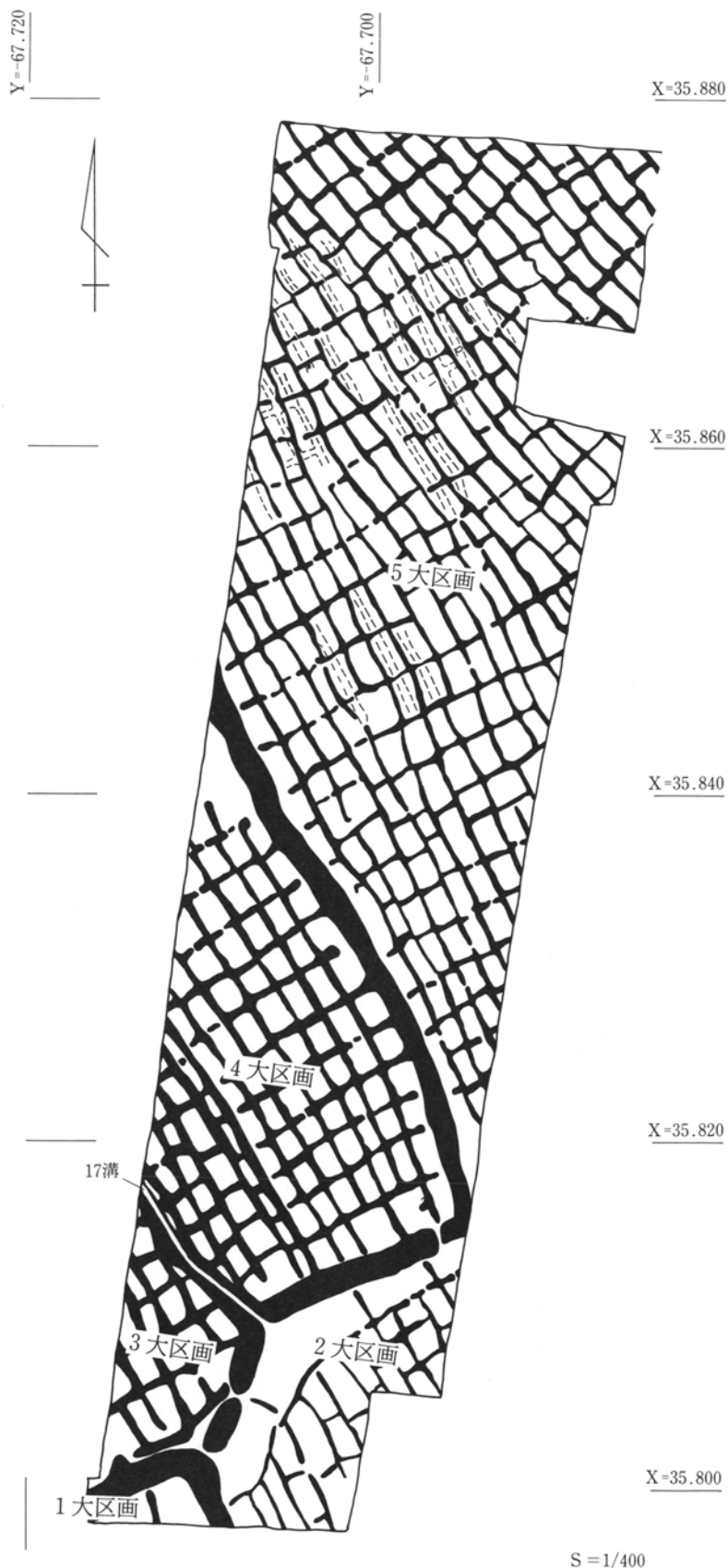
- 1層 暗褐色粘質土 As-A 軽石を含む。現代の水田耕作土。
- 2層 暗褐色土 As-A 軽石を多く含む。下層との境界部分に純度の高いAs-A 軽石が薄く堆積する。
- 3層 灰褐色粘質土 第1面の水田耕作土で、As-B 軽石を全体に含む。酸化の度合いで3-2層とに分層できる。
- 4層 暗褐色土 As-B 軽石を含む。部分的に鉄分の沈着が見られる。
- 5層 黒褐色土 As-B 軽石を多く含む。
- 6層 暗灰色軽石層 As-B の純層である。
- 7層 黒褐色粘質土 第3面の水田耕作土で、Hr-FP 軽石を少量含む。粘性高い。
- 8層 暗灰色粘質土 Hr-FP 起因の泥流層と考えられ、Hr-FP 軽石を含み、部分的に鉄分の沈着が見られる。
- 9層 黄灰色粘質土 Hr-FP 起因の泥流層と考えられ、Hr-FP 軽石を極少量含む。
- 10層 黄褐色粘質土 Hr-FA で、粒子が細かく粘質。
- 11層 明灰色粘質土 Hr-FA で、粒子が細かく粘質。
- 12層 淡桃色粘質土 Hr-FA で、粒子が細かく粘質。
- 13層 明褐色土 Hr-FA ユニットの最下層で、粒子が細かく粘質。
- 14層 黒褐色粘質土 第6面の水田耕作土で、As-C 軽石を全体に含む。粘性が高い。大畦の交差部では、上位が明るく分層できる。なお、1・5号土坑の覆土を14-2~5層として分層している。
- 15層 灰色粘質土 部分的に鉄分の沈着が見られる。粒子が細かく締まっている。基盤のシルト層。
- 16層 黒色粘質土 混入物なく、非常に粘性が高い。

第117図 C区取り付け道 東壁土層断面

D区

D区で検出された遺構は、調査区全体に畦畔を伴う水田となる。調査区内の地形の状況は、明瞭な微高地はなく、北側が高く、全体的に南東方向への微傾斜する低地帯となっている。

水田は総じて極小区画水田であるが、大畦によって大区画が区画され、大区画単位に極小区画水田が形成されている。便宜上、この大区画を南端から1～5の区画として説明を加える。この内、1大区画は先述のC区3大区画と同じ大区画であり、2大区画もC区4大区画と同じ大区画である可能性が極めて高い。また、5大区画も、後述のE区1大区画と同じ大区画である可能性が高い。1大区画は、先述のC区大溝に接する大区画に当たり、C区3大区画と同様に小畦の残存状態が悪い。3大区画についても、1大区画に続く大溝に接する大区画となる可能性が高く、やはり小畦の残存状態は悪い。3大区画と4大区画とを画する大畦部には、大畦の中程に溝を有しており、この溝が2大区画への取水路ともなっている。さらに、注目すべき点がある。5大区画の北半部で、明瞭な小畦とは異なる潰れたような小畦が検出されていることである。調査時の所見としては、明瞭な小畦はHr-FA層に埋もれる直前段階の小畦であり、潰れたような小畦はそれ以前の小畦がそのまま残存した姿であろうと考え、



第118図 D区の遺構配置図(本線)

埋没時の明瞭な小畦を「今年の小畦」、潰れたような小畦を通称「去年の小畦」として扱った。このことは、新規の水田耕作時に、田起し（荒起し）という耕作行為が成されずに小畦が作られたということであり、その結果、部分的に小畦のずれた位置では「去年の小畦」が残存してしまったのではないかと考えた。もう一点注目したい点として、5大区画の南西側を画する大畦際に検出された馬蹄痕がある。この馬蹄痕は、大畦際に沿って列状に連なる状態で検出されており、水田耕作に関わる馬の使用という意味で興味のある事例である。

なお、各大区画内の小畦の残存状態は、極めて良好な2・5大区画、次いで4大区画、潰れたような悪い状態にある1・3大区画となる。（第118図）

ここで、調査区南壁土層断面における本第6面までの堆積状況を確認しておきたい（第120図参照）。

最上層に現耕作土で、下位の2層までが土地改良整備が行われた層となる。続く3・4層はAs-B軽石を混在させる層であり、僅かにHr-FP粒を含んでいる。この土層断面位置では、As-B軽石の純層は確認されていない。5～7層はHr-FP起因による泥流層と考えられ、黄褐色系のHr-FP軽石を含む土層となり、厚く堆積している。因みに、5層上面が第4面の確認面である。続く8～11層がHr-FA層となるが、複数からなるユニット層であることが確認できる。このユニット上部層となる8層上面は、水平堆積となっていることから、降下火山灰というよりは、洪水等による泥流層と考えられる。また、ユニット下部層の10層ないし11層が覆う、下層の13層上面が本第6面の水田面であり、その中間に僅かに薄くみられる12層は13層の水田耕作土と同じ土である。特に、第120図の土層断面左側に見られる12層の状態は、13層上面が波状となる波頂部上で、9・10層のHr-FAと12層がサンドイッチ状になっていることが見てとれる。この波頂部は2大区画水田内の小畦の断面部であり、10層堆積後に小畦作りとして耕作土が盛り上げられた状況を示していると考えられ、盛り上げられた耕作土が12層と理解できる。また、断面中央の12層は、1大区画と2大区画とを画する大畦に当たり、この大畦を境に1大区画となる右側には11層が堆積している。この11層も、Hr-FAユニットの一部と考えられる。

次に、調査区北壁土層断面における本第6面までの堆積状況を確認しておきたい（第123図参照）。

図示した上面は、第2面となる中世遺構の確認面であり、1層はAs-B軽石を混在させる層である。その下位の2層がAs-B軽石の純層で、1108年の浅間山噴火の軽石層である。この軽石層の下面に当たる3層上面が、第3面の平安水田面となり、暗褐色粘質土の3層がその水田耕作土となる。続く4～6層はHr-FP起因による泥流層と考えられ、南壁での5～7層に対比できる。この泥流層の下位に、7層としたHr-FA層が堆積し、第6面水田面となる8層上面を覆う。この7層は、南壁の8～10層に対比されるものの、分層は難しい。しかし、層上面が水平堆積に近い状態にあり、南壁と同じ状況と言えよう。また、第6面水田面となる8層上面の状態は、小畦に当たる部分が波状に盛り上がりをもせているが、比較的の高い盛り上がり部と、緩やかに僅かな高まりをみせる部分とがある。この土層断面位置は5大区画の北壁に当たり、高い盛り上がり部が埋没時の明瞭な通称「今年の小畦」、緩やかに高まりが潰れたような通称「去年の小畦」となる。因みに、8層が第6面水田の水田耕作土である。

以上、堆積土を確認してきたが、本第6面をパックするように覆うHr-FA層の状態が理解できよう。

水田（第119～124図）

検出された水田は、調査区全体に広がっている。所謂極小区画水田であるが、大畦によって大区画が区画され、大区画単位に極小区画水田が形成されている。便宜上、この大区画を、調査区の南側から1～5の大

区画とした。以下、各大区画ごとに説明を加える。

1 大区画

調査区の南端の西側に位置する。本大区画を区画する大畦は、調査区の西南隅から北東方向に延び、途中で直角に折れて南東方向に向きを変える。大区画の北側を区画する大畦は3大区画と接し、東側では2大区画と接する。本大区画の水田面は、2大区画の水田面よりも高位に位置し、先述のC区3大区画と4大区画の状況と同様である。調査できたのは僅かな面積であるが、大区画内を細かく区画する小畦の残存状況は悪く、潰れたような小畦となっている。この小畦の状況も、C区3大区画と同様である。これらの点、および大区画の位置的な点から、本大区画がC区3大区画と同じ大区画であると考えられる。

2 大区画

調査区の南東隅に位置する。本大区画を区画する大畦は、調査区の南端中央から北西方向に延び、周辺大区画と接する大畦の交差部でカーブしながら方向を変え、北東方向へと延びていく。大区画の西側を区画する大畦は1大区画と接し、北西角では3大区画、さらに北側を区画する大畦では4大区画と接している。大区画内を細かく区画する小畦の残存状況は、先述のC区4大区画と同様に極めて良好である。小畦高は水田面より5～8cmほどあり、南東方向に長軸をもつ極小区画水田が整然と連なる状況を呈するが、北西角から北東方向へ延びる北辺の大畦際の区画は異なる。調査区内では、30枚の極小区画水田を数える。極小区画水田の一枚当たりの平均面積は2.9㎡ほどとなっている。連続する小畦の状況は、基本的に小区画の長軸方向となる南東方向の畦（縦畦）が直線的に延びているのに対し、短軸方向の畦（横畦）はかなり乱れ気味である。北辺の大畦際の区画は、極小区画水田に比べてかなり大きな区画となり、大畦の延びる方向が区画の長軸となる。この区画のあり方は、北西角から北辺をなす大畦にみられる水口に起因しているものと考えられる。因みに、3大区画と接する大畦に水口が2カ所、3大区画と4大区画とを画する大畦間にある溝を水路とする水口、4大区画と接する大畦の東寄りに位置する水口の計4カ所が検出されている。これらの水口は、地形的な点等から本2大区画への取水口と考えられる。また、この水口および大畦際の小畦による区画の状況は、東隣の北関調査分でも同様に続くことが確認されている。

なお、調査区内で検出された本大区画の面積は126㎡を計測するが、この大区画は先述のC区4大区画と同じ大区画であると共に、東隣の北関調査分でも続く大区画が検出されている。その合わせた面積は5576㎡にも達し、大区画全体となると、それ以上の面積となる。

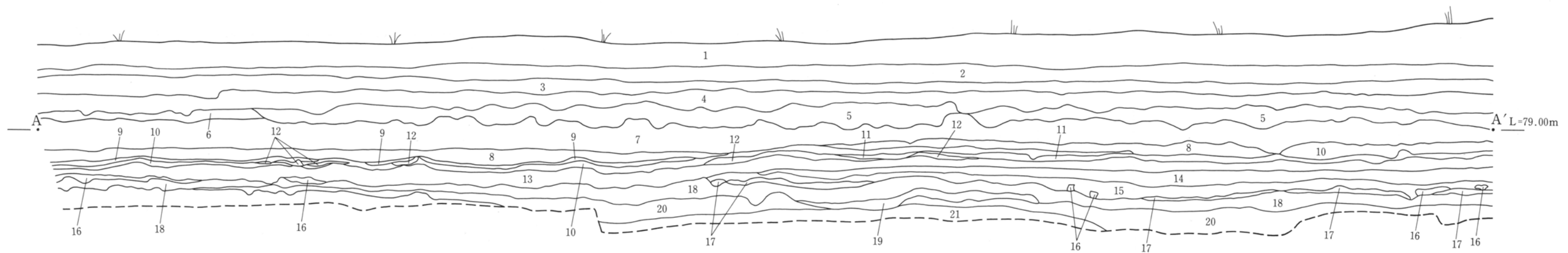
3 大区画

調査区の南側の西端に位置する。本大区画の南側は1大区画と接し、南西隅から北東に延びる大畦によって区画を画する。東側は2大区画と接し、南北方向の大畦で画される。北側は4大区画と接し、西側から南東方向に延びる溝・大畦によって区画が画されている。大区画内を細かく区画する小畦の残存状況は悪く、潰れたような小畦となっており、1大区画やC区3大区画と同様である。小畦高は水田面より数cmほどで、南東方向に長軸をもつ極小区画水田が連なっている。調査区内では、19枚の小区画水田を数える。また、小区画の水口は判然としないが、1大区画から2大区画にかけての大畦交差部付近の大畦際には、小畦の末端部を利用した溝状の排水路的な構造がみられ、2大区画とを画する大畦の水口に通じている。他の大区画の水口部には、見られない構造である。さらに、特筆する点がある。本大区画と4大区画とを画する部分である。2大区画への水路を挟む形の大畦であるが、そのあり方は小畦を分断するように造られているのである。



第119図 D区 大区画と極小区画水田(南侧)

S=1/100

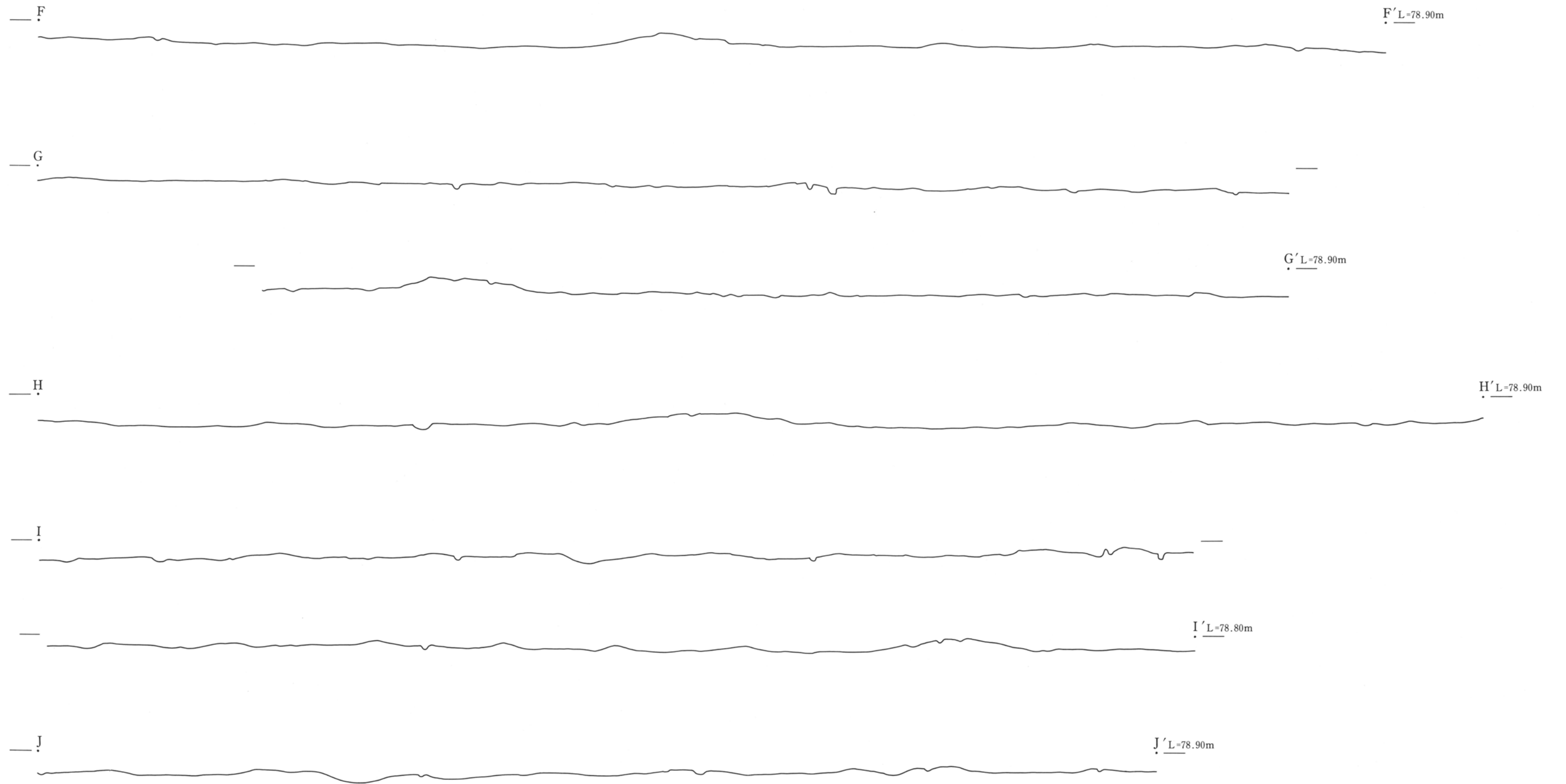


- 1層 暗褐色粘質土 As-A軽石を含む。現代の水田耕作土。
- 2層 暗褐色土 As-A軽石を含み、僅かにHr-FP粒も含む。
- 3層 黒褐色土 上面は基盤整備面で、層全体に酸化気味。As-B軽石、Hr-FP粒を少量含む。
- 4層 暗灰色土 As-B軽石混土層で、Hr-FP軽石を含む。
- 5層 暗褐色土 Hr-FP起因の泥流層と考えられ、Hr-FP軽石を含む。
- 6層 暗黄色土 Hr-FP起因の泥流層と考えられ、Hr-FP軽石を少量含む。
- 7層 白灰色土 Hr-FP起因の泥流層と考えられ、上部にHr-FP軽石を部分的に少量含み、全体に酸化気味。
- 8層 白灰色土 Hr-FA泥流とも考えられ、層上面に肌色粘質土がうすく堆積している。Hr-FP軽石は含まない。
- 9層 白灰色粘質土 Hr-FA泥流とも考えられ、全体に斑に酸化する。
- 10層 白灰色粘質土 8層と同質のHr-FA泥流と考えられ、より酸化をうけ層全体に赤みがかかっている。
- 11層 白灰色粘質土 9層と同質のHr-FA泥流と考えられ、灰色土の混入が斑状であり、9層よりも鮮やかな土色である。

- 12層 灰色粘質土 13層と同じ水田耕作土で、ブロック状に11層を薄く挟んで13層よりも上層にある。第6面水田の小畦に当たる。
- 13層 灰色粘質土 第6面の水田耕作土で粘質。酸化をうけている。
- 14層 明灰色土 粘性をもち黒色土を少量ブロック状に含む。洪水層とみられる。
- 15層 黒灰色粘質土 白色軽石を少量含み、黒色土の混入が層の下部にみられる。洪水層とみられる。
- 16層 褐色砂質土 軽石状の砂を多量に含み、黒色土をブロック状に含む。洪水層とみられる。
- 17層 黒色粘質土 粘性が非常に強く、水のよどんだ形跡とみられる。洪水層とみられる。
- 18層 黒灰色粘質土 層の上面が第7面の遺構確認面となる。As-C軽石を混在させた、As-C混土層である。
- 19層 黒灰色粘質土 18層と同じAs-C混土層であるが、As-C軽石をより多く含む。
- 20層 黒色粘質土 層の上面が第8面の遺構確認面となる。混入物がなく、粘性が非常に強い。
- 21層 灰色粘質土 基盤のシルト層。

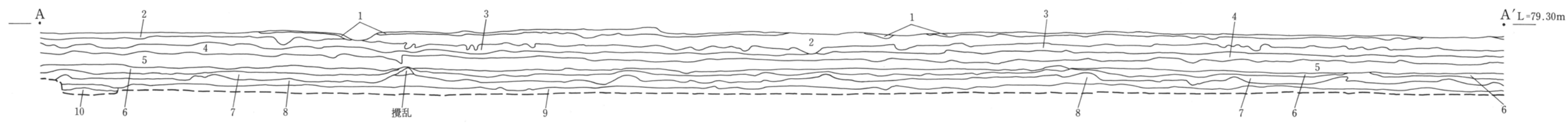


第120図 D区 南壁土層断面と水田の断面

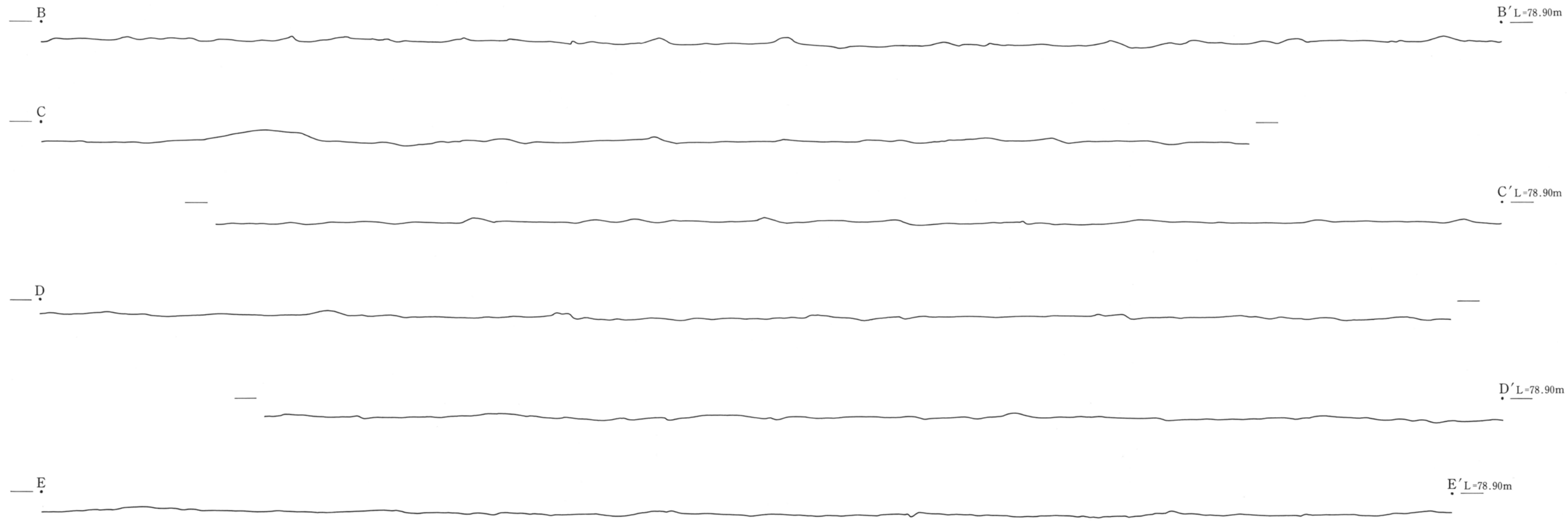


第121図 D区 水田の断面





- 1層 茶褐色土 層の上面が第2面の遺構確認面となる。As-B軽石を多量に含む。
- 2層 暗灰色軽石層 As-B軽石の純層である。
- 3層 暗褐色粘質土 第3面の水田耕作土。Hr-FP粒子を僅かに含む。
- 4層 暗灰色粘質土 Hr-FP起因の泥流層と考えられ、砂質気味で、Hr-FP軽石を含む。
- 5層 鈍い黄橙色粘質土 Hr-FP起因の泥流層と考えられ、酸化が進んでいる。
- 6層 明灰黄色粘質土 Hr-FP起因の泥流層と考えられ、酸化の度合いは少ない。
- 7層 淡桃色粘質土 Hr-FAで、粒子が細かく粘質。層全体が酸化をうけて赤茶けた様相を呈する。
- 8層 黒灰色粘質土 第6面の水田耕作土。僅かに微小なAs-C軽石を含む。
- 9層 黒褐色粘質土 層の上面と下面に水田耕作層がみられた。As-Cを多く含む。As-C混土層。
- 10層 暗灰色粘質土 基盤のシルト層で、層全体に酸化をうけている。



S = 1 / 40

第123図 D区 北壁土層断面と水田の断面



第124図 D区 大畦際の水田面に残る馬蹄痕列

潰れたような残存状況の悪い小畦等からすれば、本来の本大区画の範囲は4大区画の西側まで含まれていたものと考えられる（詳細については、4大区画を参照）。しかし、2大区画への直接（占有）的な水路を確保するため、本来の大区画の範囲内に溝を設けた際、従来の小畦を壊すように溝部の掘削土を溝の両際に盛り上げて造られた状態となっている。結果、本来の大区画が分断され、3・4大区画を画する水路を挟む大畦際の極小区画の形状が、他とは異なる三角等の変形な区画として検出されている。また、この水路は、2大区画への直接（占有）的な水路であり、その取水先は調査区の西側に存在するであろう大溝となる可能性が高い。さらに飛躍させれば、2大区画への水路の存在や、本大区画内の潰れたような小畦の状況を考えれば、本大区画での水田稲作は休耕状態にあった可能性もある。

なお、調査区内で検出された本大区画の面積は66.9m²を計測する。

4 大区画

調査区の南側から中央にかけて位置する。本大区画の南西側は3大区画と接し、西側から南東方向に延びる溝・大畦によって区画が画される。南東側は2大区画と接し、北東方向の大畦で画される。北東側は5大区画と接し、西側から南東方向に延びる大畦によって区画が画されている。調査区内にみる大区画の形状は、南東方向に長軸をもつ長方形を呈する。大区画内を細かく区画する小畦の残存状況は良い状態とは言えず、潰れたような小畦となっている。特に、先の3大区画でも触れたが、本大区画の西半部は残存状態が悪い。この残存状態の差を画するのは、小畦で区画された極小区画の中でも、大区画中央西寄りの長軸上に細長く区画された区画列を境としている。また、この細長い区画列の東側では、極小区画水田の水口部が揃うように見られ、通常の大畦際にみられる状況が検出されている。こうした点から考えると、本来の大区画は細長い区画列で画されていた可能性が極めて高く、細長い区画列が水路を伴う大畦であった可能性もある。しかし、本稿では便宜上の4大区画として扱う。大区画内には、南東方向に長軸をもつ極小区画水田が連なっている。調査区内では、103枚の小区画水田を数える。極小区画水田の一枚当たりの平均面積は1.9m²ほどとなっている。連続する小畦の状況は、基本的に小区画の長軸方向となる南東方向の畦（縦畦）が直線的に延び、短軸方向の畦（横畦）も比較的揃っている。但し、この状況は大区画の東半であり、西半では南西大畦際の区画形状が乱れている。2大区画との境を画する大畦の東端には、本大区画から2大区画への水口（排水口）が検出されている。

なお、調査区内で検出された本大区画の面積は298m²を計測する。

5 大区画

調査区の中央から北半に位置する。調査区内での本大区画を画する大畦は、西側から南東方向に延びる大畦のみで、4大区画と接している。大区画内を細かく区画する小畦の残存状況は、極めて良好である。小畦高は水田面より5～8cmほどあり、東南方向に長軸をもつ極小区画水田が連綿と連なる。調査区内では、224枚の極小区画水田を数える。極小区画水田の一枚当たりの規模は、2～2.5m×0.8～1.3m前後を測り、平均面積は2.4m²ほどとなっている。連続する小畦の状況は、基本的に小区画の長軸方向となる南東方向の畦（縦畦）が長く延びているのに対し、短軸方向の畦（横畦）は乱れ気味である。しかし、縦畦も等間隔な直線的畦ではなく、斜めに振れたり、間隔のあいた部分から新たに縦畦を割り込ませたりといった状態がみられ、横畦に至っては直線的な部分もみられるが全体にランダムであり、そのため各区画の大きさにばらつきが生じている。極小区画水田の横畦（短軸方向）には、水口が多くみられ、長軸方向となる南東方向へ用水が導

かれたことを示している。さらに、水田面のほぼ全面からは、多くの凹凸が検出されている。特に、4大区画との大畦際からは、馬の足跡と認定できる明瞭な痕跡が列を成すように検出され、大畦に沿った南東方向に移動した様子も窺える（図版124参照）。

なお、調査区内で検出された本大区画の面積は701m²を計測する。本調査区の調査終了後に行われたC・D区間の道路部分調査の結果、区画を画する大畦は検出されておらず、後述のE区1大区画と同じ大区画となる。同様に、東隣の北関調査分でも続く大区画が検出されており、その合わせた面積は4805m²にも達する。大区画全体となると、それ以上の面積となる。

もう一点、特筆することがある。大区画内を区画する極小区画水田の明瞭な小畦とは異なる、潰れたような小畦（平面図の中で、点線で示した部分）が検出されていることである。この潰れたような小畦の状況は、大区画内の北半に顕著に確認できた。残存状況の良好な縦畦列とは異なる、低く潰れた小畦状で、その延びる方向は良好な縦畦方向とほぼ同様である。また、部分的には、潰れた小畦状の高まりが、良好な縦畦に取り付くように延び、その部分の良好な縦畦が逆に方向を違える様子も窺える。さらには、この潰れた小畦状の高まりが、残存状況の良好な縦畦列と同様な列を成していること、および横畦的な小畦状の高まりも一部にみられる。この状況は、プリントされた（擬似）畦畔、或いは耕作（荒起し等）による田面の残存といったことを想定し難い。調査時の所見としては、明瞭な小畦はHr-FA層に埋もれる直前段階の小畦であり、潰れたような小畦はそれ以前の小畦がそのまま残存した姿であろうと考えた。このことは、新規の水田耕作時（埋もれる直前段階）に、田起し（荒起し）という耕作行為が成されず、古い小畦をそのまま踏襲する形で新しい（明瞭な）小畦が作られ、その結果、古い小畦と新しい小畦がずれた部分では、古い小畦が潰れたような形で残存してしまっただけではないかと考えた。なお、便宜上ではあるが、埋没時の明瞭な小畦を通称「今年の小畦」、潰れたような小畦を通称「去年の小畦」として扱った。同様な両者の小畦は、後述のE区1大区画、東隣の北関調査分に続く大区画内でも確認されている。

D区取り付け道

D区取り付け道で検出された遺構は、大溝の一部と土手状の高まり、それと畦畔を伴う水田である。調査区内の地形の状況は、明瞭な微高地はなく、全体が西側から南東方向への微傾斜する低地帯となっている。

検出された大溝は、本線C区から続く大溝であり、調査区の北側で大溝の西肩部が確認されている。また、大溝の西際には、先のC区と同様の土手状の高まりが検出されている。

水田は、北側の大溝部分を除く調査区全体に広がる。総じて極小区画水田であるが、大畦によって大区画が区画され、大区画単位に極小区画水田が形成されている。便宜上、この大区画を南側から1～4の区画として説明を加える。この内、1大区画は先述のC区取り付け道4大区画と、同じ大区画である可能性が極めて高い。小畦の残存状態は、大溝の西側となる4大区画が悪く、1・2大区画では良好である。また、水田面には僅かに凹凸がみられるが、その痕跡は明瞭ではなかった。（第125図）

ここで、調査区東壁の土層堆積の状況を確認しておきたい（第127図参照）。

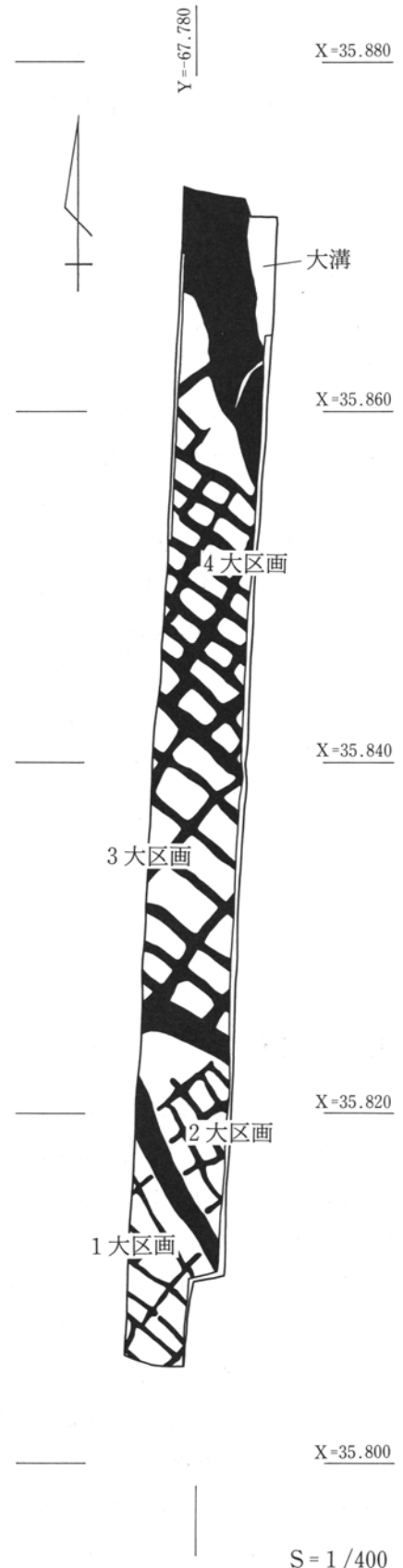
1層となる表土層下には、全体ではないが2層とした暗褐色土が、調査区の南側に堆積する。この層の下面には、純層に近いAs-A軽石が薄く堆積しており、その下面に耕作痕が検出されている。この2層を堆積させない場所では、表土層下が3層となる。3層内にも酸化層が確認でき、中・近世にかけての水田耕作が

営まれていたものと考えられる。4層はAs-B軽石層を多量に混在させ、下位の5層がAs-B軽石の純層となる。この5層および6層も調査区全体ではなく、中央から南半にかけての堆積となり、6層上面に第3面としたAs-B軽石下水田面が検出され、6層がAs-B軽石下水田の耕作土となる。調査区の北側では、5・6層の堆積が認められていない。4層下は、8層となるHr-FP起因の泥流層が堆積する。8層を含めた泥流層は、その土色・土質から分層することができる。続く9～11層がHr-FA層となるが、複数層からなるユニット層であることが確認できる。この最下層の11層である乳白色土が、第6面とした本水田面を覆う層であり、このユニット層上部は水平堆積となっている。つまり、このユニット層上部は、降下火山灰ではなく、洪水等による泥流層の可能性をもっているものと考えられる。この状況は、第127図に見る大畦部分（3・4大区画の境）の堆積状況が物語っている。そして、12層上面が本水田面となり、12層が暗灰色粘質土の水田耕作土となる。大畦の西際では、12層が土手状に高くなり、その上層に8層の泥流層が直接に堆積している。12層の下位には、白色軽石を多量に含んだ洪水層として灰色砂質土が堆積し、13・14層に分層できる。この洪水による砂質土は、調査区の中央部を除くほぼ全体を覆っている。さらに下位層の16層が、白色のAs-C軽石を層中に含むAs-C混土層となる。この16層上・下面でも、後述する第7・8面の水田面が検出されている。16層の下位層が基盤のシルト層となるが、部分的に16層とシルト層の間に粘質の極めて強い17層の黒色粘質土が堆積している。

大溝

調査区の北側で、本線C区から続く大溝の西肩部が、調査区の東壁を掠めるように検出されている。大溝の延びる方向は南北方向に近く、後述する北隣のE区取り付け道に続いていく。溝内の掘削調査は、安全面から断念した。第127図に示した東壁の土層断面では、大溝を覆うのがAs-B軽石層を多量に混在させる4層であり、大溝の開口部（肩部）は8層上部にまで達している。このことは、先述したように、大溝の埋没時期がHr-FP泥流の堆積以降であることを示している。因みに、大溝内の堆積土は、Hr-FP粒を主に堆積しており、C区での状況と同じである。

また、大溝の西際には、先のC区と同様の土手状の高まりが検出されており、土手上部で幅2.5m前後、水田面からの高さは20～30cmの比高差をもつ。この土手を構成する土は、12層の水田耕



第125図
D区の遺構配置図(取り付け道)

S = 1/400

作土と近似する上位にHr-FAの小ブロックを含んだ暗灰色粘質土である。この状況も、C区と同様である。

水田 (第126・127図)

1 大区画

調査区の南端に位置する。本大区画の北側は2大区画と接し、西壁から南南東に延びる大畦によつての区画を画する。大区画内を細かく区画する小畦の残存状況は、極めて良好である。調査区内では16枚の極小区画水田を数えるが、先述のC区取り付け道4大区画と同じ大区画である。

2 大区画

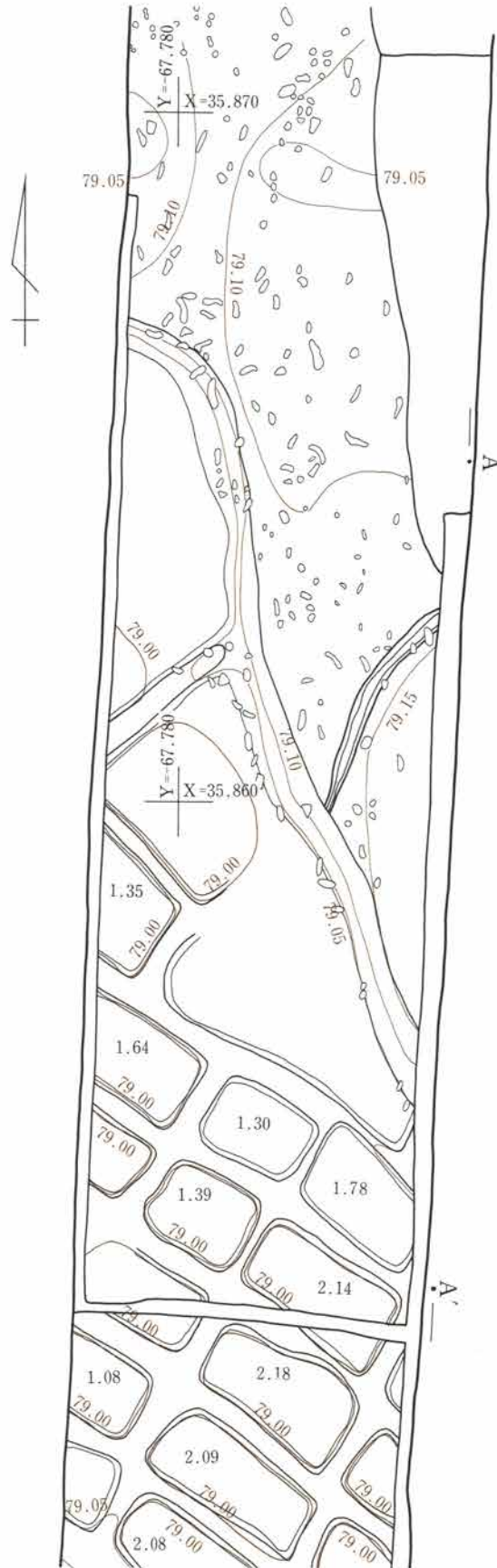
本大区画の南側は1大区画、北側は3大区画と接する。両大区画の境は大畦によつて区画されるが、この両大畦は2大区画の西側で合流するようである。大区画内を細かく区画する小畦の残存状況は、極めて良好である。調査区内では10枚の極小区画水田を数えるが、西側の大畦合流付近では小区画がない。

3 大区画

本大区画の南側は2大区画、北側は4大区画と接し、両大区画の境は大畦によつて区画される。大区画内を細かく区画する小畦の残存状況は、1・2大区画と比べて悪く、区画も大きい。6㎡に達する小区画もある。

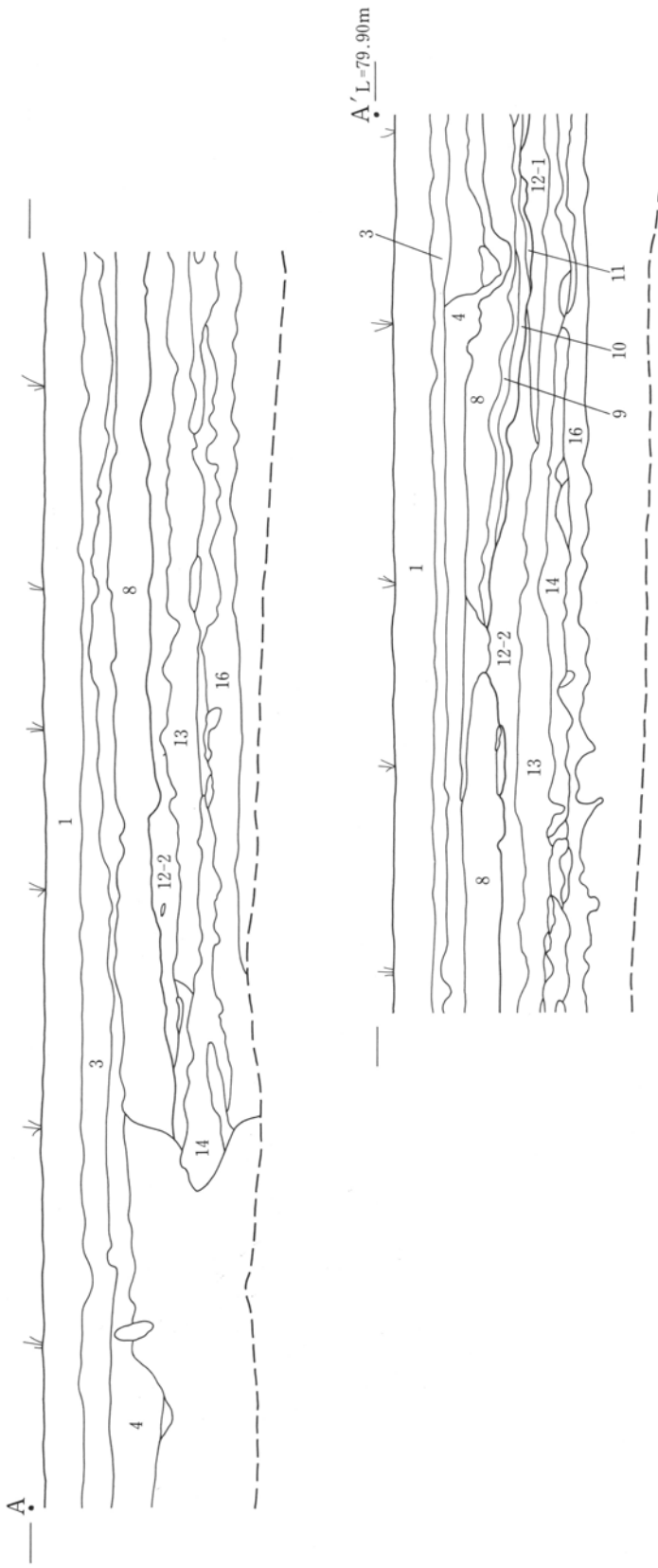
4 大区画

南側は3大区画と接し、大畦で区画される。北東側は大溝の土手によつて画されている。大区画内を細かく区画する小畦の残存状況は悪く、潰れたように畦高が低い。また、本田面は、3大区画の田面よりもやや高い位置にある。



S = 1/100

第126図 D区取り付け道 大溝と水田



- | | | | | | |
|----|--------|--------------------------------|-------|--------|---------------------------------|
| 1層 | 暗褐色粘質土 | 表土。現代の水田耕作土。 | 10層 | 明灰色砂質土 | Hr-FA起因の泥流層とも考えられ、やや砂質気味。 |
| 2層 | 暗褐色土 | As-A軽石を少量含む。下面に薄くAs-A軽石が堆積する。 | 11層 | 乳白色土 | Hr-FA起因の泥流層とも考えられ、粒子が細かく粘質。 |
| 3層 | 暗褐色土 | 上面で第1面を検出。As-B軽石を少量含む、全体に酸化気味。 | 12-1層 | 暗灰色粘質土 | 第6面の水田耕作土で、粘性強い。 |
| 4層 | 黒褐色砂質土 | As-B軽石を多量に含む。 | 12-2層 | 暗灰色粘質土 | 12層と同一層であるが、Hr-FAの小ブロックを僅かに含む。 |
| 5層 | 暗褐色砂質土 | 第3面の水田耕作土。Hr-FP粒子を僅かに含む。 | 13層 | 灰色砂質土 | 軽石状の粗い砂を多量に含む、洪水層とみられる。 |
| 6層 | 暗褐色粘質土 | Hr-FP起因の泥流層と考えられ、Hr-FP軽石を含む。 | 14層 | 灰色砂質土 | 軽石状の粒子の細かい砂を多量に含む、洪水層とみられる。 |
| 7層 | 黄灰色土 | Hr-FP起因の泥流層と考えられ、全体に砂質である。 | 15層 | 暗灰色粘質土 | 洪水層とみられる。粘性が非常に強く、水のよどんだ形跡が。 |
| 8層 | 黄色砂質土 | Hr-FA起因の泥流層とも考えられ、粒子が細かく粘質。 | 16層 | 黒褐色粘質土 | 層の上面が第7面の遺構確認面となる。As-C軽石混土層である。 |
| 9層 | 乳白色粘質土 | | | | |

S = 1 / 40

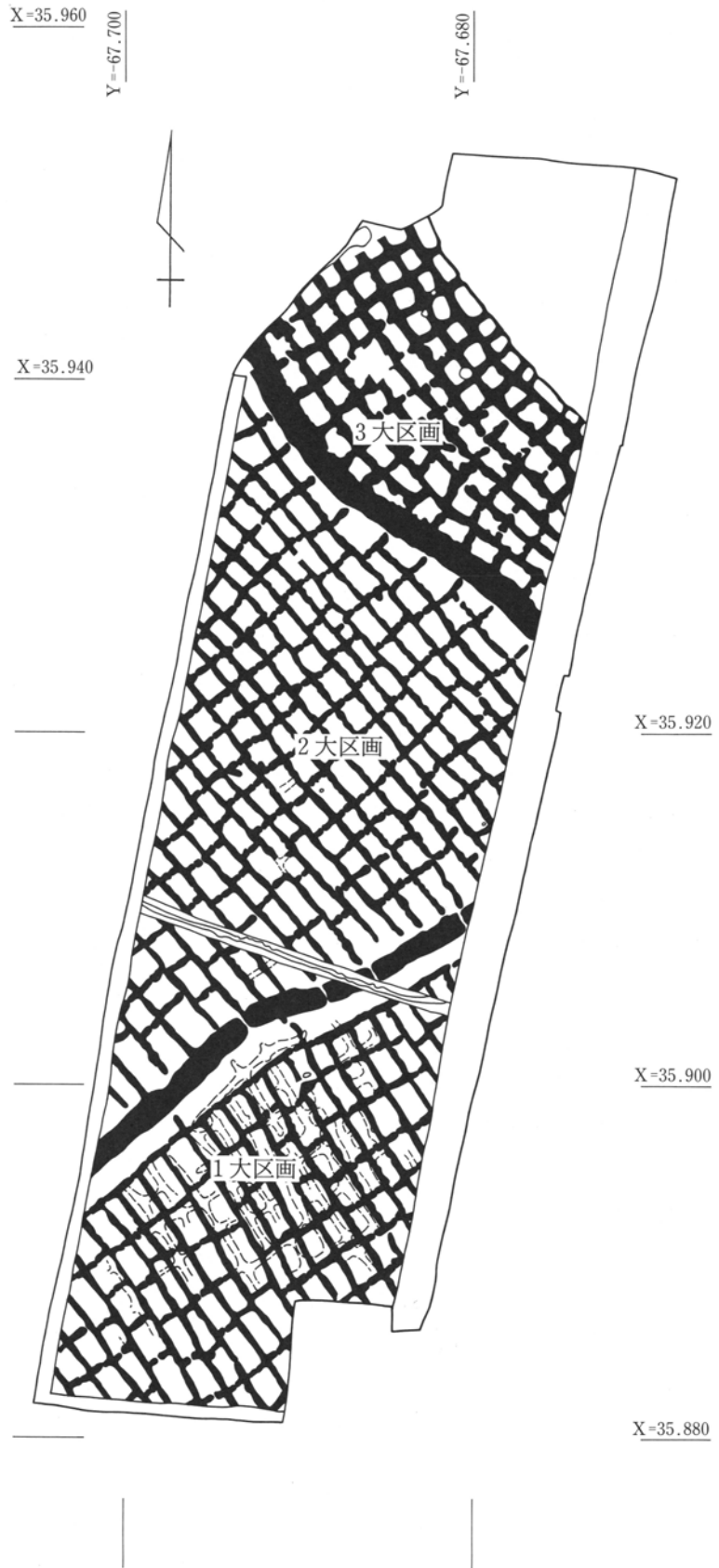
第127図 D区取り付け道 東壁土層断面(北側)

E区

E区で検出された遺構は、調査区の北東隅を除く、全体に広がる畦畔を伴う水田である。

調査区内の地形の状況は、調査区の北東隅が微高地となり、低地部では北側が高く、全体的に南東方向へ微傾斜する。この微高地は、北隣のF区にも跨っており、東隣の北関調査分でも検出されている。しかし、本調査区の西側に位置するE・F区取り付け道に跨る微高地とは、異なる独立した島状の微高地と考えられる。微高地上での遺構の存在はなかったが、北関調査分の微高地上からは古墳時代後期の住居跡が検出されている。

水田は総じて極小区画水田であるが、大畦によって大区画が区画され、大区画単位に極小区画水田が形成されている。便宜上、この大区画を南端から1～3の区画として説明を加える。この内、1大区画は、先述のC区5大区画と同じ大区画であり、東隣の北関調査分でも続く大区画が検出されている。その大区画の規模は、かなりの広大な面積に及ぶ。また、C区5大区画で確認された、通称「去年の小畦」とする潰れた小畦の痕跡も検出されている。3大区画は微高地を取り巻く区画となり、微高地際の水田の状況が理解できよう。(第128図)



第128図 E区の遺構配置図(本線)

水田 (第129～132図)

検出された水田は、微高地を除く、低地部全体に広がっている。所謂極小区画水田であるが、大畦によって大区画が区画され、大区画単位に極小区画水田が形成されている。便宜上、この大区画を、調査区の南側から1～3の大区画とした。

1 大区画

調査区の南端に位置する。本大区画を画する大畦は、西側から北東方向に延びる大畦で北側の2大区画と接している。先述したD区5大区画と同じ大区画であり、大区画内を細かく区画する小畦の残存状況は、極めて良好である。小畦高は水田面より5～8cmほどあり、南東方向に長軸をもつ極小区画水田が連綿と連なる。調査区内では、109枚の極小区画水田を数える。極小区画水田の一枚当たりの規模は、2m×1.2m前後を測り、平均面積は2.4㎡ほどとなっている。中には、長軸方向が3.5mを測る区画もある。連続する小畦の状況は、基本的に小区画の長軸方向となる南東方向の畦（縦畦）が長く延びているのに対し、短軸方向の畦（横畦）は乱れ気味である。先のD区5大区画での状況に比べると、比較的に整った極小区画を呈していると言える。極小区画水田の横畦（短軸方向）には、水口が多くみられ、長軸方向となる南東方向へ用水が導かれたことを示している。一方、2大区画との境となる大畦際の区画は、極小区画水田に比べてかなり大きな区画となり、大畦の延びる方向が区画の長軸となる。この区画のあり方は、大畦に設けられた水口に起因しているものと考えられる。因みに、大畦上には4カ所の水口が検出されている。これらの水口は、地形的な点等から、本大区画への取水口と考えられる。また、この水口および大畦際の区画の状況は、東隣の北関調査分でも同様であることが確認されている。さらには、この大畦に対向する排水側の水口、および対向する大畦際の区画の状況を北関調査分に知ることができる。前後するが、用水方向にある大区画を画する大畦際の状況は、本1・2大区画境の大畦際の状況も好例である。

もう一点、先のD区5大区画と同様に、大区画内を区画する極小区画水田の明瞭な小畦とは異なる、潰れたような小畦（平面図の中で、点線で示した部分）が検出されている。通称「今年の小畦」と、「去年の小畦」である。この通称「去年の小畦」の状況は、極小区画に区画された部分だけではなく、大畦際の取水部付近の区画でも確認され、明らかに擬似畦畔等ではあり得ないことを証明している。

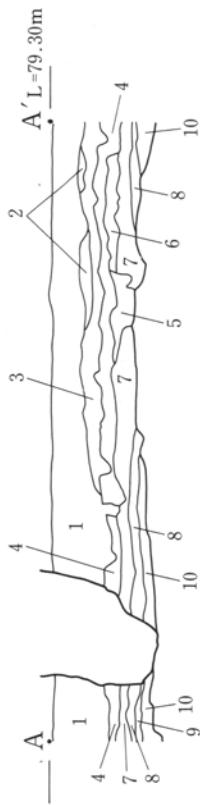
なお、調査区内で検出された本大区画の面積は367㎡を計測する。先のD区5大区画および北関調査分を合わせた面積は4805㎡にも達し、大区画全体となると、それ以上の面積となる。

2 大区画

調査区のほぼ中央に位置する。本大区画の南東側は1大区画と接し、西側から北東方向に延びる大畦で区画を画する。北東側は3大区画と接し、西側からやや蛇行するように南東方向に延びる大畦で区画が画されている。大区画内を細かく区画する小畦の残存状況は、極めて良好である。小畦高は水田面より5～8cmほどあり、東南方向に長軸をもつ極小区画水田が連綿と連なる。調査区内では、183枚の極小区画水田を数える。極小区画水田の一枚当たりの規模は、2m×1m前後を測り、平均面積は2㎡ほどとなっている。中には、長軸方向が3.5mを測る細長い区画もある。連続する小畦の状況は、基本的に小区画の長軸方向となる南東方向の畦（縦畦）が長く延びているのに対し、短軸方向の畦（横畦）は乱れ気味である。特に横畦は、ある縦畦列で大きくずれる部分がみられる。極小区画水田の横畦（短軸方向）には、水口が多くみられ、長軸方向となる南東方向へ用水が導かれたことを示している。また、1大区画との境となる大畦には、1大区画への水口が4カ所検出されている。この大畦際の区画のあり方は、通常の区画と変わらないが、やや長めの



第129図 E区 大区画と極小区画水田(南側)



- | | | |
|-----|--------|----------------------------|
| 1層 | 灰褐色砂質土 | As-B軽石を含む。 |
| 2層 | 黒色砂質土 | As-B軽石を含む。 |
| 3層 | 軽石層 | As-B軽石の純層。 |
| 4層 | 黒褐色シルト | 上位に酸化鉄凝集。粘性あり。不均質。 |
| 5層 | 灰黒色シルト | 7層土をブロック状に含む。土坑ないし溝か？ |
| 6層 | 暗灰色シルト | やや不均質。5層より硬質で粘性強い。水田耕土下位層。 |
| 7層 | 灰褐色シルト | 粘性強く、Hr-FP粒を少量含む。 |
| 8層 | 灰黄色シルト | 細かく、やや砂質。 |
| 9層 | 黄灰色シルト | 8層よりやや粗い。ラミナ状堆積。 |
| 10層 | 灰褐色シルト | 粒子粗く、火山灰質砂、ラミナ状堆積。鉄分凝集著しい。 |

B' L=78.90m

C' L=78.90m

D

D' L=78.80m

E

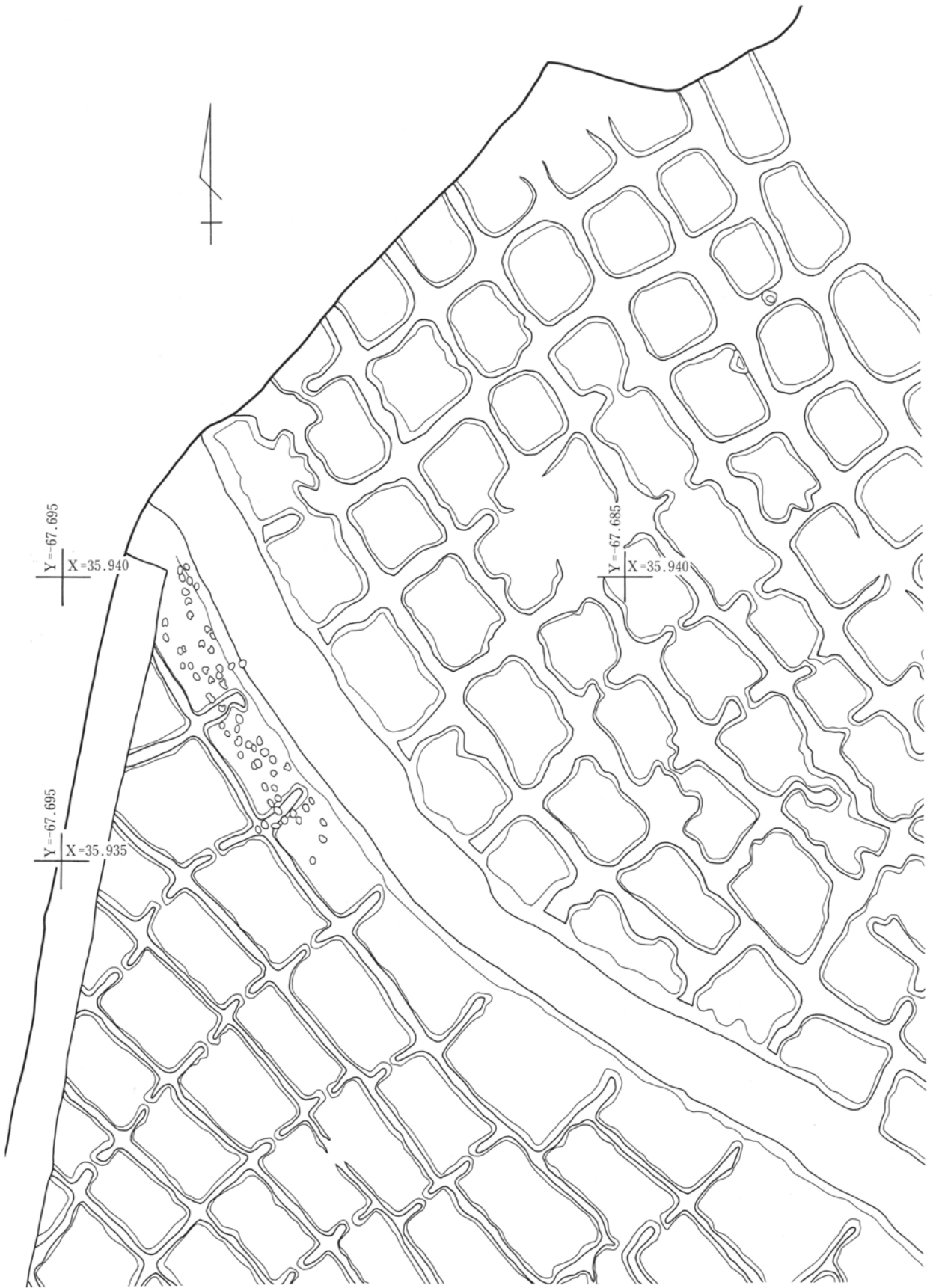
E' L=79.00m

F

F' L=78.90m

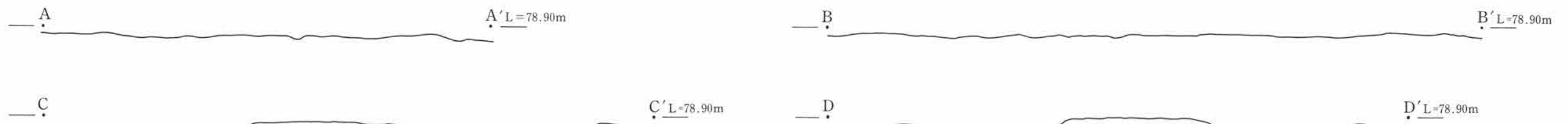
S = 1 / 40

第130図 E区 東壁土層断面と水田の断面



第131図 E区 大畦際の水田面に残る馬蹄痕

S=1/100



S = 1/40

第132図 E区 微高地際の大区画と極小区画水田

区画となっている。1大区画側にみられる取水部付近の、大畦に沿った大畦方向に長い遊水地的区画は認められない。この状況は、他の大区画や北関調査分でも同じである。さらに、3大区画とを区画する西壁付近の大畦際からは、馬の足跡と認定できる明瞭な痕跡が列を成すように検出されている。先のD区5大区画にみられた状況に酷似し、大畦に沿った南東方向に移動した様子を示し、小畦をも踏んでいる状態を確認することができる。

なお、調査区内で検出された本大区画の面積は539m²を計測する。

3 大区画

調査区の北側に位置する。本大区画の南西側は2大区画と接し、西側からやや蛇行するように南東方向に延びる大畦で区画が画されている。北東側は微高地となり、本水田面との比高差は僅かに5cmほどであるが、東隣の北関調査分では20cmほどの比高差をもつ。微高地との境には、特別な施設は存在せず、小区画の小畦が微高地際に直接取り付く形となっている。この状況は、東隣の北関調査分でも同様である。大区画内を細かく区画する小畦の残存状況は悪く、潰れたように畦高の低い小畦で、東南方向に長軸をもつ極小区画水田が連続と連なる。調査区内では、86枚の極小区画水田を数える。極小区画水田の一枚当たりの規模は、1.4m×1m前後を測り、平均面積は1.4m²ほどとなっている。連続する小畦の状況は、基本的に小区画の長軸方向となる南東方向の畦（縦畦）が長く延びているのに対し、短軸方向の畦（横畦）はやや乱れ気味である。極小区画水田の横畦（短軸方向）には、水口が多くみられ、長軸方向となる南東方向へ用水が導かれたことを示している。

なお、調査区内で検出された本大区画の面積は223m²を計測する。

E区取り付け道

E区取り付け道で検出された遺構は、大溝の一部と土手状の高まり、それと畦畔を伴う水田である。調査区内の地形の状況は、調査区の北端が微高地となり、低地部では北側が高く、全体的に南東方向へ微傾斜する。この微高地は、北隣のF区取り付け道にも続いている。本調査区の東側に位置するE・F区および北関調査分に跨る微高地とは、異なる微高地と考えられる。微高地上での遺構は、検出できなかった。

検出された大溝は、本線C区およびD区取り付け道から続く大溝であり、調査区の南側で大溝の東肩部が確認されている。また、大溝の肩部際には、先のC区と同様の土手状の高まりが検出されている。

水田は、北側の微高地と南側の大溝に挟まれた場所に検出された。極小区画水田であるが、残存状態が悪く、詳細については不明な部分も多い。また、大溝際の土手から分岐した、大畦も検出されている。基本的には大畦によって大区画が区画され、大区画単位に極小区画水田が形成されているものと考えられる。本水田面の上位には、間層を挟んだ第5面のHr-FP泥流層下面水田が検出されている。（第133図）

ここで、調査区東・西壁の土層堆積の状況を確認しておきたい（第135・136・138図参照）。

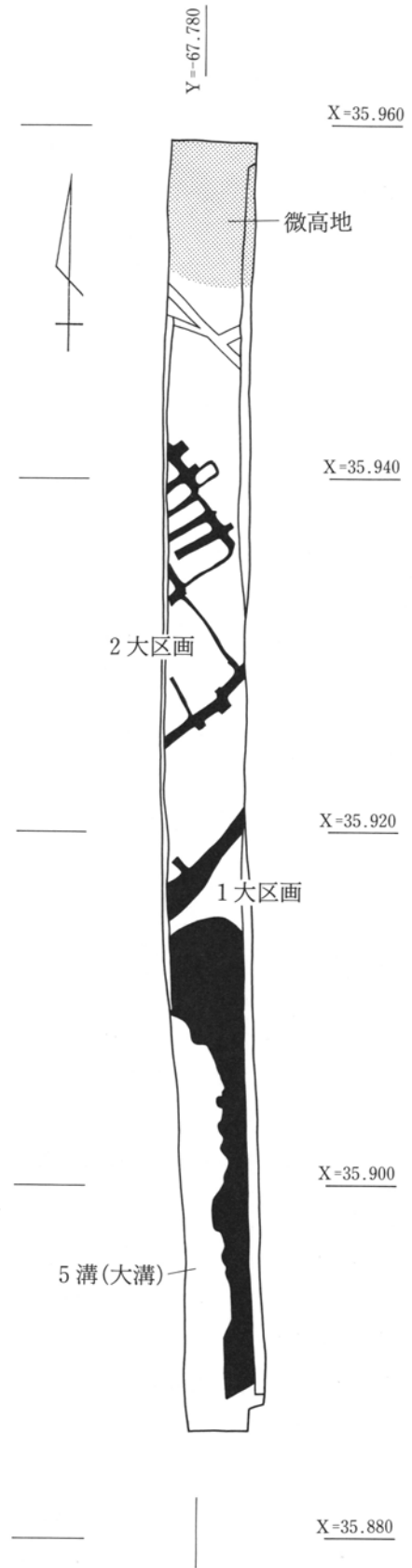
1層となる表土層下には、2層とした黒褐色土が調査区の南側に堆積する。この2層は東・西壁で確認できるが、東壁の堆積が良好である。東壁では、2層と3層の酸化層、4層と5層の酸化層、6層と7層の酸化層がセットとなるように堆積し、2・3層にはAs-A軽石が含まれ、4～7層にはAs-B軽石が少量含まれている。この堆積状況から、2・3層は天明三年以降の水田であり、4～7層は中世から天明三年以前の

水田であったことが理解できる。下位の8層は、As-B軽石を含む明褐色・黒褐色土で、土色・軽石の含有量等から分層できる。図示できなかったが、9層は調査区の南端に堆積し、第3面のAs-B軽石下水田の耕作土（黒褐色粘質土）となっている。10・11層は、Hr-FP起因による泥流層である。10層はHr-FP粒を含む明灰色土（粘質土・砂質土）、11層は黄褐色土（砂質土・粘質土）であり、11層最下位には乳白色粘質土が部分的に薄く堆積する等、それぞれ分層できる。また、11層最下位の乳白色粘質土が、第5面の水田面を覆っている。この第5面の水田面が12層上面であり、12層が水田耕作土（暗灰色粘質土）となる。続いて、明灰色土の13層を堆積させた下層に、暗灰色粘質土の14層が堆積する。この14層上面が、本第6面の水田面であり、14層が水田耕作土となる。12層の水田耕作土と14層の水田耕作土を比較すると、粘性の強い土質は同様であるが、12層の方がやや灰色系で土色に違いがみられ、混入物も12層の方が多い。さらに下層には、15層とした白色軽石を多量に含んだ明褐色砂質土の洪水層が堆積し、16層となる白色のAs-C軽石を層中に含むAs-C混土層が堆積する。

大溝

調査区の南側で検出された大溝は、本線C区およびD区取り付け道から続く大溝であり、大溝の東肩部が確認されている。このD区取り付け道から延びてきた大溝は、本調査区内で大きく西へ屈曲（蛇行）するようである。残念ではあるが、安全面より幅狭い本調査区内での掘削は行わなかった。第135図に示した西壁の土層断面では、大溝を覆うのがAs-B軽石層を多量に混在させる8層であり、大溝の開口部（肩部）は8層を覆土とする溝によって不明であるが、大溝の埋没時期はHr-FP泥流の堆積以降であることは先述した通りであろう。因みに、大溝内の堆積土は、Hr-FP粒を主に堆積しており、他の調査区の状況と同じである。

一方、C区およびD区取り付け道の調査では、この大溝の両側に土手状の高まりが確認されている。本調査区検出の大溝の東際にも、同様の高まりが存在するようである。このことは、明瞭な図示を提示できなかったが、西壁の土層断面および東壁土層断面より、水田面の位置が大溝付近で僅かに高位になっていることが確認されている。この状況は、上位の第5面水田でも同様であった。こうしたことから、大溝は水田と共に存在し、用水路として機能していたものと考えられる。



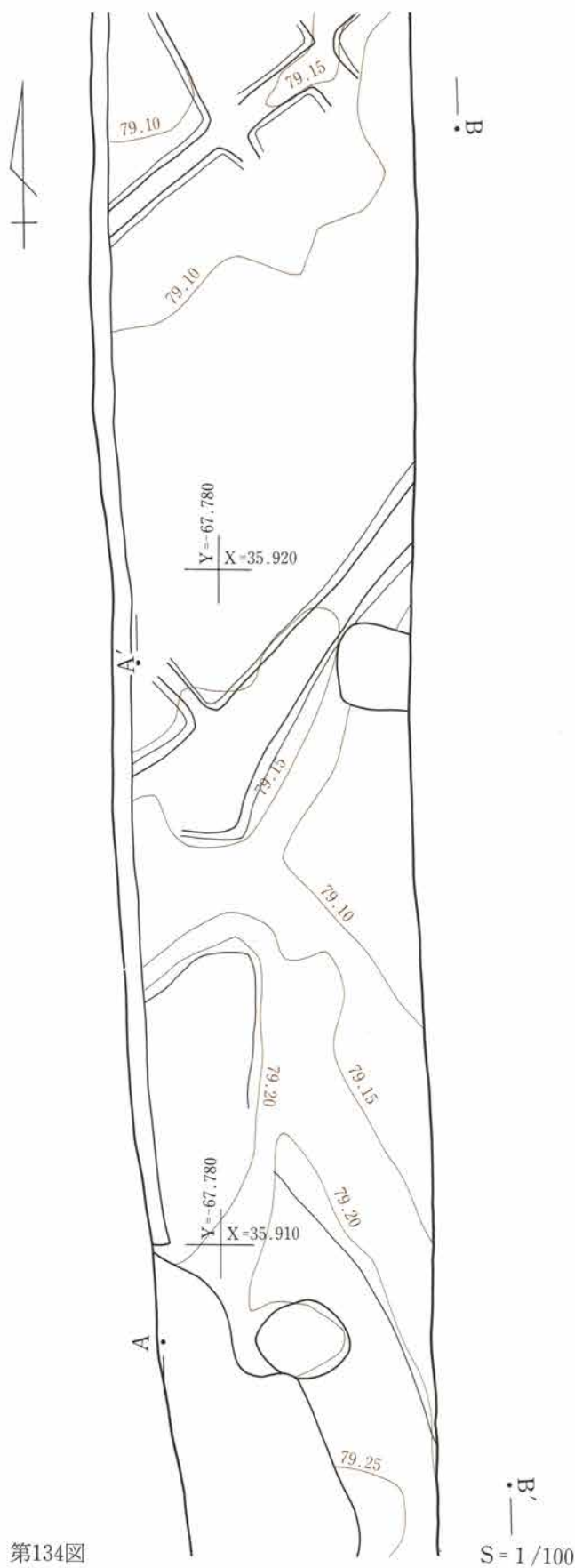
第133図 E区の遺構配置図(取り付け道)

S = 1/400

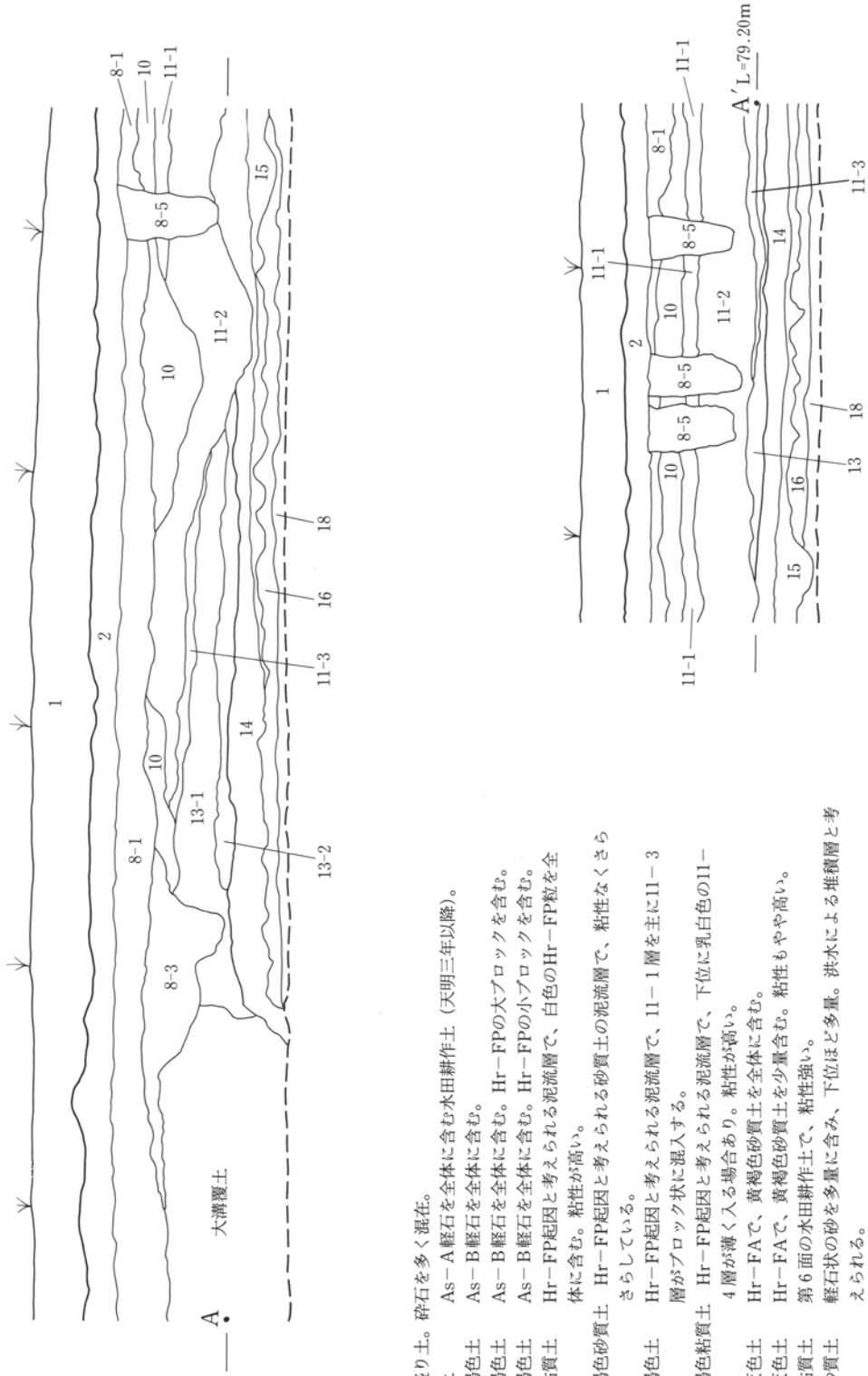
水田 (第134~138図)

大溝と微高地に挟まれた、調査区の中央部から水田が検出されている。全体に良好な状態とは言い難いが、明瞭な畦もあり、畦のあり方から極小区画水田であることが判断できる。この極小区画水田は、他の調査区と同様に、大畦によって大区画が区画されていたようである。大区画を区画する大畦は、大溝の北側の西壁際から北東方向へ延びるものと、さらに北側で西壁際から同一方向となる北東方向へ延びる大畦が検出されている。この北側の大畦については、第134図の上端および下端にみられる畦で、調査時の平面図作成段階では大畦としての認識をもたなかったが、両壁土層断面で大畦であったことが確認できた。また、先述の第5面で扱った1・2号溝の東壁土層断面(第138図)では、溝の南際が14層で厚く盛り上がっている状況が確認できる。水田面との比高差は、20cm前後を測る。この盛り上がり部の手前で、水田面を覆う13層の堆積が止まる等、水田範囲をも窺わせており、盛り上がり部・溝が微高地との境を画していた可能性が高い。しかも、盛り上がり部は、西壁の土層断面でも確認されており、大畦状の土手として考えられる。因みに、この部分の水田と微高地との境としている状況は、第5面の水田範囲の状況と同じであり、第5面で扱った1・2号溝が本水田面の時期にも機能していたことが予測される。

大畦等で区画された大区画内の小区画水田は、調査区中央で比較的顕著に検出できた部分(第137図)で、東西方向に長軸をもつ極小区画水田であり、3.3m×1.2m前後を測る。この位置での東壁土層断面(第138図)をみると、本水田面とな



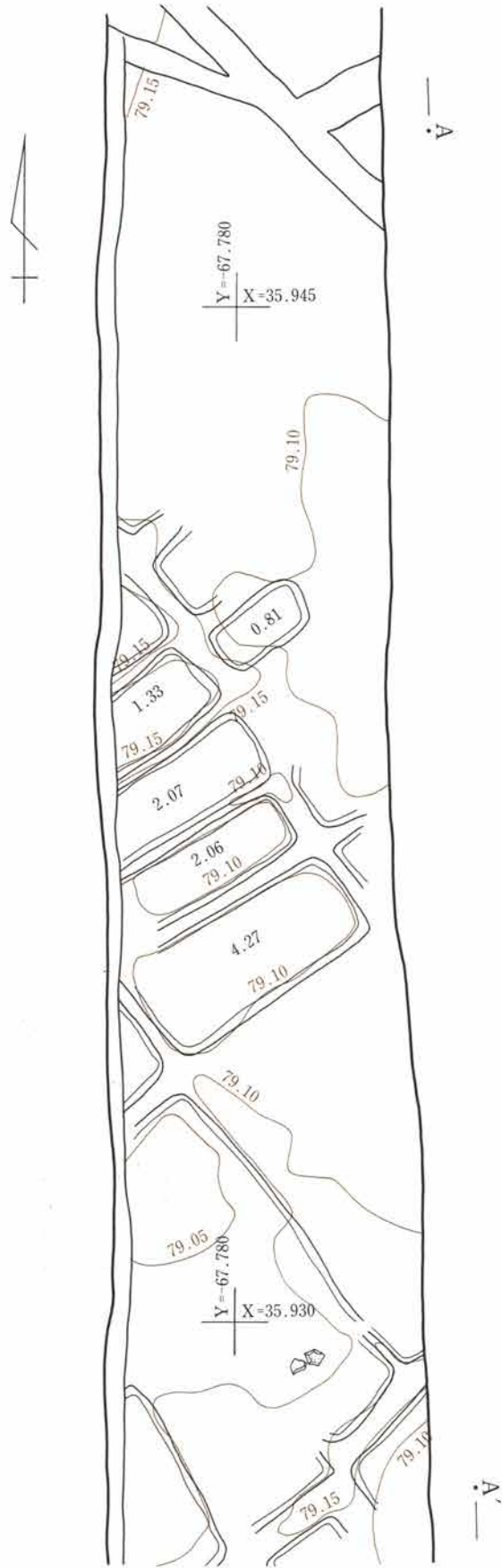
第134図 E区取り付け道 検出された極小区画水田(南側)



- 1層 近年の盛り土。碎石を多く混在。
- 2層 黒褐色土 As-A軽石を全体に含む水田耕作土（天明三年以降）。
- 8-1層 暗褐色土 As-B軽石を全体に含む。
- 8-3層 明褐色土 As-B軽石を全体に含む。Hr-FPの大ブロックを含む。
- 8-5層 暗褐色土 As-B軽石を全体に含む。Hr-FPの小ブロックを含む。
- 10層 黄褐色粘質土 Hr-FP起因と考えられる泥流層で、白色のHr-FP粒を全体に含む。粘性が高い。
- 11-1層 黄褐色砂質土 Hr-FP起因と考えられる砂質土の泥流層で、粘性なくさらさらしている。
- 11-2層 黄褐色土 Hr-FP起因と考えられる泥流層で、11-1層を主に11-3層がブロック状に混入する。
- 11-3層 黄褐色粘質土 Hr-FP起因と考えられる泥流層で、下に乳白色の11-4層が薄く入る場合あり。粘性が高い。
- 13-1層 明灰色土 Hr-FAで、黄褐色砂質土を全体に含む。
- 13-2層 明灰色土 Hr-FAで、黄褐色砂質土を少量含む。粘性もやや高い。
- 14層 暗灰色粘質土 第6面の水田耕作土で、粘性強い。
- 15層 明褐色砂質土 軽石状の砂を多量に含み、下位ほど多量。洪水による堆積層と考えられる。
- 16層 黒色粘質土 層の上面が第7面の遺構確認面となる。白色のAs-C軽石を多量に混在させ、粘性が高い。
- 18層 灰色粘質土 基盤のシルト層であり、部分的に鉄分の沈着が見られる。

第135図 E区取り付け道 西壁土層断面(南側)

る14層上面での小・大畦の凹凸と、13層を挟んだ12層上面の第5面水田面の凹凸とは、明らかに異なることが検証されよう。また、平面図を比較しても、小区画の区画形状が異なることも確認できる。さらに、調査区の南側となる大溝の東側にも水田が存在したようである。東壁の土層断面で見ると、大溝の北側から延びる大畦を境に、中央部の水田面よりやや高位に水田面が存在する。しかし、平面的な小畦の検出はできていない。大畦脇の水田面が、他の大区画水田面よりも高位に存在することは既に確認されてきたことであり、本調査区でも同様であると考えたい。



第137図 E区取り付け道 検出された極小区画水田(北側)

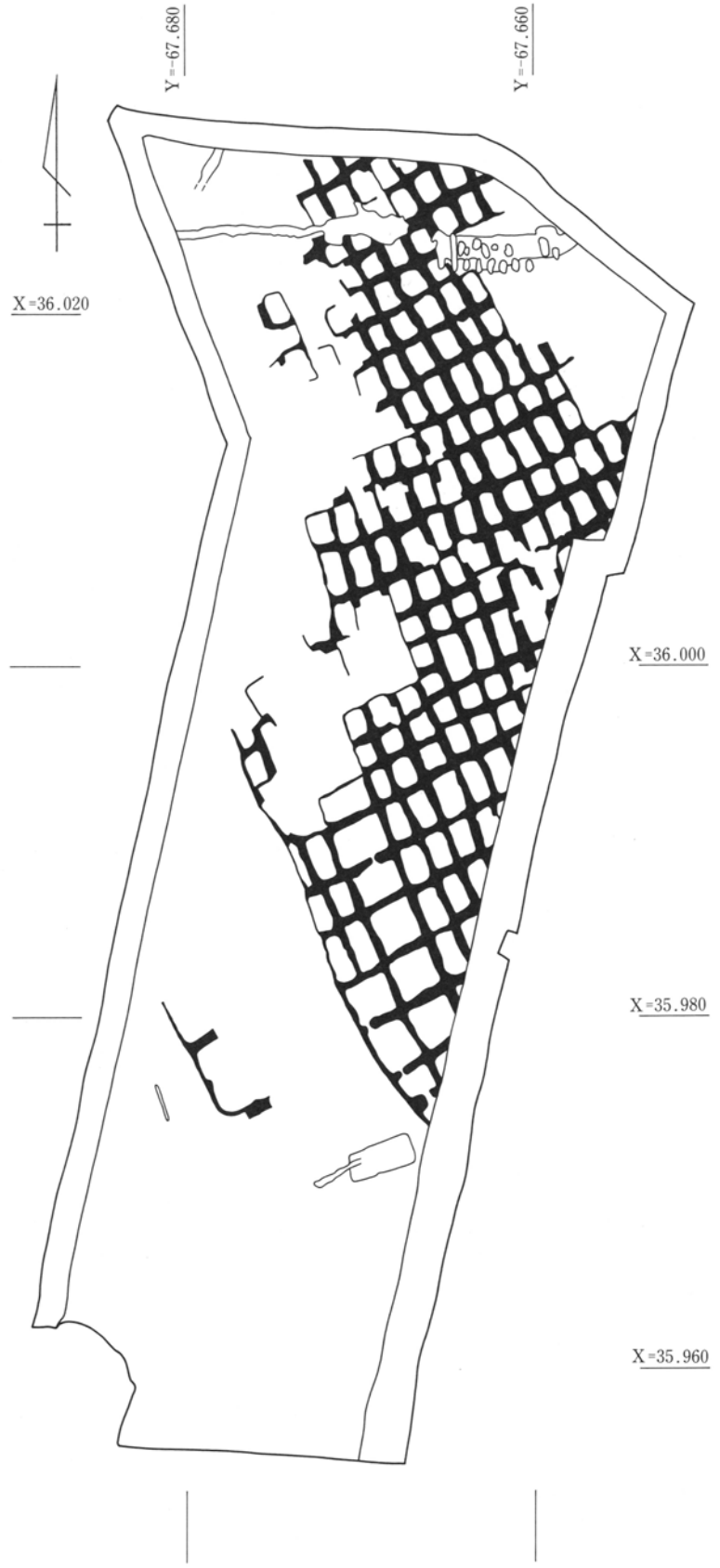
S=1/100

F区

F区で検出された遺構は、調査区の南側を除く、全体に広がる水田である。

調査区内の地形の状況は、調査区の南側が微高地となり、南端の微高地上の標高値は78.85mを測る。微高地に関わるように、調査区の西側が高く、調査区中央東側方向へ微傾斜する。この微高地は、南隣のE区から跨ることが確認されており、東隣の北関調査分でもその続きが検出されている。しかし、本調査区の西側に位置するE・F区取り付け道に跨る微高地とは、異なる独立した微高地と考えられる。微高地上での遺構の存在はなかったが、北関調査分の微高地上からは古墳時代後期の住居跡が検出されている。

検出された水田は、総じて極小区画水田である。他の調査区で検出された大畦は検出されておらず、よって大区画の区画は不明である。水田の残存状況は比較的悪く、その広がる範囲は、中央から北側にかけてである。また、微高地と水田の境が明瞭ではなく、標高値的には78.70mを境とした以下に水田が検出されている。この状況は北関調査分でも同様で、微高地の北側は不明瞭な水田地となっている。西側の取り付け道部分での微高地と水田のあり方のほうが、本調査区の状況よりも良好であると言える。(第139図)



第139図 F区の遺構配置図(本線)

水田

先述したように、検出された水田は微高地を除く、調査区の中央から北側にかけて広がっている。所謂極小区画水田であるが、大畦による大区画は不明。水田の残存状況は比較的悪く、低い小畦による極小区画が連続する。残存状況が悪いためか、所々で極小区画が不明となる箇所がある。南側の微高地に寄った当たりにも小区画の痕跡がみられ、標高的には高い位置に存在し、78.70mを測る。極小区画が連続する南端は、微高地の延びる方向に沿うように、南東方向に小区画の際がある。また、調査区の北西角のあたりは、標高78.75mを測り、小区画の痕跡は検出されていないことから、微高地となる可能性もある。

検出された極小区画水田は、東南方向に長軸をもつ区画であり、173枚を数える。一枚当たりの規模は、2m×1.2m前後を測り、平均面積は2.4㎡ほどとなっている。南側の微高地に近い部分では、2.5m×2.5mといった、他の区画の2倍近くに達する区画もある。

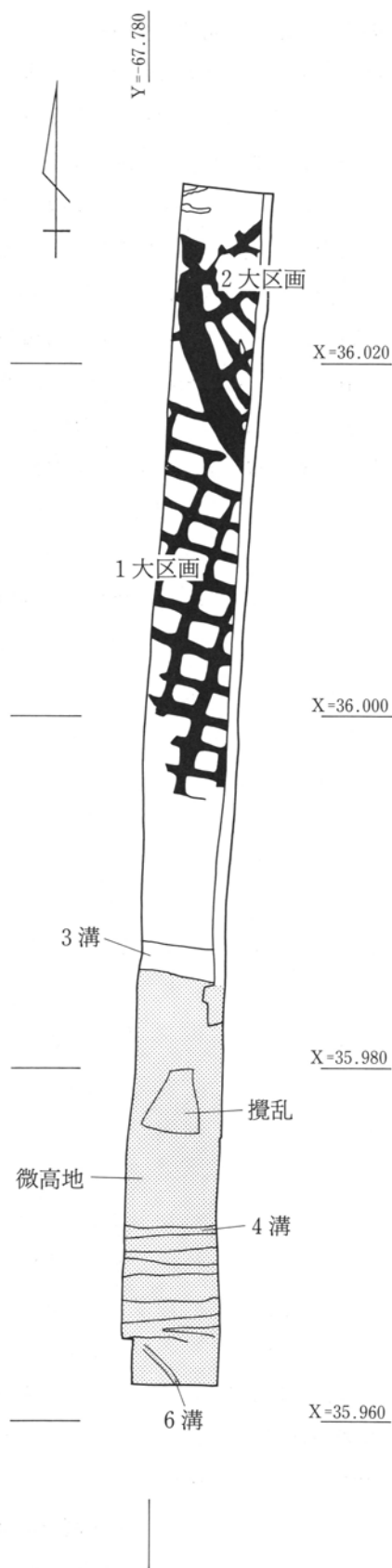
F区取り付け道

F区取り付け道で検出された遺構は、畦畔を伴う水田を主とする。調査区内の地形の状況は、調査区の南側が微高地となり、その北側の低地部では全体的に南東方向へ微傾斜する。この微高地は、南隣のE区取り付け道にも続いている。本調査区の東側に位置するE・F区および北関調査分に跨る微高地とは、異なる微高地と考えられる。微高地上での遺構は、検出できなかった。

水田は微高地の北側に広がり、大畦によって大区画が区画され、大区画単位に極小区画水田が形成されている。極小区画水田の残存状態は、先のE区取り付け道やF区に比較すると良好と言える。(第140図)

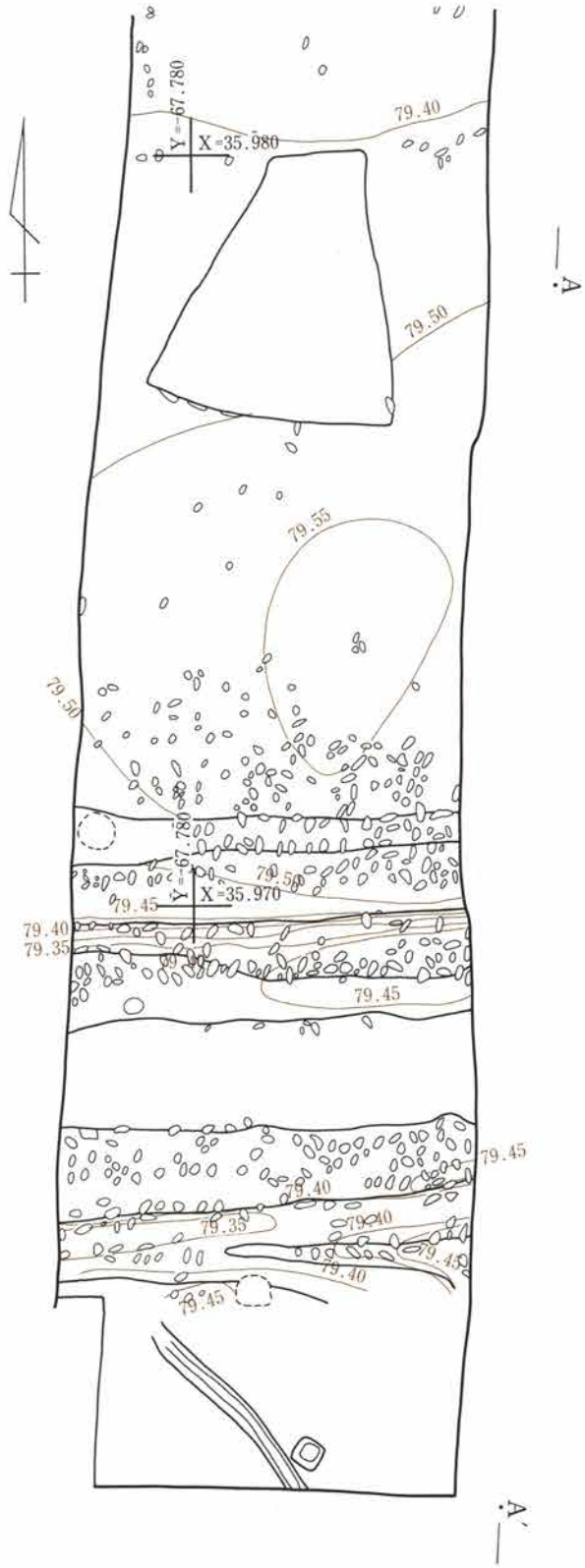
ここで、調査区東壁の土層堆積の状況を確認しておきたい(第144・145図参照)。

1層となる表土層下には、2層の灰色土、3層の暗灰色粘質土が堆積し、3層の下層には3層に伴うであろう酸化層が堆積する。2層はAs-A軽石を多量に含み、その下部には純層に近いAs-A軽石が薄く堆積しており、その下面に第1面で扱った耕作痕が検出されている。3層にはAs-B軽石が少量含まれ、中世から天明三年以前の水田であったと考えられる。この2・3層は、調査区



第140図
F区の遺構配置図(取り付け道)

の中央付近から北側に堆積しており、微高地上付近では認められない。調査区全体に堆積する4層もAs-B軽石を少量含む粘質土であり、水田耕作土の可能性がある。続く5・6層はAs-B軽石を多量に含み、微高地上の位置に検出された溝の覆土ともなっている。7層はAs-B軽石の純層となるが、その堆積は調査区の中央付近から北側に顕著である。その下層となる8層上面が第3面のAs-B軽石下水田面であり、8層が水田耕作土(黒褐色粘質土)となる。9・10層は、Hr-FP起因による泥流層であり、共にHr-FP粒を含むが土色・土質等から分層できる。続く下層の11層は、Hr-FA起因の洪水層となるが、先述のD区取り付け道等にみられた複数層からなるユニット層は確認できなかった。この11層が第6面水田を覆う層となるが、水田区画の明瞭な北側では厚く堆積しているものの、中央部付近では薄くなり、それ以南では堆積が認められない。下層となる12層上面が本第6面水田面であり、12層が水田耕作土(黒褐色粘質土)となる。この12層の堆積状況も、先の11層と同様に中央部付近で薄くなり、それ以南では堆積が認められない(第144・145図)。11・12層が堆積しない辺りから南側には、13層の明褐色砂質土が堆積し、12層の水田面より僅かに1段高くなり微高地へと続いていく。この段差が、水田域の境を成す部分と考えられよう。微高地上では、8層や9層のHr-FP泥流層を堆積させるが、頂部は中世以降の遺構等のため8・9層も認められない。これらの土層下には、14層となる白色のAs-C軽石を含む黒色粘質土(As-C混土層)が堆積する。15層はAs-C軽石を含まない黒色粘質



第141図 F区取り付け道 微高地上

土で、微高地部のみの堆積である。

水田 (第141～145図)

検出された水田は、微高地の北側となる調査区の北半に広がっている。所謂極小区画水田であるが、大畦によって大区画が区画され、大区画単位に極小区画水田が形成されている。便宜上、この大区画を、南側から1・2大区画とした。

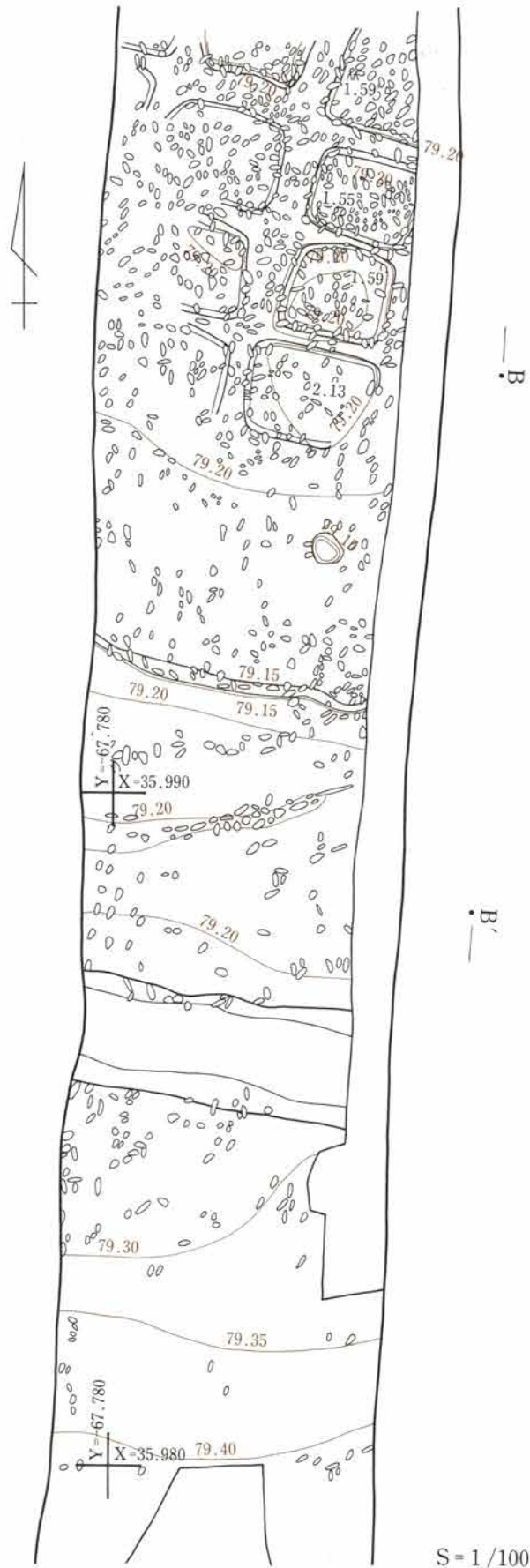
以下、各大区画ごとに説明を加える。

1 大区画

調査区の中央から北側にかけて位置する。本大区画の南側は微高地となり、北側は2大区画と接する。2大区画とは、北西隅から東側へ湾曲するように延びる大畦によって区画を画している。大区画の南端となる微高地との境には、明瞭な区画境は検出されていないが、先述の東壁土層断面から水田耕作土である12層の堆積が認められない辺りが境になると考えられる。大区画内を細かく区画する小畦の残存状況は、12層の水田耕作土および11層が薄くなる南側ほど悪く、北側の大畦寄りが比較的に良い。全体的には、やや低めの小畦である。東南東方向に長軸をもつ極小区画水田が連なり、調査区内では35枚の極小区画水田を数える。一枚当たりの規模は、2m×1.2m前後を測り、平均面積は2.3㎡ほどとなっている。また、人の足跡と認定し難いが、水田面には多くの凹凸がみられる。

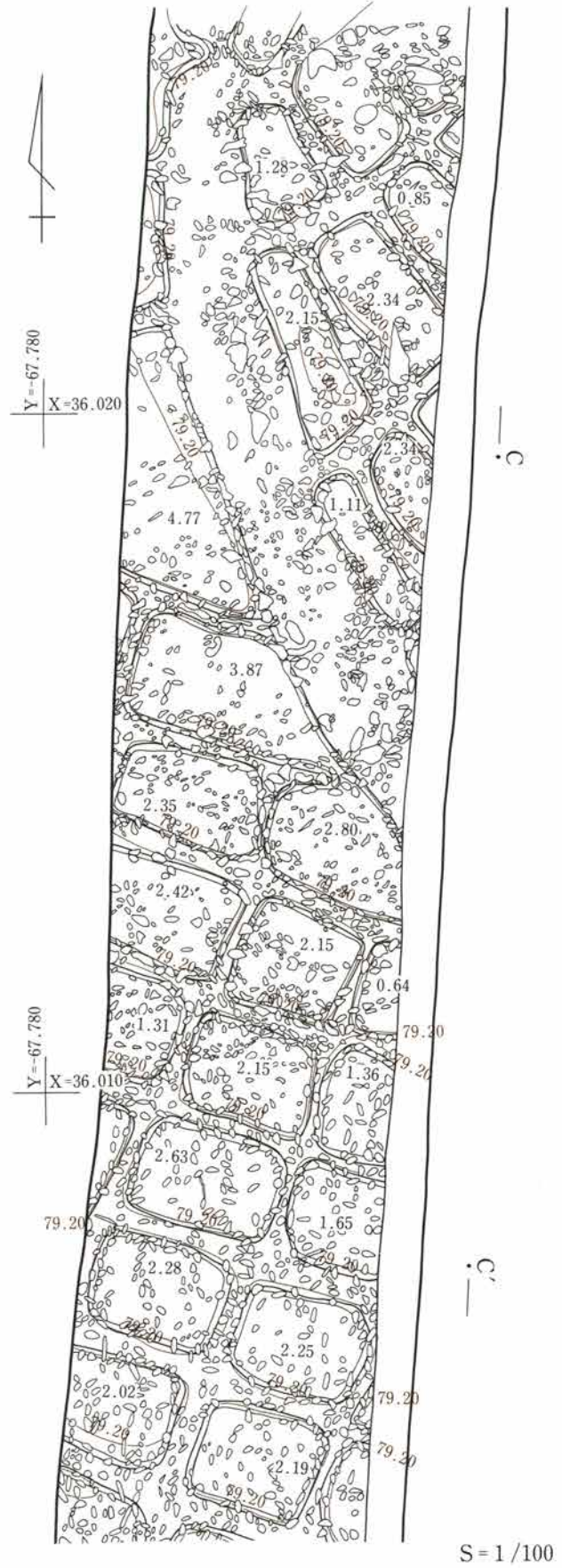
2 大区画

調査区の北端で、東側に位置する。本大区画は、調査区の北西隅から東側へ湾曲するように延びる大畦によって、1大区画との区画を画している。大区画内を細かく区画する小畦の残存状況は、比較

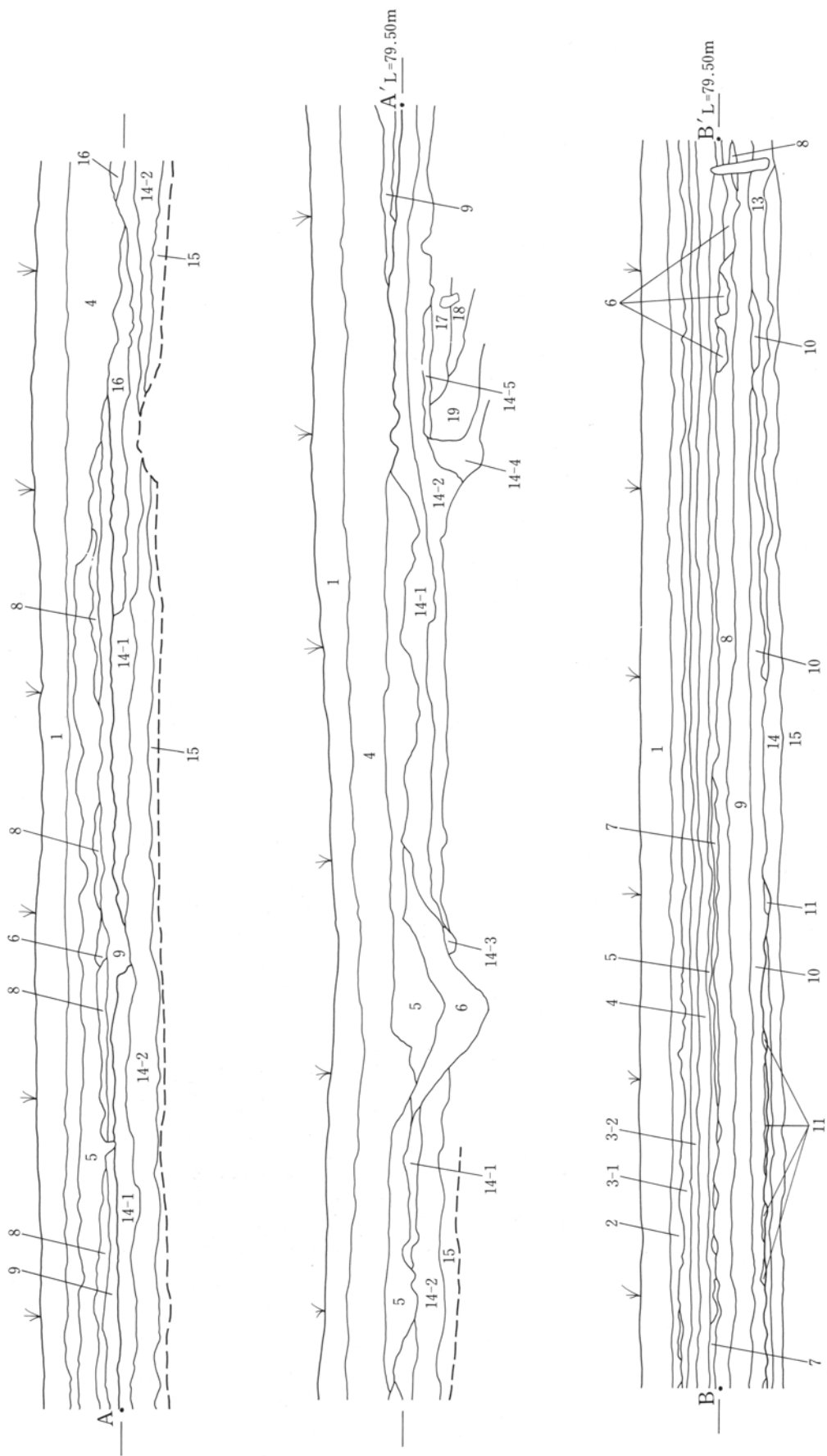


第142図 F区取り付け道 微高地際の水田

的に良い。南南東方向に長軸をもつ極小区画水田が連なり、調査区内では15枚の極小区画水田を数えるのみで、調査面積が狭い。一枚当たりの規模は、2.5m×1m前後を測る。1大区画と比較すると、小区画の方向が異なる。また、人の足跡と認定し難いが、水田面には多くの凹凸がみられる。



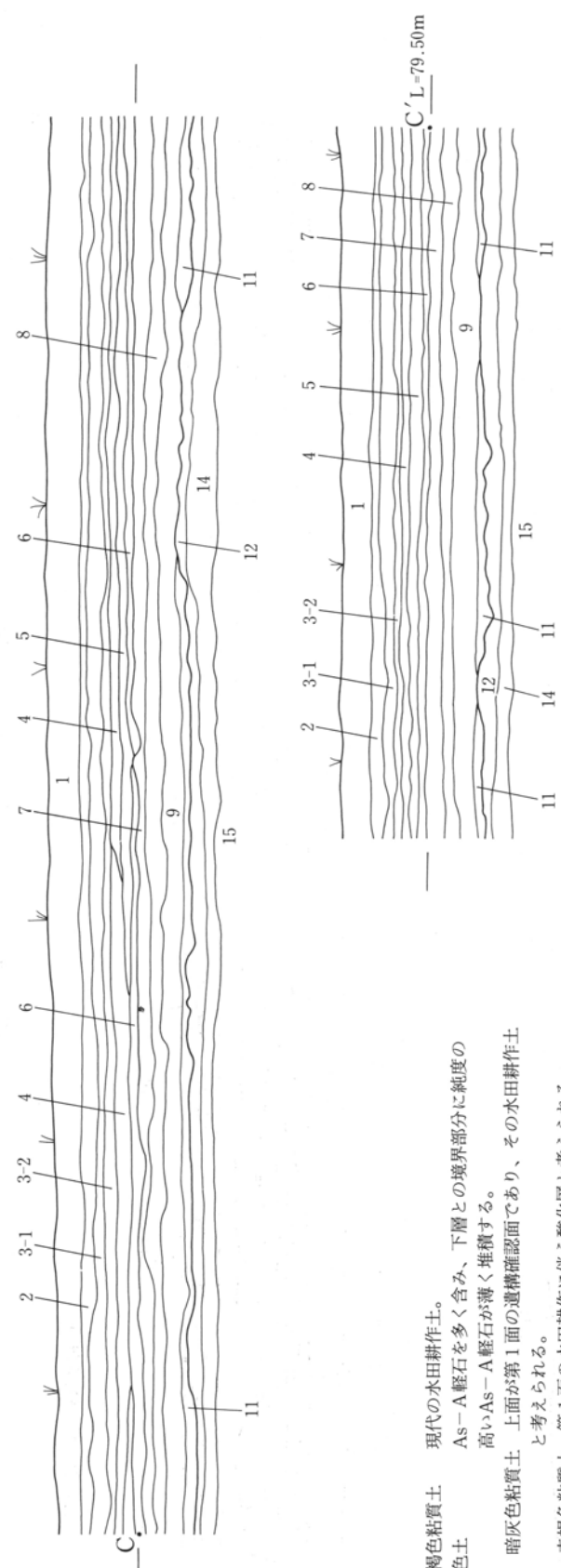
第143図 F区取り付け道 大区画と極小区画水田



※ 土層説明は、第145図参照。

第144図 F区取り付け道 東壁土層断面

S=1/40



- 1層 黒褐色粘質土 現代の水田耕作土。
- 2層 灰色土 As-A 軽石を多く含む、下層との境界部分に純度の高いAs-A 軽石が薄く堆積する。
- 3-1層 暗灰色粘質土 上面が第1面の遺構確認面であり、その水田耕作土と考えられる。
- 3-2層 赤褐色粘質土 第1面の水田耕作に伴う酸化層と考えられる。
- 4層 暗褐色土 As-B を全体に少量に含む。やや粘性あり。やや明るい4-1層とに分層できると考えられる。
- 5層 暗褐色土 As-B を4層より多く含む。
- 6層 黒褐色土 As-B を全体に多量に含む。溝等の覆土となる。
- 7層 明灰色軽石層 As-B 軽石の純層である。
- 8層 黒褐色粘質土 第3面の水田耕作土で、粘性が高い。
- 9層 暗灰色粘質土 Hr-FP起因と考えられる泥流層で、白色のHr-FP粒を含む。部分的に鉄分が沈着し、粘性が高い。
- 10層 黄灰色粘質土 Hr-FP起因と考えられる泥流層で、白色のHr-FP粒を僅かに含む。
- 11層 黄褐色土 Hr-FA起因の泥流層とも考えられ、粒子が細かく粘質気味。
- 12層 黒褐色粘質土 第6面の水田耕作土で、As-C 軽石を少量含む。粘性が高い。
- 13層 明褐色粘質土 軽石状の砂を多量に含む、下位ほど多量。洪水による堆積層と考えられる。
- 14層 黒色粘質土 層の上面が第7面の遺構確認面となる。As-C 軽石混入で、粘性が高い。調査区の北側の水田下に堆積する。
- 14-1層 黒褐色土 As-C 軽石を全体に含む、古墳時代前期の土器片を多く包含する。微高地上に堆積する。
- 14-2層 黒褐色土 14-1層と同質であるが、As-C 軽石を含まない。微高地上に堆積する。
- 15層 灰色粘質土 基盤のシルト層であり、部分的に鉄分の沈着が見られる。

※ 14-3~5層・17~19層は、風倒木痕内の堆積土。

第145図 F区取り付け道 東壁土層断面

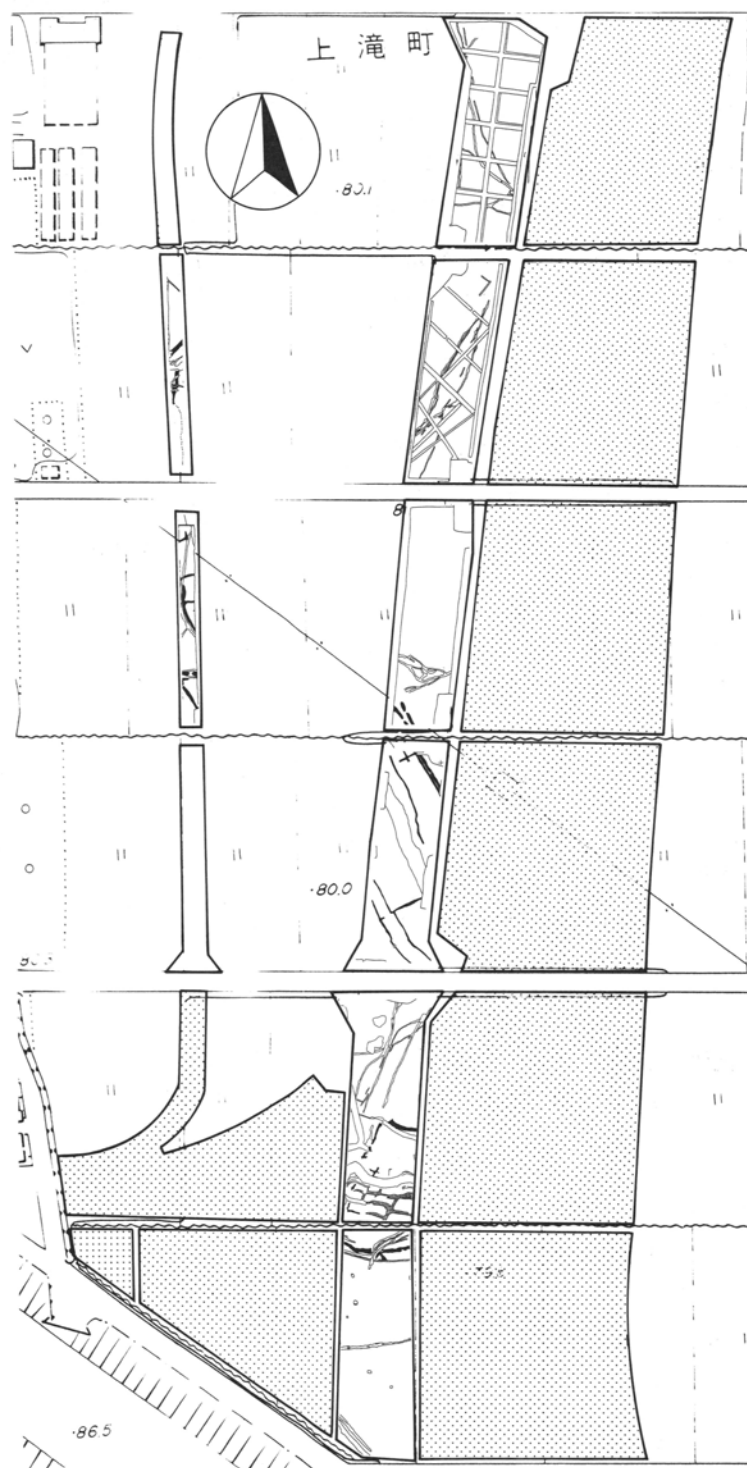
S = 1 / 40

第8節 第7面の遺構（古墳時代Ⅲ、As-C混土層上面）

第7面は、基本土層のXII層となるAs-C軽石を混在させる黒色粘質土（As-C混土層）上面を確認面とし、検出された遺構を扱った。このAs-C軽石は、浅間山を給源とする4世紀初頭の降下火山灰とされていることから、As-C混土層の形成時期は4世紀以降であることは明らかであるが、明確な時期は確定できていない。また、As-C混土層である基本土層XII層の上層には、洪水による堆積と考えられる粒子の粗い砂質土が、部分的に覆っていることが確認されている。先述した大溝の周辺部に堆積しているようで、やや高位の当たりには認められていない。さらに、As-C混土層である基本土層XII層自体も、高位に位置する部分では先述の第6面水田の耕作土として攪拌されることにより、土層の堆積が不明瞭ないし認められない状況もある。このため、C・F区取り付け道の調査区では、本面の遺構を検出できなかった。

本第7面から検出された遺構には、土坑、溝、水田がある。また、遺構とは異なるが、A区およびE区からF区にかけては微高地が存在する。しかし、微高地上での遺構の存在はない。水田は、第6面と同じ範囲に広がるようで、隣接の北関調査分でも同様である。水田を区画する大・小畦も検出されており、区画は第6面の極小区画よりはやや大きい小区画水田を成す。

以下、各区ごとに検出された遺構について説明する。



第146図 第7面の全体図

S = 1/2500

A区

A区で検出された遺構には、土坑5基、溝、畦畔を伴う水田がある。

調査区内の地形の状況は、南端が僅かに高い微高地となり、中央部西側でも周辺よりもやや高い微高地状となる。この微高地には、38号土坑が1基存在するが、他の土坑は低地部に検出されている。

水田遺構の残存状態は極めて悪いが、調査区の北側に水田に伴う東西方向の畦が検出されている。基本的には、微高地を避けた低地部に存在したものと考えられるが、不明な点も多い。(第147図)

土坑 (第148図)

38号土坑

位置 A区の中央より西側にあり、 $X=35.602$ 、 $Y=-67.744$ に位置する。

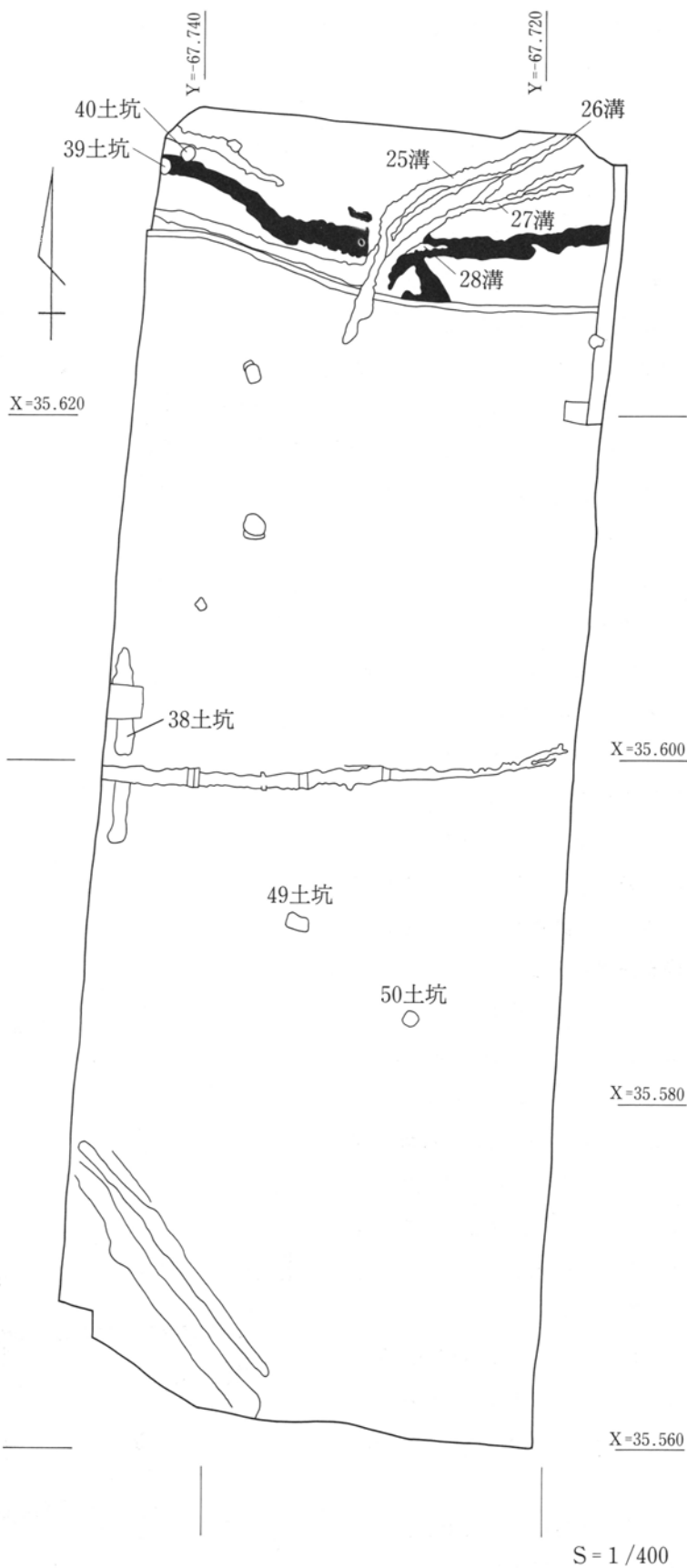
規模 長方形を呈し、長軸方向は南北にもち、長軸1.66m以上、短軸96cm、深さ20cmを測る。

概要 土坑の北側は調査できなかったが、中央西側の微高地にあたる。褐灰色土を覆土とし、遺物の出土はない。

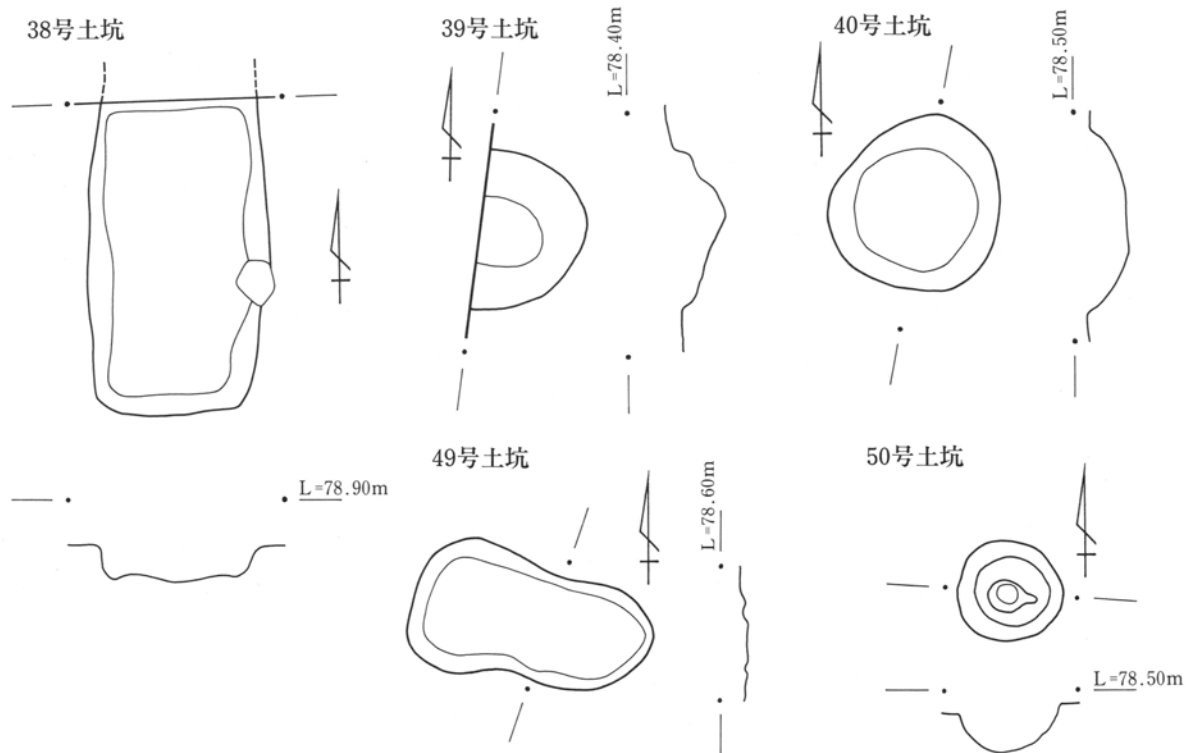
39号土坑

位置 A区の北側の西端にあり、 $X=35.634$ 、 $Y=-67.742$ に位置する。

規模 円形を呈するものと考えられ、径90cm前後、深さ



第147図 A区の遺構配置図(本線)



第148図 A区 土坑

S = 1/40

25cmほどを測る。

概要 土坑の西半分は、調査範囲外のため調査できなかった。Hr-FA下水田耕作土よりも下層で検出され、As-C軽石を含む黒色土を覆土とする。遺物の出土はない。

40号土坑 As-C混土

位置 A区の北側の西側にあり、X=35.635、Y=-67.740に位置する。

規模 円形を呈し、径90cm、深さ20cmを測る。

概要 褐灰色土を覆土とし、遺物の出土はない。

49号土坑 As-C混土

位置 A区のほぼ中央にあり、X=35.591、Y=-67.735に位置する。

規模 不整な楕円形を呈し、長軸方向は西北西にもち、長軸1.3m、短軸70cm、深さ5cmほどを測る。

概要 底面も平坦ではなく、土坑としがたい点もある。黒褐色土を覆土とし、遺物の出土はない。

50号土坑 As-C混土

位置 A区の中央より南側にあり、X=35.585、Y=-67.728に位置する。

規模 円形を呈し、径55cm、深さ22cmを測る。

概要 灰白色シルトブロックと黒色土との混土を覆土とし、遺物の出土はない。

溝

調査区の北側に、溝が集中して検出されている。この内の25・26・28号溝については、水田の畦を分断するように南側へ延びており、水田に関わる溝とは考え難い。

水田

残存状態が極めて悪く、不明な点が多い。明確な遺構としては、調査区の北側で東西方向に延びる畦が検出されただけである。この畦の状態は、潰れたような低い幅広な高まりで、蛇行するように延びる大畦となる可能性をもつ。小畦による小区画は検出されていないが、北側のB区南で検出された小区画と同じ大区画となる可能性が高い。

また、畦の西側では39・40号土坑と重複しており、その新旧関係は土坑の方が新しい。25・26・28号溝とも重複し、溝の方が新しいようである。

B区

B区で検出された遺構には、窪地状の落ち込み2基、溝、畦畔を伴う水田がある。調査区内の地形の状況は、先のA区でみられたような微高地はなく、第6面と同様に低地帯となる。全体的には、西側から東側への微傾斜となっている。

調査区の北半には窪地遺構（窪地状の落ち込み）2基と細い溝が集中し、南半には水田の畦および幅広の52号溝が蛇行するように検出されている。窪地遺構は、不整な形状で、擂鉢状の落ち込みを呈し、その性格等は不明である。この窪地遺構の付近には、北側から南西方向に延びる直線的あるいは曲線的な細い溝が多く検出されているが、調査区南半での水田遺構との関係については不明である。南半で検出された水田遺構は、残存状態はかなり悪いが、先のA区よりは良い。A区側となる調査区の南側ほど畦が検出されているが、かなり潰れたような、低く、幅広い畦の痕跡も確認できている。こうした畦のあり方からすれば、先述の第6面水田での極小区画水田の区画より、やや大きい小区画水田であることが想定できる。さらに、調査区南半の水田面には、多くの凹凸がみられる。（第149図）

窪地遺構（第150図）

1号窪地

位置 B区の北側中央にあり、 $X=35.705$ 、 $Y=-67.723$ に位置する。

規模 不整な楕円形を呈し、長軸方向を北東にもち、長軸4.5m、短軸3.0m、深さは最深部で8cmを測る。

概要 2号窪地の北側に所在し、底面は浅く擂鉢状となる。As-C軽石を含む灰褐色粘質土を覆土とし、遺物の出土はない。

2号窪地

位置 B区の北側中央にあり、 $X=35.697$ 、 $Y=-67.723$ に位置する。

規模 不整な楕円形を呈し、長軸方向を南北にもち、深さは最深部で35cmを測る。

概要 窪地の南側で53号溝と重複するが、覆土の差から本窪地が古い。形状から、長軸4.0m、短軸2.5mほどの二つの窪地が重複したとも考えられる。いずれも底面は擂鉢状となり、1号窪地と同様な形状を呈する。覆土も1号窪地と同様に、As-C軽石を含む灰褐色粘質土および灰褐色土を主体とし、自然堆積によるものと考えられる。遺物の出土はない。

溝 (第151・152図参照)

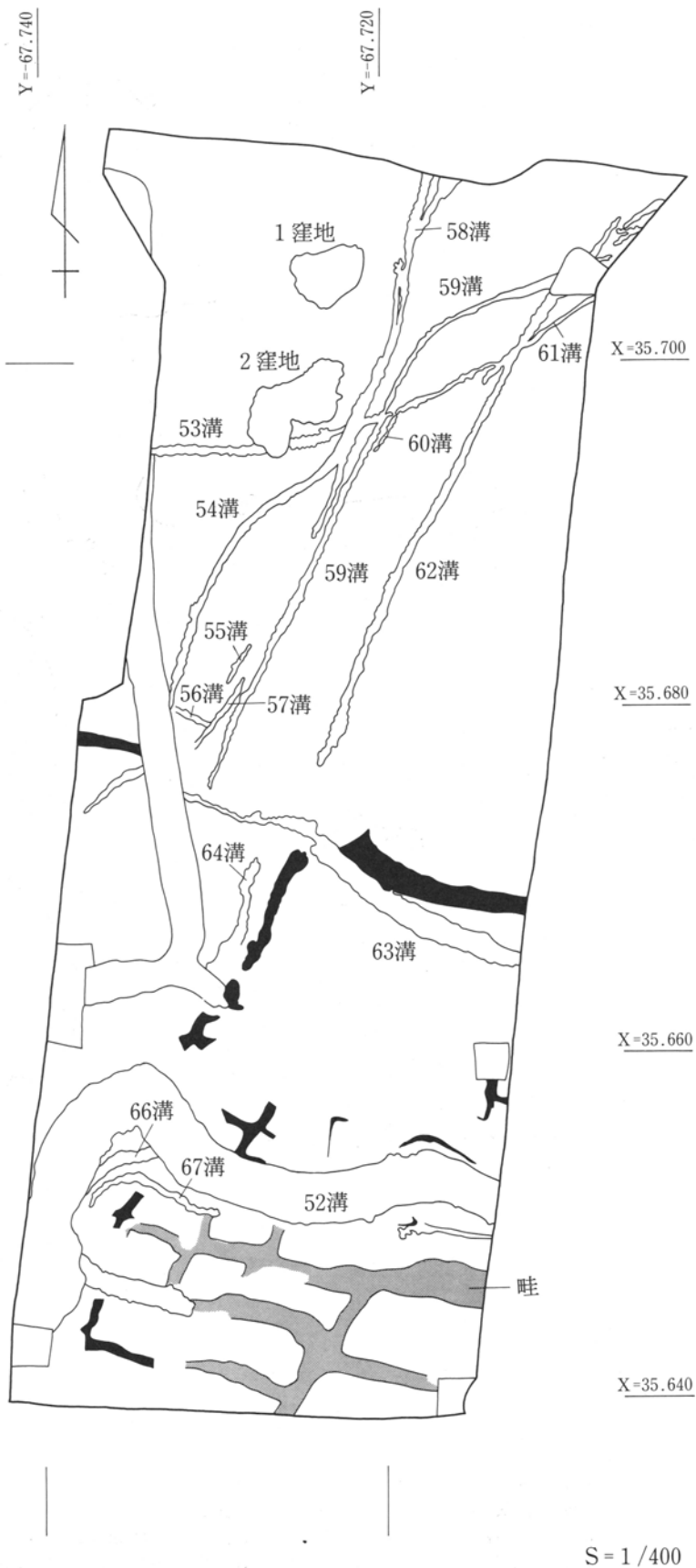
調査区の北半で検出された溝には、53～62号溝がある。これらの溝の内、53・56号溝を除く多くの溝は、北側から南西方向に延びる直線的あるいは曲線的な細い溝であり、南側の52号溝とは性格が異なる溝と考えられるが、その性格は不明である。調査区の中央付近を東西方向に延びる63号溝は、東隣の北関調査分でも検出されている溝であり、北側に位置する大畦と方向を共にするが、北関調査分の状況からは大畦に付随する溝とは考え難い。調査区南側での52号溝は、東西の北関調査分でも検出されている溝である。この52号溝は、幅2.5m、深さ60cmを測るが、先述の第6面では大畦に挟まれた水路として確認されていた経緯をもち、溝の変遷が辿れる。本調査区内の西側で大きく蛇行し、東側へ緩く蛇行するように延びる溝であり、自然流路的な感もある。流路方向は、西側から東側へとなる。時期的には、本面水田に伴うものと考えられる。

水田 (第151・152図)

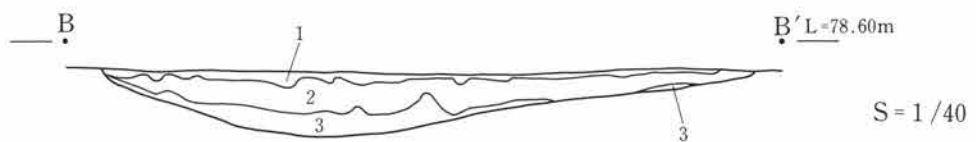
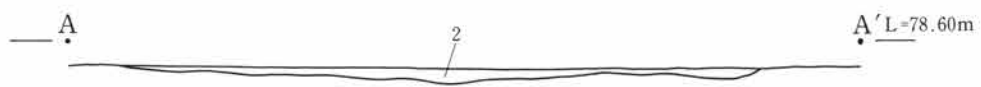
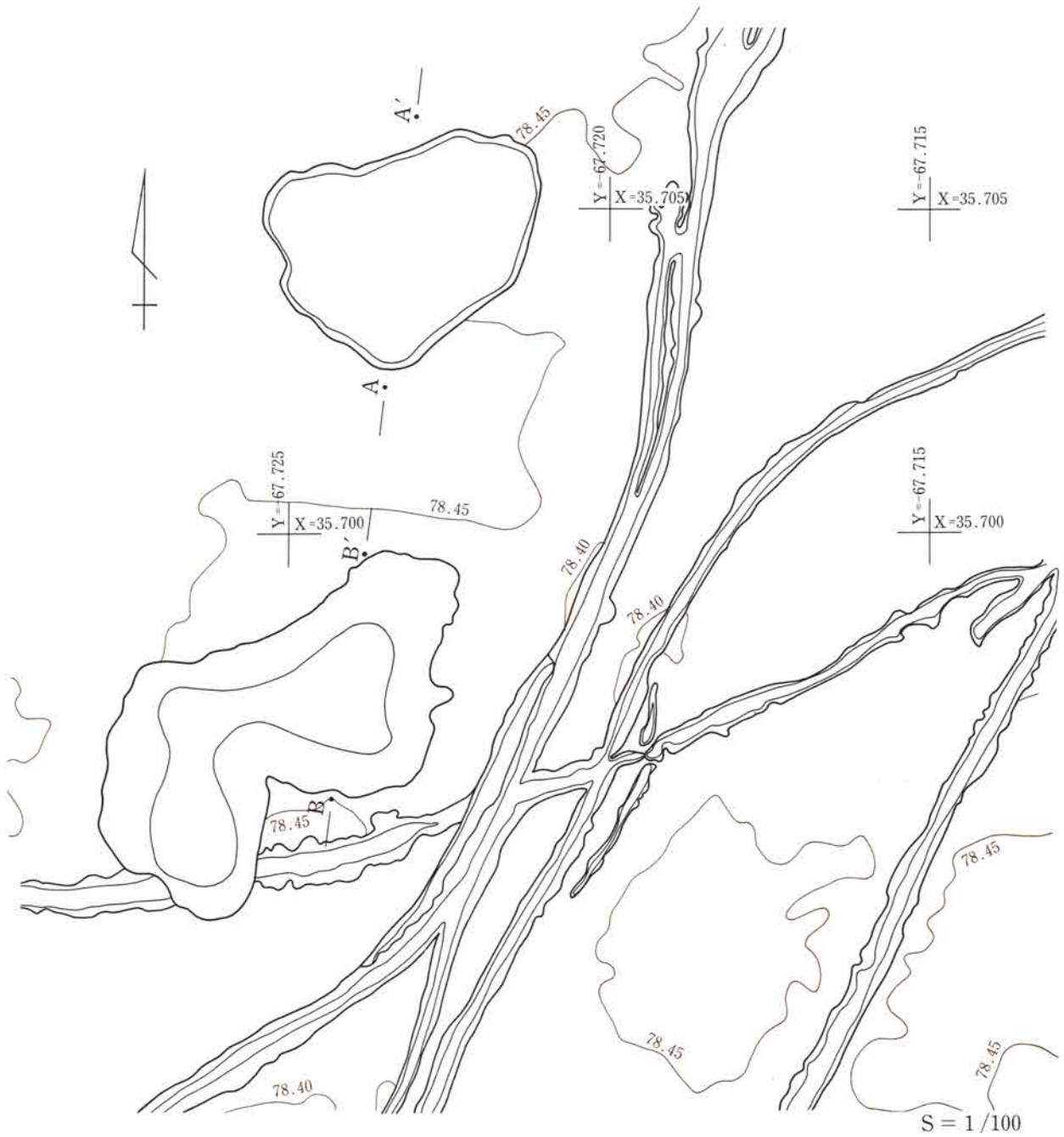
調査区の北半では、水田遺構の検出はできなかつた。検出できたのは、南半からである。

水田区画の状況は、大区画による区画内を小区画に区画する様子が窺える。

調査区の中央を、やや湾曲するように東西方向に延びる大畦と考えられる畦がある。幅広で、他の



第149図 B区の遺構配置図(本線)

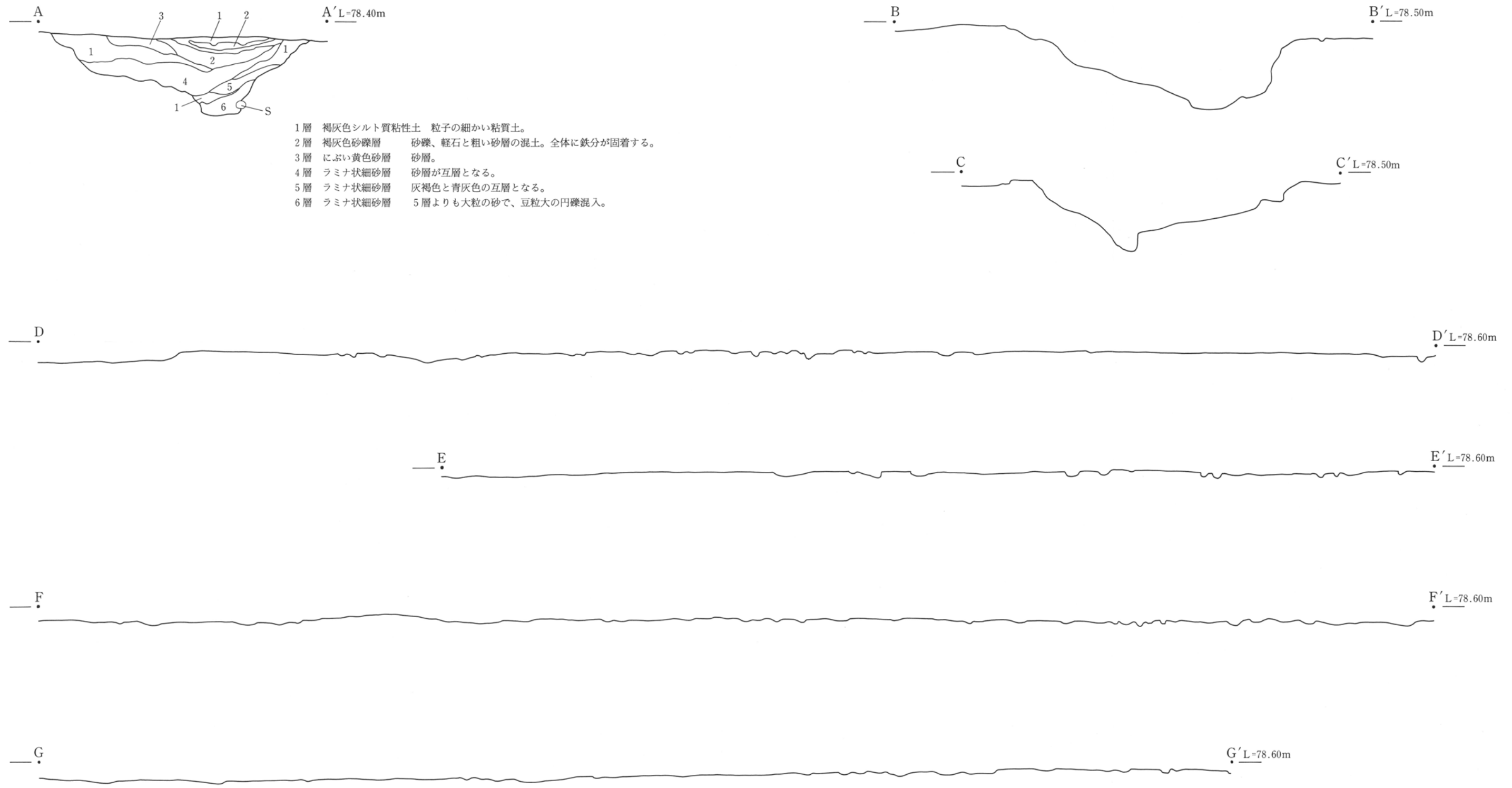


- | | |
|-----------|--|
| 1層 灰褐色粘質土 | As-C軽石混土であり、第7面の水田耕作土か。 |
| 2層 淡い灰褐色土 | As-C軽石をやや多く含む。 |
| 3層 灰褐色粘質土 | As-C軽石を微量に含む。上面に前橋泥流とみられる黄白色シルトブロックあり。 |
| 4層 軽石層 | As-C純層と考えられ、床面に鉄分のうすい凝集層あり。 |

第150図 B区 1・2号窪地遺構と土層断面



第151図 B区 52号溝と水田面

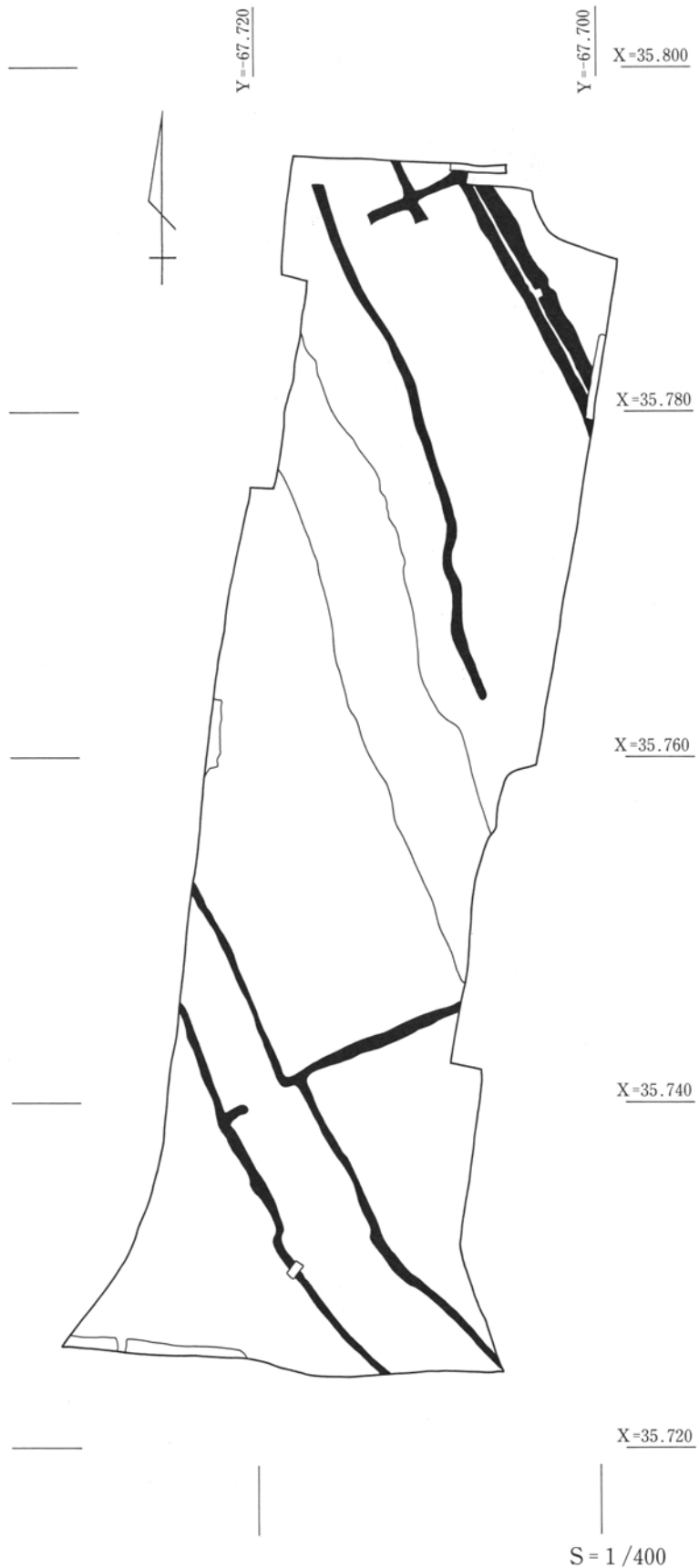


第152図 B区 52号溝土層断面と水田断面

畦よりも明瞭であり、東隣の北関調査分でも検出されている。この大畦の位置は、先述の第6面水田での2・3大区画と4大区画とを画した大畦とほぼ同じ位置に存在する。また、第6面での2大区画と3大区画とを画した位置にも、本面の畦が検出されている。さらに、52号溝と同じ位置では、第6面での1大区画と2・3大区画とを画する大畦には51号溝とした浅い溝を有することが確認されている。この52号溝の北側では、僅かに小区画を区画する小畦が検出されるにとどまり、52号溝の北際に畦が取り付くようである。また、52号溝の南側では、小区画を区画する小畦が検出されているものの、小畦の状態は悪く、潰れたような平坦な僅かな高まりとして検出された。しかしながら、この小畦の状態は、第6面での小畦の状態とは形状等においても大きく異なっており、擬似的な畦畔とは考え難く、本面に属する畦と認知した。

C区

C区で検出された遺構は、水田に伴う畦畔である。土坑等は検出されていない。調査区内の地形の状況は、全体的に北西側から南東側への微傾斜となっており、第6面と同様に低地帯となる。調査区内には、第6面で検出された大溝がそのまま存在するが、微地形的には大溝部分が周囲よりも低くな



第153図 C区の遺構配置図(本線)

る。

検出された水田遺構は、残存状態が比較的に良好であると言える。これは、先のA・B区とは異なり、本面の直上層に洪水による堆積と考えられる粒子の粗い砂質土が覆っていたことに起因している。このため、この洪水砂質土が堆積する下面は、明瞭に面が確定できるとともに、良好な検出面として遺構が存在している。結果、明瞭な小畦および大畦が検出されており、水田面には無数の凹凸が確認されている。畦のあり方は、先述の第6面水田での極小区画水田の区画より、やや大きい小区画水田である。(第153図)

なお、C区取り付け道では、本面に該当する遺構は検出されていない。

水田 (第154～158図)

調査区のほぼ全面に、水田が検出されている。本面の直上に堆積する洪水砂質土は、大溝際ほど厚く堆積し、調査区の南端西側ではかなり薄い堆積状況となる。同様に調査区の北東隅でも薄い堆積となる。

検出された畦畔は、調査区の北半となる大溝の北東側で、大畦と小畦が確認されている。この大畦は、調査区の北端中央から南東に伸びるもので、高さ15cmを測り、幅2mほどとかなり広い。大畦の上面は比較的平坦で、大畦の中央には細い溝を有する。この溝の覆土も砂質土であり、大畦に伴う溝と考えられる。また、この大畦の位置は、先の第6面での大畦の位置とほぼ同位置に当たり、その方向も同様である。北壁の土層断面で確認すると(第155図A-A')、3層が第6面水田の耕作土であり、3層の盛り上がり部が第6面水田の大畦である。この下層となる5層が本水田面に伴う大畦であり、第6面の大畦と異なることが理解できよう。この土層断面からすれば、新しい時期の水田区画にあっても、古い時期の大畦の位置をそのまま踏襲していることとなる。小畦は調査区の北西角から南東に伸び、その長さは約30m確認されている。また、調査区の北端付近でも、十字状に直交する小畦が検出されている。これらの大畦ないし小畦によって区画される小区画は、東西方向の間で2.5mほどの短いものと、4.5mほどのやや広い区画が見られるようである。

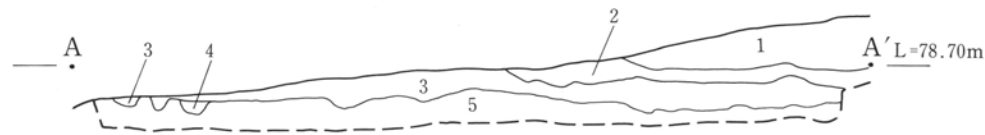
一方、大溝の南西側では、大畦は検出されなかったものの、併走して伸びる小畦が検出されている。併走する2本の小畦は、調査区の西側から南東に伸びて南端へ達する。この2本の小畦の間隔は、北側のやや狭い部分で3.3mを測り、南側のやや広い部分で5mを測る。この幅が、小区画の一边の間隔となるようである。また、併走する東側の小畦は、途中でクランク状に折れ、この部分に東へ伸びる小畦が取り付く。さらには、併走する西側の小畦から直交して伸びる小畦が僅かに検出されており、この部分に横畦が存在したことを窺わせる。このことからすれば、併走する西側の小畦にみられる僅かなクランク部も、横畦が存在した可能性が高く、一つの小区画の大きさが推測される。その小区画の規模は、4.5m×7mほどとなり、先の第6面での極小区画水田とは大きく異なる。

さらに、水田面の高低差をみると、大溝の南西側では西側がより高く、大溝に近接した東側の水田面ほど低くなっていることがわかる。同様に、大溝の北東側では、東側がより高く、大溝に近接する西側の水田面ほど低くなっている。このことは、第6面水田経営時の掘削と考えられる大溝位置が最も低い位置となることを示しており、その位置に何らかの流路を想定することも考えることもできる。

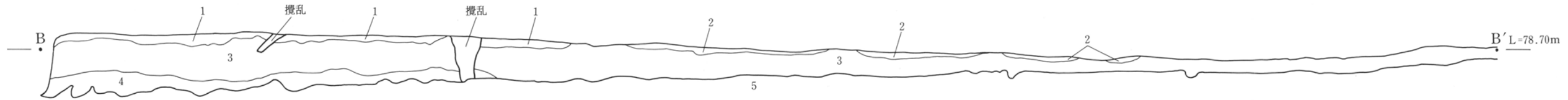
以上、本調査区での第7面水田について述べてきたが、水田の時期については不明な点が多く、その特定はし難い。しかし、第6面水田が6世紀初頭と考えるならば、本水田はそれ以前の5世紀頃の水田として考えておきたい。



第154図 C区 検出された畦と水田面(北側)



- | | | |
|----|--------|--|
| 1層 | 明灰色砂質土 | Hr-FP起因と考えられる砂質土の泥流層。 |
| 2層 | 黄褐色粘質土 | Hr-FA起因と考えられる粘質土。 |
| 3層 | 黒灰色粘質土 | 第6面の水田に関わる大畦であり、水田耕作土よりも黒い。As-Cテフラを微量含む。 |
| 4層 | 灰色砂質土 | 溝の覆土であり、細かい砂を主とした洪水層と思われる。下部は酸化している。 |
| 5層 | 黒褐色粘質土 | 層の上面が第7面の遺構確認面となる。第7面水田の大畦であり、白色のAs-C軽石を多く混在させる。 |



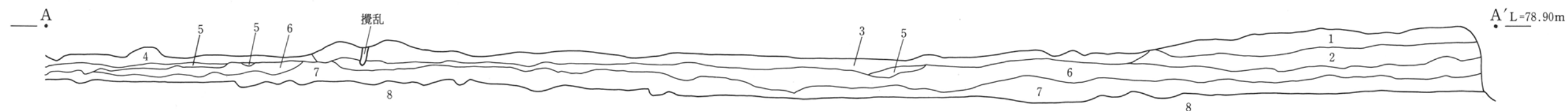
- | | | |
|----|--------|---|
| 1層 | 暗黄色砂質土 | Hr-FA起因と考えられる洪水堆積層で、酸化をうけている。また、炭化物もまばらに含む。 |
| 2層 | 灰白色土 | Hr-FA起因と考えられる洪水堆積層で、さらさらした感触がある。酸化をうけ、炭化物もまばらに含む。 |
| 3層 | 暗灰色粘質土 | 第6面の水田耕作土であり、東へいくにつれて層厚が薄くなり、大畦の付近では5層とみわけがつきにくくなる。 |
| 4層 | 暗黄色砂質土 | 洪水によるとみられる、かなり砂質の堆積層。全体に酸化をうける。 |
| 5層 | 黒色粘質土 | 層の上面が第7面の遺構確認面となる。白色のAs-C軽石を多量に混在させる。 |



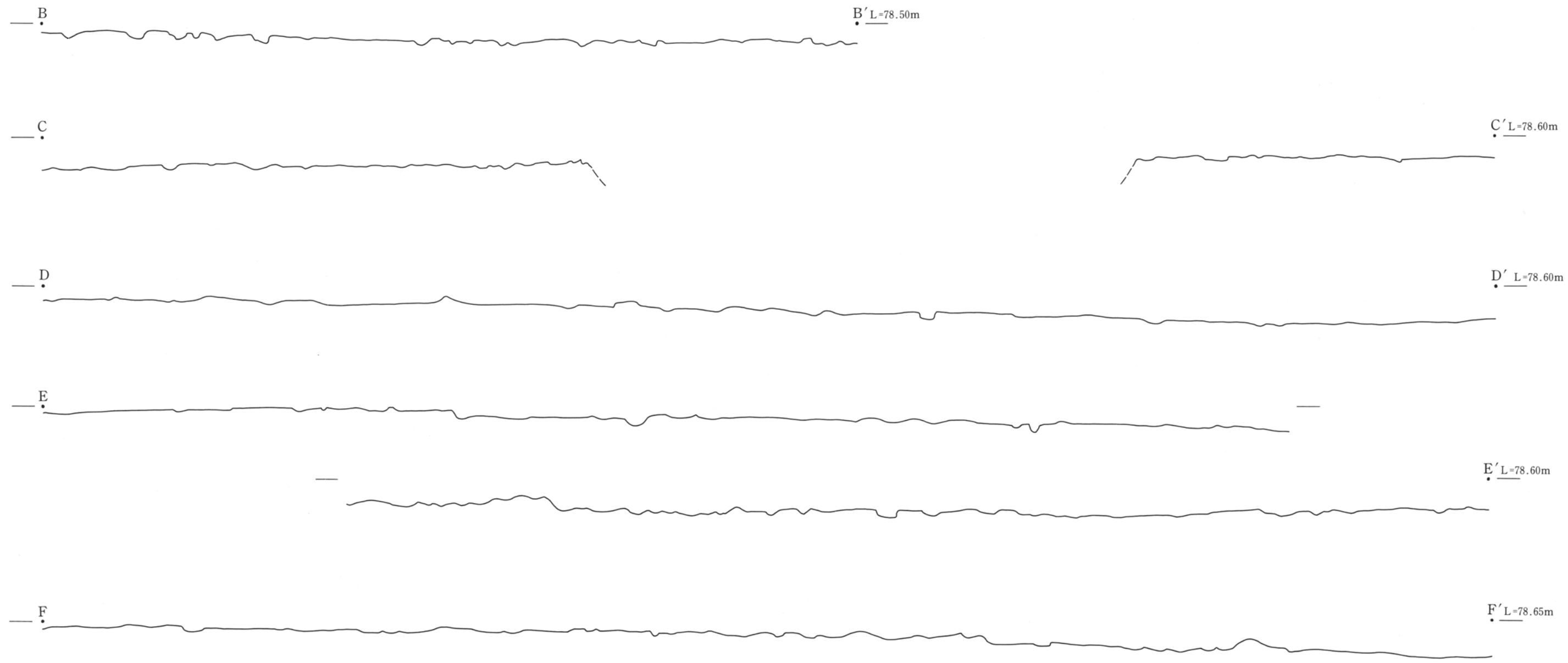
第155図 C区 土層断面と水田断面(北側)



第156図 C区 検出された畦と水田面(南側)

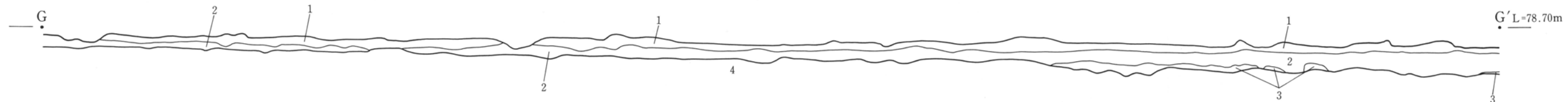


- | | | | |
|-----------|---|-----------|--|
| 1層 黒灰色粘質土 | 層の上面が第6面の遺構検出面で、大溝の西側土手の盛り土に当たる。3層に近いが、Hr-FA泥流土ブロックが含まれる。層全体にかなり酸化をうけている。 | 5層 暗黄色砂質土 | 洪水によるとみられる砂質な堆積層。層全体にまばらな酸化もみられる。 |
| 2層 暗灰色粘質土 | 1層と同様であるがやや明るく、Hr-FA泥流土の混入は見られない。層の酸化も顕著である。 | 6層 明灰色粘質土 | 砂質土を多く含み、灰色系のかなり強い粘質土。 |
| 3層 黒灰色粘質土 | 層の上面が第6面の遺構検出面で、水田耕作土である。1層と同様にHr-FAブロックを僅かに含む。 | 7層 暗黄色砂質土 | 軽石状の砂を多量に含み、黒色土をブロック状に含む。5層と同様な洪水層とみられる。 |
| 4層 黒灰色粘質土 | 層の上面が第6面の遺構検出面で、水田耕作土である。3層と同様であるが、泥流土の混入はみられない。 | 8層 黒色粘質土 | 層の上面が第7面の遺構確認面となる。白色のAs-C軽石を多量に混在させる。 |



S = 1 / 40

第157図 C区 土層断面と水田断面 (南側)



- 1層 暗灰色粘質土 層の上面が第6面の遺構検出面で、水田耕作土である。泥流土の混入はみられず、やや酸化をうけている。
- 2層 暗灰色粘質土 1層に近いが砂質で、西側ではAs-C粒子を少量含む。東側では3層の軽石状の砂を含む。
- 3層 暗黄色砂質土 洪水によると考えられる軽石状の砂を多量に含む堆積土。全体にやや酸化をうけている。
- 4層 黒色粘質土 層の上面が第7面の遺構確認面となる。白色のAs-C軽石を多量に混在させる。



第158図 C区 土層断面と水田断面(南側)

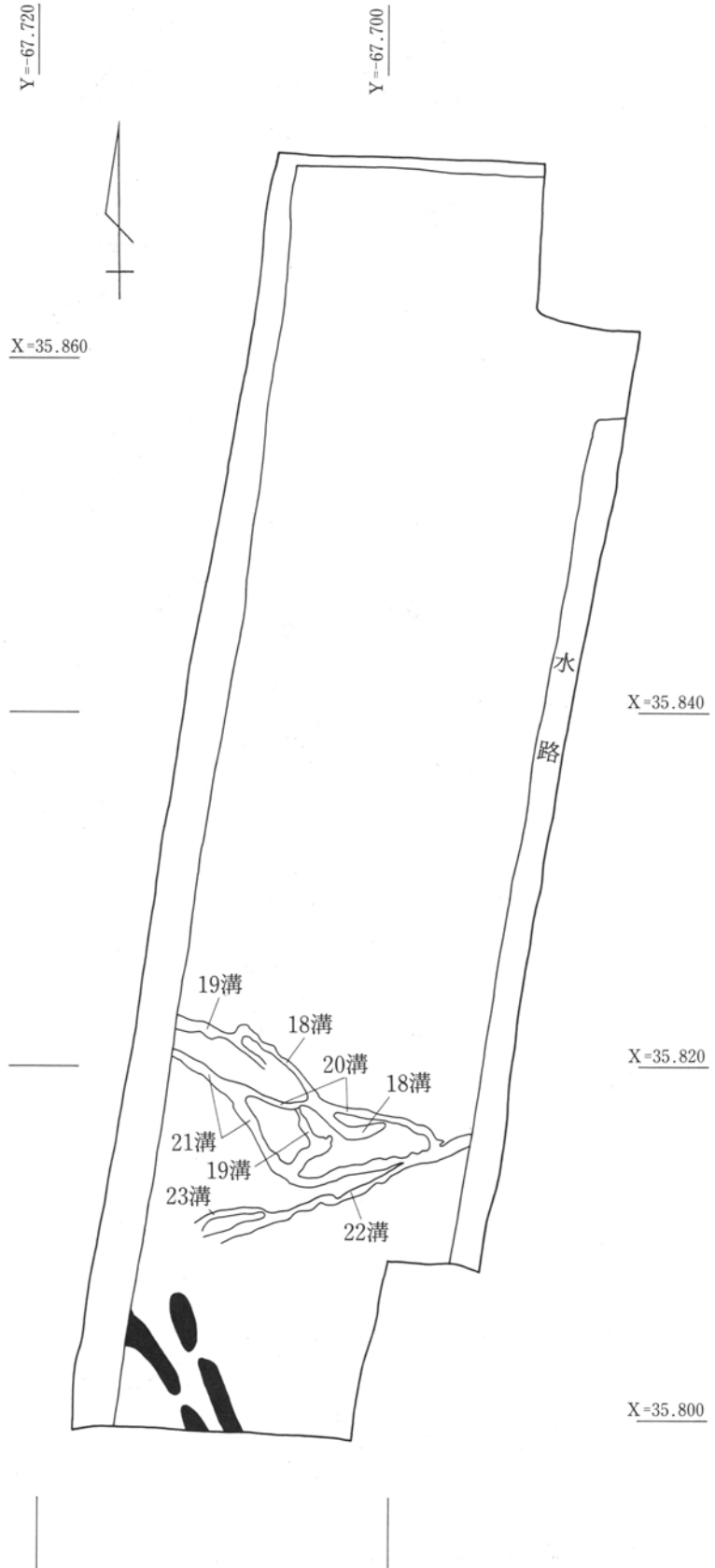
D区

D区で検出された遺構は、水田に伴う畦畔と、水田面に残る溝である。調査区内の地形の状況は、全体的に北西側から南東側への微傾斜となっており、第6面と同様に低地帯となる。また、調査区の北側ほど高位となっている。このため、明瞭な水田遺構が検出されたのは調査区の南側であり、中央から北半にかけての高位部分では第6面水田の耕作土として攪拌されることにより、土層の堆積が不明瞭となり、水田遺構を検出できなかった。

検出された水田遺構は、先述のC区から続く面であり、残存状態が比較的に良好であると言える。これは、C区と同様に、本面の直上層に洪水による粒子の粗い砂質土が堆積していたことに起因している。このため、明瞭に面が確定できるとともに、良好な検出面として遺構が存在している。結果、C区に続くであろう大畦が検出されており、水田面には無数の凹凸が確認されている。明瞭な小畦は検出できなかったが、大畦で区画された大区画内を、小畦で小区画に区画された水田が存在したものと考えられる。(第159図)

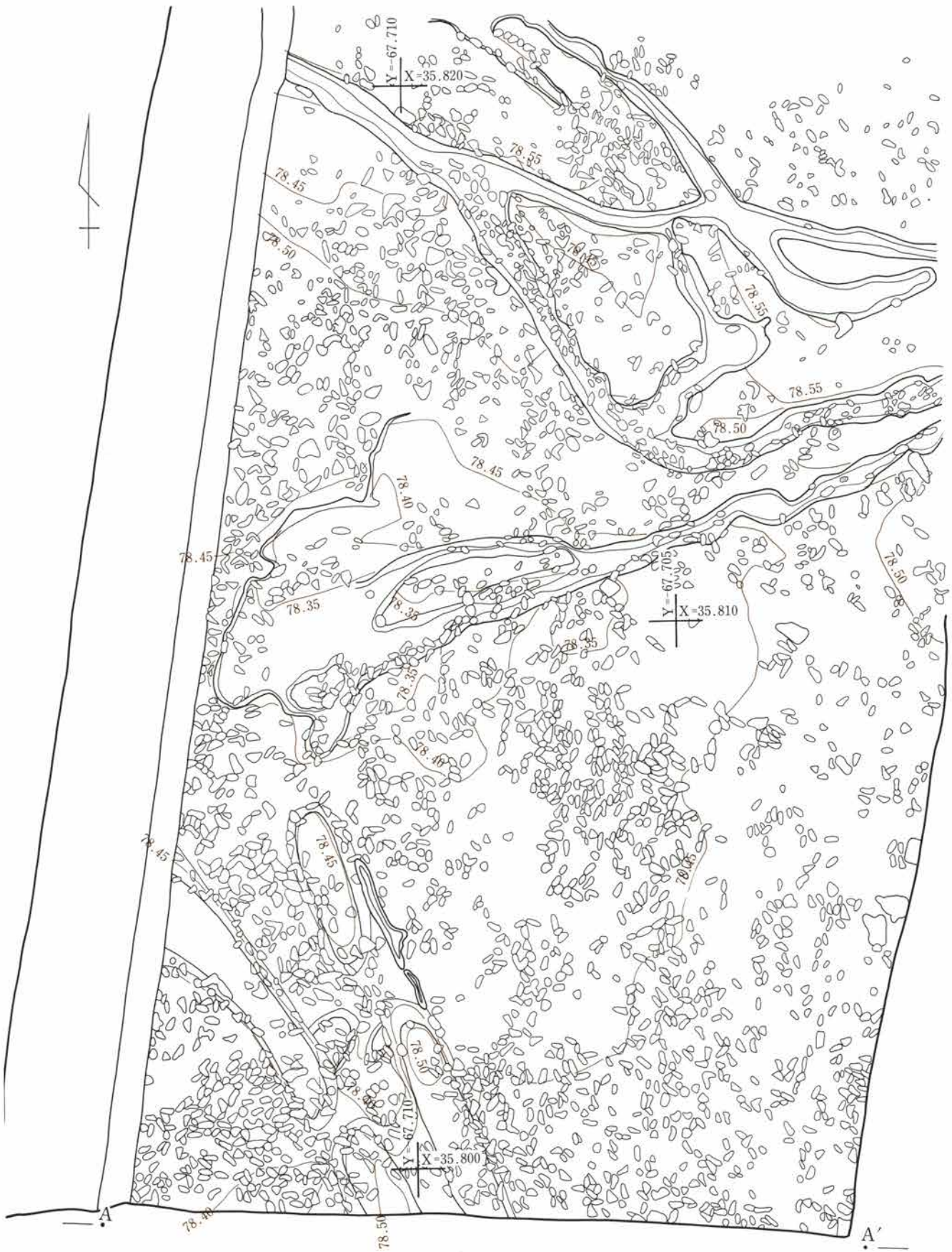
溝

調査区の南側で検出された、水田面と考えられる無数の凹凸が確認された部分に18～23号溝が検出されている。これらの溝は、全体



S = 1 / 400

第159図 D区の遺構配置図(本線)



第160図 D区 検出された畦と水田面、溝

S=1/100

に細い溝であり、概ね東西方向に延びている。この内、22・23号溝の西端部分は、やや広目な窪地状となっている。

水田 (第160図)

ここで、調査区南壁土層断面における堆積状況を確認しておきたい(第120図参照)。第6面水田までの堆積状況は先述した通りであり、ここでは第6面水田から本水田までについて確認する。

第6面水田面は、8～11層としたHr-FA層で覆われた下面にあり、12・13層上面がそれに当たる。この灰色粘質土である13層が、第6面水田の耕作土と言うことになる。13層の下位に14～17層が堆積し、その下位層に18・19層が堆積している。18・19層がAs-C軽石を混在させる層であり、混在の量の多さから分層している。この18層上面が、本水田面となる。本水田面と第6面水田耕作土の間には、砂質土を含む洪水層と考えられる14～17層の存在から、明瞭に分離することができる。

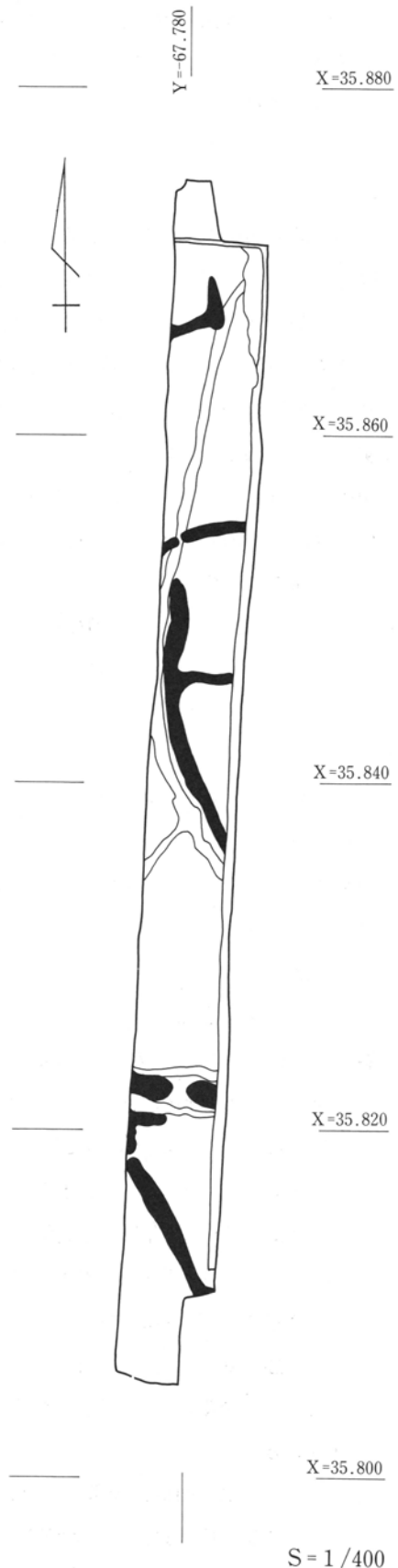
検出された水田面は、無数の凹凸が確認されており、C区での状況と全く同じである。また、検出された大畦は、間に溝状の窪みを持つ併走する2本であるが、南壁から北西方向に延びる。この大畦は、その方向性から、C区北東部で検出された大畦と同一の大畦と考えられ、C区での大畦上の溝が本調査区での併走する2本の畦の間の溝状の窪みと考えられる。

残念ではあるが、小畦の検出はできなかった。

D区取り付け道

D区取り付け道で検出された遺構は、水田に伴う畦畔と、水田面に残る溝である。調査区内の地形の状況は、全体的に北西側から南東側への微傾斜となっており、第6面と同様に低地帯となる。また、調査区の北東部には、東壁に沿うように第6面で検出された大溝の一部がある。水田遺構が検出されたのは、調査区のほぼ全体に及ぶが、南端は不明瞭となる。因みに、南隣となるC区取り付け道では、本面の水田遺構は検出できていない。第6面水田の耕作土として攪拌されたことに、起因したものと考えられる。

検出された水田遺構は、本面の直上層に洪水による粒子の粗い砂質土が堆積していることから、残存状態が比較的に良好である。結果、大畦・小畦とともに水田に伴うであろう溝が検出されており、水田面には無数の凹凸が確認されている。これにより、大畦



第161図
D区の遺構配置図(取り付け道)

S = 1 / 400

で区画された大区画内を、小畦で小区画に区画された水田が存在したものと考えられる。(第161図)

溝

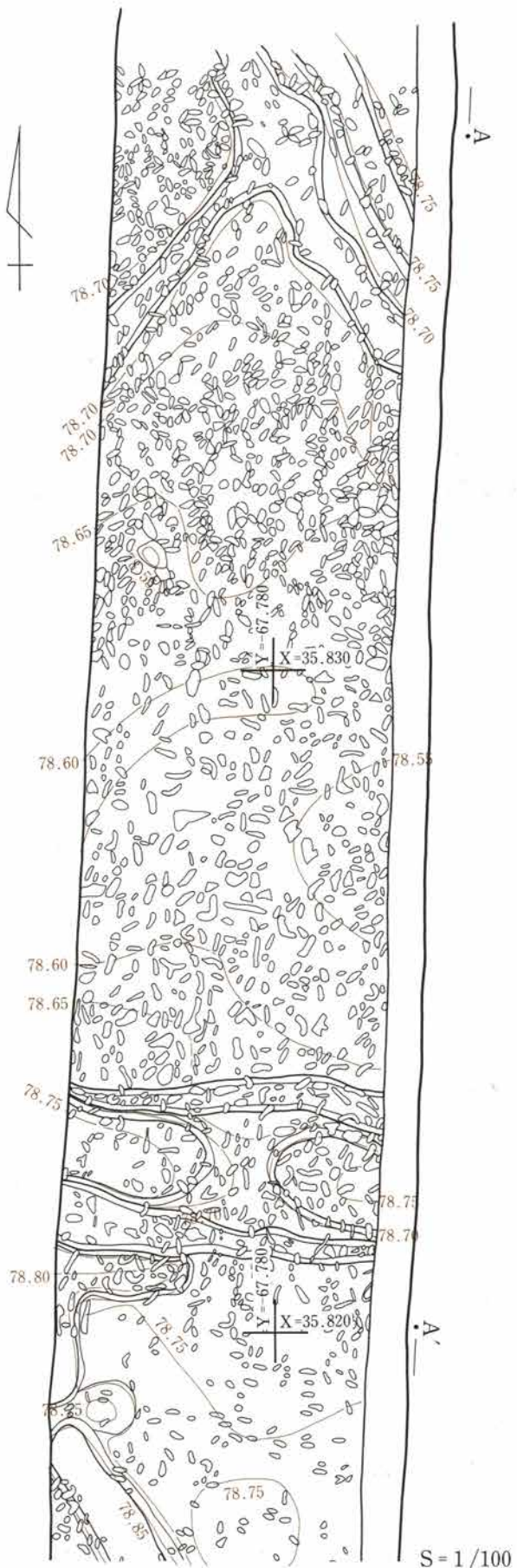
調査区の南側で、大畦に両脇に大畦と同方向に延びる溝が、2条検出された。また、調査区の中央部から北半にかけて、大きく湾曲するように北へ延びる溝があり、この溝の途中からは南西方向へ分岐する溝が検出されている。しかも、この溝は、調査区の中央付近では大畦の西脇にあり、途中の小畦の切れ間を抜けるように大溝方向へ延びている。これらの溝は、そのあり方から、本水田に伴う溝と考えられる。

水田 (第162～165図)

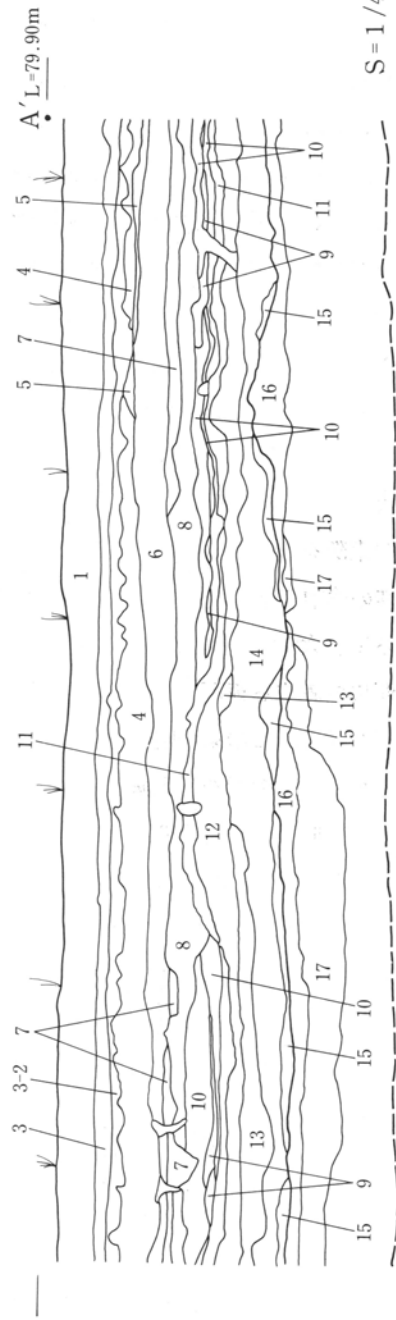
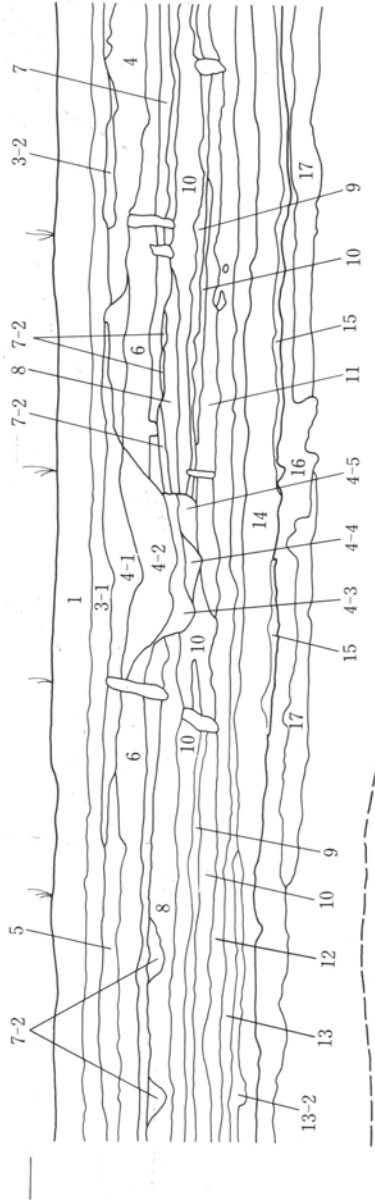
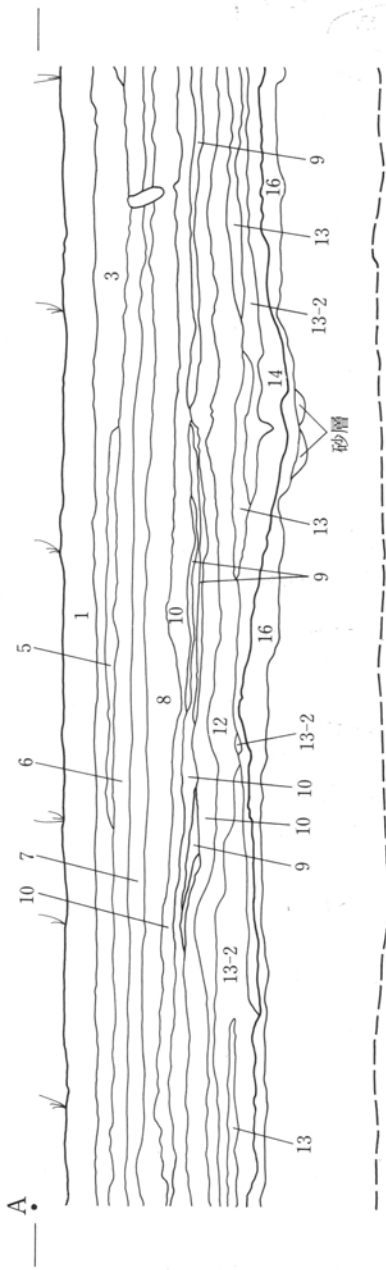
ここで、調査区東壁土層断面における堆積状況を確認しておきたい。第6面水田までの堆積状況は先述した通りであり、ここでは第6面水田から本水田までについて確認する。

12層上面が第6面の水田面となり、12層とした暗灰色粘質土が第6面水田耕作土となる。この12層の下位には、白色軽石を多量に含んだ洪水層として暗灰色砂質土が堆積し、13・14層に分層できる。この洪水による砂質土は、調査区の中央部を除くほぼ全体を覆い、12層と16層を明瞭に分離させている。下位層となる16層が、白色のAs-C軽石を混在させるAs-C混土層となる。この16層上面が、本水田面である。

検出された水田面は、無数の凹凸が確認されており、C・D区での状況と全く同じである。また、検出された畦畔は、調査区の南側で東壁から北西方向に延び



第162図 D区取り付け道 検出された畦と水田面(南側)



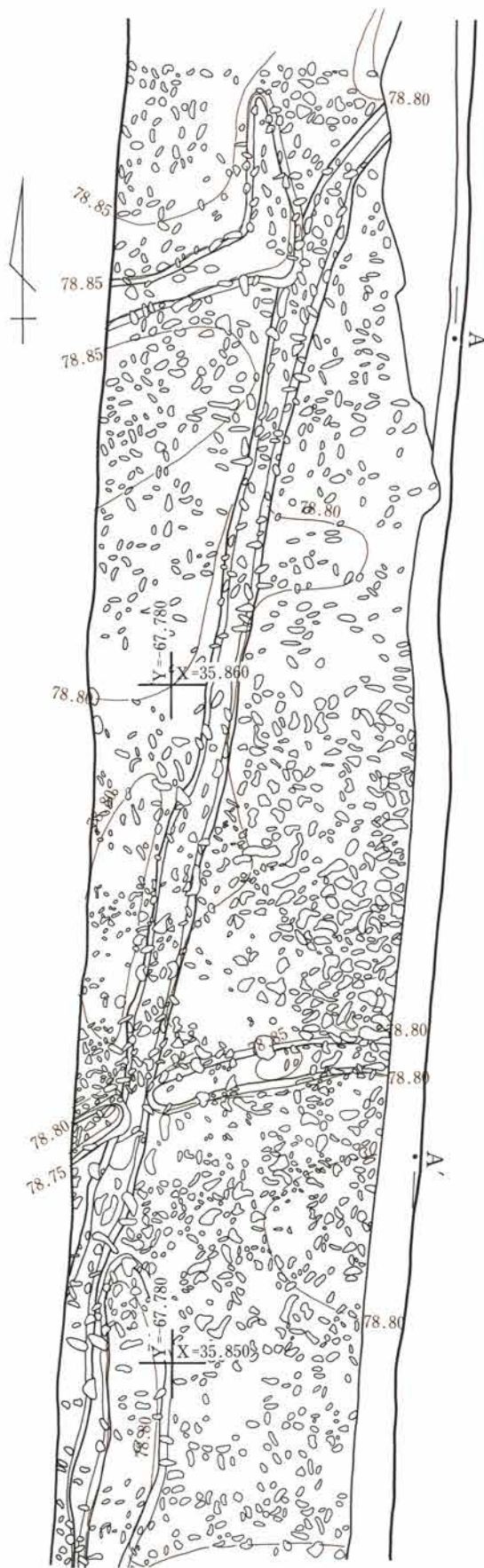
* 土層説明は、第165図参照。

第163図 D区取り付け道
東壁土層断面(南側)

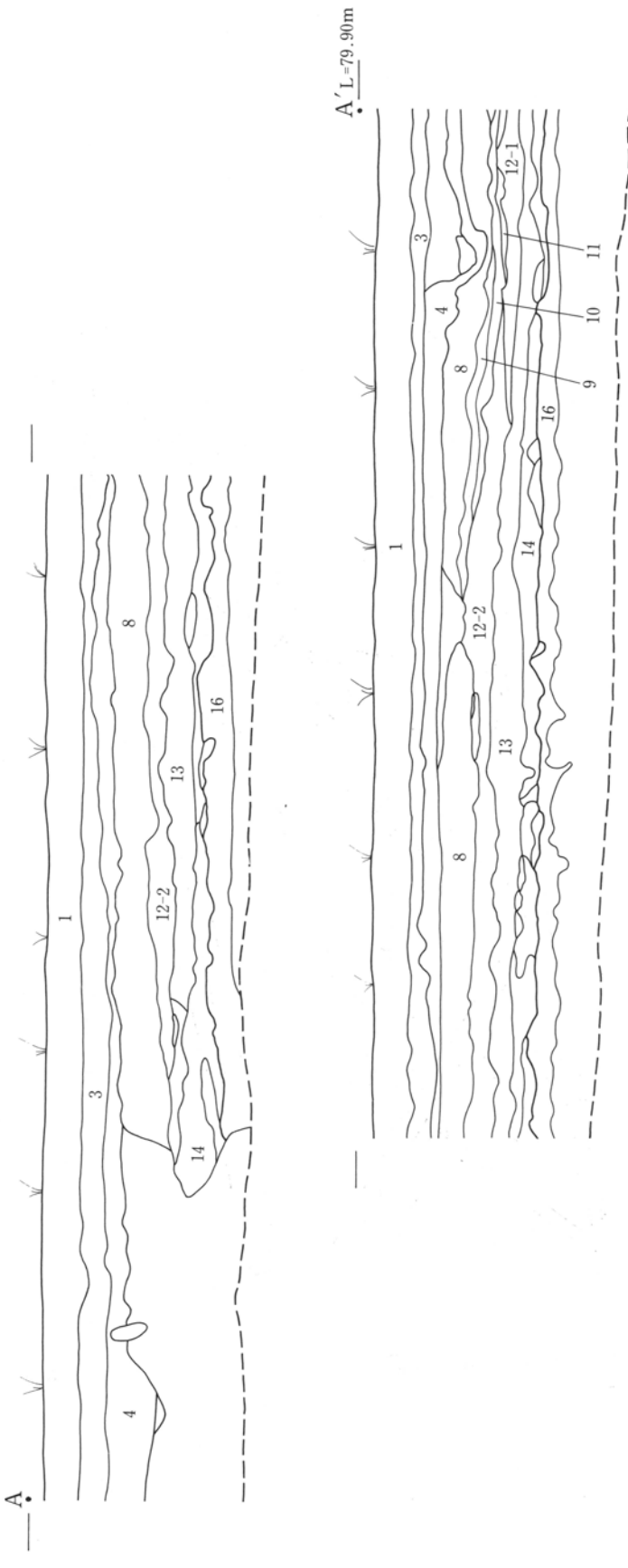
S=1/40

る畦と、その北側で東西方向に延びる畦が検出されている。前者の畦は西壁際で切れ間をもち、すぐに東へ折れ曲がるもので、切れ間部の東側に水落状の窪みをもつ。この窪みから、畦の切れ間は水口と考えられ、西側の区画から東側の区画へ流水したことが窺える。後者の東西方向の畦は、比較的高く太いことから大畦と考えられる。この大畦の南北両際には併走する溝があり、大畦自体にも水口と考えられる切れ間が存在する。調査区の中央付近では、湾曲しながら北へ延びる溝の東際を沿うように大畦があり、その大畦の途中で東へ延びる小畦が分岐する。さらに、大畦の北端部を溝が通り、その北側に位置する東西方向の小畦の切れ間を溝が通る。この東西畦と大畦から分岐する小畦までの間を小区画とみれば、その南北方向は8mを測る区画となる。調査区の北側では、L字状の東西方向から北へ折れ曲がる畦が検出されている。この畦の折れ曲がる角部を、先の溝が掠めるように通る。因みに、中央部北よりの東西畦とこの畦までの距離は、南北方向で11mを測る。

以上述べてきたが、本水田はC・D区と同様の堆積層に覆われているという点から、同一時期の水田であると考えられる。



第164図 D区取り付け道 検出された畦と水田面(北側) S = 1/100



A' L=79.90m

- | | | | |
|-------------|--------------------------------|--------------|---------------------------------|
| 1層 暗褐色粘質土 | 表土。現代の水田耕作土。 | 10層 明灰色砂質土 | Hr-FA起因の泥流層とも考えられ、やや砂質気味。 |
| 2層 暗褐色土 | As-A軽石を少量含む。下面に薄くAs-A軽石が堆積する。 | 11層 乳白色土 | Hr-FA起因の泥流層とも考えられ、粒子が細かく粘質。 |
| 3層 暗褐色土 | 上面で第1面を抽出。As-B軽石を少量含む、全体に酸化気味。 | 12-1層 暗灰色粘質土 | 第6面の水田耕作土で、粘性強い。 |
| 3-2層 暗褐色土 | 3層よりもAs-B軽石を多く含む。 | 12-2層 暗灰色粘質土 | 12層と同一層であるが、Hr-FAの小ブロックを僅かに含む。 |
| 4層 黒褐色砂質土 | As-B軽石を多量に含む。 | 13層 灰色砂質土 | 軽石状の粗い砂を多量に含む、洪水層とみられる。 |
| 4-1~5層 黄灰色土 | 4層は溝の覆土で、As-B軽石やHr-FAブロックを含む。 | 13-2層 灰色砂質土 | 13層よりも粒子がさらに粗い。 |
| 5層 暗灰色軽石層 | As-B軽石の純層である。 | 14層 灰色砂質土 | 軽石状の粒子の細かい砂を多量に含む、洪水層とみられる。 |
| 6層 暗褐色粘質土 | 第3面の水田耕作土。Hr-FP粒子を僅かに含む。 | 15層 暗灰色粘質土 | 洪水層とみられる。粘性が非常に強く、水のよどんだ形跡か。 |
| 7層 黄灰色土 | Hr-FP起因の泥流層と考えられ、Hr-FP軽石を含む。 | 16層 黒褐色粘質土 | 層の上面が第7面の遺構確認面となる。As-C軽石混土層である。 |
| 7-2層 黄灰色土 | 7層中に8層を含み、やや砂質気味。 | 16-2層 黒褐色粘質土 | 16層と同じであるが、As-C軽石が少ない。 |
| 8層 黄色砂質土 | Hr-FP起因の泥流層と考えられ、全体に砂質である。 | 17層 黒色粘質土 | 粘性が非常に高い。 |
| 9層 乳白色粘質土 | Hr-FA起因の泥流層とも考えられ、粒子が細かく粘質。 | | |

S = 1 / 40

第165図 D区取り付け道 東壁土層断面(北側)

E区

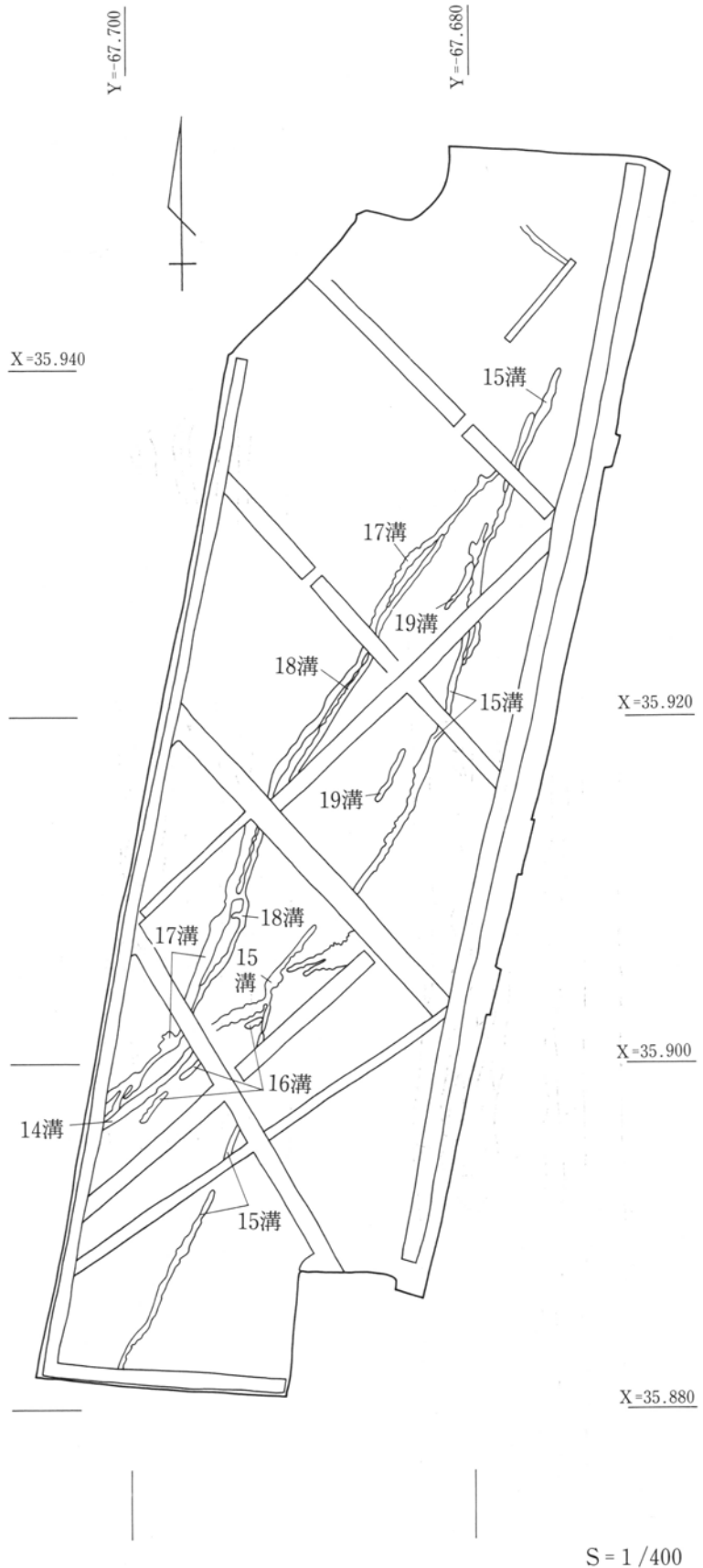
E区で検出された遺構は、溝のみである。調査区内の地形の状況は、北側が高位となり、全体的に北西側から南東側への微傾斜で、第6面と同様である。南隣のD区北半でもそうであったように、徐々に高位となるためか、本面での水田遺構は検出できなかった。調査区全体が第6面水田の耕作土として攪拌されることにより、土層の堆積が不明瞭となり、水田遺構を検出できなかったものと考えられる。

調査としては、第166図にあるように、方眼状に土層確認のためのベルトを設けていた。第6面水田耕土を除去する過程で、C区・D区取り付け道にみられた砂質土もなく、明瞭なAs-C混土層の把握ができなかったのが現状である。よって、本確認面は、C・D区等の遺構検出面とは異なる。

検出された溝は、その覆土が砂質土であることと、後述する第8面の遺構よりも新しいことが確認されている点から、本面の遺構としてここで扱うこととした。(第166図)

溝

調査区を斜めに縦断するかのようになり、南西隅から北東方向へ延びる溝群であり、14～19号溝が検出されている。これらの溝は、黄褐色砂質土を覆土としている点で共通している。



第166図 E区の遺構配置図(本線)

E区取り付け道

E区取り付け道で検出された遺構は、水田に伴う畦畔と、水田面に残る溝である。調査区内の地形の状況は、調査区の北端に微高地をひかえているため北側が高位となり、全体的に北西側から南東側への微傾斜で、第6面と同様である。また、調査区の南側の西半分は、西壁に沿うように第6面で検出された大溝の一部がある。水田遺構が検出されたのは、調査区の中央部から南半にかけてであり、北側では検出されていない。因みに、南隣となるD区取り付け道では、南端を除くほぼ全面に本面の水田遺構を検出しており、本調査区で検出された水田遺構はその続きと考えられる。検出できなかった北側については、南側より高位に当たることから、第6面水田の耕作土として攪拌されたことに、起因したものと考えられる。

検出された水田遺構は、本面の直上層に洪水による粒子の粗い砂質土が堆積していることから、残存状態が比較的に良好である。結果、大畦とともに水田に伴うであろう溝が検出されており、水田面には無数の凹凸が確認されている。(第167図)

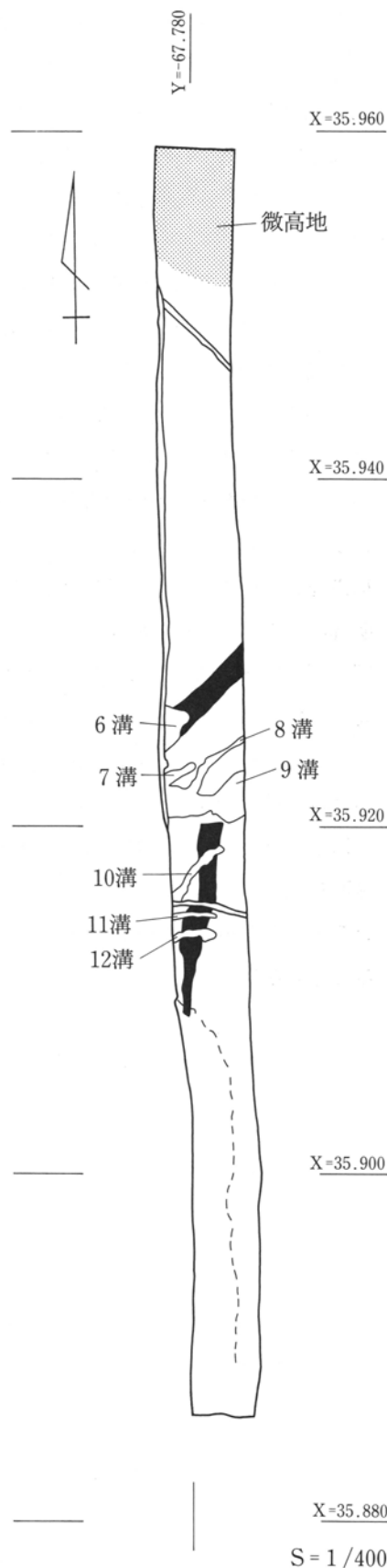
溝

調査区の中央付近で、溝が集中して検出されている。これらの溝は、西壁土層断面(第170図)にみる15層とした洪水による明褐色砂質土が覆土となる。溝の延びる方向は、東西方向に延びる7・9・11・12号溝であり、北東方向に延びる8・10号溝がある。また、比較的幅の広い溝として9号溝があり、6号溝も含まれよう。一応、これらの溝も、そのあり方から、本水田に伴う溝と考えられる。

水田 (第168～170図)

ここで、調査区東・西壁土層断面における堆積状況を確認しておきたい。第6面水田までの堆積状況は先述した通りであり、ここでは第6面水田から本水田までについて確認する。

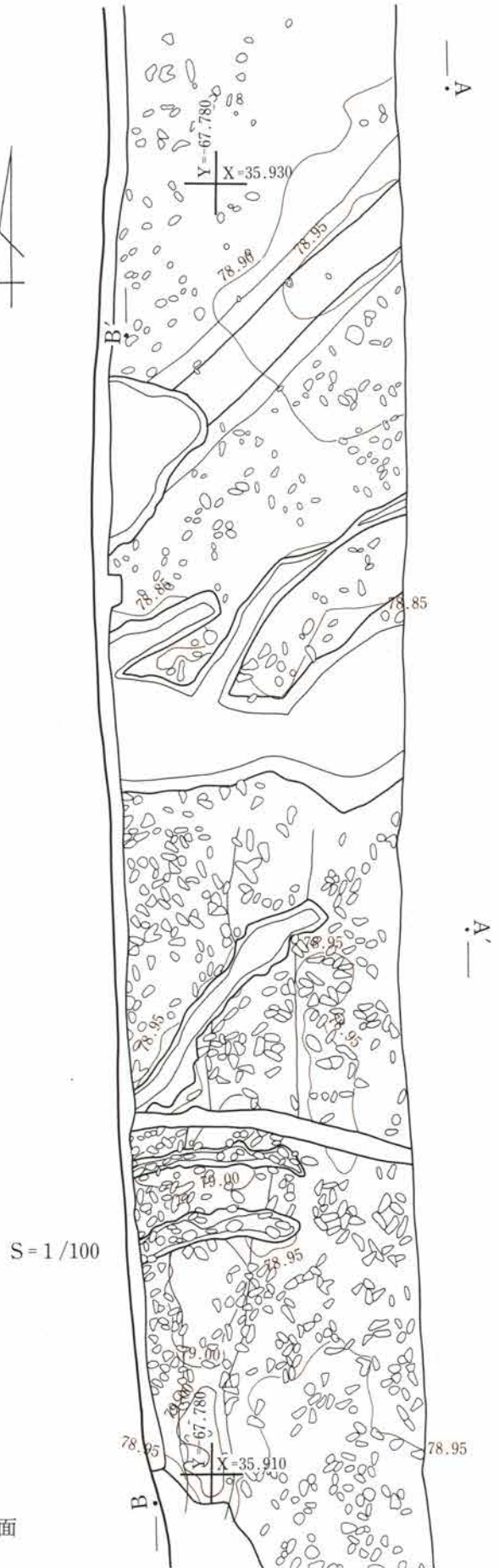
14層上面が第6面の水田面となり、14層とした暗灰色粘質土が第6面の水田耕作土となる。因みに、12層上面が第5面水田面であり、12層がその耕作土となる。14層の下層には、15層とした白色軽石を多量に含んだ明褐色砂質土の洪水層が堆積し、その下層が16層となるAs-C軽石を混在させたAs-C混土層が堆積する。この16層上面が、本水田面である。



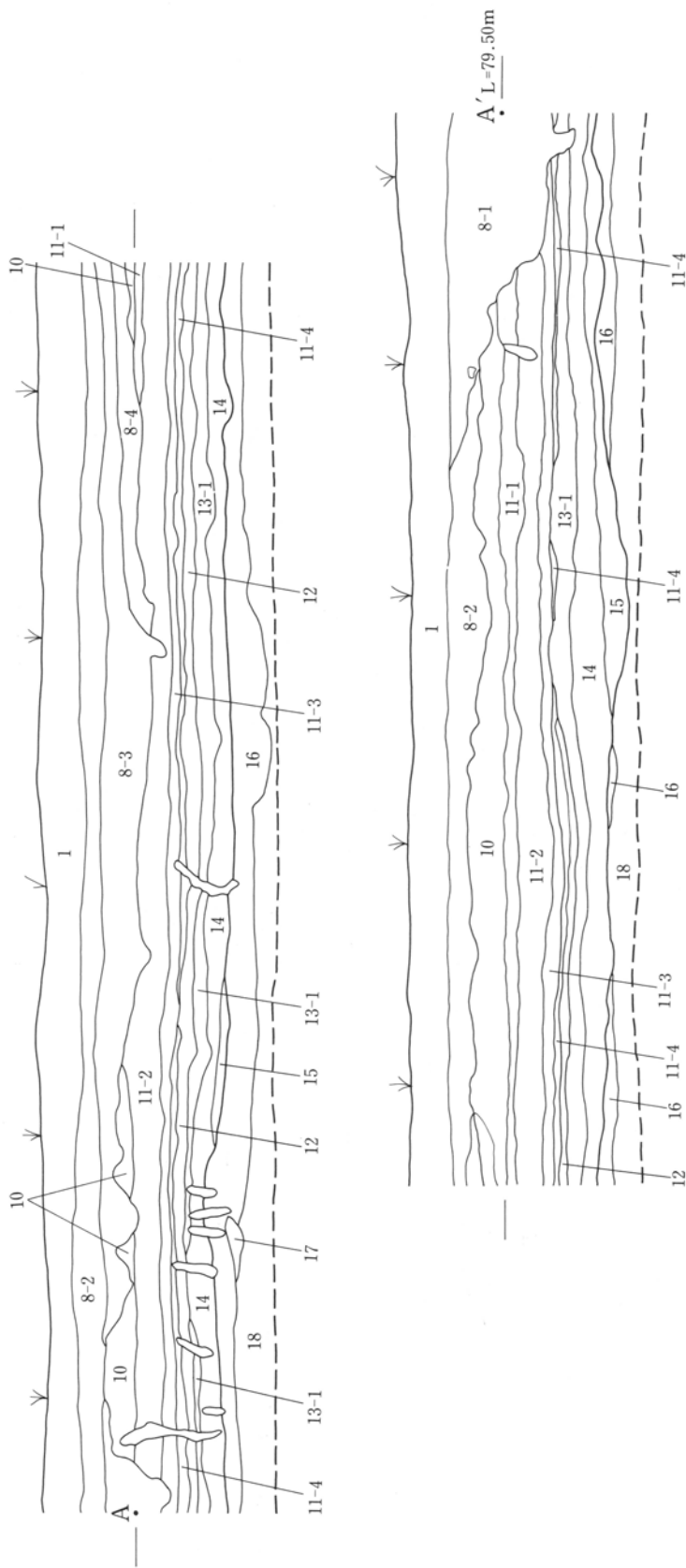
第167図
E区の遺構配置図(取り付け道)

検出された水田面は、無数の凹凸が確認されており、C区・D区取り付け道での状況と全く同じである。また、検出された畦畔は、調査区の中央付近で南から北方向に延びる幅広の低い畦と、その北側で西壁側から北東方向に延びる幅広で高い大畦が検出されている。前者の畦は、9号溝と接する部分で止まるようである。この畦を横切るように10～12号溝があることから、これらの溝の方が新しく、若干の時間差も考えられよう。一方、後者の大畦は、東壁土層断面でも確認できるように、第6面での大畦とほぼ同じ位置に走向している。しかし、14層と16層の明確な堆積土の差や、僅かではあるが15層を間層に挟んでいること等からして、時期の異なる畦として考えることができよう。つまりは、第6面の大畦は、本面の大畦位置を踏襲したものと考えられる。

以上述べてきたが、本水田はC区・D区取り付け道と同様の堆積層に覆われているという点から、同一時期の水田であると考えられる。



第168図 E区取り付け道 検出された畦と水田面



※ 土層説明は、158頁参照

第169図 E区取り付け道 東壁土層断面



* 土層説明は、第135図参照

第170図 E区取り付け道 西壁土層断面

F区

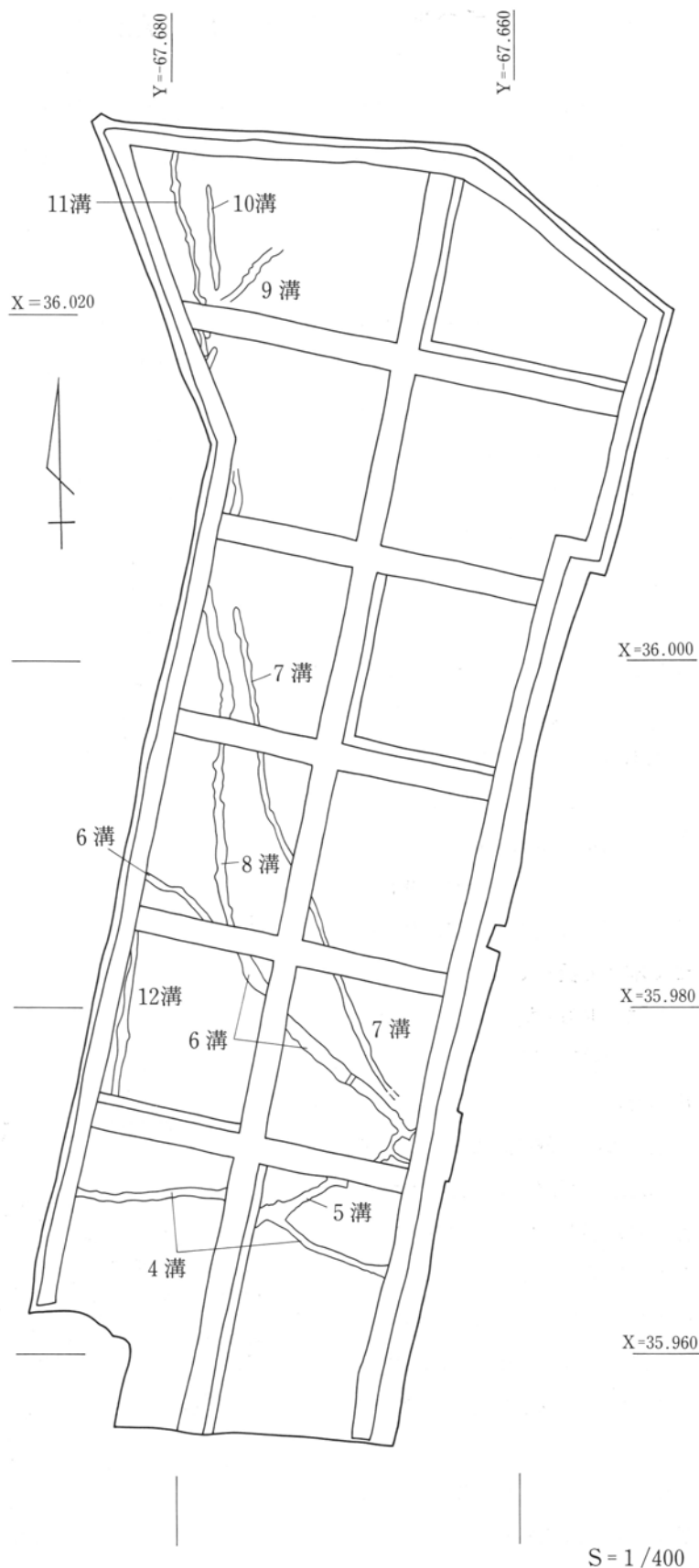
F区で検出された遺構は、溝のみである。調査区内の地形の状況は、南端と北西隅が高位となり、全体的に西側から南東側への微傾斜で、第6面と同様である。南隣のE区と同様に、高位となるためか、本面での水田遺構は検出できなかった。調査区全体が、第6面水田の耕作土として攪拌されることにより、土層の堆積が不明瞭となり、水田遺構を検出できなかったものと考えられる。

調査としては、第171図にあるように、方眼状に土層確認のためのベルトを設けていた。第6面水田耕土を除去する過程で、C区・D区取り付け道にみられた砂質土もなく、明瞭なAs-C混土層の把握ができなかったのが現状である。むしろ、E区と同じ確認面である。検出された溝は、その覆土が砂質土であることと、後述する第8面の遺構よりも新しいことが確認されている点から、本面の遺構としてここで扱うこととした。

なお、F区取り付け道では、本面の遺構を検出できなかった。

溝

4・5号溝のように東西方向に近い伸び方をする溝。6～12号溝のように、調査区を斜めに北西隅から南方向へ延びる溝群とが検出されている。これらの溝は、黄褐色砂質土を覆土としている点で共通している。



第171図 F区の遺構配置図(本線)

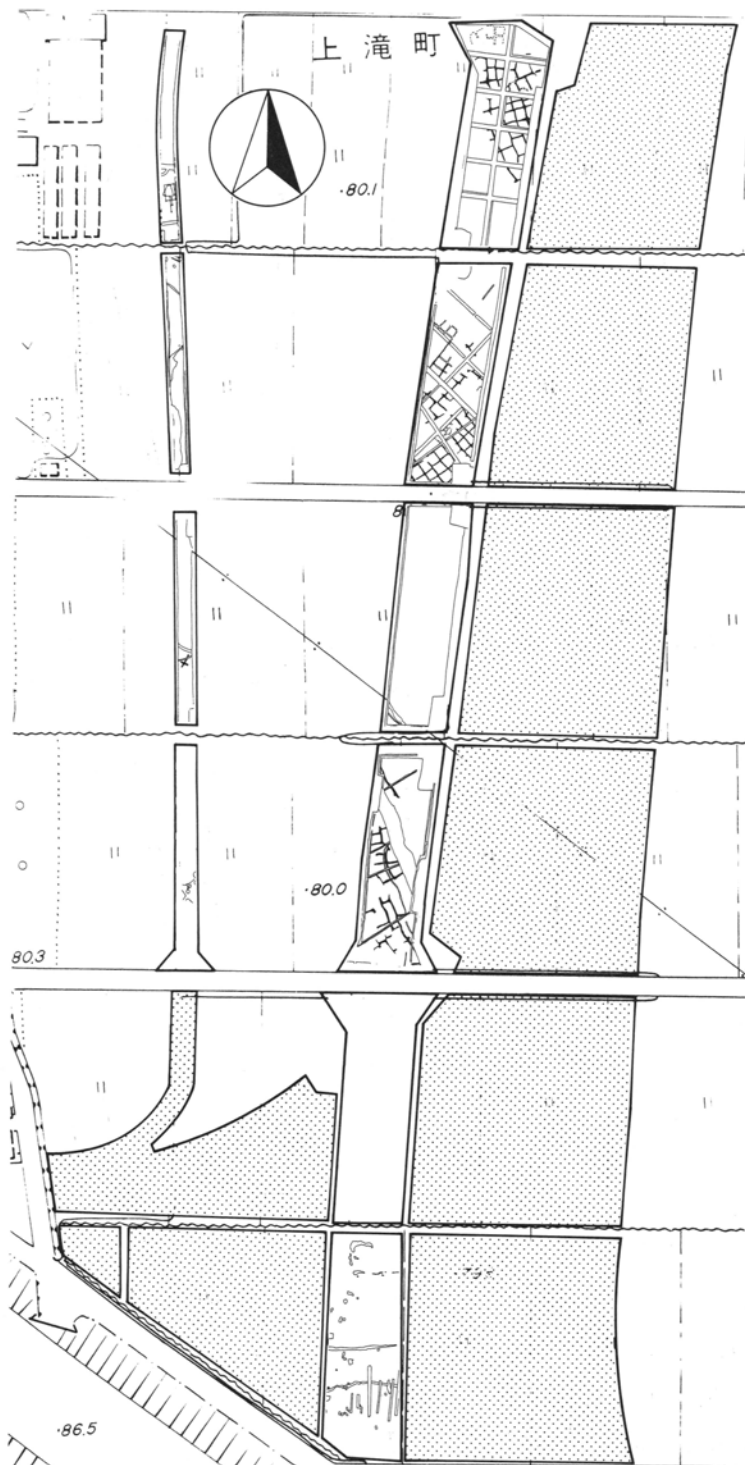
第9節 第8面の遺構（古墳時代IV、As-C混土層下面）

第8面は、基本土層のXII層となるAs-C軽石を混在させる黒色粘質土（As-C混土層）下面を確認面とし、検出された遺構を扱った。このAs-C軽石は、浅間山を給源とする4世紀初頭の降下火山灰とされていることから、As-C混土層の形成時期は4世紀以降であることは明らかであるが、明確な時期は確定できていない。As-C混土層である基本土層XII層自体も、高位に位置する部分では先述の第6面水田の耕作土として攪拌されることにより、土層の堆積が不明瞭ないし認められない状況もある。このため、各調査区全てで、遺構の検出をできたわけではない。

本第7面から検出された遺構には、土坑、溝、水田がある。また、E区取り付け道からF区取り付け道にかけては微高地部分からは、掘立柱建物が検出されている。さらには、S字口縁台付甕を含む遺物集中箇所も検出されており、併せて本面で扱っている。

特に、水田遺構については、As-C混土層下面を確認面として検出したが、As-C軽石降下以前の遺構とは考え難い。むしろ、区画された水田面が、深い位置まで耕作された姿と理解しており、As-C混土層を耕作土とした時期の水田と考えている。つまり、As-C軽石降下以降から第7面水田以前までの間に形成された遺構であろう。

以下、各区ごとに検出された遺構について説明する。



第172図 第8面の全体図

S = 1/2500

A区

A区で検出された遺構には、土坑23基、溝がある。水田は確認されていない。

調査区内の地形は、南端が僅かに高い微高地となり、中央部西側でもやや微高地状となる。遺構検出面は、鍵層となるAs-C混土層の堆積が認められなかったことから、基本土層XIV層となる灰色粘質土（シルト層）上面を確認面とした。

検出された土坑の多くは、この微高地の縁辺部に検出されたものが多い。また、溝は、調査区の中央と北側に分布する。（第173図）

土坑（第174・175図）

41号土坑

位置 A区の北側のやや西寄りであり、X=35.615、Y=-67.735に位置する。

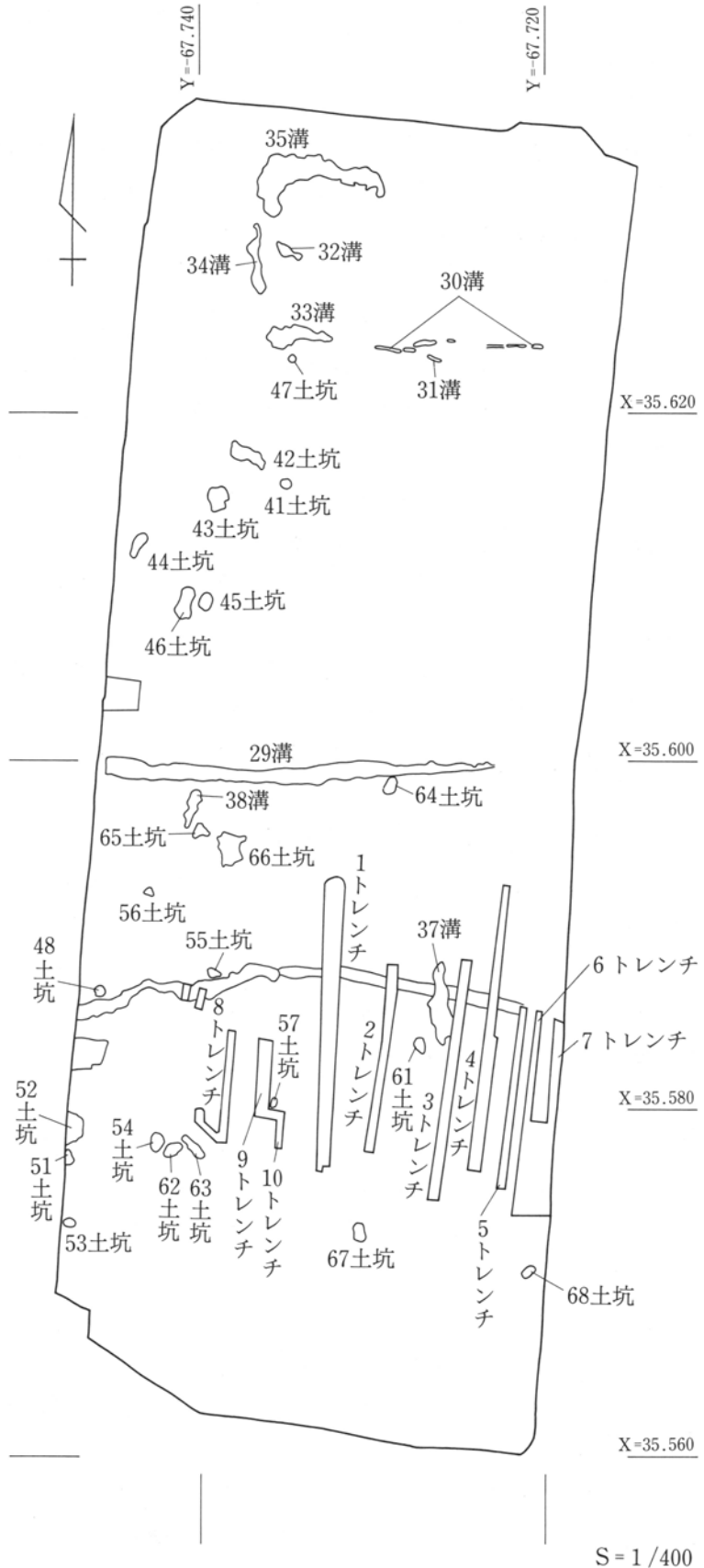
規模 楕円形を呈し、長軸方向は北西にもち、長軸66cm、短軸50cm、深さ18cmほどを測る。

概要 As-C軽石を含む黒色土を覆土とする。遺物の出土はない。

42号土坑

位置 A区の北側のやや西寄りであり、X=35.617、Y=-67.737に位置する。

規模 不整な長楕円形を呈し、長軸方向は北西にもち、長軸2.35m、短軸75cm、深さ10cmほどを測る。



第173図 A区の遺構配置図(本線)

概要 底面も平坦ではなく、土坑としがたい点もある。As-C軽石を含む黒色土を覆土とし、遺物の出土はない。

43号土坑

位置 A区の北側の西寄りにあり、X=35.615、Y=-67.739に位置する。

規模 不整な円形を呈し、径1.0m、深さ20cmほどを測る。

概要 As-C軽石を含む黒色土を覆土とする。遺物の出土はない。

44号土坑

位置 A区の中央より西側にあり、X=35.612、Y=-67.743に位置する。

規模 不整な楕円形を呈し、長軸方向は北北東にもち、長軸1.45m、短軸60cm、深さ8cmほどを測る。

概要 As-C軽石を含む黒褐色土を覆土とする。遺物の出土はない。

45号土坑

位置 A区の中央より西寄りにあり、X=35.609、Y=-67.740に位置する。

規模 円形を呈し、径90cm、深さ50cmほどを測る。

概要 As-C軽石を少量含む黒褐色土を覆土とする。遺物の出土はない。

46号土坑

位置 A区の中央より西寄りにあり、X=35.609、Y=-67.741に位置する。

規模 北側は楕円形を呈し、長軸方向は西北西にもち、長軸70cm、短軸50cm、深さ50cmほどを測る。

また、南側は長楕円形を呈し、長軸方向は北北東にもち、長軸1.3m、短軸90cm、深さ10cmほどを測る。

概要 二つの土坑が重複しているが、新旧は不明。北側の土坑は深いのに対し、南側の土坑は浅く底面も平坦ではない。両者共に、As-C軽石を含む黒褐色土を覆土とする。遺物の出土はない。

47号土坑

位置 A区の北側でやや西寄りにあり、X=35.623、Y=-67.735付近に位置する。

規模 円形を呈し、径40cm、深さ10cmほどを測る。

概要 土坑というよりはピットで、As-C軽石を少量含む黒褐色土を覆土とする。遺物の出土はない。

48号土坑

位置 A区の南側で西寄りにあり、X=35.587、Y=-67.745付近に位置する。

規模 円形を呈し、径60cm、深さ10cmほどを測る。

概要 黒褐色土を覆土とし、遺物には須恵器の坏片が出土している。

51号土坑

位置 A区の南側の西端にあり、X=35.577、Y=-67.747付近に位置する。

規模 形状は不明。深さ10cmほどを測る。

概要 土坑の西側は、排水溝のため調査できなかった。黒褐色土を覆土とし、遺物の出土はない。

52号土坑

位置 A区の南側の西端にあり、X=35.579、Y=-67.747に位置する。

規模 円形を呈するものと考えられ、径1.8m、深さ10cmほどを測る。

概要 土坑の西側は、排水溝のため調査できなかった。黒褐色土を覆土とし、遺物の出土はない。

53号土坑

位置 A区の南側の西端にあり、X=35.574、Y=-67.747に位置する。

規模 楕円形を呈し、長軸方向は東西にもち、長軸70cm、短軸50cm、深さ50cmほどを測る。

概要 黒色土を覆土とし、遺物の出土はない。

54号土坑

位置 A区の南側の西寄りにあり、X=35.578、Y=-67.742に位置する。

規模 不整な円形を呈し、径90cm、深さ18cmほどを測る。

概要 底面も平坦ではなく、土坑としがたい点もある。黒色土を覆土とし、遺物の出土はない。

55号土坑

位置 A区の南側の西寄りにあり、X=35.588、Y=-67.739に位置する。

規模 不整な形状を呈し、長軸方向を東西にもち、長軸80cm、短軸60cm、深さ20cmほどを測る。

概要 形状および底面の状況から、土坑としがたい点もある。黒色土を覆土とし、遺物の出土はない。

56号土坑

位置 A区の中央で西寄りにあり、X=35.592、Y=-67.743に位置する。

規模 不整な形状を呈し、長軸方向を北北東にもち、長軸70cm、短軸60cm、深さ15cmほどを測る。

概要 形状および底面の状況から、土坑としがたい点もある。黒褐色土を覆土とし、遺物の出土はない。

57号土坑

位置 A区の南側のほぼ中央にあり、X=35.580、Y=-67.740付近に位置する。

規模 不整な楕円形を呈し、長軸方向を南北にもち、長軸50cm、短軸40cm、深さ8cmほどを測る。

概要 底面も平坦ではなく、土坑としがたい点もある。黒褐色土を覆土とし、遺物の出土はない。

61号土坑

位置 A区の南側でやや東寄りにあり、X=35.584、Y=-67.727に位置する。

規模 楕円形を呈し、長軸方向を北北西にもち、長軸90cm、短軸60cm、深さ10cmほどを測る。

概要 60号土坑と僅かに重複するが、新旧は不明。底面にはピットを有し、最深部で24cmを測る。As-C軽石を含む黒褐色土を覆土とし、遺物の出土はない。

62号土坑

位置 A区の南側でやや西寄りにあり、X=35.578、Y=-67.741に位置する。

規模 不整な楕円形を呈し、長軸方向を北東にもち、長軸1.2m、短軸90cm、深さ10cmほどを測る。

概要 底面は平坦ではなく、土坑としがたい点もある。黒褐色土を覆土とし、遺物の出土はない。

64号土坑

位置 A区のほぼ中央にあり、X=35.599、Y=-67.729に位置する。

規模 楕円形を呈し、長軸方向を北北東にもち、長軸1.2m、短軸70cm、深さ10cmほどを測る。

概要 土坑の北側を29号溝と重複するが、新旧は不明。底面は平坦ではなく、土坑としがたい点もある。黒褐色土を覆土とし、遺物の出土はない。

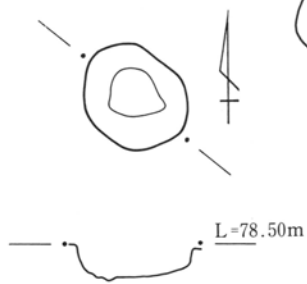
65号土坑

位置 A区の中央よりやや西側にあり、X=35.596、Y=-67.740に位置する。

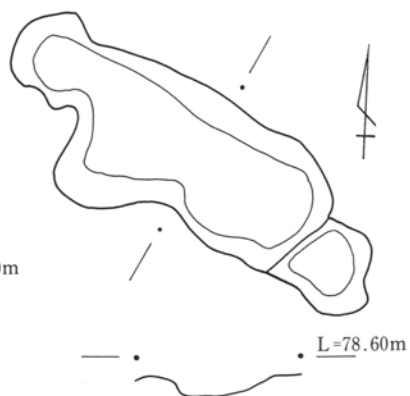
規模 不整な形状を呈し、長軸方向を東南東にもち、長軸1.0m、短軸90cm、深さ10cmほどを測る。

概要 底面は平坦ではなく、土坑としがたい点もある。As-C軽石を含む黒色土を覆土とし、遺物の出土はない。

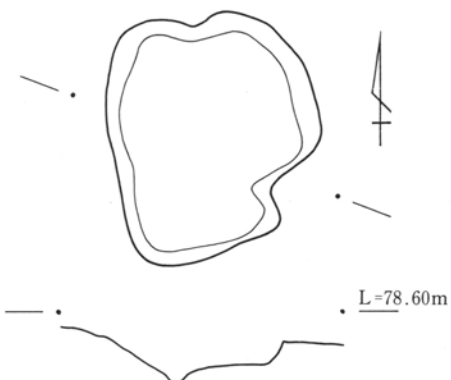
41号土坑



42号土坑



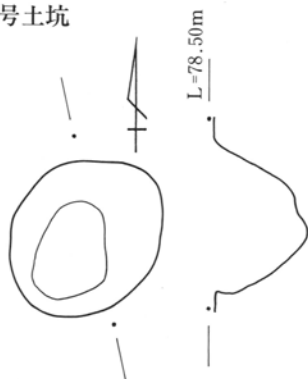
43号土坑



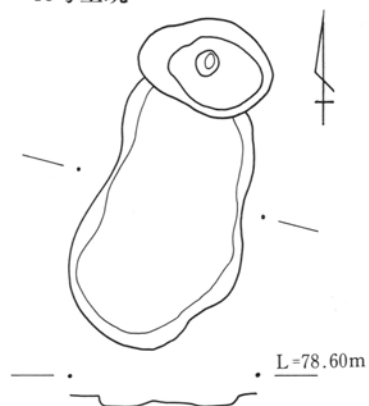
44号土坑



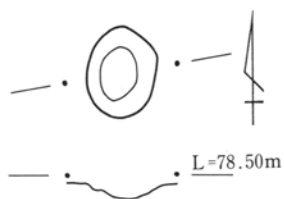
45号土坑



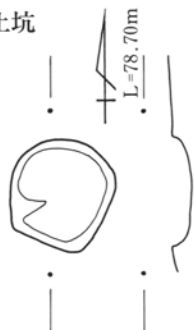
46号土坑



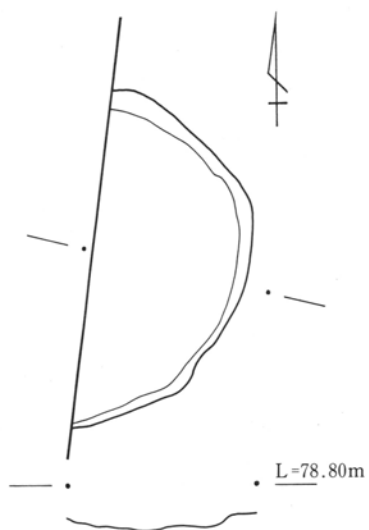
47号土坑



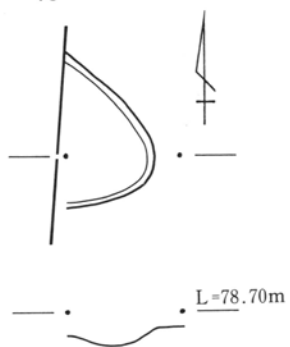
48号土坑



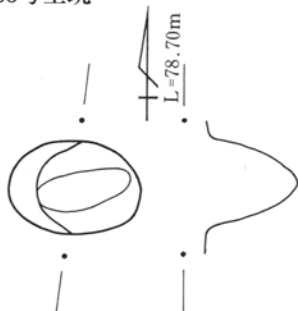
52号土坑



51号土坑

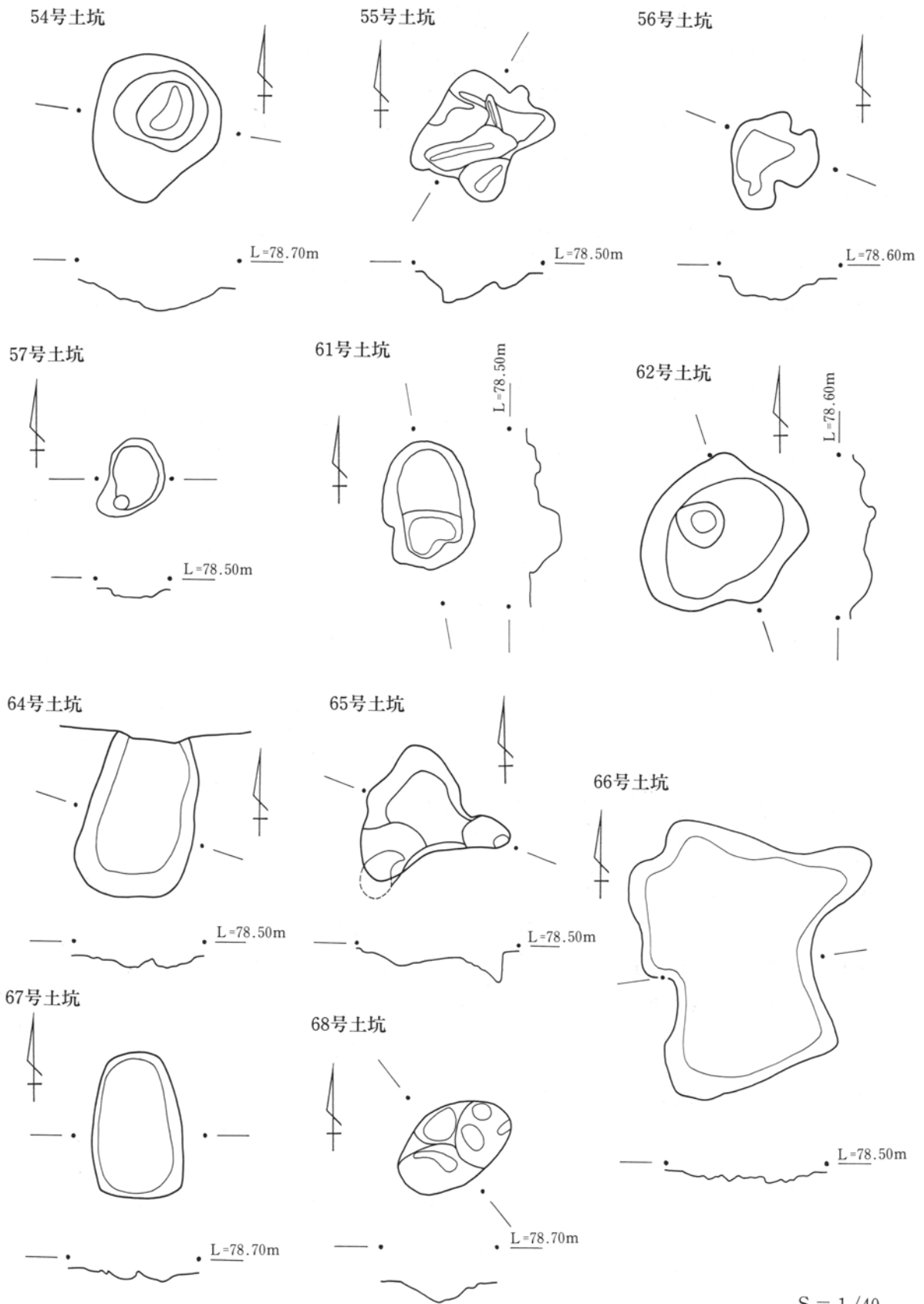


53号土坑



S = 1 / 40

第174图 A区 土坑(1)



S = 1 / 40

第175图 A区 土坑(2)

66号土坑

位置 A区の中央よりやや西側にあり、 $X=35.595$ 、 $Y=-67.738$ に位置する。

規模 不整形な形状を呈し、長軸方向を北にもつ。長軸1.8m、短軸1.2m、深さ6cmほどを測る。

概要 底面は平坦ではなく、土坑としがたい点もある。As-C軽石を少量含む黒色土を覆土とし、遺物の出土はない。

67号土坑

位置 A区の南側のほぼ中央にあり、 $X=35.573$ 、 $Y=-67.731$ に位置する。

規模 楕円形を呈し、長軸方向を南北にもち、長軸1.0m、短軸60cm、深さ5cmほどを測る。

概要 底面は明確ではなく、土坑としがたい点もある。黒褐色土を覆土とし、遺物の出土はない。

68号土坑

位置 A区の南側で東端にあり、 $X=35.571$ 、 $Y=-67.721$ に位置する。

規模 楕円形を呈し、長軸方向を北東にもち、長軸80cm、短軸50cm、深さ12cmほどを測る。

概要 底面は平坦ではなく、土坑としがたい。黒褐色土を覆土とし、遺物の出土はない。

溝

調査区の中央付近で、東西方向に延びる29号溝がある。この29号溝の南に、南北方向の短い37・38号溝が存在する。また、調査区の北側には、30～35号溝が検出されているが、いずれの溝もその性格は不明である。これらの溝には、黒褐色土ないしAs-C軽石を少量含む黒色土を覆土としている。

B区

B区で検出された遺構は、溝が1条のみである。他の遺構は確認されていない。

調査区内の地形は、全体に平坦であり、第7面とほぼ同様である。調査区の南半には、第7面で検出された溝が蛇行しながら東西方向に延びている。遺構検出面は、鍵層となるAs-C混土層の堆積が認められなかったことから、基本土層XIV層となる灰色粘質土（シルト層）上面を確認面とした。

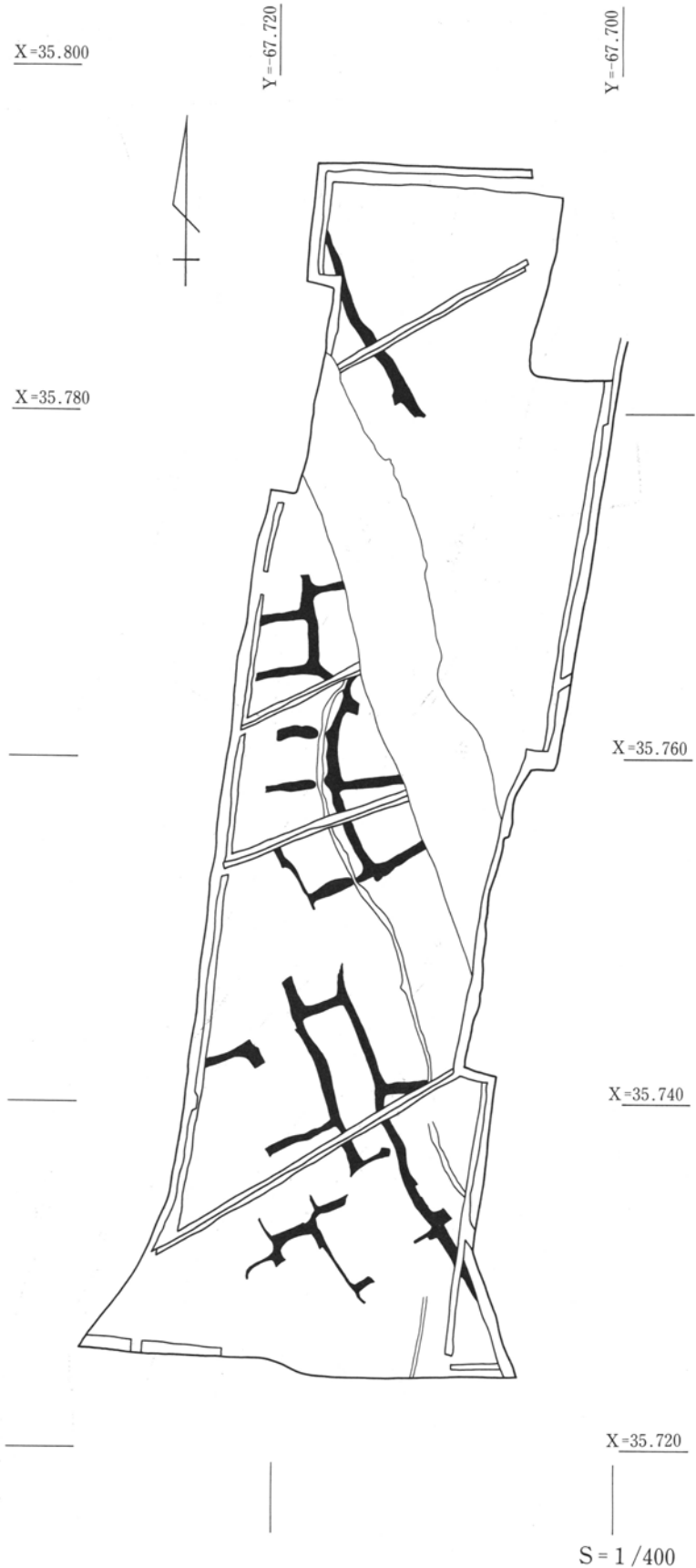
検出された溝は、調査区の北側に位置し、南東方向から東へ延びる68号溝である。細い溝であり、As-C軽石を少量含む黒色土を覆土としている。溝の性格は不明である。

C区

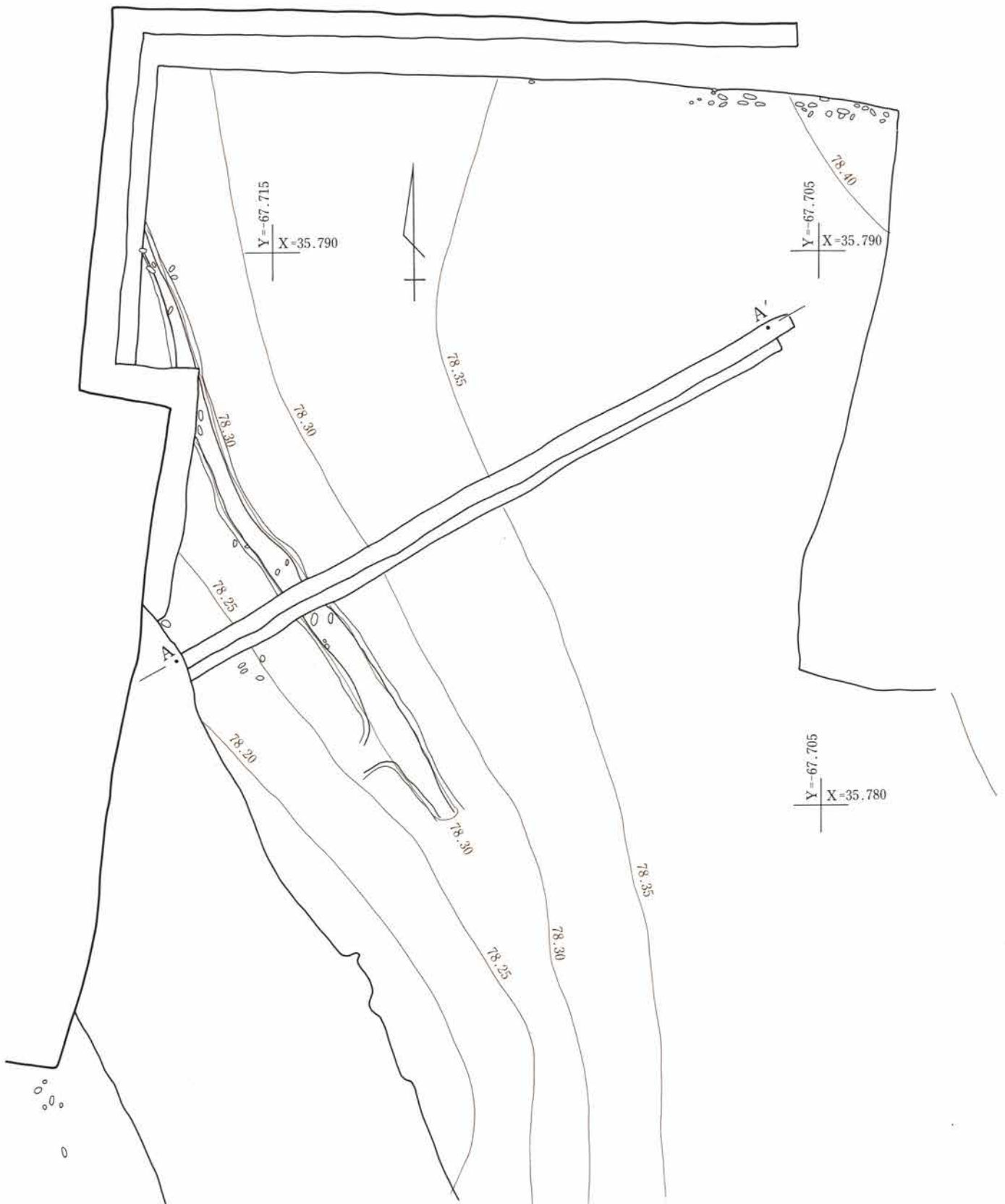
C区で検出された遺構は、水田の痕跡であろう畦畔状の遺構と、溝である。調査区内の地形は、全体的に北西側から南東側への微傾斜となっており、第7面と同様である。調査区内には、第6面で検出された大溝がそのまま存在するが、微地形的には大溝部分が周囲よりも低くなる状況で、第7面とほぼ同じ。

本調査区内での第8面の調査は、先の第7面の水田耕作土であるAs-C混土層を取り除いた面を遺構確認面とした。その結果、As-C軽石を全く含まない黒色粘質土の帯状に延びる畦畔状の盛り上がりが見出され、それによる水田区画状を呈することが確認された。その区画内は、As-C混土層が覆土となり、区画内底面は畦畔状の盛り上がり上面よりも低くなる。もちろん、底面も黒色粘質土の上面である。

このような遺構のあり方は、極めて水田遺構に近く、人為的な農耕によって形成された可能性を持つと考えられる。ただし、水田耕作の方法として、畦部よりも水田面をより深く耕作した可能性を前提として、上面の水田形状がプリントされた「疑似畦畔」と考えられる。その上面水田とは、第7面水田とも考えられるが、第7面水田での畦の位置が異なる点等から、第7面よりも古い時期のプリントである可能性が高い。



第176図 C区の遺構配置図(本線)

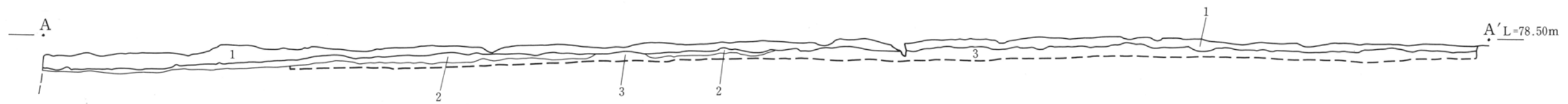


S = 1/100

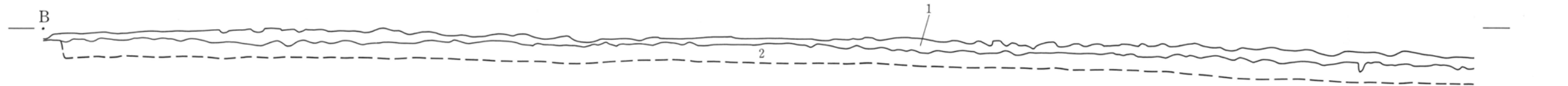
第177図 C区 検出された畦と水田面(北側)



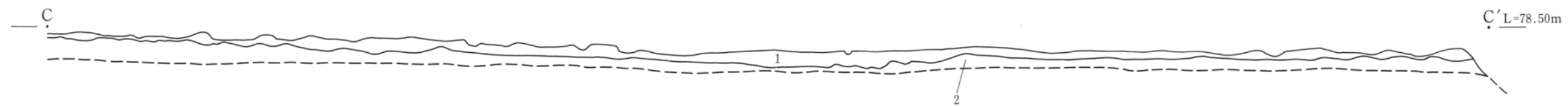
第178図 C区 検出された畦と水田面(南側)



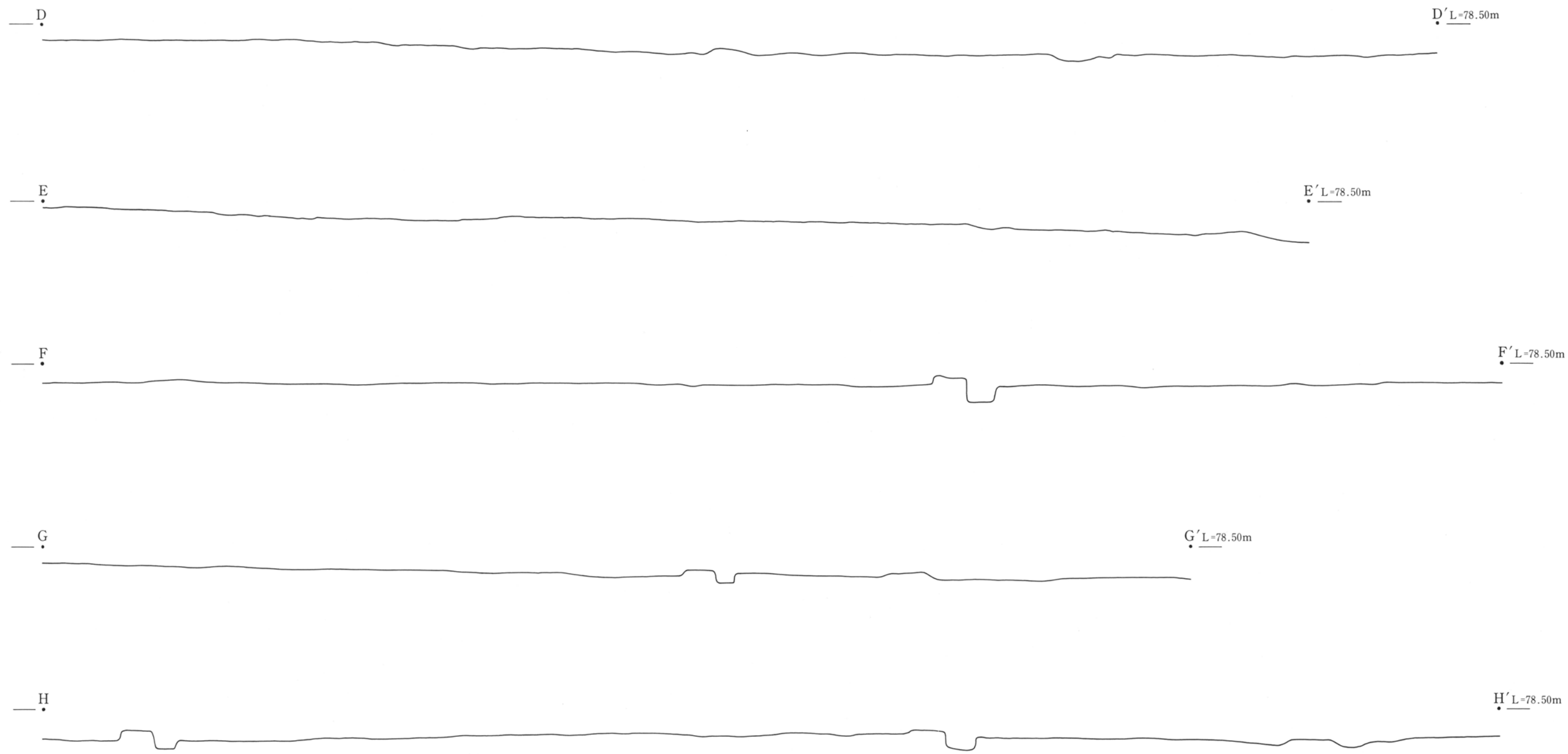
- 1層 黒褐色粘質土 上面が第7面の遺構確認面であり、As-C軽石を全体に多く含む。
- 2層 黒色粘質土 1層と3層の間に、部分的に層をなす。泥炭状で、非常に粘質性が高い。
- 3層 灰色粘質土 基盤のシルト層であり、粒子の細かい粘質土。



- 1層 黒褐色粘質土 上面が第7面の遺構確認面であり、As-C軽石を全体に多く含む。
- 2層 灰色粘質土 基盤のシルト層であり、粒子の細かい粘質土。部分的に真っ黒の泥炭状の粘質土を含む。



- 1層 黒褐色粘質土 上面が第7面の遺構確認面であり、As-C軽石を全体に多く含む。
- 2層 灰色粘質土 基盤のシルト層であり、粒子の細かい粘質土。部分的に真っ黒の泥炭状の粘質土を含む。



S = 1/40

第180图 C区 水田断面

検出された水田の痕跡であろう畦畔状の遺構は、その残存状態からすれば比較的に良好であると言える。この畦畔状の遺構が検出された範囲は、第6面で検出された大溝周辺であり、かなり粘質な黒色粘質土の形成されている範囲である。黒色粘質土の形成されていない灰褐色粘質土（シルト層）部分では、極めて依存状態が悪く、検出し難い。また、検出された溝は1条であるが、畦畔状の遺構とのあり方から、畦畔状の遺構に伴うか、或いは近い時期の遺構と考えられる。（第176図）

溝

調査区の南側から中央部にかけて、やや斜めに縦断するように北方向へ延びる溝である。中央部付近では、南北方向へ緩やかに湾曲する「疑似畦畔」の西側を沿うように併走し、途中で東西方向に延びる「疑似畦畔」数本と交差する。この交差部分は、4カ所とも「疑似畦畔」が水口状の切れ間となる部分であり、明らかな新旧は生じていないものと考えられる。溝の覆土は、「疑似畦畔」による区画内のAs-C混土層と同様である。

水田（第177～180図）

水田の痕跡であろう「疑似畦畔」の遺構は、調査区の南半を主に、第6面で検出された大溝周辺に検出された。先にも述べたように、本面の調査は第7面水田耕作土であるAs-C混土層を取り除いた面を遺構確認面とした結果、As-C軽石を全く含まない黒色粘質土・灰色粘質土の帯状に延びる畦畔状の盛り上がりが見出され、その形状が水田区画状を呈することが確認された。また、区画内はAs-C混土層が覆土となり、区画内底面は畦畔状の盛り上がり上面よりも低くなることも確認されている。もちろん、底面も黒色粘質土・灰色粘質土の上面である。

この遺構が、如何なる時期の、如何なる遺構なのかを考えるに当たり、本遺跡を含めた周辺での古墳時代よりも古い遺構・遺物が皆無であること等から、As-C軽石降下以前の水田遺構とは考え難かった。また、上面に経営された水田のプリント（「疑似水田・畦畔」）として第7面水田を想定したが、それぞれの畦の方向や区画の単位が全く異なることから、第7面水田のプリントとは考え難いという結論に達した。こうした想定が不可能ではあるものの、遺跡地内および周辺からは4世紀代の遺構・遺物が存在していることは確かであり、第7面以前でAs-C軽石降下以降の間の段階における水田の存在は想定できる可能性は高い。よって、本遺構を4世紀代から第7面水田以前に経営された水田遺構の痕跡と考えている。

検出された「疑似畦畔」の最も依存状態の良い部分では、その高さが15cmほどあり、かなり明瞭である。こうした「疑似畦畔」は、大溝の延びる方向と併走するように南東方向に長く延び、調査区の中央付近ではやや湾曲する箇所もある。また、長く延びる途中には、小区画を区画する横畦状の「疑似畦畔」が取り付いている。第6・7面で検出された時期差を超えて踏襲された大畦は、本面では検出されていない。検出された「疑似畦畔」の中で、大畦と考えられるものは無いようである。

本調査区での水田区画のあり方は、その規模から所謂「小区画水田」とされるものと考えられ、第6面での極小区画と比較すれば大きく異なる。むしろ、第7面でみられた小区画水田に近い規模と言えよう。

さて、「疑似畦畔」が高く残存し、水田耕作面が低くなるという状況は、これまでの第1～7面水田にはみられなかった現象である。通常の水田耕作の場合、「荒起こし（田起こし）→畦造り→代掻き→田植え」といった一連の作業があり、荒起こし作業の後に畦が造られるのが一般的であると考えられるが、この際には本遺構のような高く残存する「疑似畦畔」は残存し得ないはずである。仮に、「疑似畦畔」が高く残存する

可能性があるとするれば、区画する畦を弄らずに定位置を確保しながら、区画内部の作付け面だけを耕作した結果と考えられ、極めて水田開削初期の耕作の姿とも考えられよう。言い換えれば、水田開削期のプリントされたものが本面の遺構面であり、開削期段階の痕跡と言える。

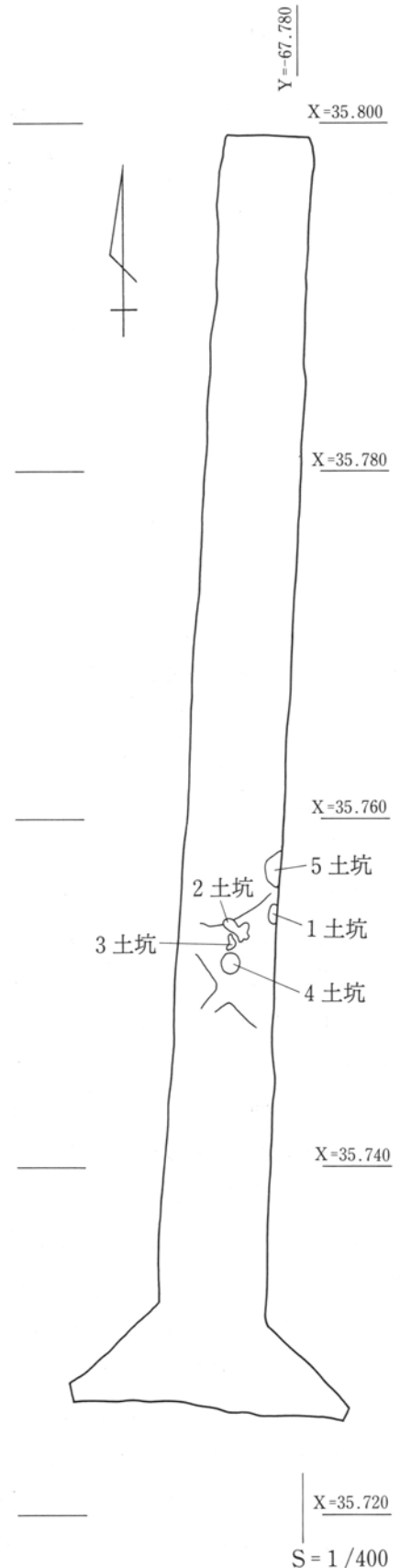
以上、本調査区での第8面水田について述べてきたが、水田開削期のプリントされた痕跡と考えられることが解った。この水田開削期とは、何時の時期になるのだろうか。遺跡地の西側1km程には4世紀初頭とされる元島名將軍塚古墳が存在し、遺跡地の西隣にはS字状口縁台付甕期の集落が存在する。後述となるが、遺跡地内からもS字状口縁台付甕期の遺構・遺物が検出されており、これらの時期頃に水田開削が行われた可能性が高いものと考えられよう。

C区取り付け道

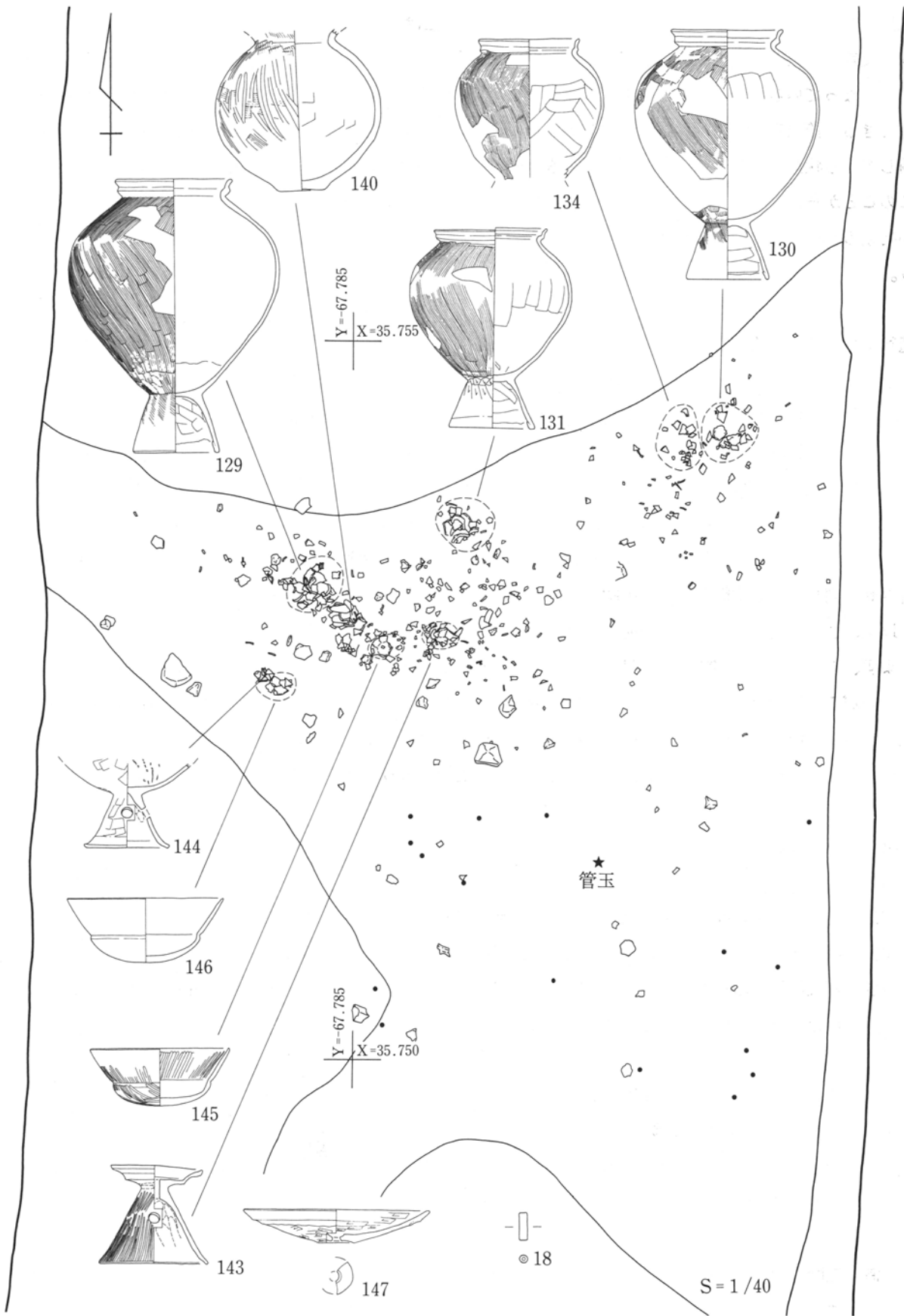
C区取り付け道で検出された遺構は、水田に伴う畦畔と、畦畔上に出土した遺物集中箇所、さらに畦畔上の土坑である。調査区内の地形は、全体的に西側から東側への微傾斜となっており、第6面と同様である。

水田遺構は、第6面水田の耕作土として攪拌されたことに起因し、明瞭な水田遺構は検出されていない。しかし、調査区の南半の一部で、畦畔状の広い高まりと、その上面から多量の遺物および土坑が検出されている。出土した遺物には、S字状口縁台付甕をはじめとして、壺、埴、器台等からなり、管玉も1点出土している。また、土坑も5基検出されている。なお、2・3号土坑は、形状が不整で土坑とは言い難い点もある。(第181図)

ここで畦畔状の広い高まり部の土層について、東壁の土層断面で確認しておきたい。第117図に示した土層断面をみると、11~13層の複数層からなるHr-FA層が覆う14層上面が第6面の水田面となり、14層がその水田耕作土となる。この14層とした黒褐色粘質土には、白色のAs-C軽石が全体に含まれている。14層下は15層の灰色粘質土となる基盤のシルト層となっており、先述の本線C区やD区取り付け道で確認されたAs-C混土層や、その上部に堆積する洪水砂層等は堆積していない。このことは、本調査区がやや高位にあることに起因して、14層の水田耕作土中にAs-C混



第181図
C区の遺構配置図(取り付け道)



第182図 C区取り付け道 遺物出土分布(遺物集中箇所)

土層等が鋤込まれて混在したものと考えられる。本面で検出された畦畔状の広い高まり部は、第6面での大畦の交差する広い部分と全く同じ位置に重なる。畦畔状の広い高まり部の周囲は、第6面水田期の水田面として低くなっているが、第7・8面水田期においてもこの部分が存在したであろうことは出土した遺物から想定できる。第117図の土層断面でも、15層上面が周囲よりも高くあり、その上層に14層のAs-C混土層が堆積している状況は、そのことを証明している。また、第6面の大畦と同じ方向へ延びる畦も確認されている。このことから、本第8面期においても、畦の交差部であったことが理解できる。以上の状況から、この部分が初期の水田開削期から第6面水田期まで、畦の交差する広い部分として踏襲され続けたものと考えられよう。

遺物集中箇所 (第182図)

遺物が集中して出土したのは、第182図に示した調査区南半に位置する畦の交差する広い高まり部からである。第6面水田調査時点では、遺物の存在は知ることはできなく、大畦の断面確認の際に検出された。遺物の分布する範囲は、高まり部のほぼ全体と、第6面水田耕土中の高まり部に隣接する北側の一部からである。特に集中するのは、高まり部の北半となる。出土した遺物は、第213・214図に示したS字状口縁台付甕をはじめとする壺、埴、高坏、器台等からなる。また、特異な器形を呈する、底部に孔を有する皿状の土器も出土している。この皿状の土器は、E区取り付け道の北側に位置する遺物集中箇所より出土した破片を接合させ、同じ遺物集中箇所としての関係を深くしている。さらに、管玉も1点出土している。

以上、遺物集中箇所について説明してきたが、この場所の意味について考えてみたい。

まず、この場所がS字状口縁台付甕期以降、第6面水田期まで踏襲されていること。次に、遺物の集中する範囲がこの場所だけに限定していること。後述する土坑の存在。管玉の出土。皿状の特異器形の土器の存在と、接合状況。さらに、この場所が畦の交差する広い部分であること。このような状況から、水田農耕に関わる祭祀の行われた場であり、出土した遺物が祭祀遺物である可能性を考えられないだろうか。

土坑 (第183図)

1号土坑

位置 畦畔状の広い高まり部東壁際にあり、 $X=35.755$ 、 $Y=-67.782$ 付近に位置する。

規模 円形?。東壁での長さは85cmを測るが、深さは不明。

概要 調査区際であったため、全体を明らかにできなかった。As-C軽石を含む黒褐色土を覆土とし、遺物の出土はない。底面は、湧水のため不明。

2号土坑

位置 畦畔状の広い高まり部北寄りにあり、 $X=35.754$ 、 $Y=-67.784$ に位置する。

規模 不整形。1.5m四方に多くの凹凸をもつ。

概要 形状が不整で土坑とは言い難い点もある。As-C軽石を含む黒褐色土を覆土とし、拳大の礫を出土させている。

3号土坑

位置 畦畔状の広い高まり部北寄りにあり、4号土坑の北側に当たる。 $X=35.753$ 、 $Y=-67.784$ に位置する。

規模 不整形。2号土坑と共に1.5m四方に多くの凹凸をもつ内の一つ。